
ハチャメチャ魔王

火憐ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハチャメチャ魔王

【Nコード】

N7867S

【作者名】

火憐ちゃん

【あらすじ】

これは魔王が主人公

魔王の魔王による魔王のための物語です

みんなでワイワイ騒ぎ

バトル有り

笑い多分有り

感動：微妙

そんな異常で異質でアホな魔王が繰り出す非常識騒ぎ

自分が異常なことを理解している魔王から繰り出される無理難題に

付き合わされる者達

彼等に平和は訪れるのか？

存在がチート？周りもチートだよ

チートが多すぎてチートじゃねえ

という感じなのでチートが嫌いな方は見ない方がいいかもです

処女作なので優しい目で見てください

はじめに（前書き）

途切れないように頑張ります

誤字脱字があるかもなので御了承ください

はじめに

魔王

想像すれば身の毛が弥立つ

悪の化身

悪の親玉

勇者に倒される可哀想なボス

そのようなイメージが定着している

しかし、一般的な魔王ではなく魔法使いの王の魔王は日夜非常識を求め異常識騒ぎをする

彼に巻き込まれる非常識人は数知れず

常識人は無視される

魔王の魔王による魔王のための生活

その非常識を止める者は一人もない

これは魔王である少年が主役の物語

身長が小さい上に小生意気

でも攻撃力最強である魔王が腰を落ち着ける日はあるのか？

周囲に安息は訪れるのか？

一般風景（前書き）

誤字脱字あるかもです

一般風景

ここは人間界

科学がそこそこ発達し

というよりもごく普通にただの世界と変わらない世界

日本の横浜にある

ひがしあずまこうこう
私立東東高校

とうとうこう
略して東高

まるで狙ったかのように全国でも真ん中な学力で

平凡に将来に夢も見いだしていい生徒が集まると言われている学校

中高一貫で

合わせて人数も1400名程度

何の取り柄も無く

部活も全国に行くことも無く

せいぜい最高でも予選の二回戦を突破できるかどうか

そのレベルの集まりである

平凡が学校の校風かと勘違いされている程である

校舎も所々窓ガラスが割れたりドアが外れているだけで誰も考え
る学校の校舎が2つ合わさっているだけである

進路としても工業系や商業系の学校ではなく

進学校とも呼べるほどの良い大学に行けるわけでもなく
せいぜい二流大学に進学できる程度

そんな平凡な高校

三年の教室での歴史の授業を受けている少年がいた

「うっしやああああ？カン？」

いや受けているという表現には語弊があった

身長が160cmと平均よりかは小さく

ツンツンした黒髪で少し身長を誤魔化し

顔立ちは整っているが少し幼く18歳には見えない少年

制服など無視で灰色のタンクトップに黒のコートを着ている

名前は飛影

名字は市原

何を隠そう魔王である

飛影は教室の隅に2つの机をくっつけて麻雀をやっていた

授業中にも関わらず思い切り騒いで周りの迷惑など気にしていない様子である

「ああ飛影、ロンです。国士無双です」

そしてそんな麻雀をやっている飛影の対面には、少女がいた

身長は155cm

栗色の髪が肩までかかっている可愛いとも綺麗とも取れる整った顔立ちで18歳には見えず

せいぜい16歳程度である

涼しい表情で牌を倒す少女

名前はリタ

名字はレーン

何を隠そう魔王の補佐である

「…え?…いやいや!何回目?ねえ役満何回目!?!」

立ち上がり驚愕を露わにしながらリタに詰め寄る

ちなみに授業中である

「だから…麻雀は止した方が良いと言ったじゃないですか」

リタは役満が上がったにも関わらず、冷静に対処する
まるで役満が出るのが普通のように

「…クッソォ!セコいぞ!」

机をバンバンと叩きながら本気で悔しがつている飛影

しかし授業中である

「当然です。飛影だって知ってるじゃないですか」

飛影は魔王である

リタは魔王補佐である

しかしリタは魔王補佐でありながら神である飛影は魔王と言えど運
の総量は平凡であるが

リタは神なので運の総量が当然桁が違う

例を上げるならば

自販機で当たりが終わらない

ガリガリ○なら当たりしかでない

くじ引きは常に思った通りに

宝くじは最高金額のみ

特売商品が必ず残っている

麻雀は役満しかでない

などなど

飛影もそれを知っているのだが

本人は勝つ気満々であった

「クッソォ！罰ゲームはなんだコラ！」

一旦座ったかと思えば立ち上がる

何度も言うが授業中である

「それでは…猫の真似しながらここから飛び降り、各教室を回って
思い浮かんだ一言を叫んでください、…あ、高校の校舎だけで
いいですし、一般教室だけでいいですよ」

にっこりと知らない誰かが見たらそれだけで惚れてしまいそうな笑

みを浮かべるリタ

「よし！行ってくる！」

力強く頷き準備運動を始める

「うるさいぞ市原あ！！」

しかし

いや

やはり

いや

当然ながらも

遂に教師がキレた

飛影は今の今まで気付かなかったように教師に視線だけに向け観察する

上から下まで観察し、興味がなくなったのか視線を戻す

「オイ！聞ってるのか！！！！？」

反省の態度が見られない飛影へ再びの叱責をとばす教師

飛影は視線だけを再び教師に向ける

「五月蠅いぞガキ」

リタと話していた時とは違う
冷めた声で殺気を込めながら呟く

その一言で教師は言いようの無い強力な圧力を感じて口を紡いだ

「んじゃ行ってくるよりタ」

再び声に感情がこもる

「行ってらっしゃい飛影」

飛影は窓から身を乗り出し
そのまま飛び降りた

「ニヤあああああ！」

猫の物真似をしながら

ちなみにであるが

三年の教室は四階にあり

高さは8メートルより少し高い

いつもの事ながらも

窓際にいる生徒は身を乗り出して飛影の安否の確認をするが

（意外と上手でしたね）

リタは飛影の心配よりも物真似に対する感想が浮かんでいた

一般風景（後書き）

よんでいただきありがとうございます

罰ゲーム風景（前書き）

誤字脱字あったらすいません

罰ゲーム風景

4階から飛び降りたの飛影だが、無傷で着地して罰ゲーム通りに教室へ向かっている

飛び降りた先がグラウンドで

しかも体育の授業中だったので生徒達の視線が飛影に集まる

飛影はこの東高では良い意味でも悪い意味でも浮いている

良い意味では

飛影と同じクラスではない生徒から、カッコいい！など言われている

悪い意味では

うるさい

授業の邪魔

モラルがない

などなど

若干悪い意味が多いかもしれないが、有名である

飛影はそんなこと気にせず視線だけを向けて観察し、興味がなくなつたかのように視線を戻す

飛影のこの行動

何をしているか？と聞かれれば飛影はこう答えるだろう

「え？面白いのいるか探してる」

飛影は本当に平凡や普通を嫌っている

逆に非凡や異常を好いていて自分から関与する

平凡と非凡
普通と異常

それだけを見ている

平凡や普通な人ならその存在を自分の頭から消す

非凡や異常な人ならその存在を受け入れ関与しに行く

そしてそんな飛影は最初の一年生の教室に辿り着く

教室のドアを勢いよく開け放つ

ガンと大きい音をたてた際

視線が飛影に集中する

「メルケッドソリアーン!!」

そしてドアを閉める

静寂がクラスに広がった

飛影の今の言葉

全く意味はない

本当に思い浮かんだだけであるまるで羞恥心などないように飛影は
次の教室へ

同じようにドアを強く開け放つ

「なんも浮かばねえええ!!」

そして閉める

アホの所業である

そんな感じが続き二年の教室へと向かう

「秋野 おお！！好きだああ！！！」

再びドアを開け放ち浮かんだ言葉は何故か名指し入りの告白

「いきなりなんですか！？」

ドアを閉めようとした飛影へとツツコミが入る

「予想通りのツツコミだ！！！」

ドアを閉めるのを止めツツコミを入れた少女に親指を立てる飛影

ツツコミを入れた少女

名前は秋野

名字は佐藤

黒髪でサラサラした髪が肩下まで伸びている可愛いよりも美しいの
形容詞が似合う少女

身長は158cm

本人は普通の人間と言っているが飛影に話しかけられるということ
は異常者という何よりの証拠である

「また罰ゲームですか？」

もはや飛影の突拍子の無い行動に呆れつつ溜め息を吐きながらも慣
れているのか予測は的中している

「おう!!」

「先輩…とりあえず授業中です」

一年生の誰もが出来なかったツツコミを二年生の秋野はする

「関係ない!!」

我関せずと元気がいい即答

「そりゃそうですよね!!先輩は三年ですもんね!!」

秋野も立ち上がり飛影とボケとツツコミを繰り返す

「お前ら二人ともでてけ!!」

遂に教師の堪忍袋の尾がキレて怒鳴り散らす

ビクウ!!

と体が震える秋野

教師の声にはない

秋野は恐る恐ると飛影を見る

(うわぁ…)

再び飛影から表情が消えている

「へ」

表情の口が動いた瞬間の秋野の反応は迅速であった

教室の窓際

飛影から5メートルは離れていたにも関わらず

飛び跳ねるように飛影に接近して口を塞ぎ振り上げている腕を掴んだ

「よし！！飛影先輩遊びに行きましょおお！！」

一瞬で無表情になっていた飛影は

生き生きとした笑顔に戻る

「よし行くか！！罰ゲームの続きに」

わしゃわしゃと秋野の髪をなでドアを閉める

「当然私はしませんよ」

「…え？強制だぞ」

秋野の言葉に何を言ってるんだか

と飛影は即答する

Uターンしようとした秋野の頭をしっかりと掴み引きずっていく

「内容知らないですけど絶対嫌です！！嫌ですってばああああああ
ああアアアア」

この時秋野の脳内にはドナドナが流れていた

罰ゲーム風景（後書き）

まだほのぼのですねゝ

命をかけるモノ（前書き）

PV100 超えましたありがとうございます

命をかけるモノ

飛影が窓から飛び降りた後

リタはきびきびとした動きで牌を片付けて机を戻す

座って授業の準備を始める

「おいリタ：少し思ったんだが二人麻雀は辛くないのか？」

そんなリタに隣の机から話しかける少年

名前は彗

名字は安倍川

身長は170cm

筋肉質というわけでもない平凡な肉体で

黒髪でさっぱりとショートな長さの少年

自称普通の人間だが

飛影の親友でもある

つまり普通ではない

何を隠そう少し人間から外れている存在である

「私が絶対に勝ってしまうので辛かったですね」

少し溜め息を吐くりタ

授業の準備でノートや教科書を出したはいいが

筆記用具がでていなく、受ける気はないことを示していた

「負けてやれよ」

彗も飛影とリタの正体は知っているため
運が違いすぎることを知っている

「絶対嫌です！飛影の罰ゲームだけは受けたくありません」

即答で断言する

首まで振って力強い

「いや、俺的にはお前の罰ゲームも辛いと思うが」

隣の席なので罰ゲームの内容が全て聞こえていた彗
常識人を自称する彼の感性から言えば充分におかしい内容

即実行できるものではない

「飛影の罰ゲームに比べればマシです」

「それは…わかるが」

飛影が行った罰ゲーム

リタの場合

ブリッジをしながら校内一周

彗の場合

よくわからない奇声をあげながら校内一周

二人とも顔を真っ赤にしながら行っていた

「あいつは罰ゲームに命でもかけてるのか？」

「らしいですよ」

『はぁあ』

大きな溜め息を二人して吐く

「最近仕事はあんの？」

ぼそりと周りに聞こえないように呟く

「仕事ですか…飛影は今日あるとは言っていましたよ」

リタも声を抑え少し真面目な声色になる

「今日あんの？どこで？」

「魔界です。なんでも勇者がきたらしいですよ…それで果たし状と
いますか…勝負するらしいです」

「勇者？なんで？」

彗は飛影が魔王だとも知っているし
魔法使いの王だとも知っている

なので何故悪魔の王を倒す存在である勇者が飛影に喧嘩を売るのが
わからない

「勘違いですよ。意外と多いらしいです…きます？」

困ったように溜め息を吐く

「誰がお前らみたいな絶対強者級と行くか!!」

リタの誘いを力強く断る彗

強さ的に言えば彗はボクシングのチャンピオンなどを瞬殺できる程度の強さはある

充分反則級の強さである

だが絶対強者級

気まぐれで世界を破壊できる程度の強さを持つ者達とは絶対的な格差がある

「残念です」

大して残念そうにしないリタ
冗談で言ったことは彗も一応ツツコミを入れるが
わかっているので気にしていない

ドアが開け放たれる

「加熱!! 三分間!! 弱火でじっくりいい!!」
「…」

飛影が叫び

秋野が恥ずかしそうな表情で頭を掴まれていた

ボタンと閉められる

「なんで佐藤まで？」

素朴な疑問

飛影が来ることは完全にわかっていたが
秋野まで来ることは予想していなかった彗

「恐らく途中で捕まったのでしょう」

「悲惨だな」

実際に見ていないにしろどのように捕まったかが予測できてしまう

「というか何を思いつけば三分弱火でじっくり加熱になるんだ？」

「あの方の考えを理解できる人はあまりいないのでわからないですね」

命をかけるモノ（後書き）

次にバトルですかね

魔王VS勇者（前書き）

バトルというか強さを見せつけるだけです

魔王VS勇者

場所は変わり魔界

悪魔の世界ではなく

魔法の世界

魔物もいない

化け物もいない

戦争や紛争が起こっても直ぐに止められるため戦争や紛争もなく平和な世界

科学もあるが人間界には適わない

そんな魔法の世界

なんでも世界一

動物園も

科学力も

戦争の力も

人口も

すべてにおいて世界一

そんな国

メリア

そんな国の城

メリア城の城門の前

やはり黒いコートを羽織っている飛影は欠伸をしていた
その背後には仕えるように同じ黒いコートを着ているリタが
更に野次馬の如く城の使用人に国王ですら見物に来ていた

人間界から魔界

世界を移動して飛影がいる理由

魔王の義務を果たすためである

魔王の義務の一つで売られた喧嘩は買わなければならない

自称勇者が果たし状という喧嘩を売ってきたので飛影は買うだけである

欠伸をしている飛影とは対照的に真剣な表情で

自称勇者が剣を構えていて

相方である魔法使いが杖を構えていた

肉体とは関係がないが

魔法使用時や身体強化する魔力

自称勇者とその相方である魔法使いの魔力量は一般的な者に比べ遥かに高い

構えにも隙がない

「んで？なんのよう？」

しかし飛影はどうでもよさそうである

「行くぞ魔王！！貴様を倒して俺が世界を救ってみせる！！」

「これが私たちの最後の戦いよ！！」

まず会話が噛み合っていない

体内にある魔力を放出し全身の身体能力を強化

自称勇者もとい勇者は弾丸のような速度で飛影に接近

魔法使いは巨大な炎を生み出し飛影へと放つ

直撃し爆炎が周囲に広がり

最高のサポートを受けた勇者は光輝く剣で飛影に斬りかかる

(よし！！)

確かな感触

今までにない最高の一撃だったと勇者は自分の手から伝わった感覚で判断した

それは魔法使いも同じで緊張はしているが誇らしげにしていた

「飛影：手伝いはいますか？」

リタは無表情に爆炎が直撃し剣で切り裂かれた飛影へと問いかける

風が吹き荒れ炎と煙を吹き飛ばす

「いや、いらん」

服にホコリすらついていない全くの無傷の飛影がいた

「馬鹿な!!?」

「嘘でしょう!!?」

生涯で最高の一撃であるにも関わらずの無傷
驚愕と絶望の感情が脳裏に焼き付けられる

「いや、とりあえず攻撃はまあ許すが、なんのようだ?」

「うおお!!」

またしても飛影の問いかけは無視され斬りかかれる

「はあ、会話が成り立たん」

思い切り振りかぶり軌道も予測でき回避が簡単な攻撃

飛影当たる直前で止まっていた

「なっ!!?」

見えないなにか

底知れぬ恐怖が勇者を襲う

「アホなんじゃないですか?」

リタも呆れていた

全く緊張感がない

「負けるかあ!!」 鋭い攻撃が幾度も飛影を襲うがその攻撃全てが
飛影に当たる直前

何かで防がれていて触れることすらできていない

リタも

飛影も当たり前のように無手で構えもしない

「あゝ飽きた：魔力だけの防御すら貫けないなんてなあ」

唐突に飛影が呟いた

1分程攻撃を受けていた飛影

その全ての攻撃はただの魔力によって塞がれていたのだ
魔力は基本

魔法の使用

肉体の強化

この二つである

勇者は肉体の強化を

魔法使いは魔法に

魔力を使用していた

だが一定の強さと技術があると魔力に指向性を持たせることができる

だが指向性といっても魔力単体で攻撃をしたり

肉体を関与せず魔力単体で攻撃を防ぐことができる

だが所詮たかが知れている

防御も攻撃も気持ち程度である

その防御すら貫けないので

その表情はあまりにもつまらなそうであり
リタの表情が引きつった

だが

たかが知れていると言えど魔王の魔力である
気まぐれで世界を滅ぼせる程度の強さをもつ飛影の魔力単体の防御
は大砲やミサイルすらも防ぐ

勇者が貫けないのも無理はない

強大すぎる殺気が勇者と魔法使いを襲い腰を抜かさせる

「あゝ飛影、その…メリアの方もいらっしゃるので」

「ん？」

飛影が後ろを振り向くとそこにはメリア城の使用人やら国王がいて
野次を飛ばしている

「あいつら…」

溜め息を吐く

「これから先は18禁だあ!!」

「全員18以上じゃ!!」

国王が的確なツツコミで答える

「んじゃ100禁にすんぞ!!」

「くう…ならばしょうがないのう」

あっさりと引き下がりがワラワラと城へと戻っていく

余談ではあるが

飛影は277歳

リタは270歳である

それを飛影はきちんと見送ってリタ以外誰もいないことを確認して

「でーこーぴん」

でこぴんを動くことも声を上げることすらできない勇者の額に放つ

パンと乾いた音と共に勇者の身体が爆散する

「もう一発」

魔法使いの身体も爆散する

「仕事終了」

「お疲れ様です。しかし：掃除したほうがいいですね」

リタが丁寧に腰を折り曲げ飛影を敬う

頭を上げてから下を見ると

当然ながら綺麗な緑が生い茂っていた大地に赤い何かが撒き散らされていた

一言で表すなら汚らしい

匂いも鉄の臭いが蔓延し馴れていないのならば吐き気を催すだろう

「ああそうだな」

飛影の手から炎が生まれる

一瞬でリタを含め半径50メートルが炎に包まれる

「んじゃ帰るか」

「はい」

炎は一瞬で消え去り

リタも緑も無傷

勇者と魔法使いだったモノだけが消え去っていた

魔王VS勇者（後書き）

説明とか少ないのはまあ今回は力を見せつけるだけなので

詳しい説明は今後ですね

1億分の1（前書き）

なんか長くなっちゃいました

誤字脱字あってもご了承ください

1億分の1

勇者ぶち殺しから一日後

飛影がリタと彗交え大富豪をしている
当然授業中である

教師は額に血管を浮かべているが
注意しても理解しないため我慢するしかないのである

リタは既に一人上がり

飛影は1枚だけ出し

彗は一枚もだしていない状況である

「まあこうなることは予想できたよ!!」

リタのワンサイドゲームであつた

「ならやるなよ!!」

知っているのにやると言い出す飛影に彗はついツツコミをしてしまう

《あゝあゝ市原飛影、今直ぐ走って全速力で5秒以内に理事長室まで来い》

名指しで飛影に校内放送で呼びがかかる

《5》

しかし飛影は動く気はなく
どのカードを出そうか迷っている

「行かなくていいのか？」

この放送主が普通ならば飛影の態度は通常である

《4》

「めんどい」

しかしこの放送主の理事長は飛影並みの異常者である

《3》

「この後の展開は予想できますね」

動かない飛影と

秒読みを続ける理事長

リタは大きな溜め息と共に立ち上がり
窓を開ける

《2》

彗も少し椅子を引きながら大富豪を続行する

《1》

飛影自身も警戒しながら

大富豪を続ける

《0》

バキィ！！と

ドアが強い衝撃で外れ飛影に襲いかかる

飛影はそれを見ずに飛来するドアを避ける

そのままドアは教室を抜けリタが開けた窓からエスケープ

教室からそのまま勢いよくグラウンドを通過していくつものドアが刺さっている壁に突き刺さる

そこは別名ドアの墓場

東東高校の名所である

ドアを吹き飛ばした犯人は脚を上げたままで蹴り飛ばしたことが誰でも理解できる

「貴様…あの方の命令を無視するとは…よっぽど死にたいらしいのう！！」

敵意と殺気を飛影へと放つ女性

飛影に向けて歩を進める

妙な圧力で生徒達は一斉に道を譲る

「勘違いすんなよ、なんで俺があいつの命令を聞かなきゃならない？どこまでいっても俺とあいつは対等だろ」

飛影は立ち上がり不敵に笑う

その顔は喧嘩がしたくてウズウズしている表情である

飛影の目の前で立ち止まりガンを付け合う女性

名前は鎧龍^{がいにり}

名字は最古^{さいこ}

本名はギルギア

身長は178cm

俗にいうモデル体型で誰がどう見ても綺麗と思えるほどの女性
黒くどこまでも黒い髪が腰まで伸びている

何を隠そう人間界の魔王の補佐である

人間界はこの世界である

この星には

人間界

魔界

天界

と3つの世界で成り立っている

同じ星を使用しているが関与はできない

世界と世界の層がズレているのだ

そして

人間界

魔界

天界

には各それぞれ世界としての特徴があるが共通点として

魔王と魔王補佐がいる

それぞれの世界を守護するために魔王はいる

それぞれが気まぐれで世界を破壊できる程度の強さを持っている絶
対強者級である

「まあそれは当然じゃな：じゃが貴様は死にたいらしいの」

「どっちが!！」

殺気と敵意が飛影とギルギアの間で飛び交い
いつ喧嘩という名の世界を巻き込んだ殺し合いが始まるかがわからない

「ほう：チビのくせに態度だけは大きいのう」

「チ…」

魔界の魔王の飛影のNGワード

チビ

170cm超えていない飛影は身長に対して物凄く嫌悪感を持っている

本人曰わくそれは

「成長する前にこの身体になっただけだこのババア!!」

額に血管が浮き出ている飛影

「バ…」

額に血管が浮き出るギルギア

人間界の魔王補佐ギルギアのNGワード
ババア

ギルギアの
名字は最古
名前は鎧龍

名は体を表す

ギルギアの種族は鎧龍

ギルギアの年齢は本人曰わく20億から数えていない

まさしく最古の鎧龍なのである

そんな彼女も年齢は気にしていないがババアという言葉には嫌悪感を
超えて憎悪がある

二人して互いのNGワードを言い合った

そして必ず起こるのが

「ふむ…死にたいらしいの」

「ぶち殺し決定だこのババア」

二人して笑顔

魔力が増大していく

（あっ…これ普通に世界が滅びますね）

冷静にリタは思考している

普通の力を抑え周りに迷惑をかけないように喧嘩という名の殺し合いはこの二人にとっては日常茶飯事

しかし全力の喧嘩は両手足の指を使って数えられる程度しかない

《そこの喧嘩してる二人い！！いいから早く来い！！》

理事長が本気で怒鳴っていた

魔力は察知しようと思えば容易い

そして飛影やギルギア級の強さを持つものの殺気や敵意は一キロ離れていても感じとることができる
更にそのようなことに縁がない一般生徒でも圧力を感じることができる

気付けばクラスのリタと彗除いて全員が気絶している

他のクラスも同じである

リタは飄々としているが彗は意識を保つので精一杯で

二人の殺気と魔力の増大を感じ急遽声をかけてようやくギルギアは

魔力を抑え殺気を仕舞う

だがその眼は敵意が籠もっていた

「ちっ!!」

相手が矛を納めたので飛影も矛を納める

「彗生きてる?」

殺気が籠もった目で互いに牽制しながらも
飛影は彗へと振り返る

「…心配…するなら…やる…な馬鹿」

息も絶え絶えで本当にギリギリそうな彗

「悪い悪い!」

カラカラと笑う飛影は先程と違う雰囲気である

《はよこい》

理事長からの再びのお呼びがかかる

「じゃあない…行くか」

だるさが剥き出しの歩き方で理事長室へ向かう飛影

その後ろを着いていくのが嫌なのかギルギアは窓から飛び降りる

『はあ』

同時に溜め息を吐いてしまう隼とリタ

>>>>>

「きてやったぞ!!」

理事長室

この東東学校自体の設立者であり
最高権力者

「お疲れさん」

理事長がソファで寝転びながら飛影を出迎える

ギルギアは飛影よりも早く着いていて
理事長の対面のソファで寛いでいる

理事長

名前は神龍しんりゅう

名字は最古さいこ

本名はダドマ

理事長というと初老のイメージがあるが

まだ若々しく20代前半にしか見えない

イケメンとしか言えない顔

自然界にもっとも相応しい

そして髪の色として異質な緑の髪をしている

身長は180cm

いわゆるモデル体型である

しかしソファで寛ぎ煎餅を食べて茶を啜っている姿はどこから見ても爺である

ちなみに年齢はギルギアと同じく20億から数えていない

何を隠そう人間界の魔王である

「なんのようだ？」

飛影はその様子を見て溜め息を吐く

「これプレゼント」

ダドマがポケットから出したのはブレスレット型のアクセサリーである

一度形を見せ飛影に投げる

「ん？」

普通のどこにでも売っているような銀のアクセサリー

「魔力が込めてあるな」

「面白いぞ!!つけてみる」

笑っているダドマ

断りたかったがギルギアの視線がだるかった飛影は言われた通りに右手に付ける

「ああ!!?」

そして驚愕する

アクセサリーを引きちぎろうとする飛影だがビクともしない

「力を一億分の一に抑えるアクセサリーだ」

うははと笑うダドマ

それに対しての飛影の反応は早い

右拳を思い切り握り締めにやけ面を全力で殴った

「まあそんなキレんなよ」

うははと再び笑うダドマ

飛影の拳はダドマの眼前で魔力によって防がれていた

通常なら防御を貫通しこの学校程度なら粉碎していた一撃である

「筋力と魔力の全てを一億分の一に抑えたからな：一般中学生程度だろう」

「なんのつもりだ？」

無駄だと諦め拳を戻す

「暴れすぎだ！！お前もギルギアもすぐ喧嘩しやがって！！何回世界壊すつもりだコラァ！！」 飛影とギルギアの衝突は何回もある

まだ幸い世界を破壊

もとい学校を全壊するほどの喧嘩はしていないが
いつ起こるのが本当にわからない

学校の窓やドアなどの備品は破壊され

そしてそれを修理するのがダドマであり鬱憤が溜まっていたのである

ギルギアを見ると右腕に同じアクセサリーが付いていた

「…まあ理解した」

「人間界でのみ機能するから他の世界なら全力がだせるぞ」

魔王同士は対等なので

人間界のみというのはダドマの人間界を守るため

しいては

自分に迷惑がかからないようにの配慮である

魔界の魔王が人間界に住んでいるのがまずおかしいのである

「了解」

渋々といった表情で頷く飛影

「だが頼みたいことがある」

「私からもお願い事があるのじゃが」
飛影とギルギア

二人が同時に口を開く

『こいつとペアは嫌だ（じゃ）』

互いに指差しあう

指す先は全く同じアクセサリ―

「了解」

苦笑いしつつ二人の圧力に負け頷くダドマであった

1億分の1（後書き）

P
V

ユニーク

を確認するのが趣味になってきました

見てくださってありがとうございます

力量試し（前書き）

誤字脱字あったらご指摘お願いします

力量試し

筋力と魔力が

一億分の一になってしまつて10分後

ギルギアのアクセサリーの形を変えることで双方が納得した後である

飛影は教室に戻らずそのまま街に繰り出す

制服を着ていない飛影はいつ学校を抜けても関係ない

そもそも

制服がないのは学校をサボつた飛影が警察に見つかった際に国家権力に逆らつてぶち殺さないようにの配慮である

魔王という称号

魔界では誰もが知っているモノだが

人間界ではゲームや小説などに出ているがそれは悪魔の王であり

魔法使いの王ではない

認知されていないのだ

魔法も魔王も

なので隠さなければいけないのである

それを一応は頭で理解している

だが実行したことはない

飛影はとある道場の門の前にいた

飛影は戦いに身を委ねるものである

そして当たり前なのが自分の今の力を知ることである

飛影の今の強さは一般中学生

しかし飛影は一般中学生がどの位の強さなのか理解ができていない

自分がどれだけ弱体化したかを知るために

「おらあ！！道場破りだあ！！」

門をくぐり抜け

道場の扉を蹴り飛ばす飛影

「うわぁお」

しかし予想とは違い扉は無傷で吹き飛びもしない
強すぎるノックになっただけである

軽く頭を抱えそうになる飛影

だがめげずに扉を手で開ける

平日のこの時間帯

弟子の姿は居らず

道場主が掃除していた

道場を大切にしているのが一目でわかるほど掃除が行き届いている

「なにか？」

雑巾がけをしていた主は手を止め睨みつけるように飛影を見る

普通に入ってきたならば学びに来たと勘違いして友好的な態度にな
っていたが

飛影は一度蹴り飛ばしたのである

道場を大切に行っている主からすればすでに敵である

「道場破り」

ニコニコと笑う

その笑みをリタ等の親しい間柄の者が見たら
巻き込まれないように即逃げる

「止めておけ死人がでる」

道場主は飛影の体を一瞥し再び掃除に戻る

「…アハ!!」

飛影の行動は早かった

今ある力の全力で接近し頭を蹴りで打ち抜く

「ぶち殺すぞガキが」

にっこり笑顔の飛影

コートを脱いで臨戦態勢にうつる

「良かろう。稽古をつけてやる」

飛影の奇襲ばりの蹴りを見事に片手で防いでいた

（わぁお）

飛影は自身の弱さに驚いてしまう

道場主は立ち上がり構える

さすがに主だけあってその構えは雰囲気が出ている

もう一度飛影は突っ込み顔面に向かって蹴りを放つ

再び片手で防がれ

正拳突きが飛影の腹を捉える

「っ！！」

食らった瞬間自ら飛んだ飛影だが受け身も取れず壁に叩きつけられる

（弱っ！？ってか痛っ！！…はぁ！？攻撃力もないし防御力もないしスピードもないし体と意識にズレがあるな…）

「くっそ！！」

痛みが全身に広がり腹を抑えながら立ち上がる

「行くぞ」

今度は道場主からの攻撃

意識と体のズレ

飛影は今は腐っていても魔王である

音速以上の闘いをする際

体の反射や高速思考で考えて戦うなんて毎回のことである

自分から衝撃を逃がすために反射で後ろに跳躍するが

体の反射が今の体について行けず反射は遅くなり衝撃を逃がせない

高速思考とは

（くっそう辛すぎる、なんだこれ、だから普通の人間は嫌いなんだ
！！ああはいはい右足狙った下段蹴りですね。軌道も丸見えだし避
けろと言わんばかりの一撃だな：けど体が意識についていけないか
ら無理く避けられないく下段食らったら足折れるなく防げるかなく脛
で防いだら折れるし靴はいてるから足の裏で受けよ：ああ無理だ動
きが遅すぎるいやあこれは食らうわあ、やだなあ、骨折れるの痛い
し：あれ間に合うか？踏み込みが遅いな。よし間に合うってか間に
合え！！頑張れ俺の足！！頑張れ！！いいぞいいぞ！！軌道に乗っ
たあ！！よしよし衝撃まともに受けたら折れるからな足曲げて衝撃
と同時に飛んで逃がそ）

ここまでで1秒

道場主が飛影へと下段蹴りを放ち飛影が食らうまでの時間である

たった一秒でこれだけの思考をし防ぎきる

ハズだったが

自分から跳躍して衝撃を逃がしたまでにはいいが再び壁に激突

全身に衝撃が走る

「痛っ!!」

（バカした…衝撃を逃がすはいいけど体の耐久性が弱いし反射が遅いんだ!!…ってわぁお）

吹き飛んで身体の動きが停止した飛影へ追撃で回し蹴りを放つ道場主

（いやぁ…無理だ痺れてる、直撃で内蔵破裂すんじゃないか？まぁ死なないからいいけど…そしたら闘えないから俺の負けかぁ…やだなあ、それはやだなあ、こんなガキに負けるなんてなぁ…とりあえず腕一本犠牲にしようかな）

倒れそうな飛影へ向けての

回し蹴り

ブチィ!!

と筋肉が千切れる音と共に

その軌道上に無理やり右腕を移動させる

骨の折れる音が響き飛影は吹き飛ばされ頭から床に激突する

「やりすぎたか…子供相手にムキになってしまったな」

構えを解除する道場主

額から血を流し気を失ったように見える飛影

「あら？攻撃しないの？」

ゆっくりと起き上がる飛影

右腕は骨が皮膚を破って外へとさらけ出していて
額から血がポタポタと床に垂れる

「止めておけ死ぬぞ」

「知ってるか？トドメを刺すまで攻撃は止めちゃいけないんだぜ？
最後のチャンスを不意にしたな？」

Tシャツの裾で血を拭き取る飛影

調子確かめるように動かない右腕以外を動かし関節をならす

「さて質問だ」

右腕が粉碎しているというのにまるで痛みを感じないように語りかける

「殺す気か？倒す気か？」

妙な圧力を感じた道場主は再び構える

「殺す気は一切ない」

「だろうな…殺気はなかったし」

圧力が一気に強くなる

心臓が圧迫されるような感覚が強くなる

「良かったなあ！！半死半生の状態を味わえるぜ！！」

（最後のテストだ！！）

飛影は一般中学生程度の魔力を開放

全身に魔力を巡らせ肉体を強化する

たかが一般中学生程度の魔力量

だが

魔力を扱える者と扱えない者では絶対に超えられない壁があるのである

（体と意識のズレを修正！！大体の弱体化も理解したあ！！あとは魔力を扱うだけだあ！！）

飛影は先程よりも遥かに速い速度で接近

側頭部目掛け右足で上段蹴りを放つ

「ぐっ！！」

ギリギリ左手で防御する

先程側頭部に食らった一撃よりも遥かに重い一撃

だが防ぎきり左手で右足を掴み正拳突きを飛影に放つ
しかし目の前に飛影はいない

右足を軸に更に回転

左足で蹴りを放つ

頭頂部に圧力を感じ

瞬間

飛影の踵が直撃

重い衝撃が頭から爪先まで走り狂う

「がっ!!」

頭蓋骨にひびが入る感触

想像を絶する痛みに気絶すら許されず

飛影の右足を放してしまう

「がふぁ!!」

その瞬間

右足が顔面を蹴りつける

鼻が折れ吹き飛ばされる

飛影は素早く床に着地し

吹き飛ばされ床に叩きつけられた道場主の鳩尾を踏み抜く

そして念の為にもう一度踏み抜いて反応がないことを確認し

更にもう一度踏み抜く

「これが喧嘩だ：馬鹿やろう」

見下している飛影

僅かでも稚気でも殺気が込めていたら道場主の顔は踏み砕かれて死んでいた

最後まで手を抜かない

それが闘いの基本と飛影は考えている

油断して死ぬ奴を飛影は腐るほど見てきたのである

「さてとゝ大体の力は理解したし」

飛影は道場の看板をへし折る

額から流れる血はすでに止まっていた

力量試し（後書き）

ユニークを見て

PVを見て

この作品を見てくださって物凄く感動しております

今後もよろしくお願いします

幼なじみと妹？（前書き）

やはり説明するために何も知らない人物を作成しなければいけない
と思いました

幼なじみと妹？

「馬鹿じゃないの？」

東東高校の保険室

道場破りをした後飛影は病院に行くのが生物学的にダドマに禁止されている

飛び出た骨を無理矢理戻し一目見たら右腕が出血しすぎている少年であったので

飛影は包帯や血を消すために保険室へとやってきた

既に出血は止まっているが流石に見栄えが悪いと判断したのか包帯を貰いに保険室へ行ってこの怪我の説明をしていた

説明し終わった飛影に白衣を着た少女が言った言葉である

「う…」

「わざわざ弱体化を確認するために骨折までする？普通にリタちゃんや彗君に組み手でもお願いすればいいじゃん」

物凄くアホな子を見るような眼で飛影を睨む少女

「…考えてなかった」

そしてその少女に対して思い切り下手にでている

というより強く言い返せていない飛影

少女はテキパキと慣れたように飛影の右腕の血を拭い
固定せずただ包帯を巻く

この少女

名前は椿

名字は市原

明るい茶色のふわふわした髪でアホ毛が飛び出ているのが特徴で
身長は158cmで

アホ毛を入れれば161cm

飛影の身長よりも僅かに大きいことになる
暖かな笑顔で可愛い少女で外見は飛影と同じ年に見えるが
何を隠そう飛影の幼なじみである

歳は274歳

274年の付き合いである

飛影の考えをなんとか理解することができる人物である

「はい、終了」

ペシンと包帯を巻き終えた椿は飛影の右腕を叩く

「あの…椿さん、普通なら悶絶してますよ」

「ふーん…そうなんだあ普通の常識なんて知らないからわからない
」

あたかも飛影のせいで知りませんと言っている

「…」

黙ってしまう飛影

「それでさ…その子誰？」

怪我の治療中

ずっと飛影の隣にいる少女

制服は東東中学の制服である

椿は気にはなっていたが飛影から説明されるだろうと思って黙っていたが

何時まで経っても説明がないので聞いてみる

「ん？妹？誰の？」

桜の記憶では飛影に妹はいないはずである

「兄ちゃんの妹だよろしく!!」

ポニーテールの少女は外見と同じように活発そうな雰囲気で笑いながら飛影を指差して挨拶をする

「ああ妹ね。私は椿、よろしくね」
にこりと笑う椿

「私は市原火月！！火の月って書いてかげつだ！！」

「よろしくねー火月ちゃん…んで飛影ちょっと来ようか」

火月に向けた笑みと同じ表情

しかし飛影の背筋が凍る

名前は火月

名字は市原

飛影の妹である

身長は165cm

飛影よりも高い

種族としては人間であるが飛影の妹ということは普通ではない何よりの証拠だ

15歳程の少女

東東中学の制服に身を包んでいる

実年齢も15歳である

そんな火月を保険室で待たせ

飛影と椿は少し離れた廊下にいた

「妹って初耳なんだけど！？いつから飛影に妹ができたのさ！？ってか怪我した後の話を続けろお！！」

溜まっていたツツコミを爆発させる

「良かったら私が納得しうる理由を100文字以上で説明しなさい」

妙な圧力

世界を気まぐれで滅ぼせる程度の力を持つ飛影が廊下の壁まで後退する

「えっと一つ一つ答えると…火月はついさっき妹になったから義妹だな。怪我をした後、火月がその道場に通っていて学校サボって稽古しに行って俺と道場主の闘いをこっそり見てたらしく、終わった後に火月が飛びかかってきて弟子にしてくれと言ってきてな、普通じゃなかったから弟子にした」

ふうと喋り疲れたのか飛影は側にあつた自販機で飲み物を買ひ同じ飲み物を椿に渡す

「ありがとう」

「おお」

さすがに274年の幼なじみである飛影は椿が飲みたかった飲み物を買っていた

二人して喉を潤し一息入れる

「それで？そのままだったら弟子のままだと思うけど…義妹にランクアップした理由は？」

「ああ孤児なんだって…親に捨てられて家族がない。」

孤児

その一言で椿の表情が変わる

「はぁ…セコいよ飛影は」

その場に座りこむ椿
憂いを帯びた表情

「悪いな」

同じように座り込み同じ目線で謝罪する飛影

「まあ大体の事情はわかったよ。…うん、許す。認めましょう」

「椿のお墨付きなら安心だよ」

本当に心底安心したような飛影
自身で本当に義妹にして良かったのかという葛藤が僅かにあった
だが幼なじみの言葉でその葛藤が消え去る

「ただし、飛影はちゃんと私達という意味はわかるよね？」

「大丈夫だ」

「絶対に生き残る術を教えてあげて、それと絶対護ること」

「当たり前だよ。俺の側にいるやつは何が何でも守ってやる」
270年以上飛影が貫き通した信念である

飛影は再び保険室に戻っていく

「その守るやつに自分自身を入れてほしいんだけどなあ」

ポツリと椿は保険室の扉越しに飛影を見ながら呟いた

その呟きは飛影には届かない

幼なじみと妹？（後書き）

PV500超えててびっくりしました

初めてのただいま（前書き）

飛影の家の人物説明話です

初めてのだいま

火月は今初めて

いや、地元付近で有名な金持ちが住んでいると噂の大豪邸の目の前にいた

学校が終えた後に更に遊んだ後の帰宅なので

時刻は18時00分過ぎ

飛影とリタと火月が門の前にいた

リタの表情はどこか疲れている

いきなり

妹ができた

と飛影がカミングアウトをしたのである

椿なら笑ってまだ受け入れることができたが

リタはそういうにもいかず

飛影の気まぐれの理解と困難なことをした後で少し疲れている様子だが

妹の存在はなんとか認めたらしい

「すっげー!!」

これは火月の感想である

一般的な屋敷が具体化された屋敷

敷地面積は一般学校のトラック一周は150 m

塀を一周すればそれよりの距離がある

「さて…と」

飛影は門を開ける

まるで打ち合わせをしたような

いや打ち合わせ通りに飛影とリタは門をくぐり火月の方に振り返る

『ようこそ!! 異常で異質が集まる家へ!! そして…お帰りなさい』

リタ個人としてはこの挨拶は駄目だろうと思っていたのだが

火月にとってはその言葉は特別だったらしく

「あ…ありがと…ごさいます…ただいま帰りました」

笑いながら涙がこぼれている

「さあて泣くのは早いぞ!これから愉快で異質な自己紹介が始まるぞお」

わしゃわしゃと豪快に

そして優しく火月の頭を撫でる

そして孤児として過ごしてきた火月に初めての帰る家ができ

初めてその門をくぐる

くぐった先は地面や壁や木などが少し粉碎されている庭

「えっと、兄ちゃんこの庭はどうしたんだ？」

「…少しな」

「少し…ですネ」

何故か火月の問いに明確に答えない飛影とリタ

原因は飛影とリタ

最初は組み手という名目でトレーニングしていたが

次第に熱くなってしまう

少しはっちゃげた結果である

「へえーそうなのか」

火月はそういうことを気にするタイプではないのか軽く流す

「ちなみにこの家は二階建てで18LDDKKだ。二階にも一応リビングがあって一階に遊び用と飯用のKが一つずつある」

庭に入り屋敷のドアまでの移動

30秒程であるがその30秒で屋敷の軽い概要を説明していく

「んでこれが正面玄関で他にも裏口とかがある」

この屋敷の庭にはスイッチを入れると落とし穴が10個程出現する

そこから屋敷の中まで入れる

がスイッチを入れるということは

それ即ち厳戒警戒中なので落とし穴に入るが最後

庭の下

10メートル落ちた先の地下室には絶対強者級が待ち構えており

入ると同時に死ぬ

そんな警戒するためにスイッチは一度も入れたことはないが

ある馬鹿が時々警戒時ではない際にスイッチを入れて落とし穴に落とそうとするので

遊ぶためにスイッチが入ることはある

だがそれを火月に伝える必要はないと飛影は判断する

色々とオブラートに包みながら説明し

正面玄関の扉を開け放つ

「ただいまあ」

「ただいま帰りました」

慣れているように

というよりも

日常でいつも使う言葉を飛影とリタは使用する

「…ただいま」

火月もいつもの活発さは消えて照れているように小さく

消え入りそうな声だがしっかりと家に帰ってきたことを告げた

「お帰りなさい、お疲れ様です!!」

それを待ち構えていた従者の格好

ただの私服にエプロンをつけただけの少女が敬礼しながら迎える

「えっと火月、こいつは優希だこの家の従者かな? 一応」

「一応ですか!!?」

ズガンとオーバーリアクションで答える優希

活発よりうるさそうな印象を覚える

「よろしくです!!」

しかし火月は律儀に頭を下げて挨拶をする

この屋敷の従者

名前は優希^{ゆき}

名字は市原

火月と同じ孤児院出身である

身長は160cm

17歳のどこにでも居そうな少女である
だが

髪は地毛で茶色

瞳の色は金色

少し異質である

飛影がこの屋敷をダドマに作ってもらい維持するにも必要だったため
従者を雇い入れ優希が入った

常識を知らなかった飛影は

月給150万円で募集したため当然ながら応募者が殺到

100人を超えるその中から唯一選ばれたのが優希である

つまり普通ではない

家事全て普通より卓越しており

庭にあるガーデニングでは妙な動く植物が生えていて

時々飛影にバツサリと切られることも多々ある

だがめげずに更なる改良を続ける
そんな少女である

予め飛影は火月を連れてくることを伝えていたので優希も驚くことはない

正面玄関から入ると最初にだべるためかソファやテレビが置いてある空間

そこから二階へ続く階段やキッチンへと続く廊下

食堂などが続く

火月が好奇心全開でキョロキョロ周囲を見渡すとソファにうつ伏せで寝転んでいる少女がいた

「うにゅ」

少し騒がしいと感じたのか少女は顔を上げ飛影を見て匂いを感じ取り顔を帰る

「ちょっと飛影…どういうこと？」

飛影に詰め寄る少女

手にはワインの瓶

「私の血が流れてる貴方が怪我をしてるのはどういことなの？」

酒の匂いが周囲に漂い

火月は一步後退する

「いやあダドマに力抑えられてて再生力もかなり落ちてる」

「あのドラゴン潰してこようかしら」

忌々しいとばかりに表情を歪める

「無理だから止めとけ：火月、リーベだ」

リーベという名の少女

正式にはリベリア・ラインベルト・ミリア

なのでリーベと周囲は呼んでいる

10歳程の少女で

身長は130cm

可愛い容姿である

だが服はジャージでそれが全てを台無しにしている

淡い紫色の髪色

赤い眼

八重歯は尖っていて

実年齢は250歳

正真正銘の吸血鬼である

火月がリーベの背中を見るとジャージを突き破って黒い蝙蝠のような翼がいつの間にか生えていた

「ああこれが妹？よろしく」

まだダドマを恨み中なのかぶすつとした態度で手を差し出す

酒臭いが酔ってはいないようで言動も姿勢もしっかりしている

「よろしくお願いします！」

自分よりも年下に見えた火月はあまり緊張もなく元来の元気良く挨拶をする

「あっ！！おかえり飛影にリタちゃんに火月ちゃん」

火月の声が聞こえたのか階段から椿が降りてくる

「まあ今いるのはこの5人かな？合計で10人はいるけど基本あいつらはどっか行くからなあ」

少し寂しそうな飛影

一度ため息をつく

そして全員が一斉に火月を見る

『これからよろしく！！』

飛影は爽やかに笑い

椿はこれからの火月のことを少し心配しながら苦笑い

リタは元気がでるような笑みで

優希は何かイタズラを考えている笑みで

リーベは不適な笑みで
歓迎する

「これから世話になります！！」
腰を90度折り曲げ綺麗な姿勢であつた

初めてのただいま（後書き）

リーベから血を貰ったということは飛影も吸血鬼ですね

第一回家族会議（前書き）

今回は会議です

第一回家族会議

優希に火月の部屋やこの屋敷の案内を任せ

現在会議室に

飛影

リタ

椿

リーベ

が集まっている

「さて：今回集まってもらったのは今日から妹になった火月のことについてだ！！議題は火月を家族の一員として慣れさせることだ」

飛影がホワイトボードに

火月を家族の一員とさせるための方法と

書き込む

すると即座にリーベが手を上げ

発言する

「難しいわね：コミュニケーションを取りつつも好印象を与える。
しかもこのメンバーで：というかなりの難易度ね」

難しい表情で案を考える

全員がかなりの難易度のこのお題に黙りこむ

「あっ!!」

椿が手を上げる

「宴会なんてどうかな!!? コミュニケーションも取れるし壁も無くなるよ」

ベストな案

「私も宴会は賛成ですね」

リタが椿の案に乗っかる

飛影は立ち上がりホワイトボードに宴会と書いて○で囲む

「それじゃあ宴会の内容について掘り下げる…もし宴会以外に案が浮かんだらその時点で発言を許可する」

どこまでも真剣なメンバー

この少しアホだと思いう会議でも真剣にできる彼等

ある意味で才能である

少し考えた後リーベが手を上げる

「私が思うに、美味しいお酒、美味しいご飯、楽しい会話があれば最高の宴会になると思うわ」

飛影はリーベの意見をきちんと受け取る

「：確かにそれは最高だな。上手い酒もあるし！！上手い飯もできる！！楽しい会話なら」

「完璧ね」

完璧に違いないという表情のリーベ

「完璧だ！！」

『ちよつと待てアホ二人！！』

決まりかけの案に水をさす椿とリタ

暗黙の了解の手を挙げて発言することすら忘れている

「火月ちゃんは未成年でしょうが！！」

「成人になっていないものにアルコールは認めません！！」

椿に続いてリタすらも文句を言い始める

「はぁ：神はお堅いわね」

「堅いわけではないです。当たり前前の常識です：鬼は常識がないです
すね」

両方の笑顔がぶつかり合う

顔は笑っているが目が笑っていない

「あら？ 貴女常識を気にするようじゃ飛影の傍にいけないじゃない
…というよりも飛影の周囲で常識ある人はいるのかしら？」

「うはは」

何故か照れたような飛影

確実に褒められてはいない

「まあ私は神ですから異常ですけど常識はあります。鬼は異常で非常識ですが…飛影の周囲には異常か異質であることが条件です。常識は範囲外なんですよ…そんなこともわからないんですか？」

再び火花が散る

「その常識がある神が福引きで後ろに沢山人が並んでる中、三回や
って1等2等3等全て総取り後ろの人が福引きをやる意義を無くし
たというのにホクホク顔していたわよね」

（飛影早く止めてええ！！！！）

椿は視線に思考を乗せ飛影を睨む

（え？ 俺がこれ止めんの？）

無理無理と首も振らずに視線だけで伝える

もはや魔力が少しずつ開放されており比喻ではなく現実に火花が散
り始める

「あの時は…たまたまです。朝からお酒呑んでるニートよりは常識
ありますし」

今でもそのことを反省しているリタは少し目線を逸らす

そして飲んだくれニート発言されたリーベの額に青筋が浮き出る

（ヤバいって飛影！！早く止めて！家が本当に壊れるってえ！！）

椿の側から見ると

隣のリーベが吸血鬼としての特性の一つ

両手の爪が伸びていて指にも力が入っていた

この爪は鉄程度なら斬り裂ける程の強度を持っている
リーベが全力で振れば衝撃波で屋敷は確実に大破する

（…確かにヤバいな）

飛影が横目で見るとリタの右手には金鎚が握られている

神の武器

ただの金鎚ではなく全世界で最硬の材質を使用
神の付加として【粉碎】が宿っていて力も込めずに当たったものは
粉碎される

「ストオオツツプウウ！！これは火月を早くこの家の…家族と
して慣れさせるための会議なのに、その家を粉碎するつもりか馬鹿
どもお！！！！」

立ち上がりリーベの頭を叩く

同時に椿も下から脚でリタを蹴る

「うう痛い」

「…脛ですか」

頭を抑えて涙目のリーベと屈んで右脛を抑えるリタ

何故わざわざ対角線にいるハズの飛影がリーベを叩き
椿がリタを蹴ったのか

それには理由がある

リーベは現在飛影の屋敷に住んでいるが飛影にしか懐いていないのである

このブチ切れ状況で椿がリーベを叩こうとするものなら惨殺死体になっていた

「リタとリーベはチェンジ！！その後で会議を再開するぞ！！いいかお前ら！？」

『サーイエッサー』

何故か軍隊形式で全員立ち上がり敬礼

素早くリタとリーベが席を入れ替える

「よっこいしょ」

リーベが年寄りのような掛け声と共に飛影の上に座る

苦笑いしながらも飛影はリーベの頭を撫でる

「オイそこの馬鹿二人真面目にやるんでしょ」

ピキピキと椿が苛立っている

「真面目にやるわよ…宴会は良い案なのでしょう？なら宴会でなにをやるかを煮詰めることをすればいいのでしょうか？」

的確な意見

ふざけているように見えてもきちんと理解はしている

「とりあえず自己紹介か？魔法とか力も交えて自己紹介をすれば面白いことは確実だな」

「それは良い案ですね。魔法などを知らないわけですし、新鮮です」

飛影の意見にリタが賛同する

「問題は…宴会だからお酒…だね」

お酒の力は良い力ではある

頼りすぎるのは駄目だが初めての環境に慣れさせるにはとても重要である

「しかし火月さんも優希さんもまだ未成年ですから」

「お堅いわね：少しくらいなら問題ないわよ」

緩いリーベと堅いリタ

リタはリーベから飛影に視線をずらし目線で判断を仰ぐ

「酔っ払ってもすぐ酔いは治せるからな：それに美味しい酒なら気持ち良く酔えるからな：俺もありだと思う」

リタは少しの間飛影を拗ねたように睨みつけ溜め息を吐く

「わかりました：飛影が認めるなら私も認めましょう」

「まあ私もいいかな」

案としては最高であり

道徳的に問題はあるが道徳なんて存在しないのが当たり前なので椿も折れる

「さて他にはなんだろうか？」

飛影はリーベを一回下ろしホワイトボードに

宴会決定

自己紹介

呑み会

など

と書き込み○で囲む

「明日土曜日だからハイキングとか!!」

椿のまともな意見

「ハイキングの意味がないわね、飛べるし」

「走れば一瞬ですし」

「ジャンプすりゃ景色わかるし」

異常者三人による却下

「そうですね。メリアで遊ぶというのはどうでしょうか？飛影の妹ということですから魔界に行くこともあると思いますし、異世界ですから楽しめると思います」

「それは良案だ」

飛影は再び立ち上がり

メリアで遊ぶ

と書き込む

「よし!! 今日と明日の予定は決まった!! この計画で頑張るぞお!!」

拳を上げる

『おおー!!』

飛影の掛け声に合わせて全員拳を上げる

第一回家族会議（後書き）

誤字脱字ありましたらご連絡ください

皆さん見て下さりありがとうございます

宴会と魔法と自己紹介（前書き）

今回はどんな魔法を持ってるかなどの説明ですね

宴会と魔法と自己紹介

食堂

毎回ここでみんなでテーブルを囲んで食事をする部屋

キッチンが隣にあり
できたてがすぐに届けられるように構成されている

「すっげえ!!」

火月が見たのは
旨そうな料理の数々

今まで孤児院では誰かの誕生日でも院長が自費で小さなケーキを買ってあげるだけで

経営的に厳しかった火月の孤児院は料理が質素であった

同じ孤児院出身である優希がそれを理解しているため

少し豪華な盛り付けを選んだ結果である

主に

優希と飛影が料理を作成し

リタと椿が準備

リーベがつまみ食い係として宴会の準備を行った

座るよりもいろいろな話ができる立ち食い形式を採用しており椅子は片してあった

飲み物には高級そうなというより高級な赤ワインと白ワイン

ソフトドリンクには

アップルジュースとオレンジジュースがある

「はい火月ちゃん」

飛影の妹ということは自分の妹のような存在の椿はニコニコと笑いながらグラスを渡す

「ありがとうございます!!」

まだ馴れていないので素と敬語が混じった応対の火月

「野郎どもお!! グラスは持ったかあ!？」

グラスを高く上げる飛影

「おおう!!」

無理矢理声を低くしてそれに乗る優希

「野郎はいないよ飛影」

椿によって一蹴

「∴」

少し考える飛影

「グラスは持ったかあ！？子猫ちゃん達い！！」

「にゃー！！」

どういう思考でそうなったかは謎であるが飛影は再びグラスを上げ
優希が乗る

「注いでないので少し待ってください」

今度はリタによって一蹴

ちなみにであるが飛影とリーベと優希は既に赤ワインを注いでいる

更にちなみに優希は未成年である

リタは急ぐわけではないが白ワインを注ぐ

「火月ちゃんはなに飲む？」

椿は火月と合わせる様子で椿のグラスは空である

「んゝ悩むなあ」

オレンジジュースとアップルジュースで悩んでいる火月

「ワインでもOKだ!!」

横から飛影が口をだす

(お前黙れ)

そんな飛影に椿が怒りがこもっている視線を浴びせる

(…)

何も言えない飛影

表情は少し青ざめている

「んゝオレンジジュース!」

火月はアルコールという未知の物に興味はあったが誘惑に打ち勝った

「そうだよね!! 私もおレンジジュースにするよ」

椿が最上の笑顔でそれに頷き火月のグラスにオレンジジュースを入れ自分のグラスにも注ぐ

「おっしゃあ!! グラスに飲み物注いだな!? 呑むぞコラァ!! 食べるぞコラァ!! ってなわけで騒げやこんちくしよい!! かんぱあああい!!」

「うっへ〜い!!」

『乾杯』

何故かテンション上がっている飛影
それに合わせられる優希

そのほかは普通である

「さてまずは主役の火月から自己紹介いってみよう!!」

飛影はグラスのワインを飲み干してマイク（おもちゃ）を渡す

「ええ!? マジか兄ちゃん!?」

さすがにいきなりなことに驚きを隠せない火月だが

1つ深呼吸をする

未熟なりとも武道家としての呼吸法

リラックスできる

「市原火月です!! 兄ちゃんの妹になりました! 今日からよろしく
お願いします!!」

きっちり90度

身体が柔らかいのかきれいなお辞儀をする

「いええい!!」

飛影がクラッカーを鳴らし

それに続いて全員がクラッカーを鳴らす

「さあ次だれいく！？俺か！？」

今にも待ちきれない飛影

「やりたい人からでいいと思いますよ」

そんな飛影を見て呆れつつも微笑むリタ

「市原飛影、歳は277歳！称号は魔王、種族は子鬼で魔法は炎を統べる炎舞と風を統べる風華ともう一つは秘密」

飛影は魔法を発動し左手に風を生み出し目視できるレベルまで凝縮する

ボキボキに折れていたハズの右手は既に完治していて
右手から赤い炎の塊が生み出される

「兄ちゃんすっげえ！！ん？魔王？277歳？子鬼？」

当然の疑問

椿的にはまだ説明してないんだ
という表情をしている

「魔王ってのは魔法使いの王のことだ…歳は元々人間ではないこともあるけど魔王になると最適に戦えればようにその身体に一番合った背格好で止まり成長は一切しない」

そう一切成長しないのだ

飛影が魔王になったのは8歳

それから飛影は16歳まで成長して止まった

「それから俺は277歳の今まで生きてる」

そして月日は流れ現在277歳

「子鬼ってのは災厄の子として生まれて今は吸血鬼の血も流れてい
るから子鬼でいいやゝて感じた」

ぶんぶんと右手を振る飛影

「あれ？　そういえば兄ちゃん怪我は？」

ボキボキに折れていたハズの右手が完治していることに今気付く火月

「吸血鬼の血も流れてるから治った」

本来はダドマにつけられたブレスレットが飛影の再生力も減少させているため治りが遅くなってしまうのだが

飛影はダドマを説得して人間界でも屋敷の敷地内だけは制限が無く
なるようにしたのである

「兄ちゃんすっげえ！！」

飛影は魔法のことを聞かれると思ったのだがそんなことはなく
さらに信じてもらうまで時間がかかると思ったのだがそんなことも

なかった

「ほいリタ」

飛影はマイクをリタに投げる

「リタ・レーンです。飛影の魔王補佐をやっております。種族は神で魔法は神翼と光を統べるキュリクレイです」

リタの背中に薄いガラスのような翼が出現する
パチンとリタが指を鳴らすと視界から屋敷が消える

「はえ!？」

屋敷の中にいながら空が見れた
というより庭が見える

火月の手にはグラスが握られているが見えない

「物が見えるのは光の屈折です。なので光を少しずらすとこうなりますよ」

再びパチンと指を鳴らすとともに戻る

「すっげえ!! リタさんすげえ!」

キラキラとした瞳でリタを見る火月
照れくさそうに頬を掻いていた

そのままマイクを椿に渡す

「市原椿！！魔法は特にないかな？飛影の幼なじみです」

普通の自己紹介のあと優希に渡す

「市原優希でっす！！魔法なんて持ってないでっす！！！」

若さ溢れる優希

今までの屋敷で17歳の唯一の未成年であった

「同じ孤児院出身でっす」

にこやかな笑み

「私はリベリア・ラインベルト・ミリアよ…呼び方はなんでもいいわ。魔法はいろいろ」

黒い霧がリーベの右手を覆う

すると右手だけが火月の目の前に現れる

「おお！！」

火月がその手に触れる前にリーベは霧を引っ込める

「さあ自己紹介も終わったし！騒ぐぞおお！！！」

宴会と魔法と自己紹介（後書き）

なんか元から底辺だった文章力が…さらに下がったorz

頑張ります

魔界と魔王（前書き）

今回は従者というよりも侍女というよりもメイドとの会話で

飛影がどんな人物か？などの説明ですね

魔界と魔王

飛影達はメリアにいた

てきとうに解散と飛影が言った瞬間に飛影と火月以外は珍しいものを探しもとめバラバラに散っていく

「じゃあ城行くか!!」

「城？」

「あそこの城：昔200年くらい居候させてもらったところ」

飛影が指さすのはメリア城

目と鼻の先

というよりも

門の前に既にいる

「飛影さんこんにちは。今日はどうしました？」

飛影がきていることを本当に嬉しそうに笑う門番

「妹案内しにきた」

火月の頭を撫でる飛影

「えへ」

嬉しそうに笑う火月

「ああ妹ですか…どうぞ」

門からずれる門番

「サンキュー」

「あざます」

悠々と通る飛影と火月

「つて妹お!？」

飛影達が城に入ってから門番がようやく現状を理解し叫ぶ

>>>>>

火月からすれば不思議な光景であった

いきなり異世界に連れてきてもらい

城に入りその従者や偉そうな年長者も飛影に頭を下げる

「ようコレット!!元氣か？」

「ああ飛影さん、こんにちは元気ですよ。飛影さんもお変わりないようで」

従者の少女のコレット

メリア城にいる従者の中でも18歳と若い部類に入るが

既に従者を4年もしている

若手から中堅の間である

そしてその隣にも従者はいた

16歳程の少女

何故か飛影を見て石のように固まっている

「ん？もしかして新人か？」

そんな態度に飛影は疑問を覚える

「はい：先月に入っただばかりのレインです」

「へーってことはもしかしてコレットが教育係か！？」

話しかける前に一緒に掃除をしていたことを思い出す飛影

「そうですよ」

「アハハ！！」

コレットの肯定に飛影は笑う

「ちょっと前まで新人だったコレットが教育係か!!」

本当に嬉しそうに笑う飛影

その二人の仲の良さに入れない火月と新人のレイン

コレットは普通の人間である

飛影の面白いモノを見つけた感覚を総動員してもコレットは普通の人間の域をでない

なのに飛影が異常な者と接する

いや家族のように接する理由はある

「まあ私も結構続いて成長してます。飛影さんは成長は?」

「言うな!!」

身長の問題が出た瞬間飛影は叫ぶ

コンプレックスは身長である

人間界の普通の人間やギルギアが言ったのであればぶち殺し確実だがコレットは冗談で済んでいる

「あゝ相変わらずなんですネ」

「…」

コレットの問いに沈黙で返事をする
目が笑っていないがそれはあくまでも冗談の領域である

「あはは！申し訳ないです。気にしましたね」

「いつの間にか俺と同じくらいになりやがって」

コレットの身長は161cm

飛影よりも僅かに大きい

それを見ただけでわかる飛影だがあくまでも同じくらいとしか認めない

「今日はどうなさったんですか？」

「ああ妹を案内しにきた」

妹というフレーズにコレットは飛影の隣にいる火月を一瞥する

「兄ちゃんの妹の火月です」

ぺこりと頭を下げる

その動作に反射的にコレットは頭を下げる
レインはあわあわと慌てていた

「…妹…ですか？」

「そうだ」

現状が理解できていないのか頭を抱える

飛影の奇行には馴れていたつもりだがコレットはさすがに溜め息を吐く

「…まあ飛影さんですからしょうがないですね」

飛影だから

納得する理由としては充分である

「そうだな納得しろ」

「兄ちゃんってどんな人だったんですか？」

二人の仲の良さ

火月としては飛影の妹歴2日なのであまり知らない

だから聞いてしまったのである

「んーどんなですか？ほぼ4年は一緒でしたが今でもお変わらないですよ」

「…具体的なことを教えてほしいです」

火月の問いに少し思い出して言葉をまとめる

「そうですね…4年前から一緒でしたが、まず名前で呼ばないと無視されましたね。それに敬語も嫌がりますし、最初は魔王に失礼のないようにと思ってましたが次第にその気持ちがなくなりますね。まるで家族のように接してくれて…私にとっては兄のような人物ですね。あまりにも無茶な仕事を任されたり、少し悩んでる際にすぐ気付いてくれて対処してくれます。本当に優しい方ですが…メリアの国民からの人気は高いです。しかし他の国からの評判は悪かったですね」

苦笑い

しかし本当に嬉しそうに飛影のことを語る

「レインもとりあえずは早く意識が戻ってほしいですね」

まだ固まっているレインの肩を叩く

「はっ！！ま…魔王様にお会いできて光栄です！！」

「あゝ」

やれやれと少し呆れる飛影

「緊張してるな」

「まあ最初はそうなりますよ」

昔の自分が被るのかコレットは微笑んでいる

「も…もしや魔王様に何か粗相を致しましたか!？」

飛影が呆れ顔なのを見て顔面蒼白にぶるぶると震える

「大丈夫大丈夫。レインのミスはコレットのミスだからコレットが悪いのさ」

「…まあ教育係は私ですからそうなりますけどね」

「ふゆえ!?! いえ私がいたらないばかりなので!?!」

自分のミスで尊敬すべき先輩が責められると思ったレインはすぐさま慌てて否定する

「まあいいや…少しずつ馴れてくれりゃいいし。セリエはどこいる?」

「セリエ王は謁見の間ですね。って飛影さんなら聞かなくてもわかるじゃないですか!?!」

魔力の扱いに長けている者は周辺の魔力を探知できる
魔力は人によって違うのでどこに誰がいるかがわかるのである

「いや試してみた」

「なにをですか!?!」

「ちゃんと先輩やってるんだなぁ〜と新人の頃は物凄く慌ててたから」

「昔は昔です。いつまでも新人じゃないですよ」

つーんと唇を少しすぼめて拗ねる

「あはは！悪い悪い！！そろそろ俺行くわぁ」

ひとしきり笑うと飛影は火月の手を掴み去っていく

「話し聞かせてくれてありがとうございます」

最後にぺこりと頭を下げる火月

「凄いですコレットさん！！」

飛影達が視界から消えた瞬間にレインがキラキラと尊敬の念が籠もっている瞳でコレットを見つめる

「あの魔王様と家族のように接することができるなんて！」

メリア国の魔王の認識は

格好いい

強い

優しい

と天上の人物なのだ

ただでさえ世界一の国の城で働いている偉大な先輩が

そんな天上の人物と親しく会話しているのだ尊敬メーターがカンストしてしまったレイン

「あゝ3ヶ月くらいで飛影さんには馴れるから大丈夫。というよりも強制的に馴れさせられるわ」

昔を思い出すコレット

今のレインくらいだと返事されるが

少し経つと魔王様だと何を聞いても返事が全て

「飛影なんだけど」

に統一される

次の段階は目上に対して扱うような態度だと

全ての返事が

「俺のことをバカって言うてみろ」

に統一される

あの時代は嫌がらせかとも思ってしまったコレット

今は飛影が城に住んでいないので逆に馴れるのに時間がかかりそうだなあと

憧れの視線を送るレインを見るコレット

魔界と魔王（後書き）

PV1200

ユニーク200

超えてました。

びっくりしました

物凄く嬉しいです

携帯の前で発狂しました

次は王様との喋りで

その次が王子との喋り

その次が戦闘の予定ですゝ

そろそろガチ戦闘をさせようかなと思ってます

魔王と国王（前書き）

誤字脱字あったらごめんなさい

魔王と国王

メリア城の謁見の間

そこは王が他の国の重要な人物と会うために存在し
王がその部屋で作業ができるように机やソファがある

堅苦しい雰囲気ではない

それはメリア城全体に言える

強固な扉で部屋の前には屈強な門番兼護衛が二人いる

二人共に魔法使いで一騎当千を誇る

王が政治な作業を黙々としていているとその二人の慌てている声が響いた

「ちょー！！飛影さん止めてええ！！」

「お願いします！！今度こそ減給ですって！！」

必死に止める声

しかしそんな制止も聞くわけがない人物である飛影

「ドォン！！」

強固な扉が大砲のように吹き飛ぶ

『ぎゃあああああ!!』

門番の悲鳴と共に

風を切り裂いて国王のもとへ一直線

(儂死ぬんじゃね?)

世界一の国の国王セリエはこんな馬鹿なことで死を軽く覚悟した

しかし直前で空気の壁が扉を受け止める

「オラァ!! セリエ生きてつかあ!?! まだ現役かコラァ!!」

ド派手に火月の手を握りながら飛影が登場する

「お前のせいで今この瞬間に逝くところじゃ!! 馬鹿者があ!!! そしてまだ現役じゃあ!!」

「なんだよお助けたのに」

空気の壁で

ドア激突

頭がトマト

にならずに済んだのは飛影の魔法風華のおかげであるが

そうなる原因も飛影である

飛影を怒鳴った国王セリエ

名前はセリエ

名字はメリア

現在89歳

立派な髭が生え白髪しかないがまだ気力は充分

まだまだ現役の国王で

飛影とは親友である

またメリアの王族は皆強力な魔法使いである

セリエも昔は強力な魔法使いであったが今は衰え魔法の構築すらできない

「…たく！何しに来おった？」

溜め息混じりにされど嬉しそうに歓迎するセリエ

「妹紹介しにきた」

セリエの対面のソファーにどっしりと座り火月はその横にちょこんと座る

初対面以上に国王というセリエに緊張しかない火月

「兄ちゃんの妹の火月です」

ガチガチになりながらも頭を下げる

そんな火月を見て不審に思うセリエ

「お前の妹にしては大人しいのお」

飛影の異常で異質な行動になれてしまっているセリエは妹ということとは驚かない

「ん〜？火月兄ちゃん命令だ普通で良いぞ」

兄の命令

そのことにピクリと反応する火月

「え？いいの？」

「いいぞ」

よくわからない話し合い

セリエはついていけないがお茶を啜ってその様子を見ている

「よっしゃあ！！敬語使わないからだるかったぜ〜」

男勝りの口調

異世界にいるというのに

赤のTシャツに下は黒のジャージと楽な格好

そんな格好だが今の火月には似合っていた

「んでセリエ、国王。火月、妹」

物凄く簡単な紹介を済ませる

「よろしくな!!」

ニコニコと笑う火月

活発そうな雰囲気は滲み出ている

「ふむ。よろしくのお」

にこやかに笑うセリエ

とても89歳には見えない

「：もしやこれだけのためにきたのか？」

「そうだけど」

ドア粉碎

公務の邪魔

周囲を全く考えていない飛影

「ふむ：この後の予定は？」

「エリアと遊んでから墓参り」

エリアとはこの国の第一王女である

歳は16歳

セリエの孫である

セリエの息子夫婦は事故で他界してセリエが父親代わりに育てている

「むゝ少し頼みを聞いてほしいのじゃが」

僅かに国王としての眼力で飛影を見る

「はあ…聞こうか」

その目は何か起きた時のセリエの眼である

そしてセリエは決して頼み事を安易に飛影にしない

どうしようもないことだけを頼むのだ

「良いタイミングに来てくれた。今メリアの城下町には切り裂き魔がおる」

「…火月、門番にドロップキックしてきてから遊んで」

血生臭い話だと推測した飛影は減給と罰を恐れて灰になっている門番へと火月をけしかける

風華を発動し風の結界を張る

半径3メートルのラインで空気の振動を止め音が漏れないようにする結界である

「いいぞ」

「ふむ：その切り裂き魔にやられたのは今のところわかっているだけで17人。恐らく遺産持ちじゃ」

遺産持ち

その言葉に飛影は溜め息を吐く

魔法の世界

魔界

だが魔法が栄えていたのは遠い昔で現在は世界でも正式な魔法使いは100人もいない

しかし昔の魔法使いが残した遺産

魔法が込められた遺産を使用すれば飛影の面白察知での異常な異質な者

火月でも魔法が使用可能になる

簡単に使えて強力な魔法

門番の二人も遺産持ちの魔法使いである

「儂の護衛を行かせようにもあの馬鹿者共儂の安全に気をつかいおる」

さすがに国王の護衛を離れることができない護衛二人

自分の安全より民の安全を優先するセリエとしては融通がきかない

と苛立っていた

「警備の者を使っておるが尻尾が掴めんかった。そろそろ犠牲者が増えてきて儂自ら出ようかと思っていたころじゃ」

「やめろじじい老い先短いんだから」

ニヤリと笑うセリエに冗談や嘘は感じられない

「詳しい情報は？」

「犯行時刻の予想は昼頃、つまり今の時間帯、大通りや公園で五体バラバラに引き裂かれる：しかし誰も犯人がわからん。狙撃系の魔法かもしれん」

さすがに歳のに喋り疲れたのか深呼吸をしてお茶を飲む

「連続殺人：しかも切り裂き魔なんて通り名があるんだ。殺された日にちとか被害者の共通点は？」

愉快犯

強大な魔法を手に入れて最強になったと勘違いした奴の60%が愉快犯になる

それは飛影の経験である

「日には簡単じゃ：毎日、18日前からじゃ。被害者の共通点は皆10歳前後の少年少女じゃ」

忌々しそうにセリエは吐き捨てる

「なるほどね：んじゃあ殺しに行ってくるかな。火月はここに居させといて」

腕をグルグル回し臨戦態勢に入る飛影

飛影に言わせれば所詮遺産持ち

自分の魔法でなければ使いこなすことは不可能なのだ

魔法自体が強力なため一騎当千は珍しくもない

だが一騎当千は所詮強者程度

絶対強者には適わない

飛影は感覚を拡張メリア国全土を覆い尽くす

一瞬でも魔法を放った瞬間に位置を掴みブチ殺せるように

「ああ！?…」

そして飛影は違和感を感じて頭を抱える

「どうした!？」

珍しい飛影の反応にさすがに心配するセリエ

「もう一度被害者関連の情報を教えてくれ」

「10歳前後の少年少女を狙う。五体バラバラで殺される。時間帯

は昼頃。大通りや公園など人が多いところで殺害される」

「質問だ。その10歳前後の被害者は可愛いとか綺麗系でデブとかは狙われてないか？」

飛影の妙な質問

だがセリエは被害者をよく思い出す

「確かにお前の言うとおりに綺麗系とか可愛い系じゃな」

10歳の子供など可愛いか綺麗しかいない

格好良い少年などはいないのである

「あゝ俺のツレが襲われた」

「む！？大丈夫なのか！？」

「大丈夫：だけど：記念公園だし、あいつ周りの被害とか考えないからなあゝちょっと行ってくる」

襲われたと確かに感じたハズなのに飛影は至って冷静

飛影は自分の周囲が傷つく時は容赦がない

怒り全てを破壊し

時には世界を破壊するが

いたって飛影は冷静である

それに違和感を感じるセリエ

「まさか…リタか？」

飛影が絶対の信頼をしている少女リタ

魔王補佐の彼女は飛影と同じ絶対強者級で飛影と対等にわたりあえる

リタならば飛影のこの態度は納得できるセリエだが

「いや…違う」

飛影は溜め息を吐きながら同時に風の結界を解除

「火月…ちょっと遊んでて」

「はあい!!」

門番に格闘して遊んでいる火月の横を通り

飛影は城から城下町へと駆ける

割と全力で

その足は

歳は250歳

身長は130cm

外見は可愛い10歳の少女にしか見えない

絶対強者級の吸血鬼

リベリア・ラインベルト・ミリア
リーベのもとへ

（記念公園は破壊するなよお！！）

飛影の祈りは届くのか

魔王と国王（後書き）

王子が王女になっちゃいました

しかも飛影戦わせようかと思ったらリーベになっちゃいました

予定通りに作成って難しいですね

次はバトルですかね〜

吸血鬼と切り裂き魔（前書き）

PV2000超えました

超絶うれしいです

誤字脱字ご指導お願い致します。

吸血鬼と切り裂き魔

飛影がリーベのもとへ走る少し前のことである

リーベは飛影の屋敷に住み始めてまだ日がそんなに経っていない

もともとは人間界の住人だった彼女は二回目の魔界に上機嫌であった

一回目は飛影が案内してくれたのでサービスがあり

二回目に一人で酒を買いに行こうと世界一のお酒が集まる店と世界一お酒の種類がある店がくつついている店に向かう途中

道は詳しく知らないため

前回飛影が案内してくれた道をそっくりそのまま歩いている

そして記念公園に入る

（子どもがいっぱいね）

自分と同じ位の外見

つまり正真正銘の10歳程の少年少女が無邪気に遊んでいる

（美味そうね）

吸血鬼として

人間の上位種として和むという感想よりも

リーベは家畜がいっぱいとしか認識していない

（あゝ飛影から止められてなきゃ食べたのに）

前もって飛影からはメリアの国民は食べちゃダメと釘を刺されている
物欲しそうな眼で少年少女を眺めながらトボトボと歩く

（日差しが強いわね）

んゝ

と大きく伸びをして太陽を睨みつける

吸血鬼の弱点の有名どころの太陽の光

しかしリーベは弱点でも何でもない

ただ太陽が出てると眩しいと

ごく当たり前の感想な位なんてことはない

他にも吸血鬼の弱点

十字架

（あれになんの意味があるの？）

銀の弾丸

（撃たれたら当然少しは痛みを感じるわね）

銀のナイフ

（素材がなんであれ刺さると痛いわよ）

杭

（心臓に杭って意味ないのよね。刺しっぱなしにしても抜けるし）

流水

（飛影と海行きたいなあ）

こんな具合に弱点はない

「さ…て…と」

腕を回しお酒を買いに行く準備をして

放射線を描いて血を撒き散らして飛んでいく

「？」

いきなりすることに少し戸惑ってしまうリーベ

止まっている間に

次に左腕

次は両足

最後に首を切り裂かれる

周囲からうるさいほどの悲鳴が上がる

それと同時に馬鹿笑いする声が切り裂かれて胴体と別れたリーベの耳に聞こえた

周囲にはその声は届いていない

リーベの眼に映るは自分を切り裂いたと思われる右手に刀を持った勝ち誇った人間の笑い顔

彼女からすれば家畜があざ笑っているように映る

「殺す」

一瞬で沸点まで達すると同時に黒い霧が彼女を覆う

その瞬間には既に再生が完了して立ち上がっていた

羽がジャージを切り裂いて出現し

爪が伸びる

八重歯を剥き出しにして自分を一回殺した家畜へと向き合う

周囲の時間が止まる

切り裂き魔ですら啞然としている

「とりあえず…邪魔ね」

黒い霧がリーベの影から爆発的に吹き出る

黒い霧がメリアの一般人に触れると一瞬でその姿を消す

リーベの中心から半径1キロメートル

人の姿が消えて

黒い霧が覆った

リーベと切り裂き魔が対峙する

薄い黒い霧が周囲を包んでいる

「さて死ぬ準備は整ったかしら？…家畜」

紅い眼がギラリと怪しく光を放つ

切り裂き魔は静かに気配を消して後退するしかできない

切り裂き魔の魔法は自分の姿を世界から隠すだけである

だが世界を誤魔化すということはそこに住む住民を誤魔化すことに直結する

つまり魔法発動時は誰にも知覚されない

大魔法である

切り裂き魔の男は魔法を発動し刀で切り裂いていただけである

男は自分が切り裂いた少女

リーベを見て恐怖しか湧かない

魔法を発動しゆっくりと後退する

本当は急いで焦って無様に逃げ惑うことが許されるなら切り裂き魔はとっくにそうしている

一歩一歩ゆっくりと確実に

自身のことを見えているようにしているのは気のせいだと思いながら後退する

「ふうん。その魔法は存在を感知されないようにする隠蔽魔法ね……しょっぱいわね」

しかし

黒い霧は言うなればリーベの世界である

さらにリーベと切り裂き魔では魔力量に違いがありすぎて魔法が機能しないのだ

一発で魔法を理解され

更に目の前までの接近を許してしまう

「……!!」

身長的に見下しているはずの切り裂き魔は何故か見下されている印象をうける

生物の本能がリーベから逃げろと警鐘を鳴らしている

強大な殺気が浴びせられ

瞬間的に切り裂き魔の何かが壊される

「ああああ、あああ、あああ!!」

突然叫び始めた切り裂き魔

「がああ!!」

しかし切り裂き魔は本能とは別に自然に手が動き目の前のバケモノを切り裂く

魔法が使用できるということは飛影からして異質か異常の者

つまり生身でも人間を凌駕する

魔法を獲る前は剣の達人であった切り裂き魔

本能的に魔法を解除し全魔力を循環させ身体能力強化に回す

胴体が真っ二つになったリーベだが瞬間的に再生

「ふふ」

少しだけ笑いながら後退するリーベ

「少しだけ遊んであげるわ」

すぐに殺すのをやめ待ちの態勢にシフトする

「がああ!!」

もはや強大すぎる殺気に脳がやられ理性が保っていない切り裂き魔だが

体の反射は残っていて

理性がある時よりも体のキレが鋭く
斬りかかる

弾丸のような速度でリーベの背後に移動し袈裟斬りを放つ

「ふふふ」

その攻撃を見ずに笑いながら翼で叩き落とす

切り裂き魔の刀が地面に食い込み
その反動を利用して蹴りが飛ぶ

その蹴りがリーベの右手が空中に出現し掴まれ防ぐ

本来あるべき場所の右手には霧がかかっていた

リーベはそのまま手首だけの力で放り投げ
たったそれだけで切り裂き魔は大砲のような勢いで吹き飛び
木に激突する

切り裂き魔は背中から激突し背骨が軋む音が響く

「？」

少し疑問に感じたリーベだが

切り裂き魔は再び立ち上がり斬りかかってきたので氣にとめない

「オオオ！！」

雄叫びをあげて自らの間合いより手前で刀を振り下ろす

魔力が込められた鎌鼬がリーベを襲う

「…実力差があるのも考えものね」

切り裂き魔にとっての必殺の一撃

理性が壊れているが体は覚えていた自身の最強の技

彼が一年かかって会得した技であった

指一本

リーベが爪を伸ばした人差し指をちよいと振るう

それだけで切り裂き魔の鎌鼬と同等の鎌鼬が魔力無しで生まれ相殺する

だがその衝撃を眼くらましにし切り裂き魔はリーベに接近して逆袈裟で薙ぐ

それを構え無しに黒い霧だけで攻撃を防ぎ

腕を振るう

それだけで切り裂き魔は再び吹き飛び木に激突

「ぐっあ!!」

「…飽きたわね」

リーベは呟くと

右手の指の爪を伸ばしながら振りかぶる

狙いは切り裂き魔周辺

そのまま勢いよく振り下ろす

ドォ!!

とソニックブームが巻き起こり強大な衝撃波が走る

切り裂き魔が反応するよりも早く衝撃波は直撃する

「あら？」

粉塵を黒い霧と共に吹き飛ばし見通しの良くなった周辺

切り裂き魔の死体は衝撃波で消滅し血すら残っていないにも関わらず周辺の自然や建造物は無傷である

「…」

もう一度振りかぶるリーベ

「ストオオップ!!」

その腕を飛影が掴む

「あら飛影? 偶然ね」

不敵に嬉しそうな笑みを浮かべる

「見学はいいけど助けてくれないなんてヒドいわね」

「必要がないからな…ってか偶然もなにも今のは俺がいることわかってやっただろ」

飛影が絶対強者級のリーベの心配をするのは同じ絶対強者級の者と対峙した時だけである

リーベが最初に切り裂き魔を木に激突させた際

その時は手加減のしすぎと思っていた

「あら? わかる?」

次の二回目に木に激突させた時疑問が憶測に変わった

「全く!! 建造物を壊そうとするなよ」

頭をぽんぽんと軽く叩く飛影

衝撃波を食らわし破壊痕が見つからなかった時には確信に変わった

飛影の風華の風の防御で守っていたのだ

本気の衝撃波ではないが破壊できなかったのが悔しかったのでふざけてもう一度放とうとしたのである

飛影に頭を軽く叩かれ拗ねるように目線を逸らす

「家畜が調子のつたのよ。二回死ぬし」

やだやだとボロボロのジャージを確認して落ち込むリーベ

「油断しすぎだ」

飛影は右手に持っていた紙袋を渡す

「…？服？」

中を開けると薄いピンクのTシャツに白のフレアスカート

淡い紫の髪色で白い肌のリーベによく似合いそうである

「どうせ服ボロボロにするから見繕ってきた」

リーベが戦う時点でその予想をしていた飛影はまず建造物や自然を護るために風華の風で防御を施してから買いに行ったのである

「…ありがと飛影」

普通に微笑むリーベ

服を黒い霧で覆い自身の体も黒い霧で覆う

あっという間に着替えが完了する

「どう？」

その場でくるりと回転する

「似合ってるぞ」

お世辞は言わない飛影からの褒め言葉

満足気に頷くリーベ

「んじゃ俺は城に戻る」

「ええまた後でね」

互いに手を振り何事もなかったように

飛影は城へ

リーベは酒を買いに別れた

ただリーベは若干上機嫌で鼻歌を口ずさんでいた

吸血鬼と切り裂き魔（後書き）

敵が弱すぎて互角な戦いができないですorz

次は飛影がなんでメリアの国民には異常普通関係なく優しいのかの過去話です

他愛もない話（前書き）

調子乗ります！！

感想くれるとめっちゃ嬉しいです！！

調子乗りましたごめんなさい
まことに申し訳ございません

他愛もない話

飛影がリーベの心配ではなく自然や建造物が心配になり城を出ると入れ替わりに火月が再び入ってくる

「なあなあセリエさん。昔の兄ちゃんってどんな感じだった？」

ソファーに腰掛ける火月

「…昔かの？」

火月にとってはまだ二日目なので飛影のことをよく知らないのが現状である

しかしセリエにとって昔という表現は困る

なにしろ飛影は2000年程この城に住んでいる

メリアの城の国王が4回変わった

それだけの歴史がある飛影

一概に昔とはいえどの時代かがわからない

「儂の子供の頃か？それとも飛影がメリアに来た当初か？」

「兄ちゃんって噂だと話しかけても無視されるって噂があるんだけどそんなこと全然ないし、椿さんも普通の人とは話をしないって言うんだけど、メリアの人とは普通に話してるしなんでかなあ？って」

火月の話を聞いてメリアは溜め息を吐く

「あの馬鹿まだ駄目なのか」

火月の不思議そうな表情

「そうじゃな…それはおよそ200年前の話じゃ…長くなるぞ?」

「全然構わねーよ」

やはり男勝りな口調

>>>>>>>>>>

「良い天気だ」

飛影はセリエに報告に行く前にある人物を発見する

「そうですね。お茶が美味しいです」

城の屋上にある庭園

飛影は花は囲まれながらテラス席のような雰囲気の中優雅に紅茶を飲む

対面に座っているのは

16歳の少女

世界一のメリア国の第一王女

名前はエリア

名字はメリア

メリア・エリアである

腰まで伸びている綺麗なストレートの金の髪

ドレスのような服を着て

おしとやかな雰囲気女王

その姿はかなりの可愛いさだが

外見はか弱いが強力な魔法使いである

「お父様はどうなさったのですか？ 久しぶりに会えて嬉しいです。」

セリエとエリア

現在二人しか王族はいない

王女のエリアは両親を事故で亡くし

セリエが父親代わりに育てていたのだが

エリアがセリエを呼ぶ際はお爺様で

飛影を呼ぶ際はお父様である

たまにそのことでナイーブになるセリエ

だがそれは当然のこと

飛影はまずエリアの名付け親でありセリエは王としての公務があるが飛影は暇なことが多かったので

基本育てて教育したのは飛影である

余談であるが飛影はメリア国の王族や従者の赤ん坊などを育てていた

「今日は妹ができたからその紹介に来た」

「お父様の妹…ですか？私の叔母様ですね」

微笑むエリア

実に3ヶ月ぶりの父親との会話で嬉しさが身体全体に広がっている

「いや…火月は15歳だからエリアより一つ年下だぞ」

「まあ！とても面白いですね。さすがお父様です」

クスクスと手で口を隠し行儀良く笑う

「俺がいない間に変なやつとかに言い寄られたりしてないよな？」

少し不安そうな表情の飛影

飛影は純愛からの結婚でしか認めていない

また世界一のメリア国だが200年前から全て王族は恋愛結婚で離婚することもなく仲良く生涯を終える

飛影の影響である

特にエリアは両親がいなく飛影が付きっきりで育てたので本当の娘のように思っている

「ふふ！お父様は心配性ですね。」

微笑むエリアにホッと安堵の溜め息を吐く

「13人くらいに言い寄られましたよ」

飛影の動きが止まる

「やはりお父様がいないと強気になる方が多いですね。」

微笑んでいるエリア

エリアの可愛さ

世界一の国の王女

と2つの特徴があるエリアは他国の王子に人気で度々パーティーに誘われる

推しに弱い彼女はパーティーに参加させられ

王子や貴族から交際を申し込まれる

飛影がいた時はパーティーに付き添いで付いていき睨み一つで黙らせていたが

飛影という最大の生涯が消えた彼らは強気にどんどん誘っていたの

である

「エリア」

「はい？」

ニコニコと微笑んでいる

「そいつらの所属してる国教えて欲しいんだけど」

飛影の言葉に可愛らしい微笑みが若干引きつる

「教えたらお父様どうするのですか？」

「滅ぼす。皆殺しだ」

ニツコリと極上の笑顔

その笑顔の意味をエリアは知っている

（…本気です）

「お父様安心してください。ダンスの申し込みも交際も全て断りましたから」

さすがにそれを許すわけにもいかないなのでエリアはやんわりと説得する

「エリアそんなに断れたか？」

気が弱い彼女のそんな姿が想像できない飛影

「そうですね…状況説明致しますよ」

>>>>>>>>

「しかしさっきのリーベさんの霧が何だったのか気になりますね」

「そうだねーあっ可愛い!!」

リタと椿は現在動物園にいた

しかもただの動物園ではなく珍動物園である

リーベの魔力の増大と霧の発生

すぐに収まったがあれは何だったのだろうかとりたは少し真面目に
思考するが椿は目の前の珍動物に夢中である

椿が今夢中なのは

キモカワイイではなくただのマスケ面したカバとライオンが合体し
たような動物

面白いが可愛いとは思えなかった

「まあまあリタちゃん。たまには息抜きも必要だよ」

えへへと幸せそうに笑う椿

「はぁ…そうですね。たまの息抜きをしつかりと満喫しましょうか」
カバ肉という旨いのか判断が難しい

そもそもその肉はどこから調達しているのかわからないが椿とリタは仲良く2つ買って食べ歩いていた

笑い合う二人

それはとても絵になる構図で男達は例えカップルだったとしても振り向いてしまう

「君達可愛いね!! ちょっと遊び行かない?」

チャラチャラしている若い男二人がナンパ目的で近づいてくる

『…』

二人の白けた視線

「…絶対楽しいって!!」

しかし男はめげずにリタ達の進路に先回りし歩みを止めさせる

「やはり飛影と違って私はまだ認識がされてないのですかね?」

まだ飛影の補佐になってから1年程度しか経っていない

そのためメリアの国民でも知らない者は多い

椿など200年以上いるが分かるのは城の人間だけである

「とりあえず邪魔」

ニッコリと笑顔で進路妨害している二人に微笑む椿

「面倒なんで」

椿の方を向いてしまった男二人

リタはそのまま歩いて男達に接近しドカンと吹き飛ばす

そして何事もなかったように歩き始める

「やっぱり強いね」

「まあ飛影の補佐ですから」

リタが

多分気絶するだろう

と考えて放った攻撃は見事に気絶した

赤ん坊を高さ2メートルから落下しても死なないようにする程度の
難易度であった

「リタちゃんよく飛影の補佐なんてできるよね」

「当然です。補佐ですから」

微笑むリタだが返答にはなっていなかった

しかし何となくわかってしまう椿

（飛影の近くは忙しいけど楽しいからな）

「そういえばこの間は苦労しましたよ」

その時を思い出したのか苦労と言いながら笑っている

「どんな話？」

>>>>>>>>

『乾杯!!』

昼間からバーで酒盛りしているリーベと優希

リーベはカクテルを優希はビールを持っていた

メリアにも当然法律があり成年は18歳

未成年者（18歳）はお酒を呑んではいけないのだが
確実外見で未成年だとわかる二人が呑んでいる

その理由は簡単でリーベは飛影と一度来ているのだ

その時に飛影の連れと認識されているリーベ

とその連れの優希は許可が簡単におりる

魔界というよりもメリアには魔王の知り合いだから

金をまける

サービスしてほしい

偉そうにふんぞり返る人間

と詐欺師がいるが

観光者ならともかくメリアに住んでいる者は瞬時に嘘を見抜ける

というのも飛影の知り合いはまず偉ぶろうともサービスしろとも言わず逆に店にサービスするものも多い

更に言えば確実に一回は連れまわすので記憶に残るのだ

なのでリーベは無理なく優希も覚えられている

「今日は私の奢りよ」

上機嫌なリーベ

酒屋で優希はリーベと偶然会い今現在一緒に行動している

その時から上機嫌なリーベに優希は疑問であった

もともと屋敷にいる優希とリーベの二人は仲が良い

優希がワインセラーからワインを拝借して一緒に酒盛りをしたりし

ている程である

「上機嫌ですね〜そんなお金あるんですかあ？」

猫のように笑う優希

「貯金自体は500万くらいね。」

飛影の屋敷に住んでいる者は毎月100万円程お小遣いとして支給される

異質で異常な飛影は金銭面でも異常である

「…かなり貯まってますねえ!？」

「あら? 優希はそれ以上貰ってるじゃない」

優希は雇われている身なので毎月150万円程貰っている

「いやぁ恥ずかしいことに貯金10万円くらいです! それに皆さんと同じですよ? 私もお小遣いにして貰ってます」

飛影の屋敷には落とし穴を始めとしトラップが満載
隠し部屋も多数

地下室などもはや迷宮である

その原因は優希だ

彼女は飛影から家を改造する許可をもらい好き勝手に改造しまくっ

ている

結果トラップ屋敷になったのだ

なので改造費で金が吹き飛んでいる

「?なんで小遣いなの?」

「ふふふそれはこの優希ちゃんの甘い甘い青春が含まれていますよ」

ニヤニヤと笑う優希

「良いわ。酒のつまみになりそうね」

リーベは酒を飲み干し

自分と優希の分のおかわりを頼む

他愛もない話（後書き）

他愛もない話しです。

やりたかっただけで

- 1、飛影のメリアの人物に対する態度
- 2、これから出番増やそうかと思う飛影のほぼ娘のエリアの話
- 3、リタの苦労話
- 4、優希の詳細

を一話づつやろうかなと

出会い（前書き）

飛影がなんでメリアの国の人間に優しくするかの話です

三話くらいを予定しています

出会い

時は遡り208年前

メリア国がまだ世界一でもなく普通の国であった時代

戦争も多発しており世界中が戦乱の時代であった

「あゝだるゝ」

メリア国の王

先代の王が戦死し僅か二十歳の王がいた

机の上に寝転がって退屈そうに月夜を見ていた

王の名前は

名字はメリア

名前はセツネ

メリア・セツネである

メリア1の魔法使い

代々王は魔法が生まれながらに使える

その魔法は強力でそこらの魔法使いとは桁が違う

セツネも一騎で戦局を覆せると言われている程だ

短髪ショートヘアー

身長は170cm

歳は20歳で無駄な脂肪はついていなく。身体も引き締まっている

顔の造形も整っていて格好いいとも綺麗とも言えるまさしく美形である

だらしなさそうな表情でなければ

「ああ？誰だ？」

外を見ながらセツネは面倒くさそうに近くに置いてある槍を手にする

今は戦争中で暗殺もある

だからセツネも身体から武器を離すことはない

だるそうに机から転がり落ち槍を構える

その瞬間だるそうな顔が引き締まり武人の表情になった

（敵は一人：素人に毛が生えた程度か：）

戦闘用に心を入れ替え窓の外に隠れている侵入者を警戒する

普段はバカ王やダル王やサボリ王と言われているセツネだが戦いに
関してはその言葉を出せないほどの人物へと変貌する

「あらまあ…バレるとは思わなかった」

少し驚きながら余裕の表情で少年が月の光を背景に姿を現す

「あれ？もしかして私のせい？」

少女が微笑みながら少年におんぶされ登場する

「ああそうだ。残念ながらそっちの少年の方の気配はなかった」

槍で警戒しながら少年を睨む

まだ気配を消しているのか対峙していても気配が感じられない

「あゝやっぱり私かあ」

少年少女は勝手にセツネの寝室に侵入する

少女の方は軽く落ち込んでいる

「んで？なんだ？殺しに来たのか？」

気配が薄すぎる少年

気配を隠してはいたが察知できる程度の少女

今戦争している敵国に暗殺部隊がいると噂されていたのをセツネは知っているため

（新人と熟練者だな）

少女を新人

少年を熟練者だと認識する

歳が16歳程度

自分より年下に見えてもセツネは油断しない

若いから弱いわけではない

魔法使いや魔法使いモドキ（遺産持ち）が珍しくないこの戦乱の時代

弱いやつが弱いのだ

「ああ？なんで俺が面倒くさいことしなきゃいけないんだ？」

やる気も殺気もない少年

セツネが武器を構えているが攻撃する気はないらしくその場に座り始めた

「ちょ…！！自由すぎでしょ！！」

少女が少年を立たせようとするが全く動いていない

（新人の教育か？舐められたもんだ）

少年が動かないのは新人に経験を積ませるためと判断する

「来ないならこっちから行くぞ！！」

『どこに？』

少女に突撃しようとした際に二人からの疑問を聞いて頭からずっこける

「…暗殺しに来たんじゃないのか？」

額を抑えヨロヨロと立ち上がるセツネ

ずっこけたのが原因で死ぬのは恥ずかしい
なので気合を入れる

いまいちよくわからないセツネに少年は溜め息を吐く

「だからさっき答えただろ？なんでそんなことしなきゃいけないんだ？って」

「…深読みしすぎたミスった許せ」

あははと大きく笑う少年
少女に叩かれてようやくもとに戻る

「うん、お前面白い」

ニツコリと笑顔で国王であるセツネを指差しそう評価する

「自己紹介しようよ」

このままじゃ埒があかないと判断した少女は話を強引に本筋に持っていく

「そうだな。メリア国の国王のメリア・セツネだ。魔法使いでもある。歳は20歳だ」

国王と聞いて少女は軽く驚いているが少年は気にせずソファーに寝転がっている

「椿です。歳は66歳で魔法なんか使えません」

「は？」

見かけはセツネよりも幼い

なのに歳は三倍はある

しかし椿の目に嘘はない

「飛影だ。歳は69歳で魔法使いってか魔王だ」

「は!？」

この時代ですら誰でも知っている

魔法使いの王

魔法使いの中で最強の称号

最強の証明である

「魔王ってあの魔王だよな？」

「んゝ多分あの魔王ってか気配消したままじゃわからんかな？」

飛影が魔力を解放する

「な! !」

視認しても気配がなかった飛影
なぜ今まで気付かなかったのだとセツネは驚愕する

メリア国の最強の魔法使い

その存在がどれだけちっぽけだったのかが素肌で感じ取れた

「よろしくな、セツネ」

「よろしく頼む」

「お願いします」

三人が自己紹介を済ませ頭を下げるのは椿だけ

「そういえば」

「ん? なんだ?」

入ってきた時と同じように窓から出ようとしていた飛影が振り返る

「これでお前と俺は友達って判断でいいのか?」

少し不安そうな表情

だがそれがわかるのは椿だけである

普通の笑顔であった

「当たり前だろ？」

即答

セツネも飛影とは打算無しに面白そうだと思っていたのだ

微笑み返す

「そうか：じゃあしばらくはこの国にいるかな」

頬を掻いて少し照れくさい飛影

それは当然で飛影にとって友達というのはセツネが最初であった

また逆にセツネも友達は飛影が初めてである

「いいよーだけどご飯が美味しいところ希望」

脳天気なのか空気を読んだのか椿は笑いながら回答する

「次はどこから来るんだ？」

「面白そうなところから」

窓から来た飛影と椿

セツネ的には門から来ることを期待していたのだが
飛影のよくわからない返事

「楽しみにしてるよ」

笑うセツネ

次の日飛影が天井を破壊して現れるのを今は知らない

椿は予想できたのか苦笑いしている

「そういえばセツネ」

再び椿を背負い窓から飛び降りようとした飛影が振り返る

「なんだ？」

面白いやつだと思いながらセツネは机へと座る

寝る準備のためだ

「なんで男の格好してるんだ？」

「…」

口が勝手に開き閉じれなかった

啞然としているセツネ

メリア国の国王

メリア・セツネ

歳は二十歳

性別は女

そのことを知っているのは側近だけ

今は戦乱の時代

女が国王というだけで戦争をふっかけられる

そのためにセツネは男装していた

もともと美形であるため中性的な外見だったから誤魔化しもきいていた

だが僅か20分にも満たない時間しか会っていない飛影に見抜かれていた

驚愕で言葉が発せない

「…なんで？」

唯一振り絞って言葉にできた一言

「見りゃわかるだろ」

何気ない一言

その言葉にセツネは大爆笑していた

出会い（後書き）

誤字脱字

助詞の使い方

文章の違和感バシバシ指摘ください

戦争風景（前書き）

戦争って難しいです

戦争風景

飛影とセツネが会って4ヶ月

すでに飛影と椿は王の客人としてメリア城に住まわせてもらっている

それもこれも飛影が面白い登場をするからである

天井粉砕

床粉砕

扉粉砕

気配なく侵入

さすがに放置できないと判断したセツネは飛影と椿を招き入れた

「戦争？」

飛影がいつも通りに公務に勤しんでいるセツネの部屋に訪れてソファで寛いでいた際

セツネがぼそりと呟いていたのを飛影は聞き漏らさない

「∴相変わらずの地獄耳だな」

「一人言するやつが悪い」

ニヤニヤと笑いあう二人

いつもの光景である

「まあいいだろう。最近この国が物騒な雰囲気だろう？」

「そうだな。かなり物騒だ」
城に住んでいる飛影

廊下を歩いている時に慌てていたり
訓練もいつもより緊張感のあるものになっていた

「隣国のボジョンドが宣戦布告してきた」

「あらまあ」

セツネには緊張感がある

だが飛影には全く緊張感が感じられない

隣国であるボジョンドは大国である
メリアも一応は大国の部類に入るが
国土も人口も戦力もメリアとは比べものにならないほどである

「ふーんいつから戦争？」

「明後日だ」

やはり緊張感がない飛影

だが明後日と聞いて眼を細める

「俺に伝えるの遅くない？」

「客人に戦争をさせるわけにはいかないからな」

魔王の力があれば勝てる可能性があると考えているセツネ

だが魔王ではなく友達である飛影を戦争に参加させるという選択肢は存在しなかった

戦力

メリア国

34万5000人

90万2000人

確実に負ける戦である

「まあそんなことはさておきだ。お前城の奴らから心象悪すぎだぞ。何やってるんだ？」

無理矢理話を変えるセツネ

だがセツネ的には王としてではなく個人的にはこの話題の方が頭を痛ませる原因である

「普通の人間に興味ない」

ずっぱり切る飛影

嫌いではなく無関心である

「はあ…」

解決が大変だと再び頭を悩ませる

>>>>>>>>>>

二日後

メリア国とボジョンド国の戦争が始まった

攻められる側であるメリア国はすでに待機済みであり
ボジョンド国は進軍している

34万5000人がいる中でセツネは先頭に立っていた

どれだけ考えても籠城や地形を利用しても60万の数の差は埋まらない

一人一人の兵の練度はメリア国が高い

だからセツネの考えは簡単であった

60万を自分が殺せばメリア国は勝てる

馬鹿な案だがセツネは本気である

生き残る術が他にない

国王自らが先陣のメリアに対して

ボジョンドの国王は参加していない

それも当然でメリアのように強い国王は珍しく今頃メリアを侵略し

た後の計画を立てているはずである

「さて…行くかな」

槍を振り回し感触を確かめる

魔力による肉体強化

セツネの雷を操る魔法

《威雷》

雷を槍に纏わせる

「さてと…行くかあ!!」

軍より先にセツネは単身敵軍へと突っ込む

『えええ!?!』

当然メリア国の兵は驚愕の声をもらす

急ぎ王を守るために全員が進軍する

「ふっ!!」

セツネは敵兵まで100メートルの地点で立ち止まり

雷が纏っている槍を全力で投擲

横へと落ちる雷が敵兵を襲う

100人ほど蒸発させその空いた隙間に突撃

《威雷・雷槍》

雷単身の3メートルの巨大な槍を形成し

襲いかかる敵兵を薙払う

武器で防ごうにも実体がない雷は防御をすり抜け敵を殺していく

(よし!! 130人は殺した。あと6000回繰り返せばいい!!)

一人で戦局を揺るがすほどの実力者のセツネ

単身で突撃したのも敵兵の統率を乱し味方を有利にさせることもできる

《威雷・拡散》

先程投擲した槍に込められていた雷が拡散し周囲の敵兵を殺していく

(これで200人)

頭の中で数を数えながら向かってくる敵を殺していく

《威雷・電光》

上空に雷を放つ

それは雲に直撃し雷雲に変化する

「墜ちろ!!」

雷が降り注ぐ

次々と敵兵が炭へと変貌する

(400!!)

セツネは全力で敵兵が固まっている所へと跳躍

武器を構える敵兵とは関係なしに魔法を発動

《威雷・雷光》

セツネの全身に雷が帯電

敵兵の構えた武器に身体が触れる直前

雷の光が周囲を包み込んだ

光が止んだ時にはセツネと炭しかいなかった

地面に刺さっていた自分の槍を引き抜き再び雷を纏わせる

(500!!あと1200回だ)

確実に最小限の魔力消費で敵兵を殺していく

ようやく味方が敵兵達と交戦

敵兵の指揮は乱れていて完全にメリア国の士気が高い

「うおお!!」

セツネはそのまま敵兵全体の指揮を乱すために縦横無尽に駆け回る

「っ!？」

魔力の気配を感じセツネは全力で後ろに跳躍

着地時に《雷光》で敵を蹴散らす

「ちっ!!」

鎌鼬がセツネが先程までにいた場所を切り刻む

その現象が意味するのは魔法使いがいるということである

「今のを避けられるとは思わなかった」

上空から声が発せられる

淡々と抑揚のない言葉

セツネが声の主であり、攻撃してきた張本人を見て舌打ちをする

「ボジョンドの魔法使いの頂点だったか？名前は…ガジル」

がっしりと筋肉質な肉体

威圧的な殺意

強大な魔力

（厄介だ）

自分と互角

セツネもガジルも互いに実力を感じとる

ガジルは笑みを浮かべセツネは苦笑いを浮かべる

（味方に被害がでる前に対峙できたのはいいが…早すぎる。勝った後に戦える力が残らないぞ）

ようやく1500人程度潰せたのだが

目標まであと200倍

圧倒的に足りない

「まあそんなことを考えることすらできんか!!」

セツネは背後に攻撃を感じガジルへの警戒をしつつ

迫り来る幾数のナイフを叩き落とし

ガジルが魔法を発動したことを感知し雷をナイフを放った人物に放ちすぐさまその場から離れる

（ナイフを投げつけてきたのも私と互角か!!）

同等の魔力と自分の一撃が防がれた感覚で判断する

空中に浮いたセツネに鎌鼬とナイフが襲いかかる

「っ!!」

《威雷・落雷》

自身に雷を纏わせ自分ごと雷と落ちる

瞬間

セツネがいた場所に鎌鼬とナイフが通り過ぎる

「あっぶな!!」

落雷の衝撃で敵兵が炭に変化したことにも気にとめず

ガジルとナイフの投擲者がセツネを挟むように着地しその警戒をする

「ちい!!」

詰んだ

セツネは今のこの状況を一瞬で判断した

セツネの背後にいるのはボジョンド国の暗殺部隊の隊長のファースト

1対1なら負けはしないがガジルの相手をしながら暗殺部隊の隊長

を警戒するのは不可能である

ガジルが大きな威力の魔法を構築しはじめファーストは薄かった気配が更に薄くなる

（最後の足掻きでもしたかったがな）

最後に全魔力を込めてイタチの最後っぺでもしようとしていたセツネだがファーストがそれを邪魔するだろう

「はっ！！いいだろう！！キサマ等に私の命をくれてやる！！」

槍を地面に突き刺し王らしく覚悟を決めた

目を最後まで開けて己を殺す者を睨みつける

「さらばだ…誇り高き強大な王よ」

そして巨大な風の塊がセツネを砕く

瞬間セツネの視界が反転

急速なGが身体を襲う

「おい」

「は？」

生きていた

誰かに首根っこを掴まれている視界には風の塊で砕けた地面

驚愕しているガジルと初めて顔を見たファーストの姿も見えた

「今死のうとしただろ」

絶望的ともいっていい状況

セツネにとっても不可解な人物が登場している

「魔王は個人に肩入れできないって聞いたんだが…」

首根っこを掴まれながらセツネは飛影に問う

「は？んなルール誰が決めた？友達を助けることの何が悪い？」

セツネの視界に映るは魔法を構築しているガジルとナイフを準備しているファースト

二人とも魔王だとは気づいていないが強大過ぎる圧迫感に反射的に行動している

「お前…」

「とりあえずうるさい」

首根っこを掴まれていた感触が消え浮遊する

投げられたと理解するまで数瞬の時間が必要であった

その間にガジルは鎌鼬をファーストはナイフを放っていた

「俺の友達殺そうとしたろ」

抑えられていた魔力と殺気が爆発する

背筋が凍る

だがガジルとファーストの放った攻撃は飛影に直撃する

よく言う1＋1＝2

つまり強大な敵に勝つために力を合わせれば勝てる

などの言葉がある

だがその敵との力の差が圧倒的ならその言葉になんの意味はない

雑魚の攻撃はセツネの魔力による防御で通りはしない

だが60万もの数はもともと体力的にも魔力消費的にも無理である

つまりそれはセツネは60万もの兵が入れば打ち取れるのだ

つまりセツネにとっては兵は0ではなく0.1程の戦力なのである

ガジルも同じ程度

ファーストはそれより下

だが魔王である飛影は

「死ね」

粉塵の中

真っ黒な刀身が見えた

一瞬

ガジルもファーストも何が起きたか理解する前にファーストは切り刻まれた

「な！！？」

ガジルがそれを視認した時には全てが終わっていた

「遅いよ」

目の前にいた飛影の声が背後から聞こえた

それと同時に自身の身体がバラバラになるのを視認する

「…はは」

圧倒的過ぎて笑ってしまったセツネ

横から見ていたがギリギリ視認できた程度である

本人達は何も見えなかっただろう

「さてセツネ」

黒く黒い刀身の刀を鞘に納める飛影

「なんだ？」

「全軍徹底しろ。巻き込むぞ…」

「は？」

一瞬何を言っているかの理解が追いつかない

「だからあ！！この場の人間全部殺す。あとこの世界の戦争止めさせるから早く帰れ」

「なに…を？」

《炎舞・殲滅の矢》

夕暮れ時で少し空が暗かったが赤い光が降り注ぐ

「は？」

空が夕暮れ時だけでなく赤く染まっている

空一面に炎が埋め尽くされていた

「んじゃ五分後に落とすからセツネはそれまでにここから半径1キロは逃げといて」

笑いながら言う飛影

「待て！！敵味方関係ないのか！？」

「いやいやセツネは味方だから」

飛影にとってはセツネ以外は全員どうでもいい

だからこそその発言

「このアホ！！」

《威雷・瞬雷》

全身に雷を纏わせ

味方兵と敵兵が戦っている境界へと移動

「くっそ！！魔力消費が馬鹿だから使いたくなかったが」

《威雷・雷神》

味方兵と敵兵の区別をつけ雷が走る

敵兵だけを炭にする

『全軍撤退だああ！！5分以内に撤退しろ！！鎧が重ければ脱ぎ捨てろ！！殿は私が受け持つ！！今すぐ撤退しろ』

喉が枯れんばかりのふざけた大声はまだ乱戦になってなかった味方全員に響く

空の炎を見て啞然としていた味方兵は直ちに後退する

だが敵兵は敵の王自らの撤退命令に鼓舞してしまう

王の命令もあり空の炎もありメリア兵達はすぐさま撤退

それを追いかけようとするボジョンド兵をセツネが吹き飛ばす

そしてメリア兵はギリギリ奇跡的にも一キロ離れることができて

セツネも離れることができた

ボジョンド兵はほぼ飛影が言った一キロに入っていた

「さてと」

5分が経過

飛影の周りには血の海ができていた

「堕ちろ」

飛影の言葉を合図に空が落ちた

次々と赤い炎の矢が隕石のように落下して領域にいるモノを燃やしつつくす

ただの人間も魔法使いも関係なく炎は降り注ぎ殺していく

絶叫

悲鳴

逃げ惑う兵士

混沌が広がっている

「あゝしんどい！！炎舞は魔力消費激しいな：風の魔法でも覚えようかな：まあいいや、さて：と戦争をやめさせるかな」

そんな中で飛影は欠伸をして面倒そうな表情で歩いていた

2分後

全ての炎が降り注ぎ実に88万5309人のボジョンド兵全てが燃え尽きた

>>>>>>>>

その後飛影は全ての国の王に会い

戦争するなら滅ぼすぞ

と笑顔で宣言しにいき世界で戦争がなくなった

戦争風景（後書き）

誤字脱字あったらごめんなさい

自然の摂理（前書き）

...

自然の摂理

飛影が戦争を終わらせて

60年の月日が続っていた

セツネは国の城下町に遊びに行った際に出会った男性と二人して一目惚れし

めでたく結婚し

一子を授かる

男の子であった

名はリラコ

飛影が名付け親である

リラコも他の国に訪問中に一目惚れ

しかも二人してである

血筋だなあと飛影もセツネも笑いながら話していた

更にリラコも子を授かる

2子で男の子と女の子

男の子はリックス

女の子はクド

両方とも飛影が名付ける

飛影と椿がメリア城に居着いて60年

リックスが5歳でクドが3歳の時である

飛影は相変わらず普通ではない人間にしか興味を示さず

セツネ

リラコ

リックス

クド

の4人としか会話がない

嫁や婿にも興味を示さなかった

「おいセツネ」

「なんだ？ 飛影か」

婿である人間も他界し

セツネは80歳になっていた

よぼよぼでシワもあるが凜とした雰囲気は薄れておらず

元気そうな表情である

だが最近はベッドから降りることはなく寝たきりである

本人は

「めんどくさい」

の一言である

元来面倒が嫌いなセツネらしいと言えばセツネらしい

いつものように飛影が机に乗りながら遊びに来る

「全くお前は変わらんな」

少々呆れたようにセツネは呟く

飛影の魔王としての特徴で飛影は60年前と何ら変わらない姿であった

「身長のことと言うなあ!!」

セツネは昔を懐かしむように言ったのだが飛影にとっては

変わらない!!身長伸びてない

なのだ

「馬鹿さも変わらん」

「お前もだろうが、身体は老いても変わってないよ」

飛影はぶっちゃけ外見はどうでもいい

中身が面白いかだけなのだ

「はっ!! ありがとな!」

嬉しそうに笑うセツネと飛影

毎日がそんなである

飛影がいきなりこの国を世界一にしようと言い始め

そのためにセツネは面白そうだからと飛影と共に活動していた

結果60年経ってようやく何でも世界一の大国メリアへなったのだ

「さて飛影」

「ん?」

退屈そうに最近会得した風の魔法《風華》で浮いて転がって遊んでいた飛影にセツネは声をかける

「お前まだ普通に興味が無いのか?」

「? 当たり前だろ?」

何食わぬ顔で即答する飛影

あまりにも予想通りすぎて溜め息をつく

「お前怖がられてるぞ」

60年飛影は城にいるが

全て無視

魔王だということは知られているので従者も兵士も怖がっていた

「どうでもよくね？」

「相変わらずの馬鹿だな」

どうしようもない飛影

セツネはよばよばになった腕で飛影の頬を引っ張る

「にゃんふあよ」

ただのほっぺ

魔王とは思えないただの子供のような肌

「お前と会ってから退屈しなかったぞ」

愛おしそうに飛影の頬を引っ張るのを止め頭を撫でる

「俺もだ」

飛影は空中で胡座をかいてセツネと向き合うように浮いている

「お前が戦争を止めに来た時…本当に驚いたぞ」

「戦争ってかセツネを守るためにだな」

飛影にとってはあの戦争の双方合わせ120万強の人間よりもセツネ一人の方が価値があった

「お前はつくづく馬鹿でアホだ」

「セツネはアホで馬鹿だな」

笑いあう

「他にもこの国を世界一にしようとか言い出して」

「面白いことしたいじゃん」

呆れ笑いのセツネと心底笑っている飛影

「まあ息子も生まれて孫も二人生まれ、国王としては最高の仕事を
したと思ってるよ」

心底楽しい笑み

80歳のセツネだがその笑みはとても美しいものだった

「その通りだな。お前を馬鹿にするやつは必ず殺してやる」

ポンポンと頭を叩く飛影

「国王として：親としては仕事を果たした！！」

飛影の腕を掴み老体に鞭をうち起き上がる

「んあ？」

楽になるように飛影は風華を使いセツネを支える

「だが最後に大仕事がある。寝る暇はない！！飛影手伝ってくれるか？」

「当たり前だろうが」

セツネの本気の眼に飛影も本気で頷く

ニヤリとその瞬間セツネは意地悪い笑いをする

「言ったな！！ようし約束だぁ！！せめてメリア国の人間に対しては私と同じように接しろ！！」

約束は破らない

有言実行する

その二つを絶対を守る飛影をセツネは知っている

「は?…はあああ!?! ちょっと取り消せ!」

「アハハハ!?! 馬鹿者が!」

アホみたいに笑うセツネ

その顔は60年前に戻っていた

「ちょっと待てええ!」

「約束は守れよ飛影…親友からの最後の約束だ」

笑っていたセツネが急に真面目な表情になっていた

「…わかったよ親友」

しやうがないと首を縦に振る飛影

「さてと!! やることもなくなったし!!」

飛影の眼には若かりし頃のセツネが映っていた

「じゃあな親友」

「ああ親友」

二人して60年前のように笑い合う

「うん良い人生だ」

笑いながらセツネは逝った

「…」

飛影はセツネの髪を優しく撫でる

「……こっちこそ良い60年だったぞ…」

二人以外誰もいない部屋に小さな呟きが響いた

>>>>>>

一週間後

飛影が城の廊下を歩いていた時であった

目の前には自分の身体よりも大きく積み重なっている荷物を危なげな足取りで運んでいる侍女がいた

飛影が見てる間にその侍女はずっこける

「おい」

「へ？は？ひゃ！？」

新人の侍女は荷物も自分も床についていないことに驚いて飛影に話しかけられたことに更に驚いた

「危なかしいから運んでやる。どこまで運べばいいんだ？」

飛影は風華の風で荷物も侍女も浮かばせたまま問う

「ええ！？えっと！！倉庫です！！」

「あいよお」

飛影はそのまま運ぶ

これが飛影がメリア国の人間に話しかけた最初の一人である

>>>>>>>>>>

「とまあこんな感じじゃ」

「∴約束なのかあ」

喉を潤すセリエ

飛影の過去に感傷に浸る火月

「セツネ女王との約束を今も守ってるのはいいんじゃないが、そもそもセツネ女王は飛影が普通の人も仲良くしてほしいから約束を取り付けたにも関わらず改善されておらん」

呆れすぎて溜め息すら出ず髭を撫でる

「まあ兄ちゃんだからな」

「儂も最後にやろうかの」

「あはは」

年齢的にそれは冗談に聞こえないので火月は愛想笑いを浮かべるしかなかった

自然の摂理（後書き）

セツネは書いてて楽しかったですね

レギュラーにしたいくらいです

ただどうも感動って難しいです
次はエリアの話です

舞踏会にて（前書き）

誤字脱字ありましたらご指摘お願いします

舞踏会にて

メリア・エリア

メリア国の王女

オドオドしながらパーティーの直中にいる

場所はメリア城である

今回はメリアの国が誕生した日なので盛大に他の関連国も呼びパーティーを開いた

主賓は当然セリエとエリアである

エリアに言い寄ってくる者達を警戒しているセリエだが

当然国王として他国の王に挨拶などをしなくてはならない

セリエが離れた瞬間

ハイエナのように男二人がやってきた

「…」

親子らしく一人が私貴族ですと言わんばかりの服装で

息子は息子で美形で優しい笑みを浮かべている

「これはこれはエリア姫、本日はお招きありがとうございます」
白々しくエリアを今見つけたような口振りで親の貴族が接近する

「…いえ…フリーエ公爵もきていただきありがとうございます」

物凄く逃げたい

エリアはそんなことを考えながら応対する

「初めましてエリア姫、私はフリーエ・フタハと申します。良ければ一曲どうですか？」

爽やかな笑み

美形と相まって眩しいくらいである

「えと…今そんな気分ではないので」

一刀両断

頭から足まで全てを断る

いやエリア的には断ったつもりである

だが今回は睨みを効かせるお父様の飛影がないことを考えていない

「そ…そんなこと言わずに一曲だけで良いので」

おそらくフタハは不自由なく暮らしていたのだろう

父親の位

美形

二つの要素があり断る女性はいなかったのである

（…助けてくださいお父様！！）

「いえ…本当にそんな気分ではないので」

早く切り上げて部屋で紅茶を飲みたい

エリアの気持ちはそれだけである

「そこまでご気分が優れないのであれば休憩所までお送りします」

手を差し伸べるフタハ

フリーエは息子の邪魔をしないようにどこかへ行ってしまった

「いえ…気分は悪くないです」

「では一曲だけ」

手を差し伸べたまま

あまりにもしつこい

うんざりしてしまう

（お父様あ…）

飛影に心の中で助けを求めるが奇跡は起きない

逆に飛影の顔を思い出したエリアは安心して微笑んでしまう

それをOKだと思ってしまうフタハ

「良かった。では一曲だけ」

エリアの手を掴もうとしたフタハ

するりと避け一步距離をとるエリア

飛影が親バカを発動して無理矢理触られることがないように反射で避けて距離をとることを覚えさせたためである

「えっと…姫？」

困惑するフタハ

フタハ的には承諾したと思っていたのだ

「…」

（お父様ごめんなさい）

再び近づいて手を差し伸べるフタハ

エリアは心の中で謝罪する

「お父様より強いのですか？」

「え？」

お父様

エリアを知る者でこの言葉の意味を知らない者はいない

メリアの姫であり魔王の娘

それがエリアのことである

だからフタハもお父様の意味を理解している

つまりエリアの問いは

魔王よりも強いのか？である

「∴」

即答できない

即答するというのは

「はい」だったら魔王よりも強いことを示す

魔王が居着いているメリア国でそんなことを言う人間はいないだろう

では逆に

「いいえ」と答えるするとエリアの期待に添えないことを証明してしまう

「いいえ、適いません。ですが必ず貴女の父上を超えてみせます10年20年かかってでも必ず！！それではダメですか？」

彼的にはベストな答えだった

しかし近くで見ていた従者のコレットがその言葉で青ざめる

「…失礼ですけどおいくつですか？」

エリアの雰囲気が変わる

「今年で18になります」

だが気付かないフタハ

「武道の稽古はどのくらいの周期で？」

「週に三回。国王の護衛に教わっております」

物凄く冷めた目でそれを見るエリア

後ろであわあわと慌てている

貴族と大国の姫の会話に混ざることとは許されない

だがさすがに人死にはまずいと判断したコレット

「ひ…姫様落ち着いてください」

「なんだね君は？私は今姫と大事な話をしているんだ」

制止しようとしたコレットをフタハは手で止める

彼は今上手くいっていると絶賛勘違い中である

（このアホ貴族く！！あゝ飛影さんがいたら良かった…）

諦めたコレット

好きにさせて痛い目にあうのも勉強だろうとコレットは頭を下げて
避難する

周りの従者もそれに気づいてさり気なく誘導する

フタハの親も上手くいって気をきかしているのだと勘違いしている

「その週に三回の稽古での時間はどのくらい何ですか？」

「4時間ほど行っています」

「…」

あまりの努力ぶりに声がでないのだろうと勘違いしているフタハ

「お父様を舐めてるのですか？」

声が1トーン程下がる

避難は完了済みである

「その程度の努力とも呼べない遊びの範疇でお父様を超えとおっしゃったのですか？」

週に3日

それも4時間程度

今までずっと飛影を見ていたエリアは父が毎朝5時に起きて毎朝8時まで訓練していることを知っている

暇な時は一日中訓練していることも知っている

だからその程度で父を抜くというフタハの慢心に怒りを覚える

「…」

《廻眼》

エリアの眼が赤く光を放つ

「ひっ!!」

フタハが強大な魔力にびびり一歩後ずさるが遅い

エリアの魔法の一つ廻眼

読んで字の如く視界に入ったモノを廻す

力での抵抗は不可能で純粋な魔力差がなければ防ぐことは叶わない

フタハの腕が意思とは関係なく廻り始める

「馬鹿者があー!!」

「ひゃー」

怒鳴り声で驚いたエリアは魔法を解除してしまう

ようやく騒ぎを理解したセリエである

「お祖父様」

「殺す気か？エリアなら拳で充分じゃろ？」

ずかずかと歩き二人の間に割って入る

セリエがもう少し遅ければフタハの右腕はもげていた

「お父様を侮辱する方に触ることは致しません」

メリア中の常識

飛影とエリアの親子は

親バカとファザコンである

「なんか儂疲れた…ってか何故止めないコレット？」

ビクゥとセリエの視線がコレットを突き刺す

「え…と…まあ自ら死にいくのならいいかな」と思いまして」

目を逸らして返答する

その視界には腰が抜けて立てないフタハがいる

「…お前飛影に似ときたな」

「…嬉しいような悲しいようなですね」

複雑な表情のコレットである

>>>>>>>>>>>

後日談

その件以降

エリアを誘う者の数は変わらないが

「お父様より強ければ」

の一言で全て撃沈したのだ

>>>>>>>>>>>

「ということですよ」

ニコニコと微笑むエリア

「…」

「あ…ごめんなさい。お父様の名前を勝手に使ってしまった」
何も言わない飛影にエリアは勝手に名前を使ったことを叱られると
思っ

微笑みがいきなり落ち込んで悲しい表情へと変わる

親バカな飛影でも怒る時は怒るのである

「良かったあ…」

しかし飛影の返答はエリアの予想と正反対である

安堵の溜め息を吐く飛影

「エリアもいつの間にか成長して…お父さん嬉しいよ」

優しく頭を撫でる飛影

すると本当に嬉しそうに満面の笑みを浮かべるエリア

（…相変わらずこのお二方は仲が良いわね）

それを微笑んで見ている従者である

舞踏会にて（後書き）

エリアはかなり強いです

キャラも立ったので後悔はしてません!!

超遠距離監視護衛付デート（前書き）

ギャグってなんでしょうね…

超遠距離監視護衛付デート

それは最近のある日のことである

飛影がまだブレスレットによる力の制限を受けていない時である

リタが屋敷で寛いで休日をどう過ごすか悩んでいた

「おいリタ!! ちょっと来てくれ」

そんな暇なリタへと

どこか慌てた様子の飛影がやってくる

「:どうしたんです?」

慌てている飛影は珍しく

リタは周辺の魔力を調べる

だがいつも通りなんの問題もない

「リタにしかできないことだ!!」

飛影は慌てながら時間が惜しいのかリタの手を掴み意思に関係なく引っ張っていく

「:で?」

飛影とリタはある高層ビルの屋上にいた

「リタは秋野が彗のことを好きなのは知ってるな？」

「はい、見ればわかります」

恥じらう乙女の佐藤秋野

現在安倍川彗に恋道まっしぐらである

「今日は二人がデートするんだ!!」

「おお、秋野さんも頑張ったんですね」

彗とともに話すことすらできない秋野

デートに誘えるのは大きな進歩である

「いや、彗の方は俺と映画見ると思ってる」

「はい？」

つまり飛影の計画は

秋野の相談

安倍川先輩とデートしてみたい

飛影の返答

任せろ

から始まり

まず飛影はその日の内に彗を映画に誘う

というかそれは昨日の出来事だ

そして飛影は用事ができたからと言って断りのメールを今作成中

そして代わりに秋野をよこすから二人で遊ばせる作戦である

映画のチケットはすでに秋野に渡しており

彗は貧乏性なため必ず見に行くのである

「というわけだ」

「…はい、それで私はなんで呼ばれたのですか？」

「炎と風と光があれば彗達にバレずに監視と護衛ができるだろう？」

つまりは面白いからつけようということである

神としてそんなことはしてはいけないとリタは考えるが

「はあ…わかりました」

魔王補佐だから魔王の命令は聞かなければならないと自分に納得できる理由を考えて

私はしょうがなく飛影についてきているというオーラを放ちながらもやる気は充分である

「場所は？」

「あっちに一キロ」

飛影は指を指す

リタはその方向を向いて魔法を発動する

《キュリクレイ》

光を統べる魔法

リタにとっては壁や建物などに意味はない

リタの眼に彗が暇そうに待機しているのがはっきりと映る

「発見しました。視界を飛影と共有します」

魔法を再び使用し自分の視界を飛影にも見せる

「よしOKだ!!」

飛影の視界にもリタと同じモノが映る

「会話はどうします？」

一キロ先程度なら魔王や魔王補佐の飛影やリタは唇の動きで会話がわかるが

「ふっふっふ!!」

《風華》

飛影は風を使い彗の周辺の風を制御する

「これで会話は駄々漏れだ」

「さすが飛影です」

二人の表情はどこまでも真剣である

「そういえば飛影、秋野さんはこの場合服などを決めるのに時間が掛かりそうなイメージなのですか…」

どうしよう

こうしよう

と

鏡を見て服を合わせ次の服を合わせを繰り返している秋野の具体的なイメージがリタには想像できる

「その通りだ。だから俺は昨日の内に秋野が着る服をコーディネートトしといた」

親指を立てる飛影

「さすが飛影です」

同じく親指を立てるリタ

気まぐれで世界を滅ぼせる

絶対強者級の二人のチートによるデートの監視が今から開始される

「秋野からの合図を受信した」合図となるワン切りがされ

飛影は携帯を開き彗へとメールをする

「以降この作戦名を砂糖に変更！今回の目的は彗と秋野のデートを尾行しバレずにサポートと護衛を行う！！オペレーション砂糖開始する！！」

何故砂糖かは誰にもわからない

「イエスサー」

敬礼で答える

魔王と魔王補佐による豪華で強力な尾行が始まる

>>>>>>>>

【悪い！魔界でなんかトラブルあるらしいから今日行けなくなっちゃった（∧_∧）】

それが彗に届いたメールである

待ち合わせは10時00分

映画見て

飯食べて

遊ぶ計画を飛影が持ちかけてきたので

たまにはいいかと承諾した彗

Tシャツにパーカーにジーンズとラフな格好である

現在時刻9時58分

(まああいつ一応魔王だからな…忙しいのか)

彗の心は寛大で約束をすっぱかしている飛影も魔王だからしょうがないと納得する

やることもないので帰ろうと踵を返した時にメールに続きがあることに気付く

【追伸、悪いと思ったから秋野を呼んどいた】

(…あいつも大変だな)

「お待たせしました!!」

ちょうど良いタイミングで秋野が現れる

飛影がコーディネートした格好は最低限のおしゃれである
偶然か必然か彗と似てパーカーとTシャツにフレアスカートである

「早いな」

てっきり30分か一時間は待つと思っていたのだ

メールがきて5分後に到着したので驚いてしまう

「飛影先輩から9時00分に連絡来ましたから」

「何故その段階で俺に連絡しないんだあの馬鹿は」

待ち合わせは彗の家からも近いので9時00分に連絡をよせば余裕で二度寝ができたのである

「はは…まあ私も暇でしたのでちょうど良かったです」

ここまでの会話のパターンは予想通りで飛影が昨日作成した合流する際の会話パターンに記されている

そして

彗としては遊ぶ

秋野としてはデートが始まった

>>>>>>>>

「こちらキング！標的が無事合流！どうぞ」

「こちらゴッド！こちらも確認しました！どうぞ」

それを500メートル上空から見ている飛影とリタ

リタは意外と飛影と二人の時はノリが良い

ちなみにだがキングは魔王の飛影

ゴッドは神のリタである

さらに言えば通信をしているかのように会話しているが互いに隣にいる

「こちらゴッド、標的の近くに不良を発見。ナンパ目的だと見られます。このままでは標的と接触します」

「こちらキング、始末しろ」

「了解しました!!」

即答しリタは降下する

「って飛影!!」

雰囲気で即答したが当然直ぐに気付く

「さすがに殺すのはダメです!!」

「んじゃどうすんだ?」

「見えなくします」

《キュリクレイ》

500メートル下の人間の視界を少し変える

不良の視界から彗と秋野が消える

「良し！！標的が無事映画館に到着したぞ」

「こちらも確認。どの映画を見るのでしょうかね」

リタの問いに飛影はニヤリと笑う

「抜かりはない。昨日秋野に無料チケットじゃなくてタイトル指定のチケットを渡しておいた」

「さすがです。ただその間暇ですね」

映画中に動きはないため暇なのである

「その点も抜かりはないぞ」

何でも準備万端であった

>>>>>>>>>>

「そんなこんなで最後までバレずにデートをサポートしましたね」

「そんなアホなことやってたの！！？」

どこかやりきった表情のリタに思わず突っ込んでしまう

「面白かったですよ」

「…っていうかそれ超遠距離のダブルデートだね」

「へ？ ああそうですね」

指摘を受けて今頃になって気付くリタ

リタは飛影への恋愛感情はなく尊敬で構成されていた

「で？ 今回のオチは？」

「秋野さん彗さんの隣を歩いただけで緊張して会話が三回しかなかったです」

飛影の風華で聞き耳をたてていたので間違いない

「…」

「飛影が乗り込もうとしましたが私が妨害しておきました」

仕事人な表情のリタ

「…アホなこと好きすぎでしょ！！？ 絶対強者級ってみんなそうなの？」

溜め息が出そうであった

椿の知る絶対強者級の人物

飛影

リタ

リーベ

ダドマ

ギルギア

共通点はアホなことが好き

戦い大好き

の二点である

「…まあそうかもしれないですね」

否定ができないリタであった

超遠距離監視護衛付デート（後書き）

次は優希の採用されたらへんの話になります

優希の採用（前書き）

一話完結が…

優希の採用

今飛影達が住んでいる屋敷

その屋敷は一夜にして建った

もともとそこは公園だったが誰も違和感を感じることなくその屋敷は受け入れられた

これは二年前飛影が人間界に住み始めた頃の話である

「調子乗ってでかいの建てたなあ」

ダドマに作成してもらったとはいえそれを頼んだ自分でもビックリしてしまう飛影

「類は友を呼ぶだね」

無表情な少年が溜め息混じりにボヤク

褐色の肌の少年

Tシャツにジーンズと楽な格好である
名前は黒鋼

16歳程度の少年である

実年齢は興味ないから数えていないらしく

実年齢は不明である

「とりあえずでかいからメリア城みたいに従者の人雇わない？」

三人で住むには広すぎる

そう判断した椿が提案した

「それもそうだな」

実際掃除なら炎舞と風華を使用すれば一瞬で終わる

料理は飛影の腕なら不自由なく生活できる

しかし飛影も面白いやつがいたら雇いたかったのもあり椿の意見に賛成

「んじゃちょっと行ってくる」

飛影は思い立ったら直ぐ行動なタイプなので勢いよく飛び出していった

「ねえ椿」

「なに？」

「何かアホみたいなのが起これると思うのは僕だけ？」

意思を持ってから70年間一緒にいる黒鋼の予想

「大丈夫！私もそう思ってるから！！」

笑顔で即答する270年程一緒にいる椿

当然ながら二人の予想は当たる

>>>>>>>>>>

作ってきた

数時間後飛影が戻ってきて求人雑誌を持ってくる

黒鋼が受け取り渡された雑誌を見る

その後ろで椿が覗きこむ

嫌な予感をしつつ椿と黒鋼が赤いインクで囲まれている箇所を見る

従者募集中!!

面白い方大歓迎!! 人数制限なし、面白い方は即採用!!

料理、掃除、洗濯できる方

365日住み込み

週休2日制

月給150万円

食事と寝床の心配はいりません

採用試験は明日の朝10時00分から始めます

履歴書ご持参の上お越しください

場所は

「やりやがったよこいつうあああああ!!!!」

あまりの非常識っぷりに椿と黒鋼はその場で膝を付く

「なに月給150万円って馬鹿じゃないの!!!!!!?」

「明日って早すぎだろ!普通に一週間後とかにすればいいのに!!」
思い思いにそれぞれ突っ込みを入れる

「まあ明日の準備しようぜ!!面接なんてメリア城の従者の採用試験でしかやったことないからなあ!!」

笑いながらウキウキと会議室を面接室に変えていく

採用試験

メリア城の採用試験は当然難しい

その面接に参加していたのだから大丈夫だろうと椿も黒鋼も思ってしまった

>>>>>>

結果的に全て斜め上であった

まずあんなムチャクチャな募集にも関わらず月給150万に釣られて112人集まっていた

屋敷の中には入りきれず庭にも人がいる

面接が始まる前は椿と黒鋼で列を修正や整理券を配っている

主に屋敷内は椿

屋敷外は黒鋼が担当している

混雑を避けるためである

あまりにも人が多かったため飛影はメリア国からコレットを借りて
(拉致) 手伝いをさせている

こんなに人が来てしまったので急遽面接をグループ面接に変更した

5人づつで行っても23回

一回10分と仮定しても

230分

約4時間はかかると考えている椿

(うわぁ長丁場だなあ)

頑張ろうと思いつつ

まず最初の1〜5番が呼ばれる
面接室には二つ扉があり

入室用と退室用である

コレットが入室用から5人入れる

飛影は椅子に座りながら一瞥

「帰っていいぞ」

僅か二秒

まだ履歴書すら渡してもいないし自己紹介もせずに終了

『は!?!?』

さすがにキレ気味の者もいる

コレットは苦笑いしながら退室用のドアを開ける

「面白そうじゃない。以上」

「次詰まってるから早よ出ろ」

強大な圧迫感で何も言い返せなくなりそのまま退室

「コレット次」

「はい」

退室用のドアを閉め

次を呼びに行く

入室

二秒で却下

反感

脅して黙らせる

退室

この流れが定着し

コレットがもう入室と同時に退室用のドアに向かうようになり

56から60番目になった

この間

1から開始して11分が経過していた

「ん？」

入室して飛影は違う反応を見せる

「58番以外帰れ」

「へ？」

「は？」

『はぁ！？』

コレットがいつもと違う反応に驚いて思わず声を出してしまい
58番の少女が戸惑いの声を出して

今まで通りに他の者が怒りの声を上げる

「はよ帰れ」

飛影が脅し58番以外を退室させる

58番の少女が椅子に座り履歴書を出し受け取る飛影

「まず自己紹介頼む」

飛影の雰囲気がやんわりとした雰囲気に変化する

「えっと優希です。孤児院出身で名字はないに等しいです」

これが飛影と優希の出会いである

「んじゃ優希志望動機」

「お金です。給料良いですし仕事内容が得意ですし、住み込みなんです」

正直な優希

飛影は一つ頷く

「面白いから採用！！隣の椅子来い。コレット次」

あまりにも即決

戸惑いながらも飛影側

つまり採用する側の席に座る

結局飛影のセンサーに引っかかったのは優希だけであった

112人もいたが一時間も経たず終了した

椿と黒鋼は後処理や昼飯の買い出しにいき

飛影

コレット

優希

の三人が面接室にいる

「さあ恒例の質問タイムだ」

採用しないやつを聞いてもしようがないので

飛影はメリアの頃から採用した者を集めて質問タイムを行う

「コレットがいるからどんなことも答えられるぞ」

これも恒例である

「ハードル上げないでください！」

若い者に質問を答えさせて再確認や知識が足りない場合の良い勉強になる

「んじゃ質問でっす」

さっそく手を上げる優希

「名前教えてください」

ああと一度も名乗ってなかったことに気付く飛影

「飛影だ。名字は市原にするつもりだ」

明日から学校に通う予定の飛影今思い浮かんだ名字にして登録する

つもりである

「りょかいです!! 飛影さん」

なんだか楽しそうだと予想できて微笑む優希

その予感にあたる

双方にとって良いことに

優希の採用（後書き）

続きます

家族になった日（前書き）

見てくださりありがとうございます

家族になった日

優希採用から1ヶ月の月日が流れた

「暇だあああああああああああああ！」

ソファアーにゴロンと転がりサボっている優希

というよりもサボってるわけではなく

やることが無いのだ

現在の優希の仕事は

朝起きる

朝飯と弁当を作成

シーツを替える

服やシーツを洗濯する

正面玄関の掃除

干す

自分の昼飯

暇

楽すぎるのだ

庭の手入れも飛影がやるし

敷地外はどうでもいいし

使ってる部屋は各自で掃除するし

使っていない部屋は飛影が魔法でぱっと終わらせるし

本当に暇なのである

最初は150万円と聞いて
屋敷見て納得し
働いて暇すぎる

「ガーデニングでもしようかなあ」

この一言がきっかけで
意味不明な植物が生えることを今は知らない

「ひ！ま！だ！！」

ゴロゴロとソファから落ちて転がる

ご飯等もコース系やちゃんとしたモノを作るのかと思えば

朝飯はご飯に味噌汁に卵焼きでも許されるし
トーストにハムエッグでも許されるし
寝坊した時も卵かけご飯にして飛影に頭を軽く叩かれたが冗談の域
であった

夕飯も一般料理で良い

逆に凝りすぎると

何か良いことあったと思われはしゃぐ

更に土日は休みなのである

150万円貰えるかが既に怪しい

土日は飛影が料理を作ったり

みんなで外食などである

「家族…かあ」

まるで家族のようだと思って微笑む優希

一度も家族がいた記憶がない

今回ですら従者として雇われているだけ

「鬱だあ!!」

ドーン！

優希の叫びと共に正面玄関のドアが勢いよく開く

「ってひゃあ!!泥棒ですか!？」

この時の優希は知らないが飛影が家を空けている時は必ず魔法で遮断しているので泥棒は入れない

「家主だアホ」

学校をサボってきた飛影が帰ってくる

時々

何故か優希が憂鬱になる時に限ってサボってくる飛影

「また学校サボリですかあゝ？ いけないですよゝ」

ニヤニヤと笑う優希

「今日是用があるからな」

ゴロゴロと転がっている優希を風華の風で立たせる

「ほい、1ヶ月ご苦労様！！給料じゃ」

150万円の札束を手渡しする飛影

「…マジに貰えるとは思わなかったです」

ぱぱっと確認すると全部本物である

「約束は守るぞ？」

「いや…仕事内容と一致しないんですけども！！」

この条件での仕事ならせいぜい20万である

「????…多くて嫌なのか？」

「いえ！！超嬉しいです！！」

がっしりと札束を掴んで離さない優希

「よし！！んじゃあ1ヶ月記念を祝って遊び行こうぜ！！」

「え？ええ？」

優希の返事など関係なく飛影は優希の手を取り引っ張っていく

「ちょっ！！せめてお給料しまつてからが！！」

その手には150万円

財布に入る金額ではない

「それもそうか」

飛影は手を離す

そそくさと優希はお金を部屋に置いていく

部屋でさえもおかしいのだ

好きな部屋にいいぞと言われ適当に選んだ部屋は飛影の部屋よりも若干広い

家具なども飛影のお金でみんなで買い物に行くほどである

優希は部屋まで走って戻りベッドの上に札束を投げる

「お待たせっす！！」

「お待たされた」

「ええ！！？」

「待たせたいうからだ」

軽いコントのような会話をかわしながら飛影は再び優希な手を掴む

「1ヶ月記念だから、遊びいこ」

飛影がサボっている理由として優希の1ヶ月記念日ということがある

「りょかっす!!」

>>>>>>>>>

優希と飛影はウィンドウショッピングを楽しみながら過ごしていた

飛影が立ち止まった先は役所

「本当は気付くまで放置しようかと思ってたけど、気付かなそうだからなあ」

「?」

飛影が意味深なことを言うが優希はなにかがわからない

「世界の二割をくれるんですか!?!」

魔王や魔法の存在を知った優希は冗談混じりにふざける

「む…そっちのが嬉しかったか!?! 失敗したな…」

しかし本気で悩む飛影

世界の二割程度なら

絶対強者級の飛影ならば可能である

「いや…嘘ですよ!!」

少し慌てて否定する優希

本当にやりかねないのである

「…冗談だ」

ニヤリと笑う飛影

「ムム!? やりますねえ」

ニヤニヤと微笑みあう両者

何かやろうとしている表情

役所の目の前

「そういえば…」

先に仕掛けたのは優希

この勝負

どちらが相手の弱点を攻撃できるかの勝負である

「椿さんが次学校サボったら説教しようと言っていましたよ」

「…マジ？」

椿の説教

飛影はそのフレーズを聞いた瞬間
顔色が青くなる

想像だけで飛影をここまで追い詰める椿の説教

その恐怖は計り知れない

「俺さ：ワイン部屋作っただよ」

「…あゝ？」

飛影の反撃

心当たりがある優希
眼を逸らす

「全部で222本あったんだけどさあ！！」

必死に飛影と眼を合わせないようにする優希

「いつの間にか212本になってただよねゝ！！」

「…不思議ですね！」

誤魔化そうとする優希だが
全て分かってるぞ
という眼で見られている

「…ごめんなさい」

「分かればよし」

飛影の勝利

そんな馬鹿なことをやっている内に飛影は手続きを済ませていた

「はい」

一枚の書類

飛影から手渡される

優希が見るとそこには自分の名前が書いてある

市原 優希

「え？」

「プレゼントだ。迷惑だったら言えば良い」

孤児として育った優希

初めて名字ができた日である

>>>>>>>

「飛影にとっては従者とかはどうでも良かったの」

その日に優希は椿と話していた

「私も黒鋼君も飛影も家族。優希ちゃんも家族にしたかったんだよ」

「…っ」

飛影が従者を雇おうと思っていた理由はそれだけであった

「改めて、自己紹介私は市原椿です」

「…私は市原優希です！！よろしくっす」

こうして

優希は市原と名字が付き

家族の一員になった

翌月

給料ではなくお小遣いを貰い

屋敷を改造したり

ガーデニングをする

>>>>>>>

「ヤバくないですか!？」

「…そうね。面白かったわ」

話が終わるころには優希はテンションが最高

お酒も気付けば5杯ほど飲んでいた

「…そういえばリーベさんは飛影さんといつ出会ったんですか？」

気になってはいたが今まで聞いてなかった優希

つい最近居着いたのである

リーベは既に10杯以上飲んでいるが少し頬が赤くなっている程度で酔ってはいない

「…もう少ししたら話してあげるわ」

思わせぶりなことを言う

「こんな時間から酒って馬鹿やってんな」

リーベの隣に飛影が座る

店員が張り切り始める

「あら飛影？でもあなたも飲むつもりじゃない」

「まあな」

店員が神がかった速度で飛影にビールを届ける

「私も飲んでいいのか？」

優希の隣に火月が座る

基本的に優希が飲んでいるのもスルーしている飛影

「いいぞ」

即答である

「…まあいっか」

「優希さんも飲んでますし」

続いて椿とリタが座る

全員集合である

「飛影はどこ行ったの？」

全員に酒が来るまでは我慢しているリーベと優希

「城とセツネの墓参り」

飛影が今日メリアに来た理由の一つでもある

今日はセツネの命日である

「そこで椿とかと合流した」

椿もセツネと仲が良かったので動物園の後にリタに付き合ってもら

い墓参りに行った

そこで飛影と合流し

どうせだからということでも魔力を感知しここにいる

「酒持ったな！？ んじゃ家族が増えたことを祝して乾杯」

『乾杯〜』

家族で卓を囲み酒をあおる

火月の周囲は酒が強すぎるせいもあり

火月がお酒に慣れていないこともあり

火月は開始一時間で潰れた

家族になった日（後書き）

思いつきで話書いてるんで

次の話何にしようか：悩めます

特別入学初日（前書き）

土日だと更新遅くなります

特別入学初日

「初めまして、今日から3日間特別入学でお世話になります。メリア・エリアです」

東東高校

飛影とリタと慧がいるクラスに異世界からの転入生がやってきた

きっかけは先日のことである

エリアが学校に行ってみたいと言漏らし

飛影の耳にそれが入ったことがきっかけであり原因である

エリアの勉強は教育係が教えているが学校に行ったことはなく、憧れていたのだ

しかも滅多に言わないエリアの願望である

飛影は急いでダドマに頼みこんだ

ダドマも面白そうだからと即答でOK

ただ王女としての地位があるエリアには一年や1ヶ月などの長期間しかも異世界に滞在はできない

なので飛影とダドマが考えた末

特別入学ということで3日間だけ学校に入学させることになった

そして記念すべき最初の自己紹介

エリアは可愛いので男子達のテンションも上がる

エリアのことは某国の王女ということは伝えているので
女子からも憧れの視線が送られる

教師は何故この問題児がいるクラスに転入させるかが理解できず内
心焦っていて

失礼があって国際問題になったら責任がとれる気がしないのだ

「メリアさんの席はあそこだ」

学園長から一般の生徒のように扱えという命令が下ったので教師は
生徒と同じ扱いで話す

席はもちろん飛影達とは反対で視界に入らない右前である

その隣の男子がガッツポーズをする

「えっと…」

エリアは逡巡する

父の隣がいいのだ

しかしそんなことは言えずに困った表情で飛影を見る

「∴」

飛影の行動は早かった

立ち上がり

机と椅子を

自分とリタの間へと移動させる

あまりにも自然で誰も何も言えなかった

親バカっぷりにリタは小さく溜め息を吐く

しかしエリアは嬉しそうに微笑み父である飛影の隣に座る

教師が啞然としていて

隣に座る筈だった男子は飛影を睨む

「ありがとうございます」

エリアは王女でよく交流の場に参加するが
人見知りの傾向が強い

何より父の隣で授業を受けていたのである

花のような微笑み

それだけで彗は一つのことを理解する

飛影の知り合いだと

「さて、では授業を始める」

教師が咳払いと共に授業を開始する

それと同時に飛影は席を立つ

サボるためである

「…?…どうしたのですか?」

しかしそれを純真無垢な瞳で飛影を見る

エリアにとってはせつかくの最初授業である

「…」

巻き戻し

飛影はそのまま後ろに下がり椅子に座る

教師が大口を開けて驚いていた

あの市原飛影が大人しく授業を受けようとしているのだ

「あ…うん…では今から数学を始める」

できるだけ真面目な表情で授業を受ける飛影

「あ…教科書ないです。お父様見せていただいてもよろしいでしょうか？」

特別入学という処置で教科書は一冊も持っていないエリア

「あ…」

しかし飛影が教科書など持っているはずもなく

机の中は空

ロッカーの中には遊び道具が詰まっている

教科書は飛影の部屋のどこかで埃を被っているだろう

「…リタよろしく」

飛影はリタに全てを任せた

というよりも丸投げした

「はあ」

大きな大きな溜め息

リタは机の中から教科書を取り出し飛影に手渡す

「サンキュ」

「補佐ですから」

飛影の感謝でリタは誇らしい表情になる

肝心のリタは本を取り出し読書を始める

「せめて教科書くらいは開けよ」

呆れた彗は教科書をリタに渡す

構図として4人仲良く机をくっつけていて教科書二冊を見ている

当然ながらエリアは飛影と見ている

彗はリタと

「彗さん、意外と授業真面目に受けてるんですね」

リタが彗の教科書を見ると蛍光ペンで色分けされ

勉強している雰囲気が出ていた

「お前らが不真面目なんだよ」

いつも何かしらで遊んでいる二人と違い彗は真面目である

「お父様文字がわからないです」

ニコニコと本当に嬉しそうに微笑みを浮かべている

喋るということは魔王の魔力がこもっている何かを持っている勝手に翻訳されるが

文字は翻訳されない

「ん」と

飛影は興味あることには異常な記憶力を発揮する

日本語の読み書き喋りは1ヶ月でマスターした

飛影は内容を小声で指で読みながら指して教える

問題があるなら彗からルーズリーフを貰い魔界の言葉で書いてわかりやすく教える

授業中の態度もなにも授業中なにも聞いていないが

飛影はテストの点数は優秀

リタも全国模試や学年テストでは一番である

本人曰わく

「飛影の補佐ですから完璧にしなければ」

ということである

「あゝ市原、この問題解いてみろ」

初めて授業を真面目に受けている飛影に教師が問題を解かせようと

する

「…」

しかし無視

目もくれない

「お父様…あの問題の解答を答えなければいけないらしいですよ」

少し困惑した表情のメリア

「ん？あの問題は $x < 1$ 」

一瞬

問題をチラリと見て飛影は答える

「…正解」

「凄いですお父様!!」

小声で尊敬の念を飛影に送る

父に対する尊敬度がカンストしていた状態のエリア

カンストの上限が999から99999にアップ

しかし速攻カンストした

そんなこんなで一時間目終了

特別入学という異例

外人に見えるエリア

可愛さ

某国の王女

何よりも飛影と仲が良さそう

この5点

とにかく目立つエリアは速攻で机を囲まれ質問攻めにあう

「どこの国から来たの!?!」

「なんで市原君と仲良いの!?!」

「髪綺麗!! どんな手入れしてるの!?!」

「なんでこの学校に入学!?!」

「日本語上手いよね!?! やっぱり勉強してたの!?!」

「可愛い!」

「学校の中紹介しようか!?!」

「遊びいかない!?!」

「殺す」

「飛影落ち着いてください!!」

「王女ってどんなことしてるの!?!」

「趣味は!?!」

「特技は!?!」

「好きな食べ物は!?!」

「好きな人いる!?!」

「あう」

いきなりこの数の質問をされて目が回ってしまう

ちなみにエリアを遊びに誘おうとしたのは男子で

本当に殺そうとした飛影をリタが必死に抑えている

「一つ一つ手を上げて質問するって形が良いんじゃないか？名前を
言ってから質問すれば自己紹介もできるし」

それを見ていた彗が名案を提供

クラスの連中は全員その案に賛成

「安藤詩織！どこの国から来たの？」

「秘密です」

この質問は飛影と事前に予定していたパターン通りに答える

「斎藤健司！趣味は？」

「…庭で紅茶を飲むことです」

少し悩み答える

周りからやっぱり王女だあなどの声もあがる

「福田里沙！髪綺麗！！手入れ方法を教えて」

「手入れとかあまりしないので家系ですかね」

後ろで小さく頷く飛影

セツネも髪の毛の手入れなどしたことはないが綺麗なままであった

「加藤正太郎！好きな人っているの？」

「…お父様です」

あまりの攻撃力に飛影が倒れる

「ぐっはあ！！」

「飛影が死にましたあ！！」

飛影とリタのコントは誰も気付かない

ただ彗が突っ込みを入れたくてうずうずしていた

「渡辺有里！！なんでこの学校に入学？」

「えっと、私のお祖父様とおと…飛影様が仲が良くこの学校に特別入学することになりました」

この質問もパターン通りで

飛影に視線が集中する

しかし当然のように飛影は無視

リタと喋っている

周囲がざわめく

「えっと…お祖父様って」

「現国王です」

ざわめきが増す

国王と知り合い

相当な地位が無ければそんなことは起きない

飛影に対する評価が不良から凄い偉い人に変化した

「んじゃ改めて川部三木!!特技は？」

「ダンスです」

おお…とお姫様のような特技に再びざわめきが戻る

交流の間では飛影と踊っている

飛影も椿も道楽で踊りを極めている

その飛影と踊っていたり教えてもらっているエリアにとって立派な特技である

まだ質問したい者はいたが休み時間が終了する

様々な質問がその後の休み時間に行われ

優希の作ったお弁当を飛影とリタと捰と一緒に食べ（他の者は入れなかった）

飛影とリタに学校を案内してもらい

授業を受けて

1日目の特別入学は終了した

帰りも一緒に帰ろうと誘われたが

飛影と一緒に帰ることがしたかったため誘いを断った

飛影としては嬉しさ半分と

社交的にもなって欲しいため悲しさ半分である

平和な1日が終了する

特別入学初日（後書き）

誤字脱字ありましたらよろしゅう

特別入学二日目（前書き）

平和的です

特別入学二日目

「あ…やばい！」

飛影とリタとエリア

三人が

というよりもリタが来たことを視認した彗は焦る

「？」

リタが視線を彗に向ける

彗は飛影の机の付近にいて

飛影の机には中傷的な落書きに机の中にはゴミが見えていた

彗の手には雑巾

落書きを消そうとしていたのであろう

既に生徒達が席についていた

飛影達は最後である

「…どういことですか？」

リタが静かに圧力を彗にかけながら近づく

「ちょ…」

心臓が圧迫される

「リタ!!」

飛影が無理やり頭をひっぱたいてリタを止める

「落ち着け」

「…ごめんなさい、彗さん、事情を説明してもらっても?」

リタも彗も深呼吸を繰り返しなんとか落ち着きを取り戻す

「俺が学校来たらこんな感じだ」

飛影はのほほんとどうでも良いような表情

リタは拳を握り締め怒りを抑え

エリアも俯いている

「犯人はわかんねえ」

彗としてはリタが怖い

直接怒りをぶつけられてはいないが

圧力が

先程よりはましだが圧力が怖い

「これってイジメ…なんですか？」

エリアはそれがわからない

「だろうな」

エリアの問いに慧が肯定する

「う…わ」

エリアからも圧力が発せられる

（え！？なんで俺こんな目にいいい！！！！！！？）

「リタ！！エリア！！落ち着け」

頭を抱える飛影

「ですが飛影！！こんなこと許されるハズがないです！！」

かなりキレているリタ

今のリタなら少しスイッチが入るだけでこの学校が崩壊しそうである

「…私も同意見です！」

滅多に

いや

飛影からすれば初めて怒っているエリア

更に頭を抱える飛影

「…犯人見つけたらどうすんだ？」

隼のちょっとした疑問

もしかた答えはわかっているつもりだが気になってしまう

『殺します』

即答でハモった

笑っているが目は本気である

「ストオオオッ！！落ち着け！！マジで！！おい飛影からもなんか言え！！っていねえええ！！」

気付くと先程まで頭を抱えていた飛影が消えていた

「それに大体飛影からしてみればミジンコに喧嘩売られたみたいなものだろ！？本人もそんな気にしてないだろうし大丈夫だって！！」

なんとか平和的解決案を探す隼

しかしリタは首を振る

「ミジンコであろうと飛影に喧嘩を売ったのならどのミジンコかわからなければ種を滅ぼします」

神であり魔王補佐であり気まぐれで世界を破壊できる絶対強者級の
リタ

その彼女が犯人が見つからなかったら人間という種を滅ぼすとも言
っているのだ

「落ち着けえええ!!深呼吸だ!!」

冗談には決して聞こえない

世界中の人間が滅ぼされることはないかもしれないが

確実にこの学校の人間程度は滅ぶ

「大丈夫です。物凄く落ち着いています」

笑顔のリタ

その手には神の金鎚が握られていた

「どちくしょおお!!滅ぶ決定じゃねえか!!」

「…大丈夫ですか?」

頭を抱える彗にエリアが声をかける

「…エリアって魔法使い?」

すぐ傍にいるエリア

魔力の動きが魔法構築の動きなことに彗は焦りながらポツリと呟く

「はい：お父様に：飛影様に教えてもらいました」

同じく呟いて微笑みを浮かべる魔王の娘

（あいつが前に言ってた娘ってこいつかよお！！）

既に魔法《廻眼》は構築が終わりいつでも攻撃できる状態であり目の色がうつすらと赤になる

二人とも自身よりも強いことは魔力で判断できる

（今すぐこの学校から逃げたい！せめて保健室に行きてえええ！！
ってか犯人殺してええ！！）

彗の心の叫び

彗がこれだけの苦勞をしているのは

90パーセント犯人

10パーセント飛影

のせいである

彗の胃がキリキリと痛みを発しているのはストレスによるものである

授業は既に始まっているが二人の圧力に話すことも移動することもできない

「ああああ!! もう飛影はどこ行きやがった!!?」

「呼んだ?」

胃を抑える彗の背後

いつからいたのかがわからない

エリアは驚いていて

リタは普通の表情

「これでオーケー」

空き教室から机と椅子を持ってきた飛影

汚い机と椅子を片付けて飛影は綺麗な机と椅子を設置する

「んで」

机と椅子を窓に投げる

「疲れた疲れた」

新しい椅子に座り一息つく飛影

「リタもエリアも座る! いいか? 今回俺はミジンコに噛まれた…その程度だ」

飛影が無理矢理リタとエリアを座らせる

しぶしぶといった表情で大人しく座る

（俺同じこと言ったけど！？）

反応の違いに軽くショックを受ける隼

「さて：と、リタ、メリア頼んだ」

飛影はリタとエリアを座らせてどこかへ行こうとする

「？」

寂しそうな瞳で飛影を見るエリア

飛影は一瞬身体の動きが止まるが首を振る

「ちょっと大事な話があるから悪いな」

優しくエリアの頭を撫でる飛影

まるで猫のように嬉しそうに笑う

ちなみに授業中である

全員が注視している

「んじゃ」

飛影は手を振り教室を出ていく

「…一つ聞いてもいいか？」

「はい？」

固まっていた教師が口を開く

「どういふ関係で？」

教師の疑問に生徒達が一斉に頷く

「お父ムグ」

ついぶっちゃけようとしていたエリアの口を塞ぐリタ

「プライベートの詮索はダメですよ。」

にっこりと笑うリタの圧力で頷くしかない教師

リタ的には完璧なサポートであると思ったのだが

当然ながら怪しまれ違う想像をさせてしまう

クラスでの想像は二つである

飛影の正体か

幼なじみ

もしくは

兄

の二つ

二つとも惜しい

幸いなのが飛影とエリアの外見から親子には見られないことである

リタは時々ミスをする

今回もお父様と言わせてから笑って冗談が上手いと褒めれば冗談で終了していた

そんなことに気付かないリタは安堵の溜め息を吐く

「…アホだ」

彗は小声でツツコミを入れてしまった

バン！！

大きな音をたて飛影がドアを吹き飛ばしながらダイナミックな入室する

吹き飛んだドアはリタがエリアが怪我をしないようにドアの墓場へと方向を修正する

クラス中が啞然とする中飛影は立ち上がる

「あは！！あはは！！ぶち殺し決定だこのクソがあ！」

マジでキレてる飛影

その相手は

「はぁ！？ 貴様如きが我を殺すじゃと？ 冗談もそこまで来るとぶち殺したくなるのう！！」

当然ながらギルギアである

こちらもキレている

二人して制限かかってるから全力で殺し合っても大丈夫

という解釈である

「ええ！？ 大事な話し合いは！？」

話し合いすると言って出て行った飛影が拳の話し合いになっていることにツツコミを入れる彗

「冗談！？ はっ！！ 今すぐ現実に変えてやるぞこのババア！！」

「…死ねチビ！！」

拳同士がぶつかり合う

場所など関係ない

彗のツツコミにすら反応しないということは戦闘モードである

「まあ理事長と話し合い中に喧嘩になったのでしょうね」

冷静に状況を推測するリタ

「いやいや止めろよ!!」

「なんで私が蜂の巣を突つつくような真似をしなければならないんですか？」

リタは止める気がない

所詮二人とも中学生レベルの喧嘩である

放置しても問題ない

エリアは戸惑って混乱している

飛影の蹴りがギルギアの側頭部を捉える

怯むがその足を掴み投げる

中学生レベルの身体能力だが当然魔力は循環して身体能力は向上されている

投げられた瞬間

飛影はギルギアの手を掴み一緒に窓からダイナミックに退室

空中でも殴り合っていて着地のことなど考えていない

「あいつらバカだろ」

「今更ですね」

どこか悟った彗

こうして二日目は

飛影が苛められ

リタとエリアが切れて

最後に飛影とギルギアが喧嘩をして終了した

飛影が帰ってきたのは夜で敷地に入った瞬間傷が癒えたのか無傷で服だけがボロボロの状態であった

物凄く不満そうな表情だったので殺し損ねたらしい

エリアもクラスに少しづつなれてきていて

平和であった

特別入学二日目（後書き）

次ぐらいに事件でもと考えてます

特別入学3日目（前書き）

バトルとふざけて難しいです

特別入学3日目

三日目

更に汚い状態で飛影の机が発見された

「おお！！またしてもか」

あまりの汚さに彗でさえ匙を投げた

飛影は逆にここまでやるのは凄いなあと思っている

リタとエリアはもちろん

『…』

リタはヒクヒクと頬が痙攣し血管が浮き出ている

エリアは目が赤く《廻眼》を構築し終わっていた

「うゝんまた机持ってこようかなあゝ」

飛影がキョロキョロと見渡しある異変に気付く

「…ロッカー…」

遊び道具の宝庫であったロッカーが粉碎され中のものもグチャグチャになっている

「…リタ」

冷たい飛影の声

（あ…これヤバい！！）

彗が危険を察知する

（ヤバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいやバいやバい！！）

彗の全本能

殺し合いを体験したことがある彗の命の危機

その時以上に警報が鳴り響いている

「なんですか？」

言葉では聞いているがリタの手には金鎚が握られている

「…俺が許す」

（ヤバい！！…死ぬ！）

僅かでも動くことができない

絶対的な圧力

「殺せぶ！！」

飛影が吹き飛ぶ

死を覚悟した彗を女神が救った

「ひゝえい？」

彗からすれば女神

飛影からすれば悪魔の登場

「…っ…椿…」

飛影の表情が一瞬で青ざめる

リタもエリアもキョトンとしている

飛影をドロップキックで吹き飛ばした椿は微笑みながら飛影へと近づく

「飛影？」

「はい：遊び道具が無くなってカチンとききました」

正座である

「ちなみに犯人は？」

飛影の机とロッカーを見て何事か判断する椿

飛影を止めたのは偶然であった

たまたま近くを歩いて飛影の殺気を感じて走ってきたのだ

「犯人？」

立ち上がり机と椅子

そしてロッカーを注視する

魔力というのは誰もが持っている

隠蔽しない限りよく注意して見れば指紋のようにうつすらと魔力は
見れる

エリアは知らないことで

リタは頭に血が上り忘れていた

「んっと：犯人は4人かな…ダメだ疲れる」

魔力の種類の特定はできたが今の飛影ではそれが限界である

「私が見ますよ」

リタは一步前にでて注視する

制限がない彼女は一瞬で特定が完了した

「懺悔する時間も与えず殺します」

リタはクラスの生徒を見る

犯人の特定は終わった

「自己完結するな!!」

今のリタの思考はサーチ&デストロイ

サーチが終了しデストロイしようとしたところで飛影に頭を叩かれる

「えっとそれとそれとそれとそれです」

リタは普通の人間にもまともに話すが

飛影の敵に人間に例えることはしない

モノ扱いである

指さされた生徒4人

男2人

女2人

の仲良しグループであつたと彗は思い出す

「裁判でもするか？」

「魔女狩り時代の裁判ならやりたいですね」

飛影の冗談にリタはまじめに答える

確実に死刑にしたいリタ

特定された4人は慌てていて

他の生徒達も飛影のことは嫌いな者が多いがやりすぎ感があり引いて軽蔑の眼差しで見っていた

「つていうよりも飛影。けっこう使ってるけど大丈夫？」

ぼそりと椿が魔力やらなんやら使いまくっていることを心配する

「多分大丈夫だろ」

脳天気な飛影

もしもの際は記憶を消せばという判断である

「死刑か極刑どっちにしましょうか？」

「それ同じだぞ」

飛影のツツコミ

死刑も極刑も意味は同じである

「知ってますよ」

そんなことは知っているリタ

その上でどちらの刑に処するか判断を仰いだのだ

リタ絶好調である

エリアは逆に犯人が見つかったため落ち着いている

その目は飛影の手によって目隠しされていた

理由は簡単で

《廻眼》の赤い目を隠しているからである

「いや待て!! こんな時の教師だつての」

「どうしたこの騒ぎは？」

今更ながら教師が来た

飛影としては納得いかないが椿がいる今好き勝手はできない

「じゃあねえ彗頼んだ」

溜め息をつきながら飛影は地べたに座る

「え？ おれ!!!？」

意味がわからない彗

「リタの役目だろ!!!？」

「リタ切れてるからダメ」

表面上はにっこりと笑っている

あくまでも表面上だけであるが

「くそ」

飛影がまともなことを言っているので何か釈然としない

「飛影…何か銃声と悲鳴が」

魔王補佐として制限がかかっていないリタの耳に銃声と一般の生徒の悲鳴が入る

「んあ？」

距離が離れているのか飛影達の耳には聞こえない

だが飛影は校内放送用のスピーカのスイッチをいれる

それと同時に

「動くな!!」

教室に3人の男達が侵入し飛影達に銃口を向ける

「おれこういうの妄想の世界だと思ったけど」

ぽつりと呟いた彗

誰しも一度は想像した授業中にテロリストが侵入してきた

生徒達が教師と一緒に悲鳴を上げて窓際へと下がっていくのに対し

飛影もリタも彗も椿もエリアも動じていない

「んで？なんのよう？」

本当にどうでもよさそうな飛影

飛影の額に二つの銃口が向けられる

「このクラスに王女がいるはずだ大人しく渡せば生かしてやる」

「ああ俺」

王女という言葉に飛影は反応した

考える時間すら持たず即答する

「嘘をつくな」

飛影に向けられる銃口が3つに増えた

「いやーこれは困った。んじゃあいつ」

飛影は先程の犯人4人の茶色に髪を染めている女を指差す

少し悩むテロリスト

明らかに日本人ではないテロリスト

髪を染めているので東洋人との見分けがつかないらしい

その間に飛影はじつくりとテロリストの装備を確認する

（ナイフに銃にトランシーバーにマスク：毒ガスかな？あとは手榴弾かな？科学武器はわっかんね。防弾チョッキもきてるな～人数は～）

ちらりとリタに目配せ

1
1
2

リタは一瞬だけ《キュリクレイ》を発動
数字を空に描き一瞬で消す

（無駄に多いな～）

「嘘をつくな！あの女は目が黒い。東洋人だ」

「え～ほんとなのに～、第一どうやって王女がいるってわかったんだ？そいつの国は？知らないんだったら否定できないだろお？」

エリアのことは東校だけが知っていることで他言でしか噂は流れない

真実を知っているのは極僅か

完全におちよくっている飛影

気配だけでプロだと判断する飛影

プロは大体大量虐殺か芸術性を求める

教室に入ってすぐさま皆殺しにしないことから

飛影は温厚で殺るときは殺るテロリストと判断

大量に人を殺している同属の臭いがしている

相手もそれがわかっているのか飛影からは絶対に注意を逸らさない

「一つだけ言っておこう：我等の情報網を舐めるな。欧州だと調べはついている」

「：じゃあこのクラスにはいないぞ」

飛影としては欧州ってどこ？レベルである

原因はこのクラスの生徒のSNSサイトからである

なので当然国の名前はわからない

〈あゝあゝ〉

校内用のスピーカーから声が発せられる

〈生きてっか？〉

どこまでも気楽そうな声

この学校の理事長であり魔王のダドマである

「生きてんぞ」

銃口を突きつけられてもお気楽な飛影

飛影が入れたスイッチはスピーカーについているマイクのスイッチである

へん〜と多分お前のところにもいるやつら、なんでも日本語で紅い狼ってテロリストらしいぞ。数は112人で…ああさっき二人消えた、何度も王族を拐っていることからかなりのプロ集団だ」

「大体知ってる」

理事長室のマイクからこの放送は行える

〈おっと…〉

銃声がスピーカーから発せられ悲鳴だけが響く

〈ああ108人になった。まあいいか、んで飛影。殺して良いぞ〉

直ぐにダドマは話を続ける

時間にして3秒

飛影の目の前にいるテロリストの一人がトランシーバーで連絡をとりはじめ動揺が感じ取れる

「いいのか？理事長だろ？」

へああ？弱いもんはいつか死ぬんだよ：校内よろしく、校外は俺がやる。ああ死体処理はあとでやるから好きにしろ、誰に喧嘩売ったかわからせろ」

一応は飛影は客人である

そのためダドマの許可無しではあまり好き勝手できない

だが今その許可が降りた

「はは！！あはははは！！！！」

一閃

飛影は隠し持っていたナイフで一人の喉を切り裂く

「きさ……！！」

トランシーバーで連絡をとっていた男の喉笛にナイフを投擲

ついでに銃を殴り銃口を上にする

最初の一人目が倒れる間際に飛影はナイフを奪い最後の一人の喉を切り裂く

教室が鮮血で染まり悲鳴と絶叫が木霊する

「あと105人か：リタ〜エリアと椿と曄と秋野頼んだ〜多分中学は大丈夫だ」

〈さて…〉

『パーティの始まりだ!!』

実に楽しそうな飛影とダドマの声が被る

飛影は投げたナイフを回収し走って廊下へと飛び出す

「どうします？」

リタは戦う気満々である

あとで記憶を操作すればなんてことはない

「…私もやります」

鮮血で染まった教室

エリアもやる気十分である

王女といっても飛影の娘

王女として暗殺されそうになることも多々ある

飛影は守るには守るが殺る覚悟がなければ人は戦えないことを知っている

今回も自分のせいで起きたことだと思っているので自分の尻拭いは自分で拭かなければならないと飛影に教わっている

彗は首を振る

彗は殺しあい経験者だが自ら率先して人を殺すことで人を殺すことに慣れたくないのである

戦闘員ではない樁も当然首を横に振る

「それでは行ってきます」

「失礼します」

リタは窓から飛び降りエリアは廊下へと飛び出す

「もって10分ってところだな」

「そうだね」

冷静にテロリスト達の寿命を予測する彗と椿

魔王の近くには騒動が起ることが多く、このぐらいは珍しいことは珍しいが驚きはしない

「はははは！　！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

飛影は笑いながら駆ける

テロリストを見つけた瞬間殺しに行く

プロといっても所詮は魔力を扱えない雑魚である

文字通り桁が違う

戦いにすらならない一方的な虐殺である

だが今参戦しているメンバーの中で飛影が一番制限があるため弱い

油断は一切していない

廊下で見つけたら即座に教室に入る

廊下という限られた空間

そんなところでサブマシンガンやライフルを避けられるわけがない

「ひゃは！」

5人が廊下に並列に並んでおり、飛影を見つけた瞬間乱射する

飛影はそれを見て笑いながら教室のドアを吹き飛ばして教室へと飛び込む

中には生徒達と飛影に向けて銃を構えているテロリスト3人

(まっず)

飛影の予想では誰かに当たって動揺してくれると予想していたが

まさかの誰にも当たっていない

しかも飛び込んだため着地の態勢が悪い

（これは死んだな）

さすがにプロである

仲間の死んだ状況をきちんと理解してそれに対しての策を練る

飛影は今は精々反則級レベル

充分に策を練れば殺すことはできる

颯の最後っぺに飛影はナイフを投げる

一人は殺せるだろうと判断した

「てい！！！」

引き金を引く直前机が一人のテロリストに直撃

そしてもう一人がドロップキックが直撃し吹き飛ぶ

残った一人喉笛にナイフが突き刺さりながらも

飛影に向けて銃を撃つ

放たれた1発の弾丸は飛影の腹に直撃する

「っ！！」

皮を裂き肉を貫通し内蔵を破壊して貫通する

だが、飛影はそのまま喉笛のナイフを切り裂きながら回収

机が直撃したテロリストの腕を切り落とし

吹き飛んだテロリストに蹴りを放ち頭蓋を粉碎する

「助かった秋野、もう愛してるわ」

本当に死んだと思っていた飛影

秋野のクラスではなかったら死んでいたのは飛影である

「いやいや、無事で良かったです」

安堵した微笑みを見せる

会話しながらも飛影は腕を切り落としたテロリストを殺してから装備を奪い手榴弾を取り出し廊下に投げる

ちょうどタイミングで廊下にいた5人が入ってきて爆発で吹き飛ぶ

「あゝ疲れた」

よっこいしょとおっさんのように座り込む

〈状況報告、俺38人全身粉碎〉

ダドマの声がスピーカーから発せられる

〈36人でバラバラです〉

続いてリタ

「13人喉切り裂いた。腹撃たれて10分休憩」

「へっち！！13人じゃ頭蓋粉碎」

飛影と同じ数だったので不機嫌さが滲み出ているギルギア

「へえっと11人です全身捻れてます」

全員が全員異常な状況報告

「あれ？あと一人は？」

計算すると111人

あと一人足りない

「ああリーダー格で今グラウンドだ」

「我が行く。あやつよりも勝たねば気がすまん」

ピクリと休憩しようとしていた飛影の耳が動いた

「やっぱり俺が行く」

「重傷者がなに言ってるんですか！！！！？」

つい先程10分休憩すると言った飛影は立ち上がる

秋野が無理矢理止めようとするが飛影はそのまま窓から飛び降りる

視界の端に同じように飛び降りているギルギアの姿が映る

着地時に傷口が開くが飛影には関係ない

目標のリーダーは止まってアサルトライフルを構えていた

しかしそれは二人にとってはどうでもいいことである

「帰れ!!!!!!」

「は!?!? 腹撃たれたごみが意気がるではない! 粗大ゴミにしてくれよう!!!!!!」

二人して並走しながら殴り合っている

どちらが先に殺すかしか考えていない

「おっと!!」

「っち!!」

そんな二人に弾幕が襲う

飛影は立ち止まりギルギアを盾にする

ギルギアは鎧龍

右腕が龍の腕に変化し黒い鱗が銃弾を弾く

「サンキュー!!!!」

勝ち誇った顔で飛影は跳躍し立ち止まったギルギアの肩を踏みつけ更に跳躍する

「キ…サマ…!!」

地上と空中からリーダーへと接近

「っ」

一瞬迷ったリーダーのアサルトライフルにナイフが突き刺さる

「おら死ねや!!!!」

飛影の飛び蹴り

「貴様も死ね!!!!!!」

追いついたギルギアは飛影ごとリーダーに蹴りを放つ

「ぐ!!」

「が!!」

ちょうど怪我の辺りに蹴りが直撃し痛みが襲うが怒りで感じない

そのまま受け身を取り回転を利用しリーダーの男に遠心力がのった蹴りが直撃する

「邪魔じゃ!!!!」

その飛影を前蹴りで吹き飛ばすギルギア

「この!!」

飛影は吹き飛びながら態勢を整える

ギルギアは龍の腕でリーダーを引き裂こうと振りかぶる

攻撃が直撃する瞬間ギルギアとリーダーの男の間に手榴弾が投げ込まれる

「お前が邪魔だ死ね!!!!」

だがギルギアは手榴弾に臆することなく攻撃を直撃させると同時に爆発する

「はっ!! 我が殺したから我の勝ちじゃな」

手榴弾の爆発を直撃したギルギアだが無傷で服だけボロボロになっている

リーダーの男は原形をとどめていない

「どこ見てんだ!!!!? 完全に俺が殺しただろうが!!!!」

二人して自分が殺したと主張する

これはどちらが殺したかを決める戦いである

死体掃除は飛影の制限を一時的に解除して《炎舞》で加熱消去

飛影とギルギアの喧嘩はダドマに止められ終了

エリアはダドマとギルギアにお礼をし、飛影と涙無しでは語れない別れをしてメリアに帰還

生徒達の記憶はパパッと操作して消した

「いやゝ疲れた疲れた」

「人間の力じゃ辛いかな」

飛影とダドマ

理事長室で向かい合うように座っている

「んのだ!!」

「なんだ？」

「これをやろうか？」

飛影の提案

一枚の紙を渡される

「やるか!!」

面白いことが好きなダドマは即決断

「詳しいことはこれを見ろ」

10枚程の紙を渡される

「よし、任せろ」

ニヤリと笑い合う飛影とダドマ

二人にとっては面白いことが開催される

特別入学3日目（後書き）

見てくださりありがとうございます

第一回魔王会議（前書き）

A n d r o i dだと文字が打ちにくくて更新遅れましたo r z

申し訳ないです

第一回魔王会議

最強決定トーナメント

ルールは簡単

殺しはだめ

それ以外はなんでもあり

殺しを無くすため勝敗のルールとして

戦闘不能状態

降参

殺しかけた際に勝敗を決定する。

そのために絶対強者級の者が審判などの役職に必要

また、吸血鬼などの治癒能力が高い種族に対しての線引きが必要

場所は天界

日時は1週間後の6月27日に行う

予選

開催期間

上記はおおまかな人数が決定次第決めることとする

なお参加資格は裏事情（魔王や魔法）を知っている者に与えられる

また、入場料を設けて経費削減を努めるものとする

絶対の安全を保証するため、ダドマが結界をはることとする

優勝賞品はなんでも願い事を聞くことである

「だいたいこんな感じで、質問はあるか？」

人間界

飛影の屋敷の会議室

魔王3人が資料を読んでいた

企画者は飛影である

「質問」

天界の魔王が手を上げる

名前はライン

名字はない

天界では一番役職が高い大天使の位を持ち
魔王である

外見は25歳ほど

身長は180cm

実年齢は3万4028歳

薄い青色の腰までのびている長い髪を後ろでまとめ
スーツを着ている姿は社会人である

大人しそうな青年の外見だが殺し合い最強の魔王だ

「なんで私のところが開催場所になってるんだ？」

私という一人称だが男である

『俺の世界でやりたくない』

ダドマと飛影がハモる

「私のとこだって嫌に決まってるだろ！！」

少なくとも絶対強者級が6人はいる

世界が壊れる可能性と後始末がめんどうなのである

「多数決で決まったから」

「最初の会議にいないのがわるい」

ニヤリと笑っている飛影とダドマ

「あの時私は仕事だったんだよ！！！！！！」

あの時とは特別入学3日目の時である

ちなみにであるが二人とも確信犯である

「くそお…もう一つ質問、殺し禁止はなんで？」

悔しそうにだが面白そうに質問を続ける

「おいド腐れチートがなんか言ってるぞ」

即答で返す飛影

「腐れチート!!!？」

「帰れバランスブレイカー」

イライラしているダドマ

「帰れ!!!？」

殺し合い最強の魔王ライン

1対1なら飛影もダドマも勝てないほどである

「殺し合いOKでもいいけどそしたらラインはリタが相手な」

「私に死ねと!!!？」

殺し合い最強のラインだが相性的に絶対リタに勝てないのである

「いいじゃん、平和に殺ろうぜ？」

ニツコリと笑う飛影

「今絶対文字が違うよね!!?」

「ほら早くリタのところに逝ってこい」

ダドマも負けないくらいの笑み

「どれだけ殺したいんだ!!???」

ラインふるぼっこである

嫌いなわけではなく、からかうと面白いからである

「今のところの参加者の人数は？」

「えーと、俺とダドマで人間界と魔界は人集めて今1000人くらい」

「誰かさんはサボってるからなく苦勞したな飛影」

どこまでもラインを苛めたいダドマと飛影

「絶対強者級は？」

ラインとしては雑魚ではなく強い者と戦いたいため当然の質問

「俺が知ってるのは…えーと？俺、リタ、ダドマ、ギルギア、ライン、アユリ、リーベ、が決定してて…あとは静紅、アンジェレネ、シーレイで10人くらいか？」

「飛影のところ大集合じゃないか！！！！ってか10人って！！ぜつつつつつつつつつつつたい嫌なんだけど」

今の飛影が言った中の6人はここに住んでいる者である

今は其々お菓子巡りや旅行やら盗賊やらどつかぶらりとしているので、詳細はわからない

しかし、大体が戦闘好きなため、連絡ができれば飛んできると飛影は考えている。

そして10人の気まぐれで世界を滅ぼせる程度の実力者が集まるのである

天界が本気で心配なライン

「くっそお！後始末くらいは手伝ってく」

『やだよ』

泣く泣く頼むが即答

言葉すら遮られ嫌な顔をされている。

「んじゃ役割分担な、詳しいルールとスケジュールは魔界で決める。人間界は移動のための準備と人間界での人集め。ラインは人数集め

に宿泊施設建築と従業人雇うのと会場建築と司会と実況と解説を雇うのと…」

「多おおいいいいい！！！！！！！！おかしいでしょ！！！？なんで私
がそんな重労働！！！？ってか天界じゃなくて私だけかよ！！！！アユ
リは？」

アユリとは魔王であるラインの補佐である

「うつわし補佐に仕事押し付けるとか最低だわ」

「まさかそこまでゴミだとは思わなかった、生ゴミだ」

まるで近所の叔母さんの中傷話のようなヒソヒソと飛影とダドマがラインに聞こえるように話している

「え？ちよつと？」

ラインの言葉は届かない

「いや…生ゴミに失礼だぞ!! 畑の栄養になるんだぞ!!」

飛影が生ゴミを庇う

庇っているのはあくまでもラインではなく生ゴミである

「じゃあなんだ？」

「粗大ゴミもどきだ!!」

ダドマの問いに飛影は自信満々に答える

ダドマが粗大ゴミもどきがわからない表情をしている

「つまり、例えるならば扇風機の羽だ!! プラスチックにしては大きいし取っしておいてもなんの役にたたない!! 無駄に場所を取り、捨てる時には粗大ゴミというもつとも邪魔なゴミだ」

「おおおお!!!!!!」

何度もラインを見て頷く飛影とダドマ

「…本気で泣きたいんだけど」

眼に溜まっているのはおそらく涙だろうと予想が簡単にできる

『泣け!』

血も涙も無い台詞が飛影とダドマで被る

「鬼か!!?」

「小鬼だ!!!!」

「龍だ」

飛影の種族は吸血鬼の血が流れているため小鬼
ダドマは神龍と言われるほどである

「そうでしたね…あなた達はそうでした」

もはや脱力してしまっているライン

今さらながらあの時意地でも打ち合わせに行けば良かったと思ってしまふ

飛影とダドマと違いラインは天界での表立っての最高権力者

忙しくないはずはない

だが飛影はサボり学生

ダドマはグータラ理事長である

暇人と一緒にするなと叫びたいが叫んだ瞬間苛めを通り越し死ぬことは目に見えている

「ちなみに優勝賞品はどうすんだ？何でも願い事を叶えるってあるが」

さすがに魔王は万能ではない

もし願い事が魔王3人の死などであれば叶えさせるわけにはいかない

「ダドマ：ちゃんと読め」

「優勝賞品はなんでも願い事を聞くことである」

資料をそのまま読むダドマ

何も答えになっていない

「いいか？聞いただけだ！！叶えるなんて書いてない！！！！」

『うっわ』

まさかのことに苦笑いを浮かべハモってしまうダドマとライン

「面白そうだったら叶えるけどな」

確かにダドマとラインは資料を何度も見るが叶えるとは書いていない

あくまでも聞くである

「屁理屈なら飛影に勝てる気がしねえ」

まず、魔王主催のトーナメントである

優勝賞品がなんでも願い事を聞くと書いてあれば誰でも叶えるに自動変換してしまう

ダドマとラインですら勘違いをしていた

呆れているダドマ

「騙される方が悪いのだ！！！！」

笑っている飛影

もはや詐欺である

「んじゃま、今日の会議は終了!! どうする泊まってくか？」

「泊まる。タダ飯食いてえ」

即答するダドマ

億単位で生きているダドマでさえも優希や飛影の料理の腕はレベルが高い

「OK、ラインは？」

「私も泊まるよ。久しぶりの休みだし」

会議が終わり背筋を伸ばすライン

今日一日は自由な日である

『100万な』

「ええ!!!!?」

100万という金額は別に普通だが

まさか自分だけお金を取られるとは思っていなかった

更に飛影とダドマが同時に言ったのだ

謀っているとは思えない

「鬼か!!!? って無限ループ!!!!!!」

第一回魔王会議（後書き）

ユニーク1000を超えました！！！！

ありがとうございます！！

第一回魔王補佐会議（前書き）

文字が打ちづらくて辛いですorz

今回は天界の魔王補佐の紹介です

第一回魔王補佐会議

食堂

いつも飛影たちが食事をしている場所である

魔王が会議をしている間に魔王補佐同士で集まり優希が作ったケーキを3人して食べている

魔王達と同じように

魔界の魔王補佐リタ

人間界の魔王補佐ギルギア

天界の魔王補佐アユリである

「…旨いわ。やっぱり優希さんは一流なのね」

アユリはケーキを食べ終わり紅茶を飲みながら感想を洩らす

名前はアユリ

名字はない

天界の魔王補佐である

身長は155cmと小柄で

肩までかかる程度の長さの銀髪と金色の眼が特徴である

可愛い容姿でどこことなくクールなイメージが滲み出ている

何故かスーツを着ており

外見的にリタたちと同じ高校生ぐらいであるがスーツを着こなしていた

実年齢は5673歳

アユリは所謂悪魔であり
最硬を誇る

余談ではあるが

何故かわからないが、魔王と魔王補佐は全員翼を生やすことができる

飛影は吸血鬼の翼

ダドマとギルギアは龍の翼

リタは神の翼

ラインは天使の翼

アユリは悪魔の翼である

何故かは本当にわからない

魔王同士仲が良いのと同じで魔王補佐同士も仲は良い

だからこうして同じ卓でケーキを食べているのである

「ふむ我もそれには同感じゃ、市販のものよりも旨い」

ギルギアもアユリの感想に頷きながら紅茶を啜る

本人は現在暇すぎるためリーベと飛影のワインを飲んでいた

「まあ飛影の選んだ方ですから、普通とはかけ離れていますね」

苦笑しながらリタは紅茶を飲む

紅茶も優希が厳選した葉を使用しているのでそこらの喫茶店よりも旨い

「さすが飛影様ね」

自分で飛影を褒めながら頷くアユリ

アユリは飛影の大ファンである

「…」

ギルギアは飛影のことが大嫌いであるが、今この場では絶対にそれを口にすることはできない

言ったが最後、リタとアユリから攻撃を受けるのは目に見えている

「…あれじゃな、今会議では何を話しておるんじやろうな？」

秘密だと言われギルギアもアユリも詳細を知らない

「えっと、飛影の部屋にこんなものが落ちていました」

リタがポケットから取り出したのは

それは今飛影達が会議で使用している資料である

今日飛影に貸した本を返してもらう時に机にあるから勝手に入っていいと言われたため実際に部屋に入った時に目に付いたのでそのま

ま持ってきたのだ

「最強決定トーナメント…じゃと？」

リタもまだ詳しくは見えていないため3人で資料を覗き込む形で見ている

「…面白そうね」

「ふむ、殺し合い禁止なのは納得できんがド腐れチートがおるからしょうがないからのう」

ド腐れチートの魔王ライン

魔王だけでなく魔王補佐からも思われている

リタは相性的にラインより強いためそのように思うことはないが

「あのバランスブレイカー本当になんとかならないのかしら」

ラインの補佐であるアユリにすら思われていた

「そんなことより…この優勝賞品は驚きですね」

さすがに同情してしまったリタは話題を変える

もともと気になっていた話題なのでちょうど良いことではある

「…何でも願い事を叶えてくれるってことよね？」

文面は願い事を聞くとしか書いていないのだが

ユリアだけでなく全員が飛影の思惑通りに願いをかなえるに脳内変換される

「ふむ：なんでも願いを叶えるか：なににしようか悩むのう」

「：うゝん悩みますね」

ギルギアとリタ

二人して悩んでいる

「私は決めてあるわ」

しかしアユリはすでに決めてあるようでリタを睨む

「私が優勝したら魔界の魔王補佐になるわ！！」

リタを指差し1週間前からの優勝宣言をする

ピクリとリタの微笑みが固まる

「：冗談きついですね」

あくまでも微笑みは崩さないリタ

「冗談だと思う？」

笑っているアユリの眼は本気であった

「なぜ？…と聞いたら答えてくれますか？」

二人して笑顔であるが眼だけは真剣である

「飛影様の補佐をしたいからよ…貴女よりも私の方が想いは大きいわ」

尊敬で補佐をするリタ

愛で補佐をしたいアユリ

どちらが補佐に向いているかはわからない

「はあ…貴女の想いはわかりましたが、譲るわけにはいきません。あの方の補佐として全力でアユリさんの願いを潰します。私の願いは飛影の補佐を生涯続けることです」

ついに微笑みすらなくし真顔でアユリを睨み付けるリタ

「わかったわ…面白いじゃない」

同じく真顔で敵意満々のアユリも睨み返す

『…』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

という効果音をつけたくなるほど火花が散っている

二人とも本気である

これで飛影が願い事は聞くだけと言ったら飛影自身が死ぬかもしれない

「…」

飛影に対し敵意しか抱かないギルギアはついていけない

そしてふと疑問が浮かぶ

「そういえばじゃが…なぜ天界の魔王補佐であるアユリが奴のことが好きなんじゃ？」

アユリも補佐になってから1年程しか経っておらず
その間は人間界と魔界を往復していた飛影と接点はあまり無いはずである

「何故って？助けられたからよ…あの人に救ってもらったからよ。
私が補佐になった理由は簡単でね、飛影様にそれだけ強いんだから
補佐やれば？って言われたから天界の補佐になったのよ」

飛影の性格は

気に入ったものを命を賭けて護る

気に入ったものと全力でコミュニケーションをとることである

飛影に物理的にも精神的にも救われた者は少なくない

アユリもその一人である

しかし、リタもギルギアもまさかそんな理由で補佐になったのかとは思わなかったが飛影からの推薦ということで納得できた

ラインはもともと補佐をいらないと言っていたのである

それが1年前に補佐をとったものだからダドマもギルギアもリタも驚いていた

ラインは飛影のことを高く認めているのでその飛影の推薦ということもあり補佐にしたのである

アユリは補佐として有能でラインも満足していた

「ふむ：なるほどのう、理解できた。しかし、願い事が決まらんかう」

先程から会話に入れなかったのですと願い事を考えていたギルギアだがなかなか思い浮かばない

「アユリと違い我は違うやつの補佐になりとうない。リタと違って我はすでにあの方の生涯となる約束は既にしておるし：」

『…』

羨ましい

そんな想いでギルギアを見るリタとアユリ

二人にとってはギルギアは勝ち組である

本気で悩んでいるギルギア

長く生きているとあまり欲が生まれないと言うが億を超えているギルギアにとって願いは大体叶えられているものである

「おお！そうじゃ」

ぽんと手を合わせる

「奴の顔面を1発だけ全力で殴ることにした」

ギルギアにとっては生意気な見ているだけで腹が立つ存在である飛影の顔面を全力で殴る

ストレスが発散できると予想する

『却下あ！！』

ギルギアがやつと呼ぶのは飛影だけである

二人して慌ててその願いを拒否する

「さすがに補佐として肯定できません！！」

「どうか止めなさい！！」

必死に願いを変えさせようとする二人だが

ギルギアにとって他に願いは浮かばない

「別に良いじゃろう？ 我の勝手じゃ、別に殺すわけではない。迷惑はかからんし、奴なら頭を吹き飛ばしても再生するからもう」

あくまでも願ひ事は個人の自由と言ひ張るギルギア

アユリもリタも相手のことを蹴落とすための願ひに對し

ギルギアはただ飛影を殴りストレス発散するだけであまり迷惑はかからない

「…そうですね」

「しょうがないわ」

諦める二人

優勝するための理由が増えた瞬間である

「しかし…わからんのう、奴みたいなガキのどこがよいのだからってしまった!!」

『っ!?!?』

つつい口が勝手に飛影の悪口を言ってしまった

その瞬間リタとアユリが同時にギルギアを見た

(ややこしいのお!!!!!!)

今この瞬間言ったことを後悔するギルギアだった

目線を二人から逸らす

直視できない

「す…すまん」

謝ることしかできないギルギアであった

願い事

アユリ

飛影の魔王補佐になる

リタ

飛影の魔王補佐を生涯続ける

ギルギア

飛影の顔面を全力で殴る

第一回魔王補佐会議（後書き）

見てくださりありがとうございます

次どのような話にするか悩みますね

飛影の屋敷に住む人の帰還話か

トーナメントか

キャラ紹介か：

最強決定トーナメント前日（前書き）

10000アクセス超えてました

本当にありがとうございます

最強決定トーナメント前日

会議から6日後

つまりそれは最強決定トーナメント前日である

準備期間はたったの1週間であるが全ての準備が完了しているのは魔王だからであろう

そして飛影の屋敷に住んでいるものが全員揃っていた

食堂を囲み和気あいあいと話しているメンバー

「とりあえずメンバー紹介」

知らない火月のために飛影は立ち上がる

「まずは黒鋼」

褐色の少年が立ち上がる

「飛影の右腕の黒鋼くろがねよろしく火月」

無表情のまま頭を僅かに下げる

「次は…静紅」

「悪戯遊戯イタズラユウギの静紅よ。よろしくね」

ほんわかした雰囲気で立ち上がりニコニコと火月に手を振る

静紅

通り名は悪戯遊戯

世界すら跨ぐ盗賊でその実力は絶対強者級
狙われた物は国を滅ぼしても手に入れる

身長は160cm

黒髪で所々毛先が曲がっているのが特徴で年齢は不明
外見は18歳ほどである

緩やかに着物を着ていて黒髪とよく似合っている

悪戯遊戯とは静紅にとっては悪戯レベルでも国が滅ぼされると可愛い通り名ではなく恐怖の意味がある

「へぶっ!!」

再び椅子に座ろうとした静紅は着物の裾を踏んで椅子を巻き込み転けた

静紅を一言で表すのならアホである

「∴」

呆然としている火月

「次は、アンジェレネ」

「はーい!!」

飛影の呼び掛けに手を上げて勢い良く立ち上がる

「神の宝物庫とか創造神とか言われてまっす！！！！アンジェレネ
！！よろしくう！！」

どこことなく馬鹿っぽさが滲み出ている少女

少し暗い金髪で可愛い笑顔

外見年齢は17歳ほど

実年齢は1455歳

二つ名が神々しいのは神だからである

発育はそこそ良く出るとこは控えめにでていて、出ないところは
全くでていない

何故かデカイTシャツだけ着ている

アンジェレネは馬鹿だが絶対強者級である

よいしょお！と元気良く叔母さんのように座るアンジェレネ

「次は」

飛影が名前を呼ぶ前に立ち上がる少女

「シーレイ…」

眠そうに瞼を擦っている

小動物のような可愛さが溢れている身長は150cmと小柄で
外見年齢は14歳程度

実年齢は780歳

二つ名は未来確知

その名の通り未来を予測ではなく確定する

シーレイも神である

「ふぁ」

大きい欠伸をして再び席に座る

「んで最後が杏子」

「ん？ あぁヒエーの妹ね。よろしく私は杏でいいわ」

杏きょう

種族はただの人間である

アメリカ人と日本人のハーフである

正式な名前は杏・フランブレジ・レガシー

飛影が唯一認める天才

飛影は天才という言葉は嫌いであるが杏を表す言葉はそれしかないと言わせたほどである

僅か14歳にして既に大学を卒業している天才

兵器の開発が得意で魔法と科学を融合させた機械ですら開発している

「たぶん同年だから杏でいいわ。カゲツ」

ニコニコと人懐っこい笑みを浮かべている

金髪のカールした髪

ダボダボの白衣を着ているシーレイと同じくらいの身長で

ブルーアイが特徴である

杏は飛影と似ていて普通の人間はどうでもいいと思っている

だが飛影の連れは全員どこか普通ではないことを理解しているため人懐っこいのである

「…おうよろしくな杏」

あまりにも個性的すぎるメンバーに驚きながらも火月は頭を下げる

「これが俺の家族達だ！」

飛影、椿、リタ、優希、リーベ、火月と合わせ合計10人(?)

これが飛影の屋敷に住んでいるものである

飛影は全員家族のように思っている

「さて：一通り紹介が終わったなくんじゃ俺はちよつと最後の確認で会議してくる」

満足気に頷いた飛影は食堂からゆらりとでていく

ボタンとドアが閉まる音が食堂に響く

静まる食堂

「さて：それではお聞きしましょうか、この中でトーナメントに参加する人は？」

リタが《キュリクレイ》を発動し空中に文字を投影する

「はゝい」

元気良く上げるアンジェレネ

その他も手を上げ

椿、黒鋼、火月、優希以外が手を上げる

リタは参加するメンバーを一瞥し名前を光で書き列ねていく

「黒鋼さんは参加しないので？」

いつもなら手を上げる黒鋼

大人しくお茶を啜っていた

「ん？今回はメンバーがメンバーだから僕は飛影の武器に専念するよ」

黒鋼は絶対強者級とまではいれないが飛影の右腕を名乗るだけあり強さは充分である

正体は意思ある刀

魔刀である

能力の一つで意思を持っています

違う能力の一つで変形することができる

今の姿も人形に変形したものだ

いつもなら参加したいのであるが、今回は絶対強者級が集まりすぎているため飛影の武器として参加する黒鋼

「了解です。杏さんも参加するのです？」

手を上げている杏

彼女は天才だが腕っぷしは並み以下である

リタの問いに首を振る杏

「私じゃなくて全自動殺戮破壊魔科学兵器の人形凡庸戦闘A I搭載のロボットK O 2 2を出すわ」

「なんかすげー」

何やら仰々しい名前が出てきてしまう

火月は名前だけで驚いてしまう

しかし火月を除いて無反応

周りは杏の兵器について知っていたからである

杏は天才で兵器の発明家である

飛影曰く一人で科学力を50年は遙かに進んでいるとのことである

Kは杏のKである

その22のNO.

かなり強いことは必須である

「了解です。さて：皆さん既に周知であります、今回の優勝賞品はなんでも願い事を叶えるものです。どんな願いか少し暴露しましょう？」

微笑むリタ

（リタちゃんが飛影に似てきてる！！）

ただ一人椿だけが時々飛影がやる笑みに似ていたことをわかってしまう

なにか面白いことを考えた時の笑みにそっくりであった

「ふうん、いいわねそれ…面白そうじゃない」

昼間だというのにワインを飲んでいるリーベ

誰もツツコミは入れないがリーベの意見に賛成であった

「それではまず私は飛影の補佐を生涯続けることです」

言い放つリタ

「は〜いリタちゃん！！私は優希ちゃんのスイーツ1年食べ放題の権利です！！」

「飛影…枕…3年」

「私は飛影君の持ってるお宝で欲しいのがあるのよね〜」

「あっ同じ〜ヒエーの持ってる素材が欲しいのよね〜」

次々と願い事を宣言するメンバー

リタは聖徳太子並みの働きで次々に願い事を表示させる

リタ 生涯補佐

アン スイーツ1年

シーレイ 飛影を枕3年

静紅 飛影のお宝

杏 飛影の持つてる素材

リタとシーレイはアンジェレネも含め仲が良く

一言しか喋らず接続詞を使わないシーレイの言うことも理解でき

アンジェレネのことをアンとアダ名で呼ぶ仲である

「あれ？リーベさんは？」

この中で唯一願い事を告げていないリーベ

リタがリーベを見ると不敵に笑っていた

「私？私は単純よ…飛影を1年独占する権利よ」

クククと笑うリーベ

食堂の空気が凍る

それを見ていた黒鋼は心の中で高らかに宣言する

(lady fight!!!!!!!!!!)

仁義無き戦いが始まる

「はぁ!!!!!!!!!!!!!!?」

リーベの先制攻撃にいち早く反応したのがアンジェレネである

「あら?聞こえなかった?飛影を1年独占するだけよ」

「ふざけ!それはやっちゃいけないって!!!!!!!!!!」

青筋が額に浮き出るアンジェレネ

だが可愛さは健在であることが凄まじいものである

「別にいいじゃない:補佐は生涯って言ってるのだからたったの1年くらい」

彼女ら異常者からすれば1年などたったの1年なのである

「で:でもダメです!許せません」

たった1年されど1年

許されるものではない

ここにいる全員が飛影に大小あるが恩や好意を持っている

リタは飛影を尊敬している

黒鋼は飛影の親友である

椿は飛影がいるから存在することができる

火月と優希は飛影のお陰で家族ができて優希は飛影に多大な恩と好

意を寄せていて

アンジェレネは飛影大好きっ子で

シーレイは飛影は炎の魔法使いなため常に微弱ながらも春の暖かさを出していて枕に最適で

静紅も飛影に救われて多大な恩を感じている

杏は飛影がいたから生きた

リーベもいろいろあり飛影に惚れている

飛影を独占するのは暗黙の了解で禁止されているのである

その暗黙の了解を破ったリーベ

しかし暗黙の了解ができたのも周りが怖いからである

それを考えるとリーベは宣言したため、凄まじいの一言葉である

その後微笑み合いながらトーナメントの前哨戦が始まった

拳での戦いではなく

口での戦いであった

その戦いは飛影が戻ってくるまで続き勝者は誰もいなかった

最強決定トーナメント前日（後書き）

次はキャラと魔法紹介です！

微妙にハーレム気味になってしまったorz

キャラ&魔法紹介（前書き）

絶対強者級の人物の魔法の紹介です

キャラ&魔法紹介

名前 飛影

種族 子鬼

属性 炎・風・他

魔法

《炎舞》

飛影が生まれた時から使える魔法

一番使用している

酸素を変換して炎に換える

炎に決められた形はないため様々な形を作ることが可能
だが魔力の消費が激しいため当たらなかった炎を酸素に戻し再利用
することで出費を押さえている

炎は魔力を込めることにより4種類の炎となる

赤い炎

少量の魔力で生成できる一番弱い炎

最高温度は10万度

緑の炎

赤い炎に自らの魔力をMIXして生成できる炎

最高温度は100万度

黒炎

実に赤い魔力の50倍の魔力消費で生成される炎
最高温度は1億度

無炎

飛影最強の炎

黒炎に自らの魔力をMIXして生成される炎
光すら燃やすことができる
最高温度は測定不能

《風華》

飛影が覚えた三番目の魔法
風を統べる魔法

風も実体がないため様々な形に変えられる

魔力消費は少なく炎を強化したり追い追い風で速度を上げたり空気圧で
相手の動きを遅くしたりと応用が可能

単体でも風速1kmの暴風を放つことも容易である

《ヘリオトロープ》

飛影が2番目に覚えた魔法
どんな魔法でも使用することができる反則級の魔法
だが条件があり

1、魔法をその目で見る

2、魔法の名を知る

この条件を満たせばヘリオトロープで使えるようになる

だが使用後も副作用としてデフォルメ化となり魔力体力共にほぼ0となり赤ん坊にも殺されるほど弱体化する

デフォルメ時間(分) || ヘリオトロープ展開時間(秒) * 魔法使用回数 * 魔法展開時間(秒) である

名前 リタ・レーン

種族 神

属性 翼・光

魔法

《神の翼》

リタが生まれた時から使える魔法

リタが本気なら光速で放つことができる

神の翼を薙いで切る

神の翼を放ち突く

強固な存在で防ぐ

突きの光速で交わす

と4拍子が揃っている

リタの身体からどこでも放つことができサイズも自由

最大長さ50キロ

最大幅1キロ

最大顕現数24本

《キュリクレイ》

光の女神として生まれたリタが生まれたときから使える魔法

光を統べる魔法

光を取り除き闇に変えることも可能

レーザーや電磁波であるマイクロ波も放つことができ穴という穴がない隙がない魔法

名前 ダドマ

種族 神龍

属性 無・万・水

魔法

《方舟》

万物を好きな時空場所に移動することができる強力移動魔法

同じ次元であるならどの場所にも移動できる

だが魔力を感知するか行ったことのある場所にしか次元移動ができない性質を持つ

魔法を移動することも可能

だが魔王クラスの魔力を持つ者や魔法は許可がないと移動することができない

《天変地異》

水を統べる魔法

ウォーターカッターや津波など水でできることはすべてできる

ダドマは無限の魔力を持ったため神話のような大洪水を起こすことも可能

名前 ギルギア

種族 鎧龍

属性 鎧・重

魔法

《グラビティ》

重力を統べる魔法

0.1万倍まで自由に操ることができる

重力を圧縮しブラックホールすら形成できる

また引力も操作したり本来なら上から下への力しかもたない重力の

力を横にすることも可能

接近戦において無敵を誇る

名前 ライン

種族 大天使

属性 幻・雷

魔法

《ナルカミ》

雷を統べる魔法

身体中に電気を巡らせ身体能力上昇と触れるとダメージの雷化

光速の一撃の雷や雷の剣など応用が聞く

最大電圧

10エクサV

最大電流

1MA

《幻想魔境》

殺し合い最強のラインの代名詞である魔法

発動した際にラインの手からでる光を直視すると発動

全ての物事がラインの思い通りになる幻想を見せる

普通の幻覚のように分身したり消えたりもできるが真に恐ろしいのは
幻想の中で腕が吹き飛んだ

などを知覚してしまうと本当の肉体の腕も吹き飛ぶ

眼を瞑っても五感を支配しているので

ちょっとしたかすり傷でも痛みを増大し、その箇所の触覚を奪いその部分が弾けとぶイメージを見せる

確認のように触っても確認という時点で知覚してしまっているので
本当にその箇所は無くなっている

弱点は光を統べるリタには最初の発動条件である光を打ち消されて
しまうので発動できない

名前 アユリ

種族 悪魔

属性 氷

魔法

《魔氷》

氷を統べる魔法

どのような形状でも生成可能で剣や弾などの形状を容易に作れる

普通では1256度までしかいけない氷点下の世界もこの魔法はその常識を破る

飛影の無炎を防ぐことができるほどである

耐久力では魔王の中でトップ

名前 アンジェレネ

種族 神

属性 異

魔法

《インビリル・ワールド》

世界を創造する魔法

この魔法で創造された世界は4次元でアンジェレネが創造すれば終点がない世界へと変えることができる

それが面倒なアンジェレネが創造するのは元の世界と同じ3次元である

またアンジェレネの意思で触れている相手を創造した世界へとつれていくことができる

幽閉することも可能で脱出は不可能とも言われている

元の世界を覗くことも可能である

奇襲や隠密に優れている魔法

名前 静紅

種類 ??

属性 次・領

魔法

《次元破壊》

次元を破壊し好きな次元へと移動できる魔法

ダドマの方舟と違い一部のみの移動や行ったことのない次元にも行けるといいう性質を持つ

破壊した次元へと入れることができれば相手を移動させることすらでき

魔王のダドマの方舟よりも強力な移動魔法である

《完全領域》

可視できる円形の防御壁をつくりだすことができる魔法

一定の魔力でしか顕現できず防御力も一定

一個しか張ることができない魔法だが

全力の飛影の拳を防ぐことができたり黒炎を防いだりなど強固な防御壁である

名前 リーベ

種族 吸血鬼

属性 霧・爪

魔法
《黒霧》こくむ

黒い霧を発生させる

黒い霧の中では自由に移動ができ部分だけ移動も可能

黒い霧を物質に変えることも可能

黒い霧は発生した瞬間世界と交わるため破壊は不可能

普通の霧は水分を含んでいるので飛影の炎やアユリの氷で排除可能であるが

魔王の攻撃にすら消滅することはない

黒い霧自体で攻撃・防御を行える

名前 シーレイ

種族 神

属性 未・減

魔法

《スロウネ》

シーレイが触れた触れる度に動きが遅くなる魔法

一度触れた程度では微々たるものであるが

何度も触れることにより効果は倍増する

ただでさえ未来を確知しているので相手の動きが読めるシーレイ

さらに触れることにより相手の動きを遅くすることで攻撃はほぼ命中する

シーレイの未来確知との連繋は凄まじいものである

キャラ&魔法紹介（後書き）

書いてて本当にこいつらチートだと思いました。

予選1日目(前書き)

予選1日目です

予選1日目

天界

死者の魂が送られる世界であり

悪魔や死神や天使などのファンタジーな生物が住んでいる

天界はその世界の中でも魔界や人間界以外にいくつもの世界と繋がっている

例えるならば地獄や天国である

天界自体は死者の魂が送られる場所で

その後閻魔のところまで直行するだけである

そんなファンタジー要素がたっぷり詰まっている天界

その一部地域

今まではただの荒れ果てた土地であったが

総参加者合計人数1890人

最強決定トーナメントのために集まっている

参加者は1890人

観戦者は5万を超える

ドームの大きさは闘技場が半径500メートル

観戦席を含めると半径1キロである

超巨大なドーム

ドームと言っても闘技場の上空には遮蔽物は何もない

どうせ壊れるからである

飛影達の想像以上に人が集まってしまったため

当初の予定では大体1週間の開催予定であったが

倍の2週間の開催期間となった

入場料は一日1万円

今日だけで最低でも3億の収入を得ている

テレビもあり、唯一天界、魔界、人間界を知っている天界のテレビ局が殺到している

ドーム内外に巨大モニターがあり肉眼で遠すぎる場合はモニターを見ることができる

宿泊施設も合計10箇所

闘技場の付近に散りばめられている

闘技場の時計が11..00を指す

開催式が始まった

企画者ということで飛影が闘技場の中心にいる

声援や罵倒や熱狂が巻き起こる

「おい」

飛影が話そうとするが静かにならない

マイクの音量よりも観客の音量の方が大きいのである

飛影はマイクを下ろす

軽く深呼吸

[illegible]

⌋

音が衝撃となった

音だけで早速作ったばかりの闘技場のリングにひびが入る

さすがに静まりかえる場内

「今から最強を決めるトーナメントが始める。誰が勝っても恨みっこなし、殺しも無しの爽やかな喧嘩にしようやああ……！！！！！！！！」

短い開催宣言

しかし

『ウオオオオオオオオオオオ!!』

再び場内が騒ぎだし熱気に包まれる

「ほいパス」

満足気に頷いた飛影はマイクを隣にいる実況の天使に渡す

「今から予選を始めます！……！Aグループの方は闘技場まで御越
しください！……！……！」

予選が始まる

予選のルールは簡単で

参加者は1890人

予選は一回約100人で19回行われる

生き残れるのは100人中2人

合計38名がトーナメントに進出することができる

「ただいま」

飛影は観客席の中のVIP席へと帰還する

魔王と魔王補佐達はもちろんそこには飛影の屋敷に住む者達やセリアにエリア等のメリア関連の者
さらには彗や秋野までいる

そして記念すべき最初の予選

「あら？私Aだわ」

リーベが自分の予選記号を見るとAと書いてある

「いってら〜」

最初から絶対強者級がでることになった

飛影は気軽に手を振って見送る

「いってくるわ」

きちんとした入り口から入るのがめんどろなリーベはそのまま飛び降りて闘技場内に入場する

「さあ！！現在の倍率はこちら！！！！」

この最強決定トーナメント賭け事を公認している

観客には機械が渡されており簡単な操作で勝つと思う選手に賭けることができる。

名前とオッズは巨大モニターですぐに確認することができる

予選では数が多いためゼッケンを渡されておりNO.で賭ける手筈になっている

選手が集まり1分間見た目や魔力などで強さを判断し賭けることができる

最高金額特になし

払えない場合魔王が全力で死よりも苦しい思いをさせると観客ルールブックに載っているため誰も無理して賭けることはない

50秒が経過した

リーベのNO.は19番

リーベは絶対強者級だが有名ではないため、オッズは78.8倍

低い評価を受けていてもリーベは気にせずただ暇そうに立っている。

飛影が笑う

悪巧みをしている時の表情であった

58秒

「19番に50億!!!!!!!!!!!!!!」

飛影は一瞬でリーベに50億を賭けた

このオッズ表では最高金額もでしてしまうためそれを隠すために我慢していたのだ

全ては金のため

魔王の発言に観客が驚きある者は愕然とする

「予選開始!!!」

最初の予選が開始された

リーベはすぐに上へと跳躍

地上から30m地点

《黑霧》

黒い霧を発生させ椅子へと変化させる

空中に浮いている椅子に座り肘をつき見下ろしていた

参戦する気は全くない

理由は相手が弱すぎるからである

「乱戦の中一人優雅に観戦しているうう!!」

実況の天使が驚いている

確かにルール上違反はない

「リーベくまきで」

飛影が一声かける

距離は離れているが風華の風で声を届かせる

予選の制限時間は決まっておらず実力差が無ければ無いほど長期戦になるのである

飛影としては物凄くめんどくさい

飛影の言葉に溜め息をつくリーベ

「しょうがないわね」

椅子を霧に戻しそのまま落下する

（殺しそうで怖いわね…）

衝撃波で倒そうとしかけたが手加減は上手くないため殺しそうだと判断する

《黒霧》

「ど…どうしたんですかぁ!!?」

リーベは霧を発生させながら実況の首根っこを掴み端に移動する
ジタバタと暴れるが振り払われることはない

壁まで来ると振り返る

「よいしょ」

そして霧を雪崩のように放った

殺さぬようにした一撃は99人全員が霧によって足を捕まれそのまま壁に激突する

重傷でも頭蓋骨にひび程度である

「どうせ抜けれないんだし終わりでもいいかしら?」

首根っこを掴んでいる実況に問う

実況の天使は青ざめながら首を振った

「ルール上予選通過者は2人なのであと一人必要です」

「面倒ね」

リーベは適当に選ぶとそいつ以外の選手の圧力を強くする

それだけで気絶した

「はい終わり」

「…」

呆然としている実況と観客

リーベに頭を叩かれて意識が戻る実況

「圧倒的いいいい！！！！予選開始から僅か5分！17番が圧勝しました！！！！41番の方は運が良い！！！！」

『うおおおおおおおお！！！！！！』

絶対強者級の力の片鱗に観客は感動して雄叫びをあげる

リーベは出口からでなくそのまま跳躍して飛影のもとへと移動する

「終わったわ」

特に疲れた様子もないリーベ

モニターがリーベと共に飛影を映した瞬間

観客は魔王関係者かよお！！と嘆いた

賭けに大勝した飛影だがこれからは飛影の周囲にいるもののオッズは急激に上がる

1度しかできない大勝であった

(3500億か：美味しすぎるぜ)

静かに勝ち誇る飛影であつた

「さあ次は10分後に次の予選を開始します。Bグループの方闘技場へ」

「ん？次俺だ」

Bの記号の飛影

黒鋼も立ち上がるが飛影が手で制止させる

「予選だしいらん」

飛影が断る

余裕綽々である

「む……？ 我もBじゃ」

ギルギアの声

! ?

周囲が完全に固まった

ただ二人を除いて

「奇遇じゃの、じゃが魔王が予選落ちはハズイのでな今死ねばどうじゃ？」

「はぁ？ 誰が予選ごときで落ちるか！！ お前こそ今の内に尻尾巻いて自殺しろよ？」

一瞬である

ほんわかとした雰囲気であったにも関わらず一瞬で粉碎された

互いにガンを飛ばし合う

周囲も啞然として動けない

まさかの数奇な運命

こんなときのための未来確知のシーレイだったが寝ている

「誰が尻尾巻いて自殺などするものか、自殺するのなら貴様を殺して我は生きる」

「殺せるもんなら殺してみれば？ どっちが殺られるかなんて目に見えてるけどなあ」

喧嘩するほど仲が良いと言葉はあるがこの二人の間にはその言葉は無効化される

喧嘩しながらも二人は観客席から飛び降りて闘技場に降り立つ

その瞬間場内が沸き立つ

絶対強者級の二人である

観客のボルテージが上がるのも当然である

「予選など無しに今すぐ殺してしまってもよいと思うのじゃが」

「ああそれには賛成だ、殺されるのはお前だな」

だが関係ない

二人には既に周りは見えていない

参加者が集まり二人の様子を見てほくそ笑む者も現れる

全員が絶対強者級の同士討ちを期待しているのである

「さあ！！2回目の予選が始まります！！！！絶対強者級が2人も
いるなかでのオッズはこちら！！！」

2番0・9倍

38番0・8倍

賭けても損をするだけであった

「おお、見たかチビ周囲は我が勝つと思っておるな。まあ正しい判断じゃ」

「ああ？俺等の領域まできてない奴の予想なんてどうでもいいこと

に気付かないのかババア」

飛影は2番

ギルギアは38番である

『ああ？』

睨み合う

二人を見て

そのオッズを見て

準備運動を始める参加者を見て

実況が闘技場にいるのを見て

一番素早く反応したのはダドマである

ダドマはマイクを取り出す

「あゝいいか！よく聞け！！まず実況逃げろ！！観客席まで逃げろ！！次参加者！！この大会は殺しは無しだが自殺願望は基本的に放置している！！もし同士討ちを狙ってあわよくばなんて思ってる奴は自殺志願者だと判断する！！！！！」

ただならぬ雰囲気

実況の天使は翼で飛翔し観客席まで逃げ込む

慌てて逃げる参加者もちらほら出てきている

「…死ね」

「…お前が死ね」

超至近距離で毒を吐き合っている飛影とギルギア

開始の合図がないだけで今手は出していないのである

同時に同じくらい魔力を高めている

魔力と魔力

殺気と殺気

それだけがぶつかり合っているだけであるがリングに亀裂が入り

風が吹き荒れ

火口にいるかのような熱が発生

重力が周囲で狂い始める

今度こそ同士討ちなんて馬鹿なまねを考えていた者達が逃げ惑う

ついに10人しか残っていなかった

しかも飛影とギルギアを抜いた8人は蛮勇でもなんでもなく腰が抜けて動けないだけである

「時間ですけど…どうしましょう?」

実況の天使がダドマの隣に着地し指示を仰ぐ

「とりあえず」

《方舟》

ダドマは魔法を発動する

移動魔法である方舟

絶対強者級の移動は許可がないと不可能であるが腰が抜けるような雑魚ならば話は違うのである

一瞬でドームの外まで移動させる

「勝負あり！！おら！飛影！！ギルギア！！終了だ！」

残ったのは2人だけ

予選を始める前に進出が決定した

「今死ね」

「すぐ死ね」

しかし二人は止まらない

二人してゆっくりと拳を握り締める

怒りで大会のことを忘れている

()()()()(あゝこれ無理だ)()()

二人を知る者達は同時に諦めた

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

その後、ラインが《幻想魔境》を発動して

キレている椿を飛影に

キレているダドマをギルギアに幻覚を見せることでなんとか大人しくなった

その日は9回予選が行われ18名のトーナメント進出が決まった

今のところ

飛影、リーベ、ギルギア、ラインは既にトーナメント進出が決まっている

そして次の日は予選2日目である

予選1日目（後書き）

他にすごいキャラを登場させるなんてことはありません

たぶん

予選二日目(前書き)

文章って難しいです

予選二日目

予選二日目

そこそこな強さを持つものが頭角を表し予選も順調に進んでいる

絶対強者級の飛影達は当然既にトーナメント進出していた

そして、飛影が一番楽しみにしていた最後の予選

杏作の全自動殺戮破壊魔科学兵器の人形凡庸戦闘AI搭載のロボットK022が参加する

杏は飛影が天才としか表現できないほどの天才である

その最新兵器が参加するのだ

飛影のテンションはかなり高い

「杏…自信は？」

「あるわ!! ふっふっふ! 天才の私を舐めないことねヒエー」

自信満々である

「さあ!! 最後の予選となりました!! 最後だけあって面白い選手がそろっています! 絶対強者級に近い悪魔ウィリアム! 人間最強の女セラ! そしてあの魔王飛影に天才と称される最強頭脳が開発した兵器がいます!! この中から二人しかトーナメントに進出できません

ん!！」

最後の予選だからこそ予想がしづらいものである

「?」

飛影は選手を見渡すがどこにも兵器がない

「K022は?」

「ん? ゼッケンNo. 47よ」

飛影は47番を探す

それは一瞬で見つけることができたが飛影の想像とはまるで違っていた

飛影の想像では表現できないような物凄いものかと思っていたが47番は

K022は少女であった

「わぁお」

一目でもなくじっくり見てもわからない程の完成度

紫色の髪背中までのびている長い髪

頭にはリボンをつけていて

服の上に大きなマントを羽織っている

顔の造形は整っていて可愛い顔である

外見年齢は16歳程

「さてオッズはこちら!!」

ウィリアム 1.4倍

セラ 3.0倍

K022 4.7倍

やはり機械では勝てないだろうとの観客の予想である

「それでは予選を開始します!!」

そして予選が開始される

開始と同時にウィリアムやセラが雑魚と言ってもいい参加者を蹴散らしている

しかしK022は身動き一つとらない

「ん? K022動いてないぞ」

「∴待機モードを解くの忘れてたわ」

待機モード

エネルギー消費が激しいため充電のために使うモードである

K022は魔力で動いている

待機モードでは空気中に含まれる魔力で充電を行っているのである
そして杏が持っている端末を弄り待機モードから戦闘モードへと移行する

「あゝはっはっはっはゝ!!!!!!」

文字通りスイッチが入ったように笑い声をあげるK022

標的を探して周りを見渡すがすでにウィリアムとセラしか残っていない

「へゝ貴方達面白そうね」

ニヤリと笑うK022

「喋ったああ!!?」

最初の笑い声は気のせいかと思った飛影だが二度目では気のせいにはできない

「当たり前よ。人形だから喋ったり表情変えたりするのは当然じゃない。性格とかはヒエーに似せてるわ」

まるでなんでもないように説明する杏

きちんとした意思を持ち喋ったり感情があり性格まで設定されている

まるで本当の人間のように

「セラって言ったか？お前にトーナメント進出の席は譲る。だから、俺にこいつと戦わせろ」

ウィリアムの提案

実年齢5万歳

絶対強者級に近い男の悪魔ウィリアムの提案である

「こいつじゃないわよ！私はマリエッタよ！！」

いきなり名乗るKO22もといマリエッタ

実年齢0歳

天才の兵器

「KO22が名前じゃないのか？」

「一応そのつもりだったんだけど…勝手に名前作ってたわね」

制作者の意図を完全無視する自立性

「いいわよ。楽だし」

セラは提案を受け邪魔にならないようにと壁際まで移動する

「面白いことになりました！！！！ウィリアム選手とマリエッタ選

手の一騎打ちです勝った方がトーナメント進出！負ければ予選落ちです！！」

「うっしやあああ！！！」

マリエッタは腕をぶんぶん回してやる気充分である

対するウィリアムも魔力を解放しやる気充分

ウィリアムは身長180cm

外見は悪魔らしく角が生えている以外は普通の青年である

「そういえばアンタは絶対強者級？」

ふとマリエッタが疑問に思う

「それに一番近いと言われている」

準備運動として首を回しながらその問いに答える

「え…まじ」

その瞬間マリエッタのやる気が下がった

「マスターが長ったらしい全自動殺戮破壊魔科学兵器の人形凡庸戦闘AI搭載のロボットなんて名称つけてるけど簡単に言えば」

少し溜める

ますます機械らしくない

そしてどこことなく飛影に似ている

「私は対絶対強者級の兵器よ」

マリエッタがウィリアムに一瞬で接近

「っ！！？」

ウィリアムが反応する前にマリエッタは顔面を鷲掴みにする

すでに手に魔力が集中していた。

《爆拳》

振りほどくよりも速くマリエッタの手が爆発する

爆発を直撃したウィリアムは吹き飛びながらも態勢を立て直しマリエッタを睨み付ける

マリエッタ自身は無傷である

「…魔法か？」

飛影は目の前の光景が信じられなかった

その傾向は強ければ強いほど驚きがでかい

「当然よ！絶対強者級と戦うなら魔法は必須でしょ？」

当たり前のような杏

言っていることは当たり前である

しかし機械で魔法を構築するのは異質である

飛影が唯一認める天才は伊達ではなかった

「おおああ！」

《巨大化》

ウィリアムは魔法を発動

腕が巨大化する

10回りも巨大化した腕で全力でマリエッタに拳を放つ

ただ巨大化するのではなく、当然力も増長する

マリエツタはそれを避けようとはせず、に構える

「っ
ち
い
！」

両手を使いウィリアムの拳を受け止める

力と力のぶつかり合い

[illegible]

僅かに足が後退するマリエッタ

「ふざけんなあ!!!!!!」

全力の一撃を魔法無しで受け止められているのである

《巨大化》

ウィリアムは再び魔法を発動

脚を巨大化させ無理矢理マリエッタを吹き飛ばす

「空高く吹き飛んだあ!!!!!!」

「っ痛」

ただ吹き飛ばされただけでダメージは無い

空中にいて身動きが取れないマリエッタをウィリアムが追撃する

「やっばい!!」

巨大化した腕でマリエッタを握りしめ地面へと思いきり叩きつける

隕石のような勢いで地面へと叩きつけられたマリエッタ

半径50m程のクレーターができあがる

止めとばかりにクレーターの中心に更に巨大化させた拳を打ち込む

粉塵が舞う

「これは決まったかあああ！！！？あまりにも鮮やかすぎて実況を忘れてしまいました！！！これは逆に生きているかの判断が必要そうで」

《爆拳》

実況を遮り爆発が起きる

「…す」

粉塵が吹き飛びクレーターの中心にはマリエッタが立っている

「超痛い！！！」

服がぼろぼろ所々血がでている

「血！！！？ってか痛覚！？」

ロボットかと本当に疑ってしまう飛影

「ギミックをこだわりすぎたのと、戦闘には痛覚は必要でしょ？」

こだわって血を流せるものなのか？という飛影の疑問

「痛覚なんて電気信号だから損傷にあった電気信号流してるだけだし」

ただだという杏

「…」

珍しく絶句する飛影

杏は絶対強者級ではない

ただの天才である

知能や知識があらゆる意味でぶっ飛んでいるのである

損傷を確かめるように体を動かす

「あゝもうイラつくなあ!!」

攻撃を受けたことがショックなのか不機嫌そうにしている

ウィリアムは完全に舐められている

《巨大化》

全身を巨大化させてマリエッタを破壊しようとする

「どーん!!!」

《爆拳》

巨大途中でマリエッタが接近

全長10mと中途半端に巨大化したウィリアム

その顔面を殴り同時に爆発

「っが！」

怯んだウィリアム

一瞬だけだがその一瞬は大きすぎる

《爆拳・脚》

空中で爆発を起こしその反動で再び接近

勢いが足された蹴りが放たれ同時に爆発

「的がでかいって素敵よね」

《爆拳・鎖》

紅い鎖がウィリアムの体を捕縛する

絶対強者級と遜色無い魔力が解放

《爆拳・大爆発》

マリエッタの拳が紅く光を放つ

「…人の夢って書いて儚いと読むわ。あんたは絶対強者級にはなれ

ないのよ。夢かったわね、あんた!!」

腹に拳が打ち込まれる

直撃した瞬間

空気が振動

大爆発が起きる

連鎖するように鎖が小規模な爆発を起きる

《爆拳・エンド》

「散りなさい」

光がウィリアムを覆いつくし全身が爆発

爆風と爆音が周囲に拡散する

「すさまじいいいいい!!!! 攻守一転巨大なウィリアム選手を手玉にとるかのようでした!!!! というよりも私が無事な理由がさっぱりです!!!!」

周囲のことを全く考えていないマリエッタ

爆風は実況までも襲ったがなんと無傷である

それは飛影が風華で守っただけである

爆風による粉塵がおさまった頃には元のサイズに戻って気絶しているウィリアムの姿と

ガッツポーズしているマリエッタの姿があった

「予選終了お！！！！最後の予選を勝ち抜いたのはマリエッタ選手とセラ選手です。明日はトーナメントの詳細と7試合を予定しています！！！！」

予選二日目（後書き）

いよいよ前哨戦終了

次はトーナメントです

爆発の表現がわかりません

トーナメント開始(前書き)

更新があorz

遅くなりましたして申し訳ないです

他の絶対強者級は1回戦では絶対強者級同士の試合はない

魔王VS絶対強者級兵器

魔王VS魔王補佐

初戦からガチバトル必須である

飛影とマリエッタとリタは強者との戦いなため面白そうに微笑んでいる

だが

ラインだけはその場に崩れ落ちていた

（くっそお！！なんで私の相手がリタなんだあ！！）

大天使のライン

天使といっても神と比べれば運の総量が違いすぎる

リタはラインを早く脱落させたいと考えていたのであろう

殺し合い無しでも《幻想魔境》は危険すぎる

ラインと戦わなければ

リタがそう考え運が作用した

そのため、この結果となった

（さすがに魔王が1回戦落ちはまずいでしょ……くっそお対策練らなきゃ絶対負ける）

「これから第一試合！！ライン選手とリタ選手の試合を始めます！！他の参加者の方はお戻りください」

「…まじで……！！？」

対策もなにも取れない

ほぼ負け確である

『どんまい』

さすがに可哀想だと思った飛影とダドマは優しく肩に手を置いて励ます

「飛影…ダドマ」

『派手に散れ』

しかし

やはり

当然のように笑顔

励ましているようでざまあみろと笑っていた

ライン3.
3倍

リタ4.7倍

「いや、今思ったことがあるんだよね」

気楽そうなライン

いやもはやどこか諦めている

「なんでしょっか？」

それに対してリタは真剣な表情である

「特にリタなんだけど、私がこの闘技場を作成したんだけどね：半径500m：ぶっちゃけていうと狭い！！逃げれない！！私は近距離でリタに勝てる自信全く無いよ！！」

「まあ……頑張ってください。私も全力でやります」

右手に金鎚

左手に鋸

リタの準備は整っている

魔力も静かに解放

「やるしかないかあ…」

気合いを入れるように首の骨をならす

「さあ！！準備が整ったようです！！！！実況の私は観客席からお送りします！」

実況である天使は一応は強い部類に入る

だが絶対強者級の戦いに巻き込まれたら即死確定

「んじゃ始めっか」

ダドマは魔力を解放

全魔力を使って闘技場と観客席を隔てる結界を作成する

「私は思うんだ…腐れチートとか言われてるけど、飛影とダドマの方がよっぽど腐れチートじゃないか！！！！！！ヘリオトロープとか無限の魔力とか！！！」

無限

人間界の魔王ダドマの特徴をあげるならば確実にあがる無限の魔力
魔力を使っても使っても減ることがない

今全魔力を使って結界を作成したが既にダドマの魔力を全快している

「まあいいじゃないですか、そんなこと」

「はあ…諦めたよ」

「それでは!!!!!!第一試合始め!!!!!!」

《幻想魔境》

《キュリクレイ》

同時に魔法を発動

「ああやっぱり？」

幻想魔境を発動した際の光が出ない

「光の頂点ですよ？無駄です…」

キュリクレイは光を統べる魔法

殺し合い最強の魔法の幻想魔境でも発動条件が光ならばリタには通
用することはない

「さて…行きますよ」

「はあ…よし来い!!!」

《ナルカミ・雷槍》

《キュリクレイ・位相》

再び同時に魔法を発動

ラインの手に雷が凝縮された槍が形成される

と同時にリタが既に間合いに侵入していた

「ッ!!!???」

リタの鋸の一撃を雷槍でギリギリ防ぐ

凝縮した雷は物体化しているので可能な芸当

逆に触れたリタが感電する

筈であった

目の前にいたリタの姿が消える

(まっず!!!)

ラインが驚愕すると同時に背後に魔力

《神の翼・突》

《ナルカミ・神経伝達》

ラインの背後を取ったリタの手からガラスのように透き通った翼が出現する

薄い薄い翼

羽根などの飾りもないただのガラスのナイフのような翼

それが光速でラインの背中に向け突き出される

「っ！！！」

雷を使用し反射よりも速く直接雷を使って電気信号の代わりに自分の身体を操作する

肩を深く切り裂いたが決定的な傷を負うことを回避

《ナルカミ・雷界》

リタの金鎚での追撃を察知したライン

雷が球状に帯電

「っ！？」

リタは追撃を止め全力で後退する

球体は一瞬で拡散

闘技場内を覆いつくす

《キュリクレイ・甲》

直撃する前にリタの身体を光が覆う

「くっそ！防がれたか！」

雷が止むと無傷のリタがいた

「ギリギリですよ」

少し焦ったりタ

《ナルカミ・雷…》

《神の翼・突》

ラインが魔法を構築しようとした瞬間

リタは神の翼を発動

光速の突きがラインを襲う

（くっそ！！）

魔法構築を諦め回避に専念する

襲いかかる光速の神の翼

合計8本

ほんの僅かな時間差でフェイントをかけての攻撃

回避に専念してもラインには厳しいものがある

脳ではなく直接魔法で体を動かしているライン

なんとかギリギリ避ける

《神の翼・薙》

《キュリクレイ・現》

光速の突きではなく少し遅くなるが翼で薙ぐ

「っ！」

ラインがそれをギリギリ跳躍して回避

した瞬間

神の翼が消滅する

光が見せた幻覚

気づいたときにはリタが金鎚を振りかぶっていた

雷が身体を動かすよりも速くリタの金鎚がラインの肋骨を粉々に粉砕する

「がっ！！」

《ナルカミ・迅雷》

《ナルカミ・嵐雷》

喰らいながらも痛みを我慢し魔法を発動

雷がラインに纏う

そして雷が上下左右から無造作に落ちる

襲ってきた雷を回避するために後退

リタの逃げ道を雷が塞いだ瞬間

僅かにできたタイムロス

それを利用して雷を纏ったラインがリタに向かって落ちて落ちる

「あ！！」

突撃

ただの突撃だが雷と同一の速度

しかも魔王の魔力で込められている

リタは咄嗟に右手を捨てる

右手で防ぎ

《キュリクレイ・ベリアルサーズ》

左手でラインを掴む

右手の骨が粉々に粉碎するが気にせず魔法を構築

光がリタの左手を包み込む

「この！！」

「：！！」

ラインは危機感を感じ雷の速度で退避する

が

光速のリタには追い付かれた

「終わりです」

左手でラインの頭を鷲掴みにする

「あゝ頑張ったんだけどな」

光がラインを包み込む

ラインが魔法を構築し終わる前にリタはそのまま地面に思いきり投げ捨てる

「つくそ」

元より肋骨が粉碎されていた

迅雷の雷による移動が無ければ動かすことも辛いほどである

抵抗できずに地面に叩きつけられ

同時にラインを包んでいた光が閃光と共に爆発する

閃光が観客の眼を眩まし衝撃に結界が破壊されそうになる

「強力な一撃いいいい！！！！ぶっちゃけると速すぎて何も実況出来ませんでした！！！」

絶対強者級同士の戦いについていけるのは同じ絶対強者級のみである
実況が入り込む隙間すら与えなかった

「あれまともに喰らったら無理だ」

喰らったことがある飛影の感想

もとよりラインのレンジは接近戦ではない

身体も接近戦の絶対強者級と比べれば弱い

中距離から遠距離がラインのレンジである

半径500mと限定された空間

幻想魔境を封じられ

ナルカミも神の翼によってほぼ構築ができなかったがリタの右手は潰した

それはかなりの善戦と言える

粉塵が収まり

地面の底が見えないほど抉れたクレーター

リングはもちろん

地面も大半が消滅している

リタは躊躇無くクレーターに入り

ボロボロになってギリギリ五体満足の気絶しているライン

「物凄くキツかったですよ」

正直な感想を呟いてラインの首根っこを掴み救出する

「気絶しています!!!!勝者リタ選手です!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

『うおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

全容は理解できていないがあまりの凄さに会場中が熱狂で包まれる

「さすがに駄目だったか」

「相性が最悪だからな…次お前だろ？」

ラインにとっては本当に相性最悪の戦いであった

そして次は飛影とマリエッタの戦いである

トーナメント開始（後書き）

とりあえず絶対強者級同士のバトルは書きます

さあまずは天界の魔王のラインが敗れました
相性が最悪ですからしょうがないです。

ってか魔法がチートなんでバランスブレイカーを潰すためにリタ出陣です

誰が優勝するか

もしよろしければ予想などしていただけると嬉しいです

残るは飛影、リタ、リーベ、ダドマ、ギルギア、アユリ、アンジェレネ、シーレイ、静紅です。

キャラを適当に暴れさせるんで自分でも決めてないです
あと戦闘描写なれないです

飛影VSマリエッタ（前書き）

更新が遅いでした申し訳です

飛影VSマリエッタ

「さあ！！！！白熱の第一試合でした！！！！次は魔王VS絶対強者級の戦いとなります！！！！！！」

リタとラインの戦いで跡形もなく吹き飛んだ闘技場

魔王のマル秘技術で僅か3分で闘技場は修復された

そして闘技場には飛影とマリエッタが対峙している

自信は満々のマリエッタ

どこかばけくとしている飛影

「さてとりあえずオッズを発表する前に巻き込まれたくないので観客席に避難しようかと思えます」

マリエッタの魔法の威力は目の前で見た実況

死ぬかと思った瞬間でありもう二度と体験したくはなかった

そして魔王の近くという絶対に安全な場所へと退避する

「さあ！！飛影選手とマリエッタ選手！！！！オッズはこのようになっています」

飛影1・2倍

マリエッタ8・7倍

当然のように飛影が勝つと思われている

「さあ準備は整いましたか!!?」

「バッチリ!!!」

全身に魔力を巡らせ準備は万端のマリエッタ

飛影の性格に似せているため、強者と戦うのにも笑顔である

「んゝいいぞゝ」

それに対して飛影は軽く準備体操して魔力を解放させる

のびのびとした態度

「それでは…始め!!!!!!」

「先手必勝!!!」

開始の合図と共にマリエッタは両手の指を飛影に向ける

《爆拳・千弾》

爆発の力が込められた赤い小さな球体

無数の攻撃となり飛影へと襲いかかる

「…」

《風華・壁》

飛影は瞬き一つすること無く風華を発動

圧縮された風の壁が飛影の眼前に出現しマリエッタの攻撃をすべて防ぎきる

「さすが…ね!!!」

《爆拳・なんかでっかい爆発》

量より質

爆発の力が込められた巨大な紅い光球

一つの爆発に威力を集中させる

《風華・なんか壁》

適当なネーミングセンスの攻撃同士が衝突

風が光球を包み込み消滅させる

「…つよっ!!」

《爆拳・接触起爆》

飛び道具ではダメージを与えられないとマリエッタは魔法を発動

全身から赤い光が揺らめいていた

脚を地面に叩きつける

同時に爆発が起こり勢いを利用して飛影へと接近

《炎舞・蜃気楼》

飛影の顔面に拳が突き刺さる

が

熱による光の屈折で見せていただけ

拳はそのまますり抜ける

「わお!!!!」

勢いはそのままリエッタは驚きながらも背後からの攻撃の気配を感じとる

右拳を爆発させ無理矢理振り向き裏拳を放つ

「おっと」

軽くしゃがむことで回避する飛影

しかし飛影はどこか上の空である

「…飛影は本気なの？」

本気には全く見えない飛影

さすがにマリエッタも疑問を感じてしまう

「ん〜とだな。先日の試合と今の感覚で言うならマリエッタはまだ絶対強者級ではないことがわかった。けっこう実力差がある」

喋りながらも飛影はマリエッタの猛攻を回避している

「な…に…をおお!!!!!!」

《爆拳・大爆発》

右手が更に赤く光る

「それに相性が最悪だ」

《風華・掌握》

拳を避けても爆発に巻き込まれる

そんな一撃

しかし、起爆しない

「つつへ?」

マリエッタは確かに爆発はさせたつもりであった

だが、爆発は起きない

「爆発ってのはぶっちゃけると空気の振動だ。つまり空気をその振動以上の力で固定すれば爆発しない。しかも魔法の爆発だからな」

風華によって闘技場内の空気は飛影の意思のままである

「つくう!!」

爆発は諦めそのまま飛影を全力で殴る

魔法を使わなくともウィリアムの魔法の強化付きの力とほぼ同等の一撃

それをあつさりと飛影は受け止める

「ぐっぎい!!!!!!」

マリエッタが全力で押すが飛影は涼しい表情でいるにも関わらずびくともしない

逆にマリエッタの足が徐々に後退する

「倒すのは簡単だけど…ちょっと杏のためにデータをやるよ。さっきまでシミュレートしてたし」

《風華・飄風》
ふうやうふう

マリエッタの攻撃を受け止めていた右手

逆のフリーであつた左手に風が集まる

そして飛影が手を向けた

それだけの動作で圧縮された暴風がマリエッタに襲いかかる

紙切れのように吹き飛ぶマリエッタ

激突先は闘技場の壁

身動き一つ取れないで風で身体が千切れそうになるほどの痛みが襲う

《風華・エアクッション》

激突する直前に空気のクッションがマリエッタを優しく包み込む

「え？」

勝ち確であつた

激突すれば戦えないほどの損傷を受ける筈であつた

「ちよつとデータ集めに協力してやる」

杏を見てニヤリと笑う

「真似つこだからモドキにしかならんが参考にはなるだろ」

ぼくとしてしまうマリエッタ

「よく見てろよ〜まずはリタだ」

《炎舞・風華・リタモドキ》

風と炎が飛影を包む

瞬間マリエッタの背後に飛影がいた

炎によるジェット噴射と

風の追い風

二つが合わさっている

マリエッタが反応する前に飛影は蹴りを放ち吹き飛ばす

「リタはもっと速いぞ」

《風華・ギルギアモドキ》

速すぎて身動き取れずに吹き飛んでいる途中のマリエッタ

「が!!!!!!」

いきなり力のベクトルが変化

上から何かに押し付けられるように圧力が掛かり地面に押し潰される

「あいつのはもっと重い」

《炎舞・ラインモドキ》

風を集めて仮重力にして圧力をかけていたのを止める

マリエッタが立ち上がる

同時に右腕に軽い痛みがはしる

「な!?!?」

マリエッタの右腕がなくなっていた

「ラインだったら今ので右腕吹き飛んでる」

飛影は炎舞を解除

蜃気楼の応用で視覚的に右腕を隠したのである

「ん〜とダドマは不可能だし、静紅もアンジェレネもアユリも無理だからな〜」

飛影の吸血鬼としての翼が生え両手の爪が伸びる

「魔法無しだけどリーベモドキ」

飛影は少し手を上げる

「…あ」

嫌な予感

というよりも本能

人間に近い思考を持たせられているマリエッタ

壊れるではなく死への恐怖心が働いて身体が勝手に横に跳躍した

次の瞬間

飛影が腕を振り下ろしマリエッタが数瞬前までいた場所が抉れた

「リーベはもつと切れ味良いぞ」

《風華・シーレイモドキ》

飛影は接近して拳を放つ

「くう!!」

ギリギリ身体を回転させ避けるマリエッタ

一撃目は避けたはずだが同時に突きだしていた飛影の手が避けることをわかつていたように避けた先へと置いてあった

1タツチ

殴っているわけでもなくただ頬に触れた

異変はすぐに現れる

カウンターとして蹴り返すマリエッタ

僅かに動きが遅くなっていた

2タツチ

飛影は軽々と避け再び今度はマリエッタの頭に触れる

「身体が…」

動きがさらに遅くなった

「シーレイはもっと理不尽なくらい攻撃当てるからな」

風の抵抗で身体の動きを遅くしていた

飛影は攻撃を思った方向に避けさせるようにしていたので未来を読んだかのような動きができたが

シーレイの場合はファーストアタックから軽く当ててくる

スロウスは触れれば触れるほど遅くなるため、今以上に身体の動きは遅くなる

「さて：最後に俺かゝ自信はあるぞ」

飛影は肩を回す

攻撃力最強

飛影は闘技場の中心にいるため、マリエッタは壁際まで全速で後退

「よいしょ」

地面を殴り付ける

爆発的に地面が陥没

リングの欠片や土がマリエッタへと襲いかかる

「ふざけ!!?」

自分の魔法付きの威力と同等以上

《爆拳・大爆発》

襲いかかるリングの欠片を殴り爆発させる

衝撃同士のぶつかり合い

と同時にマリエッタの足場が陥没し態勢が崩れる

「俺のかち」

首元には飛影の爪が伸びていた

「降参!! 無理!!」

圧倒的な実力差を見せられた

マリエッタには降参しか選択肢が無かった

「試合終了！……！圧倒的です！……！飛影選手の勝利！……！」

「……あいつにはホント驚かされるな……」

想像力

魔法は想像して創造する

魔法を使う上で必要な技術である

ダドマが溜め息を吐く

飛影は天才という言葉を嫌うがダドマにとって飛影も充分天才である

「ほんとチートだらけだ」

自身のことは棚に上げているダドマである

飛影VSマリエッタ（後書き）

次は誰と誰にしましょうかゝ

解説タイム（前書き）

解説です！

実況も解説もできてなかったんでorz

解説タイム

次の日

トーナメントの1回戦が無事終了した日の夜

飛影は実況の天使とテレビに出ていた

「こんばんわ、この番組では大会の企画者である魔王飛影選手と共に選手のことについての解説をします。」

「あゝいよろしく」

「一回戦が終わりましたが感想などは？」

「あのド腐れチートバランスブレイカーのラインが敗退してくれたのが嬉しいね。ぶっちゃけあいつリタ以外じゃ勝てん」

「あゝやはりライン選手の魔法はそれほど凄いのですか？」

「キチガイだ！こっちは幻影と戦ってボロボロになるつつゝのにあいつは突っ立てるだけでいいんだぜ？マジ腐れチートだ！！！」

「やはり絶対強者である飛影選手でもそのような感想になりますか
…」

「当たり前」

「飛影選手が気になっている選手というのはいますか？」

「絶対強者級全員」

「全員ですか…」

「勝負がもはや相性で決まると言っても過言じゃね」

「相性ですか？」

「そう、相性」

「例えば…？」

「アンジェレネはシーレイと相性最悪だし、ダドマは静紅と相性悪いとか」

「そうなんですか？」

「そうなんですけども相性なんてときどき関係ないからどうも言えない」

「勝負は時の運というやつですか？」

「そしたら神様最強だから、えっと判断をミスると一発で持てかれるから」

「…ああなるほど、あの攻撃力ですからね」

「まあね、全員世界壊せるし」

「絶対強者級って恐ろしいですね…飛影選手が気になっている選手の対策やら教えていただいても？」

「戦略とか対策とかか？」

「そうです」

「んじゃまずダドマの戦略かな…あいつは基本全魔力込めて魔法発動するからかすってもアウト」

「無限がなせる技ですね」

「しかも方舟で外した攻撃とかを移動させて全方位とかから攻撃させるからマジ避けづらい」

「対策は？」

「まず、長期戦にしないこと。魔力差がでかくなるし、遠距離戦も意味無いし、完全近距離で魔法使う隙も与えず攻撃し続けるしかない」

「…とても簡単そうにいますけどとても難しいですよね」

「まあそうだな…近接のやつに比べると少し劣るが絶対強者級だし」

「な…なるほど」

「次はギルギアかな、戦略としては硬さに任せてごり押しだ」

「ごり押しですか」

「ごり押し、アイツと殴り合うのは得策じゃねえ…まずあいつは重力を操るだろ？地に足つけちゃダメだ」

「それはなぜ？」

「問題です俺らが座ってられるのはなんで？」

「重力が上から下に力を働かせているからです」

「正解、あいつはその上から下の力を右から左にもできる。地に足つけると、ホントに足元を掬われる。上下左右どこが地面かも判断できずにやられたい放題だ。それに例えばあいつを殴ろうとするだろ？その瞬間に重力を横に変える。すると踏ん張りつかないし威力が殺されてカウンターで殺されるし、空飛んでも落とされる」

「…無敵じゃないですか？」

「あいつもチートだからなく、まあ勝つには重さが0の攻撃をするしかねえ、それか殴り合いで勝てばいい」

「…あゝ」

「次はリタ、まず戦略として光を操って視覚を誤魔化して攻撃とか、神の翼で光速の突きを放ったり難いだりして相手は戦いが普段通りにできずにリタの思うままになる。攻撃力も申し分なし」

「…聞くだけでチートな方が多すぎますね」

「対策は無い、遠距離攻撃なんてカスリもしないし、中距離も神の

翼で速度に負ける、近距離も動きが速いし光を操ったりしてまず捉えきれない。万能タイプ、相性としてはシーレイとかアユリが良い。リタを倒すんだったらガチの近距離で勝つしかない」

「うわゝ」

「次はアユリかな、アユリの戦法は単純で氷で防いだり攻撃したり」

「それだけ聞くと平和ですね」

「とりあえず氷が硬すぎる。しかも足場とか凍らされるし、空中にも氷があるから逃げ道も限られるし、そこら中の氷でも破壊するには骨が折れる。さらに言えばそこらの氷からも攻撃が放たれるからダドマとは違う意味で四方から攻撃される。もともとの攻撃力もあるし氷が鋭いから辛いぞ」

「まあチートだと予想はしてましたけどお！」

「対策はリタと同じで無い。まず氷を破壊できるほどの攻撃力がなきゃ勝つのは不可能。まあ硬いって言ってもそれに魔力を全部込めてる訳じゃねえから破壊は可能だけど割に合わねえ。ダドマとギルギアは相性良いな」

「∴別次元にも程があります」

「次はアンジェレネ、俺的に運が良ければ優勝候補」

「そうなんですか！！？」

「戦略は簡単、闇討ち奇襲なんでもござれ。武器のスペックが神の

武器ばかりで高すぎるし、純粹に接近戦もかなり強い」

「闇討ち奇襲ですか？」

「アンジェレネの魔法は世界を創造して移動する魔法、んでこの大会に場外はあるけど、その世界とは層がずれてるだけで認識も接触もできないがそこにいるんだ。つまり場外ではない、制限時間も無い。つまりアンジェレネはいつでも奇襲してきて少し怪我したら戻って休めば良い。でもいつ攻撃されるかわからないから気は抜けない、魔力も体力も削られる」

「…」

「対策としては一撃勝利、一撃で気絶させれば勝てる。相性はシーレイが最悪、世界移動したらその時点でアンジェレネの負け、未来読まれてカウンターで終了」

「チート集団爆発ですね」

「次シーレイ、戦略としては未来を確知して避けて攻撃を繰り返して相手の動き遅くして終了」

「動きてどれくらい遅くなるのですか？」

「1万分の1つつ遅くなる」

「どこかショボい気が…」

「基本的に乱打戦は1秒で100回くらい攻撃を放つから、合計200回触れることになる。すると1万分の200遅くなる。つまり

50分の1遅くなる。…たぶん見た方が早い、かなりエグいぞあの魔法」

「1回戦一撃ですからね」

「次は静紅、戦法としてはどこにいても静紅にとっては近距離だ、近接戦の鬼だなあいつは…」

「んたどういうことですか？」

「まず次元破壊は次元の切れ目に入ると強制的に入った部分が移動する。つまりどの距離にいても360度全方位から攻撃が来るかわからない。しかもだ、近距離戦で静紅が防ぐとするだろ？拳を腕で防ぎました。手首から先は使いません、なら次元の切れ目にいれて背後から手刀で刺せる。防御力も高いからなく常に動き回って足を止めないことが重要」

「チートじゃない人はいないんですか!？」

「たぶんいねえ。…リーベの戦略は超簡単！再生力が半端じゃないから、ガンガン肉も斬らせるし骨も断たせるけど命は貰うわねって感じ」

「うわあゝ」

「再生力も厄介だけど一番は黒霧だな。破壊は不可能、黒霧自体の防御力も高いし、視界も誤魔化せるし、吸血鬼だからもとの攻撃力かなり高い。しかも黒霧の中じゃ身体の部分移動も可能だ。対策なんて頑張れとしか言えないくらいだ」

「なるほど、ありがとうございます。つまり絶対強者級は全員ド腐れチートなんですね」

「…まあそうなる」

「参考にはなりませんでしたが興味深い説明ありがとうございます」

「どういたしまして」

「それでは最後に明日の試合の見所は？」

「シーレイVSアユリ、アンジェレネVSダドマ」

「次回あるかわかりませんがまた会いましょう！」

「寝よ」

解説タイム（後書き）

こんな感じの台詞のみの話も番外編とかでちょこちょこやる予定です
気付けばユニーク数が1500を超えてました
びっくりです

シーレイVSアユリ（前書き）

バトルつす

シーレイVSアユリ

「2回戦第3試合!!! シーレイ選手VSアユリ選手の試合です！
両者共に絶対強者級!!! どちらが勝つのでしょうか!? オッズは
こちら」

シーレイ2. 3倍

アユリ2. 5倍

「ややシーレイ選手が有利ですね。どうでしょうか? 解説の飛影選
手」

飛影は2回戦の第1試合だったため、すでに3回戦に進んでいる

暇だったのもあり飛影は解説役になったのである

「そうだなあゝアユリは読めても避けられない広範囲の攻撃とかが
あるからシーレイ的には辛いかなゝでもアユリも速度がめっちゃ速
いわけじゃないから厳しいと思う。まあどっちもどっち」

アユリは準備万端

シーレイも眠そうであるが魔力は解放していて準備はできていた

「それでは試合開始です!!!!!!」

「いくわよ?」

「…いいよ」

《魔氷・ソード》

氷を創造する

剣の形をとり構える

対するシーレイは無手で構えもとっていない

「対策はできてるな」シーレイの魔法は触れたものの動きを遅くするものだから、剣に触れられても剣を捨てれば遅さは消える」

「なるほど」

対峙しているが攻められないのはアユリの方である

未来確知を持つシーレイの得意技はカウンター

下手に攻めるとダメージはでかい

「ちなみにシーレイさんの未来確知はどっちが勝つってわかってる？」

アユリの問いにシーレイは空を見上げて何かを考えているような動作をする

「…私…負ける…確率…高い…」

「そうなんだ」

少し安心するアユリ

一つ深呼吸をして戦いの精神に持っていく

《魔氷・フィールド》

魔法を構築する一瞬前にシーレイは飛び上がり魔法ではない本来の神の翼で空中に浮く

次の瞬間世界が凍りつく

半径500m

全ての地面が氷に覆われる

「…」

シーレイは無言で手を上げる

一瞬光が集まり巨大な鍵が現れる

「あれは？」

「神の武器、特徴はない。ただの硬い武器」

刃もついていない巨大なハンマーのような鍵

シーレイは振りかぶり全力でそれをアユリに投げつける

《魔氷・盾》

アユリは動かずにコース上に氷を構築

氷と鍵は相殺し

氷は粉碎

鍵は弾かれる

「…ん」

弾かれることも弾かれた先もわかっているシーレイは一直線に移動

接近しながら鍵をキャッチしアユリを叩き潰すために振り下ろす

だらけきっているシーレイの攻撃

しかし身体を鞭のようにしならせ放つ攻撃はかなりの力となる

「ぐっ!!」

《魔氷・自動攻撃》

《スロウス》

剣で受け止めると同時に地面の水がシーレイへと襲いかかる

剣は折れずにシーレイの攻撃を受けきった

しかし身体の動きが僅かに遅くなる

シーレイは氷柱のように迫る攻撃を軽々と避けて再び羽ばたいて接近

《魔氷・拳》

すぐさま剣をシーレイに向けて投げ捨て拳に氷を纏わせる

ドでかい武器を担いでいるシーレイには今は手数がない

《魔氷・星空氷華》

空中

空中を星のように氷の球体が出現する

シーレイは襲ってくる剣を撃ち落とそうと構え

《魔氷・領域》

一瞬で羽ばたいてその場から離れる

剣が爆発したかのように氷が鋭く全方位に伸びる

それと同時に空中に漂う氷も次々と空を侵食していく

その間を縫って避けられないものは粉碎しながらシーレイがアユリに接近

最後の薄い氷を粉碎するために鍵を全力で投擲し粉碎

できた隙間

隙間を抜けた瞬間アユリが笑う

「とった!!」

《魔氷・槍》

それを待っていたアユリ

出てくる場所がわかるように氷を伸ばして誘導

空中に浮いている氷の球体

3つ

すべて槍となりシーレイへと放たれる

さらに背後からも氷柱が襲いかかる

《スロウス》

絶体絶命の中シーレイが行った行動はただ一つ

投擲

キラリと光る小さな氷を周囲にばら蒔く

氷はシーレイが砕いたものであろう

「え…？」

遅くなった

シーレイの背後から襲い掛かる氷柱

放った槍の速度が遅すぎる

速度を失っている

速度がたかだか10 km/h程である

そしてようやく何が起きたか理解した

「まっずい！！」

シーレイは砕いた氷に魔力を込めて触れることで速度を持たせないでいた

そしてばら蒔いた

ばら蒔いた瞬間にスロウスを発動し速度を無くした

くつついていたらくつついたものですら遅くする

アユリは魔法を解除できない

魔法を解除しても氷という個体は残る

一瞬で状況を判断し空中に氷を足場として作成

ばら蒔いた氷が地面に触れた途端にアユリの動きも遅くなるためである

それすらも確知していたシーレイはすでにアユリの目の前にいた

「っ！」

《魔氷・絶対防御》

《スロウス》

乱打戦

シーレイが狙っていた戦いである

氷がアユリの付近を漂いシーレイの攻撃を防いでいく

互いに打ち合う

アユリは拳に氷を纏って当てたら射出を繰り返す

シーレイは氷に触れながらも少ないながらも確実にアユリに拳を当てる

徐々に徐々にアユリの動きが遅くなりシーレイが優勢になっていく

「っっ」

《魔氷・相刃》

シーレイを離そうとギロチンのような巨大な氷の刃を上下から放つ

一瞬早く後退しそれを回避する

僅かな乱打戦

その間にシーレイは38回触れた

《魔氷・アイスタ임》

世界が凍った

避けられない一撃

「ようやく溜まったわ」

ふるふると頭を振る

闘技場半径500mの空間

すべてが氷で包まれた

アユリの切り札の一つ

全てを凍結させた

無事なのはアユリの周囲50cm

ギリギリアユリのみが生き永らえる空間だけである

シーレイは避けられないと察していてポケットと突っ立ったまま氷漬
けになっていた

腕力での脱出はもはや不可能

氷が周囲をうめつくし

かつ

閉鎖的な空間

かつ

アユリの魔力が空中を漂っている時限定の切り札

「ああ、これ使うつもりなかったのに」

絶対強者級は基本的に切り札をいくつも用意している

そして切り札をあまり使わないで戦う

理由は簡単で対策されるからである

ラインの場合は幻想魔境が切り札であり主力である

ド腐れチートと言われる要因として対策がないことがあげられる

38回シーレイに触れられ再び乱打戦になった瞬間にアユリの敗け

は確定していた

そのために切り札を使用したのである

「：試合終了だ。あれは抜けられん」

啞然としている実況

ハッと我にかえる

「試合終了！！！！！！勝者アユリ選手！！氷で周囲を埋めつくしシーレイ選手は身動きが取れません！！！！！！」

「ダドマ結界解除、アユリ魔法解除」

「あいよ」

「はい！」

飛影が肩を回し魔力を練る

ダドマが結界を解きアユリが魔法を解除する

アユリの魔法が解けた氷はただの氷である

《炎舞・瞬間解凍（黒炎）》

飛影が氷に手を当てる

一瞬

ほんの刹那の間に氷が消滅した

蒸気すら発さずにである

氷で生き埋め状態から解放されたシーレイは一度羽ばたいて着地

翼を引っ込める

「ありがとう飛影様」

「…ありがとう」

切り札を使用した氷の処理に困っていたアユリ

少し考え足らずなのがたまに傷である

「さあ！！壮絶な試合が終了しました！！！！！！勝者は天界の我らが魔王補佐アユリ選手です！！！！」

『うおおおおお！！！！！！』

熱狂と共に野太い黄色い声援がアユリに捧げられる

場所が天界であるため

アユリが可愛いこと

これらが重なり大量にファンが観客としてるのである

「…負けた」

無表情でだるそうにしているシーレイが見せる少し落ち込んだ表情

「けっこう危なかったわ」

二人とも損傷はあまりない

押せ押せの性格ではないことも深く影響しているが

シーレイに攻撃が当たらないのとシーレイの攻撃が動きを遅くするために乱打でダメージは度外視しているためであった

「また、戦いましょ」

「…いいよ…次…広い…場所…戦う」

いくら攻撃や動きが読めても避けられる隙間がなければどうしようもないのだ

「わかったわ」

花のように微笑んで再戦を約束する

シーレイVSアユリ（後書き）

文章の数があまりかせげないです。

シーレイ敗退っす

ダドマVSアンジェレネ(前書き)

更新遅いですスイマセン

お気に入りがあると1件で20件になります！
逆に19人の方、見てくださっている方ありがとうございます

ダドマVSアンジェレネ

「本日最後の試合！！ダドマ選手とアンジェレネ選手です！！！！！！」

修理するのが面倒となりリングはいらないという判断であるため、半径500m全て土の地面に変わっていた

対峙しているのは

ダドマとアンジェレネ

ダドマは人間形態に緑の龍の尻尾が生えている

アンジェレネは神の翼を出している

両者共に準備万端である

「さあ両者のオッズはこちらになります！！！！」

もはや慣れているのか絶対強者級の試合では観客席から実況をしている天使

オッズが画面に表示される

ダドマ2．8倍

アンジェレネ2．3倍

「おおーと！！アンジェレネ選手の方がオッズが低いです！！！！」

原因としては先日のテレビでの飛影の発言である

魔王が認める優勝候補

そのため、アンジェレネの方が勝つと予想されている

「ほう」

少しカチンときているダドマ

頬をつり上げ笑っている

「ぎゃあああああ！！！！ダドマさんがキレてますよ！！！！？私死んじやうじゃないですかあ！！！！」

顔面蒼白

遺書でも書こうかと思っているアンジェレネ

「頑張れアンジェレネ」

飛影の励まし

「はーい！！頑張ります」

一瞬で元気を取り戻すアンジェレネ

単純思考である

「それでは試合開始！！！！」

火蓋が切って落とされた

一瞬で意識を切り替え空中からダガーを二本取りだし構えるアンジエレネ

対するダドマは手を前に突き出すだけ

《天変地異・無限一手》

全魔力

魔王の底無しともいえる全魔力を手に集中

およそ1億トン

まずは肩慣らしと1億トン程の水を圧縮し放つ

直径5メートル

壁かとも感じてしまうほどの水の帯を超圧縮し超高速で放つ

原理はウォーターカッター水を圧縮し高速で放つことでダイヤでさえ切り裂くと言われるウォーターカッターの純粹強化版

かすっただけでその部位周辺は弾けとぶ圧力の塊

（うゝわゝ喰らったら痛い所じゃないですねゝ）

アンジェレネは全力で横に羽ばたく

一直線の攻撃なので避けるのは容易い

そのままダドマに接近

だがダドマは構えもせずに再び手を向ける

《天変地異・無限二手》

《方舟》

再び同じように全魔力が込められた巨大ウォーターカッターを放つ

上空に飛翔することでそれを回避

しかしアンジェレネの進行方向

最初の一本目の攻撃が降ってきていた

方舟で移動させた攻撃

下手に曲げないことで勢いはそのままである

「ぎゃあああ！！！！」

急停止

急後退

全力で避ける

「ふははは!!」

テンションMAXダドマ

通常なら一手で終わるからである

《天変地異・無限三手&四手》

今度は両手を使い2本放つ

合計4本

「む…無茶苦茶です!!!!!! ありえないです!!!!!!」

かすったら死亡する一撃が四本

ダドマ自身大雑把なためまだアンジェレネなら避けられる

だが

攻撃もできず受けているだけ

魔力が無限のダドマ

解放していて身体強化をしているアンジェレネ

長期戦は不利である

「鬼い!!! 悪魔あ!!!」

方舟で一発残らずあらゆる角度から攻撃が続く

リタのような光速ではないアンジェレネは近付くことはほぼ不可能

「残念だが一つもあてはまらない!!!!」

鬼は飛影やリーベ

悪魔はアユリでダドマは龍なのだ

屁理屈といえば屁理屈である

《天変地異・殺戮水落下》

上空

半径500mの結界

その全てを覆いつくすような水が出現される

「ひゃっは!!落ちろ!!」

総合計1000億トンはくだらない水が墮ちてくる

「ふざけてますよ!!!!」

避けているのが精一杯

上空からの水は受け止めることはできない

もちろん4本の極太ウォーターカッターも止んでいるわけがない

「おら死ね!!」

「あゝもゝ使う気なかったのに!!!!」

それが遺言であると観客は思ってしまうほど絶体絶命な状況

《アンビリルワールド》

全ての攻撃が直撃する直前

アンジェレネの姿がこの世から

この世界から消える

「きたきたきたきたあ!!!!!!チート2号!!」

面白いバトルに飛影もアドレナリン大放出中

その顔は俺もやりたい俺もやりたいとまるで外見相応のような子供のキラキラした眼と笑顔であった

「お!!」

さらにダドマは笑顔になる

降ってくる水とウォーターカッターを魔法を解除させ消滅させる

アンジェレネの攻撃は完全に集中しなければ避けることは不可能

僅かな音や魔力の変化にも対応できなければならない

ダドマが集中し始める

「だからチートじゃないですよ飛影さん！」

そんな中結界を隔てていながらだが飛影の目の前にパッと現れプリプリと怒っているアンジェレネ

《天変地異・水刀》

「はっ!!?」

強烈な魔力と殺意に反応

《アンビリアルワールド》

一瞬で魔法を構築し再びアンジェレネの姿はこの世界から消える

ズパ!っと水でできた刀がアンジェレネがいた空間を裂いた

いや刀というのは表現が違う

常にウォーターカッターのように超圧縮で構成されているその水の刀は刃がギザギザになっている

水の超圧縮されたウォーターカッターのチェーンソーである

超圧縮しているため刃渡り1メートル程に見えてもダドマの意思次

第で500m程度なら刃を伸ばせる

全魔力が込められているそれは恐ろしく威力が高い

どのくらいの威力かといえは

「あっ手が無い」

ただの魔力である結界と攻撃という指向性を持たせた魔法

同じ全魔力を込めたものでも威力の桁が違う

つまり、結界を切り裂いて飛影の手首を切り裂くほどである

「おおゝわりゝわりゝ加減間違えた」

ダドマは大雑把であり

全魔力を込めているので調整は苦手なのだ

そのため目測を誤った

「ほっほう」

再びダドマは結界を張り直す

「あっ手が無」の時点で飛影の手首は再生したが飛影のこめかみは
ピクピクと痙攣していた

「よっしゃ!!ぶち殺す!!」

一瞬で臨戦態勢に移る飛影

『ストオつつつつつつつつッ！！！！！』

大会中の横槍は即失格である

慌てて止めに入る絶対強者級達

当然ながら完全臨戦態勢である飛影を止めるのには彗でも秋野でもエリアでもセリエでも火月でも不可能

実力に差がありすぎる

それを知っている火月以外は止めに入っている者に頑張れとエールを送るだけである

火月は椿によって確保という名の保護をしている

「あんにゃろくいつかぶち殺す」

さすがに暴れられないと判断した飛影は大人しく諦める

「さて…」

ダドマは気を取り直し周囲を警戒する

アンジェレネの姿はない

(…しんどいな)

狩るものと狩られるもの

さっきまでと立場が逆転する

ダドマは魔力は無限でも体力は有限である

得意なレンジは中距離〜遠距離

接近戦のアホみたいな体力は持っていない

「えい」

「っ！！」

能天気な掛け声をあげながらアンジェレネは出現

ダドマが反応した頃には両手のダガーでクロスに斬りかかっていた

咄嗟に腕を盾にする

ギリギリ間に合い防御に成功

パキリと何かが折れる音

ダドマの腕は防御した際に龍化したため、服の内側は輝く緑の鱗で覆われている

ギルギアの鎧とも言われるほどの硬度を持つ鱗に比べれば硬くはない

しかし龍の鱗である

ダガー程度で傷がつくわけではない

「わゝお、この武器でも駄目ですか」

「つてか痛え」

ばきりと欠けたのはダガーではなくダドマの鱗であった

アンジェレネの所持している武器はただの武器ではない

神の武器である

だから外見はただの切れ味が良さそうなダガーであるがダドマの鱗くらいなら折ることが可能である

「んゝなにか良い武器なかったですかねゝ」

ダガーを一通り眺めて傷がないか確認するアンジェレネ

その隙にダドマは水刀で斬りかかるが

《アンビリルワールド》

一瞬速くアンジェレネは創造した世界へと移動する

「っちー!!」

ダドマは舌打ちをする

捕まえるのがかなり辛いのである

一撃当たれば確実に倒せるのだがその一撃が遠い

「ふっふっふ〜ダドマさん!! 覚悟ですよ!!」

再び現れたアンジェレネ

その手にはダガーではなくかなりボロボロに汚れて何も斬れそうにもないなまぐらのような大剣

アンジェレネの背丈ほどの大きさをアンジェレネは片手で持っている

「あ? なんだそりゃ?」

物凄く嫌な気配がその大剣から発せられる

ニコニコと笑い宝物を見せびらかすかのように振り回す

「これはですね〜オグアロイゾっていう剣です。通常時はなんも斬れないなまぐらなんですけど…別名龍殺しの剣です!」

オグアロイゾ

神の武器の一つ

その威力は龍族の前で発揮する

「…あゝまじかよ」

ダドマはかなりの億単位の年齢である

そして龍であるダドマにとってオグアロイゾはアンジェレネよりも恐ろしさを知っている

かなり諦めたような表情である

「天敵すぎるわ」

《天変地異・とりあえず試射》

やる気を根本から切り裂かれたようなダドマは恐ろしく適当なネーミングで全魔力を放出して放つ

高速ではなくへによへによという効果音が似合うようなゆっくり具合で水の塊がアンジェレネに放たれた

「えい！」

それに対してアンジェレネも軽く振り斬る

ダドマの全魔力を込めたやる気のない一撃は一瞬で消滅した

「ああ…やっぱダメ？」

まるでその事をわかっていたようなダドマは大して驚かず納得した表情である

「そうですよ」

オグアロイゾ

龍殺しのこの剣は龍という種族を根絶するためにあるといい

龍の存在を無に帰すのがこの剣最大のそして唯一の能力である

なにも斬れない剣だが龍が触れた箇所は消滅する

「やっぱお前持ってたか」

お手上げとばかりに魔力を抑える

「まあそれが私の役割ですから」

アンジェレネもそれを見て魔力を抑えて剣を自分の世界へと送る

「ちっ！！わあったよ降参降参大降参！！ガチの殺し合いだったら諦める気はねえが、喧嘩のうっかりで死ぬほど俺は馬鹿じゃねえ」

両手を上げるダドマ

大きなため息をつく

「決まったああ！！！！なんとダドマ選手の降参ということでアンジェレネ選手の勝利です！！！！」

「いっえい！！！！」

ガッツポーズ

「さすがアンジェレネ…ド腐れチート2号の名は伊達じゃない」

「チートじゃないですよー!!」

ダドマVSアンジェレネ（後書き）

チートすぎワロタ

最初ダドマに勝たそうと思ったんですけどねゝ

なんかこの結果に…

飛影&ダドマ（前書き）

簡単に説明すれば

私個人の休憩目的で作った話です。

お気に入りか20件になるどころか23件になりました！！
本当にありがとうございます。

飛影&ダドマ

2回戦が終了し、残る絶対強者級は

飛影

リタ

ギルギア

アユリ

リーベ

アンジェレネ

静紅

残り7人

そして絶対強者級ではないのは3人

38人のトーナメント進出者が1回戦で半分の19人に減り、2回戦が終了し残り10人となった

そして飛影とダドマは何故かテレビに映っている

先日行った飛影と実況の天使の解説番組が好評であったため

大会主催者である飛影を主役にゲストを招き番組を続けようのと
とである

視聴率は天界だけであるが74・5%

驚異的な視聴率である

ちなみにだが

普通の試合は48・5%

絶対強者級が出る試合は76%

絶対強者級同士の試合は80%を軽く越えている

テレビ局はウハウハである

それだけを聞くと暇人が多い天界という印象を受けるのだが

実際その通りである

今のイベント中どこもかしくもテレビをつけっぱなしで仕事を行っ
ていて絶対強者級の試合だと仕事の手を休めテレビを見ているので
ある

あまりにも速すぎてわからない者が大半だがそれでも雰囲気だけは
伝わるのである

視聴率が高い理由として

天界でも複数あるテレビ局のうち放送ができるのは1局のみである
他のカメラや報道陣は新聞の記事のための取材である

選ばれたテレビ局は特別凄いというわけではなく大きなテレビ局ト
ップ3の中から飛影が適当にくじで決めたものであった

その運が良いテレビ局の番組

表向きは解説

思惑としては絶対強者級二人の会話で視聴率大量ゲットを目論んで
いる

絶対強者級二人の会話を見たいんだったらうちの学校まで来ればい
いのにというのは彗がぼそりと言ったものである

毎日のごとく飛影、リタは見ている彗

絶対強者級二人といっても慣れているものはあまりテンションは上
がらない

どこか不機嫌そうなダドマ

「2回戦負けザマア!!!」

「うっせ殺すぞ!!!!!!」

「いやまあチートだからしょうがないって」

「あんな剣出されたら詰むわ!!」

「ダドマ的に誰が勝つと思う？」

「あ？誰と誰が戦うなんざトーナメント表なんて見たことねえからわっかんね」

「えーっと、3回戦が俺とギルギア、静紅とアンジェレネ、リタとアユリだな」

「おおー面白そうじゃねか!!」

「はい予想は？」

「ギルギア、アンジェレネ、アユリだな」

「まあ妥当なところか」

「とりあえずお前とギルギアの戦いはお前がヘリオトロップ使うかどうか勝敗の鍵だな」

「あーヘリオトロップは使わんよ、あれ緊急時だから」

「じゃあギルギアの勝ち確だな」

「はっ！負けるか!!」

「んで…悩むのが静紅かアンジェレネだな」

「あー俺は普通に静紅だと思うぜ。アンジェレネが絶対私静紅さん

の前では使いません!! って」

「あゝ? なんでだ?」

「静紅の次元破壊はアンジェレネの世界にも行けるらしい。一度行くか、じっくりと世界の移動を目の前で何度も見なきゃいけないらしいけどな」

「あゝ神の武器狙ってんのか」

「静紅いわくちょっと欲しいお宝が一つあるらしい…まあ静紅は乱獲するタイプじゃなくて目的のものだけ盗るから俺は別に使っても構わないと思うけど…アンジェレネが泣きそうな顔でぶんぶん顔を横に振ってた」

「それだと静紅が勝つな…」

「まあなゝ個人的に楽しみなのは最速と最硬の戦いだなゝ」

「ああリタとアユリか」

「個人的にはリタのが勝つと思うんだよなゝ」

「最屑目か? アユリの氷粉碎できなきゃまず勝てないだろ」

「リタは多分砕ける、魔法の方の神の翼喰らってみ、まじで痛い」

「誰も喰らいたくねえよ!!」

「まあほんとあれは痛い、だから多分リタのが優勢かな? ただアユ

リが魔力に魔力込めまくれればリタじゃムリだな。だからリタはそれを防ぐためにガンガン攻めなきゃ駄目だけど」

「…難しいな」

「まあ基本的に俺らの戦いなんて予想つけれんからな」

「疑問に思ったことだが…リーベ戦ってないよな？」

「本人も言ってたなつまらないゝって」

「ラッキーなんだかアンラッキーなんだかわからんな」

「俺らからすりゃアンラッキーだろ」

「一緒にするな…戦闘狂だなお前は」

「はあ!!? 聞き捨てならん!!! ダドマも戦闘狂だろうが!!!」

「…今日はたまたまだ」

「嘘つけや!!! いつもだろ!!!」

「まあまあそれは置いてだ! 俺から一ついいか？」

「ああ!？」

「個人的にはギルギアの方を応援している、しかも実力的にもギルギアだろう…ただ残ってる面子を言ってみろ」

「俺、リタ、リーベ、アユリ、静紅、アンジェレネ、ギルギアがどうした？」

「そうだ！その面子だ…さてその面子の性別は？」

「…雄、…神って雌か？」

「雄雌じゃなくて男女で考えろ」

「あゝ？男、女、女、女、女、女………」

「気付いたか？」

「男は俺だけ？」

「そうなるな」

「腐れチートが二人も負けたからな」

「なんか雑音が…」

「腐れチートふた」

「つまりはあああああ！！！！…お前勝たなきゃ男って弱くない？ってか魔王雑魚じゃない？って感じになるわけだ」

「まあ言いたいことは大体理解した…どうしようか…」

「ヘリオトロップ使え！！」

「手出せずに負けたじゃん。一発も当ててないし」

「…ほお、上等じゃねえか!!」

「何立ち上がってんだよ!!!? なに魔力解放してんじゃボケエエ!!!!」

「そんなに言うならどっちが強えか白黒ハッキリつけようじゃねえか!!!!」

「アホ!! バーカ!!!! いつもだったら大歓迎だが今は無理だ!!!!」

「そんな関係あるかあああああ!!!!」

「関係大ありだ!!!!」

「うっせえ!!」

《天変地異・無限一手》

「ふざけんなド畜生おおおおお!!!!!!!!!!」

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

放送事故がおきた

しかもスタジオ崩壊級である

「…なにやってんだあいつら」

それをテレビ越しに見ていた彗が思わず呆れて呟いてしまう

飛影と相部屋

魔王からの招待客のためそれ相応の部屋に泊まっていたが初日から堪えきれなくなり、同じ感覚である飛影の普通の部屋に移動した彗

二人部屋である

「…彼等はバカだからね」

「うお!!?」

気配無く彗の後ろでテレビを見て苦笑しているライン

この部屋の唯一の難点は誰かしらやってくることである

「同じ魔王として恥ずかしいよ」

自分はまだまともだと思っているラインの発言

(自覚無しかよ)

「はあ…」

疲れと呆れで深い溜め息を吐いた

飛影&ダドマ（後書き）

二人の方から評価をいただきました。
ありがとうございます。

評価してくださった方、読んでくださっている方
ありがとうございます

静紅VSアンジェレネ（前書き）

気付けば38話です…

って微妙な話数ですね

読んでくださりありがとうございます

静紅VSアンジェレネ

「さあ！！！！3回戦！！2試合目！！静紅選手とアンジェレネ選手の戦いです！！！！」

3回戦レベルが高くなり観客の数もボルテージも鰻登りになっている状況

闘技場にはその場に似合わない少女二人が対峙している

アンジェレネはまるで獣のように静紅を威嚇し

静紅はニコニコと微笑んでそれを流している

「オッズはこちら！！！」

静紅2.6倍

アンジェレネ2.5倍

僅かにアンジェレネの方が高い

昨日の飛影とダドマの好き放題番組でアンジェレネ負けると言っていたが

使えば勝てると想像した客が使用することに賭けてベットした

アンジェレネはすでにダガーを構えて威嚇中

静紅は腕組みしながら笑っている

「まあとりあえず、あれだな…この試合はぶつかり合いじゃないが面白いぞ」

飛影は寝転がりながらも真剣な目で試合を観戦しようとしている

寝転がっている理由は簡単で、昨日の放送事故後ダドマに追い掛けられて無駄に体力を消費してしまったため、その回復である

「それでは…!! 試合…開始…!!」

《次元破壊》

試合開始の合図と共に静紅は魔法を発動

パキンとなにかが壊れる音と共に空間が裂けた

裂けた空間は闇の色

その不気味な闇色の空間に静紅は躊躇無く手刀を放つ

「じえい…!!」

アンジェレネは直ぐ様その場から離脱

アンジェレネがいた空間に同じ空間の亀裂が発生し静紅の腕が突き出していた

突き出した腕を狙ってアンジェレネはダガーを振り下ろす

しかし切り裂く前に腕が引っ込まれ回避される

「あらあら残念ね」

余裕の笑みを浮かべている

静紅が腕を引っ込めると同時に空間が修復される

「…」

イラ

と効果音が響いたような雰囲気拡がる

「こんのおー!!!」

一直線に静紅に向かって接近

勢いそのままにダガーを構え切り裂く

《完全領域》

と同時に静紅を覆うように円形のバリアーのような壁が発生する

ダドマの鱗を砕くことができた一撃

完全領域によって防ぎきられる

「あら残念」

「超キック!!!!!!」

微笑む静紅

腕より足の方が力が強い

それは当然のことである

全力で完全領域の防御壁に蹴りを放ち

《次元破壊》

防御壁に直撃する直前脚が亀裂に入る

「があっ!!!!!!」

背後から攻撃

次元の出口がアンジェレネの背中に配置されていた

アンジェレネは背後からの攻撃を避けられずそのまま防御壁に向け
吹き飛ぶ

静紅は完全領域を解除

「あら残念…これで終わりね」

拳を作り吹き飛んでくるアンジェレネに向けて放つ

《アンビリルワールド》

直撃する直前アンジェレネの姿が消える

「あら：残念。でも内臓は確実に痛めているはずだし、一回見れたから良しとしましょうか」

「強い強い強い！！！アンジェレネ選手を全く寄せ付けません」

無傷の状態でアンジェレネを負傷させた静紅

観客からも驚愕の声が響いている

「いや、完全にアンジェレネが悪いな。静紅とやるときは絶対に全ての攻撃を寸止めできるようにしなきゃならないのに振りきるからだ」

静紅と戦う上での鉄則である

静紅の次元破壊は亀裂に入れてしまえばどこにでも移動させれる

対策を練っていないと自分の攻撃がそのまま返ってくるのだ

「さて：と」

静紅はゆるりと正座してポケットからお茶を取り出す

余裕ではなく来るなら来るでもう一度世界の移動を見れるわけで、緊張して体力消耗が面倒だと思っているだけである

静紅は勝つためではなく宝を盗りたいという気持ちの方がでかいのである

飛影はマイクを切り後ろでボーとしているシーレイの方を向く

「:20」

あと何分後にアンジェレネが現れるか聞こうとする前にシーレイは返事をした

「了解」

ぐてえと飛影は寝転がって寝始める

20分

観客達はいっ始まるかわからない戦いに緊張してずっと凝視していた
きっかり20分後に飛影は起き上がる

マイクのスイッチをONにする

と同時

「だっらっしやああああ!!」

アンジェレネが現れるその手には槍が握られていた

《完全領域》

お茶を飲み団子を頬張っていた静紅だが魔法の準備はしていて一瞬で完全領域を発動

だが

当然アンジェレネの持つ武器が普通であるはずは無い

ただの全てが鉄の槍という非常に重そうで使い勝手が悪そうに見える槍

そのアンジェレネの槍は静紅の防御壁を豆腐のように貫く

「あら!!?」

余裕で防げると思っていた静紅に槍が放たれる

アンジェレネの全力の一撃で同時に衝撃波が巻き起こる

「ひゃ…ひゅ…ひょおおおおお」

ギリギリ僅か首の皮一枚切れただけである

首を捻り頑張って避けていたが

確実に避けれる自信は全く無く、首が飛んだかと思っていた静紅

「い…生きてるわ」

ほろほろと涙を流す静紅

「そのまま一回死んでください…い!!!!」

「ぐえ」

アンジェレネはそのまま槍を振り回し静紅を投げる

《次元破壊》

「ひゃああああああ」

投げられた静紅はそのまま空間の亀裂に飛び込む

アンジェレネは追撃を諦める

「あゝ死ぬかと思ったわゝ」

華麗に着地する静紅

痛そうに首を抑えているが微笑んでいる

「くっそゝ私は背中めっちゃ痛いのにゝ不公平です!!」

調子確かめるように槍を綺麗に振り回す

「その槍ってもしかしてシリウス？」

「?そうですよゝ結界殺しのシリウスです」

普通の槍よりも遥かに軽く遥かに強力な槍であるシリウス

当然神の武器である

特性は結界殺し

結界や防御壁をまるで豆腐のように破壊することが可能である

「またチート武器か」

軽く呆れている飛影

出るわ出るわのチート武器

シリウスとわかった静紅は諦めではなく歓喜の笑みと眼がキラキラと光っていた

「あらあら～やっぱり持ってたの？丁度いいわぁ」

「ま…まさか」

静紅の狙っていたお宝

「ちょーとほしいお宝があるのだけれど、強固な結界があって盗めないのよ。飛影君に協力してもらおうかとも思ってるのだけれど、それがあるとかかなり便利なのよ。」

本当に愉快そうに微笑んでいる

「え…偶然ってあるんですね」

汗をだらだらと流し始める

アンジェレネは今葛藤している

負けて気絶でもした日には確実に盗られる

シリウスを仕舞えば奪われることはないがあまり対峙している状況で使用したくない

「…決めました！！勝てば問題ないです！！！」

単純思考

しかし一番の選択である

「まあ何でもいいわ」

《次元破壊》

手刀

空間を越えてアンジェレネを狙う

「っふ！！」

その前にバックステップで距離を離してそれを回避

力の限り槍を前方、静紅に向けて突き出す

絶対強者級であるアンジェレネ

「∴あらあら」

ようやく自分が仕出かしたことを理解したアンジェレネ

ダドマの魔法が間に合ったからいいものの、あと少しでも飛影が気付くのが遅れた場合や、ダドマの魔法展開が遅かった場合は観客席の半分が消し飛んでいた

「えつとーアンジェレネ」

「はい！！？」

飛影の呼び掛けにビクリと震えるアンジェレネ

「…いや言いたかないけどさ、失格」

「ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ！……！！！」

「……………」

ル
ー
ル
上

殺し禁止が一番だが

観客を危険な目に合わせるのは二番目に重要である

さすがに飛影でも失格にするしかなかった

その場に崩れ落ちるアンジェレネと静紅

「スイーツが……」

「…お宝」

一人は優勝賞品を惜しんで

一人は宝が盗れなかったのを悔やんでいた

「……………試合終了おお!!!!!!まさかのアンジェレネ選手の反則敗けです!!!!!!これは予想外!!!!」

アンジェレネ側に賭けていた者達のブーイングが起こる

「シーレイ…わかってたか？」

煩わしそうにブーイングを聞きながらシーレイに問いかける飛影

「…うん」

「いや教えろや」

「飛影…気付く…大丈夫…アン…お仕置き」

ポツポツと呟いているシーレイ

「お仕置き?…なんかやらかしたか？」

「昨日…うるさい…睡眠…邪魔」

シーレイは睡眠欲が全てだとも勘違いされるほどの睡眠好き少女である

そのシーレイの睡眠を妨害したものは必ずお仕置きされる

「…」

神様なのに運がないまだ崩れ落ちているアンジェレネを見て

少し誇らしげなシーレイを見て

飛影は深い溜め息を吐いた

静紅VSアンジェレネ（後書き）

うゝん

良いバトルが書けない

ちよいとミスですねゝ

女の子同士だと血生臭いのが書けないですorz

ってかノリで書いて気付けば反則負けのアンジェレネさん

リタVSアユリ（前書き）

ユニーク2000人越えてました。
本当にありがとうございます。

ここまで続けられているのも読んでいただいている皆様のお陰です

リタVSアユリ

「さあ！！本日2回目の絶対強者級の戦い3回戦第4試合リタ選手VSアユリ選手の試合です！！！！！！」

既に臨戦態勢へと移行している二人

その目は本気で戦おうとしている目である

「さて：アユリさん、願いの話は本気ですか？」

金鎧を軽く指で感覚を確かめるようにクルクルと回転させている

微笑んでいるがその目は笑っていない

「当たり前よ、それがどうかした？」

同じ微笑みで返事をする

「いえ：ただ加減はできないので悪しからず」

「：加減できると思ってんの？」

ピクリと頬が引きつった

「まさか：私が言ったのは死なないように気を付けてくださいってことです」

「へえゝあなたこそ氷漬けで永眠しないようにしなさいよ、失格な

んて嫌よ」

まだ試合開始前

殺気がぶつかり合い闘技場の地面にヒビが入り始めているのはご愛嬌である

「あれ？あの二人仲悪かったっけ？」

ふと疑問を感じる飛影

自分がその張本人とも知らない飛影

「…えっとオッズはこちらです！！！」

リタ2・3倍

アユリ1・9倍

アユリの方が高い

だが二人にとっては全く関係ないことである

「試合…開始！！！！！！！！！」

《神の翼・突》

《魔氷・壁》

二人は合図と共に同時に魔法を発動

しかし圧倒的な初速の差

光速の神の翼の突きは魔力があまり込められないで生成した氷の壁を粉碎

アユリに襲いかかる

「っ！！」

氷の壁を作ると同時に跳んでいたアユリはなんとか回避

《魔ひよ》

《神の翼・突》

それと同時に動きを先読みし、魔法を構築する暇も与えずリタは12本の神の翼でアユリへ攻撃を放つ

ギリギリ足場にできる程度の氷を作成しながらそれを避けるアユリだがリタは僅かに大きさを調整しているため、避けきれず頬にかする

《神の翼・薙》

突きの光速と光速には劣るが範囲がでかい薙ぎ

(厄介すぎる！)

近付くことも魔法を構築する隙もないリタの得意なレンジで戦わさ

れている

僅かな判断ミスで試合が決まる

アユリのフィールドは発動に0・03秒かかる

地面を凍らせることができるならば回避しながらでもリタに攻撃をすることは可能

だが0・03秒

ただの一瞬

しかし、その一瞬でリタの攻撃は突き刺さる

《神の翼・突》

《キュリクレイ・波》

一瞬

16本もの神の翼の突きをほんの僅かな時間差で放つ

「くっ!!」

速度と攻撃力できに全力で避けるに徹しなければならぬ

しかし、避けるに徹していても攻撃は当たってしまう

横腹を神の翼が切り裂いた

深くはないが、浅くもない一撃を喰らってしまう

そしてできたキュリクレイの構築時間

リタは光の周波数を変える

実際に見える可視光線

情報を乗せてデータを送信できる赤外線

人体に影響がある紫外線

光のベクトルを操ることも可能のキュリクレイ

光は電磁波の一種である

つまり光を司るリタは電磁波も扱うことが可能で

周波数を変えることで携帯電話の電波にも使えることができ、赤外線にも利用可能

さらにいじれば可視光線、マイクロ波にも変換可能である

さて、マイクロ波

これは電子レンジに使用されている

電子レンジはマイクロ波を使用して分子を振動させて温める

それ以外にも濡れた猫を電子レンジで乾かそうとして起きた悲劇な
ども都市伝説も有名である

人体にあてたら血液が沸騰するか人体が膨脹し爆発なども起きる

そんなマイクロ波

リタはキュリクレイでそれを再現

可視することはできないマイクロ波だが、魔法により赤い光を放っ
ている

リタはそれを躊躇無く放つ

神の翼を避けるのに専念していたアユリ

広範囲に行き届くように調整されたその一撃

赤い光がアユリに放たれる

「…まず!!」

攻撃の気配に気づいたアユリ

しかしその攻撃を防ぎきるほどの魔法を構築する余裕は全く無い

足場を頭上に作成

くるりと一回転して地面に向けて突っ込む

無理矢理地面に潜ることでリタの攻撃を回避する

《魔氷・フィールド》

そして、ようやくアユリはきちんと魔力を込められた魔法を発動できた

「ちっ！！」

リタは軽く舌打ち

闘技場内の地面が氷で覆われる

「さて：ようやく防戦一方な試合から解放されるわ」

一方的な試合からようやくフィールドを発生することができて、リタと戦う上での最低限の準備が終わる

云わばここからが本当の試合となる

代償は小さいとはいえない

腹部の傷は氷で傷口を固め、出血を抑えて痛覚も麻痺させているが、身体の動きは少し制限されてしまった

「そうですね、ここからが本番ですね」

リタとアユリの距離

約500メートル

距離を詰めるなら常人ならば50秒程度で可能であろう

だが、一瞬

《魔氷・ソード》

まばたきをしている瞬間に二人は互いの武器で攻防を繰り返す

リタの”粉砕”の付加が付いている金鎚でもアユリの魔法で生成された氷の剣を壊すことは叶わない

武器対武器

二人とも自分の手足のように操りぶつけ合う

合間合間に拳や蹴りを放ちながらも二人の戦いは互角

《キュリクレイ・光玉》

《魔氷・絶対防御》

光の玉がリタの周囲を漂い

氷の玉がアユリの周囲を漂う

アユリの攻撃を光の玉が防ぎ

リタの攻撃を氷の玉が防ぐ

全くの互角の試合

《キュリクレイ・位相》

リタが自身の光の屈折を操り左横腹を狙った右蹴りを

右横腹を狙う左蹴りに見せる

しかし、攻撃の気配で防御する絶対防御の氷は視覚に惑わされずリタの攻撃を防ぐ

《魔氷・自動攻撃》

《魔氷・拳》

アユリはリタへと氷の剣を投げる

リタの肩を掠め、さらに地上から氷の氷柱が伸びる

アユリ自身も拳に氷を纏わせリタへと追撃する

リタは全ての攻撃を避けきれないと判断し、アユリの攻撃を避けるのを諦めた

「があ…あ…!!」

アユリの一撃はリタの肋骨を全て粉碎する

その肋骨損傷の代わりに

《神の翼・突》

リタは超至近距離で神の翼を発動

「っ！！」

リタの右手から光速の一撃が放たれアユリを貫く

「く…」

《魔氷・フリーズ》

鳩尾から下腹部までを貫かれながらも魔法を発動

神の翼を伝いリタの右腕を凍結させる

《神の翼・突》

全身に行き渡る前にリタは神の翼でアユリの首を狙う

「はぁ…ふ…」

「…ぁ…ど…する？」

体を神の翼が貫いているアユリはにこやかに血を吐きながら微笑んでいる

アユリの首筋には神の翼が

リタの首筋には地面からの氷柱が伸びていた

徐々に徐々に氷がリタの右腕を凍結させ肩にまでかかる

「…わ…たし的には…殺し合…いでしたら、…両方首が…飛んでます」

ピキピキと氷が覆っていく

光による光熱で氷を溶かしていくが少し凍結の方が速い

「そ…うね」

「試合…でしたら…はあ…」

リタはゆっくりと溜め息を吐く

肋骨がボロボロで呼吸するのでさえ激痛が走る

ため息と同時に血が流れ、それと同時に神の翼が消える

力無く落下していくリタ

「！」

下は氷である

しかもアユリ特製の氷

普通に10 m程とはいえ今のリタなら死ねる

アユリは氷結を解除

自身の傷を無理矢理氷で塞いで、リタの首根っこを鷲掴む

「はぁ…危ないわね…」

一安心

「アユリさん…貴女の勝ちです…私は…疲れたので…寝ます…」

少しだけ口元を緩ませ微笑みながら気絶するリタ

「試合終了…アユリの勝ちだ」

勝敗を分けたのはダメージの違いである

殺し禁止のため、リタは神の翼で殺さない程度の大きさで突き刺し、アユリは自分の拳で死ぬことは無いと判断して全力で殴った

その結果、リタは敗北した。

「試合終了おおおおお！！！！熱いバトルに勝利したのはアユリ選手です！！！！」

試合終了と共に結界が解除され飛影は直ぐ様闘技場に降り立つ

「あ…飛影様」

「良い勝負だったな…さすがアユリ」

ポンポンと労いの言葉と共に軽く頭を撫でる

（さ…！！触られた！！あの飛影様に頭撫でられてる！！！！え？
これは夢！！？いやもう夢で良いや！うへへへへ）

「ふぎゃっぷ！」

「ぬ？」

いきなり妙な奇声をあげてアユリはその場で気絶する

アユリとりタが地面に激突する前に飛影は二人とも風華で優しく浮かばせる

（疲れたのか？）

顔を真っ赤にしながら幸せそうな表情で気絶しているアユリ

自分のせいだとは思っていない飛影は医務室へとそのまま連行した

リタVSアユリ（後書き）

さて…更新遅くなりました。すいません。

リタはまだ若いんでアユリには勝てませんでしたね（相変わらず…戦いがしょぼくて申し訳ないです。

残りは飛影、アユリ、ギルギア、リーベ、静紅です。

次の試合は飛影とギルギアです。

次は丁度良く40話です。

次もよろしくお願い致します。

飛影VSギルギア（前書き）

ついに40話突破

アクセス20000超えました。

ありがとうございます。

飛影VSギルギア

「さあ！本日最後の試合：魔界の魔王飛影選手VS人間界の魔王補佐ギルギア選手の試合となります」

「この戦いは面白いぞ！！攻撃力最強と接近戦最強の戦いだ」

飛影は試合に出るため、ダドマが代わりに解説役をかって出た

「酷いよ飛影…」

飛影の武器である黒鋼

拗ねたように寝転がっている

ギルギアと戦う際に黒鋼が元気良く準備を始めていたが

やっぱり大丈夫と飛影が断ったせいである

先程から武器なのに：使用されない武器って一体：と嘆いているがもうあまりにも哀れすぎて誰も見る事ができない

そんな中飛影とギルギアはすでに100m程距離を離し構えもせず
にガン飛ばしあっている

「オッズはこちらです！！」

ギルギア1.6倍

飛影2・3倍

かなりの差で飛影が負けるとの予想が多い

それも当然で飛影はギルギアにあまり勝ったことがないからである

「はっはっは、やはり私の勝ちが決まっておるのう」

「はあ？なに言ってるんだか…」

ギルギアの勝ち誇った顔と飛影の小馬鹿にしている顔

表情は愉快に素敵に変わっているが
眼だけは睨んでいるままである

「それでは…試合開始！！！」

合図と共に衝撃波と轟音が鳴り響き、地面が所々亀裂が入る

しかし飛影とギルギアは構えも取らずただゆっくりと二人して歩いて近づいているだけである

「全く貴様ごときが我に勝てると思っているのならその思い上がりを粉碎してくれよう」

「逆にお前が俺に勝てるって自信はどこから湧き出てくるんだ？それが不思議でしょうがない」

ゆっくりと動きながらそれでも口は止まらない

相変わらず衝撃波と轟音と亀裂は止まない

「貴様と私の戦績を忘れたわけではあるまい」

「あ？579戦210勝369敗だがそれがどうした？」

いつそんな戦ったんだ？と飛影とギルギアを知っている者の疑問

「ほれそれが証拠じゃ」

「今日は勝つ日かもしれないだろ？戦績で全て決まると思うなよ」

「ふむ：それもそうじゃな、しかし貴様はヘリオトロープを使わないのじゃろ？」

二人の距離は残り40m

「まあな」

「何故じゃ？あれを使えば勝率は増すじゃろ？」

飛影のヘリオトロープはチートである

見たことがあり、名前も知っている魔法ならば使用できる

それはつまりラインの幻想魔境すら使用できるのである

「副作用がめんどくせーのがひとつ」

そんなチート魔法

副作用として使用した分だけ赤子にも捻り殺される程の弱体化時間が延びる

飛影としては個人的にその状態になりたくない

「それと…やっぱりお前には普通に勝ちてえ」

ニヤリと笑う飛影

「ふはは！面白い！」

それにつられギルギアもニヤリと笑う

二人の距離は10 m

今までの試合と違い

そして前の試合がリタとアユリの試合で余韻が残っているなか口しか動かしていない飛影達

観客も少し不満が募っている

「すげえな」

しかしダドマは

いや

絶対強者級は面白そうにそれを見ている

「ん？口喧嘩ですか？」

ダドマの感想に疑問を抱いた実況

「んあ？見えねえのか？あいつら適当に衝撃波をぶつけ合ってたんだよ」

歩きながら構えていない態勢から拳を振って衝撃波を発生させている所々の衝撃波と轟音と亀裂はそのぶつかり合いである

「うわーお…さすがにすごいですね」

「つつてもあいつらは準備運動の準備ってところだろ」

そうこうしている内に二人の距離は超至近距離になっていた

二人の距離は僅か50cm

轟音と衝撃波が止んだ

「さて…一つだけ言っておこうかの」

「あ？」

ちよつとだけ休戦ではなく

嵐の前の静けさのような雰囲気変わる

「我はこの大会の優勝にはあまり興味が無い。何でも願いが叶うというのなら貴様の顔面でも殴る程度しかないのでは…」

「すげえぶっちゃけたな」

「それでじゃ…ぶっちゃけてしまえば今ここで貴様と戦えるのじやから我はもうどうでもよい」

「つまり？」

「貴様も全力で来い」

ギルギアの抑えていた魔力が吹き出す

飛影は笑いながら頬を掻く

「困った…」

飛影も魔力を解放する

魔力同士がぶつかり合い渦を巻く

「そう言われると本気出すしかねえじゃねえか!!」

嵐が吹き荒れた

小手調べとでも言うように飛影とギルギアは互いの拳を全力で打ち付け合う

鱗にヒビが入る音と飛影の拳が碎ける音が響いた

「はっは!!」

「ふっははは!!」

互いに狂喜乱舞

狂ったように笑いながら飛影とギルギアは拳同士をぶつけ合う

飛影は攻撃する度に拳の骨が折れるが次打ち付ける時には大体完治している

ギルギアの鎧はヒビが入るだけで割れはしていない

拳と拳だけのガチンコ勝負

そして同時に後ろに飛ぶ

「お〜お〜超痛え〜」

ぶらぶらと拳を振る飛影

「めんどくさい再生能力じゃの」

同じように拳を振っているギルギア

「ふ〜一応俺力だけなら最強だぜ?なのに互角ってひでえ話だ」

「我なんて接近だけなら最強じゃが、自慢の鎧もヒビが入っておる。酷い話じゃ」

互いに溜め息を吐く

《グラビティ・重力砲》

《炎舞・王玉無炎ver》

そして同時に魔法を構築し放つ

ギルギアの手から闇色の重力を圧縮した玉が

飛影の手からは闇色の光すら焼いている玉が

同時に手を離れ

導かれるように攻撃同士がぶつかり合う

二人とも結果を見ないでもわかるといった感じで軽く腕を回したり、
屈伸したりと準備運動を始める

そして二人の攻撃はきれいに相殺した

「さて…良い感じ」

「ふむ…」

二人して頷く

「あぁちなみに今までの準備運動な…今からが本番だ」

は？つと観客が驚く暇もなく二人は激突する

《グラビティ・纏》

《炎舞・炎拳無炎ver》

ギルギアは拳に重力を

飛影は無炎を纏っている

先ほどと違い二人して全力で攻撃を避けて防ぐ

馬鹿みたいな攻撃力を持っている攻撃である

喰らえば痛いので済めば良いほどである

「おら死ね！」

飛影は無炎を纏わせた右足でギルギアに蹴りかかる

《グラビティ・天地逆転》

重力が飛影の真正面から襲ってくる

今の飛影にとっては地面はただの壁である

《風華・翔揺》

来ることを予想していたかのように飛影は風で体を浮かせる

「はっ！」

刹那にも満たない時間

飛影は動きを止めてしまった

それは大きな隙となりニヤリと笑いながらその飛影の顔面に拳を放つ

《風華・玄武》

飛影は風を纏う

その風は圧倒的な風力でギルギアの拳を逸らす

ニヤリと笑う飛影

「おらあ！！！！！」

攻撃を逸らされたギルギアは当然隙が生まれてしまう

態勢が不十分だが素手でギルギアの鎧を砕く飛影の拳にさらに無炎という強力な炎を纏わせた一撃

「甘いわ！」

《グラビティ・斥霊》

ギルギアの周囲に斥力が発生する

飛影の攻撃が押し返される

双方共に一撃を防がれながらも次へと動く

『死ね!!』

態勢が悪かった二人だがクルリと一回転しそのまま裏拳を放ち合う

飛影の右腕が吹き飛び

ギルギアの右腕の鱗が碎かれ同時に吹き飛ぶ

《風華・圧殺》

《グラビティ・圧陣》

吹き飛ばされながら同時に魔法を構築・発動

そして二人して横に吹っ飛んでいたがベクトルが代わり地面に叩きつけられる

風の塊と重力が二人を押し潰す

「ぐぎぎ!!」

「……の」

二人して喰らっているが攻撃を緩めることだけはしていない

どんどんと地面に陥没していく二人

ギルギアは鱗が軋み

飛影は再生する暇も無く骨が折れ続ける

飛影の再生力は無限ではなく底は当然ある

再生させ続けることで再生力は無くされる

「ふっざけ!!!」

《炎舞・無炎》

ただの無炎を飛影は痛みに耐えながら作り出す

その無炎が局地的陥没が起きている地面に触れた

瞬間に地面がなくなった

「っしゃあ!!!」

僅かな時間だが自由になった飛影は重力から脱出する

「っち!!」

対するギルギアは圧縮された風が周囲を囲んでいて動けない

《炎舞・ランス無炎ver》

再生を待たず飛影はそのまま無炎で槍を作成

そのまま投擲

狙っているのはランスで串刺しにすることではなく

「っち、まずいの！」

ギルギアの周囲を囲っている風に着火させることである

無炎が風に吸収され爆発的に燃え上がる

「…ふう」

と一息つく飛影

再生力が落ちてきていてまだ完治していない

「あゝ最悪じゃ」

光すら燃やす飛影の無炎

その中から不機嫌そうな声が届く

「服がなくなったのじゃが…まあよいか」

「がっ！！」

巨大な黒い何かが無炎の中から現れ横薙ぎに飛影を吹き飛ばす

せっかく完治した傷

だが今の一撃で左腕の骨は粉碎した

「全く、この姿は嫌いなんじゃがな」

風と炎が吸い寄せられる

無炎が綺麗さっぱりと無くなった

そこにいたのは龍であった

全長10m程

真っ黒な鱗の鎧に包まれている

仰々しい翼

見るものを圧巻させる圧力

四本の脚

黒い鱗はところどころ溶けていて飛影の無炎のダメージは喰らっていることがわかる

「なぜ我がこの姿を嫌っておるかわかるか？」

「知るか」

飛影は吸血鬼の翼を生やす

吸血鬼の力を使うことによって再生力を少しでも底上げさせる

もう再生力の余裕はない

「簡単じゃ…楽しめないからのう」

ギルギアはぶつかり合いが好きである

しかし、この龍の姿だと速度は当然下がってしまう

殴りあいができないのである

「ああ、そゆことね」

「あとはこの姿がちよつと嫌じゃ、不格好じゃからな」

見るものを圧巻するほどの姿ではあるのだが本人的には気に入らないらしい

「ふん」

飛影にとってはどうでもいいことで軽く流す

吸血鬼の翼を羽ばたかせフワフワと浮いている

折れた左腕は既に完治していた

「んでじゃ、疑問に思うのじゃが貴様手を抜いておるな」

「ん？そんなことはないが…」

突き刺すようなギルギアの視線

全力でやっているつもりで飛影にとっては身に覚えがないことである

「ふむ…では何故私の攻撃を受け止める？」

「いやそりゃ食らったら痛いだろ」

「違う…貴様は剛ではなく柔の強いじやろう？」

飛影は攻撃力最強である

さらには力同士のぶつかり合いではなく、飛影が得意なのは相手の攻撃を受け流してその隙を突くことである

「いや…性分的な問題だけど」

だが飛影が得意なのは柔であるが

好きなのは剛である

更にギルギア相手だと、ガチンコのぶつかり合いが可能であるため

飛影は使う気が全くない

「それが一つ目じゃ…もう一つは何故貴様はヘリオトロープを使わ
ん」

「最初に言っただろ」

「ふむ：了解じゃ、ならば」

ギルギアは溜め息混じりに大きな首を振る

《グラビティ・重力砲》

口を大きく広げ先程とは比べ物にならない威力と大ききの重力砲を放つ

《炎舞&風華・リコード》

風と無炎が合わさりレーザーのような無炎が放たれる

巨大な球体とレーザーがぶつかり合う

と同時に飛影とギルギアは距離を詰めていた

放った瞬間に相殺すると察知している二人

予想通りに相殺した

《グラビティ・圧》

《風華・颯》

飛影は風を纏って加速しギルギアの重力の範囲から離れる

ニヤリとギルギアは笑う

《グラビティ・天地逆転》

重力の向きが変化する

範囲はギルギアの前方全て

向きは横向き

「ぐっ！！！」

飛影は横からの圧力を受け吹き飛ばされ結界に激突する

「っ」

「チェックメイトじゃな」

魔法を構築する暇も無く避ける時間もなく

ギルギアの尻尾が飛影に叩きつけられる

全身の骨が碎かれる

「くっそ…」

飛影はそのまま受け身も取れずに地面に落下する

「…まだ…遠いな」

実力差

同じ絶対強者級であるが生きてきた年月が違いすぎる

「ふむ…久々に良い戦いじゃった。感謝するぞ」

仰向けに倒れている飛影

再生力が落ちているため、全然治りはしない

「はぁ…くそ」

震える右手を空へと伸ばす

その表情は本当に悔しそうであった

一度目を閉じる飛影

そして深呼吸

「これは…ギルギア選手のしょ」

完全に勝負はついた

そう判断した実況

「黙れ…」

ギルギアが言いきる前に実況を睨む

それだけで実況は声を出すことができず、恐怖に震える

「…ヘリオトロープ…起動」

ポツリと飛影は呟いて魔法を構築する

《ヘリオトロープ》

「ほお：ようやくじゃな：待ちくたびれたぞ」

ゆっくりと翼を羽ばたかせ宙に浮く飛影

《ヘリオトロープ・創造物質・服》

「ん？」

ギルギアの頭に服が降ってくる

「試合前と同じ服だ：人形形態になるなら着替えろ」

「ふむ：では着替えさせてもらおうかの」

パツと龍が消える

そして服を着た人の姿のギルギアが現れる

「我は準備完了じゃ、怪我は治さんのか？待っというてやるぞ」

あくまでも今あるベストな戦いがしたいギルギア

「んじゃあそうさせてもらう」

《ヘリオトロープ・レーリス・完全治癒》

光が飛影を包み傷が一瞬で修復される

そしてギルギアの傷も修復された

「ふむ…待ちわびたぞ」

「さて…んじゃやるか」

残りの魔力を解放

再び対峙する

「悪いが短期決戦だ!!!!」

「挑むところじゃ！」

《グラビティ・圧》

《ヘリオトロープ・グラビティ・浮》

同時に魔法を構築

上から下への重力と

下から上への重力がぶつかり合う

「っち!!」

舌打ちをするギルギア

威力は互角である

《ヘリオトロープ・廻眼》

飛影の目が紅く光る

視界にギルギアが入る

「ぐっ!!」

右腕が意思に反して廻る

逃れるには飛影の視界外に出るしかないが、実力が拮抗している同士そんなことは不可能である

(ならば)

手は一つだけ

ギルギアは飛影へと距離を詰める

顔面を粉碎すれば視界外になる

《ヘリオトロープ・次元破壊》

飛影は避ける素振りもなく、パキリと次元が破壊されギルギアの拳が吸い込まれる

「ぐっ!!」

自分の拳が自分の腹へと直撃する

《ヘリオトロップ・神の翼・突》

飛影の手から神の翼が光速でギルギアを突き刺す

ぎりぎり鎧で防ぐことができたが壁まで吹き飛ばされる

同時に廻眼により右腕が廻し切られもぎ取れる

「借りるぜ…セツネ」

《ヘリオトロップ・威雷&炎舞・紫炎一閃》

飛影の全身に雷が帯電

さらに

右手に雷

左手に無炎が纏う

ギルギアが受け身を取り攻撃を先読み

「く!!」

カウンターの要領で軌道上に拳を放つ

高速移動の弱点は急な軌道変化をできないことである

飛影はそのままギルギアの拳に向けて突っ込み

《ヘリオトロップ・方舟》

僅かに半步分ずれる

運動エネルギーはそのまま移動した飛影はギルギアの拳を避けて
無防備な胴体に打ち込んだ

ギルギアの弱点は雷である

防御力に特化していて衝撃すら吸収してしまうギルギアの鱗は雷を
通してしまう

紫無一閃

雷で相手の動きを止め

無炎で焼きつくす一撃

「くたばれや！」

拳を直撃すると同時に雷が全身に巡る

そして反転し、身動きが取れないギルギアへと無炎の

飛影の一撃が襲いかかる

「ちっ」

ギルギアが諦めて奥の手の使用を考えた瞬間

飛影はそのまま、その場に崩れ落ちる

「む？」

「…タイムオーバー&ゲームオーバー」

ポツリと飛影は呟いた

ヘリオトロープの弱点

それは発動時の魔力消耗が高すぎることである

拳を打ち付ける前に魔力がきれたのだ

「む…」

ピクリとも動かない飛影

「くっそ…」

「…こ…今度こそ決まりましたか？」

ビクビクと震えている実況

また同じ目にはあいたくないので、確認をとる

ギルギアはもう一度飛影を一瞥する

意識はあるが動く気配は微塵もない

「…ついたの、悔しいが引き分けじゃな」

「へ？」

「引き分けじゃ」

ギルギア的にはヘリオトロップを使わせることができ、双方とも奥の手は隠したままだったがとても満足のいく戦いになった

それにギルギアも魔力が少ないし、それ以上にもう満足してしまっただというのが一番の理由である

「…3回戦、最後の試合…勝者無し！引き分けです！！！」

静まり返る観客

壮絶な試合で最後が呆気なく終わり感想も浮かばない

飛影VSギルギア（後書き）

この戦いを一番書きたかったのではりきっていたら

長くなりました。

引き分けです。

飛影搜索会議（前書き）

めっちゃ遅くなりましたorz

申し訳ないです。

飛影搜索会議

3回戦最終試合

飛影とギルギアの戦いのあと

5分後に飛影の姿が忽然と消えた

理由はわかっているため、心配はしていない

ダドマとギルギアが宿泊している部屋に全メンバーが集まっていた

何故か会議室のスペースが作成されている

メンバーは

ダドマ、ギルギア、ライン、アユリ、リタ、アンジェレネ、シーレイ、リーベ、静紅と絶対強者級が9人と

杏、エリア、火月、椿、優希、彗、秋野、黒鋼の8人

セリエだけは年齢的に辞退したが、それ以外は全員揃っている

呆れ顔の彗と秋野以外は全員真面目な表情でいる

「さて、今回集まってもらったのは飛影が消えたからだ。理由としてはヘリオトロープを使用した後のデフォルメ化だ」

会議の始めとしてダドマが前に出る

反則的な魔法のヘリオトロープの反動である

デフォルメ化になり、周りからいじられるのが嫌な飛影は逃亡している

「詳しくはリタ、頼む」

ダドマは椅子に座り入れ替わりにリタが前に立つ

数式をホワイトボードに書き込む

$40 \times 5 \times 30 \parallel 6000$

「飛影は今回反動が6000分です。つまり一日が1440分なので約4日、飛影はデフォルメのままとなります。」

デフォルメ飛影は本当に小動物のようなものである

「っていうわけで、あれだ」

再びダドマは立ち上がる

「飛影捕まえたやつは好きにすればいい」

ダドマの言葉にギラリと数人の眼が光る

「それでは、期限は一応準決勝の2日後…それでは第7回飛影捕獲ゲームを開始する……」

バツと一瞬でリーベとアンジェネとアユリが散った

他のメンバーはゆつくりと立ち上がりふらふらどこかへと移動する

棊と秋野だけは溜め息混じりに自室へと戻っていく

「それで…なんでここにいるんですかあ!!!!!!!!?」

最初に発見したのは一番やる気の無かった秋野であつた

秋野が部屋に戻り寝ようとしていた時に何故か布団が膨らんでいることに気づいた

「まあとりあえず……秋野は安心だからな」

手足が棒で眼や口は・である飛影

身長というよりも全長は20cm

俗に言う可愛い小動物

おそらく胡座でおそらく腕を組みながら頷く飛影

「安心ですか……」

その隣に向かい合いながら座る秋野

「秋野は誰と相部屋だ？」

「私は優希とですね」

年頃も同じくらいで向こうから敬語必要ないですよと笑いながら話していた

意外と優希と秋野は仲が良い

だが優希の名前がでた瞬間に飛影はびくりと震える

飛影がデフォルメ状態で会いたくない者トップ5に入っている優希と同時にドアが開く

「…あとは頼んだぜ」

飛影はごろんと転がり布団に潜り込む

「…また布団に…」

「ただいま」

まるで仕事を終えたサラリーマンのようにビール片手に優希が帰ってくる

「うー飛影さん見つからない」

自分のベットに座りビールをちびちびと飲んでいる優希の隣のベットに飛影はいるのだが気づかない

「あはは…頑張ってとしか言えない」

乾いた笑みで返事をする秋野

飛影からの絶対に喋るなオーラが背中に刺さっている

「うゝ撫でくりまわして可愛がりたいのにゝ」

ビクウと飛影が震えたことを秋野はベットの振動で理解する

「確か…飛影先輩はあと4日はデフォルメのままだから大丈夫…だ
と思うけど」

チクチクと物理的に何かが背中を刺激する

何言ってるんだあほと飛影が布団越しに蹴りやら拳を当てているので
ある

「うゝん…良し!! 探してこよ!!」

ぐてゝとベットにごろごろしていた優希は再び立ち上がり勢い良く
出ていった

「…いってらっしゃい」

「精々頑張れ」

何も言えない秋野と勝ち誇っている表情の飛影

だが勝ち誇っているといっても眼も口も・のため一目ではわからない

「んで先輩はどうするんですか？これから」

「え？4日間逃げ切る!!」

宣言する。

まるで命がかかっているかのような真面目な声色

(…表情と合っていない)

軽く脳内で突っ込んでしまう

「どうやってですか？」

今の飛影では到底あのメンバー相手に逃げ切ることはできないだろう

「秋野…手伝ってくれ!!」

「えゝ」

面倒事だと判断した秋野

秋野は自慢ではないが飛影の面倒事に巻き込まれるのは慣れているのである

「…無事に逃げ切れたら、欲しいもんやる」

「いや…別にそこまで欲しいものはないとおもうんで」

特に欲はない秋野

断ろうとしたが飛影はニヤリと笑う

だが目と口が・の飛影は表情が変わったことすら気付かれない

「ウチの学校は弁当だろ？」

「そうですね、毎朝辛いですね」

秋野は実家から通っていて家族構成も一般的な両親姉弟の4人家族である

秋野の母親は料理が壊滅的で夜は父親が作っているのであるが、さすがに朝早く弁当を作る余裕はなく秋野が自分の分の弁当を作っている

「作ってやるぞ！」

「…っ」

ピクリと反応してしまった秋野

「いや…でも作るの優希じゃないですか！」

だが我に返る

優希が家事をしているのである

10分後

控えめなノックが秋野の部屋に響く

「秋野ちゃん入って大丈夫？」

椿の声であった

「大丈夫ですよ」

秋野は時計を見て、飛影を見て驚きながらも椿を招く

「ごめんねこんな遅くに」

時計は22…30を指していた

しかし秋野にとっては別に起きている時間である

気を使われていることに少し嬉しく思いながら椿の手に持っているものを注視する

飛影はとっくにベット下へと逃げ仰せている

「優希ちゃんは？」

「飛影先輩搜索です」

あゝと苦笑いを浮かべる椿

「じゃあとりあえず秋野ちゃんにこれ渡しておくからきちんと着て

おいて」

椿から手渡されたのは飛影の黒いコートであった

「大会っていつでも物騒だから自衛手段としてこれを着ておいてね、優希ちゃんにはこっちを渡してね」

そう言って椿はリタの黒いコートも渡す

飛影やリタの黒いコートはただの衣服でない

耐刃・耐衝撃・耐火が組み込まれていて、かなりの防御力を誇るコートである

椿は秋野や優希の自衛手段をあまり持たない女子に渡していた

通常時の飛影は全員に緊急時に発動する風の鎧の魔法を仕込んでいたが、その飛影が今魔法を使えない状態のため、緊急時に何かが起こった場合、守れなくなっているのである

自衛手段をあまり持っていないのは、優希、秋野、火月であり、火月は黒鋼がみていてくれるため、二人にコートを渡す

「いい？絶対に優希ちゃんにはリタちゃんのコートを渡してね！！飛影のポケットにはいろいろ入ってるから何か盗まれた場合、私まで怒られるからね！」

飛影のコートには四次元ポケットが内ポケットに存在しており、その中にはいろいろと危険物やレアな物など詰まっている

秋野なら興味があまりないので、盗まれることは無いが、優希はおそらく面白半分で盗む

「…了解です」

「んじゃ！おやすみ」

用事を終えた椿は長居しては迷惑だろうと考えささと部屋を出る
控えめに扉が閉められる

「…」

ベット下から這い上がってくる飛影を見る秋野

「うまくいったな！」

ガッツポーズなのか右手を上げる飛影

その動作は小動物のようで可愛い

「…驚きですよ。」

10分後に椿がコート持ってくる

作戦の一番始めに飛影が言った一言である

そしてその言葉通りのことが起こった

「まあ…とりあえず今日は凌げそうだ…ああとりあえずいつでもそ

のコートは着てろよ。今の俺じゃ護れないから自衛してもらわなきゃ辛い」

「わかりました」

寝巻きの上から黒いコートを着る

羽毛のように軽く全く重さを感じない

生地もそこまで厚くなく普通に快適に過ごせそうであった

「さて…と」

飛影は秋野がコートを着たのをしっかりと確認したあと

秋野に登る

軽い登山感覚である

「な…なんですか!？」

ひょいと登ってきた飛影を片手で掴み持ち上げる

UFOキャッチャーのようにぷらーんと垂れ下がる飛影

「…フードの中に入れてくれ」

まるで人形のような扱いに飛影はややショックを受けている

「?」

秋野はそのまま飛影をコートのフードに入れる

僅かに重くなるが気にするほどではない

すっぽりと飛影は包まれる

「んじゃおやすみ」

そういつて飛影はフードの中で寝始める

「え？ おやすみなさい」

反射的に言ってしまった秋野

飛影はすでに寝息をたてている

（はや！！そして私仰向けで寝ることができなくなったああ）

当然コートのフードは首の後ろについている

そこに飛影が寝てる

仰向けで寝た瞬間プチッと蟻のように潰れるのは確定している

「まあいつか…」

軽く溜め息を吐きながらも秋野はベットに横になる

「あ…」

寸前に起き上がりメモにささつと優希へコートのことを書き置きに残し今度こそ寝た

飛影搜索隊：一日目捕獲失敗

飛影搜索会議（後書き）

さて：まず飛影の副作用は残り3日で

準決勝が残り1日後になるので
明日凌げばなんとかあります。

生き残ることができるのか！？

そして隠された巨大な陰謀
今物語は動きだす

といいな～

次話は恋する乙女秋野が主役です～

佐藤秋野の不幸な日（前書き）

今回は秋野が主役です

佐藤秋野の不幸な日

「え」と

秋野は困惑していた

周囲を見ればほんの20人ほど

見るからに強そうですという体格の屈強な男共が秋野を囲んでいた

雰囲気的には一発触発

なにかが起きればすぐにでも戦いと言う名のリンチが始まるであろう

野次馬的な者も多い

この大会では野外試合も多く野外試合だと思われているため止めようとしてもしない

囃し立てるだけである

男達は全員銃や剣を所持している

周りには野次馬だらけ

止めてくれる頼りになる人材はいない

いや

正確には一人いるが今の飛影に何を言っても無理であろう

秋野はフードに入っている飛影の言葉を思い出す。

「あの中に魔法使いがいるぞ」

冗談ではなかった

もはや状況についていけない

(うう……どうしてこうなったああ)

なぜ普通の女子高生である自分がこんな目にあっているのだろうか

朝

秋野は気分良く目覚めた

朝は弱い方であるのだが今日に限っては何故か目が冴えている

さらに言えば仰向けではなく馴れない横向きに寝ていたが体に痛みはない

逆に睡眠を効果的に摂取できたかのように完璧で気分は最高である外を見ると晴れていた

「良い天気だな」

軽く日差しを浴びて伸びをする

優希を見るとおそらく頑張っただろう、まだ爆睡していた

きちんとコートを着用しているのを見て一安心する

（お風呂入ろ）

今の気分は最高潮

風呂に入りさっぱりして散歩に行こうとプランを脳内で考えながら浴室に向かう

ひとつの部屋に必ず浴室はある

大浴場もあるが、人が多すぎるし面倒なため秋野的には部屋の浴室の方が好きであった

洗面所でコートを脱いで辺りを見渡すが服をかける場所はない

まあいいかと秋野はコートを地面に落とす

「へぶっ」

何か妙な音が聞こえたが気分が良すぎて気にならない

寝巻きを脱いで上のスポーツブラを外し、下着を脱ごうと手をかけた時に何かを思い出す

（あれ？　そういえばなんで飛影先輩のコート着てるんだっ……け！
！！）

「おい…秋野落とすなんてひどいぞ」

もぞもぞとフードから這い出る飛影

すっかり飛影のことを忘れていた

そしてご対面

飛影の角度からだとかかなり際どいことになっている秋野

『…』

固まる二人

どんとどんと羞恥で顔が赤くなっていく秋野

（あ…これまずい！！）

この先の展開を確知した飛影

叫ばれる

優希起きる

飛影発見

死

ぶっちゃけると飛影は裸を見てもだからどうした？レベルなのだが
当然女子高生の秋野には下着姿はさすがにまずい

「えゝ秋野」

飛影は高速思考でこの場を乗りきろうと台詞を考える

口がパクパクと動いている秋野

そろそろ声帯が激しく震幅するであろうことは容易に予想できる

必死に考える飛影

「……」

「あ…あ…ああ」

（まずいまずいまずいまずいまずい！！！！！！！！！！）

涙が眼に溜まっている秋野

（考えろ考えろ！！！！なにがある！！！！この状況を乗りきるにはなにがある！！！！？どうする俺？）

飛影は今までの200年以上生きてきた中での経験を生かそうと思

頭が混乱しているのか少し遡りすぎてしまった秋野

周囲を見るとまだ動いていない

よし！と秋野は再び現実逃避へと遷移する

結構余裕がある秋野である

「酷いですよ！！謝罪を要求します！！！！」

その後、秋野が風呂から上がり、寝間着からTシャツとズボンに着替え黒のコートを着て散歩途中である

女子高生な乙女の裸を見ても謝罪が無い飛影

「あゝ悪かった」

秋野の散歩は適当である

今は露店がわんさかであるため、適当に歩いて露店を冷やかしている

世界間でのいざこざをなるべく防ぐために世界毎に出店エリアが違っている

秋野がいるのは魔界のエリアである

当然、秋野は人間界のしかも日本の紙幣しか持っておらず、紙幣の交換はできるのだが面倒なのでやっていないだけである

「お詫びと言っちゃあれだが、冷やかすだけじゃなくて露店を巡ろうぜ」

飛影のコートのポケットには腐るほどでは流石に無いがそれなりに多く不自由しない程度に金はある

しかも全ての世界のお金である

どのエリアでも関係無い

「…まあいいですケド」

露店にそそられるものは多く、その条件で許すことにした秋野
それなりに楽しみ時刻が15時になる

「おっと！」

そんな時である

誰かと肩がぶつかった

秋野自身は警戒していたので故意に当てられた可能性しかない

「いってえな嬢ちゃん！ちゃんと前見て歩けよ！！」

と乾いた音が響く

男の一人が撃っただけ

理由としてはなんかダルかったである

「うわあゝ死ぬかと思いました」

しかし無傷である

脳天コース描いた弾道を首を少し捻るだけで回避した秋野

少しだけ違和感を感じる男達

20人ほどで秋野を囲んでいて半数が反則級の実力者で一人が魔法使いである

少しだけ嫌な気配が脳裏に宿ったのである

男達は全員銃を構え秋野に向かって乱射する

「フード着てポケットに手をつ込め！んで屈め」

弾が発射される直前に飛影が出した指示

フードは飛影が無理矢理被せ秋野はポケットに手を隠して屈み込む身を小さくして避けるのではなく銃弾が生身の部分に当たらないように配慮である

銃弾が直撃しているにも関わらず秋野に衝撃は全く襲ってこない
5秒ほど屈んでいると銃声が止む

「終わりましたかゝって」

少し顔を上げると3人の男達が剣を構えながら突撃してきていた
3人同時に剣を振りかぶり秋野に振り落とす

しかし、剣が直撃したのは地面でありそこに秋野はいなかった

「さすがに…ちよつとムカついてきました!!」

声がしたのは男達の上

秋野は蹴りで二人を気絶させると同時に着地

剣で攻撃しようとしていた残りの一人

「遅いですよ」

剣が秋野へと振り切られるよりも速く秋野の蹴りが鳩尾を直撃して
いた

今倒したのはただの人間レベルである

しかし武器を持った男達を圧倒した

佐藤秋野

彼女は中学までは平凡な人間であった

運動が少し得意な女の子

それが佐藤秋野という少女であった

そして平凡な東東高校に入学した

自分でも将来普通のお嫁さんになりそうだと思っていた程である

そして東東高校には魔王がいた

魔王という絶対強者級が存在

絶対強者級の特徴としてその強すぎる存在が意図せずに周囲に影響を起こしまくるのである

平凡である東東高校

しかし、大学に入学してから少し輝いた人間も少なくな

そして佐藤秋野は影響されやすい魂であった

最初に気付いたのは入学して1カ月後の体育の陸上競技

100m走である

中学まではそこそ平均タイムである13秒程度

高校に入学してもあまり運動はしなかったため、落ちているかと思っていた秋野だがタイムは11.3秒

かなり速いタイムである

その後も彼女は少しづつ外れていった

そして、最初の体育祭

秋野はリレーの選手に選ばれ1番目に走ることになった

結果は言うまでもなく秋野のチームの優勝

正式なタイムで測っていないが飛影が計測していて記録は8.4秒

人間としての枠から完全にはみ出した瞬間である

当然飛影は秋野を気に入り、秋野は様々なことに巻き込まれながら今に到る

魔力量は常人の100倍程度

身体能力も素で軽く常人の5倍は超えている

全身に魔力を行き渡らせ身体能力を強化

ただの人間全てを無効化させる

残りは反則級が10人ほどと魔法使いが1人

「あゝなんか面倒です。」

はあと溜め息を吐く秋野

《アースクイック》

「わ！」

突然秋野の地面の土が盛り上がる

そして気付けば上空に放り出されていた

（ズボンで良かった…）

投げ出され態勢が少し崩れているのを秋野は無理矢理直す

上空30m程

そしてそれを追うように5人の反則級の男達が魔法で秋野と同じように跳び襲い掛かってくる

空中では身動きが取れない

落下するだけの秋野へと飛び掛かってくる

ツドイカタマレ
《集固》

しかし、落下のコースから秋野は外れていた

空中で地面に立つかのように秋野は立っている

足場を造る魔法

空中を自由に移動し

逆に浮いて襲い掛かってくる5人の反則級を無力化する

「あと…6人！」

息が少し切れてきたが問題ない

《クイックアース・土槍》

魔法使いが幾重もの土の槍を放つ

それと同時に二人が秋野に突っ込んでくる

5 m程度なら反則級には容易い距離である

秋野は土の槍を避けながらクルリと半回転

それを見て男達は笑う

足場を作っても足が上にあるのでは意味がない

しかし秋野は反対のまま空中に静止する

「な…！」

秋野はそのまま下へと跳躍

再び回転し足場を形成

隙だらけの二人を順調に無力化する

秋野の魔法

ツドイカタマレ
集固はただの足場形成ではなく

重力でもなんでも法則を無視して足の下に形成される

そしてそれには例え逆立ちしていても関係はなく逆さに立つことが可能である

なので体を横にしながらも立つことが可能である

《クイックアース・アースカノン》

巨大な土の球が秋野へと襲いかかる

秋野は笑いながら魔法を発動する

ツドイカタマレ
《集固・因果応報》

襲いかかる土の球を秋野は避けない

脚を向けるだけである

そして秋野の脚に直撃する直前にピタリと止まる

ツドイカタマレ
《集固・バースト》

巨大な土の塊が爆散する

反則級が身構えるが遅すぎた

小さくなったといってもサッカーボールほどの大きさの圧縮された
土の球

直撃したらただではすまない

一斉に野次馬が退避する

そして残ったのは土の壁を形成し防ぎきった魔法使いのみである

「よししょ」

秋野は一瞬で接近し蹴りを放つ

ギリギリ土の壁で防ぐ魔法使い

そして同じ箇所千秋野は蹴りを放つ

土の壁を破壊し魔法を構築

ツドイカタマレ
《集固・エアロバースト》

「まあ仕掛けたのはそっちなんで因果応報ですよ」

風を集めた秋野は指向性を持たせ射出する

鈍器のように固く圧縮された風が魔法使いの腹に直撃そのまま吹き飛ばす

「はぁ…終わりました」

終わってみれば圧勝である

秋野は飛影に気に入られている

それはつまりそれだけ厄介事に巻き込まれていることの証明である
自称天使とも戦ったことがあるが、その時の方がキツかったぐらいである

「あれ？先輩？」

秋野はふと飛影の声がしないことに気付く

まさか落とした？と秋野が必死にフードに触れ飛影を取り出す

「う…」

声がしたので安心する秋野

「もうちょっと優しく動け」

ぐてぐと気持ち悪そうにしている飛影

「…ご…ごめんなさい」

「見つけた」

ドキリと秋野は顔を強張らせ後ろを振り返る

リーベがそこにはいた

さすがに騒ぎすぎたのである

「ふふ：ラッキーだったわ、たまたま貴女の護衛の時間で」

ゆっくりと勝利を確信している足取りで近づいてくる

掌の上で飛影がものすごく焦っているのが肌で感じる

優希と秋野などの女子の非戦闘員（絶対強者級ではない者）は絶対強者級が時間ごとに護衛していた

リーベは秋野の魔力を覚えて、解放されたため気になって様子を見にきたのである

「それにしても：貴女も強いわね：ただ逃げない方がいいわよ：うつかりで傷がついても責任がとれないわ」

言葉上では優しく逃げるなど言っているが秋野に聞こえる副音声は逃げたら殺すわよ？である

秋野は確かに強いが当然絶対強者級を相手に1秒すら立っていない

当然逃げる気は皆無である

「あゝ先輩ごめんなさい」

合掌

すでに諦めた秋野

さすがに朝眠りたいが死にたくはない

しかし飛影はまだ諦めていなかった

「リーベ…取引だ」

可愛い外見でまじめな声色

「…」

あまりの可愛さに声が出せないリーベ

すでに頭の中には撫で回すことしか考えていない

「見逃してくれ!!」

取引でもなんでもなくただの願望である

「嫌よ、抱きついたり撫でたりしたいわ」

外見相応の子供のように拗ねた表情を見せるリーベ

「秋野…」

ゴニョゴニョと秋野に指示を出す

疑問が浮かびながらも秋野はポケットを漁りあるものを取り出す

「それは!!!」

一瞬で食らいついたリーベに飛影は笑う

魔界で3本しか生産されなかった幻の神酒

「…飛影…諦めるわ…他言もしないし秘密にしておくわ」

「取引成立だな」

なんとか窮地を脱出した飛影

リーベは酒を選んだ

飛影はなんだかんだでヘリオトロープを使う機会が多い

しかし、飛影があと何本持っているかはわからないが限度は3本の酒である

リーベは心苦しい表情で飛影の頬をつついてから酒を受けとる

「それじゃ私は寝るわ。吸血鬼にこの時間まで起きろってのが無茶なのよ」

しっかりと大事に酒を抱えてリーベは去っていった

「うおっしやあああああああああああああ………!!」

飛影逃げ切り成功

佐藤秋野の不幸な日（後書き）

いや〜ぶっちゃけ秋野が一番動かしやすく一番好きなキャラなん
で書いちゃいました

飛影の周囲の人間は全員強いです。

それでも護衛の対象が優希と秋野なのは強さ的にまだ弱いからです。
椿が護衛対象に入っていないのは忘れてたとかではなく単純に秘密
がいろいろあるからになります。

次はいよいよ準決勝です

残りはいーべ、静紅、アユリの3人です

準決勝（前書き）

うゝむ：執筆遅れてきてますねorz

というよりも

いつのまにか

ユニーク2500

PV23000突破しました。

本当に感謝感激です。

ありがとうございます

準決勝

「準決勝第一試合！リーベ選手と静紅選手の試合です！！！！！！！！！！」

「面白そうな戦いだね」

今回は飛影がいないため、代わりにラインが解説役になった

「ふふふ！ようやく戦えるわ！！！！！！！！」

物凄くハイテンションなリーベ

理由はただ一つ

戦いができるからである

リーベは運が良いのか悪いのか、絶対強者級とここまで戦うことがなかった。

絶対強者級でないと戦いにならないのである

そして待ちに待った絶対強者級との戦い

「あらあら」

それを微笑みながら見ている静紅

双方とも準決勝であるが緊張感はまるでなし

「オッズはこのようなになっております」

静紅2・3倍

リーベ2・4倍

ほぼ互角である

若干アンジェレネを負かした静紅の方が上である

「さあ！！それでは開始です！！！！！！」

笑いながら魔力を解放するリーベ

先手必勝と静紅へと接近するリーベ

吸血鬼のリーベにとって接近戦は有利にことを運べる

「参ったわ」

両手を上げて降参する静紅

「へぶ！！！！」

その場で脚を引っ搔けて思いきり転ぶリーベ

「へ？」

「は？」

『え？』

会場中が啞然となる

誰もが自分の耳を疑った

信じられないという表情でリーベは起き上がる

「：今なんていったのかしら？」

「降参よ。勝ち目が無いもの」

変わらず微笑んでいる静紅

わなわなと震えるのはリーベであった

「だってあれよね？飛影君より再生力あるのでしょ？」

「そうだけど…」

飛影はリーベから血を分けてもらい吸血鬼としての力を手に入れた

しかし、それはほんのリーベの一部である

吸血鬼としての性能はリーベの方が格上である

無限とまではいかないがそれに近い再生力

接近戦でしかも素手でしか戦わない静紅では相性が悪い

「でも戦いよ？血沸き肉踊らない！？」

リーベも飛影と同じ戦闘狂の部類である

「無駄な戦いで情報を晒したくないし、それに勝ち目が少ない戦いは嫌なのよ」

盗賊として一番大事なのは命を護ることである

もし盗めなくても命があれば次に挑戦できる

無茶をして失敗するのはバカである

ダドマと同じで命をかけた本気の殺し合いなら逃げることはないが
今回はただの試合である

戦いたいのは同じだが割りにあわない

「えっと…本当に降参なの？」

物凄く悲しそうな表情のリーベ

「誰がどう言おうと降参よ」

「うわゝ試合終了」

ラインがなんとか我に返り試合終了を告げる

ブーイングすら起こらずに準決勝第一試合が終了する

「さて…続きまして準決勝第二試合！！！アユリ選手と木春選手の戦いです」

気合い十分なアユリと仮面をつけた少女が闘技場で対峙する

オッズを発表しようかと考えていた実況から秋野がマイクを奪う

⌈
^
?
⌋

一つの疑問として本当に椿なのかという困惑

602

「うゝなんでわかったの？」

木春は仮面を外すとそこには椿がいた

秋野が気付いた訳ではなく秋野のコートのフードにいる飛影が気付いたのである

「あら？椿さんって戦えましたか？」

アユリの中では椿は一般人レベルだと思っていたのだ

「一応はね」

あははと笑う椿

「そうだったの」

今思えば確かに普通の人間が飛影の近くにいるはずがないと考えを改める

「けど…棄権した方がいいわよ？怪我じゃすまないこともあるかもしれないし」

手加減が苦手なアユリ

椿を想っての言葉である

「あゝたぶん大丈夫…だと思う、そろそろ発散させなきゃパンクしちゃうし」

「？」

最後の言葉がアユリは理解できなかった

「まあ私は飛影と戦ったら絶対勝っちゃうから安心して」

花のように微笑む

知らぬ間にオッズが発表される

アユリ1・2倍

木春19・4倍

「な！」

「とりあえず試合開始」

アユリの驚愕を置いて試合が開始される

様子見で一度距離をとるアユリ

《魔氷・アイシクルレイン》

様子見で氷柱の雨を降らす

椿はそれに対して氷柱に向かって手を上げるだけである

《炎舞・地翔炎刃》

氷柱のような黒炎が発生し氷を全て溶かしきる

「な! !」

それは見間違えることがない

飛影の魔法である

「よし! 調子が良い! !」

いくら様子見で手加減した攻撃とはいえ絶対強者級の魔法である

絶対強者級でなければ防ぐことは叶わない

《風華・竜巻》

渦巻く風がドリルのようにアユリへと放たれる

「っ!」

《魔氷・壁》

その攻撃はアユリの氷の壁により防がれ相殺する

(間違いなく飛影様の魔法だ!)

『…』

驚愕しているのはアユリだけでなく飛影と黒鋼以外は全員驚愕していた

《炎舞・ランス》

椿の背後に黒炎で構成された槍が無数に現れる

《魔氷・絶対防御》

アユリの周囲を氷が包み込む

入念に魔力が込められた氷は黒炎を全て防ぎきる

「…一つ質問だけど」

「なに？」

「なんで無炎を使わないの？」

飛影の炎舞最強の魔法

光すら焼くそれはアユリの最硬を誇る氷でも防ぐのは難しい

「だって使えないもん、あの炎は飛影が使わなきゃ制御できないから」

「あらそう？少し安心ね」

「その代わりなんだけど…私接近戦弱いからちよつと次の一撃に全てをかけるけど受けてくれる？」

微笑む椿

意図はどうであれそれは最硬の自分への挑戦だと受け取ったアユリ

魔力を全解放

「いいわよ…ただ覚悟はしなさいよ…」

「ありがとう！」

椿も魔力を解放

その総量は魔王の誰よりも高い

(…!)

椿は強大すぎる魔力を右手に集中させる

《風華・炎舞・風刃炎陣》

超圧縮された風と黒炎が混ざらせる

《魔氷・最硬を冠するモノ》

そしてアユリも魔法を構築し終わる

「こんのお!!!!!!」

椿は右腕を全力で振るう

同時に黒炎が纏った鎌鼬が射出

貫通力を重視した刃

巨大すぎる刃

相対するアユリは目の前に極小の氷を造り出す

大きさが違いすぎる

受けきれるはずもないが

アユリの本気の魔法である

アユリの氷と椿の炎の鎌鼬が激突

「殖えなさい！」

アユリが指をパチンと鳴らす

瞬間、爆発した華のように増殖拡大を始めるアユリの氷

巨大な氷と巨大な炎の鎌鼬が激突し合う

だが激突している最中にも氷は増殖拡大を繰り返している

攻撃が消えるのは時間の問題でアユリの氷は椿の攻撃を完全に防ぎ
きった

「あゝさすが最硬…やっぱり無理だったかゝ」

そこまで落胆した表情ではない椿

「降参します」

やりたいことはやった

椿的には大満足である

なにがしたかったのか？という疑問など多数あるアユリ

「…まあいいけど、あとで飛影様の魔法が使えることの説明が欲しいわね」

一つ溜め息を吐く

「トーナメントが終わったらね」

今は話せないという意味

アユリは再び溜め息をつきながらも頷いて承諾する

「試合終了！！！！アユリ選手の勝利です！！！！」

準決勝がまさかの両方とも棄権ということで釈然としない実況だが仕事は仕事である

「二日後に決勝を始めます！！！！なお決勝戦は大変混雑が予想されます。各々対応してください」

準決勝（後書き）

あと3話くらいでトーナメント編終了です

残りはリーベと、アユリ

おそらく予想していた方はいないのではないかと思います。

この二人のどちらを勝たすかは決めてはいるんですけど…キャラ暴走するんでわからないですねゝ

決勝戦前日（前書き）

骨休めです。

といたしますか、更新遅れてほんっっっとうにもうしわけありません

決勝戦前日

決勝戦前日

それはつまり、最強が決まる試合の前日で

飛影のデフォルメ化が無くなる前日でもある

すでにゲームとしての捕獲期間は準決勝の日には無くなっていた

だが飛影は万が一にも見つかるわけにはいかない

見つかった瞬間に死よりも辛いものが待っている

そのため、飛影はまだ秋野のフードのなかにいた。

秋野としても今日逃げ切れれば朝が楽になるのである

利害は完全に一致

気合い充分

先日のように露店でも見に行こうかと考えていた飛影と秋野

しかし

（（：どうしてこうなった））

周囲にはメンバー全員がしかも飲み会をする気マックスで着々と準

備を始めている

時刻は朝の09..00である

酒を飲むにはあまりにも早すぎる時間ではないかと一応常識人である秋野は思うが

周囲には非常識が全ての者ばかり

「飛影さんが可哀想な気が…」

メンバーは飛影以外全員である

『いない方が悪い!!』

ほぼ全員がハモった

この3日、飛影の姿を見たものは秋野とリーベだけである
つまり見つけられないストレスが溜まっているのだ

「あいつらがキすぎだろ」

ポツリと呟く飛影

(否定ができない…)

火月と杏を抜かせばエリアを含め全員自分より年上なはずである
だが周囲を見るとまともなのは彗だけである

他は全員テンションが高い（ギルギアは飛影がいないことでテンションがあがっている）

「あゝ佐藤、お前未成年だけど酒はどうするんだ？」

「ひゃえ！！！！？…安倍川先輩！」

完全に周囲は酒を飲む気満々でまだ常識人の彗が戸惑っている秋野に話しかける

（おお！！ナイスだ彗！！さあ秋野！！お酒は大丈夫です〜とか言って飯に誘うんだ！！完全にあいつらは飲む気満々だから素面だと30分ももたないぞ！！さあ秋野頑張れ！！ここで飯に誘えば仲良くなるぞ！！せめて名前を呼び合うくらいの仲に進展するんだ！！アドバイスは後ろからかけてやれるし！！頑張れ秋野おおおおおおおお！！彗はお酒はこの時間帯なら絶対飲まないぞ！！きちんとさえ私はお酒は大丈夫ですよとそしてそのまま喋って20分後にちよつと居づらいでご飯一緒に食べに行きません？って誘って彗も居づらい空気になるはずだからOKするはずだ！！！！そこから重要だが、まだそれはいい！！とりあえず今は酒を断って彗と会話を継続するんだ！！一度離れると秋野じゃ話しかけられないから、これが最大のチャンスだ秋野おお！！）

この間

僅か1秒

無駄すぎる高速思考を使用して秋野の応援を頭の中でする飛影

一方

（うぎゃああ！！先輩に話しかけられた！！どどどどどどうしよう！！私はどうやって答えればいいのおお！！？ここは普通にお酒飲めませんか？けど普通すぎる気がする！！逆にお酒大好きなんです飲めます。とかは：絶対ダメだぁ！！悪印象しか与えられない！！：でも！！お酒大好きです！！でも先輩の方がもっと好きです！！：なんて言えるわけない！！！！！！無理だ諦めるんだ私！！どうすればいいの！！？あれ？私寝癖とか格好とか大丈夫よね！！？：一応飛影先輩には見繕ってもらってるけど：うああああどうすればいいのおおお！！助けてええええええ！！）

彗に話しかけられたことで、頭がパンクした秋野は魔王と遜色無い高速思考で考えるが良い案は浮かばない

この間2秒

そしてさらに

（うゝん：やっぱり俺佐藤から嫌われてるな：物凄い嫌な顔で話しかけんなオーラでてるし：一応先輩らしく接してみたんだが：先輩風ふかしてうぜえゝって目をしてるな：うゝむさすがに飛影っていう共通の知り合いがいて、学校も一緒だから嫌われたくはないが：物凄く表情的にどうやって早急に会話を切ろうかって眼だな：この間の映画も辛かったなゝ話しかけても全シカト：あれは泣きそうになった）

彗の思考である

もともと考え癖がある彗もかなりの高速思考を持っている

面白いことに

彗は鈍感で逆の意味で勘違いしている

秋野は高速思考の時はどんなことを考えていてもまじめな表情になる

この二人の意識の違いはある意味すごいことであり

飛影も鈍い方でありそれに気付いていない

「いえ、お気になさらず」

考えに考えまくった秋野の答えである

秋野的には謙虚にやんわりとお酒はいりませんということを伝えて
いるつもりであった

(馬鹿あ!!!!!!話を切ってどうする!!!!!!しかも返し方があああ
!!!!!!)

愕然とする飛影

(…かなり嫌われているな。)

当然ながらあのような返事では、とても良い印象というものは与える
ことができずに逆に「あなたのこと嫌いなんで話しかけないでく
ださい」と言っているようなものである

「…そうか」

としか返すことができない

会話終了

居心地悪い空気が流れる

（あれ？私何かミスった！？）

背後から感じる軽く攻めるような雰囲気

「ジュースは椿が管理してるらしいから、貰うなら椿に言えば貰えるぞ」

（また話しかけてもらった！！！！！！どうしよう！！今度はちゃんとしなきゃダメな気がする）

「お礼しろ」

再び高速思考に入ろうとしている秋野を見て飛影は溜め息混じりにボソリとアドバイスする

（さすが先輩！！）

秋野は飛影に感謝しつつも口を開く

「あ…ああありがとうございます！」

飛影は溜め息をつく

飛影が言わせたかったのは、「ありがとうございます。椿さんにジューズをいただきますね。先輩の飲み物も取ってきますよ」

である

（一言じゃ伝わらなかったか！しかもなにに対するお礼だよ！！）

そして彗はといえば

（物凄い嫌そうな礼だ！！これ嫌われてるとかの次元なのか？）

お礼を言うのが物凄く億劫そうなものに聞こえていた

「…まあ、あれだ。楽しんでこい」

最後に一言告げて彗は戻っていった

（あ…行っちゃった）

はあと溜め息をつく秋野

「秋野後で反省会」

ボソリと呟いた飛影

「まじですか」

自覚無しの秋野

「まじだ」

ダドマはまだまだ余裕そうな表情でウィスキーを飲んでいる

「まあそうですね。今冷静に考えると朝から何をやっているんだと思います。それに飛影がいないのに楽しむなど補佐として…」

少し鬱気味になっているリタ

「大丈夫よ、飛影も途中までいたし楽しんでたと思うわ」

赤ワインをボトルで飲みながら笑うリーベ

一瞬でリタがリーベの方を向く

「どういことですか!!」

「あら？貴女補佐なのにわからないの？」

妖艶に微笑んでいるリーベ

完全に喧嘩を売っていると見なしたリタ

すでにその手には鋸が構えられていた

「いや、落ち着けリタ」

ダドマがやんわりと刺激しないように止めにはいる

ダドマ的な疑問として神のくせに全員短気なのである

普通はおおらかじゃないのかと思うのだが

リタはこの通り

シーレイも睡眠妨害ですぐキレる

アンジェレネも何故かキレやすい

「止めないでください…殺しますよ？」

眼がマジである

完全に殺気を帯びた眼である

(いや…これ無理)

一瞬で止めるのを諦めたダドマ

少しギルギアへと視線を移すがギルギアもお手上げの様子である

「クク…貴女、キレやすいわね…ちゃんとカルシウム摂取してる？」

まだまだ余裕の笑みであるリーベ

飛影の場所を知っているという絶対的な優位があるのである

ブチ

何かが切れる音

当然ながらリタがキレた

「調子にのって…殺します」

魔力が解放される

それに対してリーベは特に構えもせずに魔力も解放しないで飲んで
いる

「…あらあら、困ったわね」

口ではそう言っているが表情は楽しそうである

「構えないんですか？消滅させますよ？」

「しょうがないわね…明日は決勝だっていうのに」

明日は決勝である

だから魔力を消費するわけにはいかないのだがリーベは立ち上がり
静かに魔力を解放していく

「やるしかないなら、殺るわよ？」

吸血鬼としての翼を生やし、爪を伸ばす

「いきます！」

「来なさい」

お互い魔力同士をぶつけ威嚇し合う

それだけで家具が壊れ壁に穴があき、建物自体が大きく揺れる

「とりあえず：あれだな吹き飛ばすぐらいにするから遠くで殺つてこい」

《天変地異・とりあえず吹き飛ばす》

横からダドマが魔力を解放

怪我をしない程度に威力を抑えた水流を発生

リタとリーベを吹き飛ばす

壁が大破するが建物自体はなんとか存在を保った

「しかし、あれじゃの：あの二人を好きに戦わせてこの世界は大丈夫かの？」

「あ…」

気まぐれで世界を滅ぼす絶対強者級同士の戦い

普通に世界が崩壊してもおかしくはない

「まあいいだろ、俺の世界じゃねえし」

ここは天界である

困るのはラインである

「飲むか」

「そうじゃな」

他人事であるため飲みなおす二人であった

決勝戦前日（後書き）

次回！トーナメント決勝戦

楽しみにしてください

トーナメント決勝戦（前書き）

誰も予測できない終わり方です。

トーナメント決勝戦

「さあ！！いよいよこの最強を決める戦いがクライマックスになりました」

会場の観客は今まで以上に集まっていた

立ち見の観客が増えて熱気に包まれている

「まずは、天界の魔王補佐：最硬を誇る氷を統べるもの、最強の悪魔アユリ選手！！」

今までと形式が違いゲートが作成されており、ゲートが開きアユリが入場する

足取りはフラフラとしていて顔は真っ青である

「：頭痛い、気持ち悪い：」

少し歩くとその場に座り込む

完全な二日酔いである

「そして、最強の吸血鬼：無限に近い再生力を誇る鬼、リーベ選手！！」

再びゲートが開く

対するリーベもフラフラとした足取りで完全に疲労が溜まっている

表情である

「疲れたわ…」

昨日一日中リタと殺しあいをしていて体力は限界、魔力もほぼ底をつきかけている

リーベも少し歩いてから座り込む

二人とも決勝戦が始まる前からぐったりしている

「え…と、両者脱力してますね。とりあえず、オッズの発表です」

リーベ 2. 0倍

アユリ 2. 0倍

同じオッズ

二日酔いVS疲労困憊の戦いが今始まる

「試合開始!!!」

まず先に仕掛けようとしたのはアユリである

《魔氷・アイスふい》

「頭痛い」

魔法を構築する途中で吐き気と頭痛により魔法の構築を失敗する

「チャンスね」

リーベが頑張って立ち上がり爪を伸ばした右手で振り下ろし衝撃波を放つ

つもりであったが

ただ手を上げて下げただけとなった

『…』

一同ある意味で絶句

オイ最強と心の中でツツコミを入れる

これでは子供にも負けそうである

「オイこら!! 真面目にやれや!!!!!!!!!!」

完全復活した飛影

マイクを実況から奪い取っていた

「いえ…これ限界よ」

「わ…私も全力です…」

リーベの原因はリタが作り出し

アユリの原因はダドマが作り出した

飛影は溜め息を吐く

炎舞ではアルコールは分解できるが二日酔いの頭痛は消せない

リーベの体力と魔力の無さはどうにかなるが確実にヘリオトロープが必須になる

「まあ…頑張れ」

諦めた飛影

「…飛影」

くいくいと飛影の腕を引っ張るシーレイ

「ん？」

「…」

ゴニョゴニョと飛影に告げるとそのまま飛影を枕にするシーレイ

そして

今大会初めてのショボい戦いが始まった

アユリの攻撃

ゆっくりと頭を振らないように体を硬直させながら石を投げた

リーベの頭が吹き飛ぶ

しかし、再生

リーベの攻撃

手拍子

アユリが頭を抱えてうずくまる

「…」

『…』

不毛な争いであると感じ取った全員

「寝るわ」

コロンとリーベはその場で横になり眠り始める

「甘いわ」

アユリは再び石を投げる

まるで子供の喧嘩であるがアユリの投げた石は大砲よりも破壊力がある

上半身が弾けとぶリーベ

もう一投と石を握ったところでアユリはふと気付く

「…」

「再生…しないですね」

リーベの体はまだ上半身が吹き飛んだままである

再生の気配が無い

「…あれ？これ…もしかして…死」

サーとアユリの顔が更に青く染まる

飛影は仲間を傷付けるまたは、殺そうとするやつを生かさない

アユリは飛影の方を見ると無表情である

恐怖しか感じない

「ちょ！！リーベさん！！起きて！頼むから起きてえ！！」

今は無き上半身

必死に足を揺らす

しかし、返事がない。ただの屍のようだ

「とりあえず…リーベ選手を死に到らしめたため、アユリ選手の反則負けです」

ガツクリと肩を落として敗けを残念がる

なんて余裕は全く無い

（私が普通に飛影様に殺される！もしくは確実に嫌われるううう！）

そしてアユリの敗けが宣言されたところでリーベの血肉が空気中に霧散する

「私の勝ちね」

霧散した血肉の代わりにリーベは再生され復活する

「な！！！？」

吸血鬼であるリーベ

ただの吸血鬼ではなく強力な吸血鬼であるリーベには傷の再生速度をいじることができる

つまり再生させずに放置して、勝ちが決まったら復活する

魔力も体力もほぼ0のリーベが勝つにはこの方法しかないのだ

二日酔いとはいえ魔力はMAXのアユリには音程度しか攻撃するところできない

時間をかければ二日酔いが治ってきてリーベは確実に負けていた

「うっわー搦め手使ったな〜まあリーベの優勝だ」

啞然としている全員

飛影はシーレイにこの事を聞いていたため、驚くことは無い

「ちょ…卑怯よ!! って頭が」

自分の声の大きさに自爆したアユリ

「ふ…勝てばいいのよ勝てば」

勝ち誇った顔のリーベ

「…最強決定戦!! 優勝はリーベ選手です!!!!!!!!」

歓声もない

まだ啞然としていた

トーナメント決勝戦（後書き）

というわけでリーベの優勝です

恐らくこんな優勝の仕方は予想していなかったと思います
飽きたわけではなく前話ですでにこの構成を練ってました
読者の予想を裏切るにはやはり斜め上にしなければということでした
うなりました

次でトーナメント終了です

トーナメント終了(前書き)

すこし騒々しくなっていました。

トーナメント終了

闘技場

観客席

共に満員

最強が決まり表彰式である

大会企画者である飛影がいつのまにか作られた壇上にいる

「長いようで短い大会だった」

それまで騒がしかった場内が飛影の一言で静寂に包まれた

「かなり個人的な企画だったからここまで人数が集まってくれたのも嬉しい、観客として見てくれたやつ、参加してくれたやつには感謝してる」

開式の言葉と違いきちんとした台詞である

「俺も参加したし、優勝できなかったのはものすごく残念だ。でも俺は楽しかった、世界なんてそんな理由でできてるもんだ。楽しけりゃ何でもいい、だけど楽しむためにはもっと精進しなきゃな」と感じてるよ。さて…」

自分の感想を述べた飛影

そこで一区切り

「今回は最後がかなり残念な勝負になったが、最強が決まった。相性とかあって結果を気に入らないやつもいるかもしれないが、俺は色んな要素があつてこの最強が決まったことに文句は何もない。相性なんて努力でなんとかしろって思うしな。さて：んじゃ堅苦しいのは終わりで優勝したリーベ壇上に上がってくれ」

一番最前列にいたリーベが壇上に上がる

「んじゃリーベ、おめでとう」

飛影からの一言

それを合図に場内が拍手で包まれる

飛影からマイクを手渡される

「まあ私が最強になったわ、飛影はこの結果に満足してるって言っていたけど私は不満しかないわ、まともな戦いができなかったわけだし、私が最強だとも思わないしね。だから私は不服よ、機会があればもう一度やりたいわね」

リーベはまともな相手と戦えたのは2回だけ

静紅とアユリである

しかし静紅は開始早々危険

アユリは二日酔い

まともな戦いにはならなかった。

「でも、優勝したのは事実なのだから、賞品はもうわ」

アユリは飛影の方へ向き直る

「あれよね？何でも願いを叶えてくれるのよね？」

ニヤリと笑う飛影

肯定も否定もしていない

面白かったら叶えようということである

リーベの願い事を知っている者からすれば飛影を独占されるため、
なんとか潰したい

「そうね、1年間飛影を独占したかったのだけれど、ちょっと優勝
までの過程があれだったから、優先権にするわ」

渋々といった表情だが飛影の頭には？しか浮かばなかった

「物凄い意味がわからん」

「簡単よ、ただ暇なときに私から誘うとか、私との約束は優先する
ようにするってことだけ」

理解できていない飛影に、少し詳細を説明する

「あゝ、うゝ本来なら願い事を聞いただけだったけど、微妙に面白いしなゝ」

飛影は自身と葛藤する

物凄く面白いわけではないがつまらないわけでもない

内容自体も簡単である

そしていきなりの飛影の聞くだけ発言に周囲は騒然とはなった

実況の天使が改めて確認すると確かに聞くだけであると確認できた

「まあいいや採用、期間は？生涯？」

「1年でいいわ」

「りょっつかい」

こうして願い事は叶えられた

「さて！！これにて終了！！全員お疲れさま！！」

飛影は担当のものにマイクを渡し壇上から降りようとする

はしっと飛影の腕ががちりと捕まれる

「ふふふ」

飛影が振り向くと、静紅が微笑んでいる

嫌な予感しかない飛影

「ちょっと手伝ってくれるかしら？」

「え？なに」

え？なにをと告げるよりも速く

《次元破壊》

有無を言わず足元の次元が破壊され飛影と静紅は落ちていった

「拉致られたわね」

すぐ目の前で見ていたリーベ

啞然としていた

あまりの速業にリーベ以外は啞然を通り越し思考停止に陥っていた

「とりあえず、撤収作業かな」

一番速く思考を回復させたのはダドマである

ダドマの仕事は観客の移動である

世界間を移動できるのもダドマの方舟によるものである

一応はきちんとした仕事があるため、ダドマは仕事に戻り、ギルギ

アもそれに着いていく

ラインと不服そうな表情のアユリも政務が溜まっているため早く仕事に戻らなければならない

他の面子の絶対強者級は暇人のため、やることは一つで

建造物の破壊だけである

「あの…腐れ盗賊う!!!」

切れているのはアンジェレネである

まさかの飛影拉致

たまにあることであるが、大会が終わって飛影の屋敷でパーティーで
もしかかと考えていた矢先である

他の者も声には出さないが頬が痙攣していることから切れているこ
ととうかがえる

「兄ちゃんいないけどとりあえず、私たちはどうすればいいんだ？」

まだまともな火月のリアクション

「荷物を纏めましょう」

そして椿のまともな応答

リタなどは今にも八つ当たりしそうな雰囲気が発している

触らぬ神に祟りなしと言葉があるが

触っていないが祟りどころか殺されそうな雰囲気である

絶対強者級ではない者達は即時逃走を図った

絶対強者級でもさりげなく距離をおいている

切れていたアンジェレネだが今はどうリタを落ち着かせるかしか考
えていない

シーレイはとつくに逃げていて今はおそらく部屋で寝ているであろう

止められる絶対強者級はアンジェレネとリーベしかない

「∴第2roundってところかしら」

あいにくと決勝戦前日の戦いは両者ともに相手を殺すことはできて
いないため、ドローである

牙に爪に翼を展開しヤル気満々なリーベ

それを見た瞬間

アンジェレネは逃走をはかる

「グダグダだな」

「ssssですねぇ」

思わずこぼしてしまった黒鋼と優希

「って逃げなくていいの!!?」

反応が返ってきたことに驚く黒鋼

「いやゝ走るのめんどいんで運んでください」

「…」

呆れて何も言えない黒鋼

優希を抱えて逃走する

建造物が原形残さず大破したのは10分後であった

トーナメント終了(後書き)

次は個人話ですねゝ

誰のかは決めてないです

波乱（前書き）

トーナメントが終了しましたので、新章的な感じで

波乱

「それでだ…」

現在の状況

武器を持った騎士風な鎧をまとった集団に囲まれ槍を向けられている飛影と静紅

さすがに事態が把握できなかった飛影

「これはどうこと？俺暴れていいの？」

静紅に拉致されたのは飛影にとっては別にたまにあることで

静紅の仕事（盗賊）の手伝いであるとは思っているが

少しカビ臭い

神聖な魔力で包まれているこの部屋

別にそこまでなら飛影は笑いながら事情を説明してくれと言う

だが今の状況は武器を向けられている状況である

しかも飛影が見た感じで普通の人間に

飛影は普通の人間が嫌いである

嫌いというよりもゴミに近い

リーベのように家畜のような存在だと感じている

そんなゴミに敵意をぶつけられ

更には武器を向けられている

飛影にとってはゴミが喋ってお前ゴミだと言われているような舐められているものである

飛影は特別気が長いわけでも穏便なわけでもない

ぶっちゃけていえば今ここで全員殺しても構わないと考えている

「あゝ」

飛影のそんな気持ちがひしひしと伝わってくる静紅

少し微笑みが苦笑になっている

「とりあえず、話は私がするから飛影君は話を合わせてくれるかしら？」

唇だけ動かす静紅

それだけで飛影には伝わる

「了解」

飛影も同じように唇だけ動かし、応答する

僅かな時間だが方針を決めた

飛影は一步下がりを静紅の前に押し出すような位置に待機する

「さて…いきなりこの状況って少し失礼じゃないのかしら？」

少しだけ

僅かに不快を表すように敵意を放出する静紅

僅かであるが絶対強者級の敵意

騎士達の持つ槍が震え、一步下がらせる

すると空間に文字が走る

飛影と静紅には理解できない文字であった

だが騎士達はそれを見ると飛影達を囲んでいたが、人一人すんなりと通れるように穴を空ける

そこにいたのは少女であった

外見は14歳程

儀礼服のように純白の服に身を包んだ銀髪金眼の少女

ドカンと勢いよくドアが開く

現在授業中である

「!!?」

なにかデジャブを感じた秋野

教師は一瞬飛影かと思って身構えるが来訪者は火月であった

飛影の罰ゲームとは違いどこか焦った表情

何事かとクラスの全員が騒ぎだす

「ちょっとすいません」

秋野もすぐに立ち上がり教室を出る

「どうしたの？」

ただ事ではないのは理解できた

「これなんだけど」

火月は手に持っていたものを秋野に見せる

「げ」

厄介事だった

それも超がつくほどの

火月が持っているのはビー玉のような球体

赤いビー玉のように見える

だがそれはセンサーなのだ

危険な気配を感じると色が変わる

透明

赤

金

の3種類の色があり、

透明が普通

赤がけっこう危険

金が死ぬほどの危険

飛影の知り合いで絶対強者級ではない者に支給されている

飛影が言っていた台詞では

透明は大丈夫

赤は近くの絶対強者級に知らせること

金は焦って急いで直ぐに即行で絶対に何が起きててもその場に絶対強者級がいる場合でもない場合でも屋敷に行くこと

である

「それで、他の誰かには伝えてる？」

最初が自分ということはありえないだろうと秋野は考えている

「んと一応校長先生とかリタさんとか探したけどいないんだよね、彗さんはいたから協力してもらってる」

秋野が視線を少しずらすと少し離れたところに彗がいた

「今の状況として、何故か絶対強者がいない。そして赤色かなりやばい状況だ」

さすがに年下の教室へは乱入できなかった彗

現在絶対強者級はいない

まるで留守中を狙ったかのように、危険である

「火月が気づいたのは中学の校舎、んで俺のも赤色だからこのままだと確実にこの学校自体が危ない」

中学の校舎と高校の校舎は同じ敷地内だがすこし離れている

その二つの校舎で赤になったならば学校自体の危険があるということである

「どうします？」

「どうすんだ？」

秋野は普段は彗と話すことはかなり難しいが、今はそんな雰囲気でも無い、メリハリがある秋野と手伝う気満々の火月

「とりあえず、犠牲者が出た瞬間に今はあいつらがいないからかなりヤバイ、表沙汰になる可能性があるからな、原因を探す。倒せそうだったら倒すし、やばい場合は俺が足止め、佐藤達はなんとかして助けを呼ぶってところだな」

「オッケー!!」

元気良く返事をする火月

彗と秋野で原因を探しに行き一人にいる火月が襲われた場合を考え共に行動させる

「…」

だが彗が一人で足止めするというのがかなりの危険であり、秋野は頷くことはできない

「まあ絶対強者級じゃないことは確定してるからな」

少し微笑む彗

保健室にしかも飛影以外に会いに来ていることが珍しい

「あれのことよ、貴女：飛影様の魔法使ったじゃない。そのことについて話を聞きたいと思ってね」

同一の魔法は存在しない

指紋などと同じで魔力が人それぞれ絶対に異なるのである

そのため、魔力の性質上同じような魔法でも決して同一にはならない
飛影と同じ炎の魔法使いでも飛影のように黒炎を造ることはできない
そのため、飛影のヘリオトロープが異質すぎるだけで同一の魔法を使用することは不可能である

にも関わらず椿は飛影の魔法を使用した

「あゝ」

すっかり忘れていた椿

（そういえば説明するって言っちゃった）

「まあいつか！…かなあゝゝゝゝり長くなるけど大丈夫？」

「：何時間くらいかかるの？」

椿の言い様

本当に長くなりそうだと察知する

「本気で語るならば100時間くらいは必要かも」

「うえ!!?」

想定外すぎる

予想では2時間とかだと思っていたが予想の斜め上どころか遙か天井を突き抜けて地球外まで行ってしまった

「軽めに語るなら2時間くらいかな？」

椿と飛影の過ごした年月は270年以上

確かに本気で語るには100時間は掛かるが、本当に重要な箇所だけを抽出すれば2時間でなんとかレベルである

「なんでそんなに長いの!!?」

「だってあのこと話すにはちゃんと順序を追って説明しなきゃ意味不明だと思うよ。あと面倒だからここでは話さないし」

あの後アユリだけでなく黒鋼以外の全員から聞かれていたことを思い出す

それだったら家に集合して話した方が楽なのだ

「…まあ、今日の仕事は終わらせてきたから大丈夫だけど…」

「ありがと、どうする？あと2時間くらいは待機してなきゃダメだけど、先屋敷行ってる？」

「ん、ここにいろわ、こういうところ初めてだし」

アユリは当然ながら学校に行ったことはない

初めて学校というものを知ったのが最近である

（あ、だから、さっきから目移りしてたのか）

キヨロキヨロと挙動不審とまではいらないが、まるで田舎者が都会にきたかのようなリアクションであった

「もしよかったら案内しようか？」

「お願いします！」

返答は速かった

波乱（後書き）

- ・ 飛影と静紅の異世界騒動
- ・ 慧と秋野と火月の学校騒動
- ・ 飛影と椿の過去話

こんな感じですかね。

順番的には

2,

1,

3,

って感じです

狼の血をもつモノ（前書き）

彗君とあきのんが頑張る話です

狼の血をもつモノ

「とりあえずどうするかだ」

今のメンバーである彗、秋野、火月は高校の方のグラウンドの隅にこっそりと潜んでいた

理由としてはそこは学校の敷地の中間辺りであるからである

潜んでいる理由は敵を見つけたわけではなく、このメンバーだと教師に捕まった際に何もできないからだ

現在授業中

見つかったら強制的に職員室へ連行である

「手分けして探すというのは」

「当然却下」

手分けして探せば効率的にも教師に見つかった時にも便利ではあるが

実力も未知な敵に殺される可能性も高い

「あゝ飛影先輩とか絶対強者級が居れば魔力探知で一瞬なんですけどね」

魔力察知は彗も秋野も一応はできる

絶対強者級の魔力レベルであれば学校の敷地内であれば探知できるが
それ以下だと半径10 m程が限界である

「高いところから探すつてのはどうだ？」

火月の意見

なかなか悪くない案である

「…ここが平野だったらいんだが、学校の建物が邪魔で見渡せないから…」

光を統べるリタであつたら建物などは問題無かつた

つくづくチートだと彗は思つてしまう

「打つ手がないな」

溜め息をついた彗

「ん？今なんか聞こえなかつたか？」

いきなり

唐突に火月がキョロキョロと周囲を見渡す

「いや？」

「聞こえなかったよ」

彗も秋野の耳には体育の授業で少し騒がしい生徒達の声しか聞こえない

火月は耳を澄ませる

「オオン!!!!」

僅かだが聞こえる遠吠え

「やっぱり聞こえる。遠吠えみたいなやつ」

「…」

彗はそんな馬鹿なと耳を澄ますが聞こえない

だが火月は飛影の義理だが妹である

嘘だとは思えないし勘違いとも思えない

「方向はわかるか？」

「うーん、無理っぽい…建物で反響して掴めない」

「わかった」

彗は一度深呼吸をする

《限界突破・一点集中》

彗は魔法を発動する

彗の魔法は単純で、肉体強化である

ただ自分という存在全ての強化ができる点が普通とは違う

彗は聴力だけを強化する

「オオオオン！！」

確かに遠吠えが聞こえる

狼のような咆哮

「あっちだな」

彗が音の発信源の方向を指差し、魔法を解除する

3人は頷き合うと直ぐに駆け出した

（ただの狼だったら楽なんだけどな）

狼程度なら瞬殺できるが、嫌な予感しか彗は感じない

当然ながら嫌な予感というものは当たるものだ

校舎裏

そこにいた

普段から誰も立ち入らない場所

見つからないように慎重に接近し無駄な木や草ばかりの場所に隠れながら3人ともがそれを見た

「……なんであんなもんがこの世界にいるんだ」

思わず彗が言葉を溢してしまった

他の2人は絶句していた

それもそうだろう

そこにいたのは狼ではあるがただの狼ではない

超巨大な狼とかでもない

大きいことは大きいがそこまでではない

せいぜい2 m程である

ただそのシルエットが人の形をしていた

ワーウルフ

ゲームなどでよく出てくる人間のように2足歩行で強靱な肉体をもつもの

腕力も強く

脚力も強く

速度もある

「オオオオオオオオオオオオオン！……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ワーウルフの遠吠え

雄叫びである

身体がそれだけで硬直してしまった

「とりあえず、気付いてないようだから……佐藤は火月連れて待避しとけ」

キヨロキヨロと獲物を探しているのか首を忙しなく動かしているワ
ーウルフ

「いや！ 気付いてるぞ 隼さん！！！！」

火月が叫ぶと同時に彗の背後にはワーウルフが一瞬で接近していた

すでにその強靱な腕力をもつ腕は振りかぶられていた

ご丁寧なことに切れ味が良さそうな爪と一緒に

彗はそのまま後ろに跳躍

火月と秋野も後ろに後退

その瞬間にワーウルフが腕を全力で薙いだ

彗はワーウルフに接近し脚を潜ることで回避する

秋野は咄嗟に後退ではなく火月の頭を無理矢理つかみ一緒に伏せる
触れてすらいらないのにも関わらず衝撃波で木が切り落とされる

《限界突破・全身強化》

ツドイカタマレ
《集固》

彗と秋野は反射的に魔力を解放

一瞬で魔法を構築する

逃げる暇があれば戦わなければ駄目だと本能が叫んでいた

秋野は魔力をまとわせ肉体を強化すると火月を掴み上に跳躍する

目指すは校舎屋上

そして彗は魔力での強化でなく魔法で全身の身体能力を強化させワーウルフと対峙する

「…くっそ、こんなときに何やってんだ？あのチート共は!!」

彗は一瞬でワーウルフに接近する

相手は自分よりも巨大である

ならば接近して間合いを通過し自分の間合いに入れば問題はない

ワーウルフの再びの薙ぎ払いを地面を転がり避ける

そしてそのまま地面を蹴る

「おら！」

ワーウルフの顔面に向けてそのまま跳び蹴りを放つ

全身を強化させて放った一撃である

常人が食らえば頭が破裂するほどの蹴りを顔面に直撃させた

手応え完璧のクリーンヒットである

岩ぐらいなら余裕で碎ける

そんな一撃を受けたワーウルフだが

「やば!!」

怯みもしていない

当然ながらダメージなし

逆に彗は跳び蹴りの反動を利用して後退しようとしていたためまだ空中にいる

再びワーウルフが振りかぶる

(判断ミスった!!!)

彗は腕を犠牲にしようと手を前に伸ばす

「どっせい!!!」

空から秋野が集固を使い下に跳躍して重力も足された踵落としを振りかぶった腕に放つ

「！」

なんとか軌道が変化し彗は肩を少し切り裂いただけで済んだ

《集固・エアロバースト》

秋野はそのまま圧縮した空気を至近距離からワーウルフに放つ

彗のを見ていた秋野はすぐさま足場を形成し、後ろに跳躍する

「無事ですか！！？」

「問題ない！」

傷ついた右肩を動かさまだ肩は動くことを確認する

「オオオオオオオオオオオンンン！！！！！！！！！！」

少し毛が逆立っているワーウルフだが無傷である

ちよこまかと攻撃をしてくる二人に怒りを表すかのように雄叫びをあげる

ワーウルフは両手を振るう

狙いは彗と秋野の二人

鎌鼬のような衝撃波が襲いかかる

彗は最小限の動きで回避

秋野は大きく上空に跳ぶことで回避する

地上と上空からふたりで接近

ワーウルフの視線が迷ったのを二人は見逃さない

そしてワーウルフは狙いを彗に絞る

それを見た彗は僅かだけ接近する速度を緩める

秋野は足場を形成し勢いよく足場を蹴ることで加速

ワーウルフの頭上を飛び越え反転

「せい!!」

再び足場を形成し膝蹴りをワーウルフの後頭部に放つ

《限界突破・一撃強化》

彗は全身を強化している上で更に部分的な強化を重ねる

僅かに怯んだワーウルフの顔面に直撃

およそ彗にできる最高の一撃

《集固・因果応報》

そして秋野はワーウルフの頭を固定

《集固・射出》

頭を身体から吹き飛ばす

「ふう…」

頭部を失ったワーウルフはゆっくりと力無く倒れる

「危なかったです」

「まあ止められたから良しとするか、こんなのが露見した日には大変なことにならないし」

彗はようやく落ち着いて呼吸を整える

「死体処理はどうしましょうか」

さすがに放置はできない

バレてしまっただけは逃げずに倒した苦勞が水の泡である

「そうだった…な!!?」

死体がない首が弾けとんだはずの死体がそこにはなかった

背後に嫌な氣配を感じると同時に彗は秋野を割と手加減できずに蹴り飛ばす

そして秋野の身体が吹き飛ぶと同時に彗の腹には爪が食い込んでいた

「…つくそ」

内臓が損傷し、吐血する

ワーウルフが生きていた

首も復活していて、怒りを顕にするかのような形相で

ワーウルフが腕を振ると彗は紙切れのように吹き飛ぶ

「先輩!!!!!!」

秋野が声をかけたと同時に目の前にはワーウルフ

「あ…」

警戒を解いて魔力による強化をしていない秋野にとってそれは死を

意味した

咄嗟にその場に伏せる

しかし衝撃はこない

痛みもない

回避できたかと考え魔力を循環し強化してから大きく後退する

「グットタイミングってわけじゃなさそうだわ」

防ぐこともせずに絶対強者級のアユリがいた

ワーウルフの攻撃は当たっておらず寸前で魔力によって止められていた

「飛影様の妹に感謝した方がいいわ、全力で走って私を見つけることができたんだから」

椿と一緒に校舎をうろうろとしていたアユリ

話を聞いて二人に何かあれば飛影がキレると予想できたアユリはすっ飛んできた

「オオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!」

吼えながらアユリに向けて何度も何度も攻撃を放つが全て魔力によって止められていた

《魔氷・止血》

アユリは彗の傷口を取り合えずで凍らせる

もちろん壊死しないように細心の注意でだ

そしてようやくアユリはワーウルフを視界に入れる

「五月蠅い犬ね」

ただアユリはワーウルフの方を向いたただけであるが、遅すぎる本能在危険を察知して逃げようとする

「死になさい」

ただのビンタ

それだけでワーウルフの頭は吹き飛ぶ

「はい、終わり」

楽すぎるゝとアユリは欠伸をする

「気を付けてください！！！！！！あいつそれぐらいじゃ死なないです！！！」

先程と同じ状況

だが今回は死んだふりなどせず、怒りのままにアユリに向けて全力で爪を突き刺す

後ろを向いたままのアユリだが

《魔氷・氷結》

だがそれを見逃すほどアユリは甘くはない

ワーウルフの下半身が地面ごと氷に包まれる

「ウチの世界の生物だけど…こんな魔力と再生力はないはずなんだけど」

試しにとばかりにアユリは再び頭を吹き飛ばす

先程と違い速度は格段に遅くなったがそれでも首から頭が再生されていく

「…改造されているわね、はぁ厄介事ね」

大きく溜め息を吐く

《魔氷・絶対零度》

パチンと指を鳴らす

一瞬にしてワーウルフの身体が凍りつき結晶となり霧散する

「はい、終了、無事？」

何でもないようなアユリ

実際アユリにとっては雑草を踏み潰した程度である

「…私は無傷ですが安倍川先輩が」

傷口が凍っているため出血で死ぬことはないが、それでも早急に治療が必要だった

「腕の良い治癒魔法使いを呼ぶわ、安心なさい。とりあえず見ておいてね」

そう言うときアユリは秋野達の傍を離れる

（ああ、面倒なことが起きるわこれ、この＞予勘く、絶対当たるから困ったわ）

絶対強者級はシーレイと比べれば雲泥の差だが第6勘が恐ろしく発達していて勘は冴えている

ただの勘なので呼び方は予勘と言っている

（重要なのは嫌な予勘じゃなくて面倒な予勘がするのよね）

まあ世界的に関係無いかと思えば楽観的に考えアユリは腕の良い治癒魔法使いに連絡を取る

狼の血をもつモノ（後書き）

ちよつとフラグを立てました。

この話は続かず次は飛影と静紅の話です。

沈黙少女と暴走魔王（前書き）

飛影君大暴走です

ユニーク3000超えました！
本当にありがとうございます

沈黙少女と暴走魔王

飛影は静紅に任せて傍観していたら、場所を移動することになった

「どういうことだ？」

「ちょっと欲しいものがあるのだけど…二つの結界に邪魔されてるのよ」

微笑みながら静紅と飛影は口を動かすだけの会話が始まっていた

周囲から見れば微笑みながら気分良く連行されているように見える

先頭を歩くのは先程の飛影の感性から見れば普通ではない少女であった

その後ろに騎士の男達

そして飛影と静紅を囲むようにしている

「一つの結界は力で壊すもので二つ目が先頭の少女…巫女って言われてる少女しか解除できないのよ」

「なるほど」

通りでアンジェレネの持つ結界殺しを欲しかったわけだと飛影は合点がいった

「それで？この状況は？」

飛影の疑問

「うふふ」

悪戯心を含め微笑む静紅

「おお！貴殿等が伝説の勇者の再来か！！」

「…」

「ふふ」

哑然としている飛影

それは飛影を知るものであれば珍しさに驚くほどである

飛影達が連れてこられたのはメリアの謁見の間に似ている部屋

洋風な城であることを飛影はようやく理解した

「…」

巫女と呼ばれる少女は再び文字を空間に走らせる

「なるほどな」

偉そうにふんぞり返っている初老の男性

服を見る限り、王様である

何度か頷いたのち再び飛影と静紅に視線を戻す

「アニスが説明していないということで私から説明しよう」

飛影は少女の名前を知ることができた

それ以外は話を聞くつもりはなかった

まだ微笑んでいる静紅は気になったが所詮、相手はただの人間である

「この国は…いやこの世界は今魔王に征服されようとしている」

「ぶー！！」

思わず吹き出してしまう飛影

魔王の意味は違うが、笑ってしまった

「…なんでもない」

怒りや驚きの目線が飛影につきささる

面白そうな話のため早く続きを知りたいがために、飛影は素直に言葉を出す

「この世界に魔王が現れたのは過去に2回、そして過去二回とも異世界から召喚した勇者が魔王を倒したのだ。今回も同じように召喚したわけだ」

「…」

色々質問したいことがあるが静紅に言われた通り黙って話を聞く

「質問だけれど、その今回の魔王が現れたのはいつなの？」

飛影が気になってそうな情報を質問する静紅

絶対強者級ならば世界を征服するのに3日も経たずに終了する

「9年前になる」

「悠長すぎだろ」

飛影は思わずまた笑ってしまう

9年も経っているのに征服できていない時点で飛影はその魔王とやらの価値があまり無いと確定させた

視線が突き刺さるが飛影は気にしない

「仕方ないのだ、勇者召喚の儀は10年に一度なのだからな」

魔王が悠長だなと笑った飛影だが

王にとっては召喚するのが遅すぎるのだと聞こえる

「それで、私達を召喚したのはその巫女？のアニス？って子なの？」

飛影は再び苦笑する

召喚の魔法と移動の魔法は種類が違う

移動の魔法は

静紅なら次元の狭間に入れること
ダドマなら許可を得ること

トリガーが必須である

召喚の魔法は強制的に、なんのトリガーも無しに対象者を召喚させる

ノントリガーである

強制的と言えば簡単そうだが絶対強者級を一人召喚するのに必要な
魔力は絶対強者級の全魔力程度必要である

2人ならばその倍

言うなれば不可能である

「そうだ、アニスが召喚した。しかし、お主等は落ち着いているな、
過去二回の勇者はこのことを信じるのに3日はかかり、暴れて逃走
すると聞いておったのだが」

飛影はだから警備が決して逃げないようにの配置だったのかと理解
した

「そういえば…そのアニスは喋らないけど喋れないのかしら？」

少し気になった静紅

2つめの結界はアニスでなければ開けられないと聞いている

無口ではなく喋れないのでは本当に結界解除できるかが心配要素として増える

「喋れなくなっただんじや、8年前に魔王軍に襲撃された時に母親であり、私の妻が殺された。今でも鮮明に思い出せる程の酷い死体だった。それを目の前で見ていたアニスは精神的に重症になり、感情を表すことも喋ることもできなくなった。」

「あらあら」

それは可哀想ね〜と他人事で片付ける静紅

まあ喋ることができなくても結界くらいは外せるかな〜と考える静紅

「あ？母親が酷い殺されかたをされて、それを見てショックうけました〜喋れなくなりました〜私可哀想です〜ってか？あ〜ガツカリだ…ちよつとは面白そうだと思ったのに、眼も気に食わねえ自分だけが可哀想って同情誘うような眼だ。なに？同情されたいの？母親殺されたんだ〜可哀想〜って？お望みならいくらでも同情できるぜ〜？ただ同情ってのは見下されてるってことだからそこんどこ気を付けろよ〜あ〜可哀想だね〜母親殺されちゃったんだ〜酷い死に方でそれ見ちゃったんだって？うわ〜それは辛いね〜まあ元氣出せよ〜ってか？」

「ちよ！！！！」

静紅が驚くのも無理はなく本当にいきなりである

（飛影君のスイッチがわからないわ）

アニスは驚きながらも否定のために首を振る

「きさまぁー！！！！！」

怒り狂った騎士団長が飛影に槍を突き刺す

「一言で言うならうぜえ、自分だけが可哀想可哀想って思って何が面白いんだ？」

槍は飛影のコートの隙間に偶然に突き刺さり、飛影の腹を槍が貫いているが飛影は止めない

「絶望して楽しいか？自分が可哀想って思って楽しいか？そんなに可哀想って思えるんだったら何故死さない？」

「な…」

突き刺しても関係なく喋り続けている飛影

騎士団長だけでなく騎士達全員が1歩下がる

「そんな生き方しても死んでるのと同じじゃねえか、楽しく生きねえで可哀想って思いながら生きてくなんて生きる屍に過ぎない、どんな死に方したって死は死でしかない。じゃああれか？母親が病気で死んでもお前は自分が可哀想だと思って生きるのか？声を殺すの

か？そんなことはないだろう？だって酷い死体だから怖いんだろ？可哀想なんだろ？」

飛影の腹に突き刺さったままの槍が自然に抜ける

傷はすでに塞がっている

「どうなんだ？オイ」

「…」

涙を流し必死に首を振るアニス

「泣いてんじゃねえよ、そうやって自分が苛められて可哀想アピールか？母親が酷い死に方した？だからどうした？それで？だから？なに？自分が可哀想？舐めてんのか？それは同じ境遇の中で生きてきて必死に今を生きてるやつに対する侮辱だ」

ピタリとアニスの動きが止まる

「自分だけ自分だけって嘆いて楽しいか？楽しいなら変態だな？」

「ちょ…飛影君」

さすがにやりすぎだと静紅は止めに入る

「止めるな！…まるで自分だけが被害者ってか？甘えてんじゃねえよ！世界がそんな狭いもんだと思うなよ！！殻に籠ってんじゃねえ、力がある者が甘えるな！」

魔王として

そしてただの強者として飛影は200年以上の時を過ごしてきた

世界を一部だとはいえ見てきた

そんな中同情が欲しくて生きている者は皆無だった

例えどんな過去を持っていても今を生きていた

そんな者ばかりを見てきた飛影にとってはアニスの生き方は侮辱である

「…」

俯き黙るアニス

騎士達の我慢は限界である

どこぞの輩が知ったような口で暗い過去を持つアニスを貶しているのだ

「俺の言いたいことは終わりだ。死にたいならいつでも殺してやるよ」

すっきりしたのかようやく口を閉じる

王だけが飛影に驚いていたが他はぶちギレ3秒前状態

「…それで、とりあえず私達は魔王を倒せば良いのかしら？」

場の空気を完全に無視する静紅

わざとではなく天然である

「そうだ、こちらからも精鋭を出す、その者達と共に魔王討伐をお願いしたい」

「精鋭ねえ」

少し小馬鹿にした笑いの静紅

だがいつもの微笑みと変わらないため気づいたのは飛影だけである

「待ってください王！！こいつらの実力を試させてください！！！」

チャンスとばかりに騎士団長が前に出る

騎士団長は飛影を強力な回復の魔法使いだと考えた

舐められたままでは気が済まない

「あらあら信用無いわね：飛影君どうする？」

「別にどうでもいゝやるんだったら殺るし、やらなくても殺るし。殺ることは確定してるから」

本当につまらなそうな飛影

まさかの地べたに寝転がるという暴挙にでた

「許可しよう、ただ殺しは厳禁だ」

騎士団長の男には一度腹に風穴を開けられたため殺る理由は充分ある

「舐めやがって!!」

騎士団長

32歳

飛影達と共に行動する精鋭の一人である

国を代表する精鋭と戦うにも関わらず飛影は寝転がっているだけで構えもしない

王からの許可を得て騎士団長は再び槍を構える

飛影は魔力を一切解放していない

いや解放できない

世界にはそれぞれ耐久力がある

絶対強者級が気まぐれで世界を破壊できると言われている理由のひとつが強力すぎる魔力が世界の耐久力を超えると世界が崩壊するところがある

なので知らないところに来た場合はまずは魔力を徐々に解放し耐久力ギリギリを測らなければならない

静紅は測定中であるが飛影は静紅に合わせるだけなので、魔力を一
切解放していない

「はぁぁぁ!!!!」

一直線に槍を構えた突撃からの突き

頭に血が上り単純な力ずくの攻撃

「よっこらせ」

飛影は少し身体を起こす

飛影が槍に触れた瞬間

騎士団長は背中から地面に叩きつけられる

なんてことはないただ力のベクトルを受け流しただけである

そして騎士団長の視界にはゆっくりと自分に向け落ちてくる槍

「っ!!!!」

咄嗟に回避しようとするがいつのまにか起き上がった飛影が軽く腹
を踏んでいるので動くことは不可能

「はい、終わり!」

飛影は落ちてきた槍を見ないで掴みそのまま喉を狙って突き刺した

「∴静紅、邪魔」

本気で殺すつもりだった飛影

静紅は咄嗟に槍を蹴ることで軌道をずらした

「殺しちゃ印象が悪くなっちゃうわよ」

変わらず微笑んでいる静紅

途中で飛影が大暴走したがなんとか作戦通りである

実力を試され、精鋭を完全に負かすことで恐らくは国で一番強いアニスをつれて旅に出ることが可能である

ただ飛影が暴走したため少し不安であった

沈黙少女と暴走魔王（後書き）

飛影君は人生楽しく生きてないやつにはキレます

第五十回記念（前書き）

いつの間にか五十話目です

ビックリしました

第五十回記念

「おい、リタ！」

「なんでしょうか飛影？」

「50回記念らしいぞ」

「何がですか？」

「いや俺も知らん」

「わけがわからないです」

「そういうときもあるさ」

「飛影にはそういうときしか無いような気がするんですけど…」

「まああれだ。なんか50話だけど、キャラがゴチャゴチャとしてわかりづらいかも知れないと思ったためのキャラ紹介だ」

「ああ…なるほど分かりました。まずは主要人物6名ですね」

「そうだな…んじゃキャラクター紹介開始」

名前 飛影

種族 小鬼

所属 魔界の魔王

武器 黒鋼

魔法 炎舞・風華・ヘリオトロープ

普通の人間大嫌い

異常な人間大好き

そんな人物

とにかく面白いことが好きで面白ければ全て良しな性格

近距離く中距離が得意な間合いで遠距離は少し苦手である

キレルスイッチ チビ・飛影と仲の良いやつを傷つける

力 S S S S

器用 S S S +

魔力 S S S

魔法 S S S +

素早さ S S S

近距離 S S S ++

中距離 S S S +

遠距離 S S S

名前 リタ・レーン

種族 神

所属 魔界の魔王補佐

武器 金槌・釘・鋸e t s

魔法 神の翼・キュリクレイ

容姿端麗才色兼備弱点無し完璧超人

ただときどき天然なボケをしてしまう

飛影を補佐するのが楽しいため好き

完璧を求めるのが心情

戦闘ではあまり手加減はしない

中距離く近距離が一番得意な間合い

遠距離でも戦えるが苦手である

キレルスイッチ 貧乳・飛影のことを侮辱される

力	S S S
器用	S S S
魔力	S S S +
魔法	S S S +
素早さ	S S S S
近距離	S S S +
中距離	S S S + +
遠距離	S S S

名前 ダドマ

種族 神龍

所属 人間界の魔王

武器 なし

魔法 方舟・天変地異

東東高校のトップ

東東高校をつくった理由は面白そうだからである

飛影と違い普通の人間とも接する

特徴として無限の魔力をもつ

というよりも魔力が一瞬で回復するスキルをもつ

キレるスイッチ せんべいを盗られる

力	S S S
器用	S S S +
魔力	S S +
魔法	S S S S
素早さ	S S + +
近距離	S S S +
中距離	S S S + +
遠距離	S S S + +

名前 ギルギア

種族 鎧龍

所属 人間界の魔王補佐

武器 なし

魔法 グラビティ

ダドマのことを溺愛していて

飛影とは犬猿の仲

というか殺したいとまで思っている

だが飛影とは似ている

同族嫌悪のようなものだろうとダドマは予想している

キレルスイッチ ババア・ダドマを侮辱

力 S S S +

器用 S S S

魔力 S S S +

魔法 S S S +

素早さ S S S

近距離 S S S S

中距離 S S S +

遠距離 S S S +

名前 ライン

種族 大天使

所属 天界の魔王

武器 なし

魔法 ナルカミ・幻想魔境

魔王の中でのまだマトモな方である

ただ比較対象が魔王のためそこまでまともではない

ただ魔王という性質上なのか面白いことに関しては努力する

温厚なのだが相性の悪いリタを除けば殺し合い最強の魔法をもつ
あまりにもチートな魔法のため、特に飛影とダドマにいじられる

キレるスイッチ 知らないやつに喧嘩を売られる

力 SS ++

器用 SS S

魔力 SS S ++

魔法 SS S S +

素早さ SS ++

近距離 SS S -

中距離 SS S +

遠距離 SS S ++

名前 アユリ

種族 悪魔

所属 天界の魔王補佐

武器 なし

魔法 魔氷

飛影大好き悪魔

飛影の補佐であるリタにいつもイライラしている

けっこうクールな性格で熱くなることはあまりない

キレるスイッチ 飛影の侮辱

力 SS S +

器用 SS S

魔力 SS S +

魔法 SS S ++

素早さ SS S

近距離 SS S ++

中距離 SS S +

遠距離 SS S

「以上が主要人物の魔王と補佐六人！」

「やっぱりチートですね」

「チートだな」

「次は神様面子」

名前 アンジェレネ・リーブ

種族 神

所属 なし

武器 神の武器

魔法 アンビリアルワールド

元気いっぱい爆走少女

飛影のことが大好きで見かけたら抱きつくほどよくリーベと喧嘩をする

キレルスイッチ 甘味を盗られる・飛影を侮辱

力 SS++

器用 SS+

魔力 SS+

魔法 SS+

素早さ SS++

近距離 SS+

中距離 SS+

遠距離 SS

名前 シーレイ

種族 神

所属 なし

武器 名称不明（物凄く硬い巨大な鍵）

魔法 スロウス

いつも眠たそうにしている少女よく飛影の近くで寝ることが多い理由
由は飛影の近くは魔力が漏れて暖かくなっているからだ

飛影のことは極上の枕として考えている

未来確知という能力がありいつでも未来を見ている

キレルスイッチ 睡眠の邪魔

力 S S S

器用 S S +

魔力 S S S

魔法 S S S

素早さ S S S

近距離 S S S S

中距離 S S

遠距離 S S

「再びチート」

「チート万歳ですね」

「次は無所属」

名前 静紅

種族 ????

所属 なし

武器 なし

魔法 次元破壊・完全領域

飛影の家にすんでいる中でけっこう謎な人物

天然の馬鹿で何もないところで転けたり普通にする

盗賊としての実力は確かなもの

キレルスイッチ 宝を盗まれる

力 SS+
器用 SS+
魔力 SS
魔法 SS S+
素早さ SS
近距離 SS S++
中距離 SS+
遠距離 SS

名前 リーベ
種族 吸血鬼
所属 なし
武器 なし
魔法 黒霧
飛影を吸血鬼にした少女
最強の吸血鬼で酒好き
もはや酒無しでの生活はありえないと断言している
キレルスイッチ お酒がない

力 SS S+
器用 SS S
魔力 SS S
魔法 SS S+
素早さ SS S+
近距離 SS S++
中距離 SS S
遠距離 SS S

名前 黒鋼
種族 魔剣
所属 なし

武器 自分自身

魔法 なし

自他共に認める飛影の右腕

けっこう淡白で表情が変化しないが飛影の前だと表情の変化がわかりやすくなる

キレルスイッチ 飛影を侮辱

力 S+

器用 S+

魔力 なし

魔法 なし

素早さ S+

近距離 S S++

中距離 S S+

遠距離 S S

名前 彗

種族 人間

所属 なし

武器 たまに刀

魔法 限界突破

飛影と出会ったがために力に目覚めてしまった

最初はただの魔力による身体強化だったが魔法というレベルまで上がっている

完全なるツツコミ属性の持ち主で飛影に毎度ツツコミをかませる

キレルスイッチ 対処しきれないほどのボケ

力 D (C)

器用 D (D++)

魔力 C

魔法 C+

素早さ D (D++)
近距離 D+(C)
中距離 E
遠距離 E
○内は魔法使用時

名前 秋野
種族 人間
所属 なし
武器 なし
魔法 集固

飛影と関わったことにより普通の人間としての枷が外れた少女だが
まあけっこう便利だからいいやと思っている
彗のことが好きで飛影によく相談している

一直線少女

キレルスイッチ 乙女の純情を踏みにじる
力 E++

器用 D

魔力 D

魔法 なし

素早さ C

近距離 D++

中距離 E

遠距離 E

「とりあえず今回は以上かな」

「意外と少ないですね、椿さんに火月さんに杏さんにエリアさんが
いませんし」

「いろいろと見せ場があるから今回はやらないらしいぞ」

「だから誰情報ですかそれ？」

「わからん」

第五十回記念（後書き）

更新遅れてすみません

携帯電話壊れてました

魔王と盗賊とニート（前書き）

お気に入りか30件超えました

ありがとうございます

魔王と盗賊とニート

飛影と静紅がこの世界に来てから3日

「お茶が美味いわね」

「煎餅も上手く作れたな」

飛影と静紅は向かい合うように正座で座りお茶を飲んで煎餅を食していた

場所は城の飛影と静紅に割り当てられた1室

全く移動していなかった

あの後アニスを同行させようとしたが、飛影の暴走のせいで警戒されていて連れていくことが出来なかった。

なら同行するまで私達はここに住むわと静紅が宣言

そして現在に至る

静紅の狙っている宝は城の宝物庫にあるため、ぶっちゃけるとアニスを同行させる意味はあまりない

一番手っ取り早いのは脅して開けさせることであるが、それはスマートではないと静紅は考える

だが魔王倒したから褒美としてくれ、というのは更に盗賊ではないと静紅は考えている

一番最高なのは飛影に魔法を見させてヘリオトロープで解除するにとだ

理由としては一番盗賊っぽいという理由

「それで…どうだった？」

静紅は一瞬だけ周囲を警戒し確認する

結果は護衛という名の見張りが廊下にいるくらいである

静紅は眼で飛影に合図をする

《風華》

飛影は風華を発動

風の結界で音が洩れないようにする

「えーと宝物庫の周りには人気は無し、魔術による結界や警報、罠とかもあったな。常時発動してる。まあ宝物庫の周囲は魔術によるものだからそこまで警戒する必要はない」

魔法と魔術の違いは簡単である

自力で構築しているか、何かの力を借りて構築しているかだけである。

その身ひとつで構築できる魔法と違い

魔術は杖や札などの道具、詠唱や言霊などの言葉、印を組むなどの動作が必要で

簡単に言えば粗悪品である

「次は私ね、宝物庫の中には次元破壊でいけなかったから、層をずらしているわね。次元破壊での侵入は無理そう」

「へー結構上等な結界だな」

絶対強者級の侵入を防げる結界などそうはない

「ちょっと違うわ！侵入はできるのだけど中の次元も破壊しそうだから侵入できないのよ！」

盗賊として侵入できないという評価は価値が下がる

一応は本当のことである

侵入はできるのだが中が次元ごと壊れてしまうため宝が取れないから侵入できないのだと追加する

「…おお」

少し気圧された飛影

（意外と盗賊にプライドあるんだな）

感心してしまう飛影

（ただのアホと思われるのはごめんだわ）

だが実際は盗賊とか云々ではなく個人的なイメージのためであった

「どうしょっか」

「どうしましょうか」

完全な手詰まり

困ったものだ二人して悩む

「…面倒ね、滅ぼそうかしら」

パツと気まぐれででてきた言葉

「宝取れなくね？」

そのこと自体には驚くことはない飛影

そんな気まぐれで世界が滅ぶのは珍しくもない

だが今回は滅ぼしたら目当てのものが盗れない

それだけが問題である

「はぁ面倒ね」

再び同じ台詞を溜め息とともに吐き出す

「名案が浮かばないわ…飛影君があの時暴走しなきゃ上手くいったかもなのに」

ついカッとなった飛影

「…すまん」

謝ることしか出来なかった

言い訳のしようがない

「まあシーレイちゃんじゃないのだから結果はもしなんて考える意味がないのだけれど」

「…何が望みだ」

何か言いたそうである静紅

飛影は溜め息しかでない

「あらあら…なんか悪いわね…とりあえずクロイツ3つでいいわよ」

「…意外と高い」

飛影はコートのポケットから手のひらサイズの水晶を3つ取りだし静紅に投げる

「へぶ！」

二つは両手を使いキャッチしたが最後の一個が顔面キャッチであった
クロイツ

使用法は魔力を込めて割るだけ
効果はその込められた魔力の持ち主は10分だけ魔力探知に引っ掛
からない

逃げるのに適している道具である

そこそこ手に入らず希少価値ではないが一応はレアな物である

「アホ」

「うゝ飛影君が3つもいっぺんに投げるからよゝ」

傷がついていないことを確認して静紅は着物の袖に仕舞う

「さて、暇だ」

「あら？そろそろじゃない？」

「あゝホントだ」

静紅も飛影も異世界に移動しようがなんだろうが正確すぎる体内時計を所持している

時計も見ずに日の傾きすらも関係無しに体内時計だけで判断できる

コンコンと控え目なノック

「飛影君…わかってるわよね？」

「わかった」

静紅から発せられる圧

これからやることをキチンと理解しているわよね？とヒシヒシと伝わる

飛影は頷き深呼吸をする

「どうぞ」

微笑んで招く静紅

入ってきたのは銀髪金眼の14歳程の少女

アニスである

「…」

アニスは黙ったまま飛影をガン見する

飛影が暴走してから毎日同じ時間に訪ねてきて飛影にフルボッコ（言葉の暴力）される

だが懲りずに毎日毎日来る

最初は飛影も微笑んで話しかけるのだが、しばらく（5分）話しかけるとキレることを繰り返している

「今日はなんの用だ？」

ニコニコと不自然なぐらいの微笑みを浮かべる飛影

静紅はお茶を持ってこようと立ち上がる

飛影は内心転ぶだろうなあと思いつつも止めない

「…」

アニスは口を開かずに空中に魔法で文字を描く

「あのな…俺は字が読めないから話してくれなきゃわからないんだよ」

ニコニコとした微笑みから少し頬がひくつく

「…」

再び文字が描かれる

眼に敵意は感じないが喧嘩を売っているように飛影は感じる

「お茶持ってきたわ」

微笑みながら静紅が戻ってくる

「早よ喋れや」

「はやっ！……！！……！！？」

まだ二分しか経っていない筈だが軽くキレている飛影に驚く静紅

「飛影君おさえ……」

飛影を止めようとした静紅がむんずと裾を踏む

「あら？」

そのまま後ろにすってんころりん

お盆に乗せたお茶（熱々）は飛影とアニスに一個づつ襲いかかる

「アホ」

「……！」

飛影は見ずに容器を掴みお茶を溢さないように回収して口に運ぶ

アニスは突然のこと動けずにお茶を被る

何故かこれでもかという程沸騰しているお茶

大火傷に失明は確実である

また肌にも後遺症が残るかもしれないほどである

「…あああ！！」

熱さに驚き、叫び声上がる

物理的に喋れないのではなく精神的なものならば叫び声程度ならい
つでも出せるのだ

感情が無いのではなくただ喋らないだけなのだ

「なんだ…喋れるじゃん」

ニヤリと笑う飛影

立ち上がりあまりの熱さに暴れるアニスの両肩に優しく手を起く

「落ち着け…大丈夫だ」

飛影はクシャクシャと柔らかいお茶で濡れていない髪の毛を撫でて
やり真っ白な火傷を負っていない頬を軽く叩く

「…」

正気に戻るとどこも火傷していないどころか濡れてもいない

人間は思い込みが激しい

例えば熱していないアイロンに触れて火傷することがあげられる

飛影は風華を発動してアニスに薄い膜を張った

そうすることで怪我を負わないようにし、沸騰しているお茶を被ったと錯覚させたのである

飛影が静紅が転ける際に思いつき実行した

見事成功し完全に喋れなくなったことではないと理解する

「もっと喋れば楽しくなるぞ。人間として生きろよ…まあ最初に比べれば幾分かましな面になったな」

「…」

再び黙るアニス

飛影を鋭い目付きで睨み今度は文字も描かず黙ったまま退室する

「また怒らせちゃったわね」

「らしいな」

「難しいわね」

「思春期だからな」

おっちゃんにはわからんよと外見高校生の実年齢277歳がお茶を啜る

「そうねー私もわからないわ」

おぼちゃんは辛いわゝ腰にくるわゝと外見高校生ゝ大学生の実年齢
不明もお茶を啜る

絶対強者級から見れば若い部類に入る二人

だが時々誰よりも年寄りになる二人である

「あゝ暇だ」

「あゝ暇ね」

やることが全く無い飛影と静紅

全てはアニス次第である

まずはアニスと嫌われても構わないからコミュニケーションを取る
ことが必要である

魔王と盗賊とニート（後書き）

ありがとうございます

暗殺と空の支配者と滅亡の言葉（前書き）

お気に入りが34件…心臓が止まりました
感謝感激です。

暗殺と空の支配者と滅亡の言葉

そしてあれから3日後

「暇ねえ」

「暇だな」

飛影と静紅は全く動く気が無い

部屋からあまり出ずにほぼ引きこもりになっている

風呂は飛影の炎で身体を清めることができる

食べ物も飛影のポケットに料理から食材まで揃っているため飢えることもなく

あまりにも暇な時は窓から脱走（10メートル程度の高さ）して遊びに行ったりと好き放題していたがすでに6日経っている

暇をもて余している二人

楽しいことといえばアニスがやってきて一言二言喋れるようになってきたことである

「なんか起きないかしら」

「なにかって？」

「ほらあるじゃない：王様が勇者が召喚されたのに一向に旅立たない暗殺しようっていうのとか魔王が勇者に殺られる前にこっちから出向いてやるゝとか」

「どこのゲームだよ」

飛影は笑いながらツツコミを入れる

「そうね」

微笑む静紅

『でも』

二人して溜め息を吐く

「こうなっちゃうのが現実だな」

「こうなっちゃうのが現実ね」

その場から跳躍して離れる

と同時に炎の塊が床を粉碎しながら上昇していく

ポツカリと床に大穴が空く

場所はちょうど飛影と静紅がいたところ

しかし飛影と静紅は慌てる様子もない

飛影は近くにあった枕をドアへと投げる

ドアに当たると同時に剣や槍が飛び出て枕に突き刺さる

静紅は少し焦げているシーツを窓のほうへ投げる

ヒラヒラとシーツが外から見える位置に飛んでいくと同時に氷柱や鎌鼬が外から放たれ部屋の中を吹き飛ばす

「あゝやだやだ」

「面倒ねゝ囲まれてるわゝ」

部屋の中が無惨な姿になっているが飛影と静紅は無傷でギリギリ足場になっている箇所にした

大穴から下を覗くと兵士たちが槍や剣を構えていて剣山のようになっていて降りられないようにしていて

ドアには兵士たちが出さないように囲んでいて

窓というよりも既に外に接する壁は無くなっており、魔法が次々に部屋の中の飛影と静紅を狙い放たれている

「んで壁には結界な」

コンコンと飛影は壁を軽く叩く

「どうするっ..」

「殺しは？」

少し悩む静紅

ここまでされてなにもしないのは正直無理である

「アニスはどこにいるのかしら？」

よくよく観察していたら別に嫌われている訳ではなかった

少ししか接していなかったが性格的には止めそうである

「んーとこっから10Km西にいる」

「なるほどね」

静紅も飛影も相手の狙いを理解する

今のうちに殺せばアニスが帰ってきた時に勇者が裏切り城の者を殺したから仕方なく殺したなどと説明ができる

いくらでも改変は可能である

そして自分達に都合の良い勇者を再召喚することができる

召喚は10年に一度だがおそらく飛影達はなかったことにされ、再び召喚するであろうことは予想できる

「うーん飛影君って結界を無効化する魔法ない？」

「あるにはあるが：使う気は全く無い」

その魔法は当然ヘリオトロープ必須である

デフォルメ化には絶対なりたくない飛影

「じゃあ皆殺しは無理ね」

諦めの溜め息

「半殺しならよくね？」

なんとも物騒な会話である

「困ったわね：別に半殺しならいいかと思ってしまっわ」

この間も窓からの爆撃は続いているが、最初は魔法かと思っていた
飛影だがただの魔術であり

魔術程度ならば絶対強者級は垂れ流しになっている魔力で防ぎきる
ことができる

そのため二人とも呑気に会話をしているのだ

「んで、あとあれはどうする？予勘はあったんだが冗談で言っただけ
ずだったのに」

「まさかの両方ビンゴね」

城からの攻撃に加え

無くなった壁を見ると遠方の空にわらわらと影がでていた

魔王からの進軍である

数は150程

全部竜騎士であった

「どっちがどっち殺る？」

「うーん：悩むわねー個人的には傍観して殺し合いを見学するのもありなのけど」

その発想はなかったと飛影はポンと手を叩く

「でも俺達生きてたら駄目じゃね？勇者なのに放置したくっつてなりそうだ」

面白そうだが確実にアニスの信頼はゲットできない

「うーん決めたわ：喧嘩両成敗よ。二つとも潰しちゃいましょう」

「妥当だな」

魔王軍の方は殺せる

城の方は痛みつけて直接鬱憤が晴らすことができる

どっちがどっちになるか

思考の時間はいらなかった

「じゃあ飛影君はあっちお願いね」

静紅は魔王軍を指差す

殺し大好き飛影に殺せる方を頼み

鬱憤がたまっている静紅は城の方を担当する

「んじゃ開始しますか」

「オッケイよ」

二人は同時に外へと飛び出す

飛影はそのまま風を纏って飛翔

静紅はそのまま落下して魔術部隊に突っ込んでいく

この世界の耐久力は魔力全開でも耐えきれた

つまり絶対強者級の全力が出せる

静紅は魔力を少し解放し落下

着地までの際に魔術や矢が直撃したが垂れ流しの魔力で全て防ぐ

かすり傷すら負わずに部隊の中心に着地した静紅は地面に向けて脚

ありあまる体力

何者にも負けない力

誰も追いつくことができない速度

空の支配者と恐れられている

竜は人に懷かず魔王軍の魔物にしか懷かない

竜騎士が50も入れれば小国は滅びる

そんな空の支配者150体と対峙している飛影

「ヒヤハ！」

笑っていた

飛影は殺し合い大好きである

久しぶりの殺し合いに表情はにやけ、笑みが零れる

「竜ですか！竜ですね！！死にくされ！！」

上空200メートルの戦い

飛影は風を纏うのをやめ吸血鬼の翼を生やし爪を伸ばす

加速し接近しながら回転

そのままの勢いで爪で空間を薙ぐ

大気が割れた

爪による鎌鼬は軌道上にいた竜を切り裂くのではなく爆散させた

避けたというより運良く軌道上にいなかった竜達も暴風によって吹き飛ばされる

死んだのはたった10体ほど

15分の1程度

大した損害ではない

1キロ離れた場所からのたったの一撃だと考えなければ

乗っている魔物も空の支配者たる竜も一撃にして本能が逃げろと叫んでいた

直ぐ様部隊が一斉に転回し逃走を試みた

「逃げんなよ！こっちは血塗れにするだけだあ！！！」

既に転回先に飛影はいた

それと同時に20体ほどが爆散する

強靱な鱗がまるで意味をなさない

「とりあえずだけど「コレ」どうする？」

外の芝生でレジャーシートを敷いてお茶を啜りながら飛影は横目で「コレ」を示す

「どうしましょ？とりあえず選択させましよう」

コレはこの城の王であった

静紅が持ってきたので暇潰しに爪を剥がしたり髪の毛刈ったり遊んでいたモノである

「…た…助け…てくれ」

既にぼろぼろな姿

爪を剥がした時に痛みで叫び声をあげ続けていたため声が掠れている

「沢山選択肢あげるから選んでねえと…水死、溺死、圧死、シヨック死、感電死、爆死、転落死…あと何かしら？」

「拷問死、餓死、轢死、炎死、斬死、打死、銃死」

飛影がつらつらと選択肢をあげるが静紅は首を傾げる

「いくつか初めて聞くわね」

「今作った。読んで字のごとくだ」

「やくねゝ騙されちゃったわゝ」

笑いあう二人

端から見たら微笑ましいが当人には恐怖しかない

「この化け物…！」

恐怖のあまり口にした悪態

静紅の表情が変わる

無表情に冷徹に王であつたモノを見下ろす

それは世界を滅ぼすには充分な一言であつた

暗殺と空の支配者と滅亡の言葉（後書き）

見ていただきありがとうございます。

感想、評価 24 時間 365 日受付中です

感想を頂いたら発狂し

評価を頂いたら発車します

イライラ静紅と攻撃力最強の一撃（前書き）

更新遅すぎました

申し訳ありません

イライラ静紅と攻撃力最強の一撃

化け物

王が放った一言

空気が変わる

「今のはどっちに言ったのかしら？」

口調も表情もいつものほんわかとした雰囲気が無くなり

氷の刃を連想する

連想できてしまう

この問いを間違ってはいけない

馬鹿でもわかる

「ヒ…！」

早く答えなければ駄目だと理解はするが口から発せられたのは乾いた短い悲鳴だけ

「…もういいわ…」

静紅は軽く蹴りとばし地面に倒す

そして右腕を踏み抜く

「がぁぁぁ……！！！！」

痛みで叫び呻く

「とりあえず死になさい」

静紅が頭を踏み抜こうとする瞬間

傍観していた飛影の視界にアニスが映る

「静紅！」

城下町と城の様子を見て急いで向かっていたのだ

飛影は静紅を呼び制止させようとする

アニスが喋れなかったのは母親が無惨な殺され方をされたのをその眼で見ていたからだ

そんな状況の中

父親の王の頭を踏み抜くなんて真似をしたら宝を盗むなど不可能である

しかし、無情にも無惨にも飛影の制止は無意味で静紅は頭を踏み潰した

爆発でも起きたかのように皮と肉がひつついている頭蓋が周囲に飛び散る

「…何かしら飛影君？」

一仕事が終わリスッキリした表情の静紅

頭蓋が潰して周囲に血の匂いがつく

「アニス…来たぞ」

「あらあら…勘違いさせるかしら？」

アニスは息を切らしながら飛影達まで走った

そして周囲を見渡す

半壊した城に

気絶している兵士達

そして顔はわからないが服を見ると父親である王が死んでいる

「…どういう」

飛影と静紅を睨む

「んゝありのまま受け止めてくれや」

それに対して微笑みを浮かべている二人

「父…殺した許さない」

アニスは魔術ではなく魔法を構築

「む？お前の父親は人間じゃないのか？」

飛影の妙な言葉

「どういう」

「さっき殺してから気づいたのだけど…これ魔物よ」

静紅は頭部が無くなっている死体を指差す

僅かに変色をし始め緑色に肌が変わっていく

「…！」

「多分お前の母親と一緒に殺されたんじゃない？んでその後魔物が国を統治していたと」

飛影の予想は的中していた

王は妻が殺された怒りで魔物に戦いを挑み死んだ

そして擬態能力があるその魔物が代わりに王になったのだ

「悲惨な話ね」

完全に他人事

実際他人事である

「まあそんなわけで結界を壊してくれないかしら」

前後の文がめっちゃくちゃである

「…」

まだショックを受けているアニス

「あゝこれは完全にきてますね（主に精神が）」

「きちちゃってるわねゝ（飛影君が）」

飛影が普通ではない人物にこの反応をする理由を静紅は知っていた

飽きたのだ

「どうしようかしら？」

アニスはしばらくショックから立ち直りそうにない

飛影は飽きてきている

「んゝ静紅や…ここにこんなものがある」

飛影がコートのポケットから取り出したのは一本のナイフ

「ぶっ！！！！」

思わず静紅は吹き出す

当然ながらただのナイフではない

神の武器には叶わないが：どんな結界でも一回だけ消せるナイフ

リライト

正確には消すではなく結界の内容を書き換えて無効化するナイフ

「ちょーだい！！！！」

即答である

「高いぜ？何しろあと一本しかない」

飛影の笑み

一歩後ずさる

その笑みは飛影的には面白いことを考えている笑みであり

巻き込まれたくないけど宝は欲しい

「高いつてお金かしら？」

お金なら宝にしか興味がない静紅はいくらでも出せる

お金なら別にいいやと一瞬考えた静紅だが

「俺が金なんているわけないだろ？」

「そうよねえ」

甘過ぎる考えだった

「そうだなーじゃあ静紅の持ってる宝二個でいいや。ちなみに宝は俺が選ぶから」

にっこりと笑う飛影

「……………一個」

その目を見ることなく逸らしながら静紅はボソリと呟く

「やだ」

「二個……多くないかしら？」

「いや妥当だろ」

全力で交渉しなんとか一つにまけたい静紅

貴重な宝を使うのだから利益が欲しい飛影

お互いの意地と意地がぶつかり合う

「そっちは使っても残り一つだけどこっちのは一つしか無いのよ？」

価値的にはフタヒト（二つと一つ）じゃなくてヒトヒト（一つと一つ）が妥当でしょ？」

「ん？ いないのか？」

勝ち誇った顔で笑う飛影

飛影にはそれがあるのだ

値切るなら渡さなければいい

それに対して静紅はこの世界に置いていくという選択肢が飛影以外ならあるが飛影はヘリオトロープを使えば戻れるため交渉に手札にはならない

ビキリ

と静紅から何かが切れた

極上の微笑みを浮かべる

「ふふ」

「はは」

にっこりと笑いあう

その瞬間

街から動物が一斉に逃げ出し

半径1キロ程の生物全てが気絶していく

アニスとて例外ではなくその場に倒れる

「どうしようね？」

「どうするんだ？」

恐怖の空間が誕生した

「ゲームをしましょう」

静紅から提案をする

「ゲーム？」

「私と飛影君が戦うのもありだけど…多分世界滅んでしまうから…先にこの世界の魔王を殺したほうが勝ち、私が勝ったらヒトヒト。飛影君が勝ったらフタヒト」

飛影と静紅のガチバトルをするとダドマのように結界を張る者がいないため確実に世界は滅ぶ

最低でもこの大陸は地図から消失する

さすがに不本意なため、この世界の魔物の王の魔王を生け贄に捧げる

「のった!!!」

飛影は即答する

その表情は面白そうだと笑顔であった

本来のこの世界の魔王は畏怖されるか挑む存在であるが、二人にとってはビーチフラッグの旗程度の存在である

「ルールは？」

「なんでもあり」

「それ最高！」

テンションが最高潮の飛影

静紅もやる気充分である

「場所は？」

「海を挟んで北の大陸のどこからしいわ」

「おーけー！！情報収集も勝負の内だな」

準備体操を始める飛影

「60秒後に開始ね」

この時飛影は失念していた

静紅は宝を盗るためにこの世界にやってきている

そして事前準備として情報収集もしている

つまり、静紅は魔王のいる場所を知っている

だが飛影は気付かない

静紅はこっそりと袖からクロイツを取り出して魔力を込める

そして静紅も失念していた

飛影は基本的に情報収集のため風を操り世界中に行き渡らす

つまり飛影も魔王の位置は把握している

二人ともに自分の勝利を確信していた

《風華》

《炎舞》

《次元破壊》

《完全領域》

準備が終わり

そして60秒になった瞬間

《風華・炎舞・アクセル全開》

風と炎が飛影を包み最初からフルスロットルで魔王の城まで一直線

に発進する

《次元破壊》

その飛影の目の前には破壊された次元の亀裂ができていた

「あ！！」

飛影は止まることもできずに突っ込む

転移位置は魔王の城と正反対の位置

「ふふ」

静紅は笑いながらクロイツを破壊する

《次元破壊》

自分の魔力を隠蔽した後に次元破壊を発動

魔王の城まで一瞬で移動する

いくら飛影でも地球よりは一回り小さいが正反対の位置にいればヘリオトロープを使わなければ5分は確実にかかる

その間に討伐する

簡単なことである

「いくわよ」

（急がなきゃ宝が…）

静紅は腕を突きだしその衝撃波で壁を粉碎し魔王までの道を作成
驚愕しているそれっぽいものを発見する

「ふふ…発見」

「キサ…」

キサマ

ただその一言すら言い終わることなく魔王の首は静紅の手刀で跳ね
られた

「私の勝ち」

宝をなんとか死守した静紅

「ふ…やつを倒すとはやるな！…だが奴はただの影武者！…！本物の魔王は我だ！」

「…」

静紅は黙った

魔王（影武者）の首を壁に投げつける

「さあ！かかっ」

かかってこい

その一言すら言い終わることなく魔王（本物）の首は静紅の手刀により跳ねられた

「ふう…飛影君の攻撃がそろそろヤバイ位置にあるからさっさと逃げましょ」

魔王（本物）の首を手に持ち静紅は次元破壊を発動しようとする

だがその瞬間魔王（仮）が座っていた椅子が地面ごと上がる

「魔王（本物）を一瞬で殺るとは…だが奴は我の影武者…真の魔王は我だ！」

「…」

魔王（本物）の首をその手で握り潰す

「ふっ…怖じ気づ」

以下略

「物凄くダルかったわ」

飛影の魔法がもう本格的にヤバイ位置にある

今度こそ次元破壊を発動

「魔王（真）を倒すとはやるな！…だが大魔王である俺の敵…」

以下略

「大魔王を倒すとは」

以下略

「ふ…ふふふふ」

静紅はついにキレた

宝はどうでも良くないがとにかくこいつらを滅ぼしたい

そのために必要な行動

《次元破壊》

静紅は魔法を発動する

そしてそのまま次元の隙間に入る

移動先は上空100メートル

城から二キロは離れる

《完全領域》

防御壁を展開すると同時に巨大な一撃が魔王の城に直撃した

その一撃には破壊がない

魔王の城に直撃したその槍は城に突き刺さったまま

「あらあら？逃げて正解ね」

当然ながら飛影の魔法である

攻撃力最強の飛影の魔法が壁を壊した！！終わり！！

なんかでは無い

むしろ本番はこれからである

瞬間

闇が爆発したかのように膨張する

圧縮されていた無炎が圧縮解除されたためだ

膨張したのは一瞬

無炎が消えるとそこにはポツカリと空間に穴が開いていた

今回は小規模なもので焼失したのは半径一キロ程度だか大地すらも消えている

触れたものを問答無用で焼失させる炎

「相変わらず攻撃力最強ねえ」

その現状を見て微笑みを浮かべるしかない静紅であった

イライラ静紅と攻撃力最強の一撃（後書き）

更新が遅れないよう頑張ります

宝ゲット（前書き）

静紅& a m p, 飛影の話はこれで終了です

宝ゲツト

結局のところ超魔王は倒したが神魔王を殺せなかった静紅の敗けであつた

「……なんか理不尽よ」

ヨヨヨと嘘泣きを始める

話を聞いていたらさすがに可哀想だと感じた飛影

「しょうがない…一個俺が選ぶからもう一つは静紅が選んでいい」

嘘とはいえ飛影は女の子の涙には死ぬほどトラウマをもっている

諦め半分

面白半分である

「ほんと!!!!!!!!!!?」

目が輝いた

「現金なやつだな…それよりも対価だからな?そこらへんはわかってると思うけど…」

「わかつてるわ」

安心したように微笑む静紅

「んでどうするんだ？宝手に入れてから払うか？」

飛影と静紅がいるのは再び戻ってきて城の中

宝物庫の目の前である

城の人間は飛影と静紅が適度に殺気をばら蒔いて気絶させている

幾重にもある罫は飛影と静紅にかすり傷一つどころか歩みを遅らせることはなかった

「今にしとくわ」

「了解」

バックレる気は無いが盗賊は前払いが基本な世界である

「それで飛影君」

「なんだ？」

静紅は着物の袖に手を突っ込みごそごそと何かを探している

「今から私が出す宝次第でヒトヒトにしない？」

ここにきてまだ言うか…と飛影は軽く呆れる

しかし静紅の実力と盗賊としてのプライドは超一流

「もの次第」

飛影はそれを考えた結果

無難な返事をする

「ふふ…じゃ〜ん」

静紅が袖から出したのは一本の刀

黒く黒く全身が黒い

「……」

静紅が刀を鞘から出すと刀身も黒かった

自信満々な微笑みの静紅

飛影は物凄く珍しく口を半開きにし驚きで止まっていた

飛影のレアな表情

「どう？」

いたずらっ子のような笑み

「…驚いた。少し触らせてくれ…本物か確認したい」

「はい」

まだ驚いている飛影に静紅は刀を手渡す

飛影は抜刀して軽く素振り

しばらく振り続ける

20秒くらいして止めそのまま壁にゆっくりと刀を突き刺す

抵抗なく壁に沈んでいく

「本物だな…」

「当然よ」

「静紅が持つてとは思わなかった」

黒く黒くどこまでも黒いその刀

「これなら確かにヒトヒトで良い」

飛影は一つ頷きリライトを渡す

「ありがとう」

飛影が持っているどこまでも黒い刀

名は魔剣

飛影の武器である黒鋼の一部である

何故形は刀だが魔剣と言われているかはわからない

「それじゃあ始めましょうか」

ともかくも取引が成立した

「おう!!」

結界破りスタートである

《風華・三拍子》

風が魔剣に纏う

《一拍子》

さして力が入っていないゆるらとした軌道

一瞬で鋭い袈裟斬りの一線へと変化

割と全力の一撃だが結界に僅かな亀裂が入っただけ

《二拍子》

飛影はX字になるように再び一線

亀裂が大きくなる

《終極・三拍子》

横一線

結界に綻びができる

瞬間

三撃分の溜まった風が爆発したかのように吹き荒れる

強大な圧縮された風が結界を完全に粉碎する

「一個目！」

「いえゝい」

結界を粉碎し宝物庫への扉を蹴り破る

「お次はなにかしら？」

何もない廊下

魔力がこもっているため罨は確実にある

飛影と静紅が特に警戒も無しに歩いていると

天井から二体の石像

「グルル…」

「あらら大きな犬ねえ」

獅子に翼が生えているその石像

所謂キマイラである

「次私ね」

一歩前進する

その動作に合わせ石像が二体襲い掛かる

石像にも関わらず外見とは裏腹に俊敏な動きで静紅に接近

すぽっ

と手刀一線

ただそれだけで二体ともにバラバラに切り裂かれる

「はい二個目」

「順調！」

宝物庫には侵入者用に空間がいじられていてその後も飛影達は

マグマの奔流

水攻め

剣山の落とし穴が襲い掛かっていたが

当然無傷で最後の結界までたどり着く

「ふふ：最後ね」

「最後だな」

静紅はリライトで扉を切りつける

すると結界が無力化され扉が開く

「ゴール」

その宝物庫は金銀などではなくマジックアイテムで埋め尽くされていた

「静紅の狙ってるのはどんなのだ？」

狙ったものしか盗まない静紅と違い

飛影は品定めして一定以上の価値があるものは盗りまくるため現在も宝をコートのポケットに入れている

「ふふーこれよこれ」

嬉しそうに見せたそれは一本のナイフ

「デスパラシリーズか？」

飛影は一目でそれがなんなのか理解する

絶対強者級であり、一流の鍛冶職人であり、世界を移動できる魔法

の持ち主

デスパラという男が作成したナイフ

デスパラはナイフしか造らず

また、そのナイフは奇妙な形をしていながらも切れ味は海をも切り裂くとまで言われている

「そうよく観賞用」

奇妙な形だが目が奪われるほど美しく観賞にしている者もいる

静紅もその一人でデスパラシリーズがあると情報入手した場合国を滅ぼしてでも手に入れている

物凄く上機嫌な静紅

その間に飛影はせっせと宝物庫の約半分をコートのポケットにいられた

「んじゃあ目的の物も手に入れたし…帰るか」

「いいの飛影君？」

帰り支度…と言っても身一つなので気持ちだけ帰る気持ちになれば帰り支度である

飛影としては今の静紅の問いはまだレア物あるけどいいの？と聞こえ周囲に魔力探知を再び行う

レア物であればあるほど魔力が高い

飛影の基準は一定以上の魔力である

そのあとにどんなマジックアイテムかをゆっくり調べるのが飛影のやり方

しかし魔力探知をしても基準以上は見当たらない

「なんの話？」

そこでもうやく聞く飛影

「アニスって子……いいの？あのままなら精神的に死ぬわよ？」

ああ…

と飛影はようやく合点がいく

「飽きたからいいや」

冷たい一言

「…飛影君らしいわね」

静紅は微笑むだけである

とにかく飽きっぽい飛影

もう一つは勇者を召喚した国である

王族が全員消えて後継ぎもおらず

何故か城の人間が全員気絶していて

その間に一匹の竜が国を襲ったためである

城の人間は全員死亡

街の人間は半数以上亡くなり残りは難民として生活している

難民とはいえ魔王を倒した勇者を呼んだ国である

そのため周辺各国が助け合い

裕福とまではいかないが少し節制すれば普通の生活はできるくらいである

その中で記憶を亡くした少女が孤児院にいた

よく喋りよく笑う子供

記憶が無いが今が楽しければいいと笑う少女

その銀髪金眼の少女は誰でも努力すれば使える魔術は使用出来なかったが

努力しても使うことができない魔法の才能が異常な程あり

最強の魔法使いとしてその名を轟かせた

宝ゲット（後書き）

飛影君は恩や借りは必ず返します

王様（魔物）を虐めてた時に本来なら3日で飛影達を暗殺する計画
だったそうです

何故延びたか……

次からは飛影の過去編です

護衛と危機（前書き）

ちよつと路線変更です

護衛と危機

「準備はいいかあ！」

『おお』

準備万端な面々

飛影の屋敷の食堂

屋敷に住んでいる面子にダドマとギルギアとアユリと捰と秋野が追加されて集まっていた

飛影と椿の過去話

今まで聞いたこともなくかなり気になるものである

椿以外の唯一知っている黒鋼は無表情に眺めている

「でも椿…飛影がいないのに話しても大丈夫なの？」

と椿が思っていたら黒鋼は口を開いていた

しかもその言葉は椿を容易に停止させていた

「……」

ゆっくりと考える

喋るつもりだった話を頭の中で反復させる

「ダメっばい」

15秒ほど考えていた椿

結論は無理であった

「えっ!!!? 私仕事頑張って終わらしたのに!!!?」

一番辛いのはアユリである

激務の中で自分の仕事だけ終わらせ他の全てをラインに押し付けてきたのだ

「うーごめんなさい…多分飛影いないとちゃんと説明ができない…」

深々と頭を下げ全身全霊誠心誠意を見せ謝罪する

「…6日後」

飛影様はあとどれくらいで戻ってくるの?とアユリが聞く前に答えるシーレイ

他の面子もシーレイが何を言っているかは理解した

「わかったわ…ちよつとそれに合わせて仕事してくる」

どうしても聞きたいアユリ

今から仕事をこなせば一日休みを取ることは容易い

さっそくとポケットから転送札を取り出す

魔界・天界・人間界のいずれかに転移できる代物である

高価であるが買うことができるためレア度は低い

「使わんでも送ってやるぞ」

勿体無い気がしたダドマはそう提案する

「あらま…ありがたいわ」

金はあるが取り寄せる労力を考えるとダドマに送られた方が楽である

「許可寄越せ」

ダドマの方舟では同じくらいの実力者だと許可がないと転移できない

「許可するわ…あああと不穏な影に気をつけて」

最後に意味深な言葉を残して去っていった

「どういうことじゃ？」

アユリの言葉に反応したのはギルギア

「あゝそれあれだな」

彗が今日のことを話す

ワーウルフについて

アユリがいなければ殺されたことを正確な事実として話す

「…シーレイ…飛影が帰還するのは6日後ですよね」

「…うん」

最初の方はただのワーウルフの暴走かと考えていたのだが

そんなことは今のリタにはどうでも良い

彗が言った

あと少しで死んだとの言葉

リタは……正確にはギルギアと火月と当事者であった秋野以外が固まる

「とりあえず飛影が来るまでに解決しなきゃな…今の話は口外禁止」

殺されかけたと彗か秋野が飛影に話した瞬間の反応は決まっている

付近にいるもの全てを殺すくらいのことはするだろう

それが容易に想像できる

ダドマは安全確保のため犯人を見つけて殺すために動く

「とりあえず絶対強者級は全員強者級以外と必ず共に行動すること」

とりあえずの安全策

今の集まっているメンバーは全員普通の人間ではないとはいえ

例えば半数が絶対強者級でも半数はそうではない

絶対強者級がつけば大体のことはできる

「とりあえずは…仕分けだな」

10分後、仕分けが完了した

彗はリタ

秋野がギルギア

火月がダドマ

杏はアンジェレネ

優希がリーベ

椿がシーレイ

単独黒鋼

この構成は完全に敵を粉碎するための構成である

「ちょっと付近確認するか……」

ダドマは魔力探知をする

ちよつとの探知の範囲が100キロほどである

「いねえな」

しかし探知の範囲内に怪しい魔力は感じ取れない

「とりあえずは明日にしましょう…今日はここに全員泊まってください」

すでに外は夜

暴れるにはちょうど良い時間だったのだが相手がいないのならば意味がない

飛影の指示で飛影がいない時はリタが屋敷の全てを任されている

この屋敷は豪華な見た目とは逆で要塞と言っても過言ではない

さらに言えばこれだけの絶対強者級がいれば安心である

今のこの屋敷は全次元……全宇宙で一番安全である

次の日、学生身分の者は普通に登校する

学生の身分ではない、ぶっちゃけ暇人達は街へ繰り出す

暇人構成は杏達と優希達である

ニグループは適当に分かれ遊び…ではなく敵の炙り出しのためにし

ようがなく街で遊んでいるように見せている

「さて：では彗さん、お昼ご飯をご一緒しませんか？」

「あ：ああ」

リタと彗

現在昼休みである

今のところ何も異常はないが彗は寝れきっていた

寝れる原因は簡単でリタである

護衛を完璧にこなすために彗に付きつきりである

朝登校してからまず彗の机を自分の机とくつつける

休み時間には必ず共に行動している

彗がトイレの時はトイレの前に待機していたほどである

それだけなら別に気にならない

そこまで彗の精神は弱くない

だが原因はリタなのだ

リタの特徴

才色兼備に頭脳明晰に運動神経抜群に清楚で物凄く可愛い

そんなリタ

当然ながら男子からの人気は高い

いつもは飛影が必ず近くにいるため（そう見えるだけで実際は逆）話しかけることができないがサボリ癖があるがあまり休むことはない飛影が学校を休んでいる

物凄いチャンスであるのだが

現在リタは彗の護衛中

周りから見ればイチャイチャものである

かなり長くなってしまったが一言で説明するならば

彗は学校中の男子から睨まれていた

そのため襲われている彗

しかしリタは

（私が完璧に護衛できていないから彗さんはやつれています！…完璧な護衛として…）

少しばかり阿呆なりタクオリテイ

リタは頭も良く要領も良いのだが、一回ドツボにはまると弱い

泥沼のように思考が変な方向に沈んでいくのだ

その結果はいつも悪い方向にしかいかない

リタは彗の弁当を見る

中身はリタと同じもので優希が作ったものである

「失礼」

リタは食べようとした彗の弁当を手に取り、一番旨そうなおかずを一口食べる

「ふむ…」

「???」

意味がわからない彗

リタは全ての弁当を一口だけ食べる

「これとこれは毒が入っていますので食されないようにお願いします」

「はい？」

作ったのは優希である

その後は彗が自分で管理していたため毒を混入できる隙はないはず

である

「いやいや…そんなわけ」

「優希さんはやりますよ？いつもは飛影が弁当を作りますし、うちの人達はほぼ毒の耐性がついていますから気にしないで」

ちなみに毒は死にいたるものではない

ちょっとバカになったり、

ちょっと短気になったり、

ちょっと髪の毛が伸びたり

程度である

だが実際に実験できる者がいないため優希はチャンスがあれば盛る

そんなわけで弁当を交換する二人

中身は同じものであるが周りからすれば当然の反応がある

(うう!! 寒気が……)

だが自ら進んで毒を食べるわけにもいかない

諦めて食べようとしたところでリタの目がドアを注視する

「こ…こんにちは」

ドアが控え目に開く

入ってきたのは東東中学の制服を着た少女

上級生のしかも高校の校舎に入ることに緊張しているのか目がキョロキョロと挙動不審に動いていた

「火月ちゃんのお兄さんはいらっしゃいますか？」

知り合いの名前が出てきたのでリタが立ち上がる

「飛影ならいけませんよ…要件があれば伝えておきますが」

火月からの要件であれば電話か性格上直接来るはずである

少女の個人的な要件だと解釈する

「え…いないんですか！？いつ頃戻られますか？」

マイペースな少女

緊張していることもありリタは気にしていない

「5日後ですよ」

「へ…5日後ですか…」

少し目の前の少女の雰囲気が変わる

「う…ん困った…いないんですか…5日後ですか…なら」

ニタリと笑う少女

「!!?」

その瞬間リタは魔力を解放

「皆殺しにできそうです」

だがそれより速く目の前の少女は絶対強者級と遜色ない魔力を解放

巨大なハンマーを振りおろしていた

衝撃が襲った

護衛と危機（後書き）

次回へ続く

危機と危険と殺し合い（前書き）

むづかしいです

危機と危険と殺し合い

「あ……」

哑然

彗は現状が理解できていなかった

中学の女子が飛影を訪ねたかと思えば次には恐怖が襲い掛かった

直前までの少し異質だが平和な日常が既に感じられない

グラウンドで粉碎された校舎を見ている彗

気付いたらグラウンドにいた

校舎を見る限り生存者はいない

昼休みの最初であったため体育の授業で外に出ていた生徒も校舎に戻っていた

あの少女はそれも狙っていたかのような最悪な時間帯でのこの現状

校舎のところどころに見える赤い肉

原形を留めていない人の姿

風上にいるため匂いは無いが

「う…」

一瞬で日常が壊されたことに吐き気がする

「…彗さん、無事ですか？」

下の方から声がした

校舎を見ていたから気付いていなかった

「リタ…大丈夫……か」

言葉を失う

足元に倒れているリタは腹が裂けていた

内臓がはみ出ていると生きているのが不思議なほどの重傷である

「ちょっと油断してしまいました…死にはしないと思います」

笑うリタだがその表情に余裕はない

同時に二つの箇所、瓦礫吹き飛ぶ

「なんだいきなり…くそいてえ！」

「ヒヒ！！皆殺しのつもりだったんだけどなあ！！生き残りいましたかあ！」

ダドマと少女であった

額を出血しているダドマの傍には無傷の秋野と椿

「…おいリタ無事か!？」

ダドマは方舟を使い一瞬でリタと少女の間に移動する

「あれ？シーレイがいないですけど…」

椿の護衛はシーレイのはずだがその姿は見えない

「ああシーレイならなんか潰さなきゃいけないやつがいるらしい」

そうダドマが告げた瞬間：

中学の方で合計3つの絶対強者級の魔力が解放される

さらに同時に飛影の屋敷の近くでも二つの絶対強者級の魔力が解放される

「ヒヒ!! 祭りですね! 最高だあ!!!! あなた達全員血祭りにしてあのクソヤロウに見せつけてやる!!!!」

巨大なハンマーを構える

可愛らしい外見を壊れた笑みで全てをぶち壊している

ダドマは溜め息混じりに深く息を吐く

目の前の敵に意識を集中させる

「リタちゃんこれのんで」

椿が渡したのはというよりもリタに無理矢理飲ませたのは飛影がもしもの時にと頼んだレア度は最高

世界中を捜しても一つもない回復薬である

「だ…大丈夫…」

本当は吐き出したいがレア度と効力的に吐き出せない

「大丈夫じゃないよね？神様でも人体の構造は似たようなもんだし…あの傷は死ぬよね？」

椿の言うことは正しい

あのリタの傷はもって一時間だった

しかし逆に一時間はもつ

椿がその回復薬を持っていることは知っていたリタ

だからこそ一時間は待って他の重傷になった者に優先してほしかったのである

「私よりも先に優先すべき」

「うっさい！」

物凄く怒りの表情

「ダドマさん、あとよろしくできるっ。」

「任せろ」

ダドマは目の前の少女を睨み付けている

「屋敷までお願い」

「あいよ」

《方舟》

ダドマは椿、リタ、秋野、彗を飛影の屋敷まで転移させる

「さて…おいそこのガキ」

「ヒヒ！！なんですかぁ〜？怖い怖い怖いなおい！！！」

口調が安定していない

ただの頭がイカれているのかそれとも挑発のためか

ダドマにはその判断はできない

「よくも俺の遊び場壊してくれたな」

「あぁっ！！？遊び場だったんですかーそれはスーマシーン…まあ

ただの人間だろ？そんなことは気にする必要ないですよ」

謝罪の一言はどこまでも軽い

死んだのは高校の生徒と教師ほぼ全員

約700人程度

絶対強者級からすれば雑草をむしりとった程度である

それは正しい

ダドマも同意見である

「…ここまで壊されるとな…修復よりも世間体が面倒なんだよ」

学校の修復自体は一分もかからない

だがここまで粉碎し、さらに生徒も教師も大量に死んでいる

そんなところに誰が生徒を預けようとするか

「んなこと気にしない気にしない♪ガンバレ!!」

完全に他人事

ダドマは確かに人間はどうでもいい

だが学校という場所が壊れるということは

ギルギアや飛影やリタ

彗や秋野や椿【で】遊ぶことができなくなった

「さて：とりあえず、何が目的だ？」

臨戦態勢はすでにとっている

高校の敷地に結界を張り外からの干渉を拒絶する

「ああ？ 目的い！！？ 決まってるじゃない！！！ あのカソヤロウを
絶望まで追い込んで殺すことだよ！」

「クソヤロウ？」

「ああクソヤロウだ今は飛影って名前のクソヤロウだ！！！！ あいつ
は仲良しこよし！！はっ！ いいご身分なヤロウだ！」

（あのヤロウ：厄介事押しつけやがって）

ダドマは心の中で舌打ちをする

「それで？ なんでこうなった？」

「ああ？ ヤロウを絶望させるには周りを全殺してからでしょ？」

ようやくダドマは合点がいった

「：なるほどな、まあ昔なにやらかしたかは気になるが：その口は
もう開かなくていい」

くるくると自分の背丈程の巨大なハンマーを肩に担ぐ

これから始まるのは殺し合い

殺るか殺られるか

「ヒヤハ！！！！」

《天變地異》

「ヒヒヒヒ!!」

《からくりマリオネット》

笑いながら激突する

「ふむ……どうしたものか」

ダドマと狂った少女が激突する少し前

ギルギアは物凄く困っていた

高校の校舎から爆発音と知らない絶対強者級の魔力が解放されている

それはかなりどうでもいいことで軽い現実逃避である

中学の校舎はワーウルフの集団に襲われていた

ギルギアは授業見学という形で火月の護衛をしていた

最初は一匹二匹だったので重力を空に向け上に吹き飛ばしてブラックホールの中にぶちこんで処理をしていたが

さすがのギルギアでもいきなり100を超えるワーウルフが転移して更に遠距離で建造物も生徒も破壊してはいけなかったのであれば守りきれず校舎への侵入を許した

「ふゝむゝしょうがないのう」

中学の校舎中がパニックに陥っているがギルギアは頬を掻くだけ

「火月：私の背中にしっかりとしがみつけ」

遠距離では無理だと判断

護衛対象である火月を一人にすることはできず最終手段

「お…おう！」

こんな状況でもパニックにならず少し慌てているが指示に従う火月にギルギアは軽く微笑む

（あのチビが選んだだけはあるみたいじゃの）

ギルギアはもう人の目を気にしない

少しだけ龍の形態に戻る

尻尾が背中にしがみついている火月を落ちないように支え、龍の翼が火月を軽く覆い攻撃から守らせる

「しっかりと気を引き締めるんじゃぞ」

「お…おう!!」

しがみつく力が少し増す

天性のものなのか魔力を自然と火月は解放し纏う

「ふむ…」

《グラビティ・重拳》

ギルギアは調子確かめるかのように付近にいたワーウルフを全力で叩き潰す

「生きてるかの？」

「…なんと…か」

火月の反応に満足したギルギアは魔力を全解放

「よいことじゃ」

「……」

今度こそ火月は気絶した

危機と危険と殺し合い（後書き）

個人話が個人戦になっちゃいました

未来確知（前書き）

シーレイのバトルです

未来確知

中学校の体育館屋上から男が寝そべり右腕で巨大な筒を持ち構えていた

ガタイがよく長身

身体は戦闘用に鍛えられていて無駄な筋肉はついていない

そして男は筒を曖昧に中学の校舎に照準を合わせる

威力も範囲もでかいためあまり照準をつける意味は無いが気分である

絶対強者級の半分の魔力が筒から飛び出す弾である

威力はうまくやれば首都壊滅というところである

男は静かに合図を待つ

魔力を外に放出しないマントを着ており絶対に探知はされない

合図は高校の校舎の破壊音

念じればすぐに発射できる

目標はなるべくなら飛影の妹である火月で周りは自分の細胞を分け与えたワーウルフが殺すという作戦だが、あまり狙う気は無い

理由は簡単で一人を殺すよりも皆殺しの方が気分がいいからだ

思わずニヤリと笑いながら合図を待つ

そして巨大な魔力の解放を感じとる

「アハハ！！！」

歓喜の声をあげながら放つ

バキッと軽い音と重すぎる衝撃が右腕を襲う

よくみると右腕が空に向かって千切れるように折れていた

そして更によく見ると体育館の屋根がちょうど右腕を構えていた箇所が粉碎されていた

「お前…殺す」

そして気付くと頭に硬いなかを押し付けられていた

冷たい視線を背後から感じる

男に右腕の感触は既がない

完全に千切れた

しかし男が抱いたのは痛みでも焦りでも恐怖でもない

純粋な怒りであった

「なんだお前…俺の邪魔しやがって」

「お前…火月…殺した…飛影…怒る…やだ…お前…殺す」

「ああ!!? 誰が殺しただ? お前が邪魔しやがって殺せなかったじやねえか!!!」

男が叫ぶと硬いなにかが更に押し付けられて顔が屋根にめり込む

シーレイは未来を確知した

この男が攻撃を放つ

ギルギアは反射的に鎧で防ぎ空に弾きかえす

ギルギアには誰かを守るという経験は皆無だ

だから判断が遅れ火月を守ることを忘れる

その結果中学校の校舎は全壊

ギルギア以外は全員死亡

そんな未来があった

「お前…なぶる…殺す」

シーレイは未来で火月が死んだことには興味はない

ただ飛影のキレる姿を見たくないだけだ

「できるとオモウカ？」

《万物合成の術》

ユカイナマッドサイエンティスト

瞬間的にマントが吹き飛び隠していた絶対強者級の魔力が解放

そして男は魔法を発動する

瞬間シーレイは飛び上がり翼を羽ばたかせ飛翔する

「よく避けたなあ！！！」

男の千切れた右腕が再生していた

そして更にその手には体育館の屋根の鉄筋がくっついていて

まるで腕から生えているかのようである

「俺は死に物狂いでこの魔法をてに入れた！！！！この魔法であのクソヤロウに気色悪い姿に融合させて！！虫けらのように殺してやるためだ！だからてめえは死ね！」

クソヤロウは飛影のことだ

この男の名前はガルシア

ガルシアも飛影に怨みを持つ男だ

だがシーレイは羽ばたいて見下すだけ

シーレイが一瞬でも遅ければ体育館と融合させられていた

「死ねや！！！」

脚を思い切り振る

体育館と融合していたガルシア

まるで脚のように体育館が蹴りの軌道でシーレイに放たれる

巨大な質量と魔力

ただの建造物ではなくそれそのものがガルシアの脚だ

「…」

シーレイは目を細める

そして一瞬

ガルシアの脚になった体育館が両断された

「……」

「ああ！！！！何が起きやがった！！！！」

融合し自身の身体の一部だが神経は通っていないため痛覚は皆無

ただ現状が把握するのに時間がかかるだけだ

「……お前…絶対強者…私…同じ…」

「ああ…魔力見りゃ一発だ」

ガルシアもシーレイも同じ絶対強者級

それは間違いない

だが飛影とギルギアがそうだったように相性以外にも純粋な実力差はある

「…お前…弱い」

シーレイはガルシアと同等だった魔力を更に解放する

二割程度の上昇

たった二割

だが絶対強者級の二割

仮に今までの魔力が10億と仮定しても

シーレイは12億

その差は絶望的にでかい

そして更に言えばシーレイが本気で殺そうと決めた時点でガルシアの敗けは確知された

《スロウス・発動》

シーレイの魔法のスロウスは簡単に言えば、相手に魔力を込めて魔法で動きを遅くする

通常シーレイは触ることによって魔力をつけている

殴る一瞬でつけれる魔力は微々たるものであるが掴むや触れ続けるとなると話は別である

シーレイは最初にガルシアの頭に鍵を押しあてていた

その時間は15秒

ガルシアは最初の時点で敗北していた

「なあ……！」

気付いた時にはその動きは遅すぎる

止まっているかのように動きは遅くなった

「確知…10回…」

シーレイは高速思考でガルシアとの戦いを様々な戦いで確知を行った

つまり…ガルシアの手の内は全て確知されている

シーレイは体をしならせ鞭のように巨大な鍵を薙ぐ

右腕が再び

そして左腕が肉片すら残さず爆散する

「が…あ…!!」

一瞬だけ痙攣し動かなくなる

痛みによるショックで気絶している

「…」

シーレイはそれでも無情に脚を吹き飛ばす

ガルシアは支えを失って倒れるだけだがシーレイのスロウスで動きが遅くなっており空中で静止しているかのようなのである

「…死ね」

頭を吹き飛ばすシーレイ

完全に動かないことを確認して魔法を解除

リタの様子を確認しようかと後ろを向いた瞬間

ガルシアの傷が一瞬で再生し触れたら強制融合させる拳でシーレイに襲い掛かる

「油断したなあ…!!」

「……」

シーレイは別に驚くことも振り向くこともしない

《スロウス・再発》

スロウスを再発動する

それだけでガルシアの動きは遅くなる

未来確知をもつシーレイに不意討ちは絶対に通じない

「お前…再生…わかる…お前…殺す…そこ…潰す…」

シーレイは胸の中央を指差す

ガルシアは不死の身体を持つもので強力な魔力を持つ不死のアイテムが胸の中央部位に埋め込まれている

それさえ破壊すれば不死はなくなり殺せる

「ざけんな！！！！俺はあのクソヤロウに復讐するまでは死ねねえ！！！！」

ガルシアの中ですでにまともに動くのは口だけ

「……」

シーレイは黙ったまま巨大な鍵を一線

胸の中央部位に埋め込まれているアイテムだけを破壊する

「ふざ…！」

右腕が吹き飛ぶ

魔法を使用して融合する時間すら許されない

「女あ！」

激痛に顔が歪むがシーレイを睨む眼の怨みは痛いほどに強い

「……」

次は左腕

シーレイは無表情に部位を吹き飛ばす

「忘れねえ！絶対にお前にも復讐してやる！」

右足

犬歯を剥き出しにする

どこまでの怨恨があればここまで人の表情は変化するものなのか

飛影が何かをしてこの状況になっている

「…無理…殺す」

だがシーレイには全く関係ない

シーレイはムカつくからガルシアを殺すのである

そして左足

残っているのは頭

「覚えていやがれええええ!!!俺はおま」

グチュと最後の言葉を言い終わる前にガルシアの頭が潰れた

シーレイは欠伸をする

眠たそうに眼をこすり

その場で寝始める

ボロボロになったグラウンドで

「ふむ…これは助けられたの…」

ワーウルフを全滅させたギルギア

火月は傷ひとつない

ギルギアは周囲を見渡す

絶対強者級の戦いにしては被害が小さすぎる

「シーレイさん死んでんのか!!?」

肩から頑張って覗くしかない火月の勘違い

「いや寝てるだけじゃ」

すぐに訂正するギルギア

「未来確知のう…面白い能力じゃ」

その眼は戦ったら面白そうだという眼だった

未来確知（後書き）

シーレイの一番の強さは未来確知でのシミュレーションです

何回も確知する未来を変えてのシミュレーションで初見の相手の特性、魔法なんて戦う前から知っています

今日の夕飯はカレーです(前書き)

番外編ではないです

今日の夕飯はカレーです

「眠いわ」

小さく欠伸をする少女

吸血鬼リーベ

「昨日も夜遅くまでお酒飲んでるからですよ」

その隣を歩く少女

メイドの優希

優希も付き合いで昨晩から朝の4時くらいまでお酒を飲んでいてその後寝たため優希も条件は同じである

しかし眠そうではなくむしろ完全に眼が覚めている

「私夜型なのよ」

吸血鬼だからそれもそうかと納得する優希

二人はそんな他愛も無い話をしながらぶらついていた

「おかしいわね？」

ふとリーベが気づく

「同じところだわ」

本当に無計画でぶらぶらと歩いていたが真っ直ぐ歩いていたにも関わらずつい一分前と同じ場所にいた

「ふえ？…あっほんとですね〜びっくりです」

あまり緊張感は存在していない

「ふ〜む…無限回廊のようなものかしら」

吸血鬼の聴覚を最大限に発揮しているが物音ひとつない

「狙いは私か優希かしら…」

しかしそれにしては敵の気配もない

「ベターな感じだと…ここから出さないようにして他の誰かを狙うというのが一番かしら」

リーベの推測

しかし優希は何も反応なし

「どうしたの？」

くるりと振り向くと苦しそうな表情の優希がいた

「あ…大丈夫です！！ちょっと貧血ですね〜夜遅くまで起きてたせいかと」

リーベの視線に気付くとすぐに表情は明るくなる

「…この空間作ったのは絶対強者級ね…漂う魔力が強いから呼吸がしにくいのよ」

「へ？ またまた脅かしても意味無いですよ」

おちゃらけて笑う優希だが足取りはふらふらである

「しょうがないわね…」

溜め息を吐く

《黒霧》

リーベから霧が爆発したかのように発生し周囲を黒に染める

「半径500メートルくらいね」

霧が空間を覆いつくしたのは5秒後である

優希は呼吸が楽になり頭痛も止んだ

殺意も敵意も無いただの絶対強者級が作成した空間であるが、意思なき魔力も害はある

そこでリーベは誰か知らないやつが作った世界を自分の世界で埋めつくし乗っ取った

そのおかげで優希は体調が戻る

「あゝ楽になりました！助かりました」

「…きつかったなら早く言いなさいよ」

軽く指を動かし指弾の要領で空気を放つ

「へぶ！」

軽く殴られたような感覚

「超痛いです！！」

黒霧が覆いつくしているため暗闇である

優希は食らった方向からリーベの場所を割り出し何故か持っている
フォークを投げつける

しかしリーベのいる場所は反対である

黒霧の中では自由に移動ができるリーベは指だけを移動させたのだ

「さて遊びは終わりにしてでるわよ」

「へ？でれるんですか？」

「出れるに決まってるじゃない」

優希からは見えないがリーベは不敵な笑みを浮かべる

「ここはもう【私の世界】よ」

パチンと指をならす音

それだけで空間が碎け散る

一瞬で元の世界に戻る

黒霧も共に

「ぎゃあああ！」

「うわあ！」

「おかあさあん」

いきなり半径500メートルが闇に包まれたのだ

混乱は当然生じる

「忘れていたわ…」

すぐに魔法を解除

光に戻る

「これでよし…」

「あやうく怪奇現象になるとこでしたね」

このことは内緒にしようと二人で頷き合った

「よっし！ちょうどいいところに絶対強者級発見！」

空から声が聞こえた

同時に何かがリーベと優希の前に着地

どこか慌てたような無表情の少年

黒鋼である

「ちょっと絶対強者級に終われてるからヘルプ」

黒鋼はリーベの後ろに移動

そしてすぐにやってきた

「霧がでてるからなんだと思いましたけど普通ですね」

再び空から

アンジェレネと抱えられている杏だった

「これ？」

リーベはアンジェレネを指差す

黒鋼は首を振る

「紛らわしいわね」

危うく爪切り裂くところであったリーベ

「離しなさいよ」

ジタバタと暴れる杏

しかしアンジェレネはほぼ無視

リーベは気にも止めない

「リーベさんどっちがいきます」?

「ちょっと暴れたいわね」

黒鋼も入れて3人はある一点だけを見ていた

「りょーかいです。じゃあ暴れる場所提供しますよ」

「あらほんと？助かるわ」

軽い世間話のような会話

三人の目線の先には男がいた

ガルシアと同じように長身でガタイが良い

30前後の傭兵のような男だ

「あれよね？」

「そうだよ」

男は五メートルほどの距離をあけて止まる

「その二人は結界に閉じ込めたはずだが……抜け出す程度は運が良
いのか……まあ無駄な殺生はしたくない……今逃げれば見逃してやる」

そして開口一番である

結界を張った男は自身が空間に関与することがそこまで得意ではな
いようにリーベと優希が出てきていることに驚きもしない

ピキリとリーベの額に血管が浮き出る

「殺すわ」

我慢を知らないリーベ

微笑んでいるがかなりひきつった笑みである

「その少年だけで良いのだがな」

溜め息を吐く男

《部分的移動》○ショートムーヴ》

「う……」

男は魔法を発動

同時にリーベが苦しげなうめき声をあげながら浮き上がる

男の右手だけが移動してリーベの首を絞めていた

男は魔法を解除する

「これでお前は一度死んだ。実力差がわかったら帰れ」

アンジェレネも黒鋼も優希も杏も表情がひきつった

リーベは今度こそぶちギレた

「ふふっ」

一瞬笑い姿が消える

高速接近したリーベは男の首に爪をあてていた

「……！」

僅かだが眼を見開く

「不意打ちで調子にのるんじゃないわよ…お前も一回死んだわ」

「…面白い」

嘲笑うリーベ

野獣のような笑みを浮かべる男

同時に魔力を解放

「ぎゃあああああああ！」

アンジェレネは叫びながら二人に接近

二人の腕を掴み

《アンビリルワールド》

魔法を発動

強制的にアンジェレネの世界へ飛ばす

「アブナカッタです」

世界の耐久力的には大丈夫だが周辺がやばいことになる

学校や屋敷には結界があるため周囲の影響はまだ少ないが

結界もない住宅地で絶対強者級の魔力が敵意と殺意をもって解放するのならば周辺500メートルは普通の人間が運がよくて精神崩壊

運が悪ければ死ぬ

咄嗟にアンジェレネは魔力を使って相殺するように杏と優希を守った

「大丈夫ですか？」

安堵の溜め息を吐きながら振り向くアンジェレネ

「ギャアアアアアア！！！！」

優希は無事だが杏が俯せで倒れていた

「大丈夫ですか！？」

すぐに駆け寄り身体を揺する

「誰のせいよ！！！！」

勢いよく元気に起き上がる杏

アンジェレネは咄嗟に行動したため抱えていた杏を落としたのだ

「さて：お家に帰ってご飯の用意ですね」

優希の目の前には護衛兼荷物持ちのアンジェレネがいた

「カレーがいい」

「はい、了解です」

「うーん」

悩むアンジェレネ

魔力探知するまでも無く学校の方で合計五つの絶対強者級の魔力が解放されている

(助けに行った方がいいかな…)

少しだけ悩む

「まあいつか」

悩んだ結果はめんどくさい

「シーフードが大好きです！」

「はいはい」

ご飯にのみ思考を割り当てる

そして

「弱すぎるわ…」

アンビリルワールドでは

欠伸をするリーベと血塗れの男がいた

「化……物め」

リーベのたった戦法は簡単に猪突猛進である

たかが部分的な移動の魔法である

リーベの黒霧でもできることであり傷はすぐに再生するリーベにとって相性的にも実力的にも上だ

「あら？弱すぎる貴方が悪いんでしょう？」

リーベは右手の爪を伸ばし振りかぶる

男はすでに抵抗できる力など残っていない

「すまない…スキア」

それが男の最後の言葉だった

今日の夕飯はカレーです（後書き）

絶対強者級にもピンキリあります。

黒鋼は絶対強者級ではないので勝てないですが
リーベは普通に強すぎるレベルのため圧勝です

復讐者（前書き）

暴走してしまいました

復讐者

「ヒヒ！！強いですねー強すぎだろうが！！」

「お前が弱いだけだ」

少女が持っていた巨大なハンマーはすでに粉碎されている

満身創痍

それが少女の現状

対してのダドマは無傷とまではいかないが軽傷程度である

「くそがあ！！！」

《からくりマリオネット》

少女は魔法を発動

《天変地異・水双爪矛》

ダドマの右手の指に魔力が集中

一振り

指から水で創られた爪が空間を切り裂く

「くそ!!!!」

表情を歪ませ後退し身を屈ませて爪を回避

ただのダドマの空振りではない

「種は見切ってたんだよ：お前の魔法は糸を創る魔法だろ？デカイハンマーで相手の視線を集中させて本命の糸で切り裂くか、もしくは糸を絡ませて操るとかもできるな」

「っ!!」

舌打ちは肯定を示していた

ダドマの攻撃は糸を切り裂いたのだ

ダドマが少女の魔法である《からくりマリオネット》を見たのはたったの三回

三回で看破した

「最初はリタの傷見て刃物かなんかだと思ったんだがな…」

ダドマは水を統べるもの

空气中に不可視の霧を発生させ攻撃の種類、速度、角度を判断することができる

そのため《からくりマリオネット》の攻撃を察知できたのだ

「くそが!! こっちの攻撃は破壊するし、魔力は減らないしどういうことですか!？」

「俺は神龍だ、人間の理から外れたやつには負ける気がしねえ」

《からくりマリオネット》

ほぼ可視不可能の糸をこっそりと張り巡らせる

「無駄だ」

《天変地異・糸切り刃》

張り巡らせる度にダドマはその糸を切り裂いていく

「…多分お前運が良いぞ。他の連中なら話も聞かずに殺されるからな」

ダドマはこの戦いで自分からは仕掛けていない

「あ?」

「とりあえず俺はダドマだ」

自己紹介

すでに総魔力の5割失っている少女

勝ち目が無いことは明白である

「……ユリ」

少女

ユリは魔力は解放しつつも腕を降ろす

戦う気はもう見受けられない

「ユリか…お前なんで飛影に怨みあるんだ？ちよつと面白そうだからな…それで面白かったら生かして、飛影と戦わせてやる」

「は？」

とユリは硬直する

「あんたら仲間じゃないの？」

仲間だと思っていたからこの学校を狙ったのだ

「仲間では無いな…友人とかのレベルだな」

「意味がわからねえ」

友人を売ろうとしているように思える

「まあ興味本意だな…ってなわけで話せ」

それは頼みでは無く強制的な命令

命令に背けば死ぬのは理解していた

話せば飛影と戦える

話さない理由はない

「両親が殺された…」

「へえ」

「国ごとあいつに滅ぼされた。あいつは笑ってやがった。」

「ほお」

「それだけであいつは殺したい…私は全て無くなった」

ユリはポツリポツリと語る

その日は雨が降っていた

滝のような水量で国の誰もが家にいた

雨雲がいくつも重なり空を見上げても太陽の光は全く照らさない

そんな天気だった

ユリはその当時は14歳で学校も休みになり

両親も仕事が雨が強すぎるため休みで一家揃って楽しく話していた

そんな時間

ユリにとってそれは幸福な時間であった

そして唐突に滅びはやってきた

空が明るくなった

光が戻り家を優しく照らす

晴れたのかとユリは笑いながら窓に近よりそれを見た

空が赤い炎で埋めつくされていた

それはあまりにも綺麗で幻想的で眼を奪われた

「綺麗」

子供だったユリにとってはそれが素直な感想であった

ふと気付くと自分より少し年上な少年が空に浮かんでいた

その少年が笑った瞬間

幻想的な景色が落下した

豪雨が降っているにも関わらず炎は消えずに降り注ぐ

「え？」

一瞬だった

僅か10秒足らずで国は炎に包まれていた

記録的な豪雨に意味がない

水は炎を消すが

水を消すのも炎だ

少女の眼が覚めたのは次の日の朝

見渡す限り焼け落ちた建物

肉が焼けた臭いが国中を包んでいた

生存者はユリだけだった

ユリはもともと魔力が高すぎる少女だった

そして自分の危機に対して魔力が覚醒した

自らの身体を魔力で包むことによって生き残れたのだ

だが少女は自分が生きていることはどうでも良かった

風の音だけが国に響く

「ひっ！！！！」

ふと自分の家だったモノを見たユリは悲鳴をあげる

母親の焦げた黒ずんだ指と母親が大事にしていた指輪が見えたからだ
再び意識を失う

次に気付いた時はある男の背だった

「だれ？」

もうどうでもいい

なんでもいい

ただ気になっただけ

ユリの眼は死んでいた

「正義の味方だ」

男はそう返した

「正義：馬鹿みたい」

この世に正義なんてない

それは一番ユリが思ったことだ

正義のヒーローが入ればあんなことが起きる前に止めて欲しかった
のだ

ユリは再び眠りにつく

ユリを拾った男の名前はハイト

外見は26歳

魔力が高いものは老化も遅くなる

ハイトの実年齢は98歳である

ギリギリ絶対強者級ではない実力者で職業は勇者であった

「…魔王？」

明るい性格なハイトと過ごし少しずつ心の傷が治ってきたユリ

ある日の夜のこと

ハイトがユリの国を滅ぼした者を教えてくれた

「そう…魔王だ、傍若無人の悪の化身…俺が絶対殺さなければいけない相手だ」

ハイトの眼が少し怨みのこもった眼になる

だから気付かなかった

「教えて……」

「え？」

それはギリギリ絶対強者級のハイトの背筋を凍らせた

「戦い方…教えて…あいつは私が殺す」

眼が怨恨の塊であった

深い深い

黒い黒い

憎しみ

「あ…：…ああ」

ハイトは頷くしかできなかった

20年ほど

ハイトはユリに戦い方を教えながら魔王を追っていた

そして追い付いた

場所はメリア

セツネという王女が統治している国

大国の部類に入る

というよりも現在は何でも世界一の国を目指して活動中らしい

「ここだ」

「ここ?」

そこはユリの故郷の隣国であった

灯台もと暮らし

「…ここにあいつがいるんだよね」

見上げるは城

おおらかな国で城の中までは無理だが周りまで入るのは良いらしい

ユリの眼が鋭く細まる

「とりあえず呼び出す」

ハイトは敵意を含めながら魔力を解放する

反応はすぐに返ってきた

「あゝすまんがなんかようか?」

城の窓から飛び降りてハイトの前に着地する

短髪ショートヘアー 身長は170cm 歳は30歳程の外見で無駄な脂肪はついていなく。身体も引き締まっている

顔の造形も整っていて格好いいとも綺麗とも言えるまさしく美形で

国王セツネであった

槍を持って対峙している

「すまないが、魔力を抑えてくれ、城の者が恐がっている」

「ああ…すまない」

王としてのセツネの圧力にハイトは大人しく従う

もともと狙いは魔王だ

一般人に手を出すのは本意ではない

魔力を抑えるハイト

「それで…なんのようだ？」

戦う気はないためセツネは槍を地面に突き刺す

「ここに魔王がいると聞いたんだが」

ピクリとセツネは眉をひそめる

「確かに…いるな…何の用だ？」

いるという言葉にユリは眼を見開き臨戦態勢へと移行しようとする

「復讐…」

が

ハイトによって止められる

「復讐…ね…やめたほうがいい」

「…」

ハイトは何を知ったような口をとセツネを睨む

「お前らは強い…それはわかる。二人とも私以上に魔力を持ってる」

セツネは老化が遅くはなるが老化が止まるほど魔力は高くない

「だからこそ…命を無駄に散らすな」

セツネは羨ましそうにハイトとユリを見る

セツネの魔力的に限界でこれ以上は上昇しない

「私はアイツの域にいけなかった…それだけが謝りたいことだな」

最後のはセツネの独白であり一人言である

「…決意が変わらなそうだな…呼ぶぞ」

少し寂しそうな眼で復讐に囚われた二人を見る

《威雷》

雷が空に伸びる

「……どうした？」

すぐに魔王はセツネの隣に着地する

「復讐者だとさ……」

セツネが簡単に説明する

「あと任せて大丈夫か？」

今は忙しい時期である

仕事をさぼる時間の余裕分は無い

「いいぞ…すぐ行く」

「っ！」

その発言にハイトは剣で飛影に斬りかかる

ユリは出遅れていた

飛影のことを復讐したいほど怨んでいる

だが

対峙したときに身体が恐怖で硬直していた

飛影は黒く黒くどこまでも黒い刀

魔剣でそれを受け止める

「お前は自分が滅ぼした国を覚えているか！！！！！！？」

「多分…覚えてんじゃない？」

ハイトは両手で剣を握りしめ魔力を解放し全力で攻撃し

飛影は軽く刀で受け止める

《光剣・漣》

剣を片手に持ちかえて空いた片手で光の剣を作成、握りしめ飛影に向かって振り抜く

「ふざけるな！！！！お前は命をなんだと思っている」

「知らん、どうでもいいだろ？」

《炎舞・炎剣黒炎ver》

ハイトの光の剣は黒炎で創られた剣に両断される

「くっ！！！！貴様あ！！」

ハイトの攻撃を飛影は真正面から受け止める

「飽きたな」

ポツリと飛影が呟く

50回程攻防を繰り返した時のことだった

「馬鹿にするな!!!」

この世に正義と悪がいるならば飛影は悪であろう

逆にハイトは正義である

しかし現実は無情なもので

「ぐあ!!」

ハイトの右腕が切り落とされる

正義が必ず勝つなんてことはありえない

「…」

痛みに怯んだところに更に追撃で左腕を切り落とす

「くっ…!」

「はい…終わり」

飛影は刀を鞘に納める

「命まではとらんから帰れ」

「……」

ユリは目の前の状況が理解できなかった

ハイトとは20年の中

強さは知っていた

それが遊ばれて負けた

「ふざけるな！」

《光剣・放》

怒りのままハイトは光の剣を放出する

それが飛影の頬をかすった

「……」

飛影は溜め息を吐く

「救えねえな」

《炎舞・獄炎》

一瞬でハイトの頭を鷲掴みにし、炎を放出する

その炎はハイトを包み込み少しづつ焼いていく

「があああああ！」

皮一枚づつ焼かれる

指の一本づつ焼かれる

いくら地面に転がろうとも炎は消えない

「お前止めろ！」

《からくりマリオネット》

ユリは糸を操り飛影へと放つ

「止めません」

《炎舞・炎壁》

炎の壁が糸を焼き付くす

ユリが何度も何度も足掻くが飛影の炎を越えられない

その間にもハイトは悲鳴をあげながら焼かれていく

「止めて！！！！もう帰るから！！！！」

ユリがここまで生きてこれたのはハイトのおかげである

復讐は諦めたくないが死なせたくない

暴力では勝てない

だからお願いをする

「いや無理…今回俺は優しいぞ…一回見逃してあげたにも関わらずケンカ売ったからな…二度目はないんだよ」

飛影の中でもう殺すことは確定していた

そしてユリはなにもできずにハイトの悲鳴を聞きながらただ死ぬのを待っていた

助けてくれ

それがハイトの最後の台詞でありユリの人格の最後であった

「こんなことだよ…私があいつを殺したい理由なんてね…他の連中も同じような感じだ」

「なるほどね…なかなか極悪だなあいつも」

笑いながら

ダドマが話を聞いた感想はその程度だった

「なんでメリアを襲撃しなかったんだ？」

ふと浮かんだ疑問

わざわざ探さなくてもメリアを壊せば飛影は必ずやってきた

「あれかな…国を滅ぼしたらあいつと同じになっちまうからだ」

「なるほどな…」

二回頷くダドマ

《天変地異・無限一手》

ダドマは魔法を構築する

「なっ!!!!」

話せば飛影と戦わせてやるという言葉信じたユリにとってそれは予想外だった

「面白かったらって言っただろ？ 実に不愉快だ…その程度でここが壊されたからな」

「この…」

《からくりマリオネット》

ユリは全魔力を込めて魔法を構築

咄嗟に防ごうとするが

「悪手だ」

半分以下のユリの魔力の魔法と

全魔力を込めたダドマの魔法

防ぎきれるものではない

糸による防御は壁にもならず

ユリと共に一瞬でその存在が消滅する

「さて…どうすっかな」

復讐者（後書き）

ダドマはこういう性格です

帰ってくるとなんじゃこりゃ（前書き）

短いです。

お気に入りが39件になりました。ありがとうございます。
40件まであと少し：頑張ります

帰ってくるとなんじゃこりゃ

「なんじゃこりゃああああああああ！……！！！」

飛影が帰宅第一声である

「あらあら？」

さすがの静紅も驚いていた

《次元破壊》で戻ってきたのは学校の敷地内だったはずだが

「なんもないぞ」

本当に何も無い

高校の敷地内はもちろん中学校の敷地内も全て平地になっていた

「おうお帰り」

飛影達は総出で出迎えられていた

レジャーシートの上に座って飲んでいたらしい

生き残っていたのはダドマとギルギアとリーベに神三人のみ

「何があったんだ？誰かが暴走したか？」

さすがに状況を把握できない

「お前のせいだ!!」

ダドマが投げたビール瓶が顔面に直撃する

前にキャッチして口を含む

「いや、俺は無実だ!!!! 静紅がアリバイを証明してくれる!!!!」

「異議あり!!!!」

無実だと説明する前にダドマが口を挟む

「それは説明を聞いてから言え」

「上等だあ!!!!」

10分後

「……俺のせいだ!!」

無実証明失敗

「しかし…復讐者ね…さすがにもういないと思ってたけどいたか」

「軽いなおい!!!!」

笑う飛影

「これからどうするんだ？…俺らはいいが彗、秋野、火月は正真正銘の学生で他の所だと融通が聞かないぞ」

「……まあそれはいろいろ考えるべきだな」

口元に手を当てる飛影

「事後処理はしといたから問題はないがな」

今回の事件

死者1,000人を越える

事後処理として言い訳が難しかったがテロで落ち着いた

「とりあえず全員起こすか」

《炎舞・適度な酔いざめ》

炎が周囲を一瞬だけ包み込む

アルコールだけを燃やし尽くす

ゾンビのように起き上がる面々

口々に飛影と静紅を見てお帰りと言うが寝ぼけている

「飛影様……！」

「ん？」

飛影を見つけたアユリが一番に覚醒した

聞きたいことがあるのだ

再び仕事を自分のだけを終わらせてあとはラインに押し付けたアユリ

椿が飛影の魔法を使ったことを聞く

アユリは椿からは最低でも二時間は掛かると言われていたのでしつかりと意識を集中させる

他の面子も飛影に注目する

「ん？椿が俺の魔法を使えるのは椿を構成してるのは俺の魔力と魂で構成されてて、リンク状態にあるからだ。んで俺の魔力が少しづつ流れるから一時だけ絶対強者級の魔力を持てる…以上！質問は受け付けません」

『え？』

早い

思ったよりも遥かに早い

二時間どころか一分である

「短い！！もうちょっと深く掘り下げないの！！？」

そして文句を言い出すのは椿である

「過去の話なんて誰も楽しくないし、俺もしたくないし」

「う…」

最後の飛影の言葉で椿は押し黙るしかない

ぽかんとしている面子が少々

大半（絶対強者級）は話を理解したがその他はイメージがわからない

飛影はこれ以上は喋るつもりはない

「簡単に言うと一心同体というか飛影の寄生虫？が正しいのかな？」

寄生虫

尊厳も何もないが椿は気にしない

「まあそんなわけだ」

「ありがとうございます」

もうちょっと聞きたかったアユリだが（特に飛影の過去）理解はできたし、何より飛影が話したくないと言っているため諦める

「あらま…残念ね…お酒のつまみになるかと思ったのに」

酔いが強制的に醒まされたリーベは不服そうに口をすぼめる

「今度摘まみ作るから許せ」

苦笑いを浮かべる

「まあいいけど…」

あくまでもなんかもらえたら良いと考えでの発言である

摘まみで充分

「ダドマ…ちよつといいか？」

飛影は空を指差す

「いいぞ」

上空500メートル

「次の学校はすぐに用意できるのか？」

飛影は学校なんてどうでもいい

卒業しても大学に行く気はあまりない

だが隼と秋野と火月の三人は違う

この世界で生きるために必要だ

「けっこうすぐだな…俺らからすれば」

「具体的に言えば」

「他の学校に転校させるのは明日からでもできるが…俺がまたこの学校をやり直す場合は一年はいる」

270年以上生きてきた飛影や

20億以上生きてきたダドマにとって一年は短い

だが彗は一年経てば大学受験が
火月は高校受験がある

年月は限られている

「わかった」

「どうするつもりだ？」

「俺は提案するだけだ…決めるのはあいつらだな」

サンキューと飛影はダドマに礼を言い落下する

「とりあえず彗と秋野と火月は俺とちよつと個人面談しようか」

着地後開口一番

「今からか？」

すでに疲れきっている彗は家に帰って眠りたい

秋野も同じようなものである

火月はすでに二度寝に入っている

「いや：明日の好きな時間に家に来てくれ」

少しだけ真剣な表情の飛影

「わかった」

「わかりました」

二人が頷いたのを見た飛影は火月を背負い屋敷へと戻っていく

「これからどうすっかな」

不意に彗が溢した言葉

答えられるものはいない

日常に生きてきた者達と非日常で生きてきた者達

2つの差は大きい

こういった時に非日常で生きてきた者達は日常に生きてきた者達に
アドバイスがあげられない

彗と秋野と火月の選択肢は2つだけである

日常に生きるか

非日常に生きるか

この選択で将来が変わってしまふ

そんな重大な局面であつた

帰ってくるとなんじゃこりゃ（後書き）

やっぱり過去編はまだやらないです

面談（屋敷メッツ）（前書き）

感想が三件……あまりの嬉しさにニヤニヤがとまりませんでした
お気に入りも40越えるどころか42件になりました

ありがとうございます！！

面談（屋敷メンツ）

ケース火月

小会議室

家族会議や魔王会議で使用した場所である

そこに向かい合うように座る飛影と火月

「さて…火月はどうしたい？」

「何が？」

「いや…ほら学校無くなったからどうするってこと」

「ん」

「因みに選択肢は2つだ」

「なにとなに？」

「転校するか転入するか」

「???」

「あゝこの世界の学校に通うか、魔界の学校に通うか」

「別にどっちでもいいぜ兄ちゃん」

「いや火月、自分のことだからな！」

「んじゃ魔界の方！」

「はやすぎだ！！！」

「だって悩むなんて男らしくないぜ兄ちゃん」

「おい妹」

「間違えちった」

「本当にいいのか？」

「本当にいいよ！だって面白そうじゃん！！！」

「……なんか火月は俺に似てきたな」

「妹だからな！！！」

「んで魔界の方の学校ね…詳細は？」

「聞く！！！！」

「簡単に言えば魔法学校だ！学術と魔法を教えてる」

「面白そう！！！！」

「学力は多分…人間界のが上かな…科学の発展で負けてるし」

「私馬鹿だからちようどいい！！！」

「…うん、自分が馬鹿だと自覚していて嬉しいよ」

「んじゃ……まあ私はもう面談はいいのか？」

「ああ、進路決まったし……次よろしく」

「ラジャー!!!」

[illegible]

ケース..リタ

「んとだなりタ」

「私はどんな道だろうと貴方についていきますよ」

「少しは考えるとか…」

「補佐ですから」

「……次よろしく」

「わかりました」

ケース..
椿

「椿は聞かなくても…」

「わかってるよ……次の人呼んでくるね」

「よろしく」

ケース..
黒鋼

「まあ」

「うん武器だし、持ち主から離れる意味がわからないし」

「だよな」

「もういい？」

「いいぞ、あとこれやる」

「ん？この刀…僕じゃん！！！」

「静紅が持ってた」

「よっしゃ！！！！あと……三個かな」

「あいよ」

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

「屋敷の住人はああ！！！！！」

「長が飛影さんですからね」

「…なんか納得しちゃった」

「次呼んできます!!!!」

「よろしく」

ケース..
静紅

「だいたいまあ事情は聞いてるわ」

「早くて助かるな」

「メリア城でしょ？」

「そうだ」

「ちよつと欲しいたか」

「駄目だ！」

「だめ？」

「可愛く笑っても無駄だ!!!!!! 絶対許さん!!!!!! 盗むなよ!!!!!!」

「ええゝ困ったわゝデスパラシリーズがあるって聞いたんだけど」

「あるにはあるが…」

「だめ？」

「駄目だ…やらんし盗ません…交換ならセリエとかけあってやる」

「ヒトヒト？」

「フタヒト」

「ヒトヒト!!!!」

「フタヒト!!!!!!!!」

「ちょっとぐらいいいじゃない!!!!」

「やだ」

「ケチ」

「ケチでけっこう!」

「この主夫!!」

「……今の悪口？」

「わからないわ」

「んで、どうすんの？」

「もちろん宿にするわ」

「あいよ」

「ヒトヒト」

「だめフタヒト」

「しょうがないわね……」

「よろしく」

ケース..優希

「きやつはああ！！！！」

「Yahooooo!」

「テンション高いですね飛影さん!!!」

「優希もテンション高いな!!!」

「当然ですよお!!! きゃっほ!!!」

「さすが優希!!!!!!最高おお!!!!!!」

「それでお話ってなんですか？」

「魔界に帰ることにしたけど優希はどうする？」

「どうするもこうするも私は【市原】優希ですよ!？ずつといいますよ」

「…ん…了解。次住むところは城だけど」

「…メイドとしてのキャラを保つために飛影さんの専属メイドになります」

「それでいいのか!? しかもメイドじゃなくて従者だし」

「まあまあいいんです…次呼んできますね」

「頼むわ」

ケース..
リーベ

「当然行くわよ」

「何も言っていないが」

「優希が言ってたわよ」

「なるほどな」

いわば今が縁の切れ目かどうかである

飛影としては彗と秋野との縁は繋げたままにしたい

しかし、飛影は本人の意思は尊重する

普段は本人の意思関係無く遊びに付き合わせるが今回は人生を左右する問題だ

強制的に連行することはしない

常識はずれの存在だが、幸せは守る

それが飛影である

「さて：シーレイに結果だけでも聞いときゃよかったかね」

どう転ぶかはわからない

結果をあらかじめ知っていれば覚悟はできる

「まあ：関係ないか：結果なんて」

結果は神のみぞ知る

ではなくシーレイだけが知っている

面談（屋敷メイツ）（後書き）

今回は屋敷メイツの面談です

次が隼と秋野の面談です。

摺&a m p;秋野個人面談（前書き）

今回で魔界に行くメンバーが決まります

彗& a m p; 秋野個人面談

先程までの面談と違って少しだけ雰囲気は深刻になっている

飛影はソファーに座りその後ろには珍しく真面目な表情の優希

その対面には彗がいた

テーブルには紅茶とケーキが置かれておりそして紙媒体でいくつか資料があった

彗は静かに黙々と時々紅茶を含みながら資料を読んでいる

その間飛影はケーキを食べながら待っている

優希も一切口を開かず彗が読み終わった資料をまとめてファイルに閉じこめて飛影に渡す、または紅茶を注ぐなど真面目な仕事をしている

一応はメリハリがある優希

人の一生を決めるかもしれない話し合いにハイテンションでいるべきではないと思っている気持ちとがある

「さて…」

彗が一通り資料を読み終わる

「どうする？」

「なんかまあ…あれだろ？まとめると非日常に生きるか…日常に生きるかだろ」

複数の資料

その中にあるのは人間界での転校先の学校の情報が大半を占めている
一つだけだが魔界の学校の情報も資料にあった

「そうだ」

「……俺はどっちでもいい。って言ったら困るだろ？」

「まあな」

飛影は自分の気持ちは当然一緒にいたい

しかし本人の意思に反して強制的にはやらない

また、同時にどちらでもいいと言われてもそれには彗の本音、本心、
意志がない

「まあ普通に俺はどっちでもいいなんてことはない」

すでに彗には答えが決まっている

「そうか…」

「飛影に人間の性質を教えてやる」

「ん？」

いきなり話が変わる

飛影は紅茶を飲み干し優希におかわりを要求する

「人間ってのは基本自分の持っていないものを羨んだり恨んだりする。まあ簡単に言えば無い物ねだりってやつかな。俺は多分今までお前と関わってから非日常に生きてきた」

「……」

嫌な雰囲気を感じ飛影は感じる

飛影にとっては嫌な結果が待っている

そんな口振りであった

「だから当然日常を選ぶよ、日常に飢えると思うからな」

「……」

予想通り…話の方向はそのまま直進した

「だから俺は非日常を選ぶ」

「は？」

が：

だから飛影は彗の今の言葉に思考が停止する

「普通は日常に行くと思うんだけどな：面白いからな、ぬるま湯にはもう疲れない」

あまりにもアホらしくて危険と隣り合わせでまるで良いことはなかった

そう彗は思っていたが

よく考えると毎日が退屈しなかった

たとえアホらしくても笑えたし

危険と隣り合わせでも楽しかった

なら

「乗りがかった船だ：最後まで乗船し続けてやるよ」

「：わかった」

彗の笑みに飛影は笑い返す

「親にはなんて言うんだ？」

世界を移動する

今までは軽い旅行のように行けたが今回は最低でも卒業するまでは住ませるつもりである

当然両親の説得は難しい

「ん？放浪主義だからてきとうに俺がやっつくよ」

「わかった。任せた」

運が良いことに彗の親は放浪主義であまり子供のことにはうるさく言わない

放置ではなく心配はされているが子意思を尊重し守るのが親

そう考えている両親

彗の意思は揺るがない

ならば大丈夫

それが彗の判断である

「んじゃ…佐藤を呼んでくる…俺は決めてたけど佐藤は悩んでたみたいだからな」

「了解…サンキュ」

「気にすんな親友なんだろ？」

「…そうだな」

彗が退室する

ちやっかり紅茶もケーキも食べおわっていた曄の食器を片付ける優希

その表情は笑顔だった

「良かったですね！」

「そうだな!!!」

笑いあう

家族は喜びを共有するものだ

「うん」

秋野も彗と同様に資料を見ている

彗と違ふのは二つの資料を見比べて悩んでいることだった

一つは人間界の学校の俗に言うお嬢様学校

もう一つは人間界の学校の俗に言うお嬢様学校

両方ともお嬢様学校である

そして両方とも人間界

魔界の学校の資料は流して見ただけであつた

「……」

（いや…まあ確かに自由意思は尊重するつもりだが…この扱いの酷さ…さすがにショックだよチクショウ！！！）

転校の約束として必ず入学できるようにすることと、学費や入学金等の費用を全部負担することである

だから値段が高いお嬢様学校でも秋野の負担は無い

「うーん…どっちにしよう」

ぶつぶつと本当に小声で考えている秋野

しかし飛影には当然聞こえる

聞こえる度に飛影の精神的なダメージが増加する

「…」

秋野は悩みながら紅茶を飲みケーキを食べる

すでに二つ目である

「…これ旨い」

時々一人言にケーキの感想が溢れる度に飛影は勘違いで精神的なダ

メージを負う

「……」

20分後

「決めました!!」

どちらにするか決めた秋野

「早いな……」

途中でモンブランの感想を事細かに呟き始めた瞬間に飛影は一時間
はかかると思っていたが意外に早く終わる

「どうするんだ？」

秋野が差し出した資料はここからかなり離れた場所にある全寮制の
お嬢様学校

「こっちにします！全寮制の方が楽そうなんで」

軽い

そして笑顔が飛影には眩しい

「……ああ、わかった。こっちだな」

飛影は資料を受け取りざっと目を通し優希に渡す

「はい、よろしくです!!」

「今生の別れじゃないけど…しばらくは会えないからな～まあ頑張れ」

お嬢様学校は秋野にとってはあわなそうだと思う飛影だが、本人が決めた道ならば止めるなんて無粋な真似はしない

「へ? 会えないんですか!？」

「……」

何を今さらのような感じに驚いている秋野を見る飛影

「ん?」

ふと疑問が浮かび上がる

「秋野…この面談はどういうものだど認識してる?」

違和感を感じた

決定的な飛影と秋野の意識のズレ

「え? ……と…飛影先輩が魔界に帰るので言い訳のための学校選びじゃないんですか?」

「……」

よくわからなかった

しかし言いたいことは伝わった

「ちょっといいか？もしかして…秋野は魔界に行くつもりなのか？」

「へ？…行っちゃ駄目なんですか！！！？」

「……理解した」

飛影は全てを理解した

秋野は魔界に行くことは当然だと思っていた

世界を移動するため、親への言い訳のために転校先ということにする学校を決める面談だと思っていたのである

「まず…魔界に行くのは強制じゃないぞ」

「…」

「んでこの面談の目的は魔界に行くか人間界に留まるかを決めるものだ」

なるほどと秋野は手をあわせる

「初めて知りましたが…私の答えは変わりませんよ？」

「いいのか？」

「だって今さら飛影先輩達と別れるなんて考えられませんし」

それに

と秋野は付け加える

「安倍川先輩には負けますが！私は飛影先輩のこと好きですし」

「はは…」

思わず笑ってしまう飛影

立ち上がると飛影はチョップを秋野に当てる

「いたっ！！！」

そして笑いながらデコピンを当てる

「なんですか！？」

最後にしっぺ

「うう…」

恐ろしく手加減しているが人並みには痛い

上目越しに恨みの目で飛影を見る秋野

「俺も秋野は好きだ！！！」

満面の笑み

「…ありがとうございます」

僅かに顔を赤くする

「さて！！！！じゃあ秋野はこの学校に転校することにしておくんだな？」

満足した飛影はソファーに座り直す

「はい、両親が少し厳しいので手伝ってください」

「任せろ！！」

摯&a m p;秋野個人面談（後書き）

今回は先の話を考えて全員移動させます

ダドマとギルギアは着いていけません。

しばらくは出ないかもです

新人教育と愚痴（前書き）

帰還した飛影達です

新人教育と愚痴

どうせいつでも会える

そんな理由でお別れパーティは開かれず普通に世界を移動した

さっそく飛影を先頭に城へ突撃

手近にいた運が悪い侍女を捕まえ飛影が事情を説明すると直ぐに微笑みながら行動し

今は城での部屋を割り当てを行ってもらっている

そして元々部屋がある飛影はセリエとエリアと一緒に庭園で紅茶をすすっている

「お父様お帰りなさい!!」

ニコニコと満面の笑みで身体中から喜びオーラを放出しているエリア

犬のように尻尾があれば振りすぎて千切れるかと思うほどである

「…はあ」

エリアとは反対にセリエは溜め息を吐いていた

「ただいまエリア!! 元気になってたか？」

頭を撫でる飛影

エリアは一瞬で蕩けた

「お父様お父様！！！今夜はお暇ですか！？お話したいです！！」

トーナメント以来会っていない

そして飛影はトーナメント中忙しくあまり話すことができなかった
その鬱憤が溜まっている

エリア的にはお父様パワーを補充したいのだ

「もちろん、例え用事があっても大丈夫だ」

メリアの有名話

超親バカと超ファザコン

可愛らしく笑うエリア

「ありがとうございます！！ではお父様！私はお稽古の時間なので失礼します！！！」

ぎゅーと飛影を一度抱きしめて稽古に向かうエリア

稽古は主に学術と魔法の制御である

両方とも飛影が必要だからとスケジュールを組んでいてエリアはそ

のスケジュール通りきちんと100%以上の成果でこなしている

もともと飛影とセリエの話し合いだったが

エリアが飛影が帰宅したことを聞いて稽古の合間の休憩時間を使って飛び込んできたのだ

先程までは魔王と世界一の大国の国王と王女がいるという

かなりの豪華さである

そして今も魔王と国王の話し合いと凄まじく豪華なものである

庭園にいるのは飛影とセリエ

そして飛影によって弄られ給料が減給され続ける可哀想な護衛二人と新人の護衛候補一人

コレットとレインの合計7人である

状況はコレットは飛影とセリエにお茶を注いだりと侍女の仕事をこなし

レインは思考停止中

護衛二人は飛影がいるため護衛の必要性が無いと理解しているため芝生で寝転がり会話をして

新人の護衛候補は思考停止することはないがセリエの後ろで固まっている

固まっていながらも付近を警戒しているのは護衛候補といえどレベルの高さを表している

「とりあえずだ!!! レインと新人の…シルフェは楽にしろ」

ここまでガチガチが二人いると面倒だと飛影は判断した

「ふええ!? ま……ままま魔王様にな…なま…なまうえ…名前をよば…ばば」

レインは飛影に声をかけられて思考が戻ったが

名前を呼ばれたことに対しての緊張で再び思考停止

「いえ!!!! 私は大丈夫です!!!」

シルフェという新人は緊張しながらであるが真面目に回答する

「…」

その二人の回答に対する飛影の返事は一つ

《炎舞・火柱》

飛影は指先に小さな球を造りだし寝転がっている護衛二人に放つ

さすがに国王の護衛のため危険を察知し起き上がるころにはすでに遅い

小さな球だった火が圧縮が解除され一瞬で雲を突き抜ける程の炎の火柱が護衛の二人を包み込む

『ぎゃあああああああ！！！！』

「コレット：ちゃんと教育しろー！！」

護衛の二人には炎柱

コレットには優しい注意

「これはもう教育じゃなくて：慣れだと思えますね」
いつまでも

死ぬって！これヤバイって！と炎柱の中で喚いている護衛二人は完全に無視

コレットは苦笑いしながら固まっているレインを見る

「ちよっ！！！！飛影さん！いきなりなんですか！！！！？」

ようやく炎柱から脱出できた護衛二人

怪我はしておらず服すら焦げていない

当然ながら手加減した炎柱はただの炎柱ではなく護衛二人の魔力を考慮し温泉のお湯程度の熱を与える程度である

「俺がいるときは護衛の必要はないって伝えてなかっただろー？」

にこおと笑う飛影

その手には再び炎が

「いや：一応は言ったような気が…」

炎柱リピート

『ぎゃあああああああ！！！！』

炎柱終了

「伝えるつてのは言うだけじゃなくて理解させなきゃ意味がないんだゾ！！！！」

『すいませんでしたあ！！！！』

綺麗な土下座

飛影はそれを見て頷いて

炎柱リピート

『なんでえええええええ！！！！？？？』

炎柱終了

「いや面白かったからつい」

「ついで殺されてたまりますか!!!」

「なに考えて…ああ何も考えてませんでしたね」

「……」

飛影の右手に黒い黒い光すらも焼く闇色の炎の無炎が現れる

『申し訳ありませんでしたアアアアアアアアアア!!!』

即土下座ではなくジャンピング土下座でシンクロする神がかった謝罪をする

護衛二人は急いで焦りながら慌てて少し離れた場所でシルフェに決まりごとを熱心に教え込む

「んで…浮かない顔をしてどうした？」

ようやく一区切り

「誰のせいじゃボケ!!!」

「ボケてねえよボケてるのはお前だよ!!!」

「いきなり帰ってきたかと思うたがいきなり10人増えとるし!」

本当にいきなりである

いきなり連絡もなく帰ってきてぞろぞろと連れてきて運悪く捕まった侍女に部屋の割り当てをお願いしている姿を侍女や従者が見てい

て直ぐにその情報はセリエに届けられた

それが10分前のことである

「部屋に余りがないとか？」

「いやそれは大丈夫じゃ」

「お金が無いとか？…いや、でも金は俺が払ってるし」

「そうじゃな」

飛影はセツネの代から住んでいるが城のお金は民からの税である

魔王とはいえ使っている金ではない

そのため飛影は衣食代として一年で500万ほど払っていた

それが約10倍の5,000万程度なら飛影は軽く100年は過ごすことができる

「ワシが言いたいのとは連絡無しで帰ってくるのはなぜじゃアアアアア
アああ！！！！」

「……やっぱり迷惑だったか？」

「超弩級で迷惑じゃ！！！！そもそもお前は……」

（あ…始まった…）

セリエの年取ってから身に付いた特技

長い愚痴

これが始まると30分は越える

しかも恐ろしいことに同じことを繰り返すのだ

飛影はすでに聞き慣れていてレインの緊張癖をどう直そうか考え中である

話が始まって少しほど経つとようやくレインも思考が戻った

コレットは慣れと言っていたので慣れさせることにする

「…」

飛影は紅茶を飲み干すとコレットに目配せする

それだけでコレットは理解してグッと親指を立てる

コレットはレインに紅茶のお代わりを指示する

「はわ…へう…ひゅ」

慌てすぎて何を喋っているの状態でガタガタと震えながら小動物のような警戒心の如く飛影へ近づく

「…」

飛影はなるべく視線をセリエに集中させ、なるべくレインを見ないように

緊張をさせないように努める

「し……ししつれいします!!」

一瞬飛影は暗号化された言葉かと思ってしまった程の理解不能な囁み方である

だが飛影は何も考えず言葉にせずお代わりが注がれるのを待つ

視界にレインの手元を写すとガクガクと震えながら奇跡的に溢れることはなく注ぎ終わる

「ししつれいいします!」

先程とは暗号が変わる

カチコチと品性はまるで感じられないが元の位置に戻る

なんとかお代わりを注ぐことを達成したレイン

飛影は褒めてあげたかったが話しかけることで再び緊張感が戻ってしまうと判断

再びコレットに目配せ

「…」

そして再びコレットも親指を立てる

「レイン…よくできたわね、素晴らしいわ…でもまだ固いから徐々に慣れること」

「は…はい！」

褒めるところがお代わりを注ぐことができたことしか浮かばなかった
コレットの言葉を心に刻み付けるレイン

そしてその間に飛影は皿の上に置かれていたお茶菓子を食べ終わる

目配せ

親指を立てる

レインに指示

なんとか完遂

目配せ

親指を立てる

褒めて指摘をする

心に刻み付ける

およそ10回程繰り返しようやく身体の震えは消えてあまり嘔まな

いようになった

もう一息

というところでセリエの愚痴が終わることを察知した飛影

意識を再びセリエに向ける

「つまり貴様が連絡寄越さねばパーティーがでкинじやろうがああ
あ！！！！」

「パーティー？」

一瞬思考が止まる飛影

なんとか聞き返す

「パーティーじゃ」

ニヤリと笑うセリエ

「…」

その笑みはどこかセツネに似ている

「善処してやるよ！！」

血は馬鹿にできないものだと言飛影は笑いながら頭の中で計画を立てる

新人教育と愚痴（後書き）

こっからが本番ですね

ダンスパーク (前書き)

メリア国の底力が爆発します

ダンスパーク

「……」

飛影は絶句していた

飛影のパーティーへの善処してやるの対応として行動したのはみんなの許可である

許可といっても飛影の周囲はみんな騒ぎごとは好きなので二つ返事で即答だった

「……」

飛影の中では関係者くらいで少し酒でも呑もうかと考えていたのだが

国総出での取り組み

パーティーというよりも祭りに近い

見下ろす城下町には100を超える露店が埋め尽くされ街中が賑わっている

背後を見るとダンスホールではすでに料理と酒

そして他国の王族や貴族などのお偉いさんがすでに集まっていた

「……」

おかしい

飛影はそう思っていた

飛影達が帰宅したのは9時00分頃

現在は18時00分

九時間で用意できるとは到底思えない

いや最善で最高で無駄の無い動きをすれば可能である

予めいつでも帰ってきてても良いように計画を立てていれば

「…アホすぎる」

なにやってんだ馬鹿共と叫びたくなるが城からでも飛影の視力で確認できる民の笑顔と城の者達の喜びオーラを放出している笑顔を見ると溜め息しかつけない

このパーティーはドレスコードのため、飛影はスーツを着ている

タキシードは飛影的に動きにくいため少しお洒落なスーツだ

「飛影は人気ですね」

すでにパーティーは始まっており各々は好き放題楽しんでいる

街に降りて露店を楽しんだり

城の飯や酒を楽しんだりと

そんな中リタはシャンパンを持ちながら飛影に話しかける

席などは無く

立ちながら自由に移動したりして会話を楽しんだりするためだ

「おおリタか：サンキュ」

リタの格好は可愛いドレス

薄い青色のドレスを着用している

リタから一つシャンパングラスを受け取りグラスを鳴らす

「しかし行動力が凄いですね」

リタも行動の早さに驚いていた

「俺も驚いてる」

「皆さん飛影の帰還を心待ちにしていたようですし」

全員が飛影の帰還を喜んでいた

「：いちいち騒ぎすぎだ：全くこのパーティー代を誰が払ってると
思ってるんだ！：！：畜生！：！：」

「えっと…税金ですか？」

国の祭りごとは基本的に国のお金

つまり税金で払っている

「違う…いや…合っているけど…正確には魔王騒ぎたいボックスから出されてる」

「なんですかそれ!!!?」

魔王騒ぎたいボックス

それは100年程昔

飛影は基本的にパーティーは好きだが国民の金を使って騒ぐのは嫌だった

そのため、誕生日等は全て自粛していた

しかしある国民が

「魔王様の誕生日を祝いたい」

と言い出し

国全体にそれが広がった

飛影の税金使いたくないということも国中に広がった

そして税金じゃなくて義援金ならどうだろうと意見ができて

魔王騒ぎたいボックスができた

仕組みは簡単に国中に募金箱のようなものが設置されそれにお金を
いれる

そのお金が魔王のために騒ぐパーティーなどの費用になる

つまり国民からの感謝が集まってできたので税金じゃないというこ
とだ

「……今のところどのくらいなんですか？」

「100億くらい……らしい……基本的に全部セリエとかに任してある
からこういう祭りに使用するだけだし」

魔王と一緒に騒ぎたいから

魔王騒ぎたいボックスである

基本的に民からの要請があり国王が飛影が認めた場合にそのお金を
使用して騒ぐ

飛影としては家に帰っただけで騒がれるのは大袈裟だと感じる

「……飛影のことをみんな好きなんですね」

「ありがたいけど……はあ」

飛影は深い溜め息を吐く

スイッチを切り替える

シャンパンを一気飲みし

「うっしやあああ！……騒ぐぞコラア！……！」

「……飛影？」

一瞬の静寂

『おおおお！……！』

会場内が飛影の気合いに返事をする

いつものことである

飛影は最初だけ遠慮する

パーティーが開始されて少し経つと吹っ切れる

吹っ切れてからが本番である

自分が企画した祭りは最初からハイテンションでリタはあまり遠慮していた飛影の経験がないため変わりように少し驚いている

《炎舞・花火》

そして毎回恒例

飛影は魔法を構築し窓から外へと放つ

巨大な花火が上がる

化学反応ではなく

温度と魔法で加工した色鮮やかで巨大な花火が国を照らす

国中が一斉に騒ぎ出す

「よし！！！！リタ食うぞ飲むぞ！！！！」

「はい！！！！」

飛影の誘いにリタは大きく頷く

が

「あ…リタタイムやらなきゃいけないことができた」

「？」

飛影の視線の先

エリアとどこぞの王子か貴族のような若い男

エリアは少し引いた笑みを浮かべ若い男が一方的に話している

「…わかりました。それでは後でダンスにお誘いくださいね」

それだけでリタは納得する

「あい…必ず誘うよ」

飛影はリタに笑いかけたままエリアに近付く

「お父様!!」

エリアが第一に気付き飛影の手をしっかりと握る

それと同時に話しかけていた男が停止する

「お父様お帰りなさい!!! よろしければ一緒に踊っていただけますか!!!!?」

引いた笑みではなく本心からの輝くような笑み

男はエリアをダンスに誘っていたのだがやんわりと拒絶された

しかし、父親を見た瞬間に逆にダンスに誘うエリア

「よし…踊るか!!」

エリアの頭を撫でながら飛影は誘いを受ける

「ちょ!!! あのエリア姫には自分がお誘い中だったのです!!!!」

しかし男は二人を止める

エリアと踊ることができるのは飛影のみ

それを知らない男は今回が初めてのメリアのダンスパーティー出席者だ
エリアにはすでに周りの雑音は全く聞こえていない

その代わり飛影がその男に笑いかける

「ひ…」

その瞬間に男は黙り混む

敵意と殺意の込めた笑み

常人には耐えきれるはずはない

邪魔者がいなくなったため飛影はエリアと踊る

椿と共にこのような遊びごとは遊び尽くした

伊達に270年以上生きているわけではない

エリアに踊りを教えているのも飛影である

「お父様は凄いです!!!」

基本的にも応用的にも飛影としか踊らないエリアだがレベルが違う
ことは見ればわかる

少し足がもつれそうになってももつれないように然り気無く動きを

変える

のびのびと自然体で踊ることができるのだ

「まあ踊りに関してはエリアの先生だからな」

「ふふ：ありがとうございます先生」

一曲を躍り終えるとエリアは物凄く今生の別れのような眼で飛影から離れる

「シャキツとする！王女だろ？」

最後に飛影から頭を撫でられ再び微笑みが戻る

飛影は魔力探知でリタを探し誘う

「喜んで」

リタは笑顔で誘いを受ける

リタの踊りは決して上手ではない

「：リタって踊ったことある？」

踊りながら飛影のふとした疑問

リタには慣れが感じない

「ないですよ。これが初めてです」

「…初めて!!?」

リタは上手ではないがきちんと踊れている

「先程飛影とエリアさんの動きを見て大体は覚えました。お二人ともとてもお上手でした」

微笑むリタ

「さすがだな」

足下を見ずに飛影を見ながら会話までする余裕がある

「飛影の補佐ですから」

誇るように

楽しげに笑う

再び一曲を終える

「何かあったら言ってくださいね」

リタは一礼すると離れる

飛影は次に誰を誘おうか悩みながら周囲を見渡す

基本的に飛影の屋敷の人物はダンスより酒や飯が好きなのであまりダンスホールにはいない

「おっ！！踊りましょうかお嬢さん」

飛影はニヤリとした笑みを浮かべコレットを誘う

料理を運んだ後のためお盆を持っているコレットは苦笑いを浮かべる

「仕事中です」

「ちよつとなら大丈夫だ！！！」

「はぁ…少しだけですよ」

コレットは諦め慣れたようにお盆を上放る

飛影の風がお盆をそのまま空中に停滞させる

しばしば飛影から誘われるコレット

最初はレインのように慌てていたが今となっては楽しみながらできる

侍女の服はメイド服のようなもので少し浮くのが気になるし魔王と踊っていることにも注目を浴びるがコレットはすでに慣れた

「飛影さんはお変わりないですね」

「まあそれが俺だし」

「そうですね…その方が良いです」

微笑むコレット

一曲を終えると風華が解除されお盆がコレットの手に戻る

「遅れた理由は」

「飛影さんを使わせてもらいますね」

慣れているため言わなくてもわかっているコレット

「あっ！！！！飛影さんおかえりなさい」

「おう…ただいまコレット」

大事なことを忘れていたとコレットは慌てながら挨拶をする

そしてコレットが離れ飛影に近付く者が二人

飛影にとっては地獄が始まる

「これは魔王様！！本日は帰還おめでとうございます」

ゲッと飛影は思わず言ってしまうところだった

他国の王族

王と王女である

メリアと交流が盛んな国の王族

飛影は反応ができない

見るからに面白くない人間

それだけで飛影の興味は無くなる

しかしメリアとの交流が盛んな国なためメリアという国を守りたい
飛影としては無視することはできない

昔からの交流が途絶えてしまえば当然そこからの輸入や輸出ができ
なくなる

世界一の大国であるメリアと交流を持ちたい国は腐るほどいるがそ
れとこれとは関係無い

「だれ？」

とりあえず飛影はこの国の王族かを知りたい

それで飛影の反応は決まる

「申し遅れました！！！ナスカ国のアリヴルと娘の第二王女のクリ
スでございます」

国王のアリヴルとその娘のクリスが飛影に頭を下げる

「…ナスカ…」

飛影は必死に脳内の引き出しをあけまくる

脳内で10秒

現実で1秒検索してヒットする

（セツネの代からの交流国だああ！！！！確か…大国ではないけどそこそこ大きな国で物資よりも人材が流れてきたな…政治は苦手だが…人材の動きは国を表す…でも物資ではなく人材であるならば…関係は友好とかはいらないな…よし！いつもの態度で大丈夫だ）

「ふん」

いつもの態度

つまり興味は完全に無くなる

「もしよろしければですがうちの娘と一曲踊ってはくれませんか」

飛影は魔王である

今現在魔王との交流が盛んなのはメリアのみ

魔王という強大な力と交流を深めたいという国は腐るほどいる

従って飛影もこのような誘いを多々受ける

すでに飛影の耳には言葉が入っていない

無視ではなく関心を無くしているのだ

「うん」

飛影はキョロキョロと周囲を見る

慌てながら飛影に近付く従者と侍女

いつものことである

素晴らしい動きでアリヴルとクリスを囲う

そしていの一番に気付いたセリエがアリヴルへと挨拶をする

アリヴルもクリスもセリエが来ることによって挨拶を返さなければ
ならない

当然だ。交流させていただいている大国なのだ

失礼が無いようにしなければならない

実際問題セリエ達が来なくとも飛影の対応でアリヴル達が思うのは
何か失礼をやらかしたのではと悩むだけで交流が絶たれることはな
かったのだ

そんなことはすでに興味が無い飛影は獲物を発見する

このような場が初めてで啞然と震えながら粗相の無いように気をつ
けながら食事をしている秋野であった

「ああ!!!!先輩!」

秋野は飛影に気付くと焦りながらも近付き安堵の溜め息を吐く

「良かったです物凄くアウェイでした!」

「こういう場は初めてか?」

「はい! なかなか知ってる人がいないです! 先輩は忙しそうでしたしどうしようかと」

ダンスにも三回誘われたが踊れないので全て断った秋野

「街に降りて楽しめば良かったのに」

「一度でいいからこういう場に来てみたかったですよ!!!」

乙女としては一度でいいから城でダンスを踊ることに憧れていた

とりあえずで薄いピンクのドレスを着て

まず踊れないことを冷静になってから気付いた秋野

さすがに秋野にリタと同等を望むのは酷だろう

「ふーん…彗じゃなくて悪いが…踊るか!!!?」

「へ!?! いや踊れないですよ!!!」

「大丈夫だ!!!! 心配するな!!!!」

飛影に半ば強制的に手を取られホールを中心まで移動する

その瞬間に秋野が感じたのは視線である

「メッチャ見られてますって！」

「気にすんな！！！！いつものことだ」

基本的に飛影は注目を浴びる

エリアやリタやコレットの時も同じくらいに注目されていたが場馴れしているか神の精神力をもってすれば関係無い

しかし秋野には両方ない

ガチガチに固まった秋野

「はぁ…」

飛影が溜め息を吐き軽く眼を閉じる

眼を開けた瞬間にガチガチに固まった秋野と踊り始める

「え…わ！！！！」

慌てている秋野

自分の意思では動いていない

身体が勝手に踊り始めた

理由は簡単である

飛影はガチガチに固まった秋野を反射で動かしているだけである

例えば飛影が押せば秋野は反射的にそれに抗おうと前へと重心を持つていく

それを前進につかい

逆に右に態勢を崩させれば左に寄る

それを利用して左に移動させる

やっていることは単純である

しかしそれを踊りにするのは複雑すぎる

最初は足が少しついていかないが次第に身体が覚え始める

「はい！オッケーそのままの感覚で」

「ふわり私踊れてます」

まだまだぎこちなさはあるが形にはなっていた

そして一曲が終わる

「さて…」

飛影は一度手を離す

「踊っていただけますか？」

その場で膝をつき片手を差し伸べる

「安倍川先輩じゃなくて残念ですけどね」

軽口を叩けるくらいには緊張が溶ける

飛影の手を握る

「喜んで」

再び踊り始める

ゆっくりと揺れるだけだが飛影が時々フェイントを入れるので秋野は気を抜けない

「彗をダンスに誘えばいいのに」

「絶対無理です！！不可能です！」

「残念…」

飛影の溜め息と同時に曲が終わる

と同時に飛影はその場で跳躍する

周囲を見渡しながら踊る余裕があった飛影は声をかけてきそうな人物を2人程見つけてそれから逃げるためである

着地先は新人の侍女の目の前

つまりレインの目の前である

「ひゃ!!!!」

いきなり人が降ってきたことに驚くレイン

「レイン…一曲どうだ？」

そしてそれが魔王であると理解

名前を呼ばれたことを認識

ダンスに誘われたことを知覚

「はへぶわ!!!!」

緊張しすぎでその場で卒倒する

「あははは!!!!ここまできると面白い!!!!!!」

気絶したレインを見て大爆笑の飛影

かなり気に入った証拠でコレット達などの飛影のことを知っている
人物達はこれからのレインに同情していた

「んじゃあセリエ!!俺は街に行くぞ」

秋野がリタと合流してエリアもいることを確認した飛影

そろそろ街で遊びたい

そう考えた飛影を止める者はいない

「よっ…と」

吸血鬼の翼を生やし夕陽が沈みつつある街へと飛翔する

ダンスパーク (後書き)

今回は帰還パーティーの城編で次話が街編です

というか長くなりすぎた感が……

ちなみに飛影君は自由人です

それと遊びという遊びは椿と遊びつくしました
ダンスも中に入ります

一時の休息（前書き）

気付けば65話です

PV50,000

ユニーク5,000を突破しました！
本当にありがとうございます

感想も三件いただき

評価も六人の方にしていただいて

感謝の言葉しかありません

これから頑張ります！！！！

一時の休息

「ひゃっはアアアアアア！！！」

飛影は叫びながら街へと降り立つ

なんてことはしない

少し物陰になっている部分に着地する

仮面をつける

ひよつとこの仮面というよりお面を装着する

飛影は有名人である

だからこのような祭りで素顔を晒すともみくちやにされるのだ

そのため飛影はお面を装着する

準備は万端

飛影は気楽に露店を回り始める

「ふんふん♪」

鼻歌まで歌い始めかなりの上機嫌な飛影

楽しそうな様子を見ていると自分まで楽しくなっていく

「あら飛影じゃない」

そんな時、背後から呼びかけられる

びっくりと身体を震わせ恐る恐ると振りかえる

「どうしたの？そんな警戒して」

ワイン瓶を片手に持っているリーベ

「なぜわかった！！！！！！？」

変装は完璧だったと思っている飛影

その変装が一瞬で見破られたのだ

驚愕を露にする

「魔力だけど」

「ああなるほど」

飛影は頷く

魔力までは考えていなかったのだ

「まあいっか！！リーベ暇だったら一緒にまわろうぜ」

「ん…いいわよ」

手を飛影に伸ばすリーベ

飛影はその手を掴む

ただ一番の問題として

「もしや…魔王様？」

あるフランクフルトを売っている露店でのことである

リーベも飛影の連れとして記憶されている

そしてひょっとこの面をつけても雰囲気は隠せない

つまりバレた

露店の主はそこまで大きな声ではなかった

しかし魔王という単語が響いた瞬間

その単語が木霊する

「え？魔王様！？」

「どこ…!!？」

「魔王様だ…!!！」

ざわざわと周囲が騒々しくなる

飛影は黙っていればバレないだろうと金を払おうとするが

飛影のお金を渡そうとしていた手が空振りする

「魔王様にお金をいただくなんてとんでもない！！逆にサービスしますよ！！！」

「あらラッキーね」

二本フランクフルトを買おうとしていたがサービスとして10本ほど渡そうとする

「いやいやいや！！！！サービスとかいらなくて！！！！二本でいい！！！！二本でいいんだ！！！！」

必死に断る

少し声が大きくなってしまい

飛影を探していた街の住民の視線が集中する

「……」

飛影の選択肢は3つ

ガンガンいこうぜーこのまましらをきる
いろいろやろうぜー素直に認めてサービスを受ける
いのちをだいじにー逃げる

僅かな時間で決めた選択

いのちをだいじに

飛影はリーベの手をしっかりと握りその場で跳躍して逃走する

「フランクフルト食べたかったのに」

「いのちをだいじに!!」

「？」

「いやなんでもない…それよりリーベが酒のんでないのは珍しいな」

片手に酒を持っていないリーベ

「いきつけのバーで優希と飲んだのだけど…お腹減っちゃって」

だが飲んでいたリーベ

「バーで食事すりゃいいのに」

二人とも適当な裏道に着地する

「いやよ…あそこ料理は美味しくないもの」

それと祭りだから雰囲気は味わいたかった

ちょうどよく静紅とアンジェレネが来たのでリーベは食糧を調達しようとしていたのだ

「ああ、そゆことね…んじゃ待たせちゃ悪いからな…別行動でいいか」

飛影がいるとマトモに食糧の調達が上手くない

「そうね…残念だけど」

リーベはバーの方へ

飛影は逆方向に別れる

（あれ？リーベ暇だって言ってたような…まあいつか！…さて…どうしよう）

飛影は何とかして隠れたい

普通に楽しみたいのだ

しかしバレた瞬間にまた逃げなければならない

飛影は路地を出る前に足を止める

ひょっとこはすでに警戒されている可能性があるため外している

万能ポケット内蔵のコートがあれば変装道具はいくらでもあったのだが現在は白室の中にある

（どうするか…困ったな…現在の持ち物はひょっとこの面だけ…まずいぞ……ってあれ…）

飛影は高速思考に移ろうとしてその前にふと気付く

変装よりも手っ取り早い方法があったのである

さっそく飛影はその方法を実行し路地を出る

素顔のまま堂々と飛影は歩くが誰も気付かない

（やはり名案だったな）

飛影がやったことは簡単で気配を消しただけである

限り無く0に等しいほど気配を消した飛影は常人では見ることはでき
るが意識することはできない

軽い認識能力の攪乱を起こさせる

何か買いたい時は簡単である

買う一瞬だけ気配を戻し金を払い商品を貰うだけ

店主が気付いて話しかけようとしてもその時には認識できなくなっ
ている

「ふむ…堪能堪能…ん？」

飛影の視界に彗と火月が入る

彗には呆れの目が火月は羨望の目である一点を見ていた

「さあさあさあ！！！！腕試しだよ！！挑戦料100！！勝てば100万！！ルールは簡単！！腕相撲で僕に勝てばいいだけ」

黒鋼だった

無表情でしかしヤル気満々である

その姿はいつもの褐色の少年ではなく、少し顔を幼くして髪を後ろで束ねている

男子にも女子にも見える姿だった

「あの子すげえよ！！もう40人抜きだぜ」

「疲れてはいると思うけど無表情すぎて判断できねえな」

などなど飛影の耳に届く

かなりはしゃいでいた

（まあ身体が一つ戻ったから当然か…）

魔剣は全部で10刀ある

10刀で一つの魔剣なのである

十全

全て戻れば魔剣の力がフルに発揮できる

そしてそれがあともう少しなのだ

力加減を確かめたいという黒鋼の気持ちは飛影にも理解できる

「100だな…」

飛影はぼそりと呟く

それと同時に魔力を解放

気配を顕わにする

「ゲっ」

「さあ…やろうか!!」

にっこりと笑う飛影

対称的に黒鋼は少し頬が引く

『魔王様!!』

いきなり現れた人物を見て周囲が再び騒ぎだす

飛影は軽く手を振って応えてテーブルに肘をつく

「えーと…マジで!？」

「マジマジ!!超マジで!!殺すと書いてマジで」

「普通本気じゃないの!!?」

「アハ!!!」

飛影の笑みを見て黒鋼は諦めて構える

周囲が静寂に包まれる

開始の合図はない

徐々に力を加えて一定まで達した瞬間が開始である

徐々に力を加えているだけでテーブルに亀裂が入る

そして一定まで達した

「てい!!!」

一瞬

攻撃力最強が魅せた

黒鋼は抵抗もなにもできずに敗北した

テーブルが粉碎されたのは御愛嬌である

「へっへっへ!!! 100万じゃあ!!!」

「せこい…ほんとせこい…こいつ本気出しやがった」

項垂れながら愚痴を言いつつ黒鋼は札束を飛影に渡す

彗も啞然として火月は羨望の眼差しで飛影を見ていた

同時に周囲が歓声に包まれる

「んじゃ!! あげる」

得るものは得た飛影

「はぁ!!?」

彗に札束を渡し火月の頬をつついてから飛影は再び気配を消して逃走する

「やっぱ兄ちゃんすげえな!!」

「最悪だ」

「おいこれ…」

三者別々の反応

誇らしげな火月

負けて悔しがっている黒鋼

いきなり渡された大金に戸惑う彗であった

「：見ないと思ったら」

飛影が一通り楽しんで城の自室に戻るとシーレイが飛影のベッドに大の字で占領しながら眠っていた

飛影と椿は二人部屋で椿も自分のベットに丸くなって寝ている

「俺はどこで寝ればいい…」

シーレイを起こすのはかなりの勇気と覚悟が必要になる

ベットに空いているスペースはない

とりあえず部屋を出ることにする

廊下では従者や侍女達が慌てながらも後片付けを行っている

「手伝うか……」

飛影は周囲を見渡し風華を発動

荷物を全て浮かして各場所に運ぶ

どこに何を置くかは理解している飛影は慣れた動作で忙しそうな人を見つけて迅速に片付けを手伝う

断つても無駄だとわかっている慣れた人物は手伝いを御願いし

新人は慌てながら必死に首を振るが所詮無駄で

「拒否権は今だけ取っ払う!!!」

と片付けを強制的に手伝われる

飛影としては立場とか関係無くやれるんだっただらやると思っている
ので次々と仕事をこなす

結果として片付けの時間が一時間は短縮された

「あっいいとこにいた！」

「なんででしょう？」

飛影は手伝いながらも探していた人物をようやく見つける

その侍女は部屋の割当てを頼んだ侍女である

「部屋割り教えてくれ」

飛影の思考

← シーレイにベッドを占領される

← 寝れない

← どうしよう

← シーレイのベッドを占領しよう

←
部屋割りわからない

←
部屋の割当てを頼んだ侍女を探そう

「部屋割りですか？こちらです」

割当てを書いた紙が渡される

今用意したものではない

念のため前もって用意していたものであった

「さすがだな…」

「お褒めの言葉と受け取りますね」

飛影は軽く眼を通す

「サンキュ」

三秒程度の斜め読み

飛影は全て覚えて紙を返す

「さすがです」

「いやいや…テファ程でない」

飛影の目の前にいるテファは現在40歳

20年程の超ベテランである

「では…失礼します」

「おう」

飛影はテファと別れシーレイの部屋に移動する

シーレイと相部屋は元々はアンジェレネだったが

シーレイの希望によりリタである

理由としてはアンジェレネは五月蠅いため睡眠妨害されるからだ

「飛影どうしたんですか？」

「シーレイにベッドを占領されたから占領しにきた」

リタもすでに部屋に戻っていてベッドの上で読書をしている

部屋の光はリタが魔法を使って光を灯していた

「はあ…あの子は何やってるんですか」

リタとシーレイの部屋は綺麗に片付けられている

リタは几帳面なためだが

シーレイは持ってきた持ち物がマイ枕だけのため荷物が無く片付い

ているように見える

「しかも…シーレイはマイ枕を持ってきたのに使ってねえ」

ベッドの上にちょこんと枕が一つ

かけ布団や元々の枕は無くなっている

「……」

リタはなにも言えない

「さて…明日から忙しくなるぞ」

飛影はベッドに倒れこみ寝転がる

「明日の予定は？」

「学校の見学と話つけに行く…リタも来るか？」

飛影はあまり権力は好きでない

しかし由緒ある学校に最低三人（火月、彗、秋野）をぶちこまなければならぬし

飛影とリタも足して5人

権力を使うしか無い

魔法学校で魔王の入学を拒否するのはナンセンスだ

「いえ：飛影が入学なさるなら私も入るだけですし：明日は生活必需品を買いに行こうかと」

「：自分の意志はないのか！！？」

「飛影に従うのが自分の意志です」

「んじゃあ：高笑いしながら廊下を歩いてきて：城一周」

「お休みなさい！！！」

本を閉じて一瞬で布団にくるまる

と同時に魔法を解除して部屋から光が消える

「おやすみ」

飛影も大人しく眠る

（明日が楽しみだなあ〜と！）

一時の休息（後書き）

そして次話！！

魔法学校に乗り込みます！！

入る前の一騒動（前書き）

学校の敷地に入る前の話です

入る前の一騒動

城から徒歩20分

世界中でただ一校

魔法を授業として学習することができる学校

メリア魔法学校

世界一の国の世界一の学校

学年という括りはない

一定以上の学力と実力がついたら卒業である

だが最低三年は卒業に時間がかかる

クラスはS～Hまであり

実力と学力を足した値がクラス分けの基準である

一定の基準はBクラス

つまりBクラス以上に三年いることで卒業の資格を得る

だが特長としてBクラス以上に二年いても三年目にCクラスまで落ちた場合は再び三年の時間がかかる

敷地面積も世界一で東京ドーム10個程

外装も内装も無駄な金はかけずに最低限の出費で世界一の外観となる
国が経営しておりセツネと飛影が計画したものとなる

世界一の学校として様々な国の王族から一般人まで入学可能で階級
に意味はない

入学金も授業料も一般的な家庭で普通に払える額である

寮も完備していて寮代含めても普通の学校より同じか少し高いくらいである

誰にでも受験資格はあり下は6歳上は20歳までが受験の資格がある

「はい、質問は？」

道中で飛影はざっくり説明する

「兄ちゃん昼飯は！！？」

「弁当や学食…があるはず…持参しても大丈夫…言ってくれれば俺
作るぞ」

火月、秋野が小さくガッツポーズ

（旨い飯！）

（睡眠時間！！！！）

欲望丸出しである

「はずってなんだ！！？」

ただ1人彗が飛影の言葉で引っ掛かりを感じた

「だって俺最後に行ったのは150年は昔だからな…基本的な概念は俺とセツネの設計したもんだから大丈夫だけど…そういう細かいのは変わってるかも」

「昔の感覚がちげえ！」

彗の昔は10年とかのことであるが流石に年代が違いすぎた

「到着！！」

『うわあ…』

百聞は一見にしかず

飛影からの話を聞いてかなり凄い所だとは認識していたが改めて眼で見て視認すると感動ものである

まるで屋敷のような校舎がいくつもそびえ立ち

寮らしき大きな塔

時計塔も建てられている

敷地を囲む巨大な塀

正門に二人ほど門番がいて門を護っていた

「見学かい？こっからは私有地だから城が発行している許可証が無いと通せない決まりなんだよ」

一人の門番が飛影達に気付き話しかける

もう一人は居眠り中である

話しかけた1人は普通の子供四人組だと思っている

「ああ！！？許可証だあ？俺が許す開けろ」

飛影のその言葉で三人が理解する

普通の人間でメリア出身ではないと

その理解は正解でその門番は1ヶ月前に他国から働きにきた者である

つまり魔王の顔を知らない

「許可証が無きゃ門は開けられないな」

飛影の態度に少し苛ついた門番

「へ…」

「うおおおおおい！！！！」

「ストップうううう！！！！」

「駄目だ兄ちゃん！！！！」

殺す

そう飛影が言って実行することを察知した三人

彗が飛影を羽交い締めにし

秋野が腰を抑え

火月が脚を掴む

完璧な連携である

「……とりあえず許可証無きや入れないから……大人しく帰った帰った！！！！」

三人の反応に戸惑いながらも門番は子供を相手にするように

しっしっしと手を振る

「……アハハハ！！！！……殺す」

もともと魔界では飛影は全力を出せる

つまり三人が必死に抑えても意味はない

ただあまりにも近いので魔力を解放することも殺気を出すことも敵意を放つこともできなくなっているため三人の判断は正解である

「なんの騒ぎ……」

居眠りをしていた門番が煩わしそうに眼をあける

強気で子供達を追い返そうとする新人

そして

「あ…あ…あ」

その居眠りしていた門番は1人を抑えている三人の少年少女は知らない

しかしその1人が大問題である

メリア生まれのメリア育ちの居眠りしていた門番

当然魔王のことは知っている

「ま……まままま！……！」

「ほら遊んでないで帰れ」

初めて目の前で間近に魔王を見ることができて上手く声に出せない中

新人の言っている言葉を一瞬疑った

「……彗、秋野、火月離せ…こいつは殺す…一瞬で殺す…肉片も残さず骨すら塵に残さずに魂すら燃やし尽くす」

そして魔王のぶちギレ発言

居眠り門番の動きは速かった

迅速に新人にドロップキックを直撃させ吹き飛ばす

空中で土下座の態勢に移行

「ももも申し訳ありませんでしたああああアアアアアア！！！！」

着地と同時に飛影に土下座する

「……話のわかるやつが来たな」

ぶち殺さなければ気が晴れない飛影だが、少しだけ冷静になる

それを感じとりようやく安堵の溜め息を吐く三人

「死ぬかと思いました」

「安心しろ…俺もだ」

「走馬灯っての初めて見た…」

精神的に計り知れないダメージを負った

「新人なもんで！！！！どうか許していただけないでしょうか！！！！？」

「……まあそこまで言うんだったら」

「どうしたんですか！？先輩こんな子供に」

「ぶち殺す」

飛影はある条件があれば基本的には穏便である

条件は簡単である

友達

家族

親友

兄妹

義娘

が基本的な条件

例外的にセツネとの約束で

メリアの城の者

メリア生まれの者

には穏便なのだ

それ以外は基本的に無関心

しかしここまで嘗められた場合はやることは殺るだけである

「魔王さんだぞ！！！貴様も土下座しろ！！！」

その先輩の言葉で新入りは昨日イヤほど聞かされた魔王の特徴を思い出す

「黒髪…黒いコート…子供のような姿…」

特徴一致

そしてメリアでできた彼女が見せたものを思い出す

「これね！魔王様が私の小さい頃に一緒に写真に写ってくださいましたやつ！！！！我が家の家宝なの！！！」

少し興奮ぎみに見せてきた写真

可愛らしい子供と抱っこしてピースしている魔王が写っていた

「……」

そっくりそのまま何も変わっていない姿

「申し訳ありませんでした！！」

自分が誰に殺すと言われたかようやく理解した新人も土下座する

「……三つ選択肢をやる…好きなの選べ」

だが飛影の表情は変わらず笑顔である

「1自殺…2他殺…3社会的抹殺」

『……』

一同なにも言えない

本気で殺す気しかない飛影

「ち…ちなみに社会的抹殺ってなんだ？」

勇気を出した彗

疑問を聞いてみる

一つだけ死なずにすみそうな選択肢である

「超簡単！！…髪の毛を全てむしって両手足の爪を剥いで両手足の骨という骨を一つ残らず折ってから両手足を切断して眼を二つだけ抉って歯も全て抜いてそれでも生きてるなら生かしてあげる…そこまで肉体がなければ社会的抹殺だよね？…まあ髪の毛を億本程度むしって両手足の爪を20枚だけはがして両手足の骨だけ折って腕を二本だけ切断して脚も二本だけ切断、眼も二つほど抉って歯は全部抜くけどたったそれだけだから俺超優しい！！！」

新入りの門番は人間である

髪の毛生えてて眼が2つ腕も2つ脚も2つの人間だ

飛影はにこやかに言うがそれはかなりヤバいことになる

「……」

新人がガタガタと顔面蒼白で震え始める

「さあ早く選…べ？」

とすんと背中に軽い衝撃と若干の重量

「……枕」

「俺は枕じゃないぞシーレイ」

「…ぬくぬく…」

シーレイは飛影の首に腕を回してしっかりと落ちないように固定する

同時に彗と秋野と火月は今度こそ安堵の溜め息を吐く

「おいシーレイ寝る気か！！？」

「……眠い…寝る…」

背中越しに聞こえるその声はすでに眠そうである

「俺の背中で寝るなああ！！！！それにシーレイさっきまで寝てたよな！！！！？」

城を出る前に一度確認した飛影だがやはり大の字になって寝たまま

であつた

「寝てた…眠い…寝る…」

「いいのか!!!? 俺騒ぐ気満々だぞ? 動き回るぞ? 魔力解放するぞ!!!? 安眠妨害するんだぞ!!!?」

「……」

返事がない

「……寝た?」

飛影は恐る恐る確認する

「寝てるな」

「爆睡です」

「安眠してる」

言葉は全て異なるが寝てることは確定された

そして飛影は溜め息を吐き土下座している二人を思い出す

まだ土下座していた

「…はぁ…もういいや…門を開けろ、中に用があるんだ」

シーレイによって完全に殺る気が削がれた飛影

殺ることが目的ではなく見学と入学するための話をつけることが今日の目的である

『了解致しました!!!』

二人とも即座に立ち上がり一礼すると門を開ける

「あいサンキュ」

無駄な時間がかかり経過してしまったがようやく校内に入る

入る前の一騒動（後書き）

シーレイは未来を確知してまずいことになるを知っていましたので
こうなってます

敷地内での一騒動（前書き）

一悶着です

敷地内での一騒動

ようやくながらメリア魔法学校の敷地に入ることができた四人と爆睡シーレイ

飛影はシーレイをおぶさりながら向かう先は現在の学長のところに移動する

シーレイは寝ながらも腕と脚で飛影に固定していて飛影が支えなくても落ちないようになっている

制服は定められているため制服を着ていない飛影達は浮いている

しかし飛影が先頭にいることで止められることもなく通るたびに職員は頭を下げて挨拶し

生徒達も飛影を見る眼が輝いている

「……」

飛影は何か違和感を感じた

150年も昔で記憶の引き出しも固い

忘却している可能性もあるがその時と何かが違う

それが何かはわからない

だが絶対に何かは違う

そんな違和感を胸に飛影は学長室の扉を蹴り破る

なぜ蹴り破ったか？そこに扉があるからだ

飛影の奇行になにも言えない三人

「誰ですか！！？無礼な！！」

学長の言うことはもつともである

「おっすゝ魔王の飛影だ：ちよつと授業見学にきた。連れは友人だ」

学長はリースという名前で凜とした雰囲気初老の女性であった

「魔王様ですか！！？どどどどうぞ見学なさってください！！至らない所がありましたらすぐに直します！付き人は必要ですか！！？何か必要であればすぐに用意します」

飛影という存在に30年以上ぶりに緊張する

「あゝ俺が見学するって周知しといて：いちいち聞かれて答えるの怠いし」

「承知しました！！」

「んじゃ」

飛影達は学長室を出る

「……昨日の今日ですが飛影先輩って凄いんですね」

飛影への応対がどれもこれも丁寧すぎる

城の時はそこまですではなかったが街にでるとすぐに印象が変わる

「ぶっちゃけめんどい…普通にしてくれりゃいいのに…」

移動しながらたわいも無い話をする

その間に校内アナウンスが流れ飛影が見学に来ていることを知らせている

「こういうのって普通に気が緩んでるときに行くのが王道じゃないか？」

ふと彗の疑問

「ん？俺は本気で取り組んでる時の内容が知りたいんだよ」

流石に150年は来ていないと質がわからない

本気の全力でやっている時の質が知りたいのだ

とりあえずということで最初に入ったのはSクラス

「うわぁ…豪華ですね…」

クラスといっても世界から生徒が集まってくるため人数は300を

越える

Sクラスはあまりいないため100人程度である

だが一クラスに一つの校舎である

「…さっきのBクラスと設備が違うんだな」

外装は同じだが内装は無駄な程豪華である

Bクラスは学長室に行くときに通りがけで覗いただけだが一目で違いがわかる

Bクラスは無駄なく綺麗な内装だった

「……」

飛影の足が止まってしまう

「どうしたんですか？」

「無駄……」

無駄すぎる

クラスごとに校舎はわけているがほぼ同じ内装で国のお金で無駄遣いしないように設計していたはずだった

「……いいや…なんでもない」

とりあえず現時点ではそれを気にしない

まず授業を見学したいのである

立ち止まった秋野の背を押して先へ進む

てきとうに教室を選び（ジャンケン）教室のドアを蹴破る

前に彗がドアを開ける

「お前には常識はないのかよ!!?」

「無い!!!」

「だろうな」

彗は聞いたいてあれだったが非常識なことは周知の事実である

アナウンス通りに魔王が見学にきたことで教室が緊張に包まれている

ちようどよく魔法の授業のようだった

高校と同じような教室ではなく大学のような段差があり後ろの方でも黒板が見やすいようになっている

魔法を使える彗と秋野だが飛影から制御を教えてもらっただけのためちゃんとした授業を見学するのは火月も含め初めてで少し緊張していた

飛影は学術書が机の上にあることが引っ掛かっている

「では復習から：誰か魔法について説明できるものは？」

魔法使いの頂点の飛影の前での説明

生半可な知識は出せない

一人の男子が自信満々で手を上げる

学力がトップ10に入る生徒

教師は心の中で頷いた

「ネヤルか：説明してみようか」

「はい！」

ピシッと直立し声が通るように少し顎を上げる

「魔法とは炎・風・雷・水・土の五つの属性と無属性の大きく分けて6つあり自身の式を使用して発動します。魔法のレベルがあがることによって消費する魔力の量が増加します。生まれ持った資質でどの系統に適しているかが決定し努力しだいで使用できる属性が増えます」

話を聞きながらそんなもんなのかと彗と秋野と火月が頷いている

「ふむ：よく理解しているな：座っていいぞ」

教師は完璧に説明したネヤルを内心褒める

「は？」

ネヤルが着席した時に飛影が一言もらす

その表情は信じられないことを聞いたという表情だ

「あ…悪い。今なんの説明だった？」

びっくりとネヤルが震えたのを見て飛影は優しげに聞き返す

自分の聞き間違いだと飛影は判断する

「魔法の説明です！説明が間違っていたのでしょうか？」

相手は魔王である

ネヤルは自分の知らない知識があり

それで説明が足りていないと判断していて、自分の知らない知識を知りたいためその説明を聞いてみたかった

「…：この中で魔法を使えるやつは何人だ？…いやこの学校には何人魔法使いがいる？」

飛影の質問

生徒達の反応は何を言っているのだろうかという表情である

「簡単な魔法でしたら…生徒全員が使えますが…」

「簡単な…魔法……」

飛影は先の説明と今の教師の説明で全て納得した
最初に感じた違和感

それは生徒の中に戦えるものがないことだ

「…はは」

飛影は笑うしかない

「簡単な魔法ね…」

簡単な魔法など存在しない

魔法は不公平が基準だ

どんなに魔力が高くても魔法を使うことができる者はいるし

その逆もしかりである

150年前にいた魔法使いは全体で三人であつた

つまり簡単に言えば

「お前らが習っているのは魔術だ」

いつのまにか飛影は教壇に立っていた

魔術

魔法の劣化品

誰でも努力すれば使えるチカラ

「魔術の特性はそいつが言った通りだ：学術書に書いてある内容通りに行えば誰でも努力すれば使える」

間違った知識は死を招く

飛影はそのことを知っているため先程の説明を切るため

彗達に忘れさせるため飛影は説明する

「魔法に属性とか式とか決まりはない：もちろんレベルとか決まったものはない：一生をかけて魔法を修得しようとも修得できないやつは一万分の9999で一人に1人が魔法を使える。最初の大きな違いは魔法は努力だけすれば覚えられるものじゃないってことだ」

「次に属性だな：魔法に属性は決まった無い覚えた時に一言でこれを表すなら何だろう？って自分で考えたのが属性になる。俺の場合は炎・風・他だな：」

自分だけの魔法

簡単な魔法などはない

一つ修得するのに一生をかけるものもある

「次に魔法に式は無い。詠唱とか動作とか道具とか必要ない…魔法は全部自分の頭の中で構成する。全て自分の魔力で構築される」

簡単な例は

すでに決まっている回路で豆電球を光らせるか

自作の回路で豆電球・蛍光灯など自由に取り付けて光らせるか

前者が魔術で後者が魔法である

「以上のことからお前らが魔法と言っているのは魔法の劣化品の魔術だ」

一つ覚えることでいくらでも応用が聞くのが魔法である

魔術は応用ができずに威力も低い

「んで彗と秋野はいいんだけど…火月は魔術を見るな触れるな感じとるな…魔法が使えなくなる」

魔術と魔法は似て非なるものである

先に魔術での魔力の扱いになれると魔法を創るさいに魔力をうまく練ることができなくなる

車しか運転したことないのに初めて自転車に乗らされるようなものである

当然、まともに走行はできない

車しか運転していないため弱った筋肉では自転車を漕ぐことすら不可能

そのような状況になる

「了解だ兄ちゃん!!!!!!」

「んじゃ…とりま見学できとうにしろって」

飛影は慧達に告げると窓から飛び降りる

ちなみにとりまとはとりあえずまあの略称である

敷地内での一騒動（後書き）

とりあえず毎日更新できるように頑張ります

敷地内での二騒動（前書き）

量より質

それがこの物語です

「ひとりひとりは弱いから大丈夫だ」

飛影は親指を立てて笑いかける

「数の暴力って知っているか？」

「量より質という言葉返そう」

「限度ってもんがあるだろうが……！」

「しかも学長さんもいますね」

相手側全員が困惑しながらもヤル気満々なのに対して慧と秋野は困惑しながらヤル気0である

『……はあ』

二人の溜め息がシンクロする

「慧と秋野は天使もどきが一番強かったか？」

そんな二人に飛影からの質問

「……そうだな。お前を除けば天使もどきが一番だ」

「あれは強かったですね……」

厄介さで言えばワーウルフの方が強かったがそれは飛影には言えない
言わないことになってる

「じゃあ楽勝だ…相手は格下だ」

「まあお前にはな…」

飛影の話を総合的にまとめると

魔王＞魔法使い＞魔術使い

となるため、飛影にとっては楽勝であると彗は判断する

「まあ飛影先輩が一人で片付けてくれそうですし」

「え？俺は彗と秋野のサポートしかないぞ」

『はあ！！？』

何を言っているのだろうか

彗と秋野は理解ができなかった

「え？サポートだけ！？」

「戦わないんですか！！？」

当然の疑問だ

喧嘩も戦いも殺し合いも大好きな飛影がサポートという指を加えて
見てるだけのようなことをするはずがない

それが彗と秋野の飛影のイメージである

「俺がやったら弱いもの苛めになるだろ？…それに俺の背中」

苛めはあまり大好物ではない飛影

売られた喧嘩は買うが

今回は飛影から実力を試したいと申し出たのだ

格下相手にはあまり喧嘩を売ることはないが今回だけは別だ

なので彗と秋野の経験値もかねて飛影はサポートになる

そしてなによりシーレイが背中に寝ているのだ

安眠を妨害することで何が起こるかわからないというのも飛影のサポートの理由である

それに形式は模擬試合である

怪我はするが死にはしない

《風華・防音》

飛影はシーレイに一時的な音を遮断する風を纏わせ息を吸い込む

「それではこれより模擬試合を始める！！けどまあ簡単な作戦とか練りたいから今から5分後に開始だ！！開始の合図はしない！」

少し妙な開始形式

時計は腕時計をつけている生徒がちらほらいるだけ

時計台には秒針がない

体内時計が正確なものがあるかの確認もかねている

相手は学長や教師に言われたフォーメーションを組むために隊列を変えろ

各自道具の確認と使用する魔術の話し合いを始める

「んでだ：簡単な作戦を教えると」

軍師と書かれた腕章をつける飛影

「遠距離攻撃が確実に初手としてくるから秋野が返して隙が生じた相手を近距離で風ぎ払うだけ！簡単だ！！！」

「おい軍師！！！」

「遠距離攻撃ってどんぐらいくるんですか！！？私そんな返せませんよ！！！」

ズタボロな作戦である

しかし飛影は不敵に笑う

「とりあえず、軽く魔法の説明をしようか…あと魔力の運用方法だ

な……講義は残り3分34秒で行うから……覚えろよ」

飛影のことをだめ軍師だと思っていた彗と秋野

腕章は伊達ではなかったことを知る

どんなに日頃が馬鹿に見えても飛影は絶対強者級であつた

そして腕時計を持っている教師の合図で一斉に全員が式を行う

言葉や動作や道具を使って構築を始める

「まずは…私ですね」

先程とは変わって秋野は少し自信がある言動になっている

縦に並んでいて彗は一番後ろ

飛影は秋野の両肩に手を置いて秋野が先頭である

一度眼を瞑り深呼吸

十分に集中できたと感じた際に眼をあける

時間は充分にある

飛影達と生徒達の距離は200メートル

魔術師の特徴として遠距離魔術は時間がかかる

「誰も接近しないですね…」

飛影の予想通り

飛影が学校を見学していた時の違和感

武術を習っていない

立ち振舞いが素人だった

昔は魔法を使えない者は武術を習う

そうして実力をあげていたのだが

今は魔術を教えていて誰でも努力すれば使える

魔術を習うことで実力をあげるものが大半であった

「よし……いきます!!!」

遠距離魔術が発動し、500もの魔術が襲いかかるのを確認して秋野は魔法を構築する

《集固・因果応報・絶対強者級バージョン》

魔法を構築するさいに秋野は自分の魔力ではなく

物理的に接触している飛影の魔力を使って構築する

絶対強者級の魔力を使用することで魔法構築の魔力の桁があがる

その分の魔法の威力が増大する

秋野の集固は固定する魔法である

また対象は集めることもできる

集めて固定が基本の魔法

敵の攻撃を固定するときに消費する魔力はその攻撃以上の魔力である

魔王の絶対強者級の魔力を使用した秋野

魔法の基点となる脚を前につき出す

全ての魔術攻撃が秋野の脚に向かい固定される

「本当にできるとは思いませんでした」

半径五メートルほどの巨大な球体

全ての魔術攻撃が集められ圧縮されたものである

「それが秋野の魔法の使い方だ」

《集固・魔術バースト》

そして秋野はそれを波のように放つ

学長が咄嗟に土の防御壁を構成するが壁にもならない

殺さないように飛影がサポートとして風を使って威力を弱めた一撃でも

秋野の攻撃は相手側に死者を出さないで甚大な被害を与えるには充分である

「よっしゃ！！次いつてら！！！」

「しょうがないが…わかったよ！！」

《風華・人間ロケット》

飛影は右手で彗に風を纏わせ

左手で風を圧縮し彗へ放つ

「ぎゃあああああ！！！」

彗はその風によって紙屑のように吹き飛ぶ

200メートルの距離は一瞬で0になる

飛影の風の防御がなければ確実に五体バラバラである

叫ばずにはいられない

「もうジェットコースターなんて乗れなくなったな…」

《限界突破・身体能力向上》

中心に落とされた彗はまず身体能力を強化する

そのまま近くにいた生徒を気絶させる

武器を持っている生徒は武器に炎や雷を纏わせて彗に接近して襲いかかる

彗は素人ではないがプロでもない

いつもは鋭利そうな槍や剣を向けられたら当然怯む

しかし

（本当に持っているだけなんだな…）

彗は怯むことなく逆に距離をつめて無力化させていく

素人

飛影は生徒たちをそのように評価していた

遠目ではわからなかったが近くで見るとよく理解できた

魔力による身体能力の向上も形にもなっていない

身体の動きが遅く無駄が多い

どんなに武器を持っていたとしても使えなければ意味がない

槍を携えて突撃してくる生徒を発見

風を使って加速している

（試す…）

《限界突破・鉄を切り裂く爪》

作戦会議時に飛影が言っていた言葉であり限界突破の本質

強化ではなく進化

それが限界突破の本質である

自分の身体を想像力で進化させる

一瞬で飛影やリーベのような吸血鬼の爪と同じものが生えて槍を切り裂く

鉄でできた槍を真つ二つに切り裂き同時に腹に蹴りを当て無力化させる

（本当にできたよ…ってかすげえ魔力消費）

この爪だけで彗は魔力を半分以上使用した

と同時に秋野が彗の隣に着地

「手伝いに来ました!!」

「助かる！」

魔力がある秋野が空中を飛び回り数を減らしながら隙を作り

魔力が少なくなった慧が最低限の魔力消費で地上からも減らしていく

「さて…」

学長の目の前に飛影はゆっくりと歩いて接近した

理由としてシーレイを起こさないためである

「とりあえず現代最強？ 力を示せ」

学長としての条件は強いこと

それが一番重要である

強くなければ手本に慣れない

「わかりました!!」

生まれと育ちがメリアの場合

魔王に憧れるため大体の生徒が修得しようとする属性は炎か風になる

あまりにも向いていない場合はようやく諦める程度である

学長は4つの属性の魔術を極めた

炎と風と雷と土

しかし所詮は魔術であり、威力はたかがしれている

無詠唱で複数の魔術を同時に発動し様々な角度から攻撃できる学長
リースは魔術師としては一級品である

《風華・渦巻き》

飛影とシーレイの周囲に風が渦を巻く

竜巻にすらなっていない弱めの魔法

しかしその弱めの魔法が炎人や、巨大な竜巻、雷の大槍、土の巨大な拳をかき消す

「な…!!!?!」

「原因はリースの2代前だな」

飛影は風華を解除する

学長は魔法使いでなければいけない

それは決まりだった

しかし、リースの2代前と3代前は引き継いでいない

3代前が病死して

学長が引き継がないまま魔法使いがいなくなった

その時に2代前の学長に魔法のようなものが使えると魔術師だった者が就任

学園の卒業生であったが魔術師として育った彼に在学中魔法が使えなかった

そして魔術よりも遥かに高度な魔法に恨みを持っていた2代前は学長に就任後

魔法から魔術を教えることを決定しそれが引き継がれてしまつて現在に至る

「校舎も無駄な装飾つけて…あつたはずの校舎も無くなって…物はまだいい…信念が違う…これは…この学校は全ての民に平等に学問と守りたい人を守るくらい力をつけて大人になってほしい…それがセツネの考えた…信念が…もう無い…見つけられない…こんなに弱いんだから…守れるはず無いだろ…貴族から裏金貰って優遇したり…平等か…？」

それは今の戦いと飛影が二時間で調べたことである

「……それは」

原因は二代前だが、直せることは可能だが持続しているからこの現状だ

何も言えない学長のリース

自分も魔法のことは知っていたが確実性にかけて魔術を教えていたのだ

「この国が進化するなら俺は構わない……」

魔力が吹き荒れる

「でも退化する……お前らはセツネの生きてきた証を壊す……だから」

《炎舞・断罪の矢》

一瞬で空が闇に染まる

無炎の矢

その威力は戦争を止めたものより遥かにでかい

使い方さえ考えれば世界を滅ぼす一撃

そんな驚異のメリア魔法学校の敷地の上空に停滞している

「だから……滅ぼしてやる」

飛影が泣きそうな顔で笑う

標的は魔法学校の敷地内全て

「こ……のバカが……!!」

合図であろう手を降ろそうとした飛影に彗の飛び蹴りが直撃

「私たちも死にますって！！！」

反対側から秋野も飛び蹴りを当てる

「大丈夫大丈夫」

しかし、割とかなり手加減なしの攻撃だったが飛影に触れられない

魔力で防がれていた

（まずい！！）

（これ…止められない！！）

「お前らは無傷にするから」

飛影の笑顔

そのまま腕を降り下ろす

火月も接近していたが間に合わない

《スロウス》

だが飛影の腕は降り下ろされることがなく、動きが止まる

「飛影…だめ…」

今まで大爆睡だったシーレイである

「飛影…判断…間違…だから…」

シーレイは飛影から飛び降りる

巨大な鍵を手に宿し

「ちょっと…痛い…我慢」

横風ぎに一閃

飛影の上半身を吹き飛ばす

同時に断罪の矢が消える

「……」

「うわあ…」

「兄ちゃんが死んだああ！！！！」

吸血鬼である飛影は死にはしないがスロウスで身体が遅くなり再生する気配がない

「……ん」

シーレイは飛影の脚を掴み

もう片方の手で彗と秋野と火月の服を掴む

「明日…9時…くる」

未来を予測したシーレイは学長にそう告げる

嫌な予感がする

そう感じたのは服を掴まれている三人である

何故服を掴まれたか

小学生でも理解できる

「歩く…!!」

「歩きます…!!」

「歩きたい…!!」

三人の意見も虚しく無視されシーレイは城へ跳躍する

『ギャアああああアアアア…!!!!!!!!』

しばらくしてリースが周囲を見ると自分以外は全員気絶していた

効率がよく誰でも努力すれば使える魔術師500人

それが三人の魔法使い

しかもそれが魔王を抜いた二人だけでその現実を作った

敷地内での二騒動（後書き）

飛影は人が死ぬときは語り継がれなくなつたときだと考えています
誰かが覚えていればそれはその人の生きた証がある
だから飛影はその証を無くしたものにキレます

冷静になって一騒動（前書き）

上半身を吹き飛ばされた飛影

学園を破壊することはできるのか…

冷静になって一騒動

「おいこらジジイ…どういうこった？」

完全復活した飛影は仕事をしているセリエを邪魔するかのよう
に机の上に胡座をかく

あの後、シーレイが城に到着して死屍累々となっている状況をリタ
が発見

気絶している彗と秋野と火月よりも上半身が無くなっている飛影を
見て

ぶちギレたりタ

シーレイは日頃見せることない俊敏な動きで脱兎の如く光速の般若
から逃走

スロウスは解除され

飛影は再生、起き上がって状況を確認して近くにいたコレットに彗
達を任せてセリエのもとに向かったのである

「いきなりきていきなりなんじゃ？」

いつものようにドアを蹴破られて減給が確定して泣きべそをかいて
いる護衛二人を見ないようにして

セリエは仕事の手を止める

「ああ！！？なんじゃもうじゃもねえよこらジジイ！！！！仕事
しすぎだ！！休め！！顔色悪いんだよ！！！！七時間は仮眠とれ！！
！」

言い方はキレているが言葉自体は心配している飛影

「お前はキレてんのか心配してんのかはつきりせい！！！」

矛盾である

セリエが突っ込みを入れるのも無理はない

「キレてるさ！そんで仕事を頼もうと思ったら疲れてっからどうす
りゃいいんじゃないっ！あ！！！」

「儂が知るかポケエ！！！！！」

メリア魔法学校のことでセリエに仕事を頼みたかった飛影だがその
セリエがかなり疲れが溜まっているのだ

「いいや…ちよつと魔法学校のことなんだけど…俺の好きにしてい
い？」

飛影の好きにしている？…その言葉をイエスと答えた時の飛影の行
動は予想がつかない

もしかしたら、魔法学校を滅ぼそうとするかも知れない（セリエは
飛影の行動を知らない）

そんな考えが一瞬だけセリエの脳裏によぎるが

「…別によいぞ」

長年の連れ

飛影はどんなに馬鹿なことをしてもメリアにとって悪い影響は与えたことがない

ほぼ即答である

「予算はどんぐらいじゃ？」

「ああ…え」と上手くやるから今のところはいらない…けど」

飛影は一度区切りニヤリと笑う

シーレイが無理矢理頭から血をとつか上半身か吹き飛んだことによって冷静にいつもの飛影に戻る

その笑顔

そして

「けっこう派手にやるぜ」

その言葉を聞いた瞬間

セリエは物凄い嫌な予感が

（あつれええ……！！！！！！！！！！？ 儂判断ミスったかのおお……！！！！！！！！？）

頭を抱えるセリエ

「取り敢えず寝ろ」

首に手刀

首を落とすためではなく、氣絶させるためである

一瞬で意識を刈り取られたセリエをそのまま飛影は風で浮かしベツドに放り込む

布団がかかったのを確認して飛影は部屋をでる

「…さて…誰連れて行こうかな？」

ニヤリと笑う飛影

その視線の先にいたのは

「お父様とお出かけはお久しぶりです!!!」

偶然通りがかったエリア

稽古も無く暇だったため飛影は拉致

喜んで飛影についていくエリア

この笑顔が笑顔じゃなければどの笑顔が笑顔と言うのかと思うほどの笑顔である

城下町

再び学園に向かっていく飛影とエリア

エリアは飛影と手を繋いで鼻唄にスキップしそうなほど上機嫌

エリアにはいつも護衛が10人程で厳戒体制でこっそりと堂々と護衛しているのだが

今回は護衛は0

理由としては護衛千人よりも遥かに強い人物がすぐ隣にいるからである

「セツネお婆様？」

「そうそう、俺とセツネが作った学校が改悪されたからちょっと改善しに行く」

エリアから見てセツネは物凄い上の先祖である

正式な名称は長すぎるため

エリアはくお婆様、くお爺様で統一している

「え！？あの学校はお父様がお造りに！！？」

初耳である

魔法学校とは聞いていて一度訪問したことがあるエリア

教えていたのが魔術で飛影から魔術を見るな触れるな感じるなど言われていたため脱兎の如く逃げたのである

魔法と魔術を一緒だと考えていた学園に疑問は感じたが魔法を使えるのは本当に一握りしか覚えられない

そのため魔術を教えることを選んだのだとエリアは解釈していた

「そうだよ、あれ？言ってなかったっけ？んで魔術教えてるし実力無いし平等じゃないから改善しにいくわけだよ」

飛影の意に背いている

それだけでエリアの気持ちは一つに固まっている

「私は何を廻せばいいですか？」

僅かにエリアの眼が赤くなる

飛影の仕事の手伝いをする

それがエリアの気持ちである

「いや、エリアは俺と一緒に出かけだと思ってくれ」

すぐに頭を撫でて落ち着かせる

エリアは廻眼の制御はまだ慣れていない

そのため気持ちが高ぶると自動的に発動してしまう

「えへへ…わかりましたお父様!!!」

いつもは上品に笑うエリアだが今回は俄然テンションが上がっているため子供のように笑う

到着する飛影とエリア

場所は再び校門である

一瞬でベテランと新人が土下座しながら道を空ける

飛影は笑いながら門を蹴り破る

「さあて…何人切れるかな」

「さすがですお父様!!!」

手を繋いで仲良い親子

子はともかく親の方はこの学校に最悪な災厄な再革をもたらす存在

「よし!!! エリア…なんか魔術っぽいとかなんか無駄だなって感じたら教えてくれな」

「はいお父様!!」

王女として育てられてきたエリア

その鑑定眼は一級である

次々と無駄に豪華な箇所を指差す

そして飛影はその箇所を燃やし尽くす

金だろうが銀だろうが容赦なく蒸発していく

「あれ魔術っぽいです」

エリアが指すのは魔術師の生徒

「生徒はいいや」

生徒に悪気はない

そう飛影は思っている

向上心さえあれば誰でも遅れは取り戻せる

「じゃああれとかですか？」

エリアが指差すのは魔術の教師

「そうあれ!!」

飛影は頷いて風華を発動

空中に固定する

「よっしゃ…このままういこー！」

「はい！！！！お父様♪」

もはや魔王の暴挙とも言える

この飛影が居なかった年月で無駄な装飾を全て破壊する

魔術を教える魔術師の教師も無駄なもの

学長も無駄なもの

武術ではなく遊びの範疇スポーツをさせていた教師も無駄なもの

装飾は燃やし破壊する

教師達は全員門の外まで風で移動させ再び固定する

飛影は一人一人の顔と教師達の情報が載っているファイルを見比べて何度も頷く

「えーと…なんだ…全員いないじゃん」

エリアも後ろからそのファイルを見ている

「お給料高いです…」

魔術師の教師の給金は通常の教師の二倍～三倍

学長は五倍である

それが20人分

「ボーナスもプラスして～…うわぁお!!!」

「うわ…毎年これでやってるんですか…国に払うお金誤魔化してます」

さすがに王族であるエリアは一目で不正な箇所がわかる

逆に一目でわかるほど酷い有り様である

「……」

飛影とエリアは熟考する

政治に関わるものとして興味深く酷く苛立つ資料であった

こんな爆弾物が学長室の隠れ地下室にあるなどあまりにも無防備すぎて飛影は笑ったほどである

「……ふむ」

飛影は最後に一度頷く

《風華・伝達》

「俺だ…飛影だ」

飛影は風を使って声を運ぶ

声の運び先はメリア国の兵の詰所である

「今から資料を送るから、その資料の住所行ってごみ以外少しでも価値のあるものを没収土地の権利書も全てだ。城に全て運べ…魔術的妨害の可能性があるから…危なかったら素直に引いて俺に連絡」

全て一方的な伝達

ファイルの紙も風華の風で運び送る

しかし問題ない

今のだけで充分に伝わるほどの理解力と実力はある

これで一時間もすれば目の前でなにもしない教師達は無一文である

「よし…エリア…例のものを」

指をぱちんと鳴らす

「はい!!!」

元氣よく飛影の隣に移動する

「…例のものってなんですか!?!?」

返事をしたはいが何も聞いていないエリア

「すまん…適当に言ってみただけ」

何も伝えていないし

まずなんとなくカッコいいからという理由である

「えーと…お前らはご存知か知らねえが魔王はけっこう権力あるわけだ…んで…俺は権力使うの嫌いだけど…」

教師20人と学長1人

計21人が何も言えないし反抗もできないのは理由がある

「選べ…職を無くすか命を無くすか…」

純粹な圧力である

風による圧力と飛影から発せられる威圧感の圧力によって呼吸程度しかできない

「あっ…エリアは眼を閉じてなさい」

「はい」

飛影の言うことを素直に聞いて少し離れてから眼をつむる

「……あれ？返事が聞こえないぞ？」

ニヤニヤと笑っている飛影

圧力で返事ができないのを当然知っている

「困ったなあ…三秒…待って返事なかったら…平和的な方を選ぶ」

さりげない飛影の優しさ

もしかしたら望んで逆を選ぶ者がいるかも知れないため強制的に黙らせている

数人からは圧力の恐怖から僅かに安堵の光が灯る

「はい三秒」

飛影は魔法を解除する

「はい…平和的な解決ね」

圧力も無くなり深呼吸で酸素を全身に行き渡らせる

『申し訳ありません！！！』

21名全員が飛影に頭を下げて謝罪する

「いやいいいいよ…俺も大人げなかったし」

《風華・炎舞・ダニ除去》

飛影は笑いながら魔法を発動

21人全てを風が切り裂き炎が存在を燃やす

「うん、平和的解決だ…」

国を腐らす害虫を駆除するのと逃がすの

どちらが平和的な解決になるか

飛影にとっては害虫を逃がして他の人に迷惑をかけるよりは

今ここで駆除した方が平和だと判断した

「さすがに関係無いのを殺すのは大人げないからな」

キレた時は全員殺そうと考えていたが関係無いメリアの民を殺めるのは頭が冷えた今の飛影ならいけないことだと考えられる

「…忘れてた」

《炎舞・謝矢》
あやまるくらいならしんでわびろくそやろう

飛影は手に小さな無炎の槍を生成し喧嘩を売った門番に放つ

ぐるり壁を半周し直撃した瞬間

刹那以下の時間で存在ごと焼失する

もう片割れのベテランは忽然と姿を消した新人に腰を抜かすだけである

「エリアもう大丈夫だよ」

「はい！」

言いつけ通りに眼を閉じていたエリア

「この学校どうなさるのですか？」

校舎破壊や教師消滅

魔術を今まで教えてきたメリア魔法学校はかなりの崖っぷちである

「ん…？ エリアの政治の練習…必要な人材は俺が揃えるし一時的だが学長になるけど政治はエリアが行うこと…簡単に言えば学長の上になるな…そろそろ人と協同で何かを行うことを体験した方がいい」

「……ええ！！？ 嘘ですよお父様！！？」

咄嗟にでてきた言葉

エリアは生まれて初めて飛影の言うことを疑ってしまった

その後、飛影から詳細を聞くが終始お父様を疑ってしまったと俯いていたという

冷静になって一騒動（後書き）

軽くプチ切れ飛影でした

20人の抜けた穴は飛影一人で充分に補えるどころか釣りが払いきれないくらいです

70話な記念（前書き）

おかげさまで70話になりました。

ありがとうございます。

もうすぐ投稿して四ヶ月です。

今回の話は一応は：ギャグのつもりです。

時系列は関係無く城に來た時の飛影と秋野と彗のアホ話です
セリフのみになります

想像してお読みください

70話な記念

ある日の飛影と秋野の会話

「あゝきゝのんおはよう」

「おはようございます。んであきのんってなんですか！！？」

「今俺が決めた秋野のあだ名だ！！！」

「名誉毀損で訴えます」

「ええっ！！？そこまで嫌なの！！？」

「嫌です！なんか嫌です」

「理由はないのか…なら彗に呼ばれたらどうだ！！？」

「安倍川先輩ですか？……………うへへ」

「戻れえ！！！その顔は少女として危うい！！危ない！！！！危険だあ！！！！」

「は！！！………あります！飛影先輩はともかく安倍川先輩なら全然ありでした！！！」

「なんかすごい失礼だよ！！！！さすがの俺もかなり傷つくよ！！！？」

「いや…先輩なら大丈夫ですよ」

「何が根拠だバカやろお」

「経験からくる勘です」

「……凄い根拠もあったもんだな」

「乙女を侮っちゃいけませんよ？」

「乙女ならうへへって笑うはずがないがまあ100歩譲って乙女だとしよう」

「なんか失礼なこと言われた気がします」

「事実だ！！！！んでだ…まあ俺も少なからずショックは受けるわけだよ」

「……ええ？」

「なんだその寝言は寝て言ってくださいみたいな表情は！！！！！！！！？」

「寝言は寝て言ってください」

「みたいじゃなくて本当に言われた！！！！！！」

「飛影先輩なら大丈夫ですよ」

「勘か？」

「信じてますから」

「むう……」

「飛影先輩ならまあ絶対大丈夫じゃないですか？」

「それだ!!!」

「なにがですか!?!?」

「俺は普段から敬語キャラに言ってるわけよ」

「敬語キャラって？」

「俺に敬語を使うやつだ!!! 該当者はリタ、アンジェレネ、秋野、エリア、その他メリア国で俺と親しい人間がこれにあたる」

「確かに敬語ですね」

「ぶっちゃけると敬語嫌いなんだよ」

「知ってますよ」

「知ってるんかい!!!」

「じゃあ止めろやあ!!!」

「いえいえ〜先輩なんで〜」

「またかチクシヨオオオ!!そればっかだ!!!!いえいえ補佐です
からに始まり、楽だから、父親だから、俺だからって誰も止めねえ
よ!!!!」

「そんな嫌なんですか？」

「なんか嫌だ」

「じゃあいいじゃないですか!!」

「つまりんの…」

「今ギルギアさんに似てました!!!!」

「ふん!!!!」

「いきなり頭吹っ飛ばしてどうしたんですか!!!!!!?さすがに
私も目の前でグロ映像（ぐちゃぐちゃの脳）は見たくないですけど
おお!!!!」

「なんとなしに言ったけど…あいつと似てるはかなり自分が許せな
くなる」

「だからって頭吹っ飛ばしますか？」

「時には必要だ」

「やっぱり先輩アホですね」

「自覚も他覚もしてるから大丈夫だ」

「全然大丈夫じゃないですよ」

「そういえば秋野…ん」

「??:…なんですか?」

「秋野んは彗を名前で呼ばないのか!?!?」

「ぶっ!!!!!!!!!!!!!!?」

「おお秋野ん良いリアクション…ナイスリアクションだ!!!!」

「安倍川先輩を名前で…ですか!?!?」

「そうそう秋野んは彗といつまでも名字で呼びあってるから気にな
って気になって」

「絶対無理です!! 多分無理です」

「いやいや行けるって秋野ん!!!!」私も飛影先輩ばかり名前で
呼んでたら誤解されちゃうかもなんで私も名前で呼んでいいですか
? 彗先輩♪(秋野声)」「

「……死ねえええええ!!!!!!」

「へぶ!!!!!!」

「なんなんですか!?! 今の私の声真似は!?!? 恐ろしいほど似てま
すよ!?!?!? しかもさっきからあきのんって呼んでるし!?!?!」

「おいその前に人の頭吹っ飛ばして言いたいことはそれだけかあ！
！？」

「はっ！知りませんよ！冗談は存在だけにしてください」

「おい魔王の頭を吹き飛ばした存在が何をいう」

「すぐ再生するじゃないですか！！！」

「痛いもんは痛いわあ！！！」

「笑える冗談ですね…さすが飛影先輩やばいです」

「おいこら…」

「ぼ…暴力反対です！アイアンクローも駄目です！！！」

「「彗先輩大好きです！！！！心の底から愛してます！！！！」（秋野
声）」

「恥ずかしいんですけ…」

「バカめ！！！！俺に勝てると思ったか！！！！？」

「ああああ安倍川先輩がいるような…」

「背後50メートル地点にいるのがわかったからな…今の声量なら
聞こえるかどうか微妙なとこだな」

「ひっ？はっ！？ふっ！！！へっ？！？」

「おお…秋野は混乱している」

「ギャアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「乙女の叫びとは思えなぶし」

「アアアアア……」

「人の頭粉碎してから逃げやがった…ってか魔王の頭を二回吹っ飛ばしやがった…恐ろしい乙女だな」

「何があったんだ？」

「おお彗！！！！」

「とりあえず18禁映像が見えたんだが（グロ的な意味で）」

「いやゝ遊んでたら頭を吹っ飛ばされた（グロ的な意味で）」

「遊びが怖えよ！！！！」

「面白かった…！また遊びに行こ」

「佐藤のやつも大変だな」

「いやいや俺のが大変だよ」

「自分で言うか！！！！！！？」

「え？駄目？」

「冗談は存在だけにしろ！！！」

「なにそれ流行り！！？」

「流行りでなくて事実だから一生続く」

「おいじめカッコ悪い！！！」

「残念だが飛影その言葉はお前だけには適用されない決まりだ」

「そんなバカな！！！？」

「いやほんとだ」

「まあいいや…適用されないなら…俺が苛めてもカッコ悪くならないんだな」

「いや…魔法禁止魔法禁止魔法禁止だああ！！！」

「彗は逃げ出した…しかし回り込まれた」

「速度がちげえ！！！」

「飛影は仲間を呼んだ…炎の巨人ABCが現れた」

「お前は仲間を呼んでいいレベルじゃねえええ！！！！！」

「炎の巨人が分身した…10体に増大した」

「おいこら！！！！死ぬって！！！！」

「逃げ道がない彗が仲間になりたそうな眼でみてきた」

「そりゃ見るよ！！！！」

「しかし、回り込まれた」

「何にだよ！！！！！！！！？」

「彗は恐怖で動けない」

「物理的に動けなくさせてるじゃねえか！！！！なんだこの炎の巨人共お！！！！」

「……ふむ、満足だ！！遊んだ遊んだ！！」

「俺とか俺でか聞かせろや」

「我は満足じゃ」

「あっギルギアっばい」

「……」

「いきなり自分の頭吹っ飛ばしてどうした！！！！？」

「チクショウ！！」

「あ……逃げやがった」

完

70話な記念（後書き）

こういう話もところどころ混ぜたいと思いますが……
あまりにもつまらなければ言ってください。
諦めます

クラス決め（前書き）

学長となった飛影

さてどうなるか：

ユニーク6000越えましたありがとうございます。

クラス決め

メリア魔法学校

学長が飛影になり次の日のこと

「走れ」

飛影が全校生徒の前で言った言葉である

飛影が仮とはいえ学長になったため火月、彗、秋野の転入はスムーズにすることができた

まず飛影はクラスを無くした

これからクラスを決めていくつもりである

反発

または辞めたいものがいても飛影は止めない

こんなレベルで卒業させることはありえないからだ

「まあ外周が約8キロだから……9時から17時の八時間で10周分……つまり80キロ走ったら体力だけならSクラス判断する。休憩はあり、各自好きなタイミングで身体を休めること……魔術は禁止だけど……魔法と魔力の使用はOK」

生徒達のは数は5,000人程

「周回カウントは不正の無いようにしとくぞ」

《炎舞・不正禁止》

5,000人を炎が包む

包んだのは一瞬だけで各生徒の右肩に0と炎がついた

慌てて消そうとするものもいるが熱は発していないし、もとより飛影の炎が簡単に消えることはない

「んで、火月はこれつけて」

飛影は最前列にいた火月にリストバンドを渡す

「…重い」

「一個五キロ…手足につけて」

計20キロの重りを装着する

「んじゃあ全員10周分完走するように！！…ちなみに最初に集団と距離離せば楽だぞ。集団のせいでペースが遅れることもないし…あと一番だったらなんかやる…はいスタート」

彗、秋野、火月は魔力を解放し身体能力の強化をして全速力で先頭から飛び出す

他の生徒は彗達に追い付こうとペースをあげるもの

自分のペースで走るもの

集団で一人が負担する空気抵抗を減らして体力消費を抑えようとするもの

と様々なものがいた

（結果が楽しみだ……とりあえず100人くらいクリアで充分かね）

飛影は全員スタートしたのを見て街へと移動する

「とりあえず、10周で80キロだろ？」

「そうですね」

先頭を走る三人は最初に飛ばして集団から充分に離れたあと有酸素運動に切り替える

「八時間だから時速10キロで完走か」

「そうだな！」

喋りながら走れるほどの余裕が全然ある

火月も重りをつけながらも彗達について行けている

「昼で一時間は休憩したいし：時速12キロくらいで走れば完走だな」

「飛影先輩にしては緩いですね」

少しだけペースを上げる

時速は12キロほど

少しだけ早いペースで速度を一定に維持する

彗が後ろを確認するとちらほらと後続が見える

「とりあえずこのペース維持でいいのか？」

恐らくは訓練のためだが両手足に5キロの重りをつけている火月

開始最初だからか火月の表情は余裕である

「そうだな：火月は辛かったら言っている。このテストは色々と抜け道あるからな：」

飛影は手を貸しちゃ駄目だとも

妨害だめとも言っていない

協力してポイントを上げたり

他の者を蹴落としてポイントを下げたりと可能である

火月が辛くなったら彗が背負うことも可能なのだ

「このペースで80キロなら楽勝だぜ！！！」

走りながら前方宙返りを行う火月

余裕である

「むしろ楽すぎてこまっちまうよ！」

後ろ向きに走行したりと暇を潰す火月

飛影との訓練で体力付けはかなりの重点を置いている

「緩いけど楽か？」

80キロはさすがに長い

時間制限が緩いと考えていた

「兄ちゃんはひでえぜ！！！ナイフを背中に突きつけて私の全速力と同じ速さでぴったり着いてきて少しでも速度が落ちると、刺さりそうになって痛いから速度上げての繰り返し：ぶっ倒れるまで続くんだ」

飛影の訓練を思い出した火月は顔を真っ青にする

「御愁傷様です」

「どんまい！」

完全に他人事

そして彗はいきなり悟った

今はちょうど外周の半分まできたあたりである

「……」

彗は走りながら思考する

「？」

その様子を不思議に思いながら止まることはしない秋野と火月

「一つ聞く!!」

すでに四キロは走っているが息一つ乱れておらず汗すらかいていない三人だったが

彗は額に汗をかいていた

疲れではない冷や汗である

「あの飛影が普通に走るだけにすると思うか？」

彗のその一声

火月と秋野に冷や汗をかかせるには充分な一撃であった

「た……確かに盲点でした!!!!」

「兄ちゃんなら何かやる!」

三人して飛影の言ったことを思い出す

それでも速度は下がっておらず逆に上がっている

『俺からは妨害しないなんて言っていない……』

言っていないということはやる

それが三人の飛影への共通の認識である

「……噂をすれば……ってやつか!!!!」

前方には人影

「いやいや…あれシャレじゃないですよ!!!!」

人影はリタであった

「いやリタさんなら!!!!」

淡い期待を込めて走り抜けようと速度を速めるが

「こんにちは」

《キュリクレイ・光弾》

リタの背後に無数の光の弾が浮かび上がる

彗達が急停止すると同時に光弾が進行方向に突き刺さる

「えーとリタ：いやリタさん？リタ様？通しては…」

「飛影の命令です。絶対に通すなど」

飛影の完璧な部下を指すリタ

度が過ぎたものは聞かないが

命令に従っているということは度が過ぎていない

「リタ先輩手加減は……してくれますか？」

チームプレーで乗り切ることが目的ならばリタも手加減するし、クリアできるようにしているはずだが

「命は保証します」

ニツコリと女神の笑み

彗が僅かに前進しようとした瞬間

《神の翼》

彗の喉元に神の翼が伸びていた

「通すことはできません」

再び笑顔

その笑顔は女神の笑みだが恐怖しか感じる事ができない

⋮

彗はゆつくりと後ろを向き秋野と火月を見て頷く

秋野と火月もゆつくりと頷いて

全力で逃げる

「正しい判断です。飛影の言ったことを思い出せばクリアは可能ですから頑張ってください」

リタは脱兎の如くかなり割と本気で全力で逃げている三人の後ろ姿に向けて呟く

入れ替わりに生徒達が接近する

「さて：殺さないように頑張りましょうかね」

《キュリクレイ・光弾》

リタの背後が光の弾で埋め尽くされる

「意味わからん!!!!!!」

「無茶苦茶です!!!!!!!!!!」

「ありえねえぞ!!!!!!!!!!」

とりあえずリタから二キロほど離れた所でようやく停止し各々叫びたかったことを叫ぶ

慧が時計台を見ると開始から50分経過していて

走った距離は半周の4キロ

と逃走距離二キロ

「無駄に体力使ったから作成会議だな」

焦っても仕方ないと慧はその場に草が生い茂る地べたに座る

それに習って秋野と火月も座り込む

「とりあえずまとめるか：外周10周を走るのが目標で時間は8時間：半周走った所にはリタがいて通行止め」

逆からいってもリタには会うことになる

ゆっくりと自分のペースで走っている生徒がたまに通るが慧達を見て疑問を浮かべる

溜め息を吐く秋野

「無理すぎです」

例えば5,000人が通ろうとしてもリタが相手では誰一人通ることができない

「……とりあえず各自さっきまでのペースの倍でも大丈夫か？」

「行けますよ」

「楽勝!!!」

「よし」

彗自体も楽勝であり

これで完走するならば四時間もあれば大丈夫になった

残り時間は7時間10分

作戦を考える時間を二時間とっても楽勝である

「飛影のことだから抜け道は必ずある」

「ですね」

飛影はこういうゲームでは理不尽は行わない

つまり考えれば必ず攻略できるのである

「作戦会議だ!!!」

『おお！！！』

クラス決め（後書き）

一話完結にしようかと思いましたら

飛影君が暴走しました…私の不手際です

探しモノ（前書き）

新キャラ登場と抜け道発見です

探しモノ

慧達が必死に抜け道を探している時

飛影は街をぶらついていた

久しぶりに戻ったとか祭りの時でなければ騒動には発展せずに

軽い挨拶をしたり

写真をとったり

子供から何かをプレゼントされたり

そのぐらいである

飛影は街をぶらついているが目的はある

メリア国の図書館をしらみ潰しに訪れていた

「……いないな」

飛影は世界で一番大きく一番蔵書量が多い中央図書館から出て一つ溜め息を吐く

これで飛影が回った図書館は4箇所

あとの二ヶ所は城と学校である

(最初に学校から探せばよかった)

二度手間

とりあえずだが飛影は二度手間になることを避け城に向かう

城にある図書館は一般開放されている

中央図書館には劣り蔵書量も劣るが城の図書館にしかない蔵書もある

学校の図書館もあまり公開できない魔術の蔵書が揃っており飛影の
探し物が見つかる可能性が高い

日はまだ完全に昇りきっておらず

飛影は焦らずにゆっくりと歩く

魔王や絶対強者級の特徴で急ぐ必要がなければ基本的にゆっくりと
移動する

魔力が高すぎて不老になるため時間が大量にあり時間を無駄に早く
使おうとは思わないからだ

飛影はてきとうな店で食べ歩きできる飯を買って食べながら歩く

空を見ると青天が広がっていた

(シーレイじゃないけど…日向ぼっこして寝たい)

現在の魔界の季節は春

太陽の光が気持ちいい

そんなこんなで飛影はぶらりと城へと帰宅する

目指すは図書館

「相変わらず人がいるな…」

中央図書館には負けるが城に入ることができる図書館はそれなりの人気がある

図書館独特の静寂な空気

飛影は周囲を見渡す

「ああいたいた」

飛影は学校の図書館には行かずにすんだことと見つけたことに安堵しながらその方に向かう

図書館では人が多いこともあり、本を探しに席を外したりも多いがそれはわかりやすかった

ある机の一角に山があった

本の山である

自分の席を囲むように本が山を築いていた

一発で分かる

その山の近くには他に人がいないことも見分けやすさを増長させている

飛影はその山の反対に座り山をずらす

山の中にいたのは一人の少女であった

銀髪に紫の瞳

眼鏡をかけている

髪は長いのか帽子を被って中に入れているようだが横髪が時折視界に入り耳にかける

そんな少女だが自分の領域が崩されて飛影を一睨みするがすぐに読書に戻る

「よっす…コトハ久しぶり」

図書館なので声を抑える

「そうね…」

「元気？」

「そうね…」

「……」

コトハという少女は返事はするが読書に完全に集中している

この少女は杏とは違く秀才である

杏は1を聞いて独自の理論に置き換えて100を作る

コトハは1から10まで聞いて法則性を見つけ出し100を作る

どっちが優秀といえは杏であるが

コトハも人の理は外れている

飛影と同年代の少女だが56歳

ある日なんとなくで不老の法則を見つけ出し不老になった秀才

「相変わらず本の虫やってるな」

「そうね…」

相変わらず読書に集中しているコトハ

速読術を身に付けているため文字だらけの少し大きい本を一ページ
十秒ほどでめくる

本気を出せば一冊の小説程度の本は20秒で読み終わる

ただ急いでも特はなくゆっくりと読んでいるのだ

「さすがに傷付くぞ」

「ふん…」

応対の言葉が変わった

しかし読書に集中しているのは変わらない

「…頼みがあるんだけど」

飛影は笑いかける

コトハを確保できなければ学校が危うくなる

飛影のその一言にコトハは溜め息を吐いて本を一瞬でページを捲り目を通す

それだけで本の内容はコトハの記憶になる

「……ちよつと前に姿が見えなくなったと思えば…いきなり頼みねえ」

読書を終えて本を閉じただけとはいえ、ようやく話を聞く態度になったコトハ

飛影の目を見て心底嫌そうな顔で溜め息を吐く

「いやゝ困ったことになってな」

「ひくんで困るって私の手に負えるものじゃないわ」

不老ではあるがコトハは絶対強者級ではない

飛影達の魔力が高すぎて不老な身体になるのは裏道

壁があるのにも関わらず強引に力付くで壁をぶち壊しているのである

コトハは壁を壊すのではなく壁を溶かしたのだ

両方とも強引にはあるがコトハはまだ法則を満たしているためマシである

知識はあっても絶対強者級ではないそれがコトハである

実力的にはマリエッタより少し強い程度

だから争いごとならコトハの出番はない

「知識が必要なんだよ」

それは飛影もわかっていることである

大事なのは知識だ

「俺さ学校の学長になったんだよ」

「ああ…あの紛い物の魔法学校？」

魔法学校という名だが魔術を教えていたメリア魔法学校をコトハは

紛い物と呼ぶ

「そうそう…」

「ひくくんも地に落ちたわね」

哀れむような視線

ちなみにひくくんというのは飛影の呼び名である

ひはそのまま火を

くはなんか風っぽい

それでひくくんである

コトハは基本的にあだ名でしか呼ばないのが特徴である

「とりあえず、魔術師は全員殺したから魔法の知識を正確に持つて
るコトハが必要なんだよ」

「さらっと凄いこと言っただわね…」

あっけらかんと皆殺した発言をする飛影

「けど私はひくくんがいれば充分だと思っただけど」

飛影は魔王である

コトハも知識人として魔法の知識は大量に記憶しているがそれでも

王に勝てるとは思っていない

「ぶっちゃけると俺さ、魔王だけど最低限の知識だけであとは感覚なんだよ」

「……凄いぶっちゃたわね」

飛影は魔法の正しい知識を最低限持っている

そして後は経験と感覚で魔法の修得に魔法の構築を行う

絶対強者級の特徴である

半分以上は生まれた時にすでに魔法を使える

飛影の炎舞も生まれた時にすでに使えた

ヘリオトロープと風華も感覚だけで使えるようになった

自分自身の感覚で魔法を使えるようになるのが魔法の特徴であるが

魔法という概念を学ばなければ修得することも難しい

一対一ならばその人物にあった魔法の感覚を飛影は理解し導くことが可能だが

大多数を教えることは飛影は無理である

「だから頼む…手伝ってくれ」

「まあひくんに言われたら頷くけどさ」

すぐに頷くコトハ

「いいの？」

「ひくくんには借りがあるからこういう時に返さないと貯まってくばかりよ」

微笑むコトハに安堵する飛影

「助かったよ……とりあえず明日からでいいか？」

「いいわよ」

これも即答である

「…どうせやることないもの」

暇人な知識人

それがコトハである

「……ようやくわかった」

作戦会議から30分後

彗が抜け道を発見する

二人に待機するように言って彗は走り去る

10分後に戻ってくると彗の炎の数字が0から1になっていた

「どうやったんです？」

「すげえ簡単で盲点だった」

自分の考えがあっていたことに安心する彗

「あいつ…一言も外周10周を走れって言っていない」

『……』

秋野と火月が黙りこみ思い出す

「ああ！！！！外周10周分って言ってただけです！！！！」

「兄ちゃん80キロ走れとしか言ってねえ！！！！」

頭を抱える二人

彗はもしかと思いい街の方に向かって往復二キロ走ったことで

外周一周分の8キロになり炎がカウントしたのだ

「街に向かうぞ！」

『おおおお！！！！』

思ったよりも早く抜け道を発見したが

飛影に文句を言いたい一心で犇たちは全力で走る

80キロを完走したのは三時間後であった

探しモノ（後書き）

そうです。

10周を走れとは言っていないんですよ。
屁理屈ですね

学力？試験（前書き）

学力試験です

この話は悩みました

学力？試験

「うゝむ…」

学長室

飛影は試験の結果を見て頭を抱えていた

80キロ走

完走者は三人

かなりというか物凄く芳しくない結果である

飛影の意図に気付かずにリタを相手にし気絶させられたものや諦めた者が大多数

意図に気付いたが40キロを越えなかったものが残りをしめていた

「なに見てるの…？」

次の試験は学力試験のためすでに飛影が作成したテストを科目別に分けているコトハ

手を止めて伺う

「体力試験の結果」

「ちょっと見せて」

さささっと科目別に分け終わり飛影から結果の紙を借りる

「…80キロ走…普通は無理よ。私も無理よ」

普通の学生に八時間で80キロは厳しいところである

しかも、それに加え飛影の意図に気付けなければならない

コトハは読書しかしていないため体力は皆無である

「でも、魔力は使っているし、魔法も使っているんだぜ？」

「それなら簡単ね…」

魔力による肉体強化

その効果は普通と普通ではないを分けるのに十分な効果を発揮する

魔力で肉体強化を行えば80キロは完走できるレベルである

にも関わらず完走できていないのは魔力による肉体強化を知らないからである

それか知っていてもできないか

どちらにしてもレベルの低さは酷いものである

「…ひくくん一つ聞きたいけど…5,000人？」

「何が？」

「生徒」

「そうだよ」

コトハは顔を青ざめる

「：私にそんな人数を一人で教えろと：」

絶対に無理だと飛影の胸ぐらを掴んで上下に揺らす

どうでもいいことだがコトハは眼鏡を外している

本を読むとき以外はかけないのだ

理由は本を読むときに眼鏡をかけると知的に見えるからである

「いや、昔から魔法学校って言われてるけど本当に魔法の授業を受けれるのは多くて20人くらいかな：あとは週3でやる魔法についての正しい知識を大フロアで講義する。んでその講義も人数制限あるから大丈夫さ」

「20人？：そんなに少ないの？」

「いや多いだろ：誰にでも使える魔術じゃなくて使えるやつしか使えない魔法だぜ」

基本的に魔法の修得率は馬鹿みたいに低い

そのため魔法の授業だけは学生の時間が無駄にならないようにテストを行い適性が無ければ授業を選択すらできない

さらに20人いても最終的に魔法を覚えることができるのは一人か二人いればマシである

「……それもそうね……なら私は講義と授業を受け持てばいいの？」

「そうそう、まあ基本的に授業の方は最初は忙しいけど後は自主練みたいな感じだから」

魔法の構築には当然知識も必要だが

知識を覚えたらあとはひらめきと感覚と集中など外部から干渉できることは少なくなる

「思ったより楽でよかったわ」

「そこまで重荷は背負わさないよ、さて…学力試験だ」

飛影は笑みを浮かべる

数ある教室の一室

クラスは無いのできとうに座れという指示通りに生徒達はきとうに座っていた

彗と秋野と火月も同じ教室の角を陣取っていた

「ドーン!!!!!!!!!!」

ドアが吹き飛んだ

かなりの勢いで吹き飛ぶドア

生徒達はいきなりすることに啞然とし悲鳴をあげるものもいた

彗達は犯人の予想も犯行の理由も知っているので溜め息を吐く

犯人飛影

理由そこにドアがあったから

「テストを配るぞ」

何事もなかったかのように飛影は教壇に立つ

「またやらかした!!!! ひくくんドアは蹴破るものじゃないわよ!」

そして彗達も初対面な少女のコトハも入ってくる

「も〜!」

頭を抱えているコトハ

彗と秋野はそれを見て同情できてしまう

《クルーズ》

コトハは魔法を発動する

地面に横たわりくの字に折れ曲がったドアが再び吹き飛んだ

逆再生のように同じ勢いで元の位置にそして傷が修復

ドアが元通りになる

「よし…では配るぞ」

《風華・テスト配布》

風に乗りテストが全科目分全員の机の上に乗る

「ルールは超簡単…解けばいい。休憩は無し科目は三科目…12時まで…カンニングが見つかる〓最下位ね」

《炎舞・孤火》

教壇の上に赤い炎の狐が造られる

「カンニング防止のため、こいつに見張ってもらう」

炎でできた狐は愛らしい外見で後ろ脚で耳を掻いている

女子は可愛いとぼやいたりしているが彗と秋野はそんな感情が一切
わかない

「カンニング発見から一分後に俺が来るシステムで、こいつらはカンニング者を見つけると問答無用で気絶させます。そのため気絶しているもの、戦っているものをカンニング者と見なす」

「んじゃ俺が教室を出たらスタート。他のクラスは狐が欠伸をしたらスタートだ」

飛影は風華の風で全教室に伝えていた

教室から出ようとする飛影

脚が再び浮き

「てい！」

コトハが投げた辞書が飛影の後頭部を直撃する

「痛いぞ…」

「私が面倒よ！」

ガミガミと怒られて飛影は大人しく手でドアを開けて出ていく

「それじゃ…スタート」

閉め際にコトハが呟いた

一切に紙を捲る音が教室に木霊する

彗も秋野も学力は優秀で魔界の学校の授業レベルを確認もかねての

ものである

『……』

曄も秋野も火月も動きが止まる

テスト用紙を捲るとそこには英語のようなよくわからない全く理解不能な言語で構成されている問題が並んでいた

(忘れてたああ!!!! 普通に会話してたから文字も読めるもんだと思ってたああ!!!! エリアが字が読めないって言ってたのにいい!!!!!)

ぬがあと静かに頭を抱える曄

横目で秋野を見ると同じように蠢いている

それと比べ火月は余裕の表情で腕を組んでいる

(ああそうか…火月は飛影の妹だから文字の勉強もさせられてたのか?)

しかし、一向に動きがない火月

(?)

「zzzz」

(寝てるしいい!!!!!!)

当然ながら解るわけがない火月は早々にリタイアする

悩む彗

今回の抜け道は簡単に発見できた

しかし通れる自信があまりないのも現状である

今回は超がつくほど単純で難解である

しかし、やらなければ学力は酷い成績になる

確実に飛影から

「ウハハハ！！！！いつも常識常識って言ってるけど彗は常識無いんだな！！！！」

と笑われるのは目に見えている

彗は狐火を睨む

今回は飛影の魔法の炎である狐火を一分以内に消せばクリアである

愛くるしくさらに全長50センチほどの狐火

それを破壊するのに普通は躊躇するが彗は躊躇しない

理由としては

下手したら瞬殺されるからである

見かけはどうであれ絶対強者級の魔法

辛いものがある

冷静に作戦を練るために彗はテストをやってます的な雰囲気を出しながら狐火を観察する

(……試してみるか)

《限界突破・魔力探知強化》

彗は魔法を発動し、眼を進化させる

(よし)

魔力の探知ができるように進化した眼は狐火の魔力の大きさが現れていた

そして彗はその場につく

(俺より普通に強い)

魔力でしか動いてない

所詮魔法の身体の狐火

魔力を確認すると実に彗の1.3倍はある

魔法を解除して狐火の動きに注目することにした彗

法則性を見つけて先手を取れば楽である

20分ほど眺めていると法則性を掴んだ彗

まず欠伸をする

そして秋野、彗、火月と見て生徒一人一人を順番に見て一周したら
また欠伸

何度も確認して確信に変わった

(魔力の高い順に見てるのか…)

法則性を見つけたが一对一じゃ勝ち目が薄い

秋野と火月にも加勢はしてほしいが火月は寝ていて秋野も机に突っ
伏している

彗が何気なく外を見ると向かいの校舎の教室で巨大な狐火が生徒を
襲っていた

(……でっかくなるのかよ!!!!!!)

更に勝ち目が薄くなってしまった

先手必勝一撃必殺で勝つしか手はない

彗は深呼吸の後に魔力を解放する

ビクッと秋野も火月も起き上がる

彗の眼を見て秋野も火月も意図を察して魔力を解放

《限界突破・全身フル強化》

欠伸をして秋野、彗、火月を順番に見て次の生徒を見た瞬間に彗は飛び出す

一瞬で距離を詰めると彗は全力で拳を振るう

軽く避けて彗の背後に移動後ろ足で彗を吹き飛ばそうとする

その前に火月が接近し蹴りを放つ

寸前に炎を放った狐火はその勢いで回避

《集固》

秋野がそれを見逃さずに狐火の周囲の空気を固め動きを遅める

狐火自体が秋野より魔力が高いため動きを止めることはできないが動きを遅めることなら可能である

火月の外した蹴りは次の動作に繋がりに連撃として放った蹴りの二回目
目が狐火を直撃する

《限界突破・吸血鬼の爪》

吹き飛んだ先は魔法を構築し吸血鬼の爪モドキが生えた彗の手だった

学長室

「どうだった？」

結果は分かっていたが飛影の笑顔を見ると聞かずにはいられなかったコトハ

「無事クリア：上手く法則を見つけて連携したみたいだ」

狐火が撃破されたことが飛影にとって本当に嬉しいことで飛影はニヤニヤと笑みが絶えない

「じゃあひくんの狙い通りに実力と少しはこの生徒と親しくなっただけだね」

飛影の狙い

彗達は見学した時のせいでかなり浮いていた

飛影にとっては普通の学校生活はどうでもいいのだが

彗達は普通に学校生活を楽しむ歳だ

そのためこのクラス決めは基本的に飛影が彗達を馴染ませるという目的も含んでいる

まさかの体力テストは三人ゴールで他の生徒と話しかけておらず飛影の狙いは外れた

そのため、学力テストでは問題が理解できないように人間界の言語で翻訳はしなかった

問題も難易度は高いもののため必然的に協力関係になる

狐火はクラス全員から襲われたらすぐに消滅するようになってる

「しかしひくくんの頭の中はどうなってるか気になるわね」

学力テストの作戦は全て今日決めたものだ

どうやってそんなにアイデアが出てくるか…知識人のコトハとしては頭を解剖してみたくなる

「ウハハハ!! さてはて…次の試験は何にしようかな」

当然ながら体力と学力だけで終わりではない

「そういえば…私今日から来る意味あった?」

全て飛影が行っておりやったことは科目別に分けることとドアの修復だけである

「午後から忙しくなるぜ」

「帰る!!!!」

飛影のその忙しいと言った時の笑顔

飛影をよく知るものなら誰もが捲き込まれるのを拒否する類いの笑

顔であつた

コトハもそれを知っていて逃げようとするが手をがっしりと掴まれて逃げることは不可能である

「こっから答えあわせがあるんだよ！15,000枚を教師全員で分けるから一人100枚だから」

「いや！！！！私ひくくんみたいに体力ないわ！！！！いやあ！助けてー！慈悲を！！どうか慈悲をおおお！！！」

結局逃げ切れず100枚ほどの答案用紙を答えあわせし生徒ごとにまとめた

終わったところにはコトハは机に突っ伏していて

死ぬこれ死ぬ

とぼやいていた

あまりにも酷い状況に飛影はコトハと一緒に美味しい料理を食べに行きなんとか復活することができたコトハ

ついでに激レアな古書ももらい

「気分はハッピー！！！！身体はバッド！！！！」

と叫んでいたという

学力？試験（後書き）

気分はハッピー！身体はバッド！

初めは解答という解答がない飛影が面白いと思った解答が正答になる学力試験にしようかと思ってたんですけど

書いてる途中で飛影らしいけど学力試験じゃないと気付いて書き直し更新遅れました

情報屋（前書き）

久々アンジェレネ

アンジェレネの魔法の具体的なチートな話になります

情報屋

「うゝん…」

学力試験の次の日

学校は休日である

パンにスープにサラダという城の朝食とはとても思えない朝食

王族も使用人も関係なく全員がその朝食である

食堂も一つしかなくご飯は階級など全く関係ないものとして食堂で食事をする

彗が最初の朝食時に

「お城の食事ってもっとイメージ的に豪華なものだと思ってたけど……」

と呟いた

「無駄じゃん」

「無駄な経費は削減じゃ」

「三食定量の栄養がとれば充分ですよ」

と魔王、国王、王女に即答された

基本的にメリアが世界一の大国になったことや国民からの支持も高いのはこのような点もある

城が使用できるお金は国民からの税金である

そのため無駄にならないようにと全てのことに無駄を省略している
彗としても庶民的なご飯でありテーブルマナーに気を使う必要がないため楽でありその日の夕飯に煮物と白米がでてきた瞬間に安堵した

「んゝ…」

飛影の屋敷の面子や王族や使用人での少し騒がしい朝食時間

飛影は唸っていた

一番早く食べ終わり食器を炎舞と風華でキレイにして唸っていた

非常に難しい顔をしている

「何悩んでいるの？」

夜行性とイメージが強い吸血鬼でいながら早寝早起きができるリーベはパンをかじりながら隣で悩んでいる飛影に話しかける

「困った問題が起きてな…どうしようかと」

「何か手伝えることはあるかしら？」

基本的に暇人なりーべは飛影からお金をもらって酒を飲みに行くか寝ているかのどちらかである

「リーべは目立つからダメっぽい」

「あら残念」

暇が潰せないと残念そうなりーべの頭を撫でて飛影は意を決して立ち上がる

「アンジェレネ今日暇？」

食い気より眠気を優先し朝食を食べないシーレイから朝食をもらって勢いよく食べているアンジェレネが顔をあげる

「ふぁいひふぁでふひょ！！！」

口一杯に食べ物が含まれており何を喋っているかはわからない

「なんだって？」

聞き返す飛影

「ふぁふぁふぁいひひぁでふひょ！！！」

再び解読が至難な言語で返事をされる

「意味わかんねえよ！！！」

飛影が突っ込みを入れるがアンジェレネの食べる速度は変わらない

リスのように頬を膨らませている

「…貴女には神として自覚はないんですか…?」

そんな神とは思えぬ態度に飛影を困らせていることに苛立ったリタ

席はアンジェレネの隣に座っている

そんなリタの冷たい声色とこっそりと見せられる金鎚

「っゝ!!!!!!??」

一瞬で口の中のモノを飲み込み水で胃袋に落とす

「めっちゃ暇です!! 私めっちゃ暇ですよ!!!!!!」

リタならばあのまま頭部粉碎もあり得た

「なんですか!!!!? デートですか!!!!? 超賛成ですよ!!!!」

それに対する恐怖と飛影からの誘いでハイテンションになるアンジェレネ

「…うん、まあ隠密にやりたいから二人だし、考えようによってはデー」

「いやっふうう!!!!」

デーと聞いただけでテンションが最高潮になり両手を挙げて喜びを

表現するアンジェレネ

そして一瞬の内にリタはアンジェレネの目の前の食器をどかし

アンジェレネの隣で寝ていたはずのシーレイから裏拳という一撃が容赦なくアンジェレネの後頭部に直撃する

テーブルにそのまま頭をぶつけそうだったアンジェレネの頭をリタは支える

「本当に…うるさい…殺す…」

かなりのぶちギレモードのシーレイ

アンジェレネは今の一撃で気絶している

今までの鬱憤が溜まっていたシーレイは巨大な鍵を取り出し追加攻撃しようとする

「さすがにシャレじゃすまねえええ!!!」

「っシーレイ!」

飛影とリタの二人がかりでシーレイを抑える

「…リタ…怒る…恐い…部屋…寝る」

般若なリタに追いかけられたことが未だにトラウマとして残っているシーレイ

誰でも起きる目覚まし方法

飛影は魔力を解放し全力で殺気と敵意を放つ

「…っ!!?」

と同時にアンジェレネは起き上がり殺気を放った敵の首を跳ねるために一瞬で接近

寝起きとは思えない全く無駄のない動き

アンジェレネが殺気を放った敵が飛影だと認識したのは攻撃をギリギリ防がれた時である

「あ…飛影さんおはようございます」

「……よし、起きたな」

間一髪

というよりも的確に急所狙ってくるとは想定しておらずアンジェレネのダガーが皮一枚切り裂いていた

「殺気だすなんて酷いですよお!!!!」

あれだけの起こされかたをされれば誰でも何をされたか気付く

寝ていても反射的に敵を殺してから起きることができなければ絶対強者級としては失格である

「殺されかけた俺に言うことかあ！」

飛影も同じ状況なら同じことをしただろうがひとまずifの話は置いておく

「……てへ♪」

可愛らしく笑うアンジェレネ

「ふん!!!!!!」

一瞬で接近した飛影のデコピンが直撃する

「ぎゃふ!!!!!!」

大砲のような音と共にアンジェレネが50メートル程吹き飛んでいく

地面につくと同時にアンジェレネは額を抑えながらゴロゴロと転がる

「ひたいたい!!!!!! ひたいたい!!!!!!」

ただのデコピンでなく攻撃力最強のデコピンである

今のを普通の人間に当てれば木っ端微塵

木造建築に当てれば木っ端微塵

鉄造建築に当てれば木っ端微塵

そんな一撃を泣きそうな声で痛い!と地面を転がる程度で済んでいる

アンジェレネも充分におかしい

「額がめっちゃ痛いです!!!!絶対骨折れましたあ!!!!」

痛みが引いてきたため、アンジェレネは立ち上がり飛影に接近

「見てください!!!!額がめっちゃいたいです」

デコピンが直撃した箇所が赤くなっていた

「あゝ結構腫れてんな」

と飛影は腫れている部分を叩く

「へニホリンリンクウ!!!!!!」

奇声をあげながら再び転がるアンジェレネ

「リアクション最高!!!!」

「酷いですよお!!!!ってここどこですか!?!?」

今度は軽く叩いたため復活が早い

そしてようやく今いる場所に疑問を抱く

少し遠く離れた所に仰々しいというより神であるアンジェレネなら
感覚で不吉な悪意の塊の場所だと気付く

見た目も雰囲気もそれは

「犯罪者の収容所」

「ああやっぱりですか」

ドーム上の建物

俗に言う監獄

メリアは絶対に脱出が不可能な監獄でも世界一である

そのため国の外れの外れの外れにひっそりと監獄が建てられている

監獄には魔王である飛影ですら入ることができない

外部を完全にシャットダウンしておりここで働く者や囚人は入った
が最後

生涯出ることは叶わない

犯罪者を収容する場合も決まりがある

連続して5個の門があり

収容するさいは最初の門を潜らせることで終了する

時間内に門を全て潜らなければ猛毒猛火など様々な死に方を体験で
きる

決まりごととして飛影ですら入ることができない

そのためのアンジェレネである

「ちょっと中に話したいやつがいてさ…頼む」

「うーん…まあいいですけど、終わったら買い物付き合ってください」

交換条件

交換の対等な条件になっているかは飛影に判断できないが頷く

《アンビリルワールド》

そして魔法を発動する

アンジェレネは飛影の手を引いて自分の世界に招き入れる

着いた先は一面花畑の世界

「おお」

世界を創造できるということは生物も創造できる

アンジェレネは植物以外の生物を創造する気はなくこのようになっている

世界は境界でわかれており他にも大量のマンガがある小世界やぐぐたらするための全てが揃っている世界や戦いのための世界などが存在する

「とりあえず中入ればいいんですか？」

「そうだな…とりあえず…ってか外の様子見れなかったっけ？」

普通の世界とあまり変わらない

しかしアンジェレネが少し眼を瞑る

「わお！」

すると一瞬にして風景が外の世界を半透明に映した

「これで座標も狂わずに移動できますよ」

飛影やギルギアなどの完全バトル用ではない絶対強者級の魔法

「すっげえ」

思わず飛影は笑ってしまう

五つの門を言葉通りにすり抜ける

中は活発な空気に包まれているように見える

人はよくわからない作業を行っている者と食事や掃除を行っている者の二種類いた

意味のわからない作業

例えば一人がペットボトルの蓋を開け、次の者がペットボトルの蓋を締めるなどを繰返しやらせることで精神を弱める

そして意味のある作業を行わせることで効率の向上と脱獄の意識を薄くさせることが目的である

「思ったより暗くないですね」

人も者も所詮は風景で全て二人をすり抜ける

「ここはまだ上層部だからな：下は外に野放しできない連中ばかり」

この収容所には格差がある

犯罪のランクである

上にいるのはせいぜい100人殺した程度だが

下にいるのは町を消滅させたり国家転覆を狙ったりした者たちである

飛影が用があるのは下である

「さて：困った」

「なにがですかあ？」

「下への行き方がわからん」

内部の情報は外部に伝わらない

さらに上と下は明確に分けられている

噂では五つの門ではなく違うルートから収容させられるなど

「とりあえず下ですか？」

アンジェレネがパチンと指を鳴らす

風景が上ってゆく

「とりあえず地下500メートルくらいです」

「わぁお!!」

何気なしに言うアンジェレネ

飛影でも驚きの連続である

そしてさらに

「とりあえず…でこれか…」

飛影の目の前の牢屋に繋がれている人物

それが飛影の捜していた人物である

神の強運

てきと〜が知らずに適当になる

アンジェレネは魔法を解除すると飛影達は元の世界に戻る

「よう…久しぶりだな」

飛影の捜していた人物はいきなり表れた飛影とアンジェレネに一瞬驚いたが

飛影と認識するとニヤリと笑う

「ケヒヤヒヤ！！！！久しぶりだな…魔王、俺をここにぶちこませた原因じゃねえか」

男は少し前にメリアで国家転覆をやるうとして飛影に潰された男である

その男は有能で殺すには惜しいということで生かされて収容された未遂だったから生かされたが

僅かでも実行すれば命は無かったのは当然である

アンジェレネは男の下品な笑いに嫌悪感を抱きダガーを構える

それを飛影は手で制す

「それなりに強い武術家を20人ほど教えろ」

男は情報屋である

情報だけで国家転覆を狙った男だ

「ケヒャヒャ！あんたのが詳しいと思うんだがね！！」

「知らないから聞いている…返事はイエスかノー」

飛影の眼がわずかに鋭くなる

「ケヒャ！イエスだイエス！！！教えるぜ…だが交換条件だ」

男はチャンスだと考える

情報を渡す代わりに脱出の手引きを頼む

魔王ならば脱出することも簡単にできる

それを狙っていた男だが

「交換条件？」

飛影の冷めた眼を見て一瞬で後悔する

「知ってるか？条件ってのは対等じゃなきゃ意味ないぜ」

圧力

男は一瞬で七回ほど死ぬことがイメージできた

「……ケヒャヒャ！！！教える教える！条件なんて無し無償っていいことだ！！！！」

一瞬で手のひらをかえす男

アンジェレネが冷めた眼で見るが気にしない

一通り情報を聞くと飛影はポケットから酒を取り出す

「礼だ」

投げ渡す飛影

酒などこの場所で吞めるはずもなく男にとってそれは極上の礼だった

「毎度おおきに！！！」

《アンビリルワールド》

アンジェレネはこんな場所に長居はしたくないとすぐに魔法を発動する

「さて…これで教師はなんとかなるな」

学校の人材を見てみるとマトモに近接戦を教えられるものがいなかった

そのため、指導者の情報を貰いにきたのだ

「さあさあ！！！！飛影さん！！！！デートです！！！！」

出た瞬間に一気にテンションが最高潮に戻るアンジェレネ

「…あいよ」

買い物に付き合うから一応はデートである

アンジェレネは結局色気より食い気で服も少しは見たが基本的に飯屋を見つけると入って食べを繰返していた

「……さすがの俺も驚いた」

飯屋を20件回ったあとに飛影が言った感想である

情報屋（後書き）

次の話はどうでしょうか：

とりあえずメリア魔法学校の休みは土日のように週二日に設定して
るため

この話の次の日も休日なので
ちよつと休憩話でも作成しようかと考えています

茶原を探して（前書き）

休日話で

飛影とレインです

茶原を探して

休日

雲ひとつない良い天気

港の方には青い海が広がり

空は青空が見えて

飛影の隣には青い顔があった

真っ青と言っても良いレベルである

(ど…どどどどどなっただただたたり)

心の中でも壮絶な緊張に伴い焦っているレイン

先輩のコレットと同室のレイン

部屋にある紅茶の茶葉が切れてしまい買い出しを任せられた

本当はコレットも行くつもりであったが急遽仕事の用事が入り

メリア育ちではない片田舎からでてきたレインには場所がわからない

そこに偶然通りがかった飛影

コレットは丁度いいとレインに飛影という存在に慣れさせるためと道案内に飛影に頼んでみると二つ返事でOK

コレットとしても道に迷わせることが無くなり

飛影としても暇が潰れてラッキー

というところであり

そして現在城下町

私服に身を包んでいるレインの隣にいつも通りにてきとうな服に黒のコートを着ただけの飛影

先程から会話はない

飛影が何か話しかけようとするとさらに顔を青くする

気絶しないだけまだマシであるが隣を歩いている二人の距離は一メートル

これは隣を歩いているというのだろうか

と飛影は疑問に思いながら歩いていく

（まま…まままおうさまが隣に！！！！隣にいるうう！！！！一緒に歩いているうう！！！！）

片田舎からでてきたメリア国に憧れていたレイン

小さな頃からの夢として城で働きたいと思ってようやく夢が実現した
そして先輩であるコレットに教育してもらい一生懸命に仕事をこな
すレイン

メリア国で働きたいのが夢であり

魔王である飛影と話することも夢であった

（ななななにかか！何かお話をおをししななければばば）

大変頭の中が切羽詰まっている

レインにとって魔王は雲よりも遥かに上の人物である

アイドルとはレベルが違う

魔界にもアーティストもいて当然アイドルグループもいる

そういうものに興味がないレインとしてはどんなものかわからないが

アイドルと会ってもここまで緊張はしないだろう

（うあああ！！！魔王様にご迷惑がああ！！！私なんかと一緒に歩
いているせいでままま王さまの風評に傷ががが）

飛影と一緒に城下町へと行く者は基本的に見られる

好奇心からくるものである

ずっと顔が真っ青になっているレインは具合が悪いのかと思われるがそんなことはない

むしろ元気である

「……レイン、あれうまそ……? ……いない」

飛影はさすがに顔が真っ青すぎているのでレインが心配になり

てきとうなファーストフードでも買おうかと思って振り向くが影も形も無い

「ありい？」

付近を見るがない

~~~~~

「……あれ？ここは？」

その頃のレイン

飛影が曲がった通りを気付かずに直進して路地に入っていた

迷子

メリア国の道を知らないレインはその路地がどこかわからない

自分の進んでいる路が少し不良の溜まり場になりつつある場所に続いているとは知らない

「……迷いました」

迷子になったら来た道を戻ればいいだけであるが、思考に夢中になりすぎて来た道がわからない

なんとなくで進んでいると少し拓けた場所にでる

出口かと思ったレインだが瞬間的に硬直する

気合い入っている不良さん達の溜まり場であったからだ

五人でだべっている

「……」

人がいるのだから道を聞けばいいとは考えるレインだが

ギロリと5人程に睨まれ終了

自然と足が後ろに下がるが

レインはかなり可愛い

そしてその溜まり場には人が滅多に来ない

声も届かない

不良達にとっては獲物でしかない



不良達は立ち上がりゆつくりと距離を詰める

レインはそれだけで足が止まった

(…まずいまずい!! まずいですこの状況!!…!)

距離は二メートル

足が震えて動けない

どうしようもなく眼を瞑る

そして力強い手がレインの手を掴む

「…や!」

必死に振り払おうとするが意味は無かった

そしてそのまま引っ張られる

後ろに

「やっと捕まえた…」

雲の遥か上の存在がレインを捕まえていた

飛影の登場に周囲が静まり

リーダー格の男が黙ったまま飛影に近付く

指の骨を幾度も鳴らし準備を整える

「……」

レインを避ける形で横に回り込む

「あの！！！！めっちゃファンです！！！！握手してもらってもいいですか！！！！？」

頭を下げて手を差し出すリーダー

飛影は不良などによく憧れを抱かれる

絶対強者級としての強さ

メリアを守るヒーローのような存在

強さに憧れる子供や不良達にとって最上の存在である

飛影は黙ったまま手を握り二回縦に振る

「うおおおおお！！！！やべえ！超やべえ！！！！！」

物凄く興奮した様子のリーダー

次々に握手を求められ全員と握手をかわす

『魔王さんの連れとは知らずに申し訳ありませんでした！！！！！！』

そして素直にレインに頭を下げて全力で謝罪する

ちなみにレインは現在、先程と全く同じ態勢で飛影に手を捕まれ寄っ掛かっているような態勢である

起こっている現状に脳が対応しきれずそこまで頭が回らない

「へ……いやあの…別に大丈夫です」

慌てて釣られて頭を下げるレイン

「えーと…とりあえずだ!!!! お前ら今度から弱者を狙うな」

飛影は誰にでも平等ではない

一番好きなのは家族や友達（屋敷に住んでいるものやセリエやエリア含め）

二番目は気に入った者（コレットやレイン含め）

三番目にメリアの国民

である

他は知らないゴミだという考えである

さすがに三番目に入っている不良達だが二番目の方が優先される

手を出していたら飛影が出し返していただろう

「狙うなら対等のやつかそれ以上のやつだ…間違っても戦えないも

のは止めろ」

戦えないものは戦えるものに守られる存在

それが飛影の考えである

『はい！！！！必ず守ります！！！！』

即答異口同音ハモリ

「んじゃ買い物途中だから」

言いたいことを言い終わると飛影はレインの手を引いて路地からでる

基本的に今のメリアの道は路地などは特に飛影とセツネが面白半分に設計したもので知らない者は必ず道に迷うように設計されている

飛影は道の設計者であり熟知しているためすぐに路地から出ることができる

「全く…考え事して歩くのはいいけど周りは見なさいな」

はぐれた瞬間に飛影は風華で周囲を捜していた

もう少し遅ければ危なかったであろう

「申し訳ありま」

魔王に余計な手間をさせてしまい申し訳ない気持ちになり頭を下げた瞬間に見えたのは自分の手

⋮

固まる

手を繋いでいた

繋がれ先は目の前にいる飛影

[illegible]

顔を真つ赤にし真つ青になり、さらに真つ赤にし真つ青になりを繰返し

その場で卒倒する

「あ……気絶した」

手を掴んでいた飛影はそのままレインを誘導し背負う

（道案内も兼ねてなんだが……）

レインはしばらく起きそうにない

強制目覚ましは常人に行うと強制他界か強制精神崩壊になるため実  
行できない

「……まあいいか今度で」

はあと溜め息を吐き飛影は目的地の紅茶の茶葉専門店へと歩を進める  
城へと戻るとコレットが出迎える

「ああーやっぱりですか」

半ば予想していた通りになっていた

「昔のコレットみたいだ」

コレットも新人時代に今のレインと同じように出掛けて同じように  
戻ってきた

「う……また古い話を…」

今でこそ普通に接しているが新人時代はレインに負けず劣らずとい  
う感じである

唇を尖らせる

「アハハ！」

「……とりあえずレインをベッドに寝かせてあげましょう」

いつまでも飛影の背負わせるのはさすがにあれなので飛影とコレッ  
トは部屋に向かう

部屋についてレインを降ろそうとした飛影だがホールドされていて  
自然にはとれない

「ホントにコレットに似てるな…」

飛影にとっては少し前のことで今でも思い出せる

「え!!!? 私もやりましたか!!!?」

その時は寝てる立場だったコレットの記憶にはない

「やりましたよ」

飛影は慣れたように風華を発動する

風華でレインを固定し飛影が屈むことですりりと抜け出せる

そしてそのままベッドへと寝かせる

「手慣れてますね」

「エリアで慣れた」

エリアも小さな頃から飛影の背中で寝ることが多く

起こさないように寝かせなければいけないため慣れていた

「エリア姫も同じような感じだったんですか？」

「もっと難しい」

エリアは生まれた時からの魔法使いで魔法に敏感である

さらに寝ていても飛影には気付くため今のようにすると起きるか泣きじゃくる

そのためホントに無理な時は一時的に炎舞で人肌の熱を再現

起きて飛影がいないと泣くため、朝までには用事を終わらせる

用事が無いときはベッドに寝かせて一緒に寝る

「あの頃は多忙だった…」

懐かしむ飛影

「そういえば噂でエリア姫を背負いながら鬼ごっこしたって聞いたんですけど」

「あつたな…あれは」

飛影は懐かしいフレーズとともに記憶が泡のように浮き上がり

「あ…」

閃いた

飛影は立ち上がりコレットの頭を撫でる

「…サイコ／＼コレット超感謝、面白いこと思いついた」

ニヤリと笑う



「役にたてられたなら嬉しいですけど」

飛影のその笑みは即退避して傍観者になるのが正しい

「ウヘヘ…準備しよ…コレットまたな」

にやつきながら飛影は部屋を出ていく

「……犠牲者さんごめんなさい」

コレットにできるのは不明な犠牲者に謝ることだけであった

茶原を探して（後書き）

何かいいことを思い付いた飛影です

## 鬼ごっこ(1)(前書き)

ルールに凝りすぎて一話完結にできなかったです

## 鬼ごっこ(1)

グラウンド

整列すれば5,000人も格納できる広いグラウンド

さすがに同じ目線だと全体を見通すことのできないため飛影は校舎の屋根にいた

その横には

右にリタ

左にコトハがいる

飛影は風華を使って全体に声が行き届くように調整する

「とりあえず…今回の試験の説明の前に三人組になってくれ!!…一応人数はあうはずだから!!!」

約五千人

ギリギリ3で割りきれれることを飛影は数えて今決めた

四人でも良かったが3人が一番丁度いい

5,000人もいるとさすがに三人組になるのにも時間がかかる

わいわいと騒いでいる生徒達を飛影は何か企んでるときの笑みで眺めている

リタもコトハもその笑みを見て巻き込まれないように祈っていた

30分後

ようやく三人組を全て作り終えた

実習訓練の授業で三人組が固定のため分けるの自体は時間がかからなかった

「よし作ったな！！！！今から行うのは鬼ごっこ！！！！時間は二時間！！！！二時間逃げ切れれば合格！！！！さすがに全員は見きれないから印象で決まる！！！！鬼は逃げるやつはどこかに触れれば捕まえたことになる！！捕まったらチーム全員アウト！！」

仲が良い同士で組んだがそれが吉とでるか凶とでるか

足手まといにならないようにしなければならぬし

独断専行も許されない

思わず息をのむ生徒達

「さて………で！！！！三人組に別れたから次はそこから一人だけ右に移動二人は左に移動！！！！」

再び時間がかかる

計画性は全くない

この試験を考えたのは昨日のことである

飛影は風を走らせて数を数える

分かれていることを確認し頷く

「ちゃんと組んだ奴の顔を覚えてるかぁ!!! ルールは簡単!!! 右は逃げるそれを左は組んだ奴を追う!!! 捕まったら終了! 逃げ切ったら勝ち、捕まったら負け。鬼は捕まえたら勝ち、逃げられたら負け!!! 超単純!!! 捕まったら所定の位置まで自身の脚で移動すること…風を纏わせてるから誤魔化しは聞きません!!!!」

まさかの仲間割れを誘発する試験

飛影は物凄く良い笑みである

(…鬼は二人を捕まえて成績をゲットする。逃げる方は一人を犠牲にして成績をゲットする。仲良しこよしだと鬼が損をする…凄いルールですね…)

良い具合に裏切りや仲違いをさせるルールだとリタは感心する

「んで!!!!…俺とリタとコトハは鬼として追いかけます♪」

『え!!!?』

飛影以外の全員からの言葉である

「さすがにまずいですよ」

「疲れるからいや」

賛同できないリタとコトハ

体を動かすのが苦手なコトハはともかくもタッチしたら捕まえるルールであればリタは一分で全員捕まえることができるからお釣りまでくる

最速は伊達ではない

「まあめっちゃ手加減する!!!!」

一応のルールは後で説明する予定のため今はその言葉だけで納得してもらう

「とりあえず!!! 左側は今から各チームで逃げろ!!! 100秒後に右側がスタート10分後に俺らが参戦する!!!!!!」

「俺らはスタート最初は普通の人間ぐらいの身体能力でスタートして10分毎に強さのレベルを上げる!!! 阻止するには三分後に放送で周知する任務をクリアすることでレベルが上がるのを阻止できる!!! その任務で好印象を与えればポイント高いからな!!!」

本当によくできているルールである

全ての説明を聞いてリタは驚いてしまう

（ただ鬼から逃げるだけでなく飛影達を封じるために任務をクリアしなければならぬ、追うだけや逃げるだけではクリアしても印象は与えられないから高得点は厳しい）

飛影はこれだけのルールをたった半日で考えたのである

リタもコトハもそのルールなら納得する

最もコトハは動く気は0であるが

「それではスタート!!!」

そして鬼ごっこが始まる

《集固》

開始と同時に秋野が足場を形成しながら飛影に接近する

「今飛影先輩達を気絶させればめっちゃ楽だと思っんで!!!」

《集固・エアロバースト》

圧縮して固めた風の塊を解放し飛影に放つ

生徒達もその手があったかと納得するが

「スタート最初は…って言ったぜ秋野…狙いはいいけどまだスタートしてないぜ」

飛影達は飛影達のスタート開始時は普通の人間ぐらいの身体能力だが  
他がスタートするまでの待ち時間は飛影は何も言っていない

むしろ予想内である



魔力だけで防いだ無傷の飛影と余波を受けたりタもコトハも無傷である

「ああやっぱりですか」

秋野も予想内でさっさと撤退していく

本来であればスタートまで待ちスタート直後に行けば効率は良いが

飛影はスタート時に身体能力は普通の人間ぐらいと言っていたが魔力についてはなんにも言っていない

性格上は魔力も抑えると秋野は予想しているが恐らくは攻撃されたら話は別になる

そう秋野は判断してその場を離れる

「ちなみに、**範囲は校内だから!!!**」

飛影の笑みに秋野は速度を上げる

「しかしどういうルールなんだこれ？」

「さあ？普通に考えればちよつと厳しい鬼ごつこなんだけど、ルールも飛影先輩っぽいし」

当然ながら三人組になる際のメンバーは隼と秋野と火月である

二人と一人に分かれる際に彗が一人の方に行った

現在は秋野と火月がともに行動しておりまずは距離を離すために移動する

今回は抜け道を探す余裕は無い可能性がある

追ってくるのは彗と飛影達である

「とりあえず……!!!!」

「わ!?!」

秋野は火月の手を掴むと力強く上に跳躍

《集固》

魔法を使って空中に着地する

空中は秋野の領域である

逃げるにも最適で監視するにも最高の場所である

ただの足場であるなら一度作成したら魔力消費は僅かである

「いゝな〜秋野さんみたいに魔法使いたい」

彗の限界突破や秋野の集固目の当たりにするとどうしても使いたい、覚えたいと衝動にかられる

「あはは…飛影先輩といれば勝手に使えるようになるから」

実際に使えるようになった秋野の言葉

強い説得力がある

「……動いた」

地上では追う側がスタートした

まず秋野は逃げるかどうかを考える

本来ならそんな悠長なことを考えずに逃げるか隠れる、または留まることが大事であるが追うのが彗のためそこまで躍起になって追いかけられはしない

というよりも抜け道探しのために合流したいと思っているほどである

この試験は飛影らしいが抜け道がなければらしくない

表面だけルールをなぞれば仲間割れを誘発する試験

だがどこか裏道があるはずである

恐らく三人でなければいけないような抜け道

「……よくまあ飛影先輩は悪知恵をここまで思い付けるもんだね」

秋野の疑問

「兄ちゃんだからな」

火月の言葉で納得してしまう

飛影だからという言葉は説得力しかない

「あ…彗さんだ!!」

火月が指を指す方向に彗がいた

一直線に近付いてくる

「とりあえず降りるね」

空で話したかったがその為には彗に触れなければいけない

そのため秋野は落下する

無事合流を果たす

彗達はそのまま校舎の屋上へと移動する

屋上で座って作戦会議である

「雲行きが怪しくなってきた…今回の飛影魔術の禁止を多分わざと言っていないぞ」

つまりそれは捕まえるのにも逃げるのにも魔術の使用ができるのだ

「そしてさらに、鬼同士で組んでる」

タッチするだけなので徒党を組むことは得でしかない

二人の方は任務をクリアするために他の組と組むことはクリアはできるが印象が薄くなりどちらかと言えば組まずに二人だけでクリアしようとする

「ヤバイのかそれ？」

「とりあえず俺らには関係ない」

「ああ組んだ人を追うって言ってましたね」

彗が捕まえようと思えない限り彗達にとっては関係がない

「今回の抜け道は何だと思います？」

「さっぱり検討もつかない」

今回は色々と複雑になっていて学力試験のようにはいかない

彗は屋上から下を覗くと壮絶な魔術バトルが開かれていた

『あゝあゝ後7分で俺らは出陣します』

風に乗って飛影の声が学校中に響き渡る

『ミッション1、時計台にある違和感をさがせ。それをわかったらクリア…ちなみにクリアしたら普通の身体能力、クリアできなかったら

たらその二倍でスタートします』

場所を指定される

それは逃げるにものにとっては死地になり追う側にとっては良い見つけ場所である

だが時間は7分

ずっと見張っているのであれば7分の時間が無駄になる

鬼が強くなるのは良いことだと考える者にとってはミッションをクリアする必要は皆無である

「とりあえずどうします？」

「行く。俺らは損がないからな」

「兄ちゃん達を強くすんのは超危険だし！！！」

満場一致

彗達は時計台に向かう

最初の関門である

## 鬼ごっこ(1) (後書き)

まあ今回はキッチンとした抜け道を用意しています

もう作者の頭が幼稚なので抜け道に気付かれている方が大半だと思いますが

作者の我が儘と屁理屈をお許しください

## 鬼ごっこ(2) (前書き)

更新遅くなりました…

鬼ごっこ終了です



## 鬼ごっこ(2)

彗達は時計台に到着する

そして困ったことがあった

時計台にはミッションを邪魔するものやチームの邪魔するものがないことを確認してミッションをクリアしようとするものが大勢いた  
しかしそれは彗達には関係がない

「違和感ってなんだよ!!!!!!!!!!!!!!?」

それが困ったことである

数年いる生徒ならともかくたった四回目の彗達に違和感がわかるはずもない

中に入ることはできないようにされている

外側から時計台を眺めるが何も違和感を感じない

時計台という場所の指定を広範囲に受け取った者は周囲を隈無く探している

「さっぱりだ…」

『あと三分』

面白そうな飛影の声

残り時間は少ない

「あれだ!!! 違和感を探すんじゃないくて兄ちゃんがどんなことをするか考えて探そうぜ!!!」

時計台を知るものではなく

飛影を知るものとしての攻略法

「それぐらいしかないか」

「そうしよう!」

火月の提案に二人も納得して頷く

「っ!!!!!!?」

彗は背後に気配を感じ跳躍

魔術の炎の槍が彗がいた場所に突き刺さる

三人は一斉に魔力を解放し身構える

流れ弾ではないことは放った生徒が笑いながら彗達を見ていたことで理解する

「何か用か…?」

彗は一步前が出る

それだけで軽くたじろいで一步後退する生徒は彗を睨みかえす

「鬼は他の奴の邪魔をしちゃいけないなんて言ってない!!!」

魔王と共闘できるのは確実に勝利を納めることと同意だ

「なるほど…な!!!」

再び魔術の炎の槍が彗に放たれる

彗は回避するために一步横にずれる

だがそれよりも速く火月がその斜線上に移動していた

「ふん！」

炎の槍に應對するのは火月の魔力を込めただけの拳である

だが火月の一撃に炎の槍は容易く霧散する

「な…！」

「遅い!!!」

次の魔術を放つ前に火月は接近

魔術は必ず発動させるための予備動作が必要になる

その予備動作中に接近すれば大きく接近できる

ギリギリ間に合った生徒は火月に炎の玉を放つ

それを大きく屈みながら避けると同時に足払いをかける

相手が接近しているのに魔術を放った生徒は火月にとっては愚の骨頂である

踏ん張りを入れてすらない生徒は容易く宙を舞う

火月はそのまま態勢を起こしながら回転し回し蹴りを胴体にぶち当てる

「が…」

そのまま数メートル吹き飛び気絶する

「よし!!」

小さくガッツポーズ

「強いな…」

「さすが飛影先輩から訓練を受けているのは伊達じゃないですね」

それ以上に彗が凄いと思ったのは炎に真っ向から向かったことだ

どんな生物でも火は恐がるものである

彗も反射的にとった行動は避けるであった

「よく炎に真正面から挑めるな」

純粹に疑問として聞く

火月の返事は簡潔で理解しやすいものであった

「兄ちゃんの炎に比べれば今のなんてゴミだゴミ!!!!」

確かにその通りで比較するのすら烏滸がましい

彗は火月を軽く尊敬してしまう

「さて：どうするか」

そして気付けば周囲は魔術合戦が開始されていた

『終了!!!! ミッション失敗!!!! 俺らの初期値が二倍になった  
!!!!!!』

そして時間切れ

『あゝ黒鋼撤収』

「はいよ」

飛影の言葉で空から黒鋼が降ってきた

着地点は彗達の付近

「正解は短針と長針が同じ長さでした!!」

黒鋼が針に化けて短針の長さを長針と同じにしていたのである

普通でも違和感を感じるはずなので

あまり彗達に不利なわけでもなかった

「ばいちゅ」

相変わらずの無表情で手を軽く振ると一瞬でその姿が消える

速度が速すぎて眼がついていけないだけである

「とりあえず…逃げるぞ!!!」

そんなことは彗にとってはどうでもいい

「え？」

「なんで？」

彗は焦っているが秋野と火月は理解していない

「飛影がくる!!!!!!」

『っ!!!!!!』

二人がようやく理解した時にはすでに遅かった

「大正解（）彗は正解だ…」

時計台を囲むように飛影とリタと息を切らしているコトハがいた

狙いはコトハの方向

《集固》

同時に秋野も火月の手を掴むとコトハの頭上を飛び越える

「……はあ……はあ……ちよつと逃がしちゃったわ」

「ちよつとじゃねえし!! 重要な逃がしたし!」

「まあいいでしょう飛影…**【全員】**捕まえれば良いのでしょうか？」

80分後

全てのミッションに失敗している彗達

抜け道すら見つからない

確実に4,000人あたりはすでに捕まえられている

「もう大半が捕まってますね……」

「あいつら今0・5%だろ？」

「強すぎだっつの!!!」

もう彗達の手に負えないほどに強さのレベルが上がっている

この鬼ごっこをクリアするにはミッションをクリアして飛影達を封じることしか可能性が無かったが

どのミッションもクリアは着眼点を変えることで容易くクリアできるものだったがいずれも邪魔が入りクリアすることができないでいた

「抜け道……」

彗は改めて考える

屋上で輪になって何かを考える

「……そういえばなんで4,000人捕まってるんだ？」

ふと火月がぼやく

「先輩方に捕まったりしているからじゃ？」

火月の疑問に秋野は普通に返す

「!?!?」



だが彗が何かに気付く

「そうだ……確かにおかしい……5, 000人を二対一で分けた……逃げるやつと鬼に……」

だがそれだと

彗の中でピースがはまっていく

「単純に計算しても多くて……3, 500人も逃げるやつはいない……それが今4, 000人捕まってるってことは……」

ぼそぼそ考えをまとめる

秋野と火月はまだ理解できていない

今までの二回の試験の抜け道を探し当てたのは彗である

彗が探し当てようとしているのを見守っている

「三人チーム……二対一……右側は逃げろ……左側は組んだ奴を追え……100秒後スタート……捕まったらチーム全員がアウト……鬼として俺達が追いかける……レベルが上がる……佐藤が攻撃した時に狙いはいい……!……!……!」

彗は全てを理解した

「くそ! やられた!……!」

地面を殴る彗

「この鬼ごっこ…すでに詰んだ…」

悔しそうに頭を掻く

うだあと寝転がる

「どういことですか!!?」

「やっぱ…飛影はすげえよ…この試験…鬼は三人だけだ…」

『へ?』

寝転がったまま彗は抜け道でありこの試験の本質を説明する

基本的にこの試験は三人組で行うこと

二対一で分かれたことに意味はない

この試験は三人組で行うものであるからだ

右側は逃げる

左側はそれを追う

上手い言い方で一度も追う側を鬼とは言っていない

チームとして行う試験であるため時間差をつけてスタートさせるものだから

当然飛影達から逃げるために先行する方は逃げる

後からスタートする方はそれを追って合流しなけろばならない

そして与えられた8分20秒

その時間を使って合流してクリアのための考えをまとめる

それがこの試験の本質である

考える時間が足りない場合はミッションをクリアして飛影達

鬼の強さを抑えることで考える時間が延びる

秋野が攻撃を放ち飛影はそれに対して狙いはいいと言った

この試験は5,000対3の戦いだっただ

飛影達が弱いうちに気絶させることで二時間逃げ切ることができる

途中のミッションや飛影達を気絶させることができたものは印象に残る

「この鬼ごっこは飛影達三人だけから逃げる試験だ、気付けば一番簡単で一番難しい」

すでに飛影達の強さは倒すことが不可能なレベルになっている

だがこれが最初なら容易く気絶できた

なのに試験の本質をわからずに勝手に鬼だと勘違いして足の引っ張りあいを繰返した

「やっと気付いたの？ 遅いわね…けど貴方達が一番最初ね」

『!?!?』

三人が声のする上を向くと

空にコトハが浮かんでいた

同時に巨大な氷が降り注ぐ

魔術によるものである

鬼に触れたらアウト

それは攻撃に触れてもアウトなのか

「そんなことないわよ」

隼のそんな疑問に気付いたコトハが微笑む

しかしその魔術の威力

意味が分からないほどの威力

氷が爆散

爆散を繰返し礫になり襲いかかる

その礫の一つ一つも巨大化し半径一メートルほどに

それはすでに礫といえる大きさではない

《限界突破・全身強化》

《集固》

襲いかかる氷を彗が弾く

その首根っこを火月が掴み弾いた後にまた行動できるように彗の身体を動かし

氷の僅かな隙間を通り抜け秋野がコトハに接近した

「…やるわね」

一瞬でそこまでの反応ができたことにコトハは少し驚いてしまう

「とりあえず落ちてください!!」

《集固・エアロバースト》

コトハがいるのは空中

戦うことができるのは秋野だけである

風を圧縮して指向性を持たせ放つ

その一撃をコトハは危なげなくするりと回避して屋上に着地する

「え？」

秋野が落とそうと放った一撃は避けられたが狙い通りに地面に着地した

外見上コトハは近接戦ができるとは思えないほど細い

「無傷は凄いわね」

屋上や校舎は見る影もない程の破壊されているが全員が無傷

「どうも」

無傷ではあるが腕や足が痺れている彗

「今の魔術だよな…」

少し時間を稼ごうと彗は話しかける

その間に秋野も着地してコトハを挟む

「魔術よ…私が法則性を見つけて改良したオリジナル」

「だからか…」

彗は納得する

込められた魔力が今までと桁が違っていた

魔力消費を増大させ威力と効率を重視した魔術

「……ひくんに怒られちゃうわね」

損害がかなり大きい

「ちなみにあんたを直接攻撃したらアウトか？」

火月の疑問

彗と秋野はまだ触れずに攻撃することはできるが火月にはその術がない

「全然攻撃していいわよ…気絶したらアウトにするから」

微笑みながらコトハは魔力を解放する

《クルーズ》

「安心しなさい…私はあの中で一番弱いし、貴方たちと同じ反則級だから」

巻き戻ったかのように校舎が修復されていく

あの魔術を見た瞬間にすでに戦略は決まっていた

接近戦以外は勝ち目がない

だから彗達は僅かな時間差をつけて前後から攻撃を放つ

時間で言えば一瞬である

「戦略はいいわね」

柳のようにコトハは全ての攻撃を回避する

余裕の回避である

しかも0・5%の実力だ

コトハはゆったりとした動きだが一撃すらかすらない

無駄な動きを無くし効率性を重視したものである

《限界突破・フル強化》

《集固・乱舞》

だが三人を相手にすれば絶対に避けられない攻撃は生まれる

秋野と火月で絶対に避けられないよう態勢になるように攻撃で誘導させ

「うおら!!」

彗が全力で拳を振るう

完全に直撃コース



手加減できるほど実力差はない

ゆえに拳はコトハの顔面に突き刺さる

《クルーズ》

はずだった

「惜しい」

いきなり眼前から姿が消える

声は背後から聞こえた

彗が振り替える前に掌底が彗を捉えて吹き飛ばす

「先輩!!」

僅かに秋野の注意がコトハから離れる

《クルーズ》

「私から目を離すのは駄目よ」

眼前にコトハが一瞬で現れる

鳩尾への軽い衝撃

「つく……」

それだけで秋野の意識は飛ぶ

「視線、力の入れ具合、気配、魔力…全てを観察し避けるに徹すれば大丈夫よ」

残ったのは火月だけ

「まああれね…気付くのが遅かったのよ…ピカピカも話聞くまでわからなかったし」

開始30分以内に気付けば余裕で勝てた試験である

「ピカピカ？」

そんなことより火月が気になったのはピカピカという単語である

「集中途切れた」

《クルーズ》

再び鳩尾に一撃

後ろに跳んで衝撃を逃がそうとしても身体が動かない

「くっ……そ」

そして火月も気絶

「あっさり勝っちゃったけどいいのかしら？ ひくくんは戦ったけど言ってたけど」

コトハも彗達と同じ反則級

そして飛影達と同じく一%未満で戦っていたが

コトハは無傷である

「戦いにもならなかったわね」

溜め息を吐くコトハ

ちなみにであるがピカピカはリタのことである

光のキュリクレイでピカ

光速の神の翼も光速の光でピカ

合わせてピカピカである

「さて：残りの生徒を」

捕まえようと考えるコトハだがその前に花火が上がる

それは確保終了の合図で

終了時間になる前に5,000人確保終了したという証明だった

## 鬼ごっこ(2) (後書き)

はい、そんなわけで：鬼は三人だけだということ  
簡単でうざい屁理屈で申し訳ないです

次はクラスが決まっちゃいます

## クラスと依頼（前書き）

ギャグ回ではなくアホ回です

## クラスと依頼

「お父様！これ見てもらってもいいですか？」

飛影が朝食を終えるとエリアが飛影に飛び付く

手には分厚い紙束

「魔法学校の経済についてなのですけど」

「お！！！！」

愛娘の初仕事

飛影は飛び付く

すぐに紙束を受けとり庭園へと移動する

エリアも緊張した面持ちでついていく

庭園に着きゆっくりと熟読すること30分

「驚いたな…」

読み終わった飛影の感想

「どうですか？」

エリアに緊張が走る

「鼻肩目無しに良い計画書だと思う。無駄なく最小限に、しかも実現可能：初めてでこれは凄い」

飛影から次々にでる誉め言葉

エリアは緊張が解け笑顔に戻る

「良かったです！！！」

「俺も準備しなきゃな：優希」

「はいはい！なんですか飛影さん！！？」

どこからか現れる優希

いつも通りの笑顔である

「これを兵士に渡してきて」

飛影が優希に渡したのは20枚の紙

情報屋から仕入れた武術家の現在地である

「丁重にもてなして連れてこいって伝言頼む」

「りょーかいっす！！」

紙を受け取った優希はふらふらと走り去る

「エリアはこれを実現できるように協力者に交渉して…」

「はい！」

エリアも微笑みを浮かべ飛影に一礼すると走る

「娘の成長は嬉しいものだね」

初めてのことであそこまで立ち回れるのは優秀なメリアの王族でもセツネ以来である

セリエは子供の頃に飛影に言われてやったが

結果は飛影の説教一時間である

泣きべそかいて五回目の説教のあとにまともな形になったことを飛影は昨日のことのように思い出せる

セツネは新しいことでも関係なく面白いことを選ぶことができた

エリアはタイプが違いますが十分に面白いことになっている

「さて……クラス発表だ」

飛影も娘が真面目に仕事をしているため負けじと働きに学園へ向かう

クラス割り当てが行われた



100箇所ほどにズラリと名前とクラスが記述されている紙が張り出される

彗達もそのクラス割りを見るために何故か貼られている時計台のてっぺんにいた

秋野の集固で足場を作り三人で見る

飛影からの指示である

その紙だけは人間界の言語で記述されているからだ

『……』

沈黙しかない

飛影から聞いた話でBクラス以上で卒業の資格を得ることができる

まあ三年はいる必要があるが

しかし、飛影の判断と試験の成績で行われた割り当て

Sクラスは0人

Aクラスは0人

Bクラスは0人

Cクラスが40人

あとは順々に数が増えていっていた

彗達はCクラスである

「0かよ…」

「頑張ったんですけどね…」

「兄ちゃん厳しいな」

マラソン完走

テストも八割

それでもBクラスに届いていない

飛影の考えは全てクリアでようやくBクラスなのだ

そこから $+a$ で加算される

だがクリアしたものはおらずCクラスの40人もかなり妥協した結果である

「鬼ごっこがでけえな…」

「あれは答えを知ってイライラしますね」

あの後気絶から復活した後三人でやけ食いたほどである

「まあこれから期待ってやつだ」

「うお!!!!!!?」

隼の目の前に逆さになった飛影の顔が現れる

風華で空を浮いていた

「いやゝ生徒達の不満が凄くてさゝ」

笑いながら困ったように言う飛影

それもそうだろう

卒業する資格全員無いですこのゴミ共が

と言われたようなものである

「つたく!! 文句言うなら相応の実力をつけてから言えっての!!」

少々プチ切れモードである

「まあお前の判断だから正しいと思うが…」

よくよく試験を思い返せば

全ての試験に

体力

知力

判断力

洞察力

が求められていた

全てを合わせ実力としての判断である

「兄ちゃん！！魔法覚えたい！！」

マイペースな火月

会話を断ち切ることに關しては天才である

「マトモに魔力を扱えるようになってコトハの授業と講義に全部参加してから聞こう」

せめてこんくらいはできなきゃな

と飛影は軽く腕を振るう

三人同時に額に軽い衝撃が走る

小学生のデコピンのような威力

「奥が深いんデスヨ」

あっけらかんと笑う飛影

「ってか話戻すけど試験ってまだあるんじゃないのか？」

そんなことを前に聞いたかと思っていた慧

「……飽きた〜彗達以外クリアしないんだもん、彗達も鬼ごっこクリアしなかったし、これ以上評価下げてもいいならやるけど」

「凄いぶっちゃけましたね…」

飛影としてはまだまだまだまだ案はあったが求める答えが返ってこないため諦めたのだ

「まあ今が駄目でも成長すりゃいいんだから気にすんな」

0点を20点にするのは簡単だ

正しいことを教えればいい

20点を50点にするのも簡単だ

基礎を教えればいい

50点くらいでようやくBクラスにはなれるようにしている

「色々覚えて成長する。それがこの学校の在り方だ」

頑張れ少年少女と飛影はぶら〜とどこかに行く

「良いこと言ってるのに…」

「心に響かないです」

「言葉と態度が……」



「んでどうした？（…その紅茶はこの国のお金で買ってるからつまり国民の税が使われているのに特に感謝もなく普通に飲んでるゴミ野郎）」

「副音声の長いよ！！そんな嫌いかこの野郎！！」

「……え？知らなかった！？」

「初耳だよチクショー！！」

口じゃ勝てるわけがない

それがラインの今再認識した内容だ

「まあ本気はさておき…」

「否定して！！お願いだから否定して！！！！」

冗談ではなく本気

本気も冗談だがラインにとっては本気にしか聞こえない

「ほら…人間界に住めなくなって少し経つけど…調子はどうかな？  
って」

「ああ…別に普通だ」

飛影の普通は常識外であることは周知である

「ああそう。楽しそうだなによりだ」

ラインの笑顔

飛影はその笑顔が厄介事を持ってきた時の笑顔だと知っている

「ところで」

「そうか…断る」

即答

用件すら伝えられていない

「せめて聞け！！さすがに聞いて！！」

「んあゝ？」

ようやく話を聞く体制になる飛影

「ちょっと私からの仕事を頼まれてくれないか！？」

「へえゝ」

飛影は欠伸をしながらどうでもよさそうに返事をする

「おい飛影」

「聞いたぞ」



確かに聞けと言って一応は聞く体制になったが

確かに約束事は聞くだけである

「屁理屈だあ!!」

「自分の言ったことには責任もてや…それに人にものを頼むときにそんな態度が許されると思うなよ」

うがああ!!と頭を抱えて何かと葛藤する

決着は一瞬だったが壮絶な戦いが繰り広げられラインは深呼吸で荒れた呼吸を戻す

「えー飛影さんもしよろしければ私からの仕事の依頼をまずは内容を聞いていただきたく思います。その後で依頼を受領なさるかかどうかが判断いただきたいです」

「ふむ…そこまで言うのなら聞いて判断してやってもよいぞ」

### 《幻想魔境》

「アハハ!!とりあえず一回死ね!!」

限界がきたライン

殺し合い最強たる魔法が発動する

「甘いなライン」

しかし飛影は笑うだけ余裕の表情である

《キュリクレイ》

発動するための光がでない

そしてラインの首もとにはノコギリが

「……」

何が起きたかラインは一瞬で理解する

「飛影を殺す前に殺せるのでそのつもりで」

リタであった

飛影は笑いを堪えていた

「も……モウシワケナイデスチヨウシノリマシタ」

「さて…用件は？」

今が見れて満足な飛影はようやく話を先に進める

「ちょっと助けてあげてほしい子がいるんだ」

「詳細は？」

「冥界の管理者」

冥界は死者がその後どこに逝くかを判断する場所

天界は様々な世界が合わさっており三途の川も天界にある

三途の川を渡り閻魔に悪人と善人を決めさせて悪人は冥界に送られる

その冥界でさらに悪人をレベルに分けて地獄と呼ばれる場所に送る

それが冥界の役割で冥界の管理者の役割である

「若いのに優秀だから任せた私にも責任あるけど、私はそこまで閻を知らないから助けてあげられないんだよ」

若く純粹であるがために、閻ばかり見続けて精神が汚染されていく  
それを知ったラインからの依頼である

「……まあいいけど、報酬は？」

「その冥界で問題起こしてる絶対強者級の処分」

「乗った!!」

下らない報酬なら却下するのも考えたが、絶対強者級との戦い

飛影にとっては最高の報酬である

「依頼した!! んじゃあと五分後に送るね。半径3メートルには誰も近付けさせないで、ダドマと違ってそこまで精度よくないからウチの移動魔法使い」

ダドマは世界が違ってても個人単位での移動が可能であるがダドマ以外にそれを行えるのはいない

せいぜい場所を指定して送るくらいである

「はや！！準備は…まあこのままでもいいか」

コートだけ羽織る

「んじゃま…行ってくるか…早めに戻るよ」

飛影はゆると紅茶を飲んでその時を待つ

クラスと依頼（後書き）

久々登場ライン

次回冥界に行きます  
ある奴と一緒に

## 冥界での暴走（前書き）

個人的に面白い組み合わせの二人です

## 冥界での暴走

「死ね!!」

「貴様が死ね!!」

冥界に移動した飛影

移動して三秒後に喧嘩が始まっている

「腐れババアが!!」

「やかましいわチビ!!」

飛影の喧嘩の相手はギルギアである

「だいたいここはどこじゃ!!?」

「冥界だ馬鹿!!」

殴り合いにはなっていないが調子近距離でガンをつけあっている二人

周囲は悪人の溜まり場というほど雰囲気が淀んでいた

普通の街のようだが汚らしい

冥界は世界単位の刑務所のようなものである

当然飛影達が喧嘩している最中も殺気混じりの視線が飛影達を射抜くが飛影達は全く気にしていない

「なぜそもそも貴様が冥界に飛ばされるんじゃない？ ついに死んだのか？」

「ちげえよ！！ラインからの依頼だよ！！」

これだけ長いこと（一分）一緒にいて殴り合いになっていないのが奇跡である

「まあよい。ほら戻すのじゃチビ」

「ああ！！？」

チビと言われてかなり不機嫌ぶちギレ中である

「貴様のヘリオトロープを使えば我は帰れるじやろうが」

ギルギアもけっこう怒りがたまっていてかなり上からの物言いである

「誰がお前のために使うかっての！！」

「お願いではない命令じゃ」

「死にたいらしいな」

「貴様が死ね」

何故こんなことになっているかといええば話は遡る



あれから飛影は優雅に紅茶を飲んでいとギルギアがやってきた

何故我が…とぶつぶつ小言を言いながらである

「どうしたんですか？」

飛影はそろそろ飛ばされるのでリタがギルギアを近付けさせないよう  
に自身から出向く

「おお：リタか：あのチビは元気にやってるかの確認で我が寄越されたのじゃ、まあリタは元気じゃったと伝えておくでの」

物凄く早く帰りたそうにしている

原因は飛影である

「誰がチビだババア」

二人の距離は50メートル程は離れたが

二人の悪口に対しての地獄耳を甘くみていたリタ

ギルギアのチビが飛影に届きそのお返しに飛影のババアがギルギアに届いてしまった

そこからは一瞬である

額に血管が軽く浮き出たギルギアは飛影を殺そうと一瞬で接近

飛影もギルギアの行動は予測していてカウンターなど無しにただ拳を振るう

拳を拳で叩き壊すことしか考えていない二人の攻撃がかちあう前に時間がきた

一瞬光に包まれる

光が消えた時には飛影とギルギアはいなくなっていた

「最悪なコンビで行きやがったああああア!!!!!!!!!!??」

ラインはその場で崩れ落ちる

冥界も天界である

早く止めなければ天界が確実に滅びる

「……」

リタでさえ思考が停止している

「冥界に行くのは時間がかかるし!!!三日は放置になる……」

顔を真っ青にするライン

「三日三晩程度ならあの二人は殺し合いしてますから命の心配はいらないですね」

逆にリタは安心する

飛影にもしもがあるとは考えていない

ギルギアが死なないことにリタは安堵する

「その前に私の世界が滅びる！！！！あいつらなら滅びても気付かずに殺し合い継続するよ！！！！」

「まあそうですね」

それは容易に想像できたリタ

「よし！！アユリに行ってもらおう！！彼女の方が速いし！！」

「うっわぁ…自分の不手際を部下に押し付けるなんて…ゴミですね…」

リタが本気で引いていた

その表情に態度に言葉

ラインの胸に突き刺さる

「…リタ、飛影に似てきたね…」

「……ふふ…今更褒めても無駄ですよ！！」

リタはその言葉が嬉しかったのか表情が緩んでいた

ライン的には貶したつもりだったのだが

リタの反応を見て貶したつもりと言った瞬間に身体が真つ二つになることが想像できた

「とりあえず何とかしなきゃな……」

そのためにはまず世界移動が可能な転送札で天界に戻る必要がある

「……あれ！？　ない！！！！！」

10枚全て無くなっていた

「さつき飛影が上着からパクってましたよ……もしもの時につて」

「やられた…ダドマに頼まないと…」

ダドマに連絡をとることすら容易ではない

「手伝いくらいは気が向いたらやりますよ」

あくまで他人事のリタであつた

あのあと五分程殴りあって街の一角が崩壊していた

「つてなわけよ」

とりあえず現状を確認したいとギルギアと飛影が休戦していた

「つまり、冥界には移動の制限がかけられており一定の周期でなければ世界間の移動ができないってわけじゃな」

飛影の二分ほどの説明をまとめるギルギア

「ちよい違う」

しかしそれにダメ出しをする

「あくまで向こうから冥界への移動が一定の周期であって冥界から向こうに行くのは不可能だ」

脱出防止だな

と飛影は追加する

「その周期が次は三日後ってことじゃな」

「そうそう…それはあくまでも魔法の移動であって向こうからの物理的な移動はできるんだってさ」

冥界から地獄以外の他の世界に行くことは原則的に不可能で

唯一の例外としてラインやアユリクラスの権限ならば行き来が可能である

飛影も迎えにきてもらうことで帰還しようと考えていた

「ふむ…理解した」

飛影とギルギア

犬猿の仲であるが休戦している理由は3つある

一つ、報酬の絶対強者級の処分を二人いるということなので山分け  
一つ、それ以上に潰したいやつが現れたからそいつを潰すのが優先  
された

一つ、再開の場所はラインの仕事場にする

簡単に言えばラインをぶち殺すための休戦である

ギルギアは関係ないのに巻き込まれ

飛影はギルギアがいることに怒りがたまっている

「それで…貴様はどうするのじゃ？」

「まあどうするもこうするも…責任者を助けるのが依頼だからとり  
あえず実行しなくちゃな…って感じ」

飛影とギルギア

二人の距離は三メートル

不可侵条約も既に結んである

ここでキレてもラインへの影響は少ない

そのため二人とも互いの禁句は言わないようにも取り決めを行った

「ふむ：暇じゃし我も着いていこうかの：」

「別にいいけど」

この二人を知る者であればこの光景は不気味の一言に尽きる

しかし、表面上は普通に喋っているが二人とも胃がキリキリと痛みを発していた

まだ一時間も経っていないがストレスが尋常ではないほど溜まっている

「その生者二人：目的と理由を話せ、冥界への無断侵入は重罪だとわかっているんだろ？」

いつの間にか飛影とギルギアは囲まれていた

そして雑兵レベルの魔力の中に一つだけ強力な魔力がある

その男がリーダーのようである

「無断侵入と言われているがどういうことじゃ？」

「知らん：ラインの不手際だろ：21だからあの男以外を10ずつな」

「ふむ：まあよいじゃろ貴様と平等は気に食わんが、今のこの状況よりかはマシじゃ」

とにかくストレスを発散させたい

この飛影やギルギアを取り囲む雑魚は武器を構えている

まさにゴミにゴミと言われていると同意でストレスは溜まる一方である

そのストレスから解放される行動は簡単だった

二人が同時に腕を振るう

ただそれだけ

衝撃波はそれだけで発生する

取り囲む雑魚

リーダー格の男

冥界の街

その二人の一撃は全てを吹き飛ばした

ただでさえ街の一角が崩壊していたがさらに半径一キロほどが何もなくなる

「発散できないな」

「発散できないの」

ただの軽い一撃だ



そんなもんで消える存在などいてもいなくても同意である

「……絶対強者級か…」

一人無傷の男

武器は構えておらず一応は話を聞く態度になっている

絶対強者級の男は二人の絶対強者級に突っ込むなどの愚は起こさない

「とりま自己紹介かな…魔界の魔王…天界の魔王の依頼で来た」

「人間界の魔王補佐じゃ…成り行きで来た」

魔王と魔王補佐ということに驚きながら男は警戒をとく

「俺は冥王に使える者だ…補佐のようなものだ」

敵ではない

特に魔王レベルが冥界に入るには天界の魔王の許可が必須である

冥界からすれば天界は上司である

「冥王に用か？」

「冥王ってこの世界の管理者か？」

冥王という単語は知らなかった飛影

名前にあたりをつけて質問する

「そうだ…若くしてこの冥界統治することが許された存在だ」

「案内しろ」

飛影はニイと頬を若干吊り上げる

完全に悪人の顔である

「ふむ…」

ギルギアも冥界に来たことはなく面白そうににやついていた

## 冥界での暴走（後書き）

飛影とギルギア

この二人の喧嘩は簡単にいえば子供の喧嘩です

ただ被害が大陸単位になりますが：

## 80話（前書き）

いつの間にか80話

PVも7,000超えて一万も夢じゃないなと思います  
読者の方々ありがとうございます。

## 80話

### 飛影の屋敷

珍しく全員揃った時のことである

#### 【探偵編】

基本的にテレビを見ながら食事を屋敷の主である飛影は許可しない  
(常識外れのくせにそういう所は厳しい)

そのため、リビングにあるデカイテレビをソファに座りながら全員  
で見ていた時である

探偵もののドラマで完全な密室殺人を見事な推理で犯人を当てた場  
面の時である

「やっぱりこういうの現実で起きたら、推理して解決なんて無理で  
すよね」

優希が少し不満げに切り出す

「それ私も思うぜ!!」

リアリティーを追求すれば確かに人一人殺すのに計画を練るなんて  
あり得ない

しかも動機がそんな動機でいいのか



「きゃあああ!!」

「どうしたんだ!!?」

「あ……あれ……」

「ひっ……死んでる」

「何が起きたんだ!!?」

「ここの鍵は内側からしかかけれない……そして窓もなく鍵がかかっていた」

「密室殺人!!?」

「じ……自殺じゃないのか?」

「あの死に方で自殺は無理だ」

「絶海の孤島……私達以外に人はいない」

「犯人はこの中にいるってことか」

という設定のドラマで探偵が推理して解決する物語である  
そこに飛影がいる場合

「あ……犯人お前じゃん」

『うえ?』





V V V V V V V V V V V V V V V



故の諦め、立証できないので神隠しなどで迷宮入りである

常識で測ってはいけなと改めて三人は認識した

## 学校での出来事

飛影の気紛れである

【野球編】

「そうだ……野球をしよう」

放課後唐突に飛影は言い出した

リタは飛影の唐突に慣れてきたため特に反応なく立ち上がって準備をする

「はい？」

彗は思わず聞き返す

「身体を動かそう!!」

飛影は首根っこを掴み引きずってグラウンドへと歩みを進める

「強制かよ!!」

彗に選択肢は存在していなかった

そして途中でリタが秋野も同じように拉致していた

そしてグラウンドの隅

メンバーは

飛影とリタ

ダドマとギルギア

彗と秋野

の六人である

「おいメンバー」

「これ野球ですか？戦争ですか？」

なぜ六人中四人も世界が滅ぼせるレベルの者がいるのか

秋野は不思議で不思議でしょうがない

「とりあえずてきとうに三三でいいべ」

「そうだな…めんどいから男女で分けるか」

と野球はやりたいが面倒は嫌いな飛影とダドマの話し合いでチームが決定する

ピッチャー、飛影、リタ

キャッチャー、ダドマ、ギルギア

審判、彗、秋野

「うおっしやあ!!」

飛影は肩を回しやる気充分である

一番手はギルギア

「ふん…」

初っぱなからホームラン予告

「上等だコラ!!」

「こい…」

殺気と殺気がぶつかり合う

飛影は振りかぶって一投目

大気に亀裂が走る

「あ!!!?」

ダドマが気付いた時には遅かった

この時の飛影達は制限が無い

全力投球

そしてギルギアも全力でコースを捉えてバットを振るう

衝撃波が発生する

ダドマとリタは瞬時に魔法を構築し衝撃波を打ち消す

## 第一投目

結果はボールとバット共に摩擦で炎上消滅

『ちっ!!』

飛影とギルギアは同時に舌打ちすると予備のバットとボールを手にする

## 第二投目

飛影は振りかぶり

ギルギアは構える

『ストオオオオオップウ!!!!!!』

続きをしようとする二人を全力で止める四人

「馬鹿かお前ら!!」

「滅ぼすつもりですか!!!?!」

「ってか打てねえよ!!」

「普通に私が殺されます!!」

ダドマ、リタ、彗、秋野の全力の叫び

しかも放課後とはいえ僅かに人が残っている

そんな中で全力はアホすぎる

「ちっ!!」

「しょうがないのう」

話し合うこと10分後

彗と秋野レベルの実力まで抑えることで全員が納得した

気を取り直し第一投目から開始

今度はホームラン予告ではなくバットは飛影の方を指していた

「……おら死ね!!」

「貴様が死ね!!」

ど真ん中からのフォーク

スピードは180キロ

落差は30センチ

ギルギアはそれをぎりぎりに捉えてファール

「へっ!!」

「餓鬼が…」

再びにらみ会う二人

ようやくまともになったとリタとダドマは安堵している

(普通じゃないって!!!!!!?おかしいから!!!)

そんな中で常識外しか感じない秋野

彗はすでに思考停止していた

そして第二投目

「おら死ね!!」

「貴様が死ね!!」

《炎舞・陽炎》

ニヤリと飛影は笑う

ど真ん中直球

ギルギアは真芯で捉えてからぶる

全然別納コースをボールは通った



「空振りー」

飛影は物凄い良い笑顔だった

「……」

熱で光を屈折させ蜃気楼を作った

ギルギアは頬がひきつってバットを握りしめ破壊する

第三投目

「おら!!」

《グラビティ・圧》

飛影が投球すると同時にギルギアは魔法を発動

ボールは三メートルほど進み地面に直角に落下

陥没

「鼻くそみたいなボールじゃな」

今度はギルギアが蔑むような笑顔である

雲行きが怪しくなってきた

それは周りの四人が同時に直感したことである

『……』

直感すると同時に飛影とギルギアは睨み合う

ただならぬ雰囲気というよりももう手遅れだった

『…死ね！……！！！！！！』

《炎舞》

《風華》

《グラビティ》

魔力を解放

「さすがに、」

「まずいですね」

《天変地異》

《神の翼》

《キュリクレイ》

飛影達を止めるためにリタとダドマも魔力を解放

「あゝ俺今日までの命か」

「私ももうちょっと長生き……」

既に人生諦めた彗

それに同意件の秋野

「……はっ！！？」

しかしあることに気付いた

（これって…生きた場所は違えど死ぬときは一緒っていう悲劇のカップルみたいな展開だ！！……しかも隣にいるのは安倍川先輩だ！！これは死んでも許す！！）

と脳内花畑な秋野

今日も平和なハチャメチャな日であった

## 80話（後書き）

まあ日常茶飯事のアホ話でした。

## 冥王と補佐（前書き）

冥王とのご対面な話です

## 冥王と補佐

「い…いらっしやいませ…魔王様…」

男に着いていった飛影とギルギアはそれらしい豪華な建物に案内され  
一番奥の部屋に冥王はいた

男から事前に連絡が行き届いており、飛影達を迎えるため正装に身を包み膝を折り頭を下げて出迎える少女

男もその場で飛影達に向けて頭を下げる

「飛影だ…多分少し世話になる」

「ギルギアじゃ…同じく世話になる」

悪人ばかりの冥界で安全とされるのはこの建物くらいで

外で寝ようものならば面倒事が多そうだという理由で二人とも我が物顔ですでに住むことを決定していた

冥王はそれを不満に思うことなく頭を上げて多少挙動不審に頷く

「わ…私は…冥界の統治を…任せられている…あやめです…どうぞ…御滞在中はここを我が家だと思っておくつろぎください」

冥王であるあやめ

外見は15歳ほどの黒髪黒目の日本の少女である

飛影達だから挙動不審に喋っているのではなく、性格上の問題であった

髪を腰よりも下まで伸ばしまるで人形のように整った可愛らしい外見と裏腹に強さを飛影はひしひしと感じ取っていた

「こ…こちらは私の補佐です…じ…自己紹介していただいてもよろしいですか？…すいません」

自分の補佐にもびくつき謝るあやめ

慣れてきいるのか補佐の男は頭を上げて誠実そうな表情である

「冥王の補佐に任命されている、ガルだ。先程の無礼をお許しください」

補佐のガル

身体はまるで鋼のように引き締まっっていて外見だけでも強者の貫禄を感じ取れる

取り立てて目立たない

おっちゃんな顔である

無精髭を生やしていて服もアロハシャツである

きちんとした正装を着ているあやめと対極である

「ってか俺らに敬語は必要ないぞ、階級的にはお前らの上司と同じだが直接的な関係はないし」

あくまでも上司は魔王でなくラインである

さらにいえば飛影は敬語が大嫌いである

本人いわくなんか壁があるとのこと

「ん？そうか楽だから助かる」

その言葉に一番早く反応し順応したのはガルであった

「わ：私はこちらの方が落ち着きますので」

あやめについては飛影は予想がついていた

「そういえばじゃが：貴様ら以外に人はいないのか？」

かなり豪華な建物だがここに案内されるまでに人一人気配を感じない

「えと：それは」

とても言いにくそう

ではなく、あくまでもびくついているあやめ

そんなあやめに助け船をだすガル



「簡単にいえば冥界故の人手不足だ。待遇は良い方なんだがこの世界は後ろ指さされるから誰もこねえ…一応は二人でできるから支障はないがな」

あやめもガルも絶対強者級の実力者で仕事自体に遅れは生じない

「なるほどのう…大変じゃな」

「つてかここに来てから人見てないな…街で暴れてた時も視線は感じたけど姿は見えてない」

あくまでも視線だけである

「えと…冥界に送られる死者は姿を持たない魂です…その…姿を見るのは難しいです」

冥界には全ての悪人が送られる

絶対強者級も例外ではない

絶対強者級に肉体を持たせたならばその処分は絶対強者級がいる

ここにいるのは二人の絶対強者級であるが

三人以上絶対強者級が来た場合に対処できない

だから魂だけを送るのだ

魂は脆く儚い

絶対強者級の魂でも同じだ

だから二人で仕事がまわせるのである

「なるほどね」

魂だけでも悪人である

空気が悪くなるのも当然だ

「本日はお疲れでしょうから部屋に案内します」

「疲れてないけどよろしく」

こんなことで疲れたら絶対強者級の名が廃る

しかし、部屋で考えたいことがある飛影としては嬉しい申し出である

ガルは仕事があるといなくなりあやめに案内される飛影とギルギア

「えと…その…冥界に來た目的はなんでしょうか。お手伝いできることがありますしたら手伝いたいです」

まだ目的すらきいていなかったあやめ

飛影は一瞬考える

ラインからの依頼は冥界の管理者を救うこと

あやめを救うことであるが、本人を前に言うことではない

「あゝ視察みたいな感じ？増員しなきゃ駄目なら増員するし、ってやつだ」

それとなく誤魔化す飛影

「そ…それは嬉しい申し出です…」

微笑むあやめ

「……」

飛影とギルギアが案内されたのは一室である

『は？』

二人同時に怒りを顕にする

「なんで俺がこいつと同じ部屋なんだ！！？」

「なぜ我がこやつと同じ部屋なんじゃ！！？」

休戦しているとはいえさすがに我慢ならなかった飛影とギルギア

びくつとあやめが震え物凄く泣きそうな一步手前の表情となる

「も…：…申し訳ありません！…：…仲がよろしそうなので部屋が御一緒の方がいいかと思っていました」

『はぁ！！？』

ハモる

本日何度目かわからないがハモった

二人は誰と誰が仲が良いのかまったく理解できていなかった

犬猿の仲

というよりも嫌い度でいえば互いに殺したいと思っている程である

そんなことは周知の事実であり

二人ともに理解が追い付かない

「意味がわからん」

「不愉快じゃ」

溜め息と同時に思うことを呟く

『ああ!!?』

そして再びハモる

今すぐにでも殺したい衝動が二人を襲うが我慢する

今ここで殺しあいをしたらラインを殺せない

元凶のラインを殺すには一人じゃ無理だとも感じている

殺しあい最強は伊達ではない

奇跡的に手を握りしめることなく収まる

「…まあ…少し話したいことはあったから…べ…別にだ…大丈夫…だ」

「虫酸が走るのじゃが我慢する」

決してツンデレではなく本当に嫌々である

部屋を分けろとも言えるが言ったら負けな気がして言い出せない

双方とも早く言えと眼で訴えるがぶつかり合うだけで気付くことはない

「えと…ど…どうぞ寛ぎください。ご飯の支度ができましたらお呼びします」

弱冠焦りながらもあやめは表情を崩さない

そうして案内される部屋

生活臭が感じ取れる部屋だった

埃が積もり掃除が行き届いていないが確かに誰かが住んでいた気配がある

「す…少し前にいた、部下の部屋です。少し埃っぽいですがご了承ください」

埃っぽい部屋

だがあやめの態度を見る限り仕方なくこの部屋に案内しているのだろう

掃除が行き届いていないが、一番最近掃除をした部屋であるのだろう

「サンキュー」

「すまぬな」

それを理解していた二人は無下にすることなく礼を言い表面上はおとなしく部屋に入る

「そ…それでは…」

謝罪しながら退室するあやめ

それを確認した飛影は扉を閉める

《炎舞・部屋掃除》

ドンと部屋を踏みつける

そこから炎が走り部屋を駆け抜ける

塵一つ残さず埃を燃やしつくす

「それで…話とはなんじゃ？」

ギルギアは物凄い不機嫌な顔でベッドに座る

「俺がここにいる理由はさっき話したよな？」

飛影も近くにあった椅子に座り向かい合う

「ふむ…まだ記憶はしておる」

冥界の管理者である冥王を救うこと

それがラインからの依頼

報酬は絶対強者級の始末

それが飛影がこの冥界にいる理由である

「……少し引っ掛かる。だから警戒だけはしておくに越したことはない…」

「なんじゃ？ 予勘が？」

第六感が発達して未来を僅かに勘として予想できる予勘

今回も飛影は予勘として警報が脳で鳴りやまず起こっている

「予勘だ」

「ふむ…ならばそうじゃな…休戦にしたのは良判断ということじゃな」

ギルギアも若干だが予勘が働いていて

僅かながらの危機を知らせていた

「とりあえず：俺は少し探ってみるかな…」

どんなに面倒でも引き受けたからには依頼はキチンと遂行する

「我は何もせんぞ」

ギルギアの無気力発言

だが飛影は別に気にしない

ギルギアは巻き込まれたただけだ

一応は階級的には飛影が高い

だが直接的な補佐ではなく命令できる立場にもいない

さらに飛影は手伝ってほしいと僅かにも思っていない

「だが一つ：そうじゃな：戦いで面白ければ手伝ってやるぞ？」

飛影もギルギアも戦闘狂という共通点がある

「じゃあその時は頼むとしよう」

飛影はギルギアは大嫌いであるがその実力は知っている



戦いで面白い

それは絶対強者級との戦いである

もし、複数の絶対強者級と戦うのであればその実力は必要なものだろう

そう判断して飛影は頷いた

## 冥王と補佐（後書き）

この飛影とギルギアの二人は本当に互いが嫌いです

しかしその実力は認めています

## 魔法授業（前書き）

魔法の基礎知識についてです

## 魔法授業

メリア魔法学校にて

Cクラス

最高がSクラスまであるなかで卒業資格すらないCクラス

そして実力的な意味で現段階のメリア魔法学校の最上位である

「…さて、とりあえず最初の魔法の授業を始めるわよ」

クラスごとに一度講義とは別に魔法の基礎知識に対する授業を行う  
うと考えたコトハ

コトハは飛影と違いパツと見で判断することはできない

そのため、判断するために一度授業という形で生徒を観察する

彗と秋野と火月もCクラスであり、魔術ではなく初めての魔法の授業に生徒達含め少し騒々しい

「…静かにしてくれない？」

授業を始めたいコトハだが

しかし声は届いていない

はあと溜め息を吐くコトハ

疲れるため動きたくないし、面倒なのでそれ以上に声を大きくしたくもない

「……」

少しだけ雰囲気に変化する

『…!?!?』

真っ先に気付いたのが彗達三人

ピタリと硬直し黙り前を向く

しかしまだ他の生徒は気付いておらずまだ喋っている

「……………」

さらに雰囲気に変化する

表面上はジト眼になったただけであるが少しずつ魔力と殺意が上昇している

コトハは法則などの定められたものが好きである

つまり授業が開始しているのにも関わらず授業が開始できない状況に、あらかじめ授業の予定を定めていたコトハにとってはイライラするものである

「授業始まつてるから静かにしようぜ!?!?」

物凄く嫌な予感がした彗

立ち上がって説得する

一瞬静寂が包み

「始めるわ」

その静寂を狙ってコトハが大きな声を出すことなく知らせる

「……しんくん、ナイスな判断ね」

コトハは彗を見て少しだけ微笑む

しかし彗は彗である

しんくんという者に知り合いはおらず後ろを向くがそもそも一番後ろの席なので後ろには壁しかない

「貴方よ貴方…魔法の本質は進化でしょ? だからしんくん」

限界突破は強化ではなく本質は進化

その本質である進化のしんをとり

しんくん

彗へのあだ名である

「ああ…」

彗はそれに何の反応もできない

頷くだけである

「さて…貴方達がどれだけ魔法の知識があるうと無かろうとどうでもいいわ…魔法を覚えたい、使いたいと思っているなら私の授業で言った内容を噛み砕くこと無く一字一句全て覚えなさい」

一斉にノートを取りだし準備を終える

「魔法の特徴として…本質は可能性、自分の可能性、または自分の鏡、性格を表すわ。例えばひくくん、皆ご存じひくくんの魔法は？  
……んくと…しゅうちゃん」

秋野を指差すコトハ

集固の特徴は集めることだ

万物の集い

それが秋野の魔法の特徴

そのため集でしゅうちゃん

「へ？…ええくと…炎の炎舞、風の風華、他のヘリオトロップですよね」

秋野は戸惑いながらも答える

コトハはその答えに満足して頷く

少しだけ下を向いて紙に何かを書き込む

「そう、正解…さて…この三つの共通点、ひくくんの特徴がズバリとあります。どこでしょう？」

あの紙は成績か評価だと生徒達は確信する

一斉に考え始める

さすがに卒業の資格は欲しいため彗達も必死である

一人の生徒が手を挙げる

「はい、そのの」

あだ名無し

「自然物ということで」

「ぶぶ〜ハズレ」

コトハは下を向いて紙に何かを書き込む

今度は手の動きが×を描いたように見える

「んじゃはい!!」



火月が手を挙げる

「ん〜と………貴女は本質がまだわからないから妹ちゃん」

てきとうであった

「強い!!」

たった一言

超自信満々な表情である

「…」

コトハは柔らかに微笑み紙に×を描いた

「全然違うわ!!………ひくくんならなに使っても強いじゃない!!」

確かな理由である

例え資源ごみを粗大ごみにする魔法でも飛影は普通に超巨大な粗大ごみで戦える

「ええ!!!? 違うのか…」

自信満々であった火月は机に伏せる

「もう…時間の無駄ね、炎の特徴は救いと恐怖、風の特徴は癒しと恐怖、他は自身が無い………そう考えると楽なのよ…救いと絶望を周

りに与える、それがひくくん」

炎は生きていく上で必要なものであり無くてはならないもの

だがその熱は死と恐怖を与える

風は移動する空気を指す

生きていく上で空気は必要なものであり無くてはならないもの

だがその強すぎる風は簡単に全てを破壊しつくす

そしてヘリオトロープ

全てにおいて実体が無く受け手にとっては滅びにも救いにもなる多  
面性

それが飛影の本質である

「……おゝ納得できる」

「凄いです…」

「確かに兄ちゃんだ…」

飛影を知る者として三人とも納得できる

「まあ性格もあるし、その人の可能性もある…一番魔法が早期に覚  
えることができるのは願望ね、何かがしたい…何かをやりたい、そ  
の意思の力が魔法になる。ひくくんは風華を覚える時は炎舞が燃費

悪いからって理由の意思で覚えたのだけど4〜50年かかったそうよ、修得するときに」

何かを強く願う

願いを実現できるのが魔法

願いが弱ければ当然覚えることはできない

「だから魔法を覚えたいのなら知識はほどほどに：そして自分自身と向き合うこと：私は近道はわからないけどそれが最短だと思うわ。今を知っていることで貴方達が魔法を覚えることができる可能性が上がったわ：そして魔法使いとの戦いもね。」

魔法使いは魔法を覚えることができれば人間としての枠からはみ出る

ただの人間との差が生まれる

だが闘わなければいけない時もある

それを知ること魔法使いを御することができる

相手の性格から魔法を想像し初見の戦いでも有利に戦うことができる

飛影達はそのことを無意識のうちにやっている

「まあこの世界には遺産持ちもいるし：一括りにはできないけどね  
：」

「一つ質問なんだけど」

彗が手を挙げる

「なに？」

「コトハの魔法はなんなんだ？」

一度戦ったがどんな魔法かが判別することができなかった

何となくの質問である

「…そうね、じゃあ問題、私の魔法はなんでしょう？」

《クルーズ》

コトハは魔法を発動する一瞬で姿が消える

「まあこんな感じ」

教卓から姿が消えて教室の後ろに現れる

《クルーズ》

再び魔法を発動しもとの場所に戻る

「移動魔法か？」

瞬間移動

ダドマと同じで移動魔法かと考える彗

「ぶぶー全く違う」

コトハは容赦無く切り捨て紙に何かを書き込む

「転移でしょうか？」

生徒が手を挙げて回答するがコトハは首を振り再び何かを書き込む

無闇に発言したら危険

生徒達の共通意識として芽生えたものだ

「物凄く頭悪いのね……ヒント」

《クルーズ》

コトハは持っていたペンを放す

本来なら重力によって地面に落ちるはずだが空中に制止していた

充分に見せたあとで魔法解除

ペンは重力で落ちる

「……時ですか？」

秋野の回答

ようやくコトハは頷く

「そう、時を操る魔法、さっきのは時を止めて歩いただけだし、今のはペンの時を止めただけ…簡単よ」

コトハはあくまで反則級

しかし、魔法と魔力量と魔力運用だけを見れば絶対強者級と遜色無い火力がないため世界を気まぐれで滅ぼせないから反則級なのである

「さて…魔法とは何か？基礎の基礎の基礎を学習したわけだけど最後に質問とかある？」

誰も手は挙げない

コトハは一度見渡していないことを確認

「それじゃ終わり」

コトハは一人頷くと教室からすぐに退室する

「面白かったな！！」

火月としては普通の授業よりも遥かにわかりやすかった

慧と秋野も同じである

今まで知らなかったことを知れた

それで充分である

## 魔法授業（後書き）

ポイント制の授業って緊張感ありますよね

## 死者の魂（前書き）

魔界のお話です



## 死者の魂

「……暇ね…」

リーベは暇人であった

いつもいつも暇人の時は、ワインを飲んで暇を潰していたにも関わらずそのいつものワインが無くなったのだ

「このままだと暇すぎて死ねる」

自室でゴロゴロと転がっているだけのリーベ

暇を潰せるところがない

皆無とっていい

酒場もちょうどこの時間帯はやっていない

「なんか騒動はないかしら？」

「キヤアアアアアア！！？」

リーベが呟くと同時に悲鳴があがる

「厄介事かしら？」

リーベは面白そうに悲鳴があがった方へと走る

出たらすぐの廊下であった

座り込んであり得ないものを見るように怯えている侍女

顔色は真っ青だ

「どうしたの？」

少し屈みこんで同じ目線に立つ

「えい……えいえい」

声が震えていた

震える指先で示す

そこには恐怖があった

「ゴキブリ？」

黒くてカサカサしている

油がテカっている

触角がわさわさしている

「どこにでもいるのね…」

世界すら越えたあまりの生命力の高さに呆れるリーベ

「殺していいの？」

「……！！！！」

リーベの言葉に恐ろしき速度で頷く

《黒霧》

魔法を発動する

黒い霧がゴキブリを包み込み圧殺

グチュリと嫌な音が響いていた

「こんな下等な生物に怖がるなんて変な人間ね」

リーベはゴキブリはただの虫だと思っている

そのため別にそこまで恐怖を感じない

「……凄いです！！」

ただゴキブリを殺したただけなのに尊敬の眼差しで見つめられる

リーベはそれを無視

暇が潰れなかったと嘆いていた

「？」

溜め息と同時に妙な魔力を感じた

その魔力はメリア国の全てを包み込む

「これは？」

嫌な気配が包んでいた

血生臭い匂いがリーベの嗅覚を刺激する

「ひゃああああ!!？」

再び侍女の悲鳴と卒倒して倒れる音

そこにいたのは人骨だった

人が骨だけになった姿で武器を持ってゆっくりと歩みを進む

「きしよいわね」

城の中にどうやって進入したのかがリーベはわからなかったがやることは簡単だ

爪を伸ばし切り裂く

城を破壊しないように手加減した一撃だが、骨は一瞬で消滅する

(……呆気ない)

齒応えがない

暇潰しになることはないというリーベは残念そうに肩を落とす

「キヤアアアアアア!」

再び悲鳴

今度は上の方である

もしもの時は頼むと飛影から頼まれていなければ酒の肴にしていた

「ち…」

舌打ちと同時に気絶している侍女の首を掴み走る

「…遅かったですね」

着いた時にはすでに終わっていた

金槌を持ったリタがそこにはいた

コレットがリタに守ってもらうように背中にした

「なんなのこれ？」

「さあ？わからないです」

リタもリーベと同じで妙な魔力を感じて悲鳴のあがる方へと移動しただけである

「一匹一匹は弱いので普通の人でも倒せますね…」

「面倒ね」

倒せるは倒せるが武器を持っているため万が一があるのだ

「他のは？」

「国全土が魔力の範囲内なので各それぞれに移動してもらってます」

一匹一匹は大したことは無いので殺すのは楽だが数が多い

殲滅が目的なら一人いれば充分であるが殲滅ではなく護衛が今回の目的である

数がいなければ護りきれない

メリア国の兵士など戦えるものは全て出払っている

城にいる戦える者は概ね五人

リーベ

リタ

エリア

護衛二人

「とりあえず…どうする？」

「黒霧で敵だけ集めませんか？」

「無理よ。一匹二匹は楽勝だけど国全土でしょ？皆まとめてならで  
きるわよ？」

どこまでも冷静な二人

まずはコレットを守ることと敷地内に侵入してきている敵を排除する

仲良さげに背中を預けよりかかり合い手から光や霧を発生させて護  
衛する

そんな時である

「…強いな…俺と戦おうぜ!!？」

《レジック》

鎌鼬

声がした方を二人が横目で見ると鎧を身に纏った若い男が脚を振り  
上げていた

魔法なのであろう鎌鼬がリーベとリタに直撃する

「気付いた？」

「全く」

威力は絶対強者級の二人にとってはダメージが通る攻撃ではなかつ  
たが

距離30メートルちょうどT字廊下でリタとリーベの視界には入っていないがそんな至近距離までこの二人を相手に感知されずに接近できるのはアンジェレネぐらいである

若い男は無傷の二人に驚く

「おお！！？無傷かよ！？飛影みてえだな」

『飛影？』

飛影の名前がでてくるとは思っていなかった二人

思わず聞き返してしまう

「ああ！？お前らこの城にいるのに飛影のこと知らないなんてありえないぜ？」

仲が良さそうに飛影の名前を出す

リタとリーベは混乱するばかりである

敵意は無いが殺意は向けられている

《レジック・双》

脚が十字を描く

十字の鎌鼬がリタとリーベを襲う



城の中なので被害を最小限に抑える必要がある

リタが一步前に出て鎌鼬を片手で受け止め弾き飛ばす

「俺はリックス！メリア・リックスだ！！」

「なっ！！？」

コレットがその名前に反応する

「誰？」

リタ一人で充分と判断しリーベはリックスに背中を向けて次々に侵入する骨を排除するため霧を発生させる

その間にコレットの反応した理由を聞く

「国王様…です…元ですが、セリエ王の二代前の王です」

「死者よね…」

「はい、随分前に亡くなりました」

すでに100年は経っている

「どういう魔法かしら？」

死者を生き返すだけなら身体が白骨死体なのは理解できる

時間が経っているので骨しか残っていない

しかしリックスは身体も意思も記憶も持っている

「……リーベさん!!」

そしてコレットが気付いた

もし、リックスだけでなく今までの王が復活するのであれば

「王が危険です!!!：護衛の二人は元々二人がかりでもセリエ王に勝てなかったです!!」

護衛としての実力は折り紙つきである

しかし、魔王という魂を変質させる者がいて長期的に住んでいた元々が強力な魔法使いの家系にあるため、強くなることしかない

「上の方ね」

大きな爆発音

雑魚には必要ない威力の音である

「あと、任せたわよ」

「わかりました」

リーベは翼を生やし中からではなく外から向かう

街にはいくつも煙が上がっていた

辿り着くと護衛の一人は片腕を失い一人は壁に叩きつけられていた

「貴方が誰かはわからないけど」

霧を発生し足場にして急降下

そのままの勢いで腕を弾き飛ばし

「飛影から頼まれてるのよ…」

「飛影…?」

王族、リラコの動きが止まる

だが、リーベには関係がない

爪がリラコの身体を切り裂いた

「ふん…疑問があるわね…骨と肉体の差は魔力だけど、若い姿と記憶があるのに攻撃するところ…あとどんな魔法か…現象か。わからないことばかりね」

リーベは護衛二人を軽く観察し命に別状はないと判断する

「助かった…礼を言う」

護衛二人のお陰で怪我をしていないセリエ

「くそっ！！身体が思う通りに動かん！！」

だんだんと衰えて戦うことすらできない自分に憤りを感じるセリエ

「多分これ死者の魂に肉体を渡す何かだと思うけど死体が多いのはどこ？」

予想だがいきなり現れたのはそこで死んだからである

雑魚には墓の肉体を使って復活させ

強者には魂に直接生前の一番強かった肉体を造って宿して復活させる

それならば雑魚は城の敷地内から城に入ってくるが肉体持ちは突然現れることの説明がつく

「……西じゃな。最低でも60万は死んだはずじゃ」

飛影がボジョンド国との戦争を止めたときである

「……あと肉体持ちは王族でも殺していいの？」

「構わん、死んだものは生き返らないのだからな」

死者のために生者を殺すのはナンセンスである

セリエはすぐに首を振った

「それじゃあ作戦会議ね……」

状況を整理しよう

鼻歌を歌いながら暇が潰れていることにリーベは嬉しそうに微笑む

## 死者の魂（後書き）

超展開！！？無理矢理！！？

ではなく冥界のことと繋がっています。

ちなみにゴキブリを出したのはどうやって骨を出そうか考えてた時に駅のホームにゴキブリがいたからです  
特に意味はありません

## 父と子（前書き）

まだ魔界です

## 父と子

城内部はリーベとエリアに任せてリタは城の上空から敷地内に入るものを光弾で破壊している

「この状況はどういうことですか？死者の管轄は天界ですよね」

状況を第三者から見ると下は骨が蠢いていて

上からは綺麗な光の雨が降り注いでいる天国と地獄状態である

「んゝ多分、飛影がまだ依頼が完了してないね：冥界のシステムが壊されてる。それに：こっちの世界と冥界がリンクしてきた。善も悪も関係なく人も動物も関係なく自分の身体がここで朽ちたなら次々に蘇る：今のところ150年分は蘇ってると思うね」

冷静そうに分析する ライン

## 《神の翼》

「じゃあ早く焦って死にながらなんとかしてください」

首に神の翼が突き刺さる寸前で止まる

「普通死に物狂いだと思うんですけどすいませんでしたあ！！」

突っ込みしようとしたら徐々に刺さっていてどうしようもない



「とりあえず、私とアユリが天界で色々やればこれ以上の甦りは無くなるよ」

現在ウジャウジャと骨が蠢いている

絶対強者級なら一撃で終わるが護るために全力が出せない

「じゃあ早く行ってくださいよ」

「転送札取られたから無理!!」

清々しいほどの爽やかな笑顔

《キュリクレイ・ベリアルサーズ》

リタの右手が光に包まれる

「冗談っす!! まじで!! 冗談だからほんとすいません!! ごめんなさい」

頭が潰されるかと思ってしまうほどの万力で頭を掴まれる

光がラインを包む

「これ私のせいかな!!? 完全飛影が悪いでしょ!?!」

「…ちっ」

リタが舌打ち

光の女神であるリタが心底嫌そうな顔で舌打ちをした

誰にも見せられないことである

「とりあえず：爆弾になってください」

リタはそのまま地面に向けて全力でラインを投げる

「ギャアアアアア!!」

大量に骨がいる場所に叩きつけられ包んでいた光が爆発する

それだけで骨は消滅する

ラインはぎりぎり気絶していない

(……生きてるって素晴らしい)

本当に死ぬかと思っていたラインは命の大切さを実感する

そんなラインは上空から転送札と紙切れが降ってきたことに気付く

紙の文面は

ああ：死なないんですね。しぶといですね。ゴキブリみたいです。  
その転送札で早く帰って止めてください。

ちなみにもう渡したので代金として5,000万でいいですよ

「相場の10倍!!?」

支払いたくないと思っても支払うことになる

逃げてでも光速で追われて戦ってもぶち殺される

最強すぎる取り立て屋である

しかもすでに受け取ったため代金は発生している

「とりあえず早く止めなきゃな」

これ以上増やしたら殺されそうだと予想する

ラインはすぐに転送札を使用する。

「とりあえず知らせなくてははいけませんね」

リタはラインが行ったのを確認し光を身に纏う

本来なら城に結界を張りたいが城の内部からも現れるため逃げ道は残しておきたい

そのためリタは今の座標の視界を固定して移動する

城に近づこうものなら目視による精密射撃で破壊できる

「殺しても魂は死なない…それが無ければ完全に詰んでいましたね」

リタはぼそりと呟く

彗達の時とは違い

今回は誤魔化せるものではない

今のところリタが確認した肉体持ちは王族のみ

そしてその王族は飛影の友人である

飛影には身内になにかがあれば暴走する

一度死んだ者だが今は蘇っている

魂を還すのなら飛影はキレたりはしないが魂ごと死ぬなら飛影は暴走する

そうなれば詰みである

といつてもリタはその考えまで最初は到達せずあっさりと殺したが

「はあ……」

自分自身の駄目さに溜め息がもれる

基本的にメリアの王族はかなり強い

それは一般レベルや普通の反則級の話である

つまり絶対強者級にとっては苦戦をしない

そう絶対強者級ならば苦戦はない。

今のところは絶対強者級は復活していない

「…お父……さま」

しかし、護衛がやられ城内にはリーベとエリアしかない

そしてエリアの目の前には父がいた

飛影ではなく、写真でしか見たことがない血の通った本当の父親

メリア・ガイル

事故で亡くなったエリアの父親でありセリエの息子だ

「もしかして…俺の娘？」

ガイルも対峙しているエリアに若干の戸惑いがある

ガイルの今の年齢は20歳前後

整った顔の造形で眼の色がエリアと同じである

エリアより少し歳上

「…はい」

母親の面影があるエリアにガイルはすぐに気付く

「大きくなったな…」

ガイルの意味では近付いて抱き締めたいが本能が戦いを望んでいる  
だから近付くことはできない

「……はい」

エリアの眼に涙が溜まる

「そこまで育てたのは親父か？」

「いえ、お父様は飛影様です」

すぐに否定するエリア

あっさりと誰もそんな人には育てられてませんよ？

全て私をここまで育てていただいたのはお父様ですよ？

お父様最高ですよ？

という念が込もっているかのようであった

「はい！！！？…え！！！？飛影に育てられたの！？社会に適合できてるか！！！？悩みはないか！！！？馬鹿になったりはしてないか！！！？」

本気で心配するガイル

飛影は友人として家族として一緒だったがそりやまあ大変非常識なのでいくら子育ての経験者でも物凄く不安である

「お父様の侮辱は許しませんよ」

いくら実の父親でも許しませんよ？

お父様の侮辱をする方は殺しますよ？

廻しますよ？

と雰囲気が滲み出ていた

一歩たじろいでしまうガイル

「侮辱じゃないんだけど…まあ確かに飛影ならなんとかできるか」

安心したかのように安堵の溜め息を吐く

「飛影はいるのか？」

「今は外出しています」

「あら…残念、殺してもらいたかったんだが…」

自分自身の状況はわかっているガイル

本能に殺戮と戦闘が根付いている

目の前の娘にすら殺意をいだいてしまう

そうなる前に殺されたいと考えるが飛影がない

「エリアは今いくつだ？」

「16歳です」

「じゃあ今すぐ逃げろ…俺に娘を殺させないでくれ」

強靱な意思で本能を押さえつけているがすでに限界に近い

愛する娘を今すぐに殺したい

メリアの王族の特徴として基本的に成人に近いのが一番強い時代である

ガイルは20歳の肉体

エリアは16歳

ましてや女の子のエリアである

ガイルの判断は正しい

しかしそれは普通に育ったエリアの王族の話になる

「お父様…私に戦いを教え稽古してくださったのはあのお父様ですよ」

意思とは別に魔力が開放され構えるガイル

エリアも魔力を開放し構える

「あの飛影にか…それなら安心だ…エリアに俺が殺せるか？」



「無理ですよ、殺すなんてしたくないです」

本当の父親と母親は死んでしまっている

飛影がいたから大丈夫だったが、時々本当の父親と母親のことを考える

何故死んでしまったのかと

本当の父親と母親と飛影に囲まれていればどれだけ幸せだったかと

「ですが：還すだけなら私はやります、死んだ者は生き返らない：だから、自然の摂理を守るだけです」

「……逞しく育ったな」

「はい！」

《迴眼》

《クリウス》

戦いは佳境に入っていた

リタ

静紅

シレーイ

は絶対強者級と対峙している

黒鋼

リーベ

アンジェレネ

コトハ

彗

秋野

火月

は雑魚を掃討している

ラインとアユリは上手く処置ができてきて死者の復活はもう起きていない

彗達三人の反則級はリタから姿持ち以外の駆除を頼まれていた

姿持ちからは逃げろと言われている

秋野もそれを忠実に守っていた

骨を蹴り飛ばして消滅させる

「……」

「っ！！？」

その背後に誰かが接近していた

（まずい！！！？）

姿持ち

背後から殺気と攻撃の気配を感じる

その場から退きながら振り向いた時にはすでに遅くナイフが眼前に迫っていた

（動きが予想されてた！？）

もう間に合わない

秋野がこんなことなら彗に告白したかったなと最後に思い

直前でナイフが弾かれる

「大丈夫か！？」

そこにいたのは綺麗な青年であった

身の丈ほどある槍でナイフを叩き落としていた

「キサ…」

「とりあえず死のうか？」

急な乱入者が現れて動きが硬直した男

秋野を助けた青年は槍で一刀両断にする

「あ…ありがとうございます」

一瞬見とれてしまった

「気にするな、ふむふむ…これは驚いた…君の名前は？」

秋野を観察した青年は少し驚きながな微笑む

「佐藤秋野です」

「秋野か…私の名前は…ネッセだ。少し事情が聞きたい。秋野は守るから事情を聞かせてくれないか」

手を差し出すネッセ

「はい!!」

迷うことなくその手を握り握手を交わす

## 父と子（後書き）

次は冥界です

世界を行ったり来たりでわかりづらくて申し訳ないです

エリアとガイル

秋野とネッセの話は一話ずつ書く予定です

名探偵飛影（前書き）

身体も子ども

頭も子ども

ダメダメハチャメチャ魔王飛影

## 名探偵飛影

骨が現れる10分前

何か妙な魔力を感じた飛影

（なんだ……？）

現在冥界を探索中

妙な魔力を感じる前にも違和感があった

魂の数が激減していた

最初は刑務所みたくラジオ体操でもしてるのかとアホなことを考えていたが当然そんなことはない

（……複雑に考えすぎか……ただ事実だけを汲み取る）

飛影が任されたのは冥王を救うこと

報酬は絶対強者級の処分

「はあ……」

飛影は溜め息を吐く

同時に跳躍

妙な魔力を感じた場所までおよそ5キロ

一回の跳躍で辿り着く

そこにいるのはあやめとガル

「!!?」

驚きを隠せないガルと予想していたように微笑みあやめ

今の飛影にはそれだけしか視界に入れていない

例え巨大な次元の切れ目ができていても

そこから魂が出ていても関係ない

「おい飯は!?!ご飯の支度できたら呼んでくれんじゃねえのか?」

『……』

その問いかけは予想外らしくあやめもガルもポカンとしてしまう

「なにふざけてんだ?……普通に考えて何してんだ!?!?とかが普通の反応じゃねえのか!?!?」

あやめのつつこみ

「ふん!!普通になんの意味がある!?!?」



堂々と偉そうに笑う飛影

「こいつ馬鹿だぞ」

「だが実力は本物だ」

ここに飛影の知り合いがいれば頷いていただろう

「あれ？　つかあやめ喋りかた違うな」

おどおどした喋り方におどおどした表情から一変している

ざらついたような肉食獣を思わせる表情

「ああ…今の俺はあやめじゃねえリオンだ。あいつにここは駄目だ」

「あゝなるほどね…」

少女あやめ

若くして冥王になり、悪人だけの魂が集まるこの場所で心が汚染された

「調べれた時間は二時間ぐらいだけど…けっこう調べたぜ？　魔王の名推理聞きたいか？」

「ケケ…おもしれえ！！ご披露頼むぜ名探偵！！」

目付きは鋭くなっているが元々の可愛さがあり違和感バリバリである

「おい、そんな暇は…」

飛影の名推理よりも大事なことがあるにも関わらず話を聞こうとするリオンにガルは制止しようとする

ギルギアが来る前に二人がかりで潰せば楽である

「黙れよ」

しかし、まるで深海のように底冷えした声色

たった一言でガルは黙りこくる

「まず…この発端は、多分27年前、初めてあやめが殺めた時のことだな…悪人達の魂に汚染され心がおかしくなりはじめた…それから五年後までは発作的に殺すだけだったが、今から22年前多分リオンが生まれた」

『……』

あり得ない

二人の表情から読み取れる言葉だ

「あやめを護るために生まれたリオンは、最初は悪人の魂があるから汚染されたと考える…やったことは単純、超労働…働いて働いて地獄送りにしてを繰り返す。そして時は流れた」

息をのむ音が響くほど静寂に包まれている

「今から5年前、いくら処理しても減ることがない魂に嫌気が差した。計画を変えようと考えた。多分一ヶ月後ぐらいに全く働かなくなったりオン：いやあやめかな？に文句が溜まった職員達が反発：結果は皆殺し：唯一の生き残りで反発しなかったガルが生き残る：：そして二人で天界に怪しまれないように仕事をしながら計画を立てた」

ガルが

化物

と洩らす誰が誰も反応しない

「そしてその計画は簡単だ：悪人の魂があるからだめだと：計画が決まった二人は冥界のシステム壊そうとする。悪人だけが集まらないように、善人の魂を集めよう：いやここから魂を無くして違う世界に送りつけよう：そうすればここは安泰だ：どこの世界にしよう魔界にしよう」

人の思考が全て推理されている

薄ら笑いのリオンの表情が固まった

「つい先日、誰も冥界から戻ってこない事実に気付いたラインが使者を送った：そしてその全てが戻ってこないラインは俺に依頼した：ってとこだな」

あらかた喋り終わった飛影

ゆっくりと魔力を開放する

「ケケ！！すげえよあんた！！二時間足らずでよくそんなわかったな！！尊敬だよ尊敬！！」

狂ったように笑うリオン

「情報を集めるのは得意だからな」

リオンもガルも魔力を開放していく

飛影の風華は風である

どこにでも進入し情報を集めていく

死んだ者が残したメッセージを手に入れるのに

本気の飛影の情報収集能力は魔王で一番である

「ケケ！！じゃあちよつと補足説明！！…今やってるのは黄泉帰り…死者の復活だよ！！あんたの世界も今は大量に黄泉帰ってると思うぜ！！範囲はメリアにしないとやったよ！！もつとも魔界全土に範囲を拡大するけどなあ！！」

ラインに優秀と言われたのは伊達ではなく魔力を全開放したリオンは魔王級の魔力であった

ガルも遜色ない

『茶番は終わりだ！！』

リオンは懷から銃を取り出す

《アルケミイ》

ガルは魔法を発動

攻撃が放たれる

《風華・壁》

飛影は迷うことなくリオンに向き直り防御壁を展開する

殴りかかってくるガルは完全に無視である

風の防御壁がリオンの攻撃を受けとめる

その間背中中は無防備である

「殺った!!」

飛影の後頭部に向け放つ

全力の拳

頭蓋は粉碎されるほどである

だがガルは飛影が吸血鬼だと知らない

そして

硬いもの同士がぶつかり合う音と衝撃が響く

「面白そうじゃ!! 我也混ぜろ!!」

飛影の頭蓋を粉碎した後にギルギアがその拳を受け止めていた

ニヤリと笑うリオンとガル

また二対一である

「ふざけんなやこらああああ!!?」

力なくその場に崩れ落ちそうだった飛影は踏みとどまり頭が再生する

そして怒りの視線はギルギアに

「今お前普通に間に合っただろうが!!? なんで直撃したのを見てから来るんだよ!!?」

そう…絶妙なほど狙ったタイミングで現れたギルギアだが

飛影が直撃を食らうまえに防ぐことはできた

簡単に言えばわざと飛影を助けなかったのだ

「はっ!! なぜ我が貴様を助けねばならん!!」

「それもそうか!! 全くもってその通りだ!!」

ギルギアと飛影はお互いに背中を合わせながらも喧嘩をする

「接近戦ができそうじゃからな…我がこやつを殺る…！」

「んじゃ俺はリオンを殺る…！」

ギルギアはガルと飛影はリオンと向き直る

両者共に満面の笑顔である

戦い…殺しあいを狂っているほど愛している

「フハハ…！絶対に死ぬんじゃぞ…！」

「お前もな…！」

普通は逆であるが飛影とギルギアの二人の場合は正しい

「とりあえず場所を変えるかの…！」

ギルギアは人型のまま尻尾だけを龍化する

《アルケミイ》

ガルが嫌な気配を感じると同時に魔法を発動

「ぐっ…！」

避けることすら叶わず吹き飛ばされる

「フハハ…！」

そしてギルギアもそれを追う

吹き飛ばされおよそ30キロ離れた場所に

無傷のガルとギルギアが対峙する

「硬いの……面白そうじゃ!!」

「貴様を殺し世界を壊す！！」

楽しそうに笑うギルギア

どこまでも真剣なガル

《グラビティ》

《アルケミイ》

同時に魔法を展開する

「さて……はて……さてはてさてはてさてはてえ!! さあ殺り合おう!!  
!!!! 全力で殺し合おうじゃねえか!!?」

残った飛影とリオン

両者共に笑っていた



「けっ！！戦闘狂かよ！！？…上等じゃねえか！！…だけど…俺は戦闘型じゃねえからな！！…私が相手します」

一瞬で人格が入れ替わる

《炎舞》

《風華》

《破滅のワルツ（サアイツショニオドリマショウ）》

右手に炎

左手に風を纏った拳で構える飛影

右手に拳銃

左手に拳銃と二丁拳銃を構えるあやめ

リオンの時とは違いあやめの表情は真剣そのものであった

## 名探偵飛影（後書き）

まあわかりづらいたと思いますのでまとめると

魔界を乗っ取るぜヒャッハーって感じですよ

## 父と娘の死合（前書き）

エリアとガイルの戦いです

## 父と娘の死合

ガイルの魔法

《クリウス》は移動魔法である

範囲は一キロ

そして自分しか移動ができない

魔法単体で戦うことはできないため、ガイルは近接戦ができるように身体を鍛えた

魔法は単純すぎるためそこまで強くない

だから近接戦の訓練が取れた

格闘のスキルを鍛えることで魔法の幅も広がった

エリアの魔法

《廻眼》は視界に入れているモノを強制的に廻す

だから視界から魔法で脱出できるガイルとは相性が悪い

エリアは体格的に力のぶつかり合う近接戦は苦手である

しかし戦いが始まって三分

ガイルは苦戦していた

当然エリアも厳しい戦いになっているがガイルの想定していた強さを遥かに上回っていた

《廻眼》

「くっ!!」

《クリウス》

廻眼によって強制的に視界外に移動しなければならない

エリアの背後に移動し拳を握る

「っ!!?」

それに反応したエリアは振り向き視界に入れると同時に防ごうと構える

《クリウス》

攻撃が当たる直前に再び背後に移動

エリアは躊躇なく前方に跳躍振り返りガイルを視界に入れる

魔法合戦

エリアの攻撃も届かず、ガイルの攻撃も避けられる

ガイルとしては完全に接近戦を狙いたいが上手く距離が詰められない  
また、少しでも同じ場所にいと廻りはじめてしまう

連続で魔法を使わなければならない

「エリア…その歳でその実力は大したもんだな!!」

「師がお父様なので…当然です!!」

エリアの廻眼をクリウスで避けクリウスで接近するガイルから離れる

根比べである

判断をミスると一撃でもつていかれる

エリアの視界から逃げるために広いとはいえ廊下の壁や天井を使っ  
て魔法無しで回避を試みてもエリアは的確に視界に入れていく

魔法無しでは避けられない

しかし接近戦を持続させれば視界から外れる

深呼吸で呼吸を落ち着かせる

覚悟を決めて接近

最悪腕の一本は犠牲にする

その覚悟である

手を抜こうなど本能が戦いを望んでいるこの状況でなくても行う気は無い

娘の成長を直に感じれるのだ

「ふっ!!」

《クリウス》

上に跳躍すると同時に地面に移動して着地

一瞬だけ視界が外れる

それを見逃さず爆発したかのように急速接近

勢いをそのままに一直線に駆け拳を放つ

それを見てエリアは笑う

その笑みは飛影のような笑みであった

拳が直撃する直前に防御すら間に合わない一撃に対しエリアはぎりぎり拳に触れるところまで腕を近付けさせる

直撃させ宙に浮くガイル

「は……?」

攻撃を当てた方が態勢を崩す

宙に投げ出され咄嗟のことになにも反応できない

空中で頭を逆さにして回転している

《廻眼》

ガイルの肉体が廻り始める

回転しているため全体的に身体が廻る

ミジリと碎ける音が響いた

「っ！！？」

《クリウス》

咄嗟の反応で魔法を発動

エリアの視界外である背後に移動

「しっ！！」

右腕が使い物にならなくなったがまだ左腕がある

接近戦は継続できているため問題はなかった

エリアは移動場所を予測していてすぐに振り返る



眼前には腕

視界をガイルの右腕で防がれる

自らの腕を切り裂いたガイルは視界を防ぎ廻眼すら無効化し左手を抜き手に返る

打撃よりも貫通力を重視する

直撃させれば一撃である

「!」

エリアが咄嗟に攻撃の軌道を予測し腕を犠牲にする覚悟で防御に転じ

《クリウス》

ガイルは再び背後に移動

確実に

怪我を負った状態では長期戦は不利だと考えて

この一撃で決めるために念には念をいれた

エリアは視界が塞がれ気づけなかった

気付いたとしてもすでに遅い

エリアが回避行動をとるよりも速くガイルの一撃はエリアの心臓を

穿つ

「あ…」

とん、と何かに押された

「まったくもう！！あなたが死んだら飛影さん暴走しちゃうんですよ！！」

背中から胸部までをガイルの腕が貫いた

その軌道上に存在する心臓も弾けとぶ

痛みを感じることなく即死である

「はあ…はあ！！」

息も絶え絶えで今すぐに倒れそうなガイル

そこにはガイルの一撃をエリアを護るために飛び出して代わりに食らった優希

「あ…あ」

エリアは呆然としている

ガイルは優希の身体を貫いている腕を抜く

大量の血が溢れ出す

「……だから、逃げろって言っただろ!!」

入ってきたのもわかった

しかし一切手加減できなかった

殺す気もなかった

気絶だけさせれば充分だったがどうしようもない本能

「なんなんだ!! この状況は!!?」

怒りに任せ地面をがむしやらに殴り付ける

破壊衝動も本能に含まれていて本能が薄まった

「ああああああああ!!」

娘の叫び声

優希は自分を庇って死んだ

殺された

強くあれば

エリアが

もっと強くあれば死ぬことはなかった

「お父様!! 私は貴方を殺します!!!!」

還すではなく殺す

殺気がエリアに宿る

ガイルの本能もエリアを敵として捕捉し再び構える

「もうやめろ！！今すぐに逃げろ！！」

さっきまで確かな疲労感があつたがすでに無くなっている

ガイルの制止もエリアの耳には入らない

《クリウス》

勝手に身体が魔法を構築する

勢いよく接近するエリアの眼前に移動

そのまま蹴りを放つ

《廻眼・骸腐》

エリアはその蹴りを受け流しもせずに真正面から掴む

掴んだ右手の骨が折れる音が響いたが関係なかった

掴んだ瞬間

ガイルの右足が爆ぜた

「な!!?」

掴んだ一瞬で高速で脚が廻った

「ああああああアア!!」

ガイルが驚いていてもエリアも本能も止まらない

態勢を崩したガイルにエリアがゼロ距離まで接近

《廻眼・骸腐》

エリアの廻眼の赤い光が左手にも灯される

嫌な気配を感じたガイルが左腕でエリアを殴り付ける

エリアの左手がガイルの左腕に触れる

その瞬間に爆ぜた

「ぐっ!!」

そのままエリアの左手は止まることなくガイルの首に触れ

「すまないな…エリア」

頭が爆ぜる

ガイルが最後に残したのは謝罪であった

頭が無くなり完全に反応が無くなった

エリアはその場に崩れ落ちる

掠れていく視界の中で優希の死体が映る

その表情は死んでいると思えない綺麗な微笑みだった

「…めん…なさい…」

エリアもその場で気絶する

父と娘の死合（後書き）

決着です。

## 暴走（前書き）

そろそろ話も佳境に入ります



## 暴走

「ふっ!!」

槍を一闪

それだけで10を超える黄泉帰った骨が消滅していく

ネッセと秋野は雑魚を相手にしていた

ずっと動いて骨達を消滅させながら秋野はリタから受けた説明をそのままネッセに説明する

「それで冥界ってところで色々あって黄泉帰りが起きてるそうです!!」

秋野は説明しながら力を込めて蹴りを放ち首を吹き飛ばす

「なるほどな…面倒なことになってるな」

槍を正確無比に振り回し最小の消耗で骨達を消滅していくネッセ

ネッセはまだ余裕があるが秋野は息をきらしていた

「少し休んでろ…不覚をとるぞ」

うじゃうじゃと湧き出てくる骨達

街中に骨がいた

ラインとアユリが止めたため、これ以上増えることはないがあまりにも数が多く減っている気がしないのだ

「そうします」

ネッセの言葉に秋野は素直に頷く

無理をして重傷または死亡した場合は全く意味がない

効率を上げるためにも休むことは大切だと飛影に教わっていたからである

「その冥界の方は大丈夫なのか？」

秋野が集団で空中に足場を作りそこで休憩しているのを確認してからネッセは疑問を口にする

「それは大丈夫です！！飛影先輩が行ってるんで！！」

即答だった

あまりの速さにネッセは笑ってしまう

「…そんなに強いのか？」

「物凄く強いです！それに…多分先輩なら何があっても大丈夫なんですよ」

あははと笑う秋野

「信頼してるんだな」

「そうですね、多分私の知り合いの中で一番信頼してると思います。普段はアホですけど、メチャクチャでアホですぐ喧嘩して普通の人間死ねやゝって言うてもうアホの代名詞なんですけど」

酷い言われようの飛影

しかし秋野のそれは悪口ではなく自慢するかのように誇らしいものであった

「でも、アホですけど…安心できるんです」

それは理屈ではない

なんとなくレベルのものである

「あれか？秋野はその飛影を好きなのか？」

「普通に好きですよ、恋愛対象ではないですけど」

からかったつもりのネッセ

慌てる様子を見たかったのだが素で返される

ただそこ返答は面白いものでネッセは笑みが溢れる

「……アホなことっていうのはどんなことをしてるんだ？」

「行動一つ一つがアホです！！何やるかわからないですし、こっちの予想を裏切りますし」

あはははと大声で笑うネッセ

その間でも手は全く止まっておらず、むしろ先ほどよりも速いまるで舞っているような美しさすらある

「ネッセさんって絶対強者級ってどう思います？」

ふと気になった秋野の疑問

ネッセの実力は確かなもので秋野と同じ反則級だが格が違う

今メリアで起きている絶対強者級同士の戦いはアンジェレネが必死に世界に飛ばしているため絶対強者級の戦いは魔界の次元では起きているが

逆に反則級は雑魚と一緒に扱いになっているため遭遇することがある

そんな時にネッセが蹴散らしているため、絶対強者級の実力を持っているまたは将来持ちそうだと秋野は感じたための疑問である

「どう思うか？…一言で表すなら羨ましい…その一言につきる」

「羨ましい…ですか？」

「私はもう絶対強者級になれないのはわかっているからな、その領

域まで行きたかった」

秋野としてはネッセの歳は20前後に見える

飛影達と比べると充分に若い

まだまだ努力すれば届きそうだとも思えるが、諦めているようだった

「もしかして：絶対強者級と戦ったことがあるんですか？」

「戦ったことはない：しかし助けられたことがある。その実力は凄いものだった。そして自分がどれだけ頑張ってもその領域までいけないことを学んだ」

諦めている原因として直にその実力を見たことがあると考えた秋野  
質問として戦ったと聞いたが返答は逆の助けられたであった

その選択肢は無かったと秋野は頷いた

「助けられたで羨ましい：ですか？」

助けられたのなら憧れを普通は抱くのではないかと再び疑問が浮かぶ

「その絶対強者級と同じ場所に立てないからな、本気の喧嘩もできない、そいつと一緒に過ごすこともできないからな」

反則級では例外もいるが不老ではない

絶対強者級程度の魔力があることで初めて不老になる

細胞の老化は遅くなるが、寿命は変わらないのだ

「…そうですかね？ 私はその飛影先輩と一緒に時間を過ごしてますよ？」

秋野の返答にネッセは哀しく笑う

「いつか…気付く…老いる身体…そいつは先に進むのについていけない時間の差…同じ時を過ごしたいのに過ごせなくなる…だが絶対強者級同士はずっと一緒だ」

まるで経験したかのような

いや経験した者の言葉

秋野はそう判断するしかない

「秋野は私のようになるなよ」

「はい、私は大丈夫です。絶対強者は飛影先輩ですから」

なんとなくそんな自信があった

「違うんだ…あいつだからずっと永遠にいたくなかったんだ」

「え？」

秋野にはよく聞こえず聞き返す

秋野は休憩を終え地面に着地

「わ！！？」

同時に強い地震が起きたかのように揺れる

咄嗟のことに態勢を崩しそうになる秋野をネッセは腕を掴んで支える

「……地震？」

それしか無いとは思うのだが秋野はなにかが違うと直感できた

ネッセは秋野の一人言のような疑問に答えることはなくただ空を見上げていた

秋野も釣られて見上げる

次元の切れ目ができていた

その奥には薄気味悪い世界が見えた

「世界同士で繋がったか…」

魔界と冥界の二つの世界が繋がる

それは異常事態である

「……い」

同時に圧迫が起こる

胸が締め付けられるような感覚に秋野はその場で膝をつく

同時に骨達が消滅していく

国民も魔力に態勢が無いものはその場で意識を失う

「これは…」

次元の切れ目から影が現れる

飛影であつた

「あは：あははははははははは！！」

狂ったかのような笑顔で笑い声をあげる飛影

上下だけで500メートルは離れているはずだがネッセや秋野の耳にも届いている

「あいつ…暴走してる…」

《炎舞・エンド》

空に小さな闇色の炎が浮かぶ

それは酸素を吸って成長しているかのようになんてい

それが何を意味するか



秋野には余裕がなくわからなかった

「待て飛影!! この国を…この世界を滅ぼすつもりか!!?」

《威雷・瞬雷》

青年ネツセ…ではなく

飛影の最初の友

女王セツネとして魔法を発動

雷がセツネを包み飛影のところまで移動する

「おい飛影!!」

久しぶりの対面

感動もなにもない

「あはは…全部壊す…壊してやる!!!!」

セツネの制止も虚しく飛影は止まらない

しかし魔法を発動して接近したセツネに僅かに意識が移る

同時に飛影の上半身が爆散する

「助かったぞ人間!!」

飛影の身体を爆散させたのは龍形態になっているギルギアであった

「きゅ」

セツネの時は飛影は吸血鬼ではなかった

そのためギルギアに掴みかかろうとした瞬間

飛影が再生する

《グラビティ・圧》

その飛影を叩き潰すギルギア

「こやつはここで殺す!!」

ギルギアの眼は本気であった

## 暴走（後書き）

ネツセはセツネです

セツネさんバカなんで咄嗟にでたのが逆読みでした

飛影とギルギアの状況は次話です

## 暴走の理由（前書き）

ギルギアとガル

飛影とあやめの戦いです

## 暴走の理由

魔界と冥界が繋がる少し前のことである

ギルギアはガルと戦っていた

「ふむ…我と打ち合ってもほぼ無傷とは面白いの」

拳を打ち合わせること実に1,000発以上

ギルギアは不敵に笑い

ガルは息をきらしていた

ギルギアの鎧は所々にヒビが入っている

「それはこっちの台詞だ…俺と打ち合ってもほぼ無傷じゃないか」

ガルの魔法

《アルケミイ》

は硬化の魔法である

自分自身を硬化する硬い膜を生み出す魔法だ

最初に飛影とギルギアが放った衝撃波を防いだのもこの魔法である

「全力で殴ったのにも関わらずなんで損傷がそんな少ないんだ」

ギルギアの鎧

龍の鱗を部分的に人型形態でも使用しているだけ

かなり強固な鎧だが魔法と比べたら劣る

しかしほぼ無傷に等しい状態である

「なに：単純じゃ、貴様に力が無いだけじゃ」

そしてその答えは簡単だった

パワー不足

いくら硬いものでもパワーがなければ砕くことはできない

飛影の場合は硬さがなかったためパワーで砕いているだけである

《グラビティ・圧》

「あとあれじゃな：我と貴様は相性が悪いからの」

ギルギアは魔法を発動

上からの力がガルを押し潰す

「グウ！！」

あまりの重さにその場で膝をつく

どんなに硬くても動けなければ意味がない

「魔法自体は面白いんじゃないが微妙なんじゃないよ…貴様は」

硬いだけで応用力がない

パワーもスピードもないただの硬いだけ

それがギルギアの印象であり事実である

ガルが重力の檻から抜け出そうと力を込めた瞬間

重力が増した

今度は膝をつくレベルではない

押し潰されるレベル

全身が床に食い込んでいる

どうあがいても抜け出せない

相性以上に圧倒的な実力差がそこにはあった

「ぐああ…ああ!!」

痛みで呻き声をあげるガル

《アルケミイ》

魔法を発動

「悪手じゃ」

ガルの魔法は硬い膜を生み出す魔法だ

膜というのは物質であり重さが備わっている

そんなもので防御しようとするれば逆効果である

膜が例え一グラムでもあれば今の膜は軽く見積もって100トン

ギルギアからすれば自殺行為である

「がっ!!」

最後に声にならない悲鳴をあげ潰れる

死んで魔力が操れなくなりガルだったものは潰され文字通り跡形もなく消えた

「ふむ：絶対強者級でもこの程度かの」

ほぼ損傷なし

接近戦最強は伊達ではない

「む?」



勝利の余韻どころか退屈の溜め息を吐こうとしたギルギア

いきなり背筋が凍った

遅れて圧迫感が世界に広がる

「やつか…」

誰かすら考える必要なくギルギアは答えに辿り着く

「シーレイの言う通りならこつからが本番じゃな…」

ギルギアは首の骨を一度鳴らし魔力全開

笑みを溢しながら跳躍する

再び時は遡る

ギルギアとガルが打ち合っていた時

飛影はあやめと対峙していた

あやめの武器は二丁拳銃

対する飛影は素手である

どちらが不利かなど答えるまでもなくあやめである

銃は所詮銃

弾丸より速く動けること

撃つ瞬間の隙

軌道が丸わかり

絶対強者級からすれば避けてくださいね二秒後に貴方の額を狙って撃ちますからと言われてから撃たれるようなものである

威力もたかが知れている

「いきますよ」

「こいや!!」

《無限色・緑》

《風華・壁》

あやめは魔法によりその常識を容易く撃ち破った

あやめの放った弾丸は飛影が風華の壁を展開するより早く飛影に直撃する

「っ…わぁお!!」

壁を展開しながら次の行動に移っていた飛影は腕を掠める程度だが驚きは充分だ

「今の最速の弾なんですけど避けますか…」

「面白いな…」

弾という物質は飛ばしていない

あやめにとって銃は魔法の威力底上げの集中とイメージする道具であった

「それでは…飛ばしますよ」

あやめは二丁拳銃を構える

《炎舞・掌》

《風華・纏》

飛影は無炎を両手に纏い風を全身に纏う

「いー！」

飛影が応じると同時

《無限色・128》

あやめの連弾が始まる

赤・青・緑

三色を基準に僅かな色の違いで性質が変化する

追尾する弾

威力重視の弾  
速い弾  
範囲がでかい弾

高速で撃ち出される無数の弾丸

「っ！！？」

まるで弾の壁

飛影は近付くこともできない

防いで脚を止めたら集中放火を食らう

風と無炎で弾を受け流し相殺し流しきれず掠り狙いが定まらないように不規則な動きを続ける

それでも動き続ける

攻撃を避けながらも飛影は弾幕を観察する

弾一発一発の威力は低い

だが一発でも食らい脚を止めたら最後

魔力も体力もこのままでは飛影の方が先に無くなる

飛影は避けながら吸血鬼の爪を伸ばす

無炎を纏った爪を移動しながら速度が落ちないように動きが規則正

しくならないように

ただ集中する

僅かな隙を待つ

「ふっ！！！！」

そして訪れた隙

観察し僅かな色の違いを見極めほんの僅かな隙を発見

飛影は力の限り振り切る

攻撃力最強の飛影

万全の態勢ではないが無炎と爪によって発生した鎌鼬が合わさり

無数の弾丸相手に相殺する

《炎舞・流星槍》

そしてそのお陰でできた魔法構築の時間

飛影は最短で一番強力な技を選択

飛影の手に無炎の槍が構築

「おらぁ！！！！！」

無駄無くその槍を投擲

新たにあやめが放った弾丸を焼失させ一直線にあやめに放たれる

《無限色・黒》

あやめは咄嗟に魔法を構築

一番威力がある弾を両銃で一発ずつ受け流すような角度で放つ

ぎりぎり逸れる

《炎舞・流星群》

《無限色・256》

飛影の背後に大量の無炎の槍が構成される

あやめは両手に先ほどの二倍の魔力を込める

弾幕合戦

殴り合いではなく、火力と数での中距離合戦

飛影が笑うと同時に闇色の流星が放たれる

そしてあやめも魔法を発動

力VS量

降り注ぐ無炎の槍

真っ向するは億数もの弾

力では飛影は最強である

その飛影に対して物量で挑む

それは一番可能性がある戦いだ

「…くっ!!?」

先程の弾幕の100倍程の物量

にも関わらず拮抗している

飛影は余裕の表情で次々に無炎の槍を生み出し放つ

拮抗したのも僅かな時間であやめは徐々に押されていく

《無限色・1024》

《炎舞・絶断》

あやめが更に全魔力を込めて魔法を発動

威力、量ともに倍増した弾幕

飛影はそれに対して爪を媒介にして無炎を纏わせる

20メートル程の大きさであるが手刀の延長である

「うん、あやめ…楽しめたぞ!!」

あやめの弾幕が飛影の無炎を押し崩すと同時に飛影は振り下ろした

絶断

剣が巨大化し高層ビル程の大きさになりその名の通りに直線上のすべてを絶った

無数の弾幕も一本の剣撃に全てを破壊される

「あぐ…!!」

あやめが回避する時間も無く左腕を焼失させる

「俺の勝ち、まだやるかい？」

「やんねえよ…完膚なきまでに敗けたよこっちの」

飛影の問いに答えたのはリオンであった

「けっ!!合格だよ合格!!」

両手を挙げようとして降参ポーズ

左腕はないため右腕だけだが雰囲気でわかった

「ったくよ!!さっき気付いたらシステムハックし返されて元通りになっちまったし!!俺は負けるし!!あゝくそ!!俺こんなところ



から脱出したかったんだけどな」

あゝあゝと深い溜め息

魔力はもう抑えていて戦う気は見受けられない

飛影も魔力を抑える

「脱出させんのはいいが…とりあえず黄泉帰りしたやつを還せ」

「ほんとか!!?」

飛影の一言目に嬉しそうに反応するリオン

ギルギアはまだ戦っているようだが負けるとは思わないので飛影は気にしない

「あゝでも…還すには消滅させるしかないんだよ!!」

目を逸らし言いにくそうなりオン

リタ達がいるから大丈夫だろうと飛影は不安を覚えるがすぐに拭えた

「一応強い人には肉体持たせて感覚共有できるから覗けるけど見るかい?」

リオンはどうせ時期がくるまで出られないからと暇潰しに提案する

次元の切れ目には魂しか送れない

それに天界に制御をとられているためその機能すら無くなっている

気になる反面見たくない飛影だが状況は知りたかった

「頼む」

リオンは次元の切れ目に映像を映し出す

「肉体持つてるやつ視点なこれ」

映像として映し出されたのはリタである

しかし一瞬だけ映りいきなり映像がぶれ切れる

「あっ殺られた」

一瞬であった

さすがリタだと飛影は頷く

「んじゃ次」

リオンは次の映像を映し出す

次は秋野が映っていた

しかしその表情に敵意はなく視点で見ると骨を破壊していた

「うわ…こいつすげえ!!」

本能にあやめと同じ殺戮と破壊を埋め込んであるが、この視点の肉

体持ちはリオンからすれば神のような精神力を持っている

攻撃の意志は完全に無く飛影は安心する

「次は」

リオンが視点を変更

映し出されたのはエリアだった

「っ！！？」

「知り合い？」

飛影の表情を見て視点を固定する

「娘だ」

「娘いるんだあんた…ふん」

興味ないように相槌をうつリオン

「うわ…こいつ移動魔法持ちか…視点がゆらゆらする」

戦いはじめて少し経ちリオンは文句を垂れる

「おい！！こいつの動きを止めろ！！」

「無理だよ！！んなもん！！」

嫌な予感がした飛影

この時飛影は重大な間違いを三つ犯している

一つはあやめを殺さなかったこと

二つはリオンの提案を受けたこと

三つは例え天界がどうなろうとも今すぐに冥界を壊してヘリオトロ  
ープで魔界に戻らなかったことだ

そして少し経ち

「おっ…あんたの娘ピンチだぞ!？」

どこか興奮しているリオン

映像はエリアが手刀で刺されそうな場面である

気付けば飛影は齒を食い縛り拳が血塗れになり再生を繰り返している

ピンチならシーレイとかリタが助けてくれるはずだと願って

そして飛影の願い通りにエリアが視点から外れ手刀の範囲から逃れる

代わりに見知った背中に刺さる

「あ…」

「おい!! あんたの娘生きたぞ!! 代わりに誰か死んだけど」

その存在がわからないリオンは娘が生きて良かったなと言っている

他人の視点の後ろ姿だけでわかる

市原優希である

人間界に来て最初にできた家族

飛影が気に入っているため普通の人間ではないが

心臓が無くなれば死んでしまう

他人の目でもわかってしまった

（…優希が死んだ？…：そんなわけはない…優希は強い子だ…でも…無理だ…これは現実だ…あれは致命傷だ…生きることが許されない傷だ…なんで死んだ？誰が殺した！？この視点のやつか！！？リオンか！？あやめか！？依頼したラインか！？…：違うか…俺のせいか…俺がいれば護れた…はずなのに…もういい…もういいや…優希が死ぬ運命だなんて信じられるか…もういい…こんな世界は滅んじまえばいい…！！）

「あは…」

笑い声が聞こえた

その笑い声は冥界という悪意の闇に汚染された精神をもっているリオンに寒気を与えた

「あはは…あはははははははは！！」

「う…あ!!!？」

(マズイ!!！)

これはヤバイ

殺戮と破壊の本能が恐怖で逃げろと叫ぶ

リオンはその場から離れようとしたが飛影がそれを目で追っていた

《無限色・1024》

リオンはあやめに代わりに片腕でも銃を構えて魔法を発動

「あはは!!！」

魔法を放つと同時にすでに飛影は接近していた

頭が弾け飛ぶが止まらない

一瞬で首が再生しあやめは飛影が本来得意とする間合いまで接近を許してしまった

頭を掴まれ一瞬で地面に叩きつけられ腹を裂かれた

「アアアアアアあ!!！」

腹を裂かれ激痛が襲う

皮と肉が綺麗に剥がされ内蔵が露出する



「ぐっ…!!!?」

世界が崩壊する

ギルギアはあまりの力に風も追加されなす統べなく吹き飛ばされる

およそ300キロ

ただダメージやらその後の攻撃や世界のことを考えず力を放出させた一撃でギルギアが吹き飛ばされた距離

そして150キロ

無炎の熱と風華の暴風で地表が吹き飛んだ距離である

「あはははははは!!」

世界が壊れかけ

天界よりも次元の切れ目で繋がっていた魔界と共振

接続される

そして飛影は切れ目を通って魔界に戻り

ギルギアはそれを追い

あの場面に戻る



## 暴走の理由（後書き）

ギルギアはあれですよ、強すぎるんであんな感じに

あやめは近接は苦手なので連射で近付かせないように戦っていました

作中でキレると暴走で分けてたと思うんですが、キレるは怒り暴走は狂います

次回は飛影殺しです

## 作戦会議（前書き）

暴走した飛影を止めるために作戦会議です

## 作戦会議

そして時は元に戻る

吹き飛ばされて更にそのあとを完全に無視されたギルギアはキレていた

「殺す…」

《グラビティ》

対するは狂った飛影

「あははは！！」

《炎舞》

《風華》

本気の殺し合い

周りを気にすること無くこの二人が衝突すれば魔界は確実に崩壊する

《次元破壊》

《キュリクレイ》

《神の翼》

《スロウス》

《クルーズ》

《黒霧》

絶対強者級4人と反則級最上位

合計五人が殺すつもりで魔法を発動

その殺気に反応したギルギアと飛影は注意が逸れる

《アンビリルワールド》

飛影の背後に出現したアンジェレネは飛影をそのまま世界に幽閉する

そしてその後にギルギアも送り込む

「ふう…これで良いのですよねシーレイ」

犠牲者も負傷者も出すことなく飛影とギルギアを幽閉隔離

「うん…あと…30分…戦う…わからない…暴走…止める…考える…主役…おまえ」

シーレイが指差したのは次元破壊で拉致られた未だに状況がわからないセツネである

「私がどうかしたか!？」

いくらセツネでも初見でシーレイの喋るの面倒喋りの意味を理解できなかった

現在場所は記念公園

肉体持ちの残党狩りも全て終えて黄泉がえりは全て消し去った

リタ

シーレイ

アンジェレネ

静紅

コトハ

黒鋼

セツネ

が集まっていた

リーベはまだやることがあるらしいのでここにはいない

「今のを説明するならば、飛影とギルギアさんの戦いは30分程続きます。しかしどっちが生き残るかはわかりません。そのために飛影の暴走を止める必要があります、その役目はあなたが一番確率が高い。それがシーレイの言いたいことです」

もはや暗号レベルだがリタは軽々と解読する

「まあ貴女が誰かわかりませんが…」

このメンバーの中でセツネを知っているものはいない

だがシーレイがいうなら間違いない

それはわかっていた

「ヒャアアアアアア!?!?」

悲鳴が聞こえた

全員が生き残りがいたのかと身構えるが接近する悲鳴と魔力で構えをとく

「何やっっているんだ椿」

飛んでいる椿の脚を掴むセツネ

そこに配慮は無かった

速度を落とすだけで離す

垂直に落ちる椿

「椿ちゃんどこ行ってたんですかぁ！？この大変な時に！？」

「寝てた！！」

アンジェレネの問いに即答

寝ていたところをリーベに起こされ投げられたのである

「…事情はリーベちゃんに全部聞いたよ…黄泉がえりと飛影の暴走でしょ？黄泉がえりが解決してるんだったらあとは飛影の暴走だけ…それであってる？」

飛影のことは椿に聞くそれは全員の共通意識である

「間違いないよ。状況としてはアンビリアルワールドで飛影とギルギアが殺し合い中」

若干いつもの無表情ではなく焦りがとれる黒鋼

「すごい状況だね：飛影とギルギアさんが殺し合いか：飛影を止めるのにギルギアさんを使う：誰がそう仕向けた？」

椿はこんな状況でもあっけらかんと冷静だった

「ん…」

椿の問いにシーレイは手を上げる

少し前に人間界にいつて直接話をつけに行ったのである

「飛影の暴走を止めれるのは多分ギルギアさんだけだから：他の人だと殺すことができないからね、一瞬でも同情しちゃえばその隙に殺されるから」

飛影に好意を持つ者が暴走した飛影と戦えば正氣に戻るように言いながら戦う

その間僅かながら注意が逸れてしまう

他にも飛影が少しでも正氣に戻る振りをすれば油断しその隙に殺される

常時殺意を持っているギルギアだからこそ止められるのだ

「さて：飛影を止めるための作戦会議をしよう！！」

どこか馴れている様子の椿

そんな椿に疑問を抱く静紅

「椿ちゃん：飛影くんって何回暴走したことあるの？」

「私が知る限り五回：でも今回ほどやばいのは初めて」

今まで椿が経験した飛影の暴走はほぼ未遂である

笑い始めてすぐに椿は止めていたが

今は完全に狂った状態である

「今回の鍵はセツネさん。他の人は脇役に徹してほしい」

『は？』

椿と黒鋼以外が聞き返す

「ちょっと待て他の人は絶対強者級だろ！！？何故私なんだ！？」

何故自分かさっぱりわからないセツネ

「ってかこの人誰ですか！？」

セツネが未だに誰こいつレベルのアンジェレネ



「メリアの始まりの王…女王セツネよ…初めてではなく今のメリアを始めた王にして稀代の強者…よね。外見的特徴と槍を持っているし名前の三つがわかってるからわかったわ…死んだって聞いているけど」

飛影と共同でメリアを世界一の大国にしたセツネ

それは偉業のことであり彼女のことを記述している本は山のようにある

しかし死亡している

黄泉がえりのため、全員少し身構える

「なんか生き返った」

秋野の説明で冥界の何やらでこの状況になっているのは理解している

「本能は大丈夫ですか？」

黄泉がえりは全員殺戮と破壊の本能が埋め込まれている

後ろから刺されたらそれが隙になり殺される

そうなる前に殺してしまおうかとリタは考えていた

「本能？別にそんなもんは無いが」

何を言ってるんだという表情のセツネ

「セツネさんはね…飛影の初めての友達にして親友」

飛影と親しい者なら一度は名前は聞いたことがあった

セツネの名前はメリアの教科書にでかでかと載っている

そして今よりももっと人間嫌いな飛影の初めての友達ということは何かしら超越している

セツネの場合はそれが精神力であった

殺意が完全に無いことを確認してリタは敵意を引っ込める

「なるほど!! わかりました!! それで貴女はだれですか!？」

セツネのことは理解したアンジェレネ

次の狙いはコトハである

コトハは飛影の知り合いの中でも全く関係性はない

せいぜいがリタが一度会ったぐらいである

「…コトハよ…強さは反則級…ひくくんとはかれこれ4～50年の付き合いよ」

「まじですか!!?」

静紅やリタやシーレイやアンジェレネよりも長い付き合い

この中でそれ以上は椿とセツネと黒鋼ぐらいである

「とりあえずみんなが飛影を助けたいって目的を持っているのは分かったことだし！！今度こそ作戦を決めたいんだけど」

まあ作戦ってほどじゃないけど

と椿は付け加える

「作戦は簡単！！セツネさんが飛影殴って説得する！！」

『…』

続きは無かった

殴って説得

椿の言う通り作戦というほどのものではない

一言である

セツネが手を上げる

「椿はわかっているが…私は反則級だぞ…飛影に接近する前に殺される」

「それを何とかするのが脇役な皆さんです。ギルギアさんと戦って消耗してる飛影にこれだけ強い人がいたらそのぐらいの隙は作れるでしょ？」

セツネがただの普通の人間なら無理だ

ただの人間なら近付くことすら不可能だ

しかしセツネは反則級でも強力な部類に入る

近付くことだけなら可能である

「流れは理解しました」

自分の役割を正しく理解してリタは準備を始める

準備と言っても準備体操レベルであるが

「絶対強者級と戦ってたりタちゃん達は大丈夫？」

外傷は見受けられないが魔力がどうか次第で戦わせないようになければならない

「私は大丈夫です」

「私も大丈夫よ」

「ん…」

三人とも問題はない

相手と相性が良かったのもあり初見で殺していた

故に魔力消費も多くは無く外傷も掠り傷レベル

「よし!! じゃあやろう!!」

『おお!!』

椿が飛影のように拳を上げるため釣られて全員が拳を上げる

## 作戦会議（後書き）

こんな作戦で上手くいくのか？  
鍵はセツネとある人物次第です

## 90話記念(前書き)

90話な記念です

## 90話記念

『いえええい!!!』

「暴走してる飛影と!!!?」

「死んじやった優希です!!!」

「本編で死んじやったな」

「死んじやいました!!!まじ無いですよ!!!」

「そのせいで俺暴走してるし」

「ごめんちゃい!!!」

「許さん!!!」

「許してください!!!」

「まあいいけど」

「しっかりあれですね!!!」

「なんだ!?!」

「なんでもないっす!!!」



「ふん!!」

「でこぴん痛い!!?」

「痛くしたからな!!」

「そういえばこの話はどんな話ですか?」

「俺が知るか!!ただ優希に出番をあげただけじゃないか?」

「やっぱり私完全死亡ですか!!?」

「いや死んでるから!!」

「ですよ〜」

「死ぬならセツネさんのように綺麗に死にたかったです!!」

「無理だ!!すでに死んでるからな!!」

「飛影さんの暴走って何なんですか?今完全に頭狂ってますよ」

「簡単に言えば子供の駄々をこねてる状態だ!!好きなものが無くなって取り戻せないときって子供は駄々をこねるだろ?そんなんだ」

「なるほど!!子供の駄々で世界崩壊ですか!?スケールデカイデスネ!!」

「てへ♪」

「もう意味わからんデスヨ!!」

「俺もお前のテンションがわからん!!」

「キャハ!!」

「ドカン」

「へぐ!!?」

「…」

「ぬあああにするんですかあ!!?いくら私が可愛すぎるからってDVは駄目ですよ!!」

「……ぬがあ!!あまりにも優希が可愛すぎてその頭を潰したくなってきたああ!!!!」

「ひゃ…」

「うりうり」

「頭撫でてもらうのは嬉しいですけど…今考えたらこの状況って核爆弾が頭に乗っかってるレベルですよね!!?」

「俺の拳は世界を砕く!!」

「核爆弾以上ですかい!!?」

「だって魔王だもん」

「最悪つすマジ災厄ですね!？」

「今自分で上手いこと言った！！って思っただろ！！？」

「さ……さあ……どうでしょう？」

「目あわせや」

「お客さんお触り禁止ですよ!!」ってスイマセン調子こきました!!  
頭撫でるの恐いです!!」

「さて……そろそろ本題に突入しようかね」

「本題ですかあ!?! いいじゃないですか!?! くっちゃべってれば」

「しかし言われたんだ!!」

「誰にですか」

「さあ！！？」

「知らないんですか！！？」

「なんとなくだ」

それは人間界の学校が壊れていなかった時である

全学年での授業参観日のことである

授業参観…それは親保護者が子供達の授業風景を見て

うちの子供はこんなに凄い

あら？うちの子供の方が凄いわ

と自らの子供をだしに使っての自慢話に花を咲かせ

できていなかった子供には放課後に注意される

事前に怒らないからと言われていたのに怒られる

子供にとっては理不尽を感じる行事である

しかし高校になって授業参観というのは意外に少ないのであるがドラマと飛影が何となくで企画したものだ

教師達はモンスターペアレントが恐いため参観後の保護者との懇談会のようなもので保護者達と打ち解けることが重要である

そのため、授業参観自体に反対意見は無い

しかし約一名反対者がいた

その授業参観日にその時間帯に運悪く飛影のいるクラスを担当する教師である

飛影が授業をまともに受けたことがあるのはただの一度もない（エ

リア特別入学前である)

注意しても聞かない

評判が落ちますよと必死にダドマに抗議してみるが無駄であった

そして当日

午後の二つの授業が授業参観の時間帯である

教師達はその当日に気付いた

飛影の周囲への迷惑はクラスに留まらないと

しかしもう遅い

まず今日の飛影はどんな感じかと一時間目の教師が観察する

「ロン!!! 3, 900!!! うっしやきたこれ!!!」

叫んでいた

いつもの通りに

ちなみに飛影が3, 900程度で叫んでいるのはリタに役満を8連続であがられたからだ

「あっ：飛影ツモです。大三元、スーアンでダブルです」

「うぎゃああ!!!」

二時間目

体育

持久走

三キロを手早く片付けて

リタとバスケをしていた

三時間目

技術家庭科

調理実習

「はい終了!!」

「役得ですね」

「昼飯代浮いてラッキー」

リタと彗で組んでいて他のグループよりも早く終わらせる

材料は提供したものを使用していたが料理が違う

どこのプロだという出来であった

四時間目

国語

「ああ飛影一回休みです!!」

「俺スタートから動いてねえ!!?」

自作人生ゲーム

「ゴールです」

「スタートから一步も動けない俺をいたぶって楽しいかチクシヨお  
おお!!」

完全敗北に飛影は窓から飛び降りる

昼休み

教師全員焦っていた

いつも通りであった

そして苦難の末とった行動は職員室に呼び出して反省文＋説教で授業参観終了まで時間を稼ぐことである

そして放送で呼び出す

そして授業参観の授業が始まる

開始直後まず授業が開始できていなかった

当然飛影が職員室に行くわけもない

「ふっふっふ！！飛影さん来ちゃいました！！」

「暇だから来たわ！！」

優希とリーベが来ていた

「よく来たな！！ってかよく知ってたな！？」

「リタさんに聞きました！！」

いえーいと飛影と優希はハイタッチ

「えーと…市原君のご友人かな？授業参観だけど学校は大丈夫かい！？」

このままでは授業が開始できないと悟った教師

学校をサボってるようなら追いつくそうと考えていた

「学校行っていないですから大丈夫です！！飛影さんの使用人なんので保護者です！！」

「普通逆だろ！！？ってしまった！！」

現在飛影達は物凄い目で保護者たちから見られていた

知らないふりをしようとしていた犇だがツツコミを入れてしまい仲



間だと思われた

「私は飛影の妻よ！！保護者じゃない！！」

『おい！！？』

飛影とリタと優希と慧のツツコミ

「まあ冗談は置いて…早く授業を始めなさいよ」

傍若無人

リーベ達が授業を妨害していたがまさかそのリーベが授業を始めるように促す

今日のリーベの格好もいつも通りジャージであった

「そ…そうですね…授業を始めます」

こうして数学の授業が始まった

「よっこらせ」

同時に飛影は麻雀の準備を始める

面子が四人揃っていたからだ

当然保護者達の目が教師に止めろよという視線を送る

「市原！！今は授業中だ！！」

注意しなければ心象が悪くなりクレームが発生する

そう判断した教師は正しい

しかし相手は飛影だ

「どんどんじゃらららどんじゃらら」

完全に無視

飛影はやる気でリタは飛影がやる気ならと準備を手伝いリーベも参戦する気満々

優希だけは視線が痛そうにしている

（これが絶対強者級か！！？）

彗は心の中で絶対強者級の凄さを思い知った

本当に周りは有象無象である

誰も止めようとしておらず、保護者からの非難の目が突き刺さる教師

小声で親の顔が見てみたいわねと保護者同士で会話していた

だがまあそんなことは耳に入らない

そんな時にシーレイが教室に眠そうにやってくる

また厄介事かと教師の胃がキリキリと痛みますがシーレイは逆に教師の女神であった

「どうしたシーレイ？」

「飛影…このまま…椿…殺される」

ピタリと飛影の動きが止まった

今は普通に解説すれば飛影がこのままだと椿が殺されるとSOSだが

飛影とリタとリーベと優希にはこう聞こえた

飛影がこのまま遊んでると椿がやってきて飛影殺されるよと

シーレイがわざわざやってきて言うことはかなり悲惨なことになると予想ができた

それだけを告げるとシーレイは教室から出ていく

一瞬だけ静まる教室

飛影の動きは速かった

直ぐに麻雀牌を仕舞い枕を取り出した

リタは授業の準備を

リーベもすぐさま飛影の膝の上に座る

完璧な撤収作業

「って何故膝の上に座る!?!」

「そこに飛影の膝があるからよ」

飛影の疑問に即答だった

「じゃあ私はリタさんの背中にボディガードのようにいますね!」

「:~:どうぞ」

としか言えないリタ

そんなこんなで教師は初めての静かな授業が行うことができた

「~♪」

鼻歌混じりにご機嫌なリーベ

そのリーベの頭を枕にする飛影

微笑ましい光景で保護者達の非難の目が無くなる

そして30分後

授業も終盤に差し掛かり

飛影が起きた

「あら起きちゃった？」

飛影に寄りかかっていたリーベ

少し残念そうである

「むゝ…駄目だ！！暇すぎる！！」

あまりにも退屈すぎて叫ぶ飛影

「じゃあこの問題やってみろ市原！！」

教師の攻撃

「あっ飛影…私にもわかるように計算して」

いつもの飛影ならシカト…終わり

だがリーベの気まぐれの一言だけで

飛影はダルそうに立ち上がり暇を潰すかのように黒板につらつらと  
途中式を書き連ねる

授業を聞いてもない飛影

しかしその手は止まること無く授業終盤の応用問題を解くために式

を文字を書き連ねる

「あれ？リーベこの文字読める？」

僅かだが止まりリーベに人間界の言語を指差す

「問題ないわ」

リーベは学校に通ったこともないが読み書きはいつの間にかできるようになっていた

「あいよ」

再び動き出す

基本での式を応用するだけなので途中式は本来なら三行程度だが

飛影はリーベがわかるように計算しているため基本の式ですら壊し途中式として計算する

「はい、終わり」

最終的には一桁の長い足し算で計算して答えを求めた

答えも途中式もこれでもかというくらい正答していた

「きゃー！！飛影さんちよーかけーです！！」

「…飛影ならできるかなって思ったレベルだったのだけど本当にできるとは思わなかったわ…わかりやすい」

「さすが飛影です」

絶賛べた褒めされ中の飛影

保護者からすれば今までの授業態度に納得してしまう出来であった  
つまり教育のレベルが低いから授業を聞く必要がないのでは？とい  
うことである

教師への目が更に厳しくなる

「この問題はどうか：レーン」

なんとか視線を変えるべく少し応用を発展させた問題をリタに出す  
優希と会話していたリタは一瞬だけ黒板を見る

「Xは7：Yは3：Zが9」

頭の中で計算し答える

不真面目組二人がここまで出来がいいと完全に教育が悪いという話  
になる

そんなこんなで授業参観一時間目終了

次の授業は歴史である

歴史は特に飛影の授業態度が悪い

「どうする？」

とりあえず休み時間なら椿に怒られることはないと言ひ、飛影は遊ぶとする

「四人居ますし大富豪にしましょう」

麻雀は時間がかかるため直ぐに終わる大富豪を推薦する

「あれ？ 彗さんはいいんですか！ ！？」

リタの四人という言葉に引掛かった優希

彗を入れれば五人だがその彗は必死に予習をしているように見える

「今は他人の振りさせろ！！」

保護者の視線にやられた彗

「連れないわね」

残念そうなりーべ

「負けたやつは罰ゲームな！！ 二番が最下位にだ！！」

もはや一位が誰かはわかっているので公平に二番目にする

熾烈な戦い



## 結果

一位リタ  
二位優希  
三位リーベ  
四位飛影

その場で崩れ落ち両手足をつける飛影

「罰ゲーム♪秋野ちゃんのところ行ってここまで聞こえるくらいの声でなんか言ってきてください!!」

「任せろ!!」

そして授業参観の二時間目

本日最後の授業が始まった

と同時に飛影は窓から飛び降りる

教師は歓喜した

マトモな授業ができることに

窓から飛び降りた飛影は地面に着地

一直線に秋野の教室に向かう

その間に必死に叫ぶ言葉を選ぶ飛影

教室のドアを蹴破り

「えーと…時と場所を考えないでごめんなさい！！！！佐藤秋野さんのお父さんかお母さんどっちでもいいけど！！娘さんを僕にください！！！！！！」

湧き立つ教室内

完全にプロポーズになっていた

秋野は無言のまま迅速に立ち上がり飛影に向かって跳躍し飛び蹴りをぶちかます

「へぶ！！？」

吹き飛ぶ飛影

そして秋野はそのまま飛影の腹を踏みつける

「秋野無言は恐いって！！」

「どこの世界に冗談でプロポーズする馬鹿がいるんですか！！？」

「どうやらここにいたようだ！！」

「今死ね！！」

何回も攻撃するが全く効いていない

「あっちなみに上まで聞こえるくらいの声で言ったから♪」

飛影が起き上がると同時に再び顔面に蹴りが直撃する

「ふーふー!!」

猫のように威嚇する秋野

飛影はそのまま廊下に吹き飛ばされてギルギアにぶつかる

『あ…』

秋野はすぐさまドアをもとに戻し教室に戻る

「なにぶつかってくれとるのじゃ」

「事故だ事故」

「知らん…死ね!!」

「お前が死ね!!」

こうして授業参観だろうが関係無く飛影はいつも通りに過ごしていた

## 90話記念（後書き）

こういうアホ話も欲しかったんで投稿しました

次話は本編です

## 作戦決行（前書き）

さあ 飛影の暴走を止めることができるのか

## 作戦決行

「いいね!!!? 作戦開始!!!」

飛影の暴走を止めるための作戦がスタートする

初手ギルギアを引っ張り出す

《アンビリルワールド》

「一本釣りです!!」

アンジェレネの作成した世界は出し入れ自由である

つまりギルギアだけ引っ張り出すことも可能

「う…わ」

引っ張りだしたアンジェレネが驚愕する

人型形態で翼がもがれ鱗も破壊されて血だらけなギルギアが釣れた

肩で息をしているギルギアは笑っていたが

「…貴様らなんのつもりじゃ!!!?」

視界が変わり元の魔界へと戻ったことに気付いたギルギアは殺意を込めてアンジェレネを睨む

「悪いわね…少し寝なさい」

《クルーズ》

コトハが全魔力を消費してギルギアに触れる

「ぐ…」

強大な殺意を放ったままギルギアの時が止まる

作戦通り

次手

「お次は飛影さん!!」

《アンビリルワールド》

二人同時に戻すと何が起こるかわからないため

確実に一人ずつである

コトハとギルギアはリタが城へと運ぶ

30分の間に住民の避難は完了している

飛影を引っ張り出す

「あははは…あはははははは!!!!!!」

無傷の飛影がいた

いや服は原形を留めておらず小さな怪我が治っている最中

つまりギルギアはかなり飛影を殺し吸血鬼の再生力を削りおとしたのだ

《スロウス》

シーレイは鍵を振り下ろし笑っている飛影の腕を爆散させる

ついでにスロウスで動きを遅くさせる

まだ回復力に底はついていないようで飛影の腕は徐々に再生する

「あははは！！」

飛影は片方の手で爪を伸ばして振りかぶる

「はい！！抑えた」

その腕を右腕を槍に変化させた黒鋼は貫き木に縫い止める

飛影の動きを止めることに成功

「とりあえずこれで成功したらラッキッキー！！」

まず、椿がいつものように拳を握る



「飛影の馬鹿！！眼を覚ませ！！！！！！」

椿の拳が飛影の頬を捉える

「あ…」

笑いが止まった

「おっと！！」

「あらら…」

《完全領域》

リタは一瞬早く気づき椿を抱えて移動する

椿のいた空間を飛影の蹴りが薙いで静紅の防御壁に直撃する

「作戦失敗！！これより作戦を第二フェイズに移行するよ！！退避！！！！」

もともと今のは飛影の残りの魔力と再生力と力を確認する作業も含めていた

充分に作戦の範囲内で更にシーレイがスロウスで遅くしたことでより作戦が実行できる

ただ一人だけ残し迅速に退避する

「あははは！！」

残るは狂ったように笑う飛影

傷は完治していたが再生力も限界である

「さて：お前と喧嘩するのは初めてだな：いつも私が退いてたからな：」

そしてセツネ

その手に槍は無い

武器を使う必要は無い

なにせこれは

「さあ！！初めての喧嘩をしようじゃないか！！？親友は喧嘩するものらしいぞ！！！！！！？」

「あははは！！！」

セツネに呼応するかのように笑う飛影

場所は記念公園

セツネと飛影が力を入れて作った公園であった

セツネは魔力を全解放

《炎舞》

《威雷・雷槍》

黒炎の槍と雷の槍が手に表れ同時に放つ

威力は互角

問題なく相殺し二人同時に接近

「はぁぁ!!」

「あははは!!」

拳の打ち合い

拳同士がぶつかる

それも相殺する

《炎舞》

《威雷・纏拳》

二人の拳にそれぞれ黒炎と雷が纏う

セツネはそのまま飛影の拳を逸らし態勢が崩れた飛影に蹴りを放つ

「あは!!」

気付いた瞬間セツネは宙を浮いていた

「柔か!!」

飛影のもっとも得意としていて嫌いな技

パワー同士のぶつかり合いがしたいじゃん

という飛影は使う機会があまりなかったが暴走して狂った飛影は逆に使う

殺すために

「あはは!!」

身動きがとれないセツネの顔面に蹴りが放たれ

《威雷・落雷》

セツネは僅か一メートル

地面に着地

しっかりと空中で態勢を整えていて四つん這いに着地する

《威雷・雷光》

同時に雷が周囲に輝く

《風華》

雷による光の熱で炭になるはずだったが風で光も熱も遮断する

「相変わらず強いな!!」

《威雷・電光》

セツネはそのまま上空に雷を放つ

雷雲が造り出され飛影に向けて落雷する

「あははは!!」

飛影はそれを横に跳躍して回避

「甘い!!」

セツネはそれを先読みしてすでに拳を振りかぶっていた

「あっはは!!」

飛影は最小の動きだけでそれを受け流す

受け流されることは知っていたのでセツネは連打で対抗

全てが流し落とされる

「くっ!!」

僅かに態勢を崩したセツネに飛影は前蹴りを放つ

鳩尾に直撃するが自ら後ろに跳んで衝撃を逃がす

《炎舞》

小さな黒炎の玉が飛影の手のひらに造り出され

「まっず!!」

《威雷・一点放射》

黒炎がレーザーのように発射される

僅かに遅れてセツネも雷をレーザーのように放つ

威力は相殺だが衝撃波でセツネの身体は僅かなダメージを負う

「おいおい記念公園を壊すなよ!!」

今までの攻撃と今の衝撃波で記念公園は半壊状態である

「あははは!!」

「聞いちゃいないか…」

セツネにとっても飛影にとってもここは思い出の場所だ

そこを破壊しても笑っている飛影

「暴走ね…」

単純にキレたとかでは説明がつかない状況

暴走という言葉が一番相応しい

「ふっ!!」

再びセツネ拳を握り突撃

飛影はすでにボロボロで吸血鬼の再生力がほぼ無くなり、さらには魔力もギルギアと戦ってかなり消費している

状況的にはセツネの方がステータス上は上である

今なら力も速度もセツネの方が上である

しかし

「ぐっ!!!」

吹き飛ばされたのはセツネの方である

今なら力も速度もセツネの方が上

しかし経験が違いすぎる

セツネは幾つもの戦場を潜り抜けた百戦錬磨

だがセツネが百戦錬磨なら飛影は億戦錬磨といえる

桁が違いすぎる

戦闘経験の差が技術の差に大きくでる

「強いな」

口に溜まった血を吐き出す

戦闘に支障はあまり無いが改めて実力差を体感した

「災厄か…」

あれは飛影じゃなくて災厄

椿がそう言ったのを思い出す

あれは魔王の飛影じゃなくて災厄の子の災厄

飛影が一番嫌いな自分

「飛影は強いが…災厄なんかには負ける気はしないな!!」

「あは!!」

狂ったように笑う飛影を見て椿の言葉を思いだすと身体が少し軽くなった

そんな気分がした

《威雷・瞬雷》



セツネは全身に雷を纏う

一瞬で飛影に接近

飛影は爪を伸ばし横殴りに振り衝撃波を放つ

「あは！！」

セツネが三つに切断され

「残像だ」

背後に移動していた

雷による高速移動と雷の光により一度だけ飛影を騙すことができた

普段の飛影なら見破っていたが災厄では気付けなかった

セツネはそのまま飛影に突撃し力一杯その身体に背中から抱き付く

「こうやってお前に抱き付くのはたまにあったが…今のお前には暖かさが無いな」

《威雷・雷侵》

「暖めてやるよ」

セツネの身体から雷が纏い漏れでて飛影に流れる

「が…は…あは！！」

空に昇る雷がその威力を表していた

長い長い抱擁

15秒の雷の抱擁が終わり飛影の全身から煙が吹き出て膝をつく

「どうやら私の勝ちだな飛影!!」

セツネは手加減や情けなど一切かけず握り拳をつくり飛影の顔面を思いきり殴り付ける

まともに身動きがとれない飛影は直撃し数十メートル吹き飛ばされ木に激突し崩れ落ちた

「ふう…」

殴った瞬間に飛影は笑っていた

狂ったような笑みではなくいつもの笑みで

「戻ったか……?」

しかしその判断がセツネにはつかない

肩で息をするセツネ

立つことがやっとである

「は…はは!!」

「ち！！？」

崩れ落ちた飛影から笑い声

再び構えるセツネだが魔力はまともに残っていなかった

飛影は震える腕で地を掴みゆっくりと立ち上がる

「はは…」

頭を上げないままゆらりゆらりとおぼつかない足取りでセツネに一歩一歩と近付く

「…まだやるのか…」

セツネは自分の現在の魔力と体力を確認する

反則級どころか一般級

今のセツネはただの人間と同程度以下だった

しかし、それは飛影も同じである

再生力が尽きて傷がまったく回復していない

「…当たり前だ、初めてのセツネとの喧嘩に負けは許されないからな！！」

顔を上げる飛影

その眼は生き生きとしていて笑っていた

「はっ！！無理すんなよ親友！！」

セツネは笑いながら拳を握る

「そっちこそ死人が何を言う！！」

飛影も笑いながら拳を握る

よたよたとまともに走ることすらできない飛影とセツネは共に接近する

「おかえりだ！！そしてただいま親友（飛影）！！！！！！」

「ただいまだ！！そしておかえり親友<sup>セツネ</sup>！！！！！！」

飛影とセツネ

実に百年以上の時を越えての再開

同時に顔面に拳が突き刺さり二人して倒れる

しかし倒れたあとでも頑張っって頬をつねったり頭を叩いたりともはやじゃれあっていた

こうして冥界の異常と飛影の災厄という二つの危機は終わった

冥界の異常

死者1，732人

蘇り1人

飛影の災厄

死者1人

国全土が巻き込まれた事件にしては犠牲者の数が少なすぎるが十分な傷跡を残して

## 作戦決行（後書き）

無事に戻りました

災厄の子はちよいちよい出たと思うのですが、ようやく少しどんなものか説明できたと思います

**一週間後（前書き）**

暴走から一週間後です

## 一週間後

あれから一週間の時が経ち飛影は眼を覚ます

飛影は魔力と体力共に限界まで使っていた

もっと簡単に言えば生死を彷徨うほどであった

飛影は薄く眼を開けて状況を確認する

左腕動かない

右腕動かない

身体起こせない

「かなりずたぼろだな…」

自分の身体じゃないほど重い

首は動かせそうだが動かす気が起きない

「あっ♪飛影さん起きましたか!!?? どうします!?!? 何か飲みます!?!? 何か食べます!?!? それとも私を食します!?!?」

「…」

飛影は頭を抱えなくなった

(いやいや…ありえん)



目の前の状況

聴こえてくる声

あり得ないものである

（幻聴か夢か……まあ夢が一番可能性が高いな）

「飛影さ〜ん？」

「…お休み」

飛影は再び眼を閉じて眠りにつこうとする

「ちょおい！！飛影さんあれですよ！！？感動の対面じゃないですか！！！」

飛影は身体を揺すられる

（最近の夢はリアリティあるな…）

飛影は軽くこの状況に逃避しつつある

「…うるさい…」

飛影の左腕から意思があるように声が発せられた

「シーレイさん申し訳です…」

どうやら飛影の左腕はシーレイという名前らしい

飛影の身体が揺さぶられることが無くなった

しかしそれでも視線は消えることがなかった

根比べである

「…とりあえず、あと五時間寝かせてくれ優希、まだ身体が本調子じゃない」

飛影の体内時計ではまだ深夜二時

とりあえず眠りたいため飛影は夢の相手にそう告げる

「はい、了解です」

優希と呼ばれた少女は眼を閉じていたので確信は無かったが笑顔で敬礼した

そして五時間後

きっかり五時間後である

飛影は目覚めた

少しは調子を取り戻しかと考えた飛影だがやはり身体が重い

五時間前にも考えたことだが、飛影は首を捻る

左腕には左腕を枕にして寝ているシーレイがいた

「…」

右腕には右腕を枕にして寝ているリーベがいた

溜め息を吐きたくなる飛影

首だけ持ち上げると身体には火月とエリアが枕にして寝ていた

「アホか!!」

突っ込みを入れてしまった

さすがに耐えきれなかった

「ん？ ああ飛影起きたか」

セツネの声だった

飛影はその方向に首を向けると同じようにベットに横たわって寝ているセツネがいた

「この状況じゃ普通起きるって！…怪我でもしたか？」

「いや…ただお前と同じで魔力と体力使い果たして寝てるだけだ」

もう全回復したかな

と笑いながら付け足すセツネ

「めんどくさがりは治らないのか…今の状況滅茶苦茶だろ」

「今の私は過去の人物だ…その私が手伝ったら今の意味が無くなるだろ？」

なんとももつともらしい言葉である

だがそれは真理だ

「それよりも飛影はいつのまにかそんなに好かれるようになったんだ？」

地面を指差すセツネ

飛影は無理やり首を曲げてその方向を確認する

「わぁお」

リーベ

シーレイ

エリア

火月と飛影を枕にしている四人以外に

飛影の屋敷のメンバー全員集合していて他にも隼と秋野やコトハ

さらにはアユリまでいた

飛影は知るよしもないが交代で従者や侍女が飛影を見に来たりもしていた

セツネの時代では無かったことだ

「この馬鹿どもめ…」

呆れながらも笑う飛影

そしてやはり幻覚でも夢でもなく優希が寝ていた

「どういうことだ？」

優希は確実に死んだはずである

ガイルの視点でそれを見ていた飛影

しかし死んだ人間は爆睡することはない

「何がだ？」

「…いや何でもない」

あとで聞けばいいかと飛影は風華を使って自身を枕にして寝ている  
四人を浮かす

「なんだ？でかけるのか？」

起き上がるセツネ

「おう…政治関連はセリエに任せるとして…復興作業として瓦礫の  
撤去とかはしなきゃな…セツネも手伝え」

力仕事ならば過去も今も関係ない

そう飛影は言ってセツネの承諾なしに風華で浮かす

「変わらんなお前は…」

逆らっても無駄なのでセツネはそのまま抵抗せずに吹き飛ばされる

城下町は少し酷い状態になっていた

今も力のある男達が撤去作業を行っているがまだまだ瓦礫は山のように残っている

飛影とセツネはバレないように着地しいかにも歩いて来ましたよな  
雰囲気で見れる

「あっ魔王さんこんにちわ！どうしたんです？」

メリアの国民で瓦礫の撤去作業を行っている男が飛影に気付く

「手伝おうと思ってな」

「へ？いやいやいや！！いいですよ！！魔王さんにそんな仕事させるなんて」

飛影の言葉に恐ろしい勢いで首を振る

（良い国のまま育ってくれたな…）

セツネはそれを嬉しく思う

飛影が魔法を使えば瓦礫の撤去は一日も掛からないが遠慮する

「うっさい！！俺は手伝う！！だけど魔法は今使えないからただの力持ちと認識しろ！！」

（人付き合いは変わったが性格は変わらないなこいつ…）

昔なら会話すらしなかったが今は普通に会話している

しかし、一度決めたことはねじ曲げないのは変わっていない

こうして飛影とセツネは瓦礫の撤去を無理矢理手伝う

「そういえばあれだな」

撤去作業中

セツネが投げた人間大の瓦礫を飛影は受けとり撤去場所へ投げる

そんな作業をしていた時に飛影がふと思い出した

「普通さ〜こういう蘇りました的なあれは最後に成仏して終わりと  
かじゃねえの？」

「ああ確かにそうだな」

「そんなのは無い感じ？」

「ふふ！！」

飛影の言葉にセツネは笑ってしまう

「なんだいきなり…?」

それは分かりにくいが心配している言葉である

どうにも笑ってしまう

「そんなもんは無いみたいだ。身体の傷も自然治癒するし、魔力も回復する。更には心臓も動いている特典付きだ」

いわば完全に生き返ったとも言える

「…へーそうなのか…まあ展開的にイマイチだな」

「ぶふ!!」

セツネは吹いてしまう

知らないものが聞けば淡泊に聞こえるが完全に照れ隠しであった

「なんだ畜生!!?」

「…これから私が老いるかはわからないがまあ最低でもまた60年は付き合ってもらおうぞ!!」

セツネは廃墟を投げる

「上等だコラァ!! 何十万年でも付き合ってやんぞコラァ!!」



飛影はそれを難なくキャッチし

投げ返す

「おま：馬鹿かあああ！！？」

いくらセツネでも無理なものは無理である

魔法を発動しようとしたセツネ

しかし直前で止まる

「びっくりしたかね？」

風で廃墟を浮かしている飛影

「死ぬかと思うわあ！！」

そんな感じで瓦礫の撤去は進む

「そういえば私が死んでから軽く100年は経ったが何か国に変化とかはあるのか？」

食事休み

労働の後で小休止としておにぎりや豚汁などが配付される

それでも魔王さんにこんな質素なものを食べさせるにはと一悶着あったが今の飛影とセツネが食べているのはおにぎりと豚汁であるこ

とがどちらの勝利に終わったかを現している

「基本的な変化は無いな…世界一を保ってるし…こないだまで魔法学校が魔術学校になってたけど修正したし」

「つてなるとあれだな…今あまり面白いことは無いのか？」

豚汁を平らげるセツネ

残りのおにぎりを食べ尽くす

「企画はしてないな」

飛影はまだ食べていた

食べるのが遅いのではなく量が異常なのだ

セツネのおにぎりは三個

飛影のおにぎりは十個

飛影は半分をセツネに渡そうとしたがさすがに食べきれないのことで拒否

今飛影は六個目のおにぎりを食べたところである

「企画したいがどう思う？」

「普通に企画書作ってセリエに提出でいいだろ」

飛影も今までそうやってきた

「企画が浮かばない」

「…世界一祭か…授業参観なんてどうだ？」

飛影からの案

「何でも世界一を決める祭と一般公開されてなかった魔法学校の授業参観」

飛影は軽く補足する

「面白そうだ!!両方企画するか!!」

「よし!!それでいこう!!」

飛影が10個目のおにぎりを完食したところである

「よし!!それでいこう!!じゃない!!」

飛影が吹き飛んだ

飛影とセツネは敵かと思い臨戦態勢に移行して

『すみませんでしたあ!!』

土下座した

魔王と女王の息の合った土下座

その先には鬼がいた

飛影やリーベのように物理的鬼ではない

しかしそこには鬼がいた

椿という名の鬼が

「みんな心配してる…はよ戻れ」

城を指差す

『イエスマム!!』

## 一週間後（後書き）

飛影は皆さんわからなかったと思いますが微妙なツンデレです

ひさしぶりにセツネと会ったためにテンション上がりまくりです

## 地獄への帰還（前書き）

地獄（城）へと強制帰宅させられた飛影とセツネ

生き残れることはできるのか！？

## 地獄への帰還

椿という鬼から強制帰宅を命じられて飛影とセツネは城へと帰宅する

「扉を開けたらそこは地獄絵図でした」

飛影は誰に説明しているかはわからないが状況を口に出していた

あるいは一人言か

「おかえりなさい飛影」

輝くような笑顔のリタがいた

「…」

しかしその手には金槌が握られていた

「飛影さん心配したんですよー!!」

いつものように元気一杯のアンジェレネ

「…」

だがその両手にはダガーを持っていた

「…枕」

枕が消えて安眠できなかったシーレイは恨むような目で飛影を見る

「…」

やはりその両手には抱えるように鍵を持っている

「飛影様心配しましたよ…」

本当に心配している表情のアユリ

「…」

なぜかその手には氷の刃が形成されていた

「ふふふ…飛影くんは元気ねえ」

いつものようにのほほんとした笑顔の静紅

「…」

でも次元破壊が使用されていて静紅の手刀は飛影の背中に触れている

「ふっふっふ…私が助けてあげたのに良い度胸じゃない…」

完全私はキレてますよオーラがでているリーベ

「…」

当然ながら爪も翼も飛び出て今にも飛びかかりそうであった

「飛影のばあか!!」



いつものように無表情の黒鋼

「…」

武器であるのに使用されない鬱憤が溜まっていたのか黒鋼は両腕を刃に変化させている

「アホだな」

「アホすぎますね」

「流石に駄目だぞ兄ちゃん」

「お父様の馬鹿…」

「飛影さんのバーカ!!」

流石にこの騒動には参加できなかった彗と秋野と火月とエリアと優希

少し離れて見守る

前門の虎後門の竜とはよく言ったもので飛影にとっては前門の地獄  
絵図後門の鬼であった

鬼は手薄ではないかと普通は考えるが飛影の後ろにいる鬼（椿）は  
対飛影ならば最強の部類である

「頑張れ飛影!!」

セツネはすでに飛影から離れていた

（いや…これ死ぬだろ…）

冷静に状況を見て極めて冷静に未来予想図を想像した飛影

どう考えても五体バラバラになる

今の飛影の選択肢として

死ぬ

死ぬ

死ぬ

がある

つまり死亡は確定していた

逃げるという選択肢は存在しない

光速のリタに次元破壊の静紅に未来確知のシーレイがいるのだ

逃げきれはるはずもない

戦うなんて選択肢は論外である

これだけの絶対強者級と上位の反則級がいるのに勝てると思うのは  
馬鹿でも無理だ

（遺言書書かせてくれるかなあ…ってか何故優希が普通に生きてる  
んだ…？過程が気になるな…それよりも遺言書の中身どうしようか  
…とりあえず俺の持ってる宝を山分けしてもらって黒鋼はリタに託  
すかな…魔王は誰に委任しようかな…強さ的には…リーベだけどあ  
いつはやろうとしないだろうし…シーレイも無理だな…アンジェレ

ネ…は駄目だな…静紅もポンポン移動するし…コトハにするかね…  
若いけど俺は絶対強者級くらいの實力はあると思ってるし」

高速思考で現実逃避をする飛影

頭の中ではすでに遺言書の内容は完成していた

飛影の命が尽きるまでのカウントダウンが始まろうとした時に救いは現れた

《クルーズ》

「まあ…待ちなさいよ」

飛影を庇うようにコトハが目の前に移動する

「確かに…みんな心配しているのに勝手に抜け出したひくくんは駄目だと思うわ…でもそれだけじゃないでしょ？何やってたか考えなさいよ」

短絡的思考の者ばかりでコトハは呆れながらである

「瓦礫の撤去してたんでしょ？」

コトハは後ろの鬼に問いかける

「…してた」

「じゃあ良いじゃない…遊んでたんじゃなくて…この国のために動いたのよ？」

飛影はずっと黙っていた

心の中だけでコトハに対しての感謝の言葉を叫びながら。

正しい意見に全員がたじろぐ

「で…でも魔法使えば一瞬じゃん!!」

魔法を使わずにのんびりと労働していて遊んでいると判断した椿

「確かに一瞬ね…でも今回の騒動で建物の被害にあった人は国から援助金は降りるけどすぐはでないのよ…そんな人やお金が無い人は今回の瓦礫の撤去は大切な働き口よ? だから二人は魔法を使わないで労働したのでしょうか?」

『わぁお』

コトハの言葉に飛影もセツネも驚嘆の一言を洩らす

そうなのだ

アホでも飛影とセツネは王である

そのぐらいの考えで動かなければならない

国とは上が勝手に決めて良いものではなく国民と力を合わせて成長させるものなのだ

飛影が言わなかった理由としてこの場合では何を言っても言い訳に

しか聞こえないからである

「うう」

後ろの鬼が椿に戻った

「関係ないわ：起きた時に飛影が私の傍にいなかったことが問題よ」

他の全員も矛を納めていたがリーベだけは納めずに我儘を発動

「貴女：どこの餓鬼よ：」

子供のような我儘にコトハが少しイラつく

「吸血鬼よ：」

ふふふと笑うリーベ

魔力と魔力が激突する

「あら：反則級だと思っていたら絶対強者級じゃない：」

「五月蠅いわね：蝙蝠じゃなくて：蠅で良いわね」

コトハの実力は純粋な魔力なら絶対強者級である

そんなコトハの挑発的な言葉はリーベの額に青筋が浮かばせるには充分である

殺気が漏れでた瞬間に飛影達は目を合わせて頷いた

「良い度胸じゃない…」

「キャッチー!!」

飛影は後ろから抱き締める形で手で口を塞ぐ

「ふむぐ…」

これでこれ以上の挑発行為はできない

飛影は振り返り椿にアイコンタクトを送る

すぐに頷いた椿

「へむむむ…」

コトハが何かを言って暴れていたが飛影は気にせずにそのまま城から出て距離を離す

「ああああ!!! ちょっと飛影は置いてきなさいよ!!!」

リーベ的には飛影を取られた取られたと認識していた

「まあ…落ち着いてください」

追おうとしたリーベを寸前でリタが止める

「とりあえず…フルボッコには出来ませんでした…飛影の目を城から逸らすことはできましたから良しです」

あとはコトハが上手くやるとリタは信じる

「飛影を殴れなかったのはとても残念ですがあのような正統な理由があるならばしょうがないです」

補佐とは思えない台詞を吐くりタ

当初の計画は飛影を気絶させるまで殴り続ける作戦だったが、流石にあそこまで配慮して行っていたことを遊びとは言えない

「へく！！」

「さて…始めましょうか…」

リタはセツネを氣絶させる

『おお！！』

「全くもう！！私があんな馬鹿と戦ったのかしらひーくんは！！」

大激怒である

とりあえずということでメリア魔法学校の時計台に移動した飛影とコトハ

口を塞ぐ手が撤去されてコトハはキレた

足場が悪い時計台の天辺に飛影は正座してコトハは立っていた

「全くもう！！私はひーくんを信じたからひーくんも私を信じなさい！」

「悪い」

「全くもう！！」

牛になったかのようにコトハは全くもう！！と繰り返す

「そういや…なんで俺とセツネの瓦礫の撤去とかの理由を言い当てれたんだ？」

椿ですらわからなかったのだ

あのままでは飛影はミンチになる確率百分百だった

「手」

コトハは手のひらを飛影に向ける

「手？」

同じように飛影はコトハの手のひらに合わせるように向ける

コトハはそれを握って飛影の隣に座る

「当たり前よ…私は頭良い方だからひーくんのことは分かるわよ」



「ははっ…それは嬉しいこった!! あれはマジで死ぬかと思った」

思ったではまだ甘い

もはや確定していた

「…鈍いわね」

コトハ的には核心を言えたつもりだが飛影には全く通じなかった

「まあ恐らく10回分の命を救ってもらったからな…願い事あれば10個くらいは叶えてしんぜよう」

飛影は吸血鬼で10回分は死ねるがマゾではない

痛いのは嫌である

「ひーくんへの借りはそれ以上にあるのだけど…まあいいわ。10個は多いから三個にさせて」

欲がないコトハ

「おっけい!!」

「じゃあ一つ目さっそく使うわ…このままで喋りましょ」

「?そんなの別に使わなくても」

「いいの!」

飛影と繋いでいる手を少し強く握るコトハ

そっぽ向いたその顔は太陽の光とは関係無く赤くなっていた

## 地獄への帰還（後書き）

恋する乙女は難しいです。

飛影はマジで男女間の区別を全くしないため鈍いとかは関係ないです  
皆友達や家族が飛影なので愛はあっても恋は皆無です

さて、そろそろ優希が生き返った話でもしようかと思えます。



## 進化と再生

まだ場所は時計台

あれから五時間ほど会話していた飛影とコトハ

「…お腹が空いたわね」

夕暮れになっていて時間的に小腹ではなく普通にお腹が減る時間帯である

「んゝなんか食べいくか？」

飛影は流石に昼の量が量であったため、小腹が空いた程度である

コトハはその案に頷こうとして、しまったと口をパクパクと動かす

「…や…やっぱり大丈夫よ…あと一時間でご飯だし」

少し慌てたようなコトハ

「?…まあいいが」

少し疑問に思いながらも飛影は気にしない

《クルーズ》

飛影の隙を見極めてコトハは腹が鳴るなどないように胃袋の時間を止める

「ああ……そういうえば、俺が暴走した理由はさ……優希が死んだからなんだけど……なんか普通に生き返ってびっくりしたけどどういうことだ？」

飛影は今まで感じていた疑問を聞く

「ああそのこと？それなら簡単よ…あの吸血鬼としゅうちゃんががやったのよ」

「リーベと秋野が？」

コトハの呼ぶあだ名で本人を言い当てる飛影

感性は近いようである

優希が殺されてエリアが意識を失った後のことだ

リーベが優希を発見する

というよりも魔力が消えたので様子を見に行つたという

⋮

死んでる優希と意識を失ったエリア

戦っている跡を見る限り黄泉がえりがいてエリアが戦って優希が巻き添えになったと予想する

血が溢れ城の廊下を汚していた

完全に手遅れであった

「ふうん…なるほどね」

何か納得したリーベ

同時に魔界に飛影がやってきた

圧力が襲いかかるがリーベは戦っている最中だと思って全く気にしない

しかし飛影の魔力が異常な薄気味悪さを放っており

そのことについては不安になる

「…」

翼を生やし急行するリーベ

リーベが到着するころには他の絶対強者級やコトハも到着していた

「どういことなの？」

「さあ…わかりませんが、恐らくは飛影の暴走だと思います」

状況を把握することができていないリタ達

あれが暴走だとはわかる

リーベだけは優希が死んだことを知っていてどうやって飛影が知ったかはわからないがそれが原因だという確証はあった

「アン…魔法…二人…隔離…」

そんな時にシーレイからの指示

それだけの言葉だがやるべきことは理解した

「え！？無理ですよ！！私死にます！！注意引いてください！！」

アンジェレネは一応は近接系の絶対強者級だが飛影やリーベのように防御力があったり、ギルギアやアユリのように防御力があったりはしないため、

攻撃力最強と接近戦最強の攻撃を食らえば確実に重傷を負う

「ここにいる全員で殺気混じりの魔法を発動しますので、その一瞬の隙を見てやってください」

リタの案にシーレイも頷く

「…はあ…わかりました！！タイミングはそっちに任せますんで！！」

《アンビリルワールド》

よし！！とアンジェレネは気合を入れて魔法を発動



それと同時に五人は散開

飛影とギルギアを囲むようにして包囲し

《次元破壊》

《キュリクレイ》

《神の翼》

《スロウス》

《クルーズ》

《黒霧》

五人で同時に魔法を発動

そして注意が向いた瞬間を狙ってアンジェレネが飛影とギルギアを  
隔離する

リーベを除いた人物達は飛影を止めるために集まる

「私は他にやることあるから…飛影のこと頼むわ」

リーベは気絶している秋野の首根っこを掴んでいた

そのまま応答を待たずに城へと戻る

やってきたのは優希がある廊下

「起きなさい」

頬を軽く叩くリーベ

しかし起きない

リーベはこんなときにどうするか飛影から聞いたことを実践する

「…彗がヨダレを垂らして寝てる貴女を見て引いてるわよ」

「!?!?」

飛び起きる秋野

いつもなら面白いと思って楽しめるがそんな余裕は無かった

「起きたわね…これ見て」

一心不乱に口元を袖で拭く秋野に優希を指差して視線を誘導する

「…これって…」

目を見開く秋野

あまり驚いてはいない

思考がついていかないのだ

「死んでるけど…まだ可能性はあるわ…結論から言うとな貴女の魔法で優希の飛び散った心臓や肉や骨や心臓や血液に至るまで全て集めて欲しいの、私の黒霧じゃ無理だったから…ただ埃とかは混ぜないで」

集めて固めることを主軸にしている秋野の魔法

本質は集めること

「…けっこう無茶言いますね」

攻撃を集めたり足場を形成したりはあるが人の血肉を集めたことはないし

そこまで精密な集めはやったこともない

「でも…貴女しかないのよ…お願い」

若干ながらも頭を下げる

リーベがここまで言うのは珍しい

優希とは仲が良かった

それだけだが、リーベにとってはそれで充分だ

頭を下げる程度ならいくらでも下げる

協力を望まないなら頼み込む

その姿が飛影と被った

「わかりました…」

秋野は真剣な表情で頷き魔力を全解放

《集固》

今まで構築していた魔法

それを緻密に繊細に針の穴を通すように集中して構築する

目を瞑って集中している秋野

リーベはその様子を見守る

ズズとゆっくりと確実に地面に散らばりカーペットに染み込んだ  
血肉が浮き上がる

ゆっくりと脚を上げる秋野

(…駄目だ…遠い)

精密な動作を行うには脚は遠かった

基本的に感覚で身体を使って発動するのが魔法だが

今回のように集中して構築するためには脳を使って構築する

その為には脚の裏という秋野の魔法の発動場所が遠い

(もっと近く…もっと集中できる箇所)

秋野が今行おうとしているのは魔法の進化

脚の裏と限定されていた集固を進化させている

魔法の進化

それは魔法を使っていれば誰にもあることだ

飛影は最初ただの炎しか使えなかったが進化していき

今は無炎が扱えるまで進化した

しかし飛影が赤い炎から緑の炎を使用できるように進化したのは飛影が5歳の頃である

炎舞は生まれた時から使えたため飛影が魔法を使い始めて五年で進化したのだ

彗の魔法は強化から進化になっているが

あれは本質を知って本来ある形で魔法を発動するようになっただけ

元は変わっていない

しかし秋野は違う条件を作り替えている

魔法を使用できるようになって一年にも満たない少女がである

(…一番操りやすい箇所…)

今秋野が行おうとしている行動がどれだけ異質で異常なことを理解していない

(この子…面白い…)

こんな状態でもリーベは面白いと感じてしまった

秋野は右手を真っ直ぐに前へ伸ばす

（これが…良い…ここが一番操りやすい…わかりやすい）

右手に魔力が流れていく

血が

骨が

肉が

皮が

心臓が別々に集まりながら秋野の手に集められていく

（進化した…）

「これをどうすれば…」

集中を解かないように目を瞑りながら秋野はリーベに問いかける

「…！？…そうねまず血を優希の空いた胸に突っ込んで…」

見ることに集中していたリーベは意識を切り替える

「…」

秋野は再び集中する

手のひらに無造作に集められていた血肉が指の先へと集まっていく

《集固・バースト》

まずは親指に集められた血を放つ

「私が合図したら心臓…骨…肉…皮の順番で同じように放って…」

リーベは優希に近付いて爪を伸ばす

あくまでも表情を変えずに自分の腕を切り落とす

すぐに再生するが血は優希の傷口へと入り込んだ

「次」

合図をする

最後の皮を放ったところで五回目の腕を切り落とす

吸血鬼の血が肉体を再生していく

「…あ…う」

肉体の治療が終えたところで秋野が気を失い倒れる

「あらま…」

リーベはそれを支えてそっと床に寝かせる

進化に恐ろしいほどの疲労があり、脳が耐えきれなくなったのだ

「飛影が気に入るのもわかる気がするわ…」

妖艶に微笑むリーベ

あとは優希だけである

通常は肉体が死んだら魂が抜け出て天界に送られる

しかし今は冥界でゴタゴタがありすぐに魂が送られない

浮遊している魂は自らの肉体に吸い込まれるように入っていく

黄泉がえりは善人悪人関係無く魂を送り返し骨だけでも稼働するよう  
に設定しただけである

肉体付きはあやめの魔力を変換させてで半永久的に動き続けるよう  
な肉体を作ってそれに魂を入れただけである

それを逆手にとれば優希の魂はまだ浮遊しており治療が終えた肉体  
に還ってくる

まだ天界のシステムが完全に復旧していない今だからこそその裏技

つまり

「な…なんじゃこりああ!!?」



すでに傷口は塞がっているが大量の血痕（リーベの血）を見てまるで腹を刺されたかのように押さえ叫んでから倒れた

「…余裕あるわね」

今の優希は肉体が変わっている最中である

人間から吸血鬼へと

僅かな血しか与えていないのでリーベや飛影のように馬鹿な再生力はないが2から3回は再生できる程度の吸血鬼へと進化している最中

けっこのような痛みを伴うのでそんなふざける余裕はないはずである

優希は痛みで気絶しているがそれでも悲鳴でなくギャグをとった優希に驚くリーベでした



## 王暗殺（前書き）

あれ…話が…

## 王暗殺

「こんな感じらしいわよ」

リーベと秋野から話を聞いて足りない部分は想像で補完したが正確な話になっていた

「なるほどねー優希が吸血鬼になったか…」

合点がいった飛影

可能性として想定していたものだが実際に話を聞いて少し驚いていた

結果よければ全て良しが飛影

生き返ったのならば喜ばしいことである

「しかし…進化か…」

飛影にとって興味が湧いたのは秋野の魔法の進化である

「あの子魔法使えてまだ一年も経ってないんでしょ？」

飛影と同じくコトハもそれに関しては興味が湧いていた

「コトハは覚えて何年で一回目の進化をした？」

「私は五年くらいかしら」

飛影と一緒にである

杏と違う系統だが天才のコトハでも飛影と同じ

「俺は一年で進化したのは聞いたことないが」

「私も同じよ」

絶対強者級で魔法使いの王である飛影

天才な少女で気まぐれで世界を破壊することはできないが実力は絶対強者級のコトハ

そんな二人ですら五年はかかった

しかし若干17歳の高校生の秋野は一年で進化した

それは快拳と言ってしまふにはおかしいものである

「…やっぱり面白いな!!」

そう

面白い

その可能性がどこまで伸びるか確認してみたくなった飛影

「…妬けるわね」

本当に嬉しそうな飛影を見てポツリと空気が振動するかしらないかの

大きさを眩く

「ん？ 焼く？」

しかしさすがは魔王の飛影

バツチリと聞こえていた

「…」

コトハは脳を回転させる

気づけば夕暮れ

「そろそろ城に戻りましょう？」

話のすり替えを目論むコトハ

「ああそうだな」

あまり考えない飛影はすぐに頷く

「それじゃ…はい」

立ち上がったコトハは両手を広げる

動くのが面倒なコトハ

飛影は溜め息しかつかない

背中を向けてコトハを背負う

「ありがと…ああ折角だから正門から入りましょう」

「なんで？」

飛影の城への侵入経路

もとい帰宅経路は基本的にどっかの窓や空からである

正門だと面倒だからである

「なんとなくよ」

「…まあいいが」

飛影はその場で跳躍

時計台を壊さないように力を抑えて跳躍し助走なしにも関わらず一回の跳躍で正門に着地する

「ありがと」

楽ができたコトハ

飛影に礼を言って降りる

そこで飛影はあるものを発見した

「いったいどうした!!?」

拾わないでください

と注意書きが書き込まれた紙がキョンシーのように額に貼られていて縄で簀巻きのように縛られているセツネであつた

どうやら外傷はないが気絶している

「…この字は…リタだな」

人間界の文字ではなく魔界の文字で書かれているそれはリタの筆記体である

リタは飛影の補佐として文字がわからなければ！…と魔界の文字を読み書きできるように勉強していて

なに不自由なく扱えるようになった

「しかも、拾ってくださいじゃなくて拾わないでくださいってところに茶目っ気があるな…五点くらいか…コトハはどう思う？」

セツネを見て笑いに対しての得点をつける飛影

コトハの意見を聞こうと振り返るがコトハはいなかった

「?…まあいいか」

先に城に戻ったのだらうと当たりをつけて飛影はセツネを起こしにかかる



紙を剥がし縄を引きちぎる

紙を剥がして顔を見るとセツネは気絶ではなく寝ていた

「何故俺の周りには寝るやつが多いんだ…」

素朴な疑問である

「まあいいか」

飛影は起こそうとセツネの頬を叩く

返事がない。ただの睡眠状態のようだ

「おい起きろ」

飛影は少し強めに頬を叩く

「…zzzzzz」

反応がない。ただの睡眠状態のようだ。

「…おいあほ!!」

飛影は軽く頭を叩く

「…zz」

反応がない。ただの睡眠状態のようだ

「はあ…」

飛影は一つ溜め息を吐くとセツネの両足をガッチリと掴んで自身の腰ほどまで持ち上げる

そしてゆっくりと回り始めた

「起きろコラァ!!」

ジャイアントスイング

セツネは宙を舞う

高さ50メートルほど

時速60キロほどで

「むあ…」

風圧と浮遊感を感じたセツネは目を覚ます

「ぬぎゃあああああ!!」

山なりの軌道を描いて飛んでいったが当然重力が作用して地に落ちる

セツネが目覚めた時は地面まで10メートルであった

漫画などでは首が地面に突っ込んでジタバタとするギャグなシーンだが実際に起こるならば首の骨が折れることは確定である

「死ぬううう!!」

現状の理解がまったくできないセツネ

態勢を立て直すことも着地することもできずに頭から突っ込む軌道  
完全に死を覚悟した

(…なんだろう…どこか…どこか物凄いデジャブを感じる…昔こう  
いったことが日常茶飯事だったような)

地面に激突する瞬間

セツネは脳内に走馬灯がよぎる

「よいしょ」

《風華・クッション》

セツネに風が纏われる

風がクッションとなりセツネは衝撃も感じずに地面に激突する

「生きてるかー」

俯せに地面に倒れているセツネ

誰もこれが女王セツネとは思わないだろう

「…」

飛影は先回りしておりセツネの無事を確認するために声をかける

「生きてるかー？」

「…」

## 二回目

返事がない。ただの屍のようだ。

「あれ？…生きてるかー？」

## 三回目

返事がない。ただの屍のよ

「生きてるわあ！！…物凄いデジャブだと思ったらやっぱりお前か飛影！！」

返事がある。ただの生者のようだ。

セツネは起き上がり飛影の襟首を掴んで激しく揺する

「いやゝ起きないからなゝ！！」

「これでお前に殺されかけるのは何回目だあ！！？」

セツネの代から始まりエリア以外が全員何度も体験しているこの飛影の殺人未遂

基本的に殺される直前で飛影が殺さないようにしているが

もし飛影がうっかりミスをした場合は確実に死ぬ

「えーと…多分1, 500回は越えてるZE!!」

揺らされながらも親指を立てる

ノリノリで

「ZEじゃないわこの馬鹿!!!!」

セツネに対して1, 500回以上

王族（エリア除く）全体では5, 000回以上は殺人未遂を行っているが、それに対しての飛影の言い分は

王たるものいつでも命を狙われる!! だから咄嗟の判断で動けるようにしなきゃ駄目だ!!

である

「今回は何した…?」

「ジャイアントスイングで500メートルほど放り投げた」

「どこの世界に私の命を狙おうとしてジャイアントスイングで500メートル放り投げるやつがいる!!?」

咄嗟も何もない

初めは

寝てるときの暗殺防止でナイフを投げられたり  
食事のときの暗殺防止で毒が混入されていたり  
公務のときの暗殺防止で爆弾が投げられてたり  
とまだマトモな部類だったが

数をこなすうちに飛影がどんどん悪ふざけに走り

90メートル程の落とし穴に落としたり  
ドアを吹き飛ばしてぶつけようとしたり

今回のようにジャイアントスイングで500メートル飛ばしたりと  
何でもありである

そのお陰か暗殺は一度も成功したことがない

「知らん!! けどいるかもしれん!!」

「喧嘩売ってるんじゃないかお前…」

あまりの堂々とした発言に力が抜けるセツネ

「まあ城行こうぜ」

「そうだな…帰るか」

もう何でもいと諦めたセツネであった



## 王暗殺（後書き）

進まないですね…城に戻る予定だったのですが城に戻ってないですね

次はちゃんと城につきます!!

勤務地変わって家に近くなっちゃいました

今まで通勤時間に作成していて更新遅れるかもです



**宴会と思いきや（前書き）**

ようやく城に入った飛影達を待ち受けるものとは…

## 宴会と思いきや

『ただいま』

世界一の国の世界一の城にまるで自宅のように帰宅する

飛影とセツネ

まあ実際に自宅なのだが

「って電気ついてないぞ」

沈みかけた夕日が城を微妙に照らしているとはいえ電気がついておらず暗い

入った瞬間に飛影はそのことにツツコミを入れる

「門番もいなかったし…まったく怠慢とは嘆かわしい」

入るときにも正門だというのに門番がいなかった

セツネは自分が死んでいる間に変わったかと思ったが飛影も同じように入るときに居なかったことに疑問を抱いていた

時刻は19時00分

完全に消灯するには早すぎるし、門番は基本的に交代制で二十四時間監視している

「どうするよ？」

「面倒だから寝るか…」

あくまでもめんどくさがりのセツネ

寝たばかりだというのに即答だった

「…とりあえず人のいるところ行こうぜ」

入ってすぐのホールには人っ子一人いないが気配はする

「そうするか…」

飛影は気配探知をするために感覚を拡げる

セツネは飛影に任せて後ろを歩く

廊下にも電気はついていない

だがまあ飛影は暗闇でも関係無く見渡せるため壁にぶつかったりはない

そもそも飛影もセツネも長年住んでいる、または住んでいた家なので眼を瞑っても目的地には辿り着ける

「こういうのって物語とかではなんか一夜にして滅んだ城とかになりそうだな」

そう

本来ならこんな状況は滅亡したかと考える状況である

セツネの言っていることは一つの可能性であるが

「それはないな…だって生きてる気配が人数分あるし」

絶対強者級の気配探知は伊達ではない

ただセツネが同じように気配探知をしても感じ取れる

心配なら気配探知を使えばいいのにとと思うが

使わないのは面倒だからという理由と飛影に対しての信頼もある

実際にそうになっていたら飛影は確実に暴走する

そうになっていないということは大丈夫なのである

なので冗談レベルだ

廊下を歩く二人

通り道には飛影の部屋もある

「お前の部屋でくつろがないか？」

どこまでも面倒だからという理由でサボろうとするセツネ

飛影の部屋まで10メートルといった所である

「いや、無理みたいだ」

飛影も若干それを考えたが先手を打たれていた

部屋の扉には一枚の紙が貼られていた

飛影は見るまでもないとセツネにそのまま紙を剥がして渡す

中央ホールに集合！！来なかったら怒る！！

可愛い文字

椿からの申しつけだった

「…なるほど！！これは行くしかないな…」

飛影が椿に逆らえるはずもなく

強制的にセツネも同行させられる

飛影たちの目的地である人の気配も多いところも中央ホールだった

「しかしさすがは椿だな…私達…いや飛影がここでくつろぐとうとしたのもお見通しか…」

「まあ…あいつとは長い仲だからな…」

270年是一緒に過ごしてきた仲である

行動を予測することは少しはできる

「そういえば私は飛影と椿の出会いを知らないんだが…それは不粋か？」

「言うつもりはない」

頑なに口を割らない飛影

「ははっ！！そこは変わらずか…」

変わりもしない飛影

そこに安心してしまうセツネ

生き返った時にこの場所がメリアだと一瞬で理解したセツネ

自分が生きていた時代に計画したメリアの道路整理

計画そのままだったのだ

100年以上の月日経っても何一つ変わらない

いや、国の者と親しくなった以外であるが

セツネにとってそれはとても良いことで変わらないままの飛影に素直に嬉しさを感じる

「しかし中央ホールを使って何をしようとするのかね？」

「俺に聞くな…」

「お前にだから聞いたんだがな…」

今の時代の人物はさっぱりわからないセツネ

まあなるようになるかと流れに任せることにした

中央ホールに到着した飛影とセツネ

完全に闇だった

さすがの飛影も見えないほどの闇

「リタか…」

リタが完全に光を取り除いている

感じるのは気配だけ

なんか嫌な予感がした飛影

その瞬間光が中央ホールに射し込んだ

『お二人ともお帰りなさい！！！！！！』

大量のクラッカー音が鳴り響く

拍手喝采で城の者全員が笑顔で飛影とセツネを迎える

考えれば当然だろう

飛影の暴走が終わり、女王セツネが甦ったのだ  
歓迎しない方がおかしい

『…』

しかし飛影とセツネの反応は無反応

「おい飛影、今の時代の王の名前は？」

「セリエだ」

それどころかぼそぼそと確認する程である

『おいセリエこっち来て正座しろ』

無表情のまま二人でハモってセリエを呼ぶ

その時点であれ？おかしいぞ？と雰囲気が変わる

「な…なんででしょう？」

飛影相手ならタメ口だが先祖がいるのだ

敬語になってしまう

言われた通りに正座する



「俺から言いたいのは三つ」

「私が言いたいのは二つだから私が先でいいな」

「いいぞ」

飛影が頷くと同時にセツネはセリエと同じように正座し目線を合わせる

「現国王のセリエと見受ける、初だが私はセツネだ…さて、まずこれは私と飛影を祝うためのパーティーだと予想してるがっているか？あと敬語いらない」

「…その通りじゃ」

妙な圧力があつた

だがまあ敬語をいらないと言ってすぐに直せるのは飛影のお陰であろう

セツネは深い溜め息を吐く

「お前は飛影にちゃんと過ごしたか？」

「この歳まで過ごしてきたのじゃが…」

その答えに満足したセツネは頷き立ち上がる

「なるほど…これはつまり飛影のせいかな？」

じろりと飛影を一睨みする

「俺のせいかもしれないがセツネも原因の一端だろう？」

睨み返す飛影

「とりあえず俺から言いたいのは二つになった」

一個がセツネと被ったため数が減った

「この催しは中止」

『ええ!!?』

ホール中から戸惑いの声が響く

「あと行おうとした動機：準備にかけた時間に使用した経費を一人提出、期限は明日まで」

淡々と告げる飛影

「つてかシーレイは寝てんのか？」

シーレイは未来確知を持っている

未来を確知するシーレイがいればこのようなことにはならなかったが

シーレイは寝ている時は未来を見ない

なのでいつも寝ているわけである

「えっと寝てます…それより飛影どうしてですか？」

飛影のその問いにはリタが答えた

そして疑問もぶつける

「ああ？…ああ例えば俺とセツネがいなかったらどうした？当然国民に手を差し伸べてただろ？使った金で他国から食材を発注して飯も作れるし…使った時間分働けば復旧も早くなるし」

飛影が言いたいのは一つである

俺ら優先する暇があったら国民のために動け

「国とは人って話もあるが、国と国民は支え合わなきゃ意味がない。誰か指揮するものが王になってその指揮が正しく行われれば国民は国を支える。国民に支えられることで王は生きる。双方が正しければ国が発展する、簡単なことだろ？今こそ国民に支えられていた恩を返すべきじゃないのか？」

女王セツネの言葉

真っ直ぐ前だけを向いていた

「とりま…復興作業に行ってくるか…寝なくて大丈夫か？」  
「問題ない」

普段めんどくさがりのセツネだがこういう時には進んで無茶をする

戦争の時もいつも一番前にいた

「飛影：私もいきます！！」

飛影の補佐として完璧を求めるリタ

今回の失態はでかすぎる

「却下！！リタと椿とセリエとエリアはさっき言ったのプラス反省文：文字数の制限はつけないあるがままに書け！！期日は明日」

軽くプチ切れしてる飛影

「了解しました。」

リタは頭を切り替える

今は償いをする時間ではなく謝罪する時間である

リタの姿が消える

飛影からの命令を完璧にこなすために光速で部屋に戻ったのである

「反省文を書くやつ以外はやるべきことを行うこと」

『はい！！』

飛影のおそらく初めてである命令に従者と侍女達は元気よく返事を  
して解散する

残ったのは飛影の屋敷のメンバーと捰と秋野である

他はすでにいない

「基本的に私達何もしてないんだけども」

寧ろ積極的にサボっていたリーベ

「全員？」

「全員」

面子を考えれば当然だろう

右も左もわからない面子である

「はあ…：しょうがない」

飛影は溜め息を吐いて何かを諦めて笑顔になる

それは許しの笑みに見えて緊張が解けたと思いきや

「反省文♪」

地獄の笑みであった

『ええええええ！！！！！！？？？』

項垂れる全員

全員がなんで私・僕・俺がと肩を落とすが逆らえなかった

飛影とセツネは復興作業を手伝い城の者も作った料理などは提供し各個人ごとでそれぞれできること、やるべきことを行った

オチと言えば飛影とセツネがパーティーを断つたと噂が流れた際に

全国民がショックを受けた

城の行おうとしていたことではない

飛影達が断つたことにある

寧ろ積極的に城の行おうとしていたことに賛同していた

飛影とセツネが手伝っている際に小さな女の子がやってきて祝えなくてごめんなさいいと大泣きした程である

国民全体が改めて飛影をどうにかしてどんな状況でも祝おうと決意した日であった

## 宴会と思いきや（後書き）

簡単に言えば祝わせろよこのクソ魔王があー！！って感じですよ

## パーティー（前書き）

今度こそパーティーです。



## パーティー

国民と国が力を合わせて復興作業に当たり

一ヶ月ほどで完全に元通りになった

そして一ヶ月経つことでよいことがある

まず飛影とセツネのパーティーを盛大に行えること

そして飛影とセツネに遠慮された借りを返せることである

「という訳で今度こそおめでとう!! お帰りなさい!!」

『お帰りなさい!!』

今度こそ拍手喝采

今回のパーティーは事前の準備万端で挑んでいて城ではなく記念公園を中心に国中で行われている

準備されたステージにいる飛影とセツネ

見渡す限り人人人

ざわめきが収まらない

「えゝ：約170年前の王だった元女王のセツネだ」

マイクを持っているセツネ

スピーカーは国中のいたるところに用意されている

セツネが喋り始めると周囲は静寂に包まれた

「時代は変わっていくもので国民や建造物は当然変わってしまったている。まあ変わらないのは飛影ぐらいだが…城にもいくつか改修工事の後があつてな、私が知っているメリアではない。しかし今回の騒動の後の対処。国全体が力を合わせていたその姿は何一つ変わらない私の知っているメリアだった。それが本当に嬉しくてな、つい飛影に抱きついて感謝の言葉を言っただぐらいだ…私の知っているメリアと形は違うが受け継がれてきた魂は同じだ、それを一人の王だった者として、また過去を知っている一人の人間として私はとても誇りに思う。そしてありがとうという言葉を伝えたい。ありがとうメリアよ」

『…』

今の演説

それは即興で作ったものであり、セツネの本心であった

その言葉に引き寄せられる者は聞いた者全員であった

カリスマという言葉が一番似合っていた

「…む？　どうやらつまらなかったようだ」

何を勘違いしたかセツネは真逆の意味でその沈黙を捉えた

否定したいが口が動かない

それが国民全体の気持ちである

「良いこと言うわね」

リーベが腕を組みながら頷く

まあ当然飛影の屋敷の面子はそこまでではなく普通に良い言葉だと頷いているだけである

セツネは少ししよげたように肩を落とし飛影にマイクを渡す

「うい！！メリアの居候魔王飛影だ！！一応自己紹介したがまあこんぐらいで自己紹介はいいだろ！！…えーとまあ…あれだ今回は物凄く迷惑かけた！！悪かった！！…まあ皆のお陰でこれだけ早く復興できたし、まだ少し元通りってわけじゃないけど、そこら辺は皆で力を合わせて頑張ろう！！…本当はセリエに任せようと思ったが、俺も原因の一端だから俺が言いたい。今回の騒動で怪我をしたもの…いっぱいいるだろう怪我をしたものはメリアが全て保障する。つか俺が何とかするから安心してくれ…そして死んだ者もいた。俺は死んだら死んだとしてしか認識しない。ただ黙祷をしたい…今回のことで色々思うことがあるだろうし、俺に怨みをもつ者もいて当然だ、だからこの黙祷にはただ死者への手向けだけでなく、次に進むための意思、目的を思うだけでもいい。今回のことで思ったこと感じたことをただ思ってくれ…それでは黙祷」

飛影は静かに眼を閉じる

それに続いて全員が眼を閉じる

十五秒ほど

自然に全員が眼を開ける

「さて：セツネと被るが皆ありがとう。メリアにありがとう。そして、騒ぐぞ：今日だけは許す！！無礼講だ！！俺の頭ひっぱたいてもいいし！！はしゃいではしゃいで！！叫んで叫んで叫んで！！暴れて暴れて暴れて！！節度なんてもつな！！節操なんてもつな！！やらかしたら明日後悔すればいい！！テメエラ吞むぞコラア！！未成年！！？関係ねえ！！飲み物ない！！？関係ねえ！！乾杯い！！！」

『乾杯い！！！』

一気にテンションが変化した飛影

国民達もコップの有無問わず両手を上にあげて返す

「死ね！！！」

その直後飛影の頭が弾けとんだ

今回のパーティーにはダドマ達人間界からやライン達天界からも来ている

当然そんなことをするのはただ一人

いや一匹

いや一龍

ギルギアである乾杯と同時に動き出して全力でぶん殴っただけである  
吸血鬼の再生力ですぐに再生される飛影

「…」

時が止まった

飛影は苦笑いを浮かべながらギルギアに振り向く

「なんじゃ？殺してもいいと言ったのは貴様じゃろ」

飛影はあくまでもひっぱたいてもいいとは言ったがギルギアの脳内  
変換で殺してもいいと変わっていた

飛影は静かに拳を握りしめた

「…」

ギルギアを知らない者はポカーンとしているが飛影とギルギアを知  
っている者はそれが殺しあいの開始だと慌てる

主役の一人がいきなり喧嘩退場はまずい

しかし、そこでありえないことが起きた

飛影が握りしめた手を開いたのだ

「…リタから聞いた。俺を止めてくれたんだろ？」

「む？」

いつもと違う反応に少し疑問を感じるギルギア

「だから、……あゝ……………物凄く言いたくねえ……が……礼儀として……言わなきゃダメか……………けど」

何か頭の中で葛藤している飛影

物凄く嫌そうな表情になる

「あ……あ……さ……さ……」

何かを言いかけるが続かない

「…サンキュ」

飛影とギルギアを知っている者の時も止まった

全員がポカーンと口を開ける

シーレイは別だが、全員が全員である

聞き間違いかと思うがそこは絶対強者級が多い面子

唇の動きでも間違いはなかった

しかし現実が追い付かない

ありえない

それが全員の感想である

あの飛影がギルギアに仏頂面とはいえ感謝の言葉を言ったのだ

嵐どころではなく今ならこれから世界が滅んでも不思議ではない

「…なんじゃいきなり…気持ち悪いの」

ギルギアですら戸惑いを隠せず、ただ本心を口にする

「…お前じゃなきゃ止められなかったと思う！！だから礼だ！！…それに…」

「…それに？」

「お前と殺しあう前に殺さなきゃならんやつがいるしな…」

「…おお！そういえばそうじゃのう」

冥界で二人がかわした協定はまだ実行しておらず続いていた

飛影とギルギアはラインを睨む

魔力と殺気全開で

「ん？」

何のことだかわからないラインは首を傾げる

「ん？じゃねえよ死ね」

「ド腐れが…口を開くではない」

「なにいきなり！！？」

何故か喧嘩を売られたライン

冥界の時のあの協力しなければならなかった苦しみ

殺したい相手を殺せないという苦しみを味わった屈辱

その原因であるライン

飛影とギルギアの停戦協定は生きていた

「自覚ないのか…どうするよ？」

「はっ！ここまでゴミ虫じゃと逆に笑えるのう！！」

「だな！！」

二人とも笑っているが笑っていない

決してこれは矛盾ではなかった

「…えーと…ごめん。現状がわからない」



当然のことながら全く心当たりがないライン

「ごめんじゃと？申し訳ありませんじゃろ？腐っておるのか！？」

「ド腐れチート粗大ゴミもどき野郎だからな」

ラインはド腐れチート粗大ゴミもどき野郎の称号を手に入れた

同時にとりあえず謝ろうという結論に至った

「えー！？とりあえず申し訳ありません！！でも意味がさっぱりわからないけどどうすればいいんだあ！！？」

「死ねばいい」

「殺されればよい」

二人同時に同じように言葉を発する

殺気と魔力が向かう先はライン

誰に向かって言っているかは明白である

ちなみにだが接近戦最強と攻撃力最強の攻撃をまともに喰らって生き残れるほどラインは頑丈ではない

「無理無理無理無理！！ほんと無理！！」

当然のことながら焦りに焦るライン

この場を収めるために必死に考えるが

助けを求めてアユリを見てもその視線は飛影に一直線で気づきもしない

ダドマを見ても酒を飲んで完全に酒の肴にする気満々である

椿を見てもアイコンタクトは通じないようで首を傾げるのみ

「かくなる上は!!」

《幻想魔境》

魔法を発動し適度に痛みつけて諦めさせる最悪逃げるために魔法を発動

《キュリクレイ》

発動条件の光は現れることが無かった

「ぎゃああああ!! リタなんてことを!! 私の命がかかってるんだよ!!?」

顔面蒼白なライン

打つ手はなくなった

「飛影の補佐として誇りがかかっています」

無い胸を張るリタ

一ヶ月前のパーティー中止騒動でかなりのショックを受けたリタは完璧にこなすために色々和一ヶ月間していた

そんなラインやリタのことは気にしていない二人

魔力全開で念入りに準備運動すらしている

ダドマが結界を張ったために周りの安全などは論外になった

「さあて殺るか!!」

「うむ…殺るぞ」

こんな時だけ息は合っていた

ラインは普通に幻想魔境無しでも充分魔王レベルだが、この状況でナルカミだけで生き残れるほど甘くはない

《炎舞》

《グラビティ》

「…結局理由がわからなかったなあ…そして私の命よ今までよくやってくれた!!もう思い残すことは…いっぱいあるからやっぱり死ぬの無し!!…ってのはダメ？」

『却下』

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

結局なんで攻撃されたかの理由もわからずに死にはしなかったが半死半生をさ迷ったものである

## パーティー（後書き）

始まったけどもまだ乾杯しか終わってない

**魔王補佐な祭りの楽しみかた（前書き）**

更新遅れて申し訳ありません

## 魔王補佐な祭りの楽しみかた

ケースリタ

現在国全体でパーティー中

城は開放されていないが全ての地域でお祭り騒ぎだ

パーティーの中心は記念公園であり、そこでは野外コンサートやダンスホールなどが用意されている

リタは悩んだが記念公園から離れぶらぶらと無計画に歩いていた

基本的に全員が全員放浪癖があり、固まっていない

今回の騒動でリタはようやく魔王補佐として顔が広まった

復興作業中でも声をかけられたりして、特にお礼を言われることが多かった

「補佐のお姉ちゃん!!」

それが小さい子からのリタの呼び名だった

年齢的にはお姉ちゃんではなくオバサンが正しいのだが外見は少女だからお姉ちゃんである

「はい、なんでしょうか？」

女の子に声をかけられてもリタは敬語を崩すことがない

丁寧な対応

「補佐のお姉ちゃん守ってくれてありがとう！！これ感謝の気持ち  
！！」

少女がそう言ってリタに渡そうとするのは一輪の小さな花

種類はわからないが可愛い花だ

千切ったようなあとがあり、すぐに枯れてしまう花

「私が育てたの！！」

とびきりの笑顔を見せる少女

恐らくリタを見つけて急いで家まで戻り摘んできたのだろう

微妙に肩が上下に動いている

「あのね！！私が骨に襲われそうだったのをお姉ちゃんが助けてく  
れたの！！だからこれ受け取って！！」

リタはラインからの情報を伝えるために移動しつつ破壊していた

それによって助かった

ただリタは光速で移動しながらだったのでリタの姿は捉えられなかつたが光が骨を破壊したことはわかった



少女は復興作業中の飛影を見つけて直接お礼が言いたいと事情を説明するとリタの攻撃だと判明したのである

「ありがとうございます。」

リタは柔らかな笑みを浮かべて花を受けとる

持ち歩くとすぐに花は散りそうでポケットにしまうのは論外

少し考えたあと花飾りとして髪に付ける

「…どうでしょう？」

上手く付けられているか少し不安なリタ

「物凄く可愛くて綺麗！！お姉ちゃん女神様みたい！！」

「ありがとうございます。」

実際女神なのですがとリタは空気の読めないことは言わず礼を言つて微笑む

「それじゃまた今度お話してね！！バイバイ！！」

子供なりにリタは偉い人物だと知っているのか、少女はあまり拘束してはならないと考えて満面の笑みで元気よく手を振る

リタも微笑み手を振る

少女はすぐに人混みに紛れてしまったが

騒がしい祭り中でもリタの聴力はお礼の言葉を聞き取れていた

リタは微笑んで歩みを進める

「おお！！補佐の嬢ちゃん！！」

リタの年長者からの呼ばれ方である

実際は4〜50の大人より遥かに年上で正しくはオバサンだが外見は少女であるため嬢ちゃんである

少女と別れて五分後に再び声をかけられて足を止めるリタ

「なんでしょうか？」

「嬢ちゃんに礼が言いたくてよ、倅が助けられたってもんだから感謝の気持ちを現したくてよ！！レアもんだから受け取ってくれや！！」

誇らしげな男性

リタに箱を渡す

包装紙に包まれているが少し不恰好である

この男性もリタを見つけて走って戻った者である

「苦労したぜ！！この珍種オメガバードドッグキャットを捕まえる

のは!!」

「…」

鳥なのか犬なのか猫なのかハッキリしてほしい名前

しかしそれよりも生き物ということが重要である

「って包装紙に包んだら死んでしまいますよ!!」

その場で確認するのはマナー違反ではあるがこの場合はしょうがない

リタは急いで包装紙を丁寧に取り外して中を確認する

「ひぁ…」

リタは小さな悲鳴をあげ硬直する

「どうた!?! オメガバードドッグキャットは!!?! 可愛いだろ」

「…」

誇らしげにする男性

リタは固まっている

大口を開けたままで

頭脳明晰運動神経抜群絶対強者級で飛影の補佐をつとめる完璧な存在

戦い方も弱点はなくまさに完璧と言えるリタ

しかしそんなリタも苦手なものはあった

虫である

ハエ程度でも全力で逃走するリタ

いつもなら気配を感じて逃げるのだが、今回は虫だとは思わずに開けてしまいその手に持っている箱には一匹の綺麗な虫がいた

手との距離五センチ

顔との距離は一メートルも離れていない

リタからすれば超至近距離だ

思考すら停止している

「…」

外見的には蝶のような外見であるがリタから見れば虫だ

最初は感動で驚いていたかと思っていた男性だが

「ま…まさか嬢ちゃん虫苦手なのかい？」

その返答は無かったが徐々に青ざめていく顔色を見て確信した

箱をすぐさまリタから取ってみた

しかし反応はない

「……あう」

気絶するリタ

「あゝこれ私が引き取るわ」

その場で倒れそうになった身体を支えた

スーツ姿の天界の魔王補佐アユリである

「嬢ちゃんの知り合いかい？」

「そうよ、知り合いよ」

溜め息を吐きながらアユリはリタを担ぐ

「嬢ちゃんが起きたら本当にすまなかったと伝えてくれ：悪気はなかったんだ：」

申し訳なさそうな表情の男性

女子に虫はどうかと思うが、アユリの目から見ても綺麗な虫である

リタが虫嫌いすぎるのも困りものであった

「伝えておくわ：」

「ありがとう!!」

男性はアユリとリタに感謝と謝罪の意を込めて深々と頭を下げてから去っていく

「はあ……とりあえず城に放り込めばいいわよね」

リタを背負うアユリ

再び大きな溜め息を吐く

ケースアユリ

アユリもリタと同じように放浪していた

目的はあるが放浪していると言える

目的はただ一つのこと

偶然飛影と出会うことである

そう偶然である

アユリは一度解散になってから再び出会うことが目的だ

魔力探知を行えば一瞬だがそれを行わずただぶらぶらと歩いている

偶然飛影出会うことができればそれは運命だと思っている

「賑やかなね…」

ぶっちゃけアユリは暇していた

アユリは飛影やリタのようにそこまで有名ではなくナンパ以外では声をかけられたりすることはなかった

ナンパされること三回

全て丁重に断った

氷を統べる者としてアユリはナンパした者を精神的に極寒の地に放り込んだ

肩までかかる程度の長さの銀髪と金色の眼

その容姿も加わりナンパしようとするものは多い

そんなアユリはぶらぶらと歩きながら屋台で買って食べ歩きを行っていた時である

「おい、聞いたか？魔王さん今記念公園でダンスしてるってよ！！！一目見に行くしかないよな！？」

ピクリとアユリの耳が声を聞き取った

騒々しい中常人とかけ離れた聴力をもつアユリは確かに聞き取った

（…記念公園…これは別に知りたくて知ったわけじゃないし…偶然

知ったのよ!!！)

ピタリと足が止まる

(逆に考えれば私は飛影様と出会う運命よ…そうこれは私は飛影様と会わなきゃいけないのよ…まあもともとダンスしたかったし、記念公園に向かうつもりだったし)

アユリはその場で反転

自分の目的地を都合のいいように変える

(飛影様とダンス…ってそれは物凄く接近するわ…密着!!?…ふふ…これはもう全力で記念公園に行こうかな…いやけどさすがにそれはなんか偶然じゃないわ…偶然会うためにはやっぱり普通に歩いていきましょう)

飛影とのダンスを想像しているアユリは軽く表情がにやけていた

「どうしたんじゃ? そんなにやけて」

「あら? ギルギアさんこんばんは」

真正面からギルギアに話しかけられた

二人とも脚を止める

「うちの魔王は仕留めれました?」

「ばっちり全殺しじゃ」



ラインの味方はいなかった

「ギルギアさんはどちらに？」

「む？ 私はあの方に偶然出会うために放浪しておる」

考えることは同じだった

「ぬしはどこにいくんじや？」

「記念公園」

「むっ……そうかではさらばじゃ」

ギルギアはさっきまで飛影といたため、アユリがにやついていたことを思いだし全てを理解した

「ええまた」

微笑みあい別れる

そしてアユリは鼻歌混じりに歩いていきリタを発見したのだ

結局飛影と出会うことはできなかった

V V V V V V V V V V

ケースギルギア

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

断末魔が空に響いた

上空1,000メートル

ナルカミを使い逃走を試みたラインだが

飛影の風による空気抵抗とギルギアの重力によってズタボロになって落下していった

「あゝスッキリした」

「ふむ…すっきりじゃ」

この一ヶ月間の鬱憤が晴れた瞬間である

清々しい表情の飛影とギルギア

「さて…やるか？」

いい具合に準備運動ができたのでヤル気満々な飛影

いつも通りの殺し合いが始まる

「今日はそんな気分ではないのでな…却下じゃ」

と思ったが珍しく

というより初めてギルギアがそれを断る

「ふえ？」

飛影も予想しておらず呆氣にとられる

「キサマが主役なのじゃろ？我と殺し合いしている場合ではないじゃろ」

真っ当な意見

飛影は理解が追い付かない

「珍しい…」

「今日はよい。一発殴れたしの…」

乾杯の時の一撃

頭を吹き飛ばしギルギア的にはそれで満足であった

飛影はやられ損であるが

「そんなもんか、まあいいや…俺もなるたけ時間削りたくないしな」

殺し合いが始まって超短期決戦にするつもりであった

同意の上での殺し合いでなければギルギアと殺し合いをすることは無い

「まあもう一度言うけど暴走止めてくれて感謝はしてやるよ」

ギルギアのことは大嫌いな飛影だが

それだけは本当に感謝していた

「…ち!!」

軽く舌打ち

物凄く嫌そうな顔である

「一つだけ言っておく…あの殺し合いはつまらなかったの…不愉快じゃ…あんな雑魚を止めるぐらい造作もないのじゃが…不愉快じゃ…良いか？我と殺し合いするのはキサマじゃ、災厄ではない」

本当に不愉快そうなギルギア

ツンデレとかではなく本心である

殺し合って楽しさを感じなかったのだ

確かにその言葉の中には嘘がある

災厄は雑魚では無かった

実力だけでいえば勝つために柔を使用したりと飛影より実力はある  
だが実力は負けていても飛影の方が強い

「そうか…不愉快だったか…これからは気をつけるとしよう」

「…わかればよい、では我は用があるのでな」

伝えたいことを伝えるとギルギアは街へと降下する

場所はてきとうだ

ダドマと会うことが目的で偶然出会うためにてきとうである

「…さて、俺も遊ぶかな…」

少しスッキリした表情の飛影であった

**魔王補佐な祭りの楽しみかた（後書き）**

あと一話か二話はこんな感じですよ

## その他編（前書き）

気付いたら物凄く長くなっていました…

## その他編

ケース黒鋼& a m p; 火月

「なあなあ!! 黒鋼さん!! あれ面白そうじゃないか!!?」

黒鋼は基本的に火月の護衛として共に行動することが多い

今回も黒鋼は火月と共に行動している

火月からしても黒鋼は誘いやすかった

「ん?」

黒鋼は火月が指差す方向を見ると

強いもの募集

野外試合、一本入れたら勝利、賞金15, 000

挑戦料1, 000

魔王さんは遠慮してください

と書いてあった

調度試合している

プロレスラーのような外見の男がガタイが良い男に突きを食らわしていた

「あゝ確かに面白そうだね、相手は反則級の下位だから、僕は興味



ないけど火月やってみれば？」

「いいのか！！？」

「ただちゃんと手加減…っていないし」

気付くと火月はすでに挑戦料を払ってプロレスラーのような外見の男と対峙していた

「じゃあ来い！！」

火月は構える

野次馬は手加減してあげろよ！！とか野次を飛ばしているが対峙している男に油断はなかった

火月の構えから隙が無い

そして肌に突き刺す威圧感

「いくぞ！！」

男は牽制にフェイントを刻みながら連打を放つ

ガタイがよい割には几帳面に戦う

連打の一発目

「ふ！！」

腕が伸びきる前に一瞬で懐に入り込む火月

男の腹には拳が当たっていた

「これで一本でいいのか？」

魔力を込めた拳を見せる火月

「…」

静寂に包まれる

「…ガハハ！！充分だ嬢ちゃん！！なにもんだ？」

静寂を破ったのは笑う男

全力でやって負けたのだ

ここまで大差があればある意味で清々しい

「兄ちゃんのいも」

「はい失礼」

火月は胸を張って笑顔で飛影の妹だと名乗ろうとし

黒鋼は一瞬で火月の首根っこを掴みその場から離脱する

「黒鋼さんなんでだあ！！？」

「さすがに取り囲まれるのは面倒」

飛影に妹ができたことは周知だがどのような妹なのかを知る者は少ない

あの場で名乗れば取り囲まれ質問攻めである

「ふーふー!!」

不満な火月

黒鋼はすぐに着地して火月を落とす

「…わたあめ買うけど食べる？」

一番美味しそうな露店を探して指を指す

「食べる!!」

一瞬で上機嫌に戻る火月

(単純だな)

こんな簡単に物で釣られて将来が不安になる黒鋼だった

~~~~~

ケースシーレイ

「すーすー」

そして現在

「ご…ごめんね彗君…重いよね？」

彗におんぶされている椿

「そこまで重くはないけどな」

「とりあえず飛影の所まで行けばなんとかなるから」

飛影の所にまで行けばこの彗におんぶされているという秋野にはとても見せられない状況から脱出できる

「はいよ、んであいつは？」

「あれ？彗君が歩き出したから知ってるものだと思ってたんだけど…」

「いや、とりあえずてきとうに城に戻ってたんだけど」

足を挫いた時に椿が言ったのは処置できる場所

彗には城に今人がいないことは伝わっておらず、処置できる場所で浮かんだのは城であった

「ん…わかった。ちょっと待っててね」

椿は眼を閉じて集中する

魔力探知ではなくただ飛影を探すために椿は自分だけの感覚を拡げる

飛影との関係は寄生

飛影から魔力をもらっているため、飛影と椿間で道ができている

その道を見つけて出口である飛影を検索する

察知したのは集中してから五秒後

「んと…記念公園にいる。記念公園まで頼んで大丈夫?」

「別に大丈夫だ…」

彗も絶対強者級ではないが反則級の実力は持っている。椿が150キロでも無い限りは問題ない

「ありがとう!! ちなみにお金なら腐るほど持つてるから喉乾いたとかお腹すいたとかあればいつでも言っってね!？」

「いや、近いから別にいいけど、とりあえず飛影に換金とバイトの紹介はしてほしいな…椿からも頼んでくれないか?」

彗は人間界の金なら三十万は持っているが、いろいろと忙しく未だに換金していない

それに城に泊まっているが宿泊代は全て飛影に払われている

彗としてはお金を借りているという状況だ

「…?なんで?」

しかしそれを椿は理解できない

小首を傾げている

「いや、ほら俺基本的に金借りてる状況じゃないか」

「…ああ、彗君はそういうの気にするタイプなの？」

ようやく合点がいった椿

「別に気にしなくてもいいと思うよ…それにバイトにしたって文字は読めなきゃダメだし。もう少し落ち着いてからか…もしくは城のお手伝いをするくらいでいいと思うよ」

基本的に宿泊代含め彗達にかかっているお金は飛影が出している

彗がバイトして金を返そうとしても飛影は受け取らないだろうし、城の宿泊代はバイトで稼げるレベルではない

それならばと彗が一人暮らしをしようものなら飛影が全力で止めにかかる

飛影が自己満足で行っていることなので気にする必要は無いというのが椿の意見である

「つて言われてもな…」

「お金じゃなくて気持ちで返すのが一番♪」

それだけで外れがない全て美味しい飯になるとダドマは考えた

三人の神の内：食いしん坊はアンジェレネだけである

奢るの一言で食らいついたアンジェレネ

「次あそこ行きましょう！！」

素早く焼きそばを食らうと次の店へと走り出す

「：あいつの胃袋おかしい！！」

かれこれ24件目

ダドマの胃袋は限界である

「じゃあベビーカーステラ20個下さい！！」

(20個！！?)

まさかの大量注文にダドマは恐怖すら感じる

ニコニコと笑うアンジェレネ

細身の身体はどこに入っているのか

これが神なのかと

ベビーカーステラを受け取り食べ始めるアンジェレネ

「旨いです!! ダドマさんはいますかぁ!!?」

「…いや甘いものは…」

お腹がいっぱい食べれないとは男として龍として口が裂けても言うつもりはないダドマ

満腹で苦しいにも関わらず無表情を貫き通す

「あら…苦手だったんですかぁ!!? 早く言ってくださいよ!!… それにしても旨いです!!」

美味しそうに余裕の笑顔でベビーカーを食べるアンジェレネ

ダドマはそのお腹を見るがTシャツ越しでも膨れているようには見えない

「おお!! あれ美味しそうです!!」

再び走るアンジェレネ

向かった先は

「あ……?」

超ジャンボクレープ屋

アンジェレネなりに気をきかして甘いものだけではないクレープ屋をチョイス

それだけなら普通だがクレープの前にいらない言葉が二つも付いている

露店でクレープを買った客をダドマは見る

通常のクレープの10倍程のサイズのクレープを視界に捉えてしまった

（絶対無理だあああ！！アンジェレネは！！！？…買ってるし！！？食ってるし！！！？こっち見て手招いてるし！！！）

クレープを頬張るアンジェレネ

その笑顔は甘いもの以外にもありますからどうぞ選んでくださいという笑みであった

（こうなりや自棄だコラアアア！！！）

ダドマは意を決してクレープを購入

気合いで完食するがもう本当に限界だった

「むゝちよっとお腹膨れてきましたねゝ？」

（ちよっと！！！？しかも同意を求めるな！！！）

「ちなみに今腹何分目だ？」

ダドマは腹十二分目で限界突破中である

「三分目です！！ダドマさんには負けますが私も少し食べる方なんですよ！！？」

[illegible]

死を覚悟したダドマであつた

ケースリーベ&amp;m p. 優希

「暇ね……優希なんか一発芸をしなさい」

「はい、了解です！！しかし断ります！！」

リーベと優希はいつもの如く祭りでも関係無く飲んでいた

「…断るの？」

まさか断られるとは思わなかったリーベ

どこからその自信が現れたかは不明だが

「普通に無理です！！私は芸人じゃないですよ！」

優希は腕をクロスさせて×をつくる

「なんだ、つまらないわね」

「無茶ぶりすぎですよ!! リーベさんはできますか!!?」

無茶ぶり返し

無茶ぶりをされた時限定の必殺技である

無茶ぶりを断り、更に仕掛けた相手に無茶ぶりを振ることができる

「できるわよ」

「ええ!!?」

しかしこの技は相手が無茶ぶりを遂行した場合にはハードルが上がって無茶ぶり返し返しとなり、危険度が増す

しかも相手は絶対強者級

優希のハードルはうなぎ登りである

「なんの変哲もない腕があるわ」

リーベは右腕のジャージの袖を捲り細腕を見せる

「左手にはなんの変哲もない吸血鬼の爪があるわ」

左手の爪を伸ばすリーベ

「いくわよ」

左手で右腕を切り落とすリーベ

そして次の瞬間には右腕は再生していた

「人体切断マジックよ」

ふふっと笑うリーベ

どうだと言わんばかりである

「マジックでもなんでもないじゃないですか!!? 普通に切断して普通に再生してるだけですよねそれ!!?」

「あら? 身体をはった芸なのに…文句を言えるってことは今以上の芸ができるってことよね?」

妖艶な笑み

(図られたああ!!?)

優希の行動はリーベの予想通りであった

「さあやりなさい」

足を組んでジョッキを手に取り酒の肴にする準備は万端

「うっし…行きます!!」

覚悟を決めた優希

右手と左手を巧みに使い

ケース静紅

「ふんふん」

上機嫌な静紅

「お宝」

静紅がいる場所はメリア城の宝物庫

今なら飛影の注意は城から逸れているため目的であるデスパラシリーズを手に入れることは容易い

視界の端に歪なナイフが目に入る

「見つけたわー！！」

目当てのデスパラシリーズであった

「ふんふん」

裾から全く同じ形をしたナイフを取り出す

「これと入れ換えて」

盗ったらすぐにバレそうなのでレプリカと交換することで盗ったことをバレないようにする作戦である

「よくできたレプリカだな」

「でしょ？高かったのよ」

「しかし、どれだけデスパラに執着してんだよ」

「形とか面白いじゃない…ってあら？」

静紅はふと誰と会話しているのかと考えた

「…」

「…」

「飛影君？」

「なんだ？」

静紅は振り向かず、名を呼んでみるとすぐに返事がやってきた

「…」

「…」

「え…となんで？」

「いや、静紅のことだからと予想してみた」

トラップによる発覚ではなく

魔力探知による発覚である

（魔力消すの忘れてたわああ〜！！！！）

ついうっかりである

「うふふ」

「あつはつは！」

笑い合う静紅と飛影

ガシツと静紅の頭が掴まれる

「ひよああああ！！？」

「あつはつは!!」

「つ…つい出来心で…でも飛影君もナイフの一本くらい見逃してくれてもよく…ないわよね…! ごめんなさい…!」

力が徐々に強まっていた

「まったく…油断も隙もない」

「飛影君のケチゝって痛あつ！！」

その後静紅は30分ほど説教を食らった

ラストケース秋野& a m p; 飛影

「…話せる人がいない…」

秋野は記念公園にいた

彗を誘おうとしたが恥じらう乙女は失敗した（声をかけることすらできなかった）

そしてセツネはセリエと何やら真剣な表情で話していて声をかけづらい

会話の内容は飛影のアホな行動に対しての愚痴なのだがあまりの真剣な表情に秋野は気付くことはない

エリアは国民の方に囲まれていて

コレットやレインも久方ぶりの休みに羽を伸ばしていてどこかに行ってしまった

屋敷の面子は気付いたらいなくなっていて秋野は記念公園でダンスを見ているだけである

「おっすー秋野暇人か!？」

「暇人ですねー」

背後からの声に驚くことなく振り向いて返事をする秋野

「ええゝ気配消して現れたのに平然と返すなよゝ」

驚くりアクションが見たかった飛影は残念そうな表情をしている

「…ぶっちゃけ慣れました」

幾度となく驚かされてきた秋野は耐性がついてしまい、ちょっとやそつとでは驚かない

「…」

何か真剣な表情で考え始める飛影

「えっと…次からどんな方法で驚かせようと考えなくていいですよ
！！」

「何故わかった！！？」

「先輩のその表情はアホなことしか考えていない表情ですし」

くっそお！！と本当に悔しそうな飛影

しかしすぐに切り替えたのか表情が笑顔になる

「まあいいや！！踊るか！？」

「あっ…お願いします」

乙女として躍りには憧れがある

飛影が差し出した手を取り移動する

「しかし、秋野はもう少し積極性を持たなきゃなあ」

「何にですか？」

躍りながら会話することが出来る程度には慣れてきた秋野

「いや彗のことなん」

「無理です!!」

台詞が遮られるほどの即答であった

「もう何を話せばいいかさっぱりです!! いや、考えてはいるんですけど!! 頭が真っ白になってもう何が何だかあ!!?? って感じですよ」

「意味はわからんが気持ちは伝わった!!」

痛いくらいにひしひしと秋野の気持ちは飛影に伝わった

「可愛いね」

「む!? 飛影先輩はそういうの無いんですか!??」

何やら馬鹿にされたと感じた秋野

少し攻めてみた

「あると思うか？」

疑問に疑問で返され考える

秋野は飛影の今までを思いだすとすぐに答えはでた

「絶対無いですね」

自信を持って断言できてしまった

「まあそうなるわな」

「先輩も恋愛は経験した方がいいですよ!？」

秋野は乙女なため恋愛にはうるさい

「相手いないし」

即答であった

(リーベさん、アンジェレネさん、アユリさんドンマイです)

ここまでだとさすがに哀れみを感じてしまう

「えーと椿さんは？」

山を堀崩してみようと考えて外堀から攻めてみた秋野

「椿!？妹みたいなもんだな」

結果玉砕

「リタさんは？」

次の外堀を堀崩してみる秋野

「俺には出来すぎる補佐だな」

眼中にすらなかった

妹よりはまだ可能性がなきにしもあらずといった感じである

「アンジェレネさんは？」

本命その一

時期早々かと考えたが決行した秋野

「アンジェレネは…あれだな、年上だけど眼が離せない子供みたい
な」

子供扱いであったが秋野は否定できなかった

秋野ですら時々年下かと感じてしまう

「アユリさんは？」

本命その二

段々と秋野の中で楽しくなってきた

「あゝ！！あいつ可愛いよな」

思った以上の好感触

しかし

「なんか娘みたいな」

玉碎

なんかもうここまで来ると悲しくなってきた秋野

「エリアさんは？」

違う意味での本命

「え！？大好きだよ！？当然愛してるよ！！目にいれても痛くないよ！？もう毎日彼氏ができないように祈ってるよ！！！？ってか彼氏ができたなんか言ったら確実に彼氏を殺すよ！？反抗期が恐くなってきたよ！？お父様嫌いです…って言われた瞬間には死ぬ準備はできてるよ！！！」

「…親バカ…」

ある意味での地雷を踏んだ秋野

感想はもはやそれしか浮かばない

「リーベさんは？」

「リーベは完全に小動物だろ」

人とすら認識されていなかった

「可愛いし、翼生えるし、酒飲みだし」

飛影の小動物の定義はおかしかった

そんなこんなで一曲終了

「はい」

飛影はどこからか持ってきた飲み物を秋野に渡す

「ありがとうございます」

赤い色の飲み物である

見たことも嗅いだこともないものであるが、飛影も同じ飲み物を飲んでいたので躊躇なく飲む

ちようど喉が渴いていたのもあり一気に飲み干す

「あっ…」

まさか一気に飲み干すとは思っていなかった飛影

止めようと僅かに手が動いたがすでに遅かった

「これ旨いです!!…飲みやすいですしもう一杯欲しいですね」

「…まあいいか」

飛影は自分のを渡す

「ありがとうございます」

秋野は気に入ったようですぐにそれも飲み干す

（…けっこう度数ある酒なんだが…吹き出すかと思ったらおかわりか…）

飛影としては驚かせたかっただけでありこの結果は予想外であった

そして五分後

「うへへへ先輩♪」

飛影におぶさって抱きついている秋野が発見された

「こうなったのね…」

度数のある酒を流し込んだら当然酔っぱらう

秋野はお酒は強い方ではなくかなり酔っぱらっている

（…治すか…？）

飛影の炎舞ならアルコールだけ燃やすことも可能であり酔い醒ましにはちようどよい

「：いや、面白いから放置しよう」

しかし飛影は明日にでもからかえるネタを獲得するために放置することを決めた

「先輩♪先輩は安倍川先輩の次に好きですよ」

「あゝそう」

「恋愛対象にはなりませんけど♪残念ですね」

もはや飛影の言葉は耳に入っていないらしい

とりあえず飛影は城へと向かう

「そうだなゝ残念だ」

「うへへゝ先輩は私のこと好きですか」

もはや酔いが覚めた時に頭を抱えて引きこもりになりそうな程乙女が崩壊している

「そうだなゝ物凄く好きだぞ」

飛影の言葉は届いたらしく頬が緩む秋野

「うへへゝ告白されちゃいましたゝでも振ります」

（うざっ!!?）

思わず本音が声に出そうだった飛影

深呼吸をして落ち着く

「先輩は〱私のどういふところ好きですか〱？」

「ああ…その話続くんだ」

「ど〱ゆ〱とこ好きですか〱？」

答えるまで諦めないようである

飛影はポケットからボイスレコーダーを取り出して録音ボタンを押す

「全部」

「具体的に言ってくらはい」

飛影は笑いを堪えながら答えを探す

「ん〱と…面白いところ」

「先輩らひいですね〱…私は先輩は〱かっこいいところか面白いところとかアホなことか…ヒーローみたいなどこ好きですよ〱」

録音テープのダビングすることを確定した飛影

酔いが覚めた後の秋野のリアクションが想像以上に面白くなってきたのを感じた

「彗は!？」

悪ノリを開始した飛影

「うへへへ全部れふ」

「そうか全部か!!」

「うへへ」

「…」

「…」

笑ったと思ったら静かになった

（寝たか？）

つまらんと写真でも撮ろうかとポケットを探る飛影

「…ずっと一緒ですよね…」

ぎゅっと抱きつく力が増す

「…」

飛影は録音を止めてため息を吐く

「秋野が望むなら秋野が死ぬまでずっと一緒だ…」

人間はいつか死ぬ

いや、生き物はいつか死ぬのた

寿命で考えれば秋野の寿命は残り60年程

不老の飛影にとってはたったの60年だ

優希は吸血鬼になり、不老になったが飛影はそれが良いことだとは思っていない

人としての寿命を全うすることそれが人間の幸福である

そう飛影は考えている

それに秋野は60年は生きるが飛影は魔王だ

いつ死ぬかなど予知できない

もしかしたら明日死ぬかもしれない

そんな覚悟は持っている

「…ちゃんと自分を大事にしてくださいね」

「よく言われるな…」

「…約束です！私が死ぬまで先輩も生きること♪約束しましたよ」

（勝手に約束されたああ!!?）

「まあいつか…」

「…ふにゃ」

今度こそ寝た秋野

「可愛い子だこと」

飛影の笑みは優しい笑みだった

「あっ」

「おっ」

「うっ」

そしてバツタリと飛影は彗に出会った

椿を背負っている彗を

『…』

彗はどんな状況かわからないが飛影と椿は一瞬のアイコンタクトで
状況を交換する

少しの静寂

飛影と椿が同時に口を開いた

『チェンジで!!』

その他編（後書き）

これで祭りは終了です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7867s/>

ハチャメチャ魔王

2011年10月12日08時55分発行